IC H 266.287

HB
85
J24 85
v.6
no.4
(1983)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 452 684 3

9-1669

大正五年九月十五日第三種郵便物認可 昭和八年三月三日印刷納本
昭和八年四月一日發行（毎月一回一日發行） 富士 第六巻第四號

富士

問題の三大讀物

△實話 布哇の間諜地獄

△小説 踊る張學良

△戲曲 松岡全權

四月號

新刊冊子

疾はなぜ治らぬか

玆に絶好の治療書あり

正しき療法を知らずして不治を歎ずる勿れ!!

航海の知識なくして海を渡ることが出來ないやうに、痔疾治療の正しき方法を知らずして痔疾を完全に治すことは不可能である。本書は痔疾は何故治らぬか、素人の陥り易き多くの誤謬を訂正し、正しき療法、症状、攝生の一切を詳述し、幾多の同病者の全快體驗記を添へたるもの、眞に得難き絶好の治療指針、全快への手引書である。讀め！ しかして貴下の痔疾をノック・アウトせよ、機會は今だ！

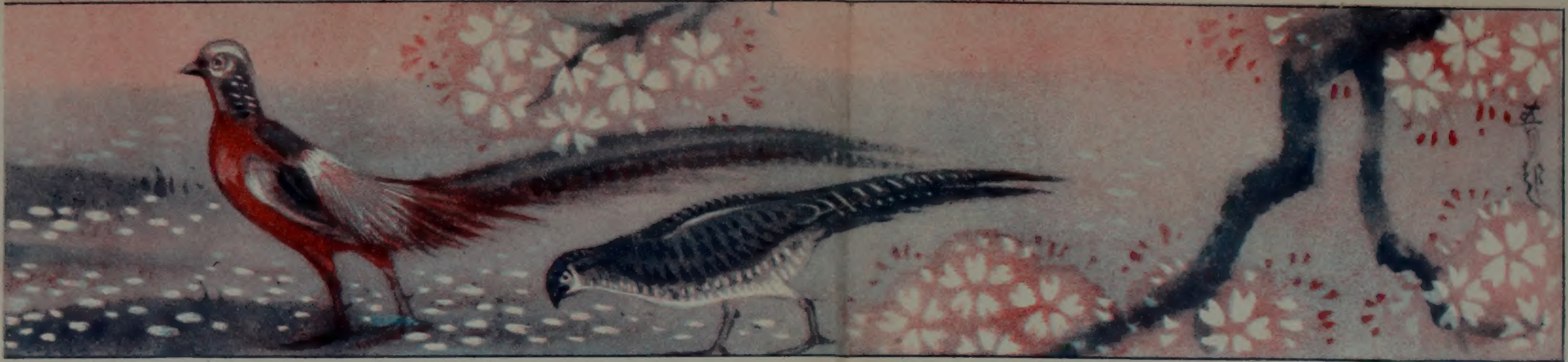
☆四六判全オフセット刷美装冊子☆

無代頒布

躊躇は無用！ ぢ疾を憂ふるものはハガキにて「冨士愛讀者」なる旨明記して即刻左記へ申込まれよ、何人にも本冊子を無代贈呈す。

東京市日本橋區本町一丁目九

申込先　玉置合名會社頒布係



冨士四月號目次

本誌に掲載せるものは無斷にて轉載・上梓・脚色・上演・映畫化等の複製行爲をなすことを禁ず

△山吹（表紙）……荒木十畝筆
△春光（折込口繪）……吉村忠夫筆
△春光（有智子内親王）…解説……美の國主幹 石川宰三郎
△なかよし（泰西名畫、原色版）　△爛漫（寫眞版）

◇冨士爆笑グラフ（グラビヤ版）……一
松竹 井阪靜子　日活 市川春代　新興 小宮一晃　新興 泉清子
河合 大岡怪童　新映畫 花野月江　新映畫 星ひとみ　新映畫 双葉芳子
喜劇 中野かほる　日本映畫 大志摩伸三郎　日本映畫 多摩川玲子

皇太后陛下の御幼時……大河原よし子…三六

◎花まつり（詩）……時雨音羽…三五
◎沖の鷗（民謠）……川路柳虹…一四六
◎相互扶助節（滑稽詩）……サトウ・ハチロー…二五二
◎著名櫻樹幹園番附……長岡規矩雄…三二五

世界の大舞臺に輝く日本魂の眞骨頂！
松岡全權……竹田敏彦…四六四

戰ひか、亡命か、彼は果して何處へ行く
踊る張學良……野村愛正…三二六

太平洋の鍵に延びる某國の魔の手！
布哇の機密間諜地獄……山下草園…八〇

◇首席と末席同窓後日物語……一九
◇熊本城脱出物語……與倉鶴子…七四
◇戀のロマンス遠洋心中……江見水蔭…一六八

長篇讀切

無言歌……岡田三郎…四四
疑ひの雲晴れて甦へる氣高き母性愛

妖説好色櫻……本田美禪…一六三
妖麗人を魅する怪木の正體は何？

◎無軌道船長（新連載漫畫）……田河水泡…二二二
◎三ブちやんのお花見（連載漫畫）……小寺鳩甫…一二六
◎藝界噂ばなし……三九四
◎笑話選……二五四
◎浮世百態（川柳漫畫）……谷脇素文…四四〇
◎娯樂室……四五六

◇春はうれしや（富士漫畫大笑館）
△間接射撃……前川千帆…一一
△春の街頭ユーモア……吉岡鳥平…一三
△惱ましき春……田中比左良…一六
△汐干狩風景……細木原青起…一八
△春の川柳……谷脇素文…一二
△博覽會漫景……小野寺秋風…一四
△四月馬鹿……宍戸左行…一六

秘話

◇埋藏金七ツの瓶……岸井紫浪…一五四
◇地底に埋れた金の延棒……前田曙山…三四六

◎懸賞寫眞當選者發表……二二〇
◎大懸賞讀物投票募集……一九六

▲名士の洒落……七九
▲數詠み込洒落都々逸……三九一
▲名句植物訓……三三九
▲笑と怒……一九五
▲男性女性訓言集……三九二
▲讀者倶樂部……四五八

◇黄金狂時代（オフセット色刷漫畫）
△珍案金脈發見法……池部鈞…二七
△萬有還金術……近藤日出造…二八
△金色の罪……清水對岳坊…二八
△黄金佛受難……新關青花…四
△黄金狂時代……長崎抜天…三〇
△黄金狂想曲……廣瀨貫川…三三
△黄金中毒患者……矢崎茂四…二八

特輯 笑の探檢隊……一九七
○第一班 漫談家 徳川夢聲 映畫俳優 大岡怪童 喜劇俳優 榎本健一 映畫女優 中野かほる レビュースター 水ノ江瀧子
○第二班 漫畫家 和田邦坊 川柳家 井上劍花坊 落語家 林家正藏 漫談家 西村樂天
○第三班 文藝家 川上三太郎 女優 森律子 美容家 メイ・牛山 小唄歌手 後藤市丸

すてうり勘兵衛（痛快熱血 [illegible]）……村上浪六
蒼眸黒眸（純情な愛 妖麗な戀）……菊池寛…四四四
地に爪跡を殘すもの（微笑の人 生道中記）……佐々木邦…三〇四
死の密約（怪奇續出 謎の解決）……保篠龍緒…四一六
薔薇色の道（青春危機 の十戒!!）……中村武羅夫…二五八
愛の復讐（悲壯快騎 士の飛躍）……天狗太郎…二八〇
風流活人劍（震天動地 幕末秘史）……野村胡堂…三七〇
善は滅びず（熱血の正 義小説）……佐藤紅緑…三九六
東京哀歌（大東京 愛の悲劇）……加藤武雄…三一四
伊達事變（戀と劍の お家騷動）……白井喬二…二二六
晴曇（情熱時代 運命悲劇）……久米正雄…一三三

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/fuji64unse

奢春光（有智子内親王）

吉村忠夫筆

名物語傑作畫譜（裏面の解説參照）

奢春光（有智子內親王）

『美の國』主幹　石川宰三郎

有智子內親王と仰せらるゝは、人皇五十二代嵯峨天皇の第八皇女にましまし、母宮は交野女王と申されました。本朝女流の中に於ては、並ぶものなしと申さるゝほど、學才の豐かな御方であらせられました。

帝は、この姫宮をいたく御寵愛遊ばされました。昔から伊勢神宮には、皇室から未婚の皇女、又は女王を御差遣はしに相成り、奉仕の任に當らしめ給うたが、これを『齋宮』と申し奉りました。京都の賀茂大神は、山城の產土神として、歷代皇室の崇めさせ給ひし宮であります。帝は、伊勢大神の齋宮になぞらへて、此の有智子內親王を賀茂大神に奉仕せしめ給うたのであります。賀茂の齋院と申すのがこれで、以來、順德天皇の御代までつゞきました。

弘仁十四年春、內親王が御十七歲の時でありました。天皇は賀茂の齋院に行幸させられて、花の宴を催されました。陽はあたゝかに、麗人の夢見るさまにも似たやうな花ぐもりの空は、ぼうつと霞んで見えました。陽炎がたちこむろ、雲雀が高啼く、春の情景は全くとゝのつて居りました。殿上人の雅な集は、管絃の音に誘はれて、興はまさにたけなはとなつた折しも、天顏うろはしく『春日山莊と申す詩題につき、各〻、韻をさぐりて、懷をのべて見よ』と、御沙汰がありました。內親王には『塘光行蒼』と云ふ押韻が當りました。

折柄、咲きみだれた櫻花の間には、楓若葉が青々として色を添へて居ります。山吹、山茶花などもところ〴〵に咲いて居ります。御庭の池水にうつろ春の色、木の間がくれに聞ゆろ春の聲、平けく治まろ聖代の惠をうけて、一日の歡樂に心も空なろ殿上人が、唐歌に今日の喜をうたひ盡さうとして、いづれも筆を舐つて居りました。

世にも﨟たけき內親王は、老龍の蟠ろやうな古松のほとりに席を設けさせられて、水莖のあともうろはしく、今、詠み出でさせ給うた卽興の一律を御認めに相成りました。

寂々幽莊水樹裡。　仙輿一降一池塘。
栖レ林孤鳥識二春澤一。　隱レ澗寒花見二日光一。
泉聲近報初雷響。　山色高晴暮雨行。
從レ此更知恩顧渥。　生涯何以答二穹蒼一。

物しづかな仙境へ、一天萬乘の大君の御車を駐めさせられた有難さ忝けなさ、これから後何うして、此の御恩に酬へ奉ろべきであらうぞと云ふ詩の意味であります。

『これは、姫、上々の出來であるぞよ』

帝は、いたく御感賞あらせられて、直ちに三品の位を授け給うたのであります。

これより後は、有智子內親王の才德、一世に聞え、その詩文は『經國集』と題する勅選の詩集の中に數多く收められろことになりました。天長十年には、二品に叙せられて、愈〻天下景仰の的となり、『貞潔優美な姫宮であらせらろゝよ』と、時の人々を感化したとあります。惜しいことに、內親王は、承和十四年十月、まだ御壯な御年頃の四十一歲で御薨去遊されました。

×　　×　　×　　×

『奢二春光一』有智子內親王の作者吉村忠夫氏は、明治三十一年福岡縣に生れました。幼時より俊才の擧れあり、東京美術學校日本畫科に入り苦學しつゝ大正八年優等にて卒業。在學中既に文展第十二回に入選、帝展と改つてからは、第一回より引續き必ず入選、第四回帝展には『淸吟綠觴』の二曲一双で特選に擧げられ、六回七回にも特選を重ね、翌昭和三年には無鑑査、委員に擧げられ、後審査員にも拔擢された人、松岡映丘氏の門下に屬し、青年作家中錚々の聞えあり、有職故實に明ろい事でも有名であります。この圖は昭和五年帝展に出品された名作であります。

りん病

商標登録

岩里 別府淋藥

キキメて名を賣った 別府の淋藥

禮状積んで山を成す

りん病消渇の治療には實際に服用して多くの人から偉効を認められた有名な藥を選ぶのが安全で又確かです。超スピード治淋藥として近頃壓倒的好評を博せる岩里別府淋藥は胃腸内で化學的作用を起して強烈な殺菌素となり、尿道や膀胱に潜む淋菌を撃滅して體外に排泄し、着々治療效果を奏します、既に本藥で救はれた病者は全國に多數あり、内地海外から澤山全快禮状が來てゐます。多年淋病消渇に悩む病者は是非本藥をお服み下さい。本藥は自宅で秘密安全に治療の出來る最上良藥です。

知名新聞雜誌推奨 東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日、富士、講談倶樂部、實業之日本、主婦之友及全國知名新聞廣告御參照を乞ふ

（此雜誌名記入申込者に限り淋病治療書無代進呈）

藥價 一急性用 黑箱 一週分 三圓
一慢性頑固性用 赤箱 一週分 五圓

送料 前金無料代金引換 廿八錢 海外 十五錢

特約店募集（先約各町村一ヶ所限り、藥店に限らず）

家傳秘藥にて支店及び特約店以外には販賣せず

別府市鶴水園（振替下關八九四〇番）

製造販賣元 合名會社 岩里天然堂

別府溫泉で出來た一回試用有効的確 別府皮膚藥 藥價 三十錢・五十錢・一圓 注文切手代用にても可

別府溫泉で名高い家傳秘藥

地方配給所

東京市麻布郵便局前	岩里天然堂
大阪市上六大軌東一丁	岩里天然堂
名古屋市外布袋町	岩里天然堂
淸水市辻町江尻驛前	岩里天然堂
岐阜市長住町一丁目	岩里天然堂
神戸市籠池通一丁目	岩里天然堂
奈良市三條町	岩里天然堂
廣島市段原町的場通	岩里天然堂
下關市竹崎町一丁目	岩里天然堂
福岡市博多上洲崎町一	岩里天然堂
福岡市博多千代町交叉點東	岩里天然堂
長崎市濱町六七	岩里天然堂
鹿兒島市西本願寺横	岩里天然堂
宮崎市瀬頭町ガード際	岩里天然堂
高松市棧橋通	岩里天然堂
高知市金子橋	岩里天然堂
京城府西大門二丁目	岩里天然堂

大特約店

東京市本郷區駒込	大日本雄辯會講談社代理部
同上野驛前福仙旅館横	福助堂
同東京驛前海上ビル	共生堂藥局
同麴町區有樂町三ノ一	日比谷藥房
同神田區花房町一	山崎帝國堂
同澁谷停車場前	鈴井藥房
同本所區錦糸堀終點	梅原藥房
同日本橋區水天宮前	キク藥局
同神田區表神保町十	神田藥局
市内王子町郵便局前	小林藥局
同龜戸町天神通	美天房藥房
同高圓寺驛南通	アサヒ藥局
同武藏小山驛前	西川藥局
同大森町京濱電車學校裏	ツル藥局
川崎市東田公設市場前	ポチ堂
橫濱市伊勢佐木町	加藤回陽堂
橫須賀市中里町五	石渡藥局
同 南旭町二三	内藤藥局
札幌市狸小路	三河屋菓子店
小樽市奥澤町五丁目	菊池商店
旭川市三條通六丁目	太田半兵衛
十勝國帯廣町本局前	林商店
函館市松風町	齋藤延壽堂
室蘭市港町	山本平治
石狩國瀧川町五丁目	照本藥舗
青森市長島町	三勝堂藥房
弘前市中土手町	ミツキ商店
山形市七日町	渡邊藥舗
秋田市牛島町	北島呉服店
秋田縣扇田町	城金之助藥房
盛岡市仁王内丸大通	菊屋藥房
仙臺市南町	鶴田商會
宮城縣古川町	ウメツ商店
福島市荒町	キモト藥店
水戸市上市元山町	フジヤ商店
宇都宮市大工町大通り	鶴田天狗堂
埼玉縣熊谷町	齋藤藥局
群馬縣草津温泉場	釜屋百貨店
桐生市新宿通り一	高島藥局
栃木縣相生町西側	福田天狗堂
靜岡市七間町三丁目	市川商店
靜岡縣燒津町	窪久藥店
岡崎市欠町	大原藥局
新潟縣三條町三ノ町	稲葉別府堂
新潟市本町通り	中郷藥局
長岡市本町二丁目	吉村藥局
富山市古鍛冶町	小橋日曜堂
同覺中町	野口商店
甲府市櫻町西六	齋藤藥局
長野縣松本市六九町	木下喜久一
上田市海野町	齋藤天壽堂
金澤市犀川上	菊總舗
福井縣武生町	澤田一二三屋
福井市神宮寺	山田藥店
名古屋上前津電停南	小島盛[illegible]局
同中區榮町四丁目	内藤藥局
同 廣小路縣廳前	水谷大生堂
豐橋市西宿	白井木工場
大垣市馬場町	ホシ藥店
津市北町	關本藥局
四日市市西町	金澤商店
京都市東九條東寺道	第一藥局
京都府福知山[illegible]人町	福知藥局
大阪市浪速區霞町二	性保堂藥房
同梅田阪神前	トミヤ煙草店
兵庫縣洲本町四	いぬねこや支店
同縣城崎温泉	伊藤[illegible]商店
岡山市城下電停	石原衛店
廣島市小網町電車道	戸川藥品部
呉市中通五丁目	鎌田幸壽堂
下關驛前山陽通	ヒラタ藥局
米子市茶町	勝見藥店
徳島市富田橋筋	横山光榮堂
香川縣善通寺町	飯島藥店
丸龜市風袋町	須藤商店
福岡縣飯塚市東町	丸林大藥房
同行橋町	ミツヤ藥舗
大牟田市三川局前	ロングサン藥店
若松市辨財天通	井上藥局
八幡市前田五條橋	若松屋
小倉市魚町四丁目	岩中藥店
門司市櫻町通二丁目	松永藥局
大分縣杵築町	河野商店
熊本市寺町停留場前	熊本藥局
佐賀市呉服町角	田中昭明堂
佐世保市本島町	山崎衛生堂
鹿兒島縣大島郡東方村	積藥店
臺灣屏東街市場後	屏東第一藥房
臺北市西門町	鐵商行
臺南市錦町一丁目	鹽島保正堂
釜山驛前	古原藥舗
馬山府本町二丁目	岩井商店
大連市監部通三三	天然堂藥房
撫順東三條通	ハレルヤ藥局

隨筆 神經病時代

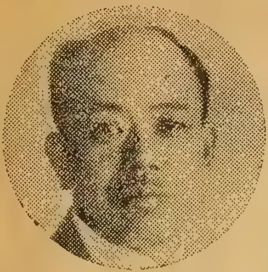
醫學博士 佐多芳久先生著

博士の臨床二十年の體驗から生れた名著！

油斷のならぬ神經衰弱をはじめ、氣づかずにゐて一生を苦しみ通す凡ゆる神經病は、現代人の身邊を常に狙つてゐる。知らぬ間に侵され遂にその巣窟となつて人生の廢墟に呻吟するに至らしめるのが恐るべき神經病だ。先づ本書に解剖されたその例を見よ。笑ふに笑はれぬ時代の悲喜劇があまりに多い。臨床二十年、斯界の權威佐多博士にして始めて本書あり、輕妙な筆に含まれた辛辣な諷刺、溫い涙の同情、或は教へ或は誡める。

興味深く讀みながら大切な常識が得られる。

（次の内容を御覽下さい）



内容の一部

○或る美人の秘密 ○都會生活者の心身過勞 ○ジヤンヌ・ダルクの病 ○ヒステリーの大發作
○職業婦人の病氣 ○悲しむべき文化の裏面 ○アムンゼンの鼻 ○やきもちの悲喜劇
○エロ時代の悲劇 ○おでこを氣にする男 ○ナポレオンの横顏 ○男女學生の同性愛
○頭の合理的な使ひ方 ○若き後妻の投身 ○平淸盛の病 ○酩酊者の變態心理
○能率と日常生活 ○性慾減退の治療法 ○サラリーマンの高血壓 ○頭腦明快法
○スピード疲勞回復法 ○年齡別神經衰弱 ○血壓の高い人の養生法 ○夢遊病者の奇行
○女を恐れる病 ○家族の困る潔癖症 ○卒中發作の救急處置 ○大男小男物語
○メランコリヤと自殺 ○二年間眠つた娘 ○子供の神經病 ○病は一に精神二に醫藥

愈々大好評！健康者も病弱者も是非御一讀あれ！

定價 一圓五十錢 —（送料十四錢）—

東京本鄕 大日本雄辯會講談社

——（振替東京三九三〇）——

無代進呈

眼病の一般智識

近視・亂視・老眼等視力障害更生の秘鍵！

「眼病の一般智識」は治療法なしと云はれてゐる近視、亂視、老眼等の原因や症狀を明かにし、その豫防法や治療法、食餌療法等を親切丁寧に公開指導し、更に近視、亂視、老眼等の強度の視力減退を恢復した面白い實驗例數十篇が掲載されてあります。

◎御希望の方は 東京・本郷 大日本雄辯會講談社代理部へ御申込みになれば無代にて進呈します。

どもり

吃音研究の大家上原博士が自分の頑固な吃りを直した經驗と學理とから器械よりも藥よりももつと手輕に自分だけでどもりの治る秘法をお知らせします。先生の言葉を信じ迷はずにまづ申込あれ。

東京市小石川區丸山町六
東京雄辯指導會
電話大塚(86)一八六五番

内容見本御申込はハガキに住所氏名分り易く書いて御送り下さい

發毛劑

無毛・脱毛・禿頭に

＝代理部でお奬めする優秀な毛生法＝

發毛に最も進歩した學理的治療法は、まづ内服ザノールの服用により發毛を促す毛髪榮養を體内に補給すると同時に、外部より直接發毛を促す外用ザノールを用ふれば身體に害なく極めて優秀且つ合理的の發毛法であります。

◇内服ザノール
◇外用ザノール
（の併用）

藥價は（内服ザノール）一ケ月分四圓六十錢（外用ザノール）三圓六十錢、内外用七圓八十錢、送料は内地十五錢領土四十二錢、東京・本郷・大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九）へ御注文下さい。

小説 一粒の麥

賀川豊彦先生著

驚異！驚嘆！遂に百六十二版!!

著者は語る

この小説のモデルは皆實在の人物である。私はユーゴーの名作『噫無情』の主人公の樣な、尊い人生を送つた幾多の日本人を知つてゐる。それ等の人々の生活を中心に此の小説を書いた。私はこの一篇の中に難局日本更生の道を發見されん事を希望して止まない。

息もつかせぬ感激の中に、祖國日本は如何に進むべきか、吾人は如何に生くべきかを教へ熱誠、愛國の至情惻々として肺腑に迫る名小說。

酒亂の父と無知の母の間に生れ、娼妓と藝者を姉に、怖ろしき殺人犯人を兄に、惡の巣の如き陰慘極まる境遇に生ひ立つた一人の青年を主人公にして、罪と肉慾の泥沼に踏込んだ彼が美しくも尊き處女の純愛と、神の教へを說く一牧師の愛によつて、強く、明るき人生に目覺め行く徑路を描く。純情の戀に醉ふ若き男女あり、悲しき女工生活あり、或は土の愛を說く山の聖者あり、純情神の如き女性の戀愛等々この青年を中心に描かれたる人生の大パノラマ。到る處に著者の高遠なる理想と愛國的熱情の漲りあふれた大名著です。

男子も婦人も、青年も老人も、切に御一讀下さい！

高島三郎先生裝幀
四六判布裝カバー
定價 一圓三十錢
送料 八錢

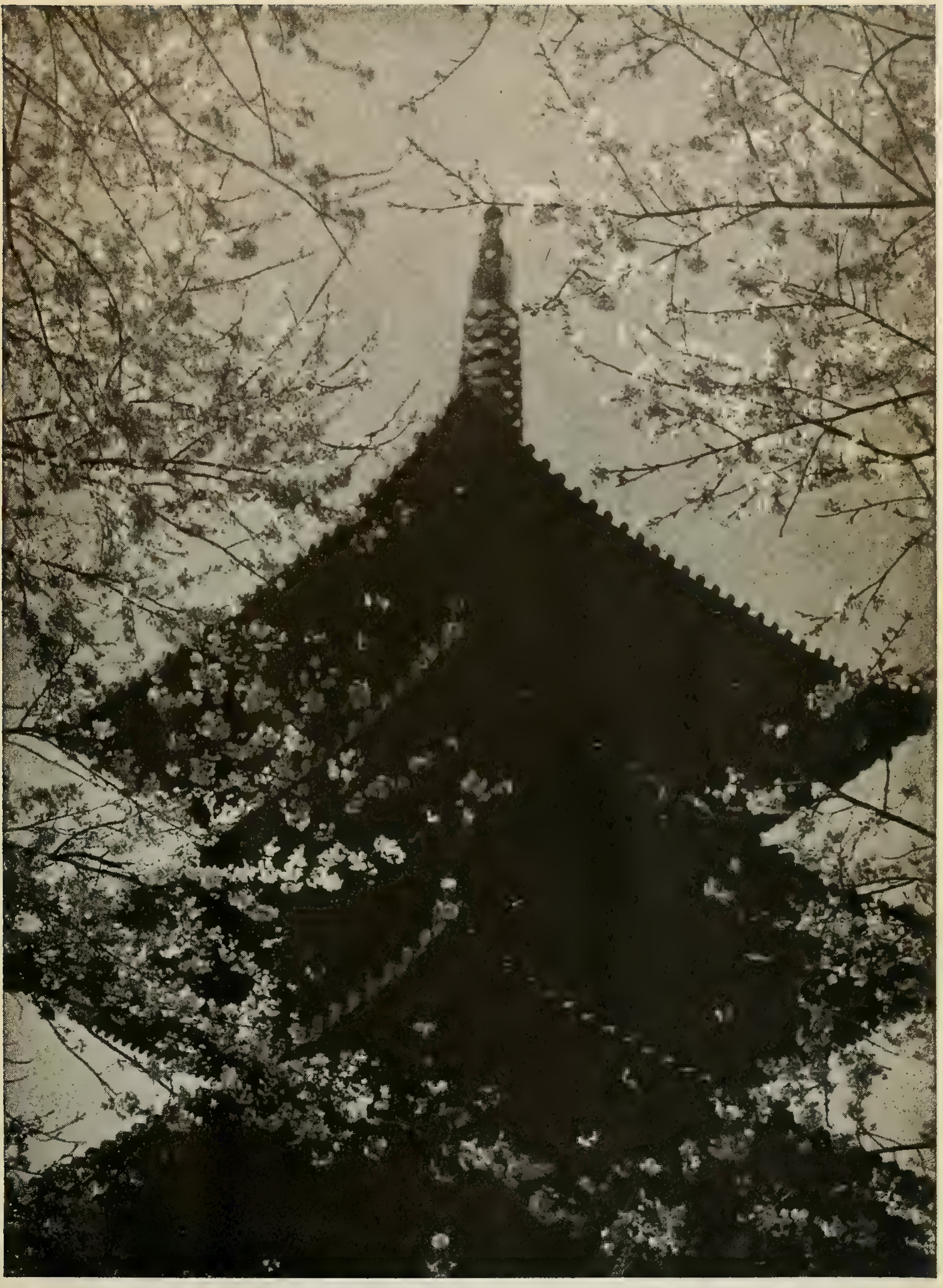
東京・本郷
大日本雄辯會講談社
振替東京・三九三〇

(御申越次第圖書目錄進呈)

なかよし

ジョン、カール、メリーみんな來い――、面白いなア――、猛犬聯隊が出來るぞ。
お前たち嬉しいのかい、そんなにお鼻をクンクンならしてさ。
これ〱、エス、いけないねお顔なんかなめちやア。
だがみんな、可愛いなア!!
今度伯父さんとこへ、お前たちみんなつれていかうよ。

爛漫



懸賞當選　東京・森溪水

醫學博士六十餘名實驗證明推奬

男生殖器弱小を強大に

短日の間に驚くべき發育
機能強健の物理療法器

現代醫學界の劃期的斬新なる**物理療法**の代表的發明品と云はれて海外にまでも名聲日に高き**專賣特許『ホリック眞空水治器』**は、形は小さく輕便であるが、効力は非常に大きい、局部へ直接に、自分で輕便安全に祕密に、一日一回、一回僅かに五分間づつ使用すると、目前忽ち理學的眞空吸引力により局部へ血液を滿潮的に沭集せしめ血肉細胞の活躍により神祕驚嘆すべき**エンツンデュング**作用を起し、一回毎に著るしく發育する寸法が本器の**メートル**へ數字的に實現し、同時に手淫、過淫の害、遺精、夢精、早漏、陰萎、○起力減退、局部彎曲を回復して從來内服藥では數百圓の藥價を費しても効なかりし、生殖器の弱小を強大化し生殖腺**ホルモン**の内分泌を旺盛にし、腦力記憶力を增進して實験界に好評湧くが如し、一生涯に靑年時代は再び來らず、直ぐ實行せられよ。

內容外觀共に完備せる東京新療法研究所

生殖器短小は内服藥では發育せず

ホルモン劑でも内服では**ダメ**

近頃内服賣藥のみにて生殖器が長大に發育するが如き廣告をなす者あり、無責任なる賣藥業者の奸言に注意あれ。

包莖は無血無痛切らずに治る

包莖は從來手術して切取るより他に治療の仕方がなかつたが、**專賣特許ホリック包莖安全器**で短期間に無血無痛人にも知られず、絶對安全に整形となる、包莖は淋病梅毒に感染し易く不潔で大害あれば速かに本器で根治せられよ。

專賣特許登錄商標

◇◇**ホリック眞空水治器** 金四圓五十錢
ホリック包莖安全器 金三圓五十錢

送料内地二十一錢、臺、樺、鮮、滿、五十錢代金引換十五錢增、治療器名並に代引と詳記の事

◇**生殖機能強精内服劑ポルチヨン**

半月分金三圓廿錢一月分金六圓送料各十五錢

無代進呈 非賣品 **圖入説明書** 實驗例付

内容 性の新知識と告白文、ハガキで申込次第個人名義で祕密に送る

東京市芝區神谷町西の十八
電話芝三一三一 振替東京七七三九 東京**新療法研究所**
大阪市北區堂ビル西の四階
電話北八二六八 振替大阪五七九九 東京新療法研究所大阪支部

大奮發！婦

○富士愛讀の御家庭ではゼヒ婦人倶樂部を御覧下さいますやうお願ひ申上げます

第一別冊附錄

秘訣急所 圖解說明 和服の仕立方一切

お裁縫の御本として、今迄に絶對になかつた立派なものと、確信を以てお奬めします。

○體裁よくて可愛らしい赤ちやんもの一切の仕立方
◇産着 ◇ちやんちやんこ各種 ◇おくるみ各種 ◇肌襦袢 ◇和服用おむつカバーとケープ ◇お胴着 ◇改良ベビー服

○着よくて實用的な子供もの一切の仕立方
◇一つ身長着 ◇二つ身長着 ◇長襦袢 ◇三つ身長着 ◇四つ身長着 ◇被布と雨合羽 ◇男女子供帶

○男女通學服一切の仕立方
◇男女本裁單衣長着 ◇同セルとネル單衣 ◇同本裁袷長着 ◇同綿入長着と口綿入長着 ◇男女羽織各種 ◇長襦袢 ◇胴着類 ◇下襦袢

○コート類各種の仕立方
○家庭着と事務服の仕立方
○ねんねこ半纏類の仕立方
○男女帶類一切の仕立方
○男女袴一切の仕立方
○男女本裁襲物一切の仕立方
○禮服一切の仕立方
○夜具類一切の仕立方
○男物裁縫の秘訣
○女物裁縫の秘訣
○子供ものを恰好よく仕立てる秘訣
○袴と帶の仕立方秘訣
○廣巾物の經濟な裁ち方
○きれいに出來る衣類の繕ひ方
○足袋の上手な疊み方
○衣類の上手な保存法
○素人に出來る掛接ぎの仕方
○地質による衣類の仕上げ方と地伸の仕方

他急所コツ數百項

婦人倶樂部

四月號

第二別冊附錄

流行新型 春向き子供服婦人服 仕立方と實物大型紙つき

素人の方でも、この型紙で面白いほどたやすく、上手に出來ます。

▲二三歳用幼兒服三種……▲七八歳用男兒通學服……▲十四、五歳用女兒服……
▲三四歳女兒洋服二種……▲七八歳用男兒運動着……▲女學生用外出着……
▲四五歳女兒洋服……▲八九歳用女兒服……▲婦人スポーツドレス三種……
▲五六歳女兒洋服……▲八九歳用男兒野球着……▲アフタヌーンドレス……
▲五六歳男兒服……▲九、十歳用女兒通學服……▲職業婦人服……
▲五六歳用男兒運動着……▲九、十歳用女兒服……▲婦人用スプリングコート……
▲六七歳女兒洋服……▲十、十一歳女兒服二種……▲婦人用レーンコート……
▲七八歳用女兒服二種……▲十二、三歳用女兒服……▲小學生用レーンコート……

四月號の重要讀物

▲職業婦人を志す人の爲の座談會
▲時事問題早わかり問答
▲昭和花形物語（松竹蒲田スター）伏見信子
▲不治とあきらめた難病根治實話
▲妊娠か否かを一ケ月目で知る法
▲愛兒の上手な育て方躾け方實話
▲頭痛・のぼせの治る半身浴の仕方
▲初めてお化粧する人の美容相談

▲肺病肋膜の人に効く榮養料理
▲東京名料理百種の作り方公開
▲夏川靜江 川崎弘子 お花見時のお化粧法の公開
▲美味しい飲物になる花漬けの作り方
大懸賞 流行柄セル五百反贈呈
▲各流宗家公開の生花の極秘口傳
▲女手で出來る小商賣開業の案内
▲可愛い春の子供帽子六種の作り方
▲傑作長篇小說、愈〻佳境最高潮！
▲尚此外數十篇あります。

定價六十錢 送料一錢 ◇ 三月十五日發賣です

(三ノB)

喜劇全集

見よ！笑の大問屋!!

名喜劇を悉く網羅す!!

大増刷出來！

全三巻分賣

佐々木邦先生曰く

これは現代劇作家の代表的名作喜劇を網羅した、約四五十名の諸家に亘る綜合的全集である。舞臺で見て面白いのみならず、讀んで面白いものを集めたところに編輯の苦心が見える。

何が面白いと云つて、これ程面白いものはまたとあるまい。お閻魔さまでもワッハッハこれは堪らぬと笑ひ轉げよう。而も面白い中に人情あり、道徳あり、成功道あり、處世の道あり、笑ひ乍ら修養出來る人間讀本!! 一流漫才家の豐富な擽指は恰も居乍ら芝居を見るやう！ 重版又重版、飛ぶ如き賣行です。まだ讀まぬ方はすぐ書店へ！

上の巻

- ▲廻タク行進曲　長谷川伸
- ▲曾呂利の狂言　武者小路實篤
- ▲[illegible]華デー　曾我廼家五郎
- ▲やきもち讀本　門脇陽一郎
- ▲將棋狂時代　曾我廼家五九郎
- ▲[illegible]の白[illegible]の目　川上三太郎
- ▲二等寝臺車　中野實
- ▲車夫と運轉手　高川[illegible]
- ▲[illegible]の妙藥　曾我廼家五九郎
- ▲[illegible]由來　久米正雄
- ▲電報　曾我廼家五郎
- ▲馬の脚と二等卒　[illegible]公三一
- ▲かりもの　志賀廼家淡海
- ▲良人征伐　中井櫻洲
- ▲源氏と平家　曾我廼家五九郎
- ▲盗賊戯談　邦枝完二
- ▲心の綻び　志賀廼家淡海
- ▲産科醫院の夜　水谷竹紫
- ▲浮れ調子　曾我廼家五郎
- ▲權三と助十　岡本綺堂

中の巻

- ▲縛られた句樂　吉井勇
- ▲新兵行進曲　中野實
- ▲短慮の刄　曾我廼家五郎
- ▲子供酒　岡鬼太郎
- ▲子寶秘譚　津村京村
- ▲夜逃と泥棒　曾我廼家五九郎
- ▲首の繩　北尾龜男
- ▲友を訪ねて　志賀廼家淡海
- ▲男達ばやり　池田大伍
- ▲強い酒　曾我廼家五九郎
- ▲結婚反對倶樂部　松居松翁
- ▲航海日誌　[illegible]川[illegible]
- ▲幽靈　曾我廼家五一郎
- ▲奥様御覧御無用　瀬戸英一
- ▲[illegible]臺ナンセンス　曾我廼家五九郎
- ▲女房心得帖　土田新三郎
- ▲人の花　志賀廼家淡海
- ▲時の氏神　菊池寛
- ▲旗行列の歌　曾我廼家五郎
- ▲木曾街道膝栗毛　木村錦花

下の巻

- ▲江戸ッ子道中　森曉紅
- ▲最新東京三景　津村京村
- ▲[illegible]面の夜　曾我廼家五郎
- ▲第一の春　長谷川伸
- ▲月給日　曾我廼家五九郎
- ▲兄上京　松島[illegible]二郎
- ▲命の洗濯　志賀廼家淡海
- ▲月光　小[illegible]梅夜
- ▲日本橋　曾我廼家五郎
- ▲能因法師　岡本綺堂
- ▲痩せ我慢　志賀廼家淡海
- ▲小猫　大村嘉代子
- ▲入選　中野實
- ▲猫の留公　曾我廼家五九郎
- ▲愛の[illegible]　貝塚英一郎
- ▲茶屋遊び　志賀廼家淡海
- ▲劍客商賣　小林宗吉
- ▲[illegible]三本　曾我廼家五郎
- ▲スポーツ時代　國[illegible]公功
- ▲檻の中　中村吉藏

定價一冊一圓五十錢（送料十六錢）　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九〇三）

（御申越次第圖書目錄進呈）

冨士爆笑グラフ

春日遲々として何となく嬉しい櫻の四月。もうぢつとしては居られない。先づ市川春代が思ひ切つて大きな欠伸をすると、續く面々も斯くの通り――。長閑な春氣分を次から次へと御開帳。さてはこれから笑ひの王者腕くらべとござーい。

その眼、その唇は常に微笑を宿してゐる。彼女春坊こそ、人生の春を、自然の春を、一人で引き受けてゐるやうなものだ。豆絞りの手拭に魚春の印絆纏で、かう力み返つたところは一寸味なもの。『イヨー、魚屋の兄ちやん、景氣はどうですかな…。』

日活―市川春代演

咲き誇ろしだれ櫻

櫻花爛漫，世は正に春姿

おほッ、おほッ——腰を落して遙か彼方を眺むれば、來るわ來るわ、花の堤を吾が世の春と着飾つたミメ麗はしの女性群が……。一杯機嫌の彼氏は、連から離れると、小手をかざして、こつそりと遙かに滿足の體。世は正に春。

日本映畫——大志摩仲三郎演

あんらまあ…。おとなしいと思つたら葡萄酒の堀口をなめてゐるんです。

見付かつちや大變、彼女は全神經を耳と眼に集めて、次の部屋にゐるお客さんに注意して居ります。そつと、そつと…。

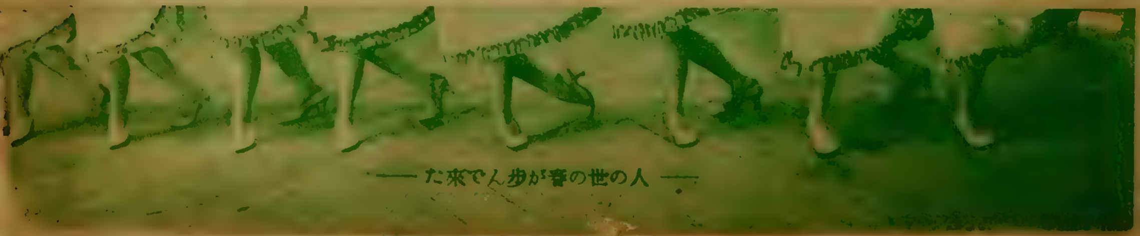
新興キネマ――泉清子演

顔が巾着に似てるつて？　冗談はお止めなさい。笑ひごとぢや無いですぞ。この悲しさうな顔をごらんなさい。然らば何が彼氏を斯うさせたか？

〝だつて泣かずにや居られない、戀しい人の思出が……〟

なーるほど、兎角春と言ふ奴は、若人の胸を痛めさせるものですね。

河合映畫――大岡怪童演



――人の世の春が歩んで來た――

春は嬉しや日傘で踊る

人間には誰しも冒險心がある。若しやとは思つたが、遂に抜けなくなつちまつた。引いた位じやどうにもならない。しまひには兩足を踏んがけて、この有樣です。奥さんにでも見つかつて御覽なさい。先づ家庭爭議でせうがな……。

新興キネマ――小宮一晃演

『睨めつこしませう、一、二、三、……。』その聲はやさしかつたが、どうです。御兩人の御面相は遂に仇同志のいがみ合ひに早變りしました。『一つ目小僧、どちらもしつかり。』新映畫社——右、星ひとみ 左、花野月江演

こんな顔なんて笑っちゃ嫌です。これでも私にとつて生涯忘れる事の出來ぬ表情なんです。恪て恪て、私の小さい頃、お母さんに叱られるとベソをかき乍らキットこんな顔をしたんださうです。忘れないやうに、今でも時折その練習をします。

新映畫社——双葉芳子演

春の野邊に遊ぶ子等 ⇩

教官殿のお通り―。不動の姿勢――。緊張の一刹那、一匹の蠅が何處からともなく飛んで來た。そして鼻の頭に。むずむずと這ひ廻つても手を擧げて追ふわけにも行きません。

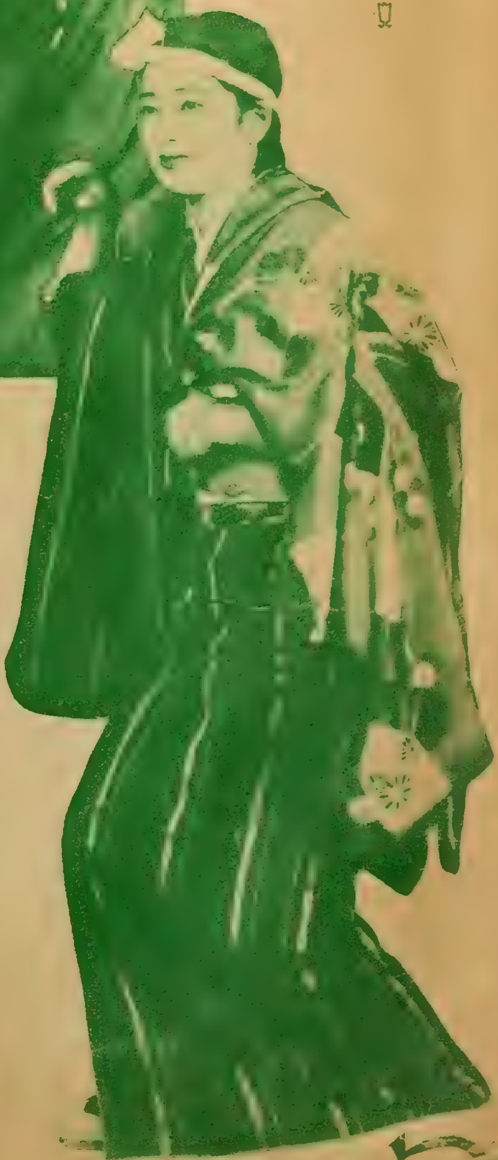
少々つらいですね、顔面筋が物凄い運動を開始して居ります。

松竹蒲田―― 江阪靜子演

△春を謳歌する若人
向つて右　三條正子（新映畫社）
左　由利冴子（新映畫社）

『ちよいと、ね、あんたつてば……。おいてつちや嫌よ、待つてゝね……。』花見の歸り、夫を追ふほろ醉の妻はこんなもの。

日本映畫――多摩川玲子演



ギャング流行の世の中に、こんなギャングなら幾人あつても結構です。ハテ彼女の瞳は何を見詰めてゐるんでせう？　時は時、世は春ですからね。

音劇プロ――中野かほる演

青年奮起すべきの秋この名著によりて心膽を練れ！

難局に直面せる日本國民は先づ本書に來りて心眼を開け！ 勇壯、豪快なる英傑の心魂に觸れて感奮興起し、人生の荒波を乘り切る事は刻下の喫緊事だ

世界十傑傳

讀め、躍如として全卷を壓する巨星の眞面目!!

▲マクドナルド首相 北歐の寒村より身を起し遂に大英國首相となる。

▲ヒンデンブルグ元帥 八十五歳の高齢を以て敗慘の獨逸をして今日あらしむ。

▲新聞王ハースト 全米の有力紙三十餘種の大新聞を發刊して世界の輿論を左右す

▲マサリツク大統領 歐洲の新興國チエツコ・スロバキヤ共和國建設の父。

▲フーバー大統領 米國第三十一代の大統領として名聲嘖々。

▲ガンヂー翁 五尺の痩軀よく全印度三億の民衆を統率す。

▲ケマル・パシヤ大統領 日本と共にアジアの二大強國たる新興トルコの救世主。

▲蔣介石將軍 全支四百餘州の運命を負ひ、アジアの一角に咆哮する風雲兒。

▲鋼鐵王シユワツブ 鋼鐵王として全世界の重工業界を牛耳る大工業家。

▲ブリアン外相 首相たる事十一回外相たる事二十五回に及ぶ名相

或は赤貧の陋屋より、或は工場の一隅より蹶起して、窮乏に耐へ、困苦を凌ぎ、鬼神も避くる大奮鬪を重ね遂に人類の師父となり、世界十九億民衆の運命を負うて立つ勇姿こそ將に人間壯觀の極みである。

澤田謙先生大熱著

定價一圓三十錢（送料十二錢） 東京本鄕 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

（御申越次第圖書目錄進呈）

本社々長
報知新聞社々長

野間清治五

燦たり！奮闘二十年の体驗記!!

人物本位。實力本位の現代に處して、左の五著は讀んでスグに役立つ立身成功致富の秘鍵。職を求むる人は勿論、職にある人も是非御一讀下さい。

榮えゆく道

著者が今日の大繁榮を建設したその秘中の秘策を偽らず、衒はず打明けた全篇寶玉の名言。之を讀み之を行へば斷じて失敗なし！

▲二十數年前の私……▲社員の優遇……
▲何れが先、何れが後…▲主人の眼主人の耳…
▲雨の日は雨の日の樣に▲猫會社…
▲『キング』發行の準備…▲皇恩國恩…
▲算盤の採り方…（此の外四十七篇）

定價五十錢 送料八錢

修養雜話

雜話と雖も一時的偶感に非ず、悉く貴い體驗から生れ出でた萬人必讀の實際談。感銘感激の極致！

▲明るい日本を目指して…▲頭を働かせよ…
▲若き人々の首途を祝して▲命令以上…
▲色を好む▲尊師宣傳…
▲『一心』と『今』…▲親子兄弟…
▲劍道と生活…▲社員道・社長道…
▲身體全體を打込め…（此の外數篇）

定價二十錢 送料四錢

（御申越次第圖書目錄進呈）

著賣行愈と猛烈!!

處世の道

世渡りの呼吸、出世成功の急所を平易に說く。著者が幾多の難關打開の實際から生れた成功の指針

▲世渡りの極意…▲三猿主義…
▲苦難の惠み…▲味方…
▲電話と應待…▲小感三則…
▲我より始めよ…▲順應…
▲最後のマッチ…▲金を借る話…
▲のりうつりの說…
（此の外數篇）

定價二十錢（送料四錢）

出世の礎

使ふ人も使はれる人も本書を味讀すれば希望洋々たる新天地を發見し得る。出世成功の要訣を說く平易にして含蓄ある妙文。

▲如何にして希望を達すべき乎…▲人氣と眞價…
▲人の大小…▲落葉集…
▲「が」の一語…▲金儲けの指導精神…
▲「なら」と「では」…▲薺の花…
▲木劍を振って…
（此の外數篇）

定價二十錢（送料四錢）

體驗を語る

腕一本脛一本の素裸から東洋一の出版王國を築き上げた著者の血と淚の體驗記錄。言々皆活教訓。

▲中學へ入らなくても…▲負けるは勝つなり…
▲小我の害…▲感謝の生活…
▲私どもの社…▲好きの嫌ひ…
▲入社の場合の覺悟…▲主人の顔…
▲使はるゝ人の心得…▲主人と我等…
▲仕事そのものを樂しむ…▲我社の三大社是…
▲仕事の完結…▲人一倍働いても疲勞せぬ工夫…

定價二十錢（送料四錢）

●發行所 東京本郷 振替東京三九三〇 大日本雄辯會講談社（全國書店にあり）

（御申越次第圖書目錄進呈）

評判小說 冨士に題す

これ程日本人が感激する小說はない！

熱淚なくしてはとても讀めないと沸き返る大評判です！

佐藤紅綠先生が日露戰爭當時の日本を赤裸々に書かれた畢生の大傑作！

從軍記者として砲煙彈雨の裡に活躍した熱血の國士―理文壇の耆宿たる先生が、明治四十二三年頃「日本新聞」に連載して、當局から禁止された小說がこれで、それ程の大傑作！

モデルは悉く實在！面白さ天下無比です!!

圓轉滑脱、妙を極めた大政治家、至誠剛直ために頑冥と罵らるゝ武斷的元老あり、國難を物喰にして私腹を肥す大富豪、富豪の飼犬となる政治家あり、愛人を棄て戰線に死に行く忠勇の中尉あり、父や家の爲めに悲運を辿る麗人、日比谷の燒討等當時の混沌たる世態人情、政治、壯烈悲痛なる戰況等を精細に描寫し盡し、如何にして我が國民が、この大國難を切り抜けたかを目のあたり展開して遺憾がない。

讀め！永く世間に秘められた驚嘆的事實！諸名士感嘆の名著！

讀んで全國民今一度日露戰爭當時の感激に蘇れ!!

作者の言葉

勇敢なる日本兵ナ猛虎の如く奉天の露兵を驅逐しつゝある間に日本内地は海の彼方から、新思想の襲擊を受けた、凡てが内部から動搖した。姦通が流行した、飜譯ものが流行した、銀座にカフエが現れた、女優なるものが出た、政治家は富豪の飼犬になつた。私は古き日本を見、同時に新しき日本を見た。云々……

木村莊八畫伯裝幀
四六判布裝函入美本

定價 一圓（送料十六錢）

大日本雄辯會講談社
東京・本郷（振替東京三九三〇）
全國書店にあり

前川千帆畫

春の川柳
つれた子に團子を喰はせ花見酒（劍花坊）
是からとなつて降り出す花の山（春雨）
安兵衛を巡査が起す花の山（劍花坊）

春の街頭
『姉さん、パン買つて』『今月から小學生よ、食べながら歩くと先生に笑はれてよ』『小學生つてツマンないなア』
『さあ摑へたゾ、背廣税だ新就職税だサア奢れ／＼』新サラリーマン嬉しさうにニヤ／＼しながら『まるで兵匪だな、奢るよ／＼』
キャメル

花の山
夫唱婦随は
喰ふばかり
（春雨）
花よりも
日傘の下が
美しい
（美水）
潮干狩
股の下から
話しかけ
（珍風）

谷脇素文畫

『オイ違ふよ、花の咲いてゐるのは此方だよ』
『ナニ向ちの花の方が綺麗だぜ』
『イヨウ大将一升瓶下げてドウしたんだい』
『今日はお花見でさ』
『酒の宣傳を引受けて、お花見しながら商賣とはフトイぞ〳〵』

吉岡鳥平畫

萬國婦人子供博覽會漫景

ヤア美人猛獸使ひが虎に曲藝をさせてゐる……うまいもんだね
象が十頭虎が二十頭獅子が十頭キリン一頭河馬一頭等々澤山の猛獸で一ぱいだ
とにかく今度の博覽會で人氣の焦點はこの大サーカスだね
この世界一の大サーカスを見逃したらお話にならぬよ
今丁度テレヴイジョンの野球放送が始まつてゐる
夜間は又イルミネーションやサーチライトで美觀だ
特設館の出品もなか〳〵見るものが澤山あるよ
米國から來た一萬六千貫の大鯨も見ものだね
どこの會場もおすな〳〵の大入滿員だ
これはこれはとばかり花の山人の山か
不忍池に觀音樣の浮見堂が出來てゐる
淺草の觀音樣も四月一日から開帳なので大へんだ
池之端の方へ廻つて見よう
この人出だからお互に離ぐれないやうに確かり手をつないで行かうよ
素晴しい大サーカスは元芝浦製作所跡の芝會場ですよ
おや〳〵バスも滿員だ
芝の會場へは市電とバスが直接連絡してゐるから便利ですワ
上野の山は人で眞黒だよ花も滿開できれいだなア

小野寺秋風畫

漫畫 なやましき春

醉拂ひ女史

飛鳥山あたり、イナセな醉拂ひ女史、
『おい姉妹、莫迦にいゝ氣持になつたわね、何處かへ繰込まうか』
『その事〳〵、だつて女の繰込む先つて無えぢやないの、男の張店聞いたことなしさ』
『チクシヤウ繰込む先が無えと定るといよ〳〵春なやましとお出なすつたよアハヽ』

手傳ひ無用

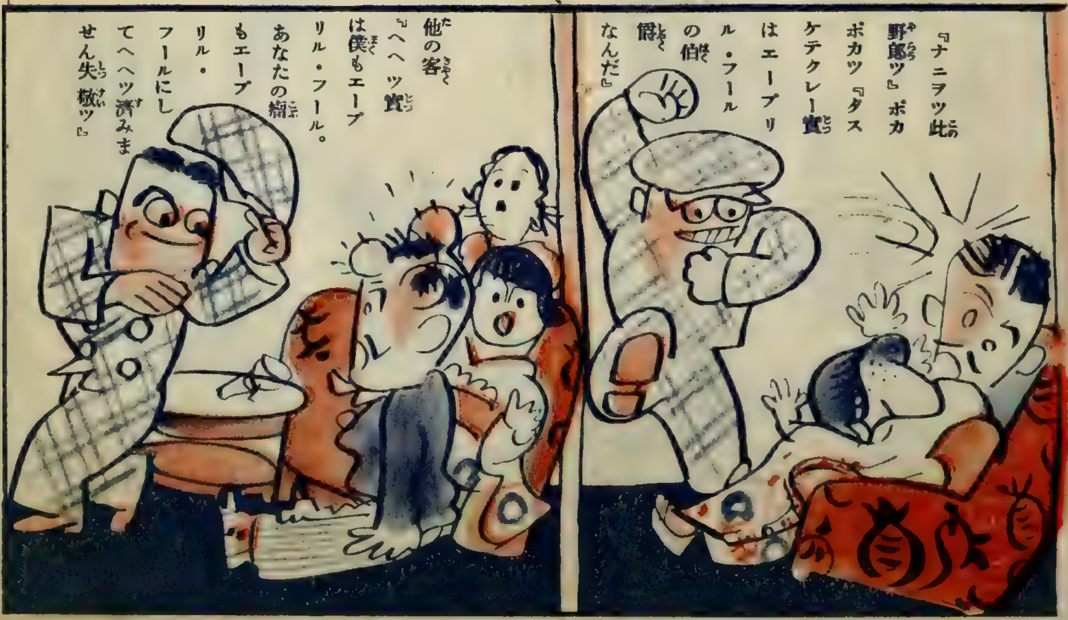
『おい御兩人、とても苦しさうだな、片棒手傳はうか』

四月は馬か鹿

客『ボクは○○伯爵ですエヘン』
女給『アラ左樣でいらせられまするノ』

他の客ヅカヅカと近よつて『ウソをつけオレは其筋の者だぞ僞稱罪によつて……』客『キサマこそ嘘をつけ僞者メツ』

田中比左良畫



穴戸左行畫

潮干狩風景
大きな獲物
『おりやりや、何方の籠も空つぽぢやないか。さつきから一時間近くも其處でナニしてたんだ』
『アハ、、、オホ、、、』
彼は彼女を、彼女は彼を。迚も大きな獲物ぢやない？
『キャッ』彼女は、何かに憤慨した河豚を踏んだのです。

細木原青起畫

今一番人氣のある

キングレコード

傑作揃ひの三月新譜

K二一三 兒童劇	笑ひの關所（上下）	根岸みどり原作 長谷山峻彦脚色	長谷山雛伶音樂會員 キング管絃樂團
K二一四 ダンスミュヂック	東京うれしや（フォックストロット） 街の日ぐれ（ワンステップ）	江口夜詩作曲 竹岡信幸作曲	巴里ムーラン ルージュ樂員
K二一五 流行歌	君泣けば（スロー・フォックストロット） 涙なき國へ（タンゴ）	西條八十作詩 江口夜詩作曲	渡邊光子 キング管絃樂團 松平不二男 キング管絃樂團
K二一六 行進曲	海の小夜曲（セレナーデ） 空の行進曲	時雨音羽作詩 竹岡信幸作曲 河野達郎作詩 坂田義一作曲	春山一夫 渡瀨春枝 キング管絃樂團 松平不二男 キング管絃樂團
K二一七 小唄	からかさ 宵明	平山蘆江作詩	新橋・喜代三 キング和洋合奏團
K二一八 落語	支那そば屋（上下）		春風亭柳橋
K二一九 朗讀	落花の雲（上下）（俊基再關東下向事）	太平記の一節	土岐善麿
K二二〇 K二二一 筑前琵琶	城山（十一四）		田中旭嶺

既發賣 評判レコード

ダンスミュヂック マドロス小唄
明日は上陸
口笛吹いて
街の日ぐれ
大東京の唄
ラ、東京
旅の夜船
唄へスーペニア
別れの花束
君を夢みて
椿咲く島
君はほゝゑむ
故郷の夢
胸に咲く花

お子さんには日本一の人氣者、猛犬聯隊のらくろレコードをお與へ下さい。

一枚一圓五十錢（全國蓄音器店に有）

大日本雄辯會講談社編修發行

見よ！燦たる偉容！大

来れ！意氣天を衝き！五体自ら躍動す!!

別冊附録

非常時日本 青年大獅子吼集

四六判、三百頁の美本、模範演説約五十篇！

之こそ、書齋に、校庭に、田園に、工場に、朗々愛誦すべき寶玉集！

祖國日本は今や重大なる危局に直面してゐる。誰かこの内外の情勢を見て、憂憤禁ぜざるものがあらう。況んや祖國の前途を双肩に擔ふ青年諸君に於てをや。その熱血、その純情、その感激は凝つてこの大演説集となつた。切に精讀を待つ。

▲世界の三大外交家を語る……鶴見祐輔

果然聯盟は一大暗礁に乘りあげた。何事ぞ、現時の世界に眞の外交家はないのか。讀めこの警世の熱語、朗々の名文！

▲神の存在を語る（滋味ふかき魂の糧！）救世軍中將 山室軍平

▲米國に送るの書（憂國の至誠躍如たり！）平田晋策

皇軍慰問土産話座談會

（酷寒四十度の滿洲に皇軍を慰問した、全國青年代表諸君の物語こそ大なる啓示と教訓を持つ）

（ニノD）

躍進の四月特大號!!

雄辯

○政界表裏觀……松島三十

○パナマ運河開鑿者ゴーサル大佐……渡邊渡

○雄辯界出身の新人列傳……

▲大人物の風格と座談振り……横山健堂

▲新舊俳優の雄辯家を語る……大平野虹

△式辭挨拶五分間演説模範例

△發明發見感話集

名人花形一夕話（八名家）

各界の第一流大家が語る苦心談、體驗談！得難き教訓！

傑作小説欄！

探偵小説　盗まれた腦髓……海野十三

海洋小説　海豹の如く……賀川豐彦

戯曲　明石元二郎……中村吉藏

理想小説　青春群像……佐々木味津三

幕末史話　夜明前の人々……伊藤痴遊

現代小説　妹の書置……光瀬俊明

▲滿洲國で取りつき易い商賣……

▲座談の上手になれる秘訣（研究座談會）……

現代青年成功者物語

出席者―内田信也、長田幹彦、本多靜六、安部季雄、北田内藏司

更生の春は來る！見よ不況の嵐を突いて雄々しく飛躍する若人の姿！

インフレ景氣四方山話

浮き立つ人氣、湧き立つ景氣、喜色滿面！　インフレ風景總まくり

掌篇ユーモア傑作集

大家新進總出動！愉快極まる哄笑、苦笑、爆笑の大行進！

此外各方面名記事滿載

定價　本號に限り　七拾錢（送料六錢五厘）

東京本郷　振替東京三九三〇　大日本雄辯會講談社

式辭・挨拶 十分間演說集

本社編纂

萬人渇望の快著!

苟も時代の尖端に立つて活躍せんと欲する者は讀め!

見よ!現代、第一線に華々しい活動を續けられる各方面の名士が
滿堂の聽衆を敬服させ、感嘆せしめた模範的卓上演說の大集錄!

あらゆる席上、如何なる場合に臨んでも應用自在、
讀んで頗る面白く、何人にも
スグ役立つ辯論上達の參考書!

大好評

內容の一部

▲軍縮會議を終へて……(若槻禮次郎)
▲普通二十五週年祝賀會・(德富猪一郎)
▲世界一周選手を送る辭(板倉卓造)
▲警察官に對する希望……(安達謙藏)
▲若槻全權を紹介す ……(下村宏)
▲德川夢聲君を紹介す……(成澤玲川)
▲內田魯庵君告別式挨拶…(高島米峰)
▲杉浦重剛君を悼みて…(穗積陳重)
▲安藤洋品店開店に際し…(谷孫六)
▲早大選手を激勵す……(市岡忠男)
▲卒業諸子に送る告辭……(三輪田元道)
▲國運の消長と飛行機……(藤山雷太)
▲鄉土を愛する心……(鶴見祐輔)

▲海外見學團送別會にて…(永井柳太郎)
▲ダグラス夫妻を迎ふ……(大谷竹次郎)
▲崇高なる新聞道 ……(野間淸治)
▲外務省の使命と國民生活(小村欣一)
▲三越增築披露宴にて…(濱田四郎)
▲伊藤校長の後を承けて…(落合寅平)
▲吉原東兩飛行士を歡迎す(財部彪)
▲現代は養子の天下である(三宅雪嶺)
▲紅葉日本晴の二人哉…(巖谷小波)

▲テレビジョンの發明…(小泉又次郎)
▲普選の意義に顧みよ…(清澤洌)
▲公共精神の修養 ……(山脇房子)
▲女子敎育の新紀元…(横田秀雄)
▲演劇博物館開館式にて(坪內逍遙)
▲訪歐飛行の成功を謝す(村山龍平)
▲公正なる稅務官たれ… 青木得三
▲篤農家表彰式にて……(山崎延吉)
▲口舌の雄たる勿れ…(村井知至)

此の外、祝賀會、結婚式、送別會、就任挨拶、懇親會、同窓會、新年宴會、開店開業祝ひ、表彰會、訓示、忘年會、告別式、即席演說等等

全篇堂々百廿有餘篇

四六判上製一册 送料十錢 壹圓八拾錢

東京・本鄉 振替東京三九三〇 大日本雄辯會講談社

首席末席

同窓後日物語

入學――幼き子等は、今齊しく嬉々として憧憬の學び舍に足を踏み入れました。

うれしく樂しく、そして無邪氣に――。其處には何等の差別も無い。だが幾星霜、螢雪の功成つて、いよ〳〵なつかしい校門を後にする時こそ、首席、末席、自と刻まれるのは席次である。

だがその刻印が波瀾萬丈の活社會、人生の曠野にそのまゝ通用してゐるであらうか？ 今試に過去二十年乃至三十年以前の、大學、專門學校卒業生を顧れば、首席も末席も、兩々竝び立つて、現在世の第一線に夫々目ざましい活動を續けてゐるのを見ても、成功の要は、卒業成績の如何に依らず、自己天分の錬磨と、孜々とした努力の賜である事が分るであらう。巣立ち行く若人達よ!! たとへ餓豹路に横たはらうとも、大聲一番、一意邁進の氣を以て、長い人生の船出に、双手を擧げて、希望の纜を解からうではありませんか。

學生時代

山内素行

余は學生時代、成績は何時も思はしくなかつた。大學を卒業する時は、末席より第二位を汚した。これは自分の不才には相違ないが、各學校（小學校、慶應幼稚舍、英語學校（今の日本中學）、共立學校（今の開成中學））を轉々として、勉學が不規則であつたのが原因の一つであり、且又自己意中の研究に努力した事がその第二であらう。

同窓生の末席は故吉丸一昌君であつた。而るに同君は、夙く東京音樂學校の教授として、その作歌は衆人の知る處である。若し同君が今日健在ならば、成績惧るゝ勿れ*

*と實證して呉れたらうに、ゆくりなく同君追慕の情を新たにして、今更無量の感に打たれる。

——山内氏は、聖心女學院高等專門學校及び明治大學女子部に教鞭をとられ、又日本に於ける特殊な文化的、風俗的事象として觀た和歌の歷史的研究家である。

山内氏と同年（明治三十四年）に帝大國文科を首席で卒業した文學博士藤村作氏は、現在、帝國大學教授東洋大學、法政大學の講師であり、江戸時代文學の研究家として知られ、尚近く完成される文學辭典の編纂に沒頭せられてゐる。（寫眞上山内氏、下藤村氏）

向つて右は學生時代の山内氏 左は藤村氏である。

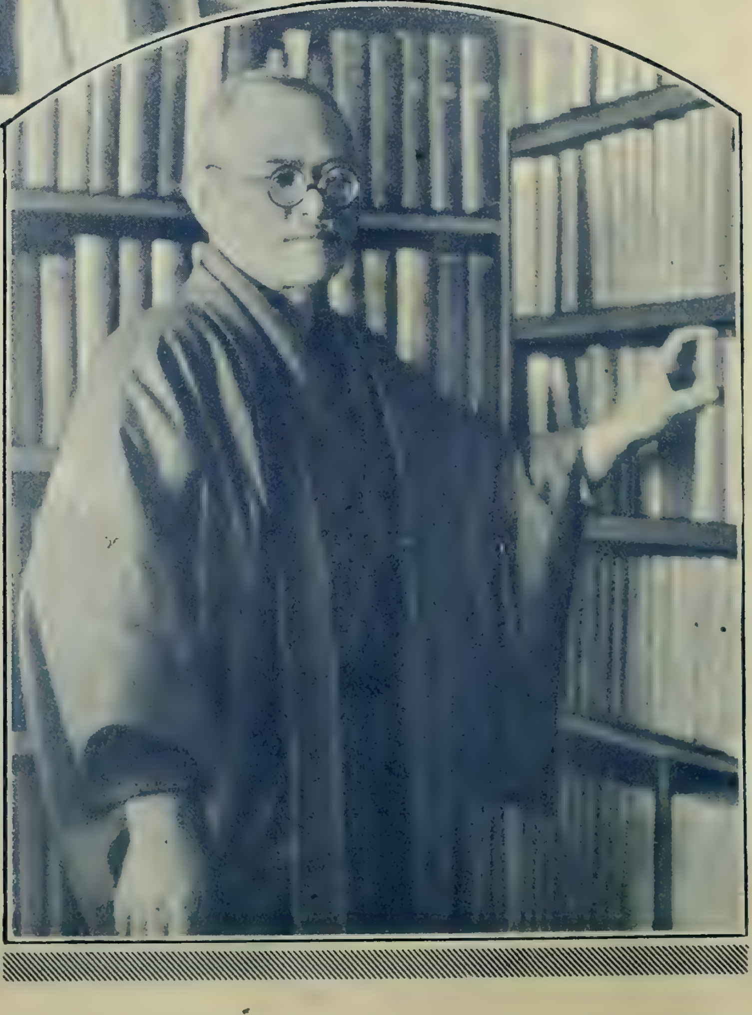
石村君の思ひ出

野々村戒三

石村君は絶えず國文、漢文の研究に沒頭してゐたと記憶する。人中などでは餘り口をきかぬ非常にものしづかな人だつたが、而しその中に可成強いものを持つてゐた。

愛知一中の校長時代を思へば、それが如實にうかゞはれる。最近はお互に忙しいので殆んど顔を合せないが、一高入學前、共立學校時代からの知合ひであり、又東京女子大で一緒に居つた事もあり、私にとつては忘れられない數へられる人である。人格者と言つても十人が十人異存はあるまい。特に石村君の逸話と言ふのは思ひ出せないが、常に尊敬してゐる人です。

——野々村氏は、早稻田第一高等學院長、兼同大教授、立教大學講師として知られ、又謠曲の研究家としては吾國隨一である。



昔の野々村君と僕

石村貞吉

野々村君とは、共立中學（今の開成）時代から一高、帝大と一緒にやつて來た。同君は中學時代から語學、特に英語は驚ろく程達者だつた。而も糞勉強ではなく、相當に要領を得てゐた。その頃の僕は、下手な詩ばかり作つてゐて、成績などは一向に頓着しなかつた。そのくせ大學在學中に、漢文、國文、法科、その他何にでも手を出したもので、二兎を追ふ者一兎を得ずで、僕の成績が惡かつたのも、それ等が原因してゐるだらう。

——石村氏は、東京女子大學教授であり、他二三にも教鞭を振はれてゐる。傍ら有職故實（風俗史）の研究家として、著名である。

（寫眞上野々村氏、下石村氏）

厚き友情

東都建築界に知られた淸水組の技術部長として、斯界に重きをなしてゐる渡邊滋郞氏を郊外砧村の御自宅に訪ねて、

『學生時代には大分運動でもなさいましたか』と伺ひますと、氏は相好をくづしながら、當時の思ひ出話を語つて下すつた。

『僕は小さい頃から運動が好きでね、姬路中學でも、テニスや野球を始めたのは、僕達の時代でしたよ。大學に入つてからも、あらゆる運動をやりましたが、おかげで體は細いが、案外に丈夫です。大學を出る時は末席でしたが、今と違つて就職の心配は有りませんし、よく遊んだものでしたよ……』

『同年同じ建築科を出られた佐野利器さんに就いて、＊

何か思ひ出話は御座いませんか……』

『あ、さうですか。佐野君も少々テニスなどはやりましたが、その方ぢや到底僕達には敵はなかつたですね。二高も帝大も一緒だつたし、最近まで淸水組にも居たので、もう三十年以上の知己ですが、何しろ濱口雄幸さんに見出される位だから、力も有りますしね……』と、友情にあふれた思ひ出話を語つて下さいました。

――**佐野**利器氏は、建築家として有名なばかりでなく、帝大敎授及び淸水組の副社長を經て、今は日本大學工學部長である。

（寫眞上渡邊氏、下佐野氏）

同年ドン尻卒業の日比野寛氏は、日本のスポーツ界の親であり、天晴れ吾國マラソン王の名を揚げた。老いて尚精悍氣鋭、寒風を突いて、東海道の並木道を韋駄天走りに突ッ走る强の者。愛知一中の校長もやれば代議士にも當選し、今は名古屋育英商業學校長として、教育に、運動に、偉大なる貢献を致してゐる。

（寫眞上日比野氏、下土方氏）

首席末席共に輝く

明治二十八年、帝大英法科を見ん事首席で卒業した俊才、土方久徴氏は、流石に偉い。吾國財界の總元締として、日本銀行總裁の重席を占め、意氣益々旺んなるものがある。

努力主義　　諸井四郎

私の頭は元來經濟に向いてゐたのに、法科をやつたと言ふのが、そもそもの間違でした。不幸にして末席で卒業したが、或はかへつて此れが幸であつたのかも知れない。

寺尾亨先生は、私に申しました『首席、さもなければビリになれ』と。山川健次郎先生もこれと同じ事を圖らずも申されたのです。『やれるぞッ!!』その時以來、私の信念はハッキリと固められたのでした。＊

（寫眞上諸井氏、下松田氏）

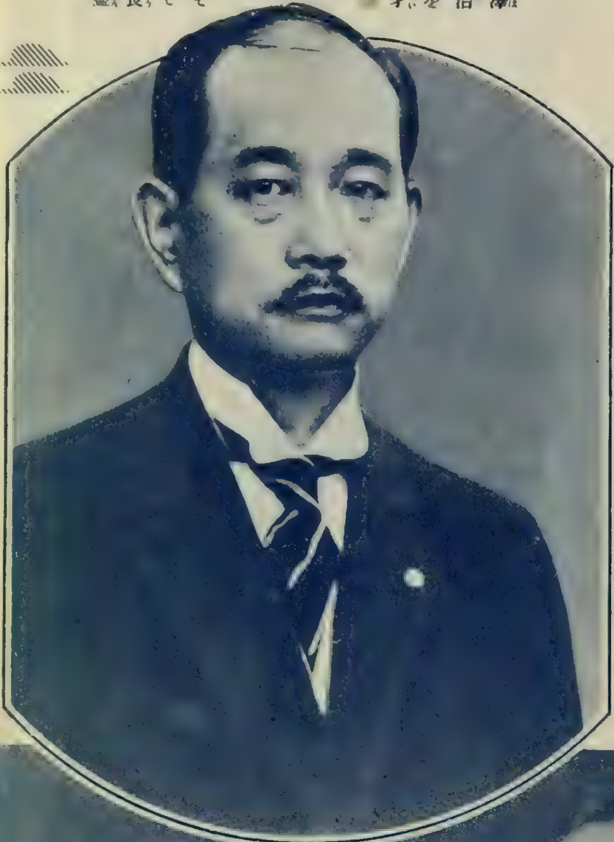
＊——諸井氏は、大正十一年政府の任命に依り、第四回國際勞働會議資本代表の顧問としてジュネーヴに渡り、尚又京釜鐵道敷設の功に依り勲六等を授けられた。現在は西武鐵道會社の取締役として、財界に活動してゐる。

松田道一氏は、明治三十三年帝大佛法科を首席で卒業した程の逸才で、今や特命全權大使兼外務省條約局長であり、法學博士の學位を持ち、國際的多難の現日本としては、その活躍こそ大いに期待されてゐる。

勉強第一

人も知る政界の巨將芳澤謙吉氏は、第二高校卒業後、文科大學（東京帝國大學）英文科に學んだ。しかし二年の中頃から、祕かに法律の獨學を始め、明治三十二年末席より第二位で卒業（但し在學中は常に首席特待生であつた。）これは試驗前の病氣と、法律の獨學沒頭の爲である。九月、選擇課目をわざと難かしい民法及び行政にとり、見事外交官試驗にパス。以來粉骨の努力が今日を築いたのである。巣立ち行く若人の爲に、先生は特に次の如く語つて下すつた。

「私が昨年六月まで三十三ヶ年の外交官生活を回顧すると、幾多の苦樂があるが、學問の勉强の經驗のみに就て、言へば、外交官試驗前法律の晝夜獨學と、フランス赴任の際、印度洋航行中箱根丸の船室に閉ぢこもつて、只一人汗だくの勉强をした事とである。何事も勉强、それが私の體驗から得た一つの強い信念です」と。



茨木清次郎氏は、芳澤謙吉氏と同年、即ち明治三十二年帝大の英文科を首席で卒業した程の秀才である。果せる哉氏のその後の活躍目ざましく、身を教育界に投じて以來、松本高校長、東京女高師校長、東京音樂學校々長として、その功績は偉大なるものであるが、今は浦和高校長として、益々教育界に盡瘁せられてゐる。

（寫眞上茨木氏、下芳澤氏）

今日あるは當然

田中良

岡本君は確かに成績は惡かつた。頭が惡いのでは無い。天分が冴え過ぎてゐたからであらう。同君の今日あるのは、學生當時から約束されてゐた。今にして學生當時を振り返つて見ると、岡本君は、その頃から才氣縱横、意志が鞏固で、觀察眼が鋭く、非常に獨創味の勝つた人だつた。變つた味を出さうとして、マッチの棒で繪を畫いた事さへある。漫畫壇の巨匠として今日あるも、又當然である。

美校を出た時、丁度帝劇が出來上るので、和田英作先生（今の美校長）がその壁畫を擔當した。で僕や岡本君は、その助手として使はれたのである。岡本君は午前中、僕は午後。一ヶ月の報酬二十五圓也。それを岡本君と二人で分け合ふと十二圓五十錢。これは僕が貰つた最初の報酬だつた。

田中良君は

岡本一平

田中君は美校時代から芝居好きで、藤田嗣治君などとよく立見に行つた。君が今日舞臺裝飾の權威者であるのも、斯うした處から出發してゐる。健康で遊び好きだつたが、無邪氣で上品で惡遊びはしない。一方學校もよく出來て、特待生などにもなつた。卒業の時は勿論上席である。藝術家と言へば、ダラシの無い事を特權にしたり、見榮にしたりする者もあるが、ツマランことだ。田中君は理解の廣い紳士的の藝術家として、心服を拂ひ、以來二十餘年間交りを續けてゐる。學生當時の舊罪でもさらさうと思つて、色々に考へて見たが、何一つとして思ひ出せない位だ。

（寫眞下は岡本氏）

インフレ・インフレ

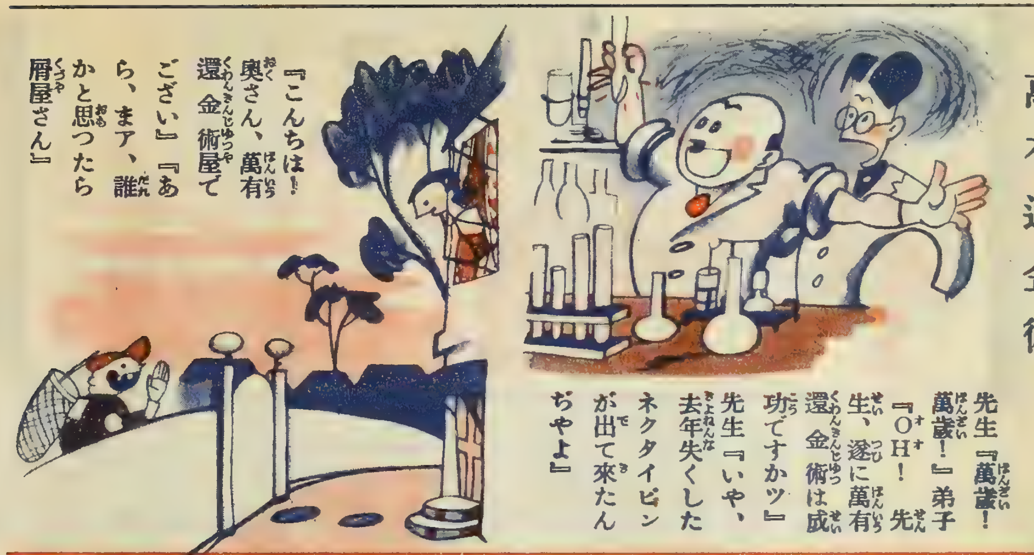
黃金狂時代

珍案 金脈發見法

黃金は人間の腹を冷やすと言ひ傳へられてゐるから、かうして冷い處を探して掘れば金脈の所在請合ひ申す。

池部鈞畫

萬有還金術

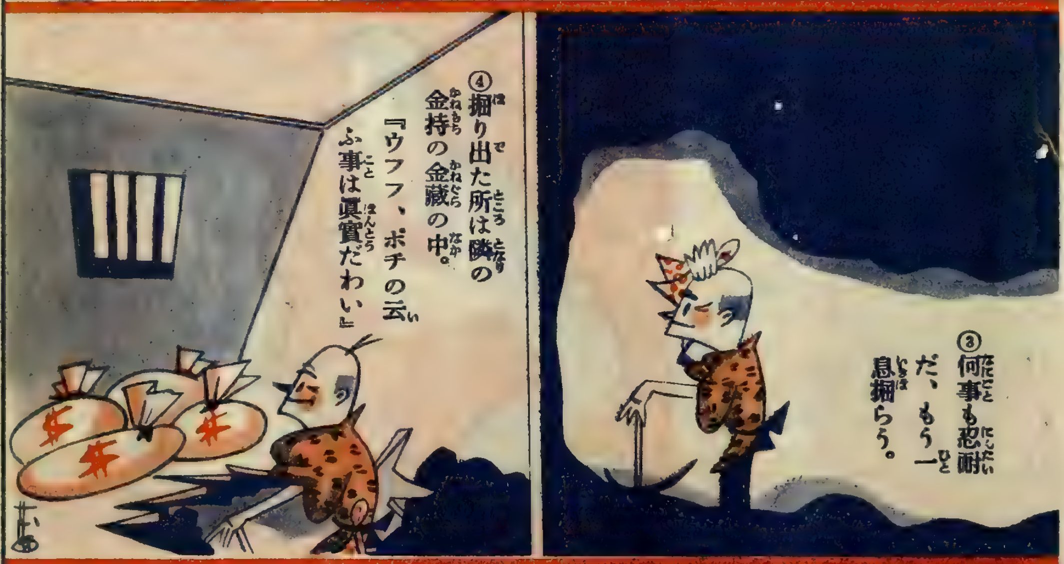


黄金中毒患者

金色の罪

近藤日出造畫

矢崎茂四畫



清水對岳坊畫

黃金狂時代

(1)『あんた近頃金時計が、無いやうネ、どうかなすつたの？』『あ、あ、ありやア。と、と、時計屋に直しにやつてあるヨ』

(2)『時に此間から聞かうと思つてたンだが、お前金歯が無くなつた様だネ、どうしたい？』『歯醫者さんに直しにやつてあるンですワヨ』

(3)『何かあんた、かくし事してらつしやるワネ、時計でも賣つて、カフエーへでも、いらつしたンでせうヨ』『ウソ言へ、お前こそ、何かかくしてンだろ』

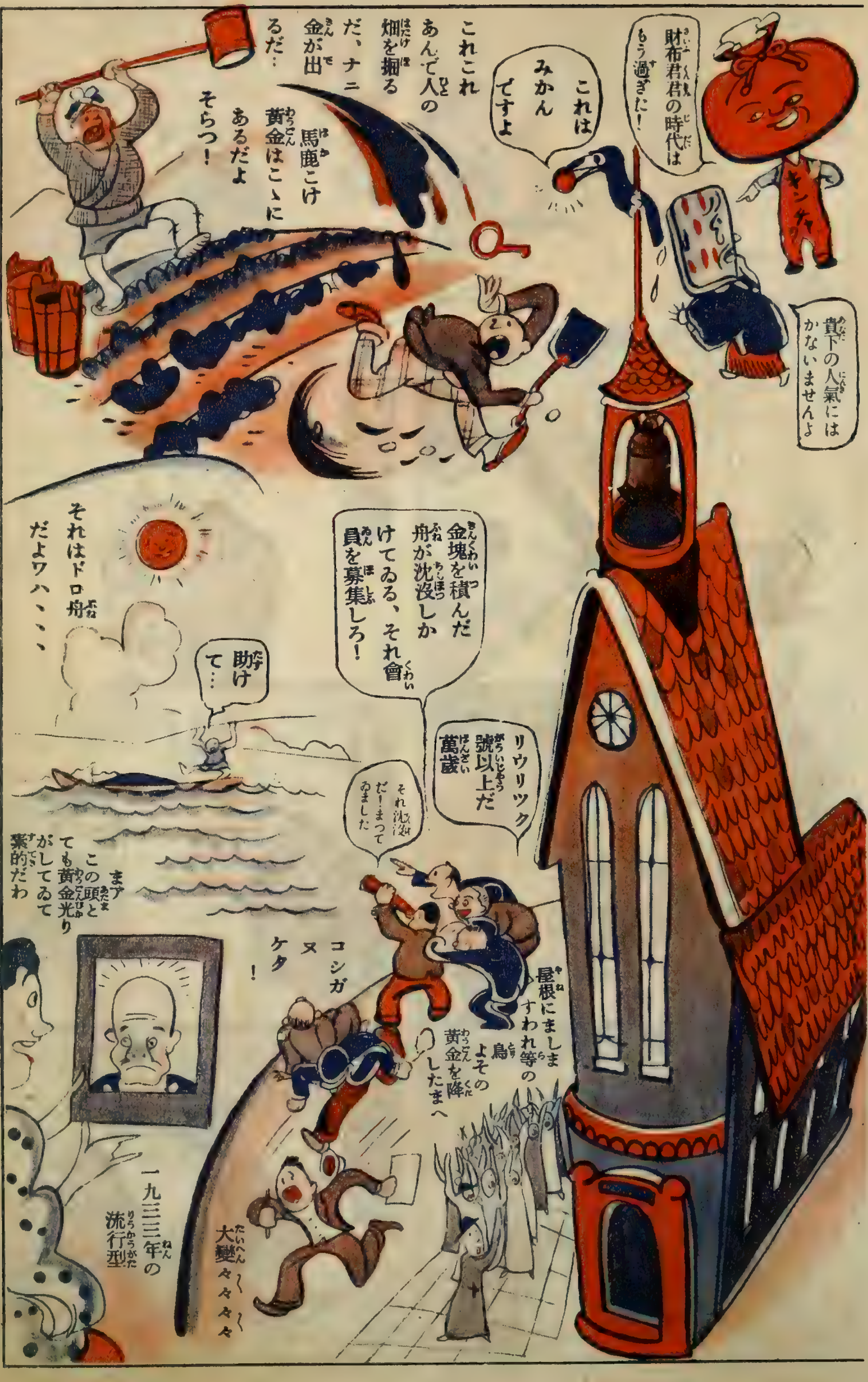
(4)『ぢや言つちまふわ、實は十圓が千圓になつて歸つて來るつてェ譯でネ、モフナヒ號の引上費に投資したのヨ』『オッホ實は僕も家のためを思つて其の手をやつたのサ』

(5)『ウエーイ號外ーッ、モフナヒ號引上成功ーッ十割配當決定ーッ號外ーッ』『オヤ、僕のドーラック號引上は失敗だと書いてあるゾ、出したお金はボシャ公だウワーッ』

(6)『さうするとあたしが三十圓儲けて、あんたが三十圓損して……』『十圓が千圓になるとは話がうますぎるヨ』『矢ッ張りあたし達には運がないのネ、地道に貯めませうヨ』

長崎抜天畫

一九三三年
黃金狂想曲
吾等のテナーはからたちの花を唄つた。そして特に金の玉だよーの所で極力力を入れて聽衆の大喝采を呼んだ、それを吹込んだ金グレコードは飛ぶやうに賣れる〳〵。
萬歳！
金
病人『先生貴下の薬よりも子供の書いたこの金の一字を見たら病氣全快*
醫者殺し
*しましたよハハ、、、、、』
金んの玉だよ—を…
俺はモグラのやうに地下をモグつて金を探したいね
賛成々々
それは大發明だ！
この字を知つてゐますか？
金
大人になるとだん〳〵好きになる字です！
あんまり
ハハ、、、、、
ホホ、、、、
金


財布君の時代はもう過ぎた！
これはみかんですよ
これこれあんで人の畑を掘るだ、ナニ金が出るだ…
馬鹿こけ黄金はこゝにあるだよそらつ！
貴下の人氣にはかないませんよ
金塊を積んだ舟が沈沒しかけてゐる、それ會員を募集しろ！
それはドロ舟だよワハヽヽヽ
助けて…
リウリック號以上だ萬歳
それ沈沒だ！まってゐました
屋根にましますわれ等の鳥よその黄金を降したまへ
コシガヌケタ！
まアこの頭とても黄金光りがしてゐて素的だわ
大變々々々々
一九三三年の流行型

廣瀬貫川畫

黄金佛受難

なるほど
あの金佛をつぶすといいかねになるぞ君
よけいなことをいふなよ
キンペン、キン歯のおはらひものはありませんか、おたかくいただきます
いやなことをいふな
だんなあれはたいした金佛だいかがですおはらひになつては
じようだんぢやない
このさいおもひきつて
つぶしてうりませうか
ほんとかおい
へんなのがきたぞ
たしかここのうちに金佛があつたはずだ
つぶしてしまふかムニヤムニヤ
のがすもの金佛めか
ゐてもたつてもをられんよもう
たすけてくれ
どうもつぶされさうです、おたすけくださいまし

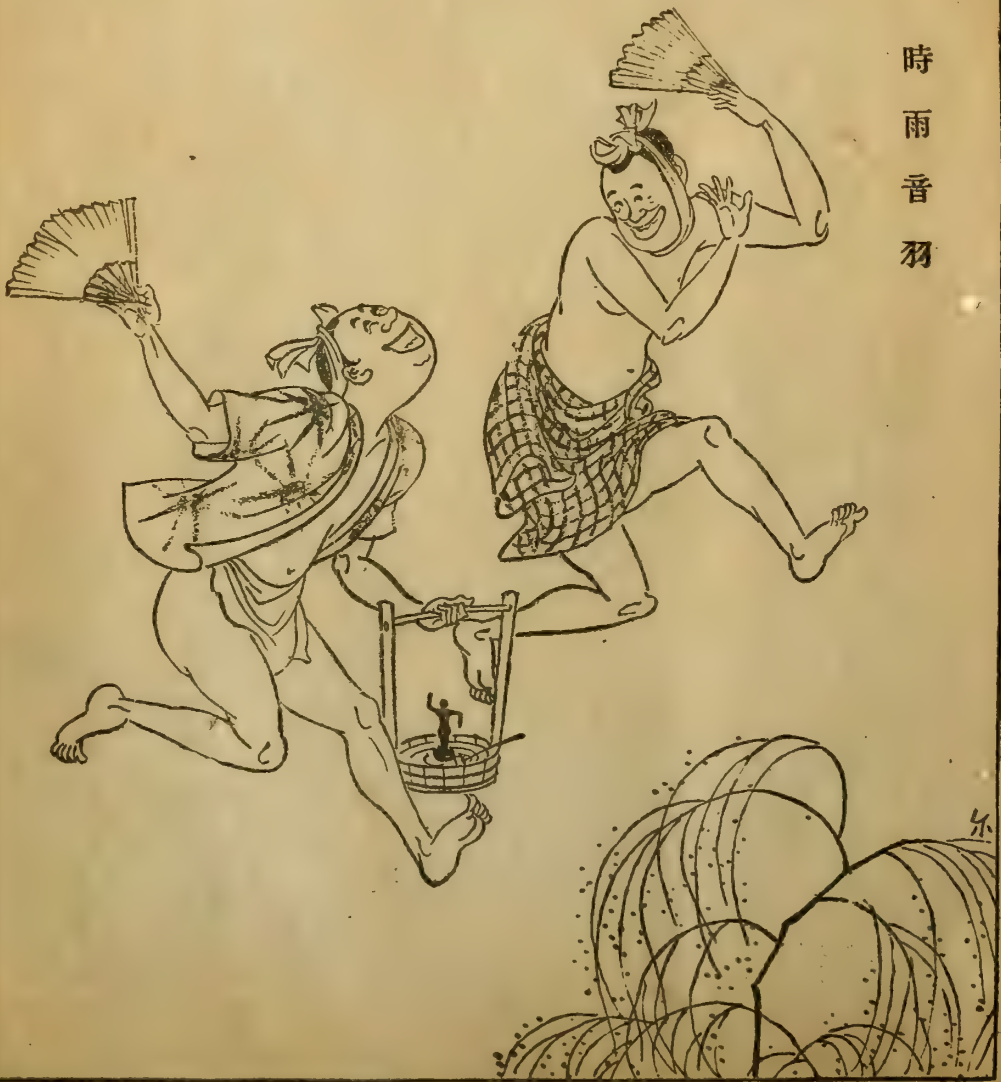
新関青花畫

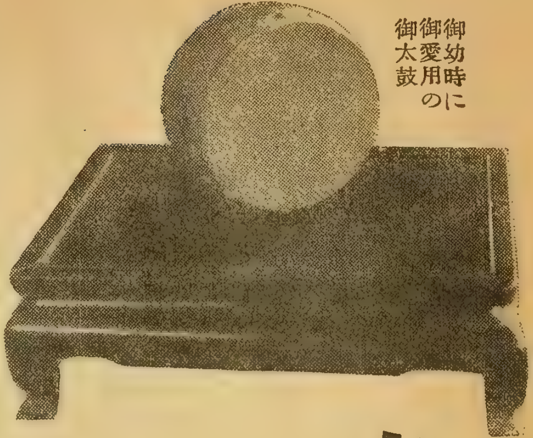
花まつり

時雨音羽

甘茶に酔うて
茶に酔うて
釋迦牟尼世尊
丸裸

春はおぼろの
花見酒
なんに酔うたか
しらないが
おらが親父も
大浮かれ
向ふハチマキ
丸裸
かつぽれ
かつぽれ
甘茶でなア。





御幼時に御愛用の御太鼓

皇太后陛下の御幼時

吾が家に在らせられた頃の思ひ出

大河原よし子謹話

柳原緑風謹記

我が皇太后陛下が、お七夜からお五歳までの幾年を、新市内の一農家にお過し遊ばした御事を知る人とては殆どあるまい。今は御乳人夫妻も世を去つて、親しく御幼時を語りまゐらせ得るものは、畏けれども御乳姉妹に當られる大河原よし子(五八)刀自を措いては一人も無い。

中野驛と高圓寺の中間杉並區高圓寺町六丁目六五七に、界隈切つての豪家である光榮の大河原房次郎氏夫妻を訪ねて、五十年の昔語りを承る。蓋し、九千萬國民の齊しく御婦徳を仰ぎ奉るべき秘中の秘話と申し奉るべきであらう。以下大河原よし子さんの謹話。

『皇太后陛下が、九條公爵家第四の姫君として御誕生遊ばされたのは、明治十七年六月二十五日、丁度五十年前の御事で御座います。御父君は從一位大勳位道孝公、御生母は中川の局野村幾子の方、只今は淨操院様と申上げ、八十幾つの御高齢で、京都に御餘生を送つておいでになります。元來九條様では、お子様はみな御健康上、この近在の農家へお預けになりますのが、いつしか御家例のやうになつて居りました。

陛下の御兄君に當られます此の間薨去された道實公も、やはりこの近くの大野喜三郎と申しますのが、九條家へ御用を承

りに出て居りました關係から、大野家で御預り申上げてそこで御生長遊ばされたのです。

私共では丁度弟が生れて間もなく歿しまして、母の貞がお乳が餘つてゐたものですから、九條家御出入の大野家から乳人として推薦され、御つきの御醫者が來て、このお乳ならば……と折紙がつけられ、且、母の健康、家格、家門の折合など、いろ／＼お調べがあつて後、申分なしと云ふのでお姫様をお預り申す事になつたのです。

（御十歳の折の御寫眞　大河原家謹藏）

その時大殿様（道孝公）からお直々に、

「姫は自分の子だと思つて何事も遠慮なく育てて呉れよ。」

と、お言葉があつたさうです。

さうして、御誕生七日目にこの家へお迎へ申上げたのですが、後に國母陛下におなり遊ばすなどとは神ならぬ身の夢にも存じませんでしたものの、やはり高貴にお生れつき遊ばし、皇后さまとまで仰がれましますお方は、何處か並々の御子達とはお違ひ遊ばしておいででした。

第一にお里にお預り申しました五年の間、只の一回として、おむづかり遊ばした事が御座いません。八つも年長の私の方が、却つてヤンチヤンを申しまして、いつも母から叱られ、まるで、よしの方が妹のやうだと云はれました。

今もありますが、この庭の李が夏になると熟しますので、私が取つて差上げましたところを母に見つかり

「お姫さまともあらう御方が、こんなものを召し上るものではありません。」

と、母がお叱言を申し上げますと、

「アイ。」

と、素直にお聞入れになり、直ぐお捨てになりました。之には私の方が子供心に面目なく、それからはうツかりした食物は差上げないやうにいたしましたが、姫君には、私がどんなも

のを口にしませうとも一向おほしがりになるお氣色もなく、御自分の分として、初めにお分け申上げた分だけで御滿足をしていらツしやいました。

姫君の事をお姫樣と申上げて居りましたが、私がお姫樣と云へなくて（おちい樣）とお呼びしました所から、家内中つい、（おちい樣）で通るやうになり、知らぬ里人はそれがお名前とでも思つたらしく、隨分とお心安だてに失禮な言葉で、おかはゆくいらせられた姫君をおあやし申上げたものです。今から思へば實に〳〵勿體ない事で御座います。

おちい樣の方では、父の事を（ぢい）、母の事を（ばア）と仰せられ、私の事は（よしよし）と名前をお呼びになりました。

まだおいくつにもなりにならぬ頃、お姫樣をお背負ひ申上げて、母が買物や用達などにお連れするたびに、好く何か忘れて參りますので、御發明の姫君は片言乍らお背の上で、

大河原家當主房次郎氏、夫人よし子樣

「ばアは又お傘を忘れる。お風呂敷は持つて居るか。」

など御注意下されて、母が恐縮した事も屢々で御座いました。

又只今の省線が甲武鐵道會社線として工事を始めましたのが其の頃で、この家の門前を土の運搬車が往つたり來たり致しますのを、母が舊式に土車々々と申しますと、姫君には早くもトロツコといふ言葉を御承知で、

「ばアや、土車の事はトロツコと云ふのですよ。」

と、お教へになり、その御發明さに、母も私も吃驚した事が御座います。

毎朝、母はおちい樣の御目覺めを待つて、神樣にお蟲氣もなく御生長遊ばされるやう、お祈りするのが例となつて居りましたが、或朝つい用事にかまけて怠つて居りますと、

「ばアや、今朝は何故神樣を拜まぬのか。」

と、おたしなめになりました。

御食事なども、

「こんなものはいやだ。」

大河原氏邸―洋間は近年増築のもの

など仰せられた事は一度もなく何でも差上げるものを御機嫌よく召上られましたが、當今と違つて買物に不自由だつた此邊の事とて、お魚類は中野まで買ひに出ねばならぬので、毎日といふわけには參らず、自然お野菜類を多く差上げて居りました。營養分としては鷄肉がお好きなので、時折それをお勸めする程度でしたが、御發育は非常におよろしく、五年の間只の一度も御風邪を召した事はありませんでした。

九條家へお歸り遊されてからも、至つて御健全で、學習院女學部の前身、華族女學校へ御通學の十年間に、御缺席は御伯母君に當らせ給ふ英照皇太后崩御の折の一日丈け、あとは明治三十一年の冬、俄かの御腹痛で、三十分程御休憩遊ばしましただけだと、承つて居ります。

　こんなに御健やかに御生育遊ばされたのもみんな、ぢい、ばアのお蔭だと、大殿樣からお禮のお言葉を頂きました時は、父も母も嬉し涙に泣いて喜んだもので御座いました。

　さう〳〵、たツた一度、父も母も眞ツ青になつて吃驚した事がありますよ。それは或る夕方、おちい樣のお姿が急にお見えにならなくなつたので御座います。

　何しろ、大切な御姫君、若しもの事があつたら、何としてお詫をしてよいか判りません、八方へ手分けをしてお探し申上げましたところ、當のおちい樣は、私の歸りの珍しく遲いのを御案じの餘り、たツたおひとりで、七八丁も離れた私の學校（當時高圓寺小學校、今、杉並第三小學校）までお迎へにいらして下さいましたのです。畏多いではありませんか、ほんのまだ御五歳の頃でいらツしやいます。

　おちい樣は斯うして私にまで御慈愛をかけて下さいましたので、私も身分の高下などは打忘れて、ほんとうの姉妹のやうにお慕ひ申上げ、始終御一緒にお相手をいたしましたので、お

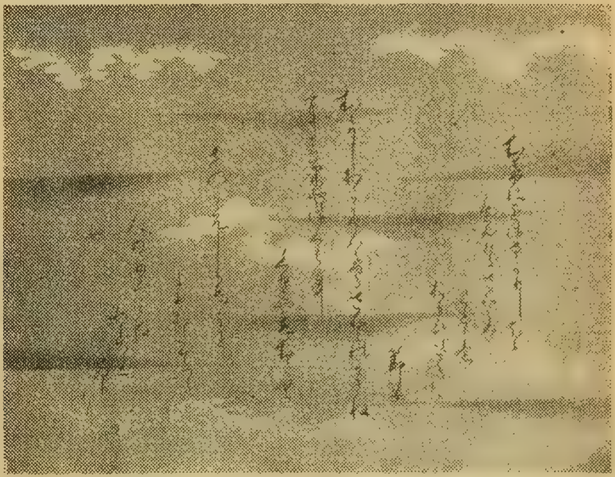
ちい様も自然私の眞似をなさつて假名文字や、自由畫樣のやうなものを、よくおかきになられました。

お刀の畫をおかきになり、脇差と云ふ言葉がハツキリ仰有られず、ヤキザシ〳〵と發言なさるので、そのまゝ片假名でヤキザシと說明をおつけになつた事などが今も私の記憶に殘つて居ります。

併し、皇太子妃殿下として、御內定になりましたとき、九條家のお方がお見えになり、御筆蹟は一枚のこらずみんなお引上げになりました。

陛下には斯うして、御かたみの品が私共に殆ど殘つてゐない事をふびんに思召されたので御座いませう、皇太子妃殿下におなりになりましてから、思ひがけない御眞筆を母に賜りました。

むげにをさなかりけるほど
　すみける里のことども思ひ出でて



大河原家へ賜りし御眞筆

○

むかしわがすみける里のかきねには
　菊や咲くらん栗やゑむらん
ものごころ知らぬ頃より育てつる
　人の惠みは忘れざりけり

乳人に對する御仁慈の御眞情があふれてゐるでは御座いませんか。勿論、御眞筆は家寶として、金庫に納めて大切に秘藏して居ります。

幼稚園にお上りになるために、九條家へお歸りになりましたのは、明治二十一年の十一月十日の朝で御座いました。お邸からのお迎へに接しましたので、

「おちい樣は今日からお家へお歸り遊ばすのですよ。」

と、母が申上げますと、姫君には、

「アイ、姫は是からお家へ歸つて、一人でおとなしくねんねします。」

と、涙を流してお名殘りをお惜しみ下さいました。

たまらなくなつて、母も私も思はず、

「ワツ。」

と泣いてしまひますと、

「ばアや、又お出でよ、ぢいやもね。」

おちい様は却つて年老つた父母をお慰めになつて、お別れになりました。

併し九條家へ御歸還後も、毎夏、暑中休暇には御避暑がてら永い事御滯在下さいましたが、年々お立派になり遊ばす御樣子には私共もつく〲感じ入つて、何と申上げる言葉も出ませんでした。御口數が少く、要領丈けハキ〲と仰有ると云ふ風で御自分の事は何でも御自分でキチンとなさいました。

御入輿がお決まりになりましてからも、一度御越し下さいましたが、その時はもう畏多くて、昔のやうに御心安く御話は申上げられない程自然の御威光が備はつておいででした。

その節思召により、夫の房次郎が竹藪から筍を掘つて御覽に入れ、その筍を調理して御賞玩に供へました。

大河原家先代故金藏氏、御乳人貞子樣

御入輿近く、私共が九條家へ御喜びに伺ひました節は、

「ばアはまだ見た事がないだらう。」

とて、態々御調度の品々を拜見させて下さいました。

こんな御仁慈御坤徳に富ませられるお話を思出づるまゝに申上げてゐますと際限がありませんから、ごく最近の事を申上げて一段落と致しませう。

一昨年十二月二十五日、多摩御陵御參拜に先立つて、

「大河原の家は何の邊か近頃はよく判らなくなつたから、車窓から見ゆるやう、特に目じるしを樹てよ。」

御內々斯う云ふ御沙汰がありましたので、私共は恐懼して早速長い柱に五色のメリンスで旗を作つて樹てました。陛下の仰

御六歲の折大河原家へ御立寄りの際賜りし椿

せられる通り、人家が稠密になつた爲め、近所の迷惑を思ひ、高い立木を伐り倒し、おまけに門前に町家が建並んだ爲め、この花崗石の門柱が、一寸汽車電車からは見にくくなつたので御座います。

陛下には、畏くも御陵への御道すがら、往復とも御車中でこの五色の旗をどんなにかおなつかしく御覽遊ばされたさうで、九條家を經て、その旨御達しがありました。

そして白羽二重一匹と、お召を一匹、今は亡き父母の代りに私共夫妻へ賜りました。

昨年も、同じ日に私共ではその旗をお樹て申しました。

「あゝ、今年もあの旗が出てゐる。」

と、恐れ乍ら御目にとめ給はつた事と拜察申し上げます。

先に御覽に入れました御眞筆と、今上陛下御降誕の際九條家から、

「昨夜十時皇親王御降誕、御二方とも御健勝。」と打電された電信送達紙（明治三十四年四月三十日附、武藏中野局消印）と、先代に賜られた庭前の椿と、御十歳の御寫眞、御使用の御太鼓、古い簞笥と六疊釣の御蚊帳、之丈けが尊き御方を偲びまつる記念の品々となつて居ります。

申殘しましたが、只今以て春秋　折々に自製の新鮮なお野菜を献上の光榮に浴して居ります。』

（をはり）

果然！讀書界驚嘆!!　一九三三年劈頭の大名著

茅原華山先生著　日本國民に遺言す

故黒岩涙香氏と共に文名一世を蓋うた華山氏が雌伏十七年、遂に一生の遺言として發表した傑作、氏が十數年前豫言した國民的悲劇の頻出する今日を坐視するに忍びず、奮然死を決して九千萬同胞に訴へた烈々たる至情は、或は噴火山の如く灼熱して痛烈悲壯の言となり、或は優麗の詩文となりて、朗々誦すべく、眞に昭和八年劈頭の讀書界を飾る名著！　萬人必讀の大快著です!!

大好評！　どなたも是非御一讀下さい。全國書店にあり定價一圓二十錢（送料八錢）　東京本郷　大日本雄辯會講談社　振替東京三九三〇

全日本の大衆に「ムッソリニ傳」を送る

澤田謙

予やもとよりムッソリニと相識るなし。彼に恩もなければ怨もない。ファッシズムに至つては、或る點に熱烈なる共鳴を覺ゆると共に、或る點については極端なる反意を表さねばならぬ。たゞ彼ムッソリニの一片耿々の志と、その強烈なる性格に對しては、秘かに熱愛の情を覺ゆるのである。

現時の日本は、ムッソリニの如き強き性格者を、必要とする時代ではないか。頑冥なる保守主義者の卑劣。空疏なる共産主義者の理論癖、而して怯懦なる自由主義者の自己回避は、年若き力強き青年の力による、新日本の建設を待ち望むものではあるまいか。幻想者と侮られ、破壞主義と罵られ、反動主義と批難さるゝも、敢へて予の意に介するところでない。溢るゝ如きムッソリニ熱愛の情を、この一管の筆に托して、新日本建設の勇ましき道程に上らんとする、全日本の青年に捧ぐるものである。

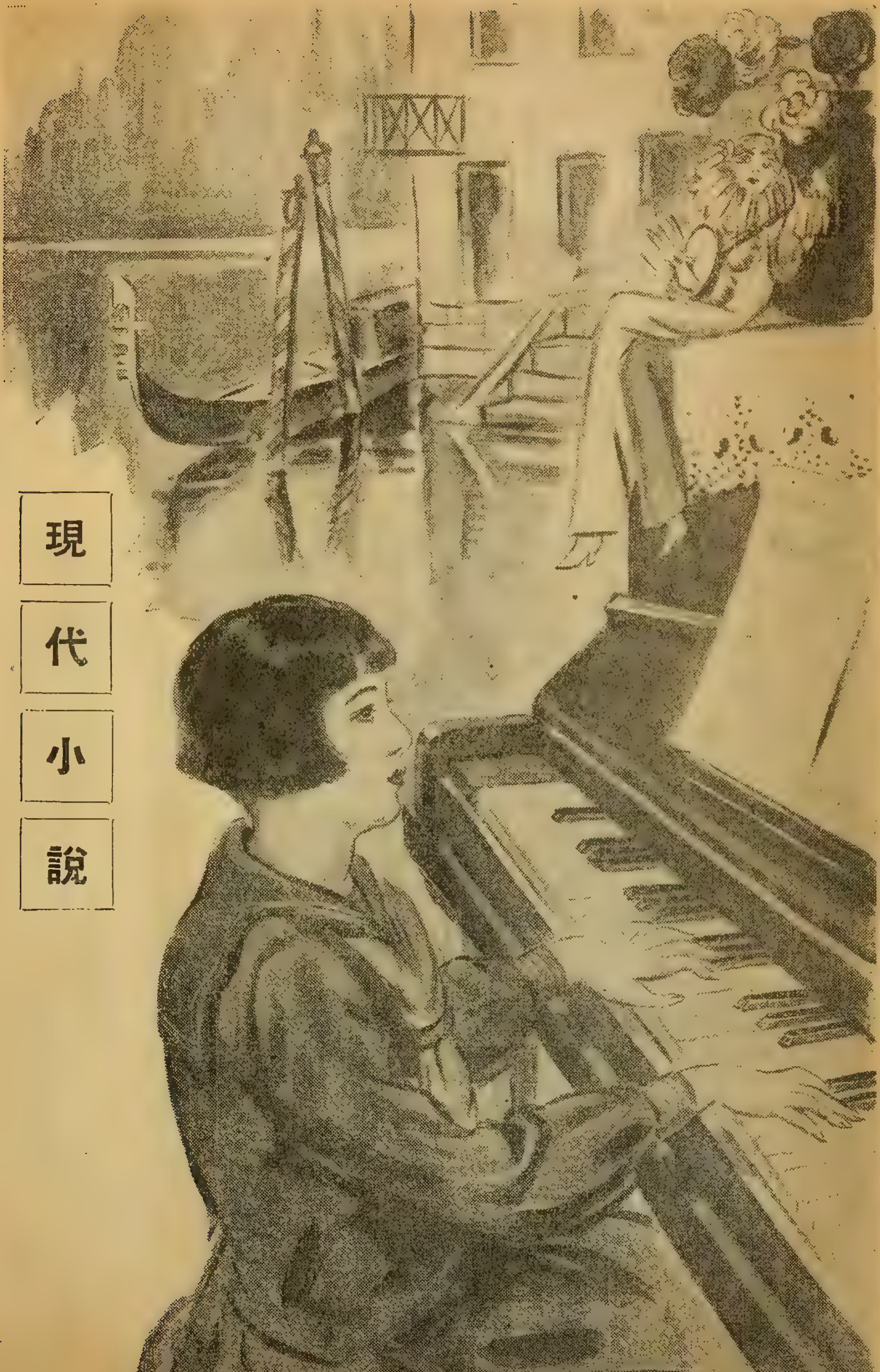
伊太利の山中『喧嘩鍛冶』の息子と生れ、薄給なる小學校教員を振り出しに、或は瑞西の浮浪兒として牢獄を家とし、或は熱烈なる社會主義の闘士として官憲と戰ひ、一たび世界の大戰起るや、勇敢なる軍曹として塹壕の砂を浴み、遂に三十萬の黒シャツ黨を率ゐて羅馬の都に討入り、年齒わづかに三十九の青春をもつて、新伊太利の國運を双肩に擔つて立てる、彼ムッソリニの姿こそ、まことに白雲を抽んずるアルプスの孤峰。その波瀾重疊起伏極なき生涯は、まことや傳奇小說中の人物『事實は小說よりも奇なり』との言を、實證するものといはねばならぬ。

澤田謙先生著『ムッソリニ傳』
定價一圓二十錢送料十二錢　本社發行

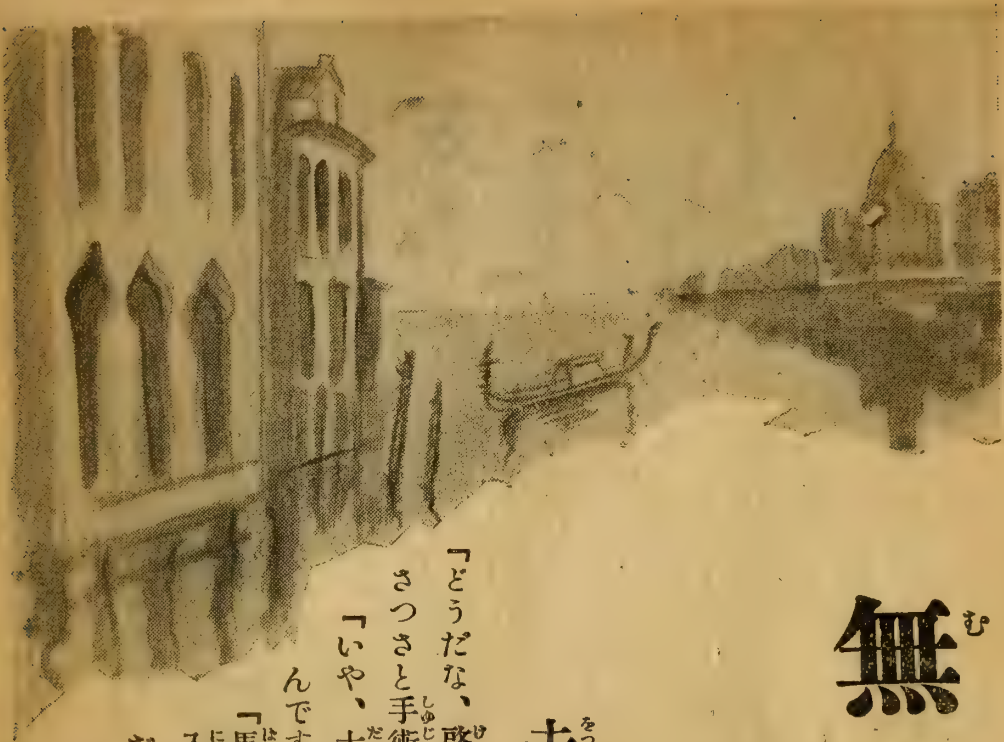
演壇上のムッソリーニ

瀕死のイタリヤを救うた力の人としてのムッソリーニは餘りにも有名だ。政治家としてのムッソリーニ、文章家としてのムッソリーニ、思想家としてのムッソリーニ…それよりも彼の價値を高めたものは彼の辯舌である。彼こそはイタリヤ雄辯界の革命兒だ。

彼の從來のイタリヤの雄辯法の慣習を覆へしたズバ拔けた大雄辯は、彼の今日の成功を捷ち得た大きな要素である。彼に親しく接近した下位春吉氏の譯した『ムッソリーニの獅子吼』には、ファッショ運動の統帥として疾風迅雷の勢で政權を握るまでの革命演說、三十九歳イタリヤの獨裁首相としての施政演說、或は工場に農村に、軍隊に廢兵院にあらゆる所で大抱負を吐露した大獅子吼二十九篇を收めてゐる。彼の辯舌の人としての眞面目がありありと窺はれる、まだ御覽にならない方は御一讀下さい。定價一圓八十錢送料十二錢本社發行



現代小説



無言歌

岡田三郎
長谷川多都子畫

夫のために

「どうだな、啓三、入院しなくては、いかんのぢやないか？　入院して、さつさと手術をせんことには、手遅れにならんのか？」
「いや、大丈夫です。かうやつて安靜にしてをれば、ぢきによくなるんです。盲腸炎ぐらゐで、入院なんかする必要はないですよ。」
「馬鹿なことを云へ！　お前は負けをしみを云つとるんぢや。入院しようにも、入院する金がないもんぢやから。……さうぢやらう？」
隣の茶の間で、小さくなつて聞いてゐる細君の京子にとつては、身を削られる思ひであつた。

病床にある啓三の枕元で、口喧しく云つてゐるのは、啓三の伯父であつた。

啓三が伯父の反對をおしきつて、貧家の娘の京子と勝手に結婚し、ささやかながら愛の家庭をつくつたのは、半歳ばかり前のことであつた。啓三には、早くから兩親がなかつた。少年の時代から、長じて音樂學校を卒業するまで、一切の面倒を見てやつたのは伯父であつた。伯父の料簡では、知人の或る資産家の娘を啓三にめあはせ、ゆくゆくは音樂修業のために、洋行もさせてやるつもりであつた。それを、啓三は裏切つたのであつた。伯父はおこつて、義絶を宣告し、すつかり音信を絶つてゐたところが、或る方面から、啓三が病氣で困つてゐることを聞きつけ、一つの思惑を胸にたたんで、だしぬけに今日やつて來たのであつた。

『啓三、お前さへ入院しようと云ふ氣なら、今日のうちにでも、入院をさせてやるんぢやが、……どうぢやな?』

『本當ですか?』

伯父の思惑を知らない啓三は、うつかり話に乘つて行つた。實際のところ、啓三は入院を希望してゐたのであつた。

『本當とも。誰が噓を云つたりするものか。』

『ぢや、入院させてもらひませうか。』

『さうした方が、いいぢやらう。盲腸炎と云うても、油斷はならんからのう。……そこでぢやが、啓三、入院するについては、ここに一つ、條件があるんぢや。』

襖のかげで聞いてゐる京子は、その時おもはず、からだのひきしまるのを覺えた。京子には、何かしら惡い豫感のやうなものが感ぜられた。一層襖に近く身を寄せて、ぢつとき耳をそばだてた。

『どんな條件です?』

啓三の聲であつた。京子は、伯父さんが何を云ひだすかしらと、固唾をのんだ。

『ほかでもないが、もう一度お前に、わしの家へ戻つてもらひたいんぢや。』

『どう云ふ意味ですか、それは?』

『つまりぢや、お前がまだ、かう云ふ生活にはひらん前の狀態に、もう一遍かへると云ふ意味ぢや。……解つたかのう?』

『…………』

啓三は何とも答へなかつた。

京子の心臟は、耳にきこえるほどに、どきんどきんと激しく鳴りだした。

『どうぢやな? わしの云ふことをきいて、もう一遍、もとの

啓三にかへつては。……この條件さへいれてくれたら、入院もさせてやらうし、癒つて健康の恢復次第、かねてのお前の希望どほり、洋行もさせてやるが、……どうぢや？』

『僕に、女と別れろと云ふんですね？』

『簡單に云へば、さうぢやが、一概にただ別れろなんぞと、そんな非人情のことを、わしは云はんつもりぢや。別れるなら別れるやうに、先方に對してそれ相應の禮もつくさにやならん。そのへんのことは、萬事わしの胸中にあるんぢやから、一切わしにまかせるとして、どうぢや、啓三、この際新規蒔直しをやらうと云ふ氣には、なれんかのう？』

『さう云ふお話なら、きつぱりお斷りします。入院が出來なくつても、結構です。このまま死んでも構ひやしません。歸つてください！』

『なんぢやと？　折角見舞にやつて來たわしに向つて、歸れとは何事ぢや！』

『伯父さんのやうな人に、見舞に來てもらつても、有難くもなんともないです。かへつて腹が立つばかりだ。顔を見るさへ、いやなんだ。歸つてくれと云つたら、さつさと歸つたらいいぢやないですか。』

『貴樣、あくまでもわしに楯をつく氣ぢやな！　この恩知らずめ！　親のない貧乏孤兒の分際で、ここまでになつたのは一體誰のおかげぢや！　わしは貴樣の、育ての親も同然なんぢや。生みの親よりも、育ての親と云ふことを知らんのか！　貴樣のやうな、義理も人情もわきまへん奴はないぞ！』

『それぢや、ひとが病氣をして困つてゐる、その足許につけこんで、生木を裂くやうに、僕達二人の仲をひき裂かうとするやうな人間が、義理人情をわきまへた人間だとでも云ふのですか？』

『生意氣なことをぬかすな！　貴樣の將來を思へばこそ、云ふんぢや。女給風情を女房にして、貴樣は世間から物笑ひの種にされとるのを、知らんのか！』

『女給風情とは、なんです！』

『女給風情ぢやから、女給風情と云ふんぢや。娼妓や藝妓同樣の、卑しい稼業の女ぢやから、さう云ふのに何の不思議もあるまいが。』

『ひとをあまり、侮辱するもんぢやないですよ。京子はそんな女ぢや、ないんだから。生活のために、女給になつて働いたとして、どうしてそれが卑しいんです！』

　啓三の聲は、震へてゐた。聞いてゐる京子は、啓三があまり昂奮して、病氣のからだにさはりでもしては困ると、はらはら

しながらも、自分のために激しく伯父に抗議を申込んでくれたことを、有難く思つた。女給こそしても、一度も客に媚びを賣つた覺えのない京子であつた。はたちのほんたうの處女の身で、啓三と結婚したのであつた。

『京子！』

不意に呼ばれて、京子ははツとしたあまりに、返辭をすることも出來なかつた。

『ゐないのか？』

『はい。……何御用でございますの？』

『ちよつとここへおいで！』

『はい。』

自分のことを、きこえよがしに、惡口をした伯父の前に出るのは、いまいましくもあつたが、病める夫の命令には從はないわけにいかなかつた。

枕の上で、啓三は、蒼ざめ顏に、眼をぎろぎろと光らしてゐた。

『ひどいことを云はれて、侮辱されたのを、聞いたらうね？』

『はい。』

『腹が立たんか？』

『でも、あまり昂奮なさると、お身體にさ

はりますわ。……あの、失禮でございますけれど、……』

と京子は伯父の方へ向くと、さすがに女のことで、あんなに侮辱されたことも、ぢつとおしこらへながら、微笑をすらうかべて、懇願するやうに云ふのであつた。

『何しろ病人のことで、ぢきに癇癪を起しますので、お氣にさはるやうなこともございませうけれど、御勘辨なすつて、今日のところはこれでお引取りくださるわけには、まゐりませんでせうか？』

『お前さんまでが、わしに追ひたてを食はすんぢやな！』

伯父はにがりきつて、じろりと京子を睨め

おろした。

『いいえ、さう云ふ譯ではございませんので、……ただ、……』

『ただも何もいらん。お前さんも不料簡な女ぢや。啓三の身の上を本當に思ひやるならばぢや、お前さんは犠牲になつて、自分から身をひくのが當然だとわしは思ふ。お前さんの

ために啓三は出世も出來ずにこのまま世に埋もれて、一生を棒に振らんならん仕儀になつとるんぢやからのう、そのところを分別して見なさるがよい。お前さんの進退如何によつて、啓三が浮びあがるか、或はこのまま沈んでしまふか、……第一、この病氣をどうするつもりぢやな？　早く手術をせんことには、手遅れになる。手遅れになると、啓三は死にますぞ。死んでしまうては、元も子もなうなるんぢや。』

『死んでも構はんと、先刻から云つてるぢやないですか！』

　啓三がいきりたつと、その尾について、京子も今は何者も恐れず、また少しも惡びれるところなく、

『いいえ、決して死なすやうなこと、いたしませんわ。どんなことをしても、きつともとのお身體にかへして御覽にいれますから、どうぞ御心配なさらずに、……』

　と云ひきつて、まともに伯父の顏に見いつた。

『ほほお！　えらい權幕ぢやのう！　しかしぢや、病氣を癒すには、金のいることを御存じかのう？』

『お金なんか、何でもありませんわ。』

　かうなつては、京子も必死であつた。自分の力で、きつと啓三を入院させ、立派に手術をうけさせて見せると、心に誓つた。

　數日前のこと、おひおひと質草も絕え、醫藥の料に窮して來さうなので、もう一度酒場に出て働きたいと、京子から云ひだしたのを、啓三は『それには及ばないよ、いよいよとなれば、ピアノを賣つてしまふから、……』と云つて、京子の申出に承諾を與へなかつたのであつた。

　ピアニストがピアノを賣拂つて、どうならう！　酒場で働きさへすれば、入院の費用ぐらゐきつと作られるのだもの、今度こそ說き伏せて、もう一度女給をしようと、健氣にも京子は決心をしたのであつた。

再び女給に

　銀座裏の酒場ブルー・スターに、ふたたび女給として、朗らかな笑顏と潑溂とした美しい姿とを現はした京子は、ぢきにまた以前とおなじ人氣を、一身にあつめることになつた。

『やあ、京ちやん、よかつたね、また出てくれて！』

『どうぞ宜しくおねがひしますわ。』

『こちらこそ、よろしくおねがひしますよ。何しろ、京ちやんのゐないブルー・スターなんて、灯の消えた銀座通みたいなもんだからなあ！』

『まあ！　お口のお上手なこと！』

『ほんたうですよ。』
『お禮申しあげますわ。』
　客の前では、何の苦勞もなささうに、いつも朗らかな笑ひを浮べてはゐても、京子はほとんど絶間なしに、病床にある啓三のことを、心にかけてゐると云つてもよかつた。
　あの日、伯父の歸つたあとで、もう一度酒場に勤めたいと京子が云ひだすと、啓三はピアノを賣拂つて入院料にするからと云つて、どうしても承知をしなかつた。
『またそんなことを、おつしやる！　ピアニストがピアノを賣つたりして、どうなさるお積り？』
『また買へば、いいぢやないか。』
『一遍賣つてしまつたら、今度はさうやすやすとは、買へやしませんわ。それよりも、あたしが働いた方が、どんなにいいか知れないのに。』
『酒場でなんか、もう働いてもらひたくないんだ。』
『どうしてでせう？　酒場がそんなにお嫌ひ？』
『嫌ひだよ。』
『あら、をかしい！　あたし、酒場に働いてゐた女よ。それに、先刻伯父さんに、あなた何とおつしやつて？』
『何を云つたね？』
『生活のために、酒場の女給になつて働くのが、何で卑いかつて、おつしやつたでせう？』
『云つたよ。』
『ぢや、ちつとも恥でも何でも、ないぢやありませんか。……あなたの入院料を稼ぐために、あたしが酒場の女給になつたつて。』
『それはさうだが、……』
『あたしを信用出來ないとでも、おつしやるの？』
『そんなことは、絶對にない。』
『ぢや、いいとおつしやつて頂戴。今日のうちにでもブルー・スターへ行つて、勤めさして下さいつて云へば、マスターは承諾してくれると思ふわ。うまい都合に行けば、入院料の前借ぐらゐ、出來ないともかぎらないと思ふの。そしたら、明日の日にも、入院が出來るぢやありませんか。一日のばしに延ばすうち、手遲れにでもなつては、それこそ大變ですわ。……ね、いいとおつしやつて頂戴ね！』
　さうまで云はれると、啓三もいなむわけには行かなかつた。病床にゐると、つい妄想がたくましくなつて、もしも京子がまた酒場に勤めるやうになつたら、以前の知人たちが寄つて來て、誘惑したり何かしたり、しないものでもないと考へると、

啓三は自然に不愉快になるのであつたが、京子にかぎつて決して間違ひはないと、絶對の信用を言明した以上は、今更女女しく、そんなことにこだはつてゐるのは、却つて京子を侮辱するものだと思ふやうにもなつた。少しの邪念もなく、ただただ啓三を一日も早く入院させたいと云ふ純情一點張の可憐な京子の心が思ひやられて、しまひには啓三は、涙ぐましくさへなつて來た。

かうして京子は、ふたたびブルー・スターに勤めることになつた。病人の看護や、家事の方は、巣鴨の京子の實家から母が來て、一切をとりしきつてくれた。

が、ブルー・スターでは、最近店内の大改造を行つたりしたため、マスターも目下いろいろと算段に苦心最中とのことで、まとまつた金額の前借は、當分出來さうにもなかつた。

或夜のことであつた。

京子は持番がなくて、奥の方のあきボックスに、ひとりぼんやり腰をおろしてゐた。

勤めてから、もう一週間はすぎてる

た。ブルー・スターと云ふ酒場は、銀座裏でも名の賣れた高級の酒場で、客種もよく、華族とか藝術家とか、銀行會社員にしても課長級の人達が多く、したがつて、女給の收入もよそとは比較にならぬほど多かつたが、それにしても、僅かの日數で、相當にまとまつた金額を貯へることは、容易ではなかつた。殊に京子は、その日その日の一家の生活費と、加へて病人の醫藥の料を負擔した上に、入院料手術料を稼ぎださなければならないのであつた。

何よりも心配なのは、かうして入院の日を延ばし延ばしてゐるうちに、萬が一にも手遅れになるやうなことがあつては、それこそとりかへしがつかないと云ふことであつた。

『京子さんが、また來てゐるんですつてね？』

考へごとに耽つてゐた京子の耳に、ふと自分の名を呼ぶのが聞えて來た。京子は誰かと思ひながら、立つて行つた。

『まあ！ 原さん！』

京子はぽつと顏の赧らむのを覺えた。嘗て京子に對して、眞劍に求婚したことのある原雄二郎であつた。

その時はすでに、京子と啓三とは、互に心を許しあつたのちのことであつた。それをきいて原は非常に落膽したが、京子のことは綺麗に思ひあきらめて、むしろ心から、京子の將來の幸福を願つたのであつた。

『どうしてまた、働くやうなことになつたんです？』

奥のボックスに並んで席をしめると、原は何より先に質問した。

『病氣になつたもんですから、……』
と云つて、京子は寂しく笑つた。
『誰がです？　……藤代さんが？』
『ええ、盲腸炎ですの。』
『それはいけませんね。手術をしたんですか？』
『いいえ、まだですの。まだ入院もしないんですもの。』
『そんなことで、いいんですか？』
『よくはないんでせうけれど、……』
自分に求婚をしたことのある原に、今の生活の苦しい家計を見すかされるのは、京子にはつらかつたが、その頃からよく親切にいたはつてくれた優しい心だての人だと思ふと、何も見えを張つて、かくしだてをすることはないと云ふ氣もした。
『失禮ですけれど、金の問題ぢやないですか？』
『ええ、さうですの。』
『纏つた金がないと、入院が出來ないんですね？』
『小さい病院ならなんですけれど、信用のおけるやうな病院ですと、……何しろ外科の手術なもんで、しつかりした病院へ入れたいと思ふもんですから、……』
『さうですね。』
原はしばらく考へてから、決心したやうにきりだした。
『その金を僕に融通させてくれませんか？』
『あら、いいんですのよ。もう一週間もしたら、大概出來さうなんですから。』
『一週間なんて、そんな悠長なことを、云つてゐられる場合ぢやないんでせう。藤代さんの命にかかはる問題ぢやありませんか！』
『でも、心苦しいんですもの。』
『心苦しいことなんか、あるもんですか。……藤代さんは、僕のことを御存じですか？』
『ええ、知つてゐますわ。』
『あなたに結婚を申込んだことも？』
『ええ。』
『それぢや、僕から金を融通してもらつたと聞いたら、いい氣持はしないかも知れませんね。……かうしませう。マスターから融通してもらつたことに、……』
『でも、ここへ來るとすぐ、マスターにお願ひしたんですけれど、今は融通出來ないつて云ふんですの。そのことも、あたしから云つてあるものですから、――』
『構ふもんですか。その時は出來なくつても、今なら出來ることにして、……ね、マスターに借りたと云つて、明日にでもすぐ入院の手續をなさいよ。……誤解しちやいけませんよ。僕に

はちつとも、野心なんかないんですから。ただ僕は、あなたの不幸を默つて見てはゐられないんです。それだけなんです。』

かう云ひながら、原は内ポケットに手を入れて暫く探つてゐたが、大型の紙幣を三枚ばかり、ちひさく折りたたんで、京子のふところに押込んでやつた。

『濟みません！』

京子は泣くやうな聲でかすかに云つたまま、ぢつとうなだれたきりであつた。京子の膝の上に、涙があとからあとへとこぼれ落ちた。

『こんなことぐらゐ、なんでもないですよ。金のことでなら、いつでも御相談にのつてあげますから、……』

原雄二郎は或る銀行經營者の次男であつた。まだ親がかりの形で、その銀行の一員として働いてはゐても、既に相當の財産も分與され、遠からず分家する身の上でもあつた。

貞操の疑惑

『啓三さん、お留守居をお願ひします。錢湯へ行つてまゐりますから。』

『ええ、どうぞ。』

勝手元の方から云ふ京子の母に、啓三は氣輕に答へた。

縁側にもちだした籐椅子に、樂樂とのけぞりながら、啓三は吸ひかけの卷煙草の煙を、たのしみつづけてゐるのであつた。

入院する金もなく、病床に呻吟してゐたあの頃のことを思へば、夢のやうであつた。入院して、すぐ手術をうけ、その後の經過も順調にすすみ、やがて退院となり、現在ではすつかり啓三は昔の健康をとりもどしてゐた。

思へばこれも、みな京子の働きの賜であつた。京子に對しては、どんなに感謝しても、感謝しきれないと思つた。

『よし！　今度は僕が働く番だ！』

啓三は籐椅子から立つと、獨語を云ひながら、吸ひのこりの卷煙草を元氣よく庭に投げつけた。四月の學年度がはりから、啓三は或る私立音樂學校のピアノ科を受持つことになつてゐるのであつた。そのうちには、内弟子も殖える筈であつた。

京子はまだブルー・スターに勤めてゐた。實は原雄二郎に融通してもらつた金だが、啓三にはマスターからと云つてある、その金も皆濟しなければならないし、とにかく三月一杯は働くと云ふことになつてゐるのであつた。

今日は、京子は早番で、晝を過ぎて間もなく家を出て行つた。

一人きりになつた啓三は、退屈しのぎに、座敷のなかをぐる

ぐるとまはり歩いてゐた。座敷の隅には、京子の小机があつた。ふと啓三は、整理箱の上に載つてゐる家計簿に眼をつけ、微笑しながらとりあげた途端に、下から現れた白い吸取紙に、ありありと左文字で原雄二郎様とインキの吸ひとられてあるのを讀みとつた。

『原雄二郎？』

何か怖しいものに直面したやうに、啓三は眼をぐつとむいて空間を睨みながら、暫く考へてゐたが、やがてのことにうめきだした。

――わかつた！　京子に結婚を申込んだことのある男だ！　親父が銀行家で、……

啓三は憑物でもしたやうな、狂はしい手つきで、整理箱から机の抽出から、何から何まで調べまくつた。怪しいものは、何も發見されなかつた。ただ吸取紙に、所番地のところはかすれて、よくは讀めなかつたが、宛名だけははつきり原雄二郎様と讀める點から推して、たしかに手紙を出したと云ふことが解るだけであつた。

――原雄二郎に何の用事があるのだ？　手紙を出すほどの用があつたら、なぜ僕に云はないんだ？

いつたん疑惑にとらはれると、啓三はいらいらして、一時もぢつとしてはゐられない氣がして來た。とても京子が歸つて來るまで、待つてはゐられない氣持であつた。

京子の母が錢湯から歸つて來ると、啓三は散歩に行くと云つて、驛前の自働電話へ、郊外の路をまるで驅けるやうにして行つた。

『もしもし、ブルー・スターですか？』

『さうでございます。』――京子の聲ではなかつた。

『京子がゐましたら、どうぞ、……』

『京子さんは、まだいらつしやいませんわ。』

『え？　……今日は早番ぢやなかつたですか？』

『いいえ、京子さんは、今日は遲番ですわ。もう一時間ばかりたたないと、いらつしやいません。』

電話口で啓三は、下唇を嚙みながらうなつた。

『何か御用でしたら、おききいたしておきませうか？』

『いや、いいです。……あ、もしもし、京子が來たら、急の用事が出來たから、今日は休ましてもらつて、すぐ家へ歸るやうに云つて下さい。』

『あら、お宅からでしたの？　失禮いたしました。では、いらしたら、すぐお歸りになるやうに、きつとお傳へいたしますわ。』

『どうぞお願ひします。』

自働電話を出ると、啓三は無暗矢鱈に、街を歩きまはつた。しまひには人家まばらな林の方まで、どこと云ふあてもなく、ただぐんぐんと歩いて行つた。

五時に京子がブルー・スターに行くとして、電話の言傳をきいてすぐに歸つて來るとすれば、六時にはもう歸りついてゐる筈と、その時刻をはかつて、啓三は夕闇の路を家に戻つて來たが、まだ京子は歸つてゐなかつた。七時になつても、まだ歸つては來なかつた。啓三は晩飯も食べずに、ただもうゐたたまらない思ひで、洋間にはひると、がんがんピアノを叩きつづけるのであつた。

小一時間ばかりたつて、洋間の扉を開いて笑顏を見せたのは京子であつた。何か機嫌が惡さうだと、歸る匆々京子は母に告げられたが、作曲を思ひたつた時など、よくさう云ふことのあることを京子は知つてゐるので、さほど氣にもかけなかつた。

啓三は京子の顏を見るや、ピアノをやめて、すつくと立ちあがつた。

『どこへ行つて來た？』

『あら、お店ですわ。行つたんですけれど、どうしたのか頭が痛んでならないの。それで歸つて來たのよ。』

『嘘をつけ！』

『嘘なんか、……』

『しらをきるな！ 今日はお前は遲番の筈ぢやないか。それを早番と云つて家を出て行つた。これが第一の嘘だ。第二の嘘はお前はお店へ行つたと云ふが、實際は行きはしないんだ。行つたなら、もつと早く歸つて來なければならない筈だ。』

『どうしてでせう？』

『ははは！ 俺が電話をかけておいたんだ。急の用事が出來たから、お前が來たらすぐに家へ歸るやうに、傳へてくれと頼んでおいたんだ。その言傳をお前は聞かなかつたんだ。なぜなら、お前は今夜ブルー・スターへ行かなかつたからさ。これでもお前は、嘘をつかないと云ふのか？ ……もつとお前によく解るやうに、見せてやるものがある！』

かう云ふと、啓三は京子の腕をつかんで、ぐんぐん座敷の方へひつぱつて行つて、小机の前にひきすゑた。

『これを見ろ！』

整理箱から吸取紙をとつて、京子の眼の前につきつけた。

『原雄二郎に何の用があつて、手紙を出したんだ？』

問ひ詰められて、京子も今は絶體絶命であつた。あの時の金は、マスターから借りたのではなく、原から借りたのだと、正

直に告白した。

『今になつて、そんなことを云つても、もう遲い。なぜその時、すぐに云はなかつた？』

『あなたの氣持を惡くしてはいけないと思つて、……』

『貴樣に疚しいところがあるからだ。

それで貴樣は、正直のことが云へなかつたんだ。』

『變なことをおつしやるのね。疚しいことなんか、ちつともありませんわ。』

『疚しくないなら、なぜ今までかくしてゐたか？　俺に感づかれなかつたら、いつまでも貴樣は默つてゐようと思つてゐたんだ。さ！　正直に云へ！　今夜も貴樣は、原と會つたんだらう？　今までに何度も、店を休んでは原と會つてゐたに違ひないんだ！』

『いいえ、それこそ嘘ですわ。原さんは此頃ちつともお店へいらつしやらないので、お金を返すことも出來ないし、それでお手紙をあげたのよ。そしたら、昨日お電話で、あのお金は返してもらはなくてもいゝとおつしやるの。そんなことは嫌ですから、是非おめにかかつて、お返

ししたいと云ふと、ぢや、とにかく會ひませうとおつしやるんで、實は今日、四時すぎに、銀座の喫茶店でお會ひしましたの。』

『遲番なのに、早番だと嘘をついて、出て行つたんだな！』

『御免なさいね。それだけは、あたし惡かつたわ。』

『何が、それだけなものか！ どうして今夜、店を休んだんだ？ 原とどこへ行つた？』

『どこへも行きやしませんわ。お金を返して、すぐにお店へ行かうと思つたら、原さんは、折角の機會だから、藤代さんの全快祝ひに、一緒に晩飯をつきあつてくれとおつしやるんで、いやとも云へませんし、おつきあひすると、遲くなつたのでお店は休むことにして、……』

『晩飯を食べるのに、何時間かかるか！ いくら嘘を云つても駄目だ！ 俺の全快祝ひだと？ ふふん、いい加減なことを云へ！ 貴樣達二人で、俺を笑ひものにしながら、面白をかしく酒を飲んで、その揚句に何をしたか解りやしない！ よくも貴樣は、俺を踏みつけにしたな！』

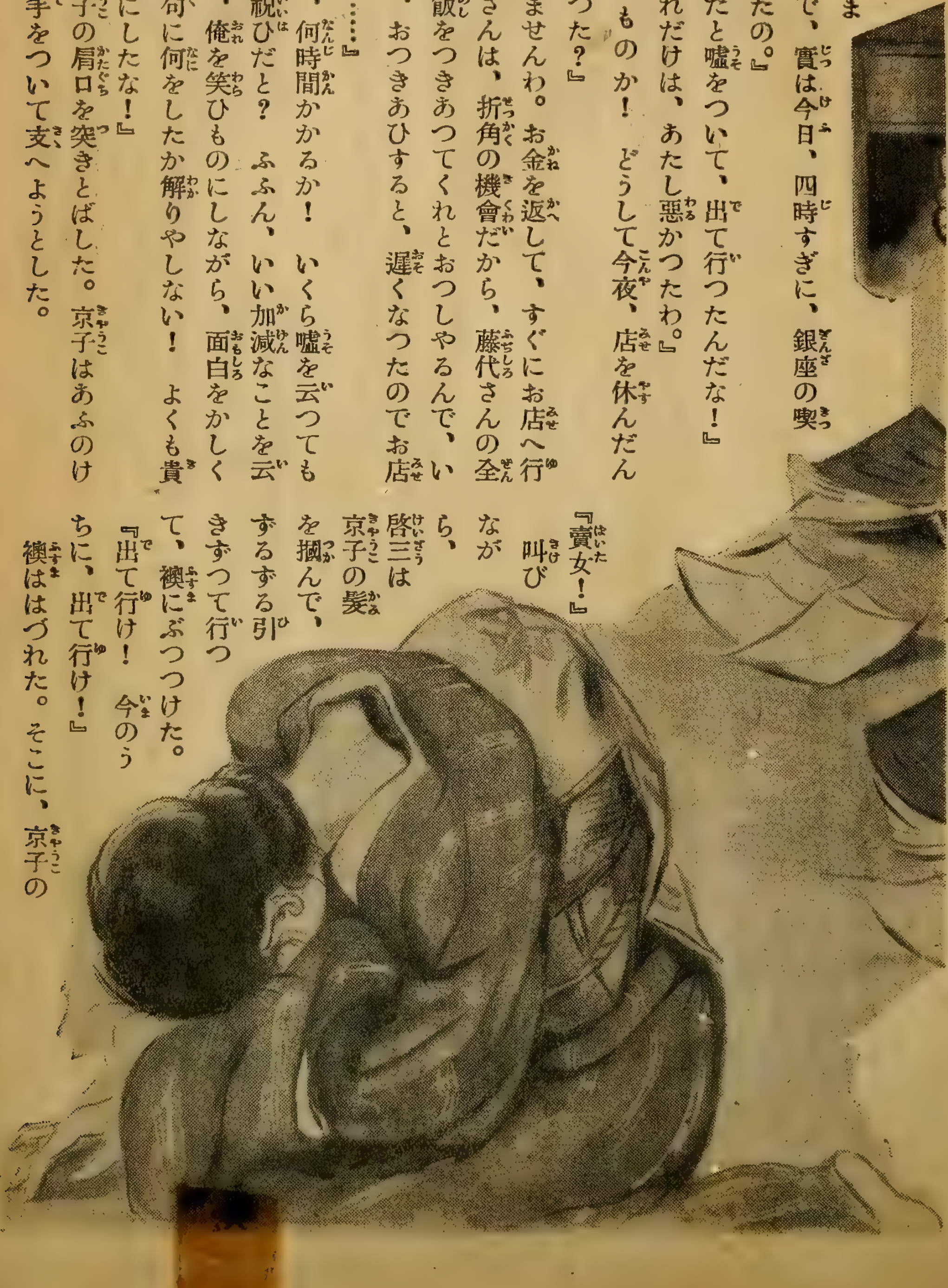
啓三はいきなり京子の肩口を突きとばした。京子はあふのけに倒れかかるのを、手をついて支へようとした。

『賣女！』

叫びながら、啓三は京子の髪を掴んで、ずるずる引きずつて行つて、襖にぶつけた。

『出て行け！ 今のうちに、出て行け！』

襖ははづれた。そこに、京子の



母はおろおろしながら、立つてゐた。
『京子を連れて、家へ歸つて下さい！　今夜のうちに、さつさと！』
『そんなことを、おつしやらずに、わたくしからもお詫びいたしますですから、……』
京子の母は、泣き倒れてゐる京子のそばに坐つて、啓三に何度も頭をさげた。
『どうぞ、あの、出て行けなんぞとおつしやらずに、……これも、たゞの身體ではないやうでございますから、……』
『何です、たゞの身體でないとは？』
『妊娠のやうでございまして、……』
『何ッ！　妊娠だと？　……ははは、ざまあ見ろ！　その始末は、原につけてもらつたらいい！』
『いいえ、違ひます、違ひます！』
京子は起きなほりざまに、躍起となつて啓三の脛にしがみついた。
『今更ぐづぐづ云ふな！　みつともないぞ！　俺の寛大な處置を有難いと思つて、おとなしく出て行け！　……うるさいッ！』
一喝すると、啓三は京子を足蹴にして、さつさと洋間へひつこんでしまつた。

再會

十年は過ぎてゐた。
春の夜の銀座は、柳の新芽に街燈の青い灯が映え、散歩の人達に賑はつてゐた。
その人波のなかを、ゆるゆるとわけて話しながら行くのは、新歸朝のピアニスト藤代啓三と、畫家の今井讓吉であつた。
藤代啓三は家庭に破綻を來たすと、すぐに洋行を思ひたち、伯父に詫びを入れて、そのことを話した。伯父は快く承諾してくれた。勿論同時に、伯父の口から結婚の話は出たが、啓三は歸つてからと云ふことにして、絶對にその話は避けた。結婚生活に破れたばかりの啓三は、女のことなど考へて見る氣にもなれなかつた。ただ音樂があるばかりであつた。
かうして洋行すると、獨逸や佛蘭西にとどまること十年、ピアノの技を磨いて最近歸朝したばかりの啓三であつた。
連れの今井讓吉とは、巴里滯在中に知合になつた仲であつた。讓吉は去年の秋、啓三より一足先に歸つてゐた。
『どうだ、夜の銀座風景も、ずゐぶん變つたらう？』
『變つたねえ。』

『僕も去年歸つて來て、銀座のネオン・ライトには、ちよつと驚いたよ。』
『巴里どころぢや、ないかも知れない。殊に僕と來ては、震災前に向ふへ行つたんだから、建築でも何でも、まるで昔の面影はないんで、また外國へでも來たやうな氣がする。』
『なるほど、さうだらう。……ぢや一つ、日本的のところへ案内しようか？』
『どこへ？』
『まあ默つてついて來るさ。これでも銀座にかけては、君よりも一日の長はある。』
二人は話しながら、裏通の方へ曲つて行つた。やがて讓吉は、とある酒場の前に啓三をみちびいた。酒場の軒には、靑色硝子に白抜きで『孔雀』と讀まれる長方形の軒燈が出てゐた。
『ここが君の根城？』
『いや、違ふ。根城どころか、こなひだ友達に連れられて、たつた一度來たきりなんだが、ちよつと感じがいいんだよ。マダムがなかなか綺麗でね。』
云ひながら讓吉は先にたつて、はひつて行つた。啓三もあとにつづいた。
こぢんまりとして、おちつきのある酒場であつた。そちこちのボックスに客がゐて、女給を相手に、靜かに飮んだり話したりしてゐるきりで、少しも騷がしさが感ぜられなかつた。レコードもジヤズではなく、酒場などには珍らしいシヨパンのノクターンをやつてゐた。
『マダムはゐない？』
ボックスにをさまると、すぐに讓吉は女給に訊いた。
『いま參りますわ。』
女給が註文をきいて、スタンドの方へ行くのといれ違ひに、マダムがやつて來た。
『いらつしやいまし。先夜は失禮いたしました。』
微笑をたたへて、讓吉にしとやかに挨拶をするマダムの橫顏を一眼見るなり、啓三はおやツ！　と思つた。
啓三に挨拶しようと、向きを換へたマダムの顏から、たちまち微笑は消えて行つた。
『僕の友人の、……』
紹介しようとして、讓吉はかう云ひかけたが、二人のただならぬ樣子に、あつけにとられた。
『なあんだ！　君の知つてゐる人か？』
『知つてゐると云へば、知つてゐる、知らないと云へば、知らない、……』

啓三は苦笑ひで頬をこはばらしながら、吐きだすやうに云つたが、
『出よう！』
かう云つて立ちあがつた。
『あの、少少お待ち下さいまし！』
と、手で抑へるやうにして云ふマダムを押しのけながら、啓三ははたには眼もくれずに出て行つた。
『おい、待てよ！　僕も一緒に出るから。』
『いいえ、あなただけでも、……』
譲吉とマダムがかう云つてゐるのを、出口のところで啓三は聞き流して、ずんずん表通へと足を急がした。
――ふうん、どうせそんなことだらうと思つた。女給あがりは酒場のマダム。そんなところが落ちだらう。ことによると、

あいつの妾にでもなつてゐるのかも知れない。……が、久しく忘れるともなく忘れてゐた京子に、偶然再會して、啓三は昔の古疵がうづきだすやうな、いやな氣持にさせられた。洋行間際に伯父から話のあつた縁談は、先方が啓三の歸りを待ちかねて、他に縁づいてしまつたので、それなり鳧はついたが、歸朝すると早速また、伯父から新しい縁談が持ちだされたのであつた。

その矢先に、啓三は京子と顔をあはしたのであつた。十年前、京子に裏切られた不快な思ひ出が、今更のやうに啓三の胸によみがへつて、苦汁でも呑みくだすやうな氣持であつた。

——あんな不貞の女のことなんか、さつぱりと忘れてしまはう。いつそのこと、伯父の方の縁談を承諾して、結婚してしまふか？……

とは思つても、今の先會つた京子の顔が、眼にちらついて離れなかつた。

その夜、阿佐ケ谷の家に、啓三が泥醉の身を自動車で運んだのは、夜なかすぎであつた。

悶ゆる心

『ことによつたら、君が間違つてゐるんぢやないかと思ふが、……』

啓三の顔をしげしげと見ながら、かう云つたのは、畫家の今井讓吉であつた。

啓三の家の、應接間であつた。

『もしも君の間違ひだつたら、大變な問題だ。』

『いや、決して間違ひぢやない。どうしてまた、君はそんなことを云ふんだ？　あの女のことなら、もう聞きたくないよ。』

『一通はしかし、云はずにはゐられない。こなひだの夜、君が

孔雀をひとりで出て行つてしまつてから、僕はマダムに、その昔のことをすつかり聞かされたんだ。君の結婚失敗談は、巴里で君から聞いて知つてゐたんだが、孔雀のマダムが、その昔の君の細君とは思ひもよらなかつたんで、これは奇遇だと思つたね。』

『不愉快な奇遇さ。』

『いや、僕はかへつて好奇心を起したよ。マダムが聞いてくれと云ふんで、僕は喜んで殘らず話をきいてやつた。何もかも、正直に話をしてくれたよ。あの酒場をやるについて、パトロンのあつた話までも。』

『そんなことだらうと思つてゐた。どうせ誰かの、二號か三號かだらう。』

『原雄二郎と云ふ人が、パトロンださうだ。』

『おい、もうよせよ。そこまで云ふ必要はないぢやないか。』

啓三はにがりきつた。

『我慢してきけよ。……マダムの云ふところによると、その原と云ふ人は、單なる出資者と云ふに過ぎないんだ。』

『それは噓だよ。あの女はとても噓つきなんだから、正直にきいてゐたら、どこまで馬鹿にされるか解つたものではない。第一、姙娠までしたんだからね、あの女は、……原との間で。』

『その話はあとまはしにしよう。默つてきけ。とにかく原と云ふ人は、マダムと君と不緣になつた原因が自分自身にあると云ふことを知つて、非常に氣の毒に思つて、自立の出來る方法をとつてやつたんだ。そして、自分でも、すぐに結婚をしたんだね。もし原と云ふ人の子供をマダムが產むのだとしたら、何も他の女と急いで結婚する必要もなからうと思ふんだ。』

『子供が出來たから、女を捨てると云ふ手もある。』

『解釋はいろいろつく。しかしだ、その場合、マダムは原と云ふ人の結婚を、そねみもどうもしなかつたんだ。』

『表向きにそねめば、あの女が原と不義をして、僕から離緣になつたことが、はつきり世間に知れるからだよ。世間の眼をごまかして、あまんじて原の二號になつて暮らさうと云ふ、卑しい下司根性さ。』

『ほかのことには、隨分君は物解りがいいんだが、どうもさう思ひこんでしまつては、話がしにくい。素直な氣持できいてくれよ。一度家の方へ遊びに來てくれと、マダムが云ふんで、實は昨日、大井のマダムの家へ行つたんだ。小さな住宅だが、ピアノだけは實に素晴らしいのがある。』

『ふん、自分で彈けもしないピアノを、いくら麗々しく飾つたつて何になる！』

『ところが彈き手がゐるんだよ。』

啓三の眼は、急に光つた。

『それが、とても可愛らしい女の子なんだ。十歳になるさうだね、名前は妙子と云つて、……おいおい、變な眼で僕を見るぢやないか！　なんだ！　そのこはい眼つきは！』

『いや、なんでもない。……はははは！　あまりあの女が芝居をうちすぎるんで、惘れたんだ。』

『どうして？』

『結婚當時、もし將來赤ん坊が出來たら、なんて名前をつけようかと、冗談半分に話しあつたことがあるんだ。男の子だつたら、……なんであつたか忘れたが、女の子だつたら、妙子と云ふ名前にしようと、その時きめたんだ。』

『なるほど、それで、君の子でもないのに妙子とつけたりして、不愉快だと云ふんだね。ところがその女の子に、お父さんはつて訊くと、ちやうどピアノの上の壁に貼つてある、引伸ばしの大きな寫眞を指して見せるんだ。それが、どうだ、君の若い時の寫眞さ。どこにゐるのつて訊くと、生れる前に死んだつて云ふんだ。……』

『おい、もう澤山だ！　よしてくれ！　馬鹿馬鹿しいぢやないか！　よくも、あの女の奴、たくらみにたくらんだものだ。自分で惡いことをしておきながら、離縁をされたのが、どうして不服なんだ！』

『しかし、君は、その子を君の子でないと、斷言することも出來ないぢやないか？』

『僕の子であらうと、なからうと不義をはたらいた女の腹に出來たものを、僕は知りやしないよ。そんな子供のことなんか、僕のあづかり知つたことぢやない。』

『實際に君の血をひいた子であつてもか？』

『勿論のことさ。……もうその話はやめよう。それより銀座へでも出ようぢやないか。着換へて來るから、ちよつと待つてくれたまへ。』

『僕は今夜は、用事があるんだが、……』

『用事なんか、あとまはしでいい。行かう。』

さも慌しさうに、啓三は應接間を出て行つた。

春の夕暮は、すでに窓邊に迫つてゐた。しばらくして洋服に着換へて來た啓三の顏は、赤く、酒氣を帶びてゐた。

『もうやつて來たのか？』

『ううん、たいして。』

啓三は笑つて答へたが、ウイスキーの香がつよく讓吉の鼻をうつた。

『近いうちに、僕は結婚しようと思ふんだ。』
玄關の方へ出ながら、啓三はさも朗らかさうな、浮き浮きとした調子で云つた。
『さうか、それもいいだらう。』
讓吉の心は重苦しかつた。
表に出て、門を少しはなれたところで、夕闇のなかに啓三は立ちどまつた。
『どうした？　何か忘れ物？』
不審がる讓吉の顏に、啓三はぢつと見入つたが、いきなり彼の兩肩をがつしりと掴んだ。
『君に賴みがあるが、きいてくれるか？』
『どんな賴みなんだ？』
『あの女のところから、僕の寫眞をとりかへして來てくれないか？　そして、その女の子に、この寫眞の人は、父親ぢやないんだと、君からよく云ひきかしてくれ。僕はたまらないんだ。その子が、僕の寫眞を見て、父親と思ひこんだりしてゐるのは、聞くさへ不愉快だ。そんな女の子に、僕が死んでゐるのだと信じてゐたりされては、當人の僕はたまらないぢやないか。』
『君の氣持はよく解る。しかしだ、それは先方の自由で、どうにもならないのぢやないか。』
『先方の自由かも知れないが、僕の方では苦しいばかりだ。憎いのはあの女だよ。僕をこんなに苦しめるなんて！……よし、君がいやなら、僕が直接行つてやる。今から早速、あの女のところへ案內してくれないか？』
『君が行くのか？』
『行くよ。』
『それぢや一緒に行つてやらう。』
讓吉が今夜用事があると云つたのは、京子の家へ行くことであつた。今日啓三と會談した模樣を、知らせに行くと約束がしてあるのであつた。ちやうど日曜日であつた。每週日曜日には、京子は店に出ないことにしてあつた。
二人は省線の驛へと急いだ。

才能の誇り

『わたしも、びつくりいたしましたわ。ひよいと見ると、あの人なんですもの。』
京子はあの夜のことを思ひ浮べながら、客に云つた。
『さうでせうとも。想像がつきますね。お互に、どんな氣持だつたでせう？』

『それはもう、あの人は憎い女としか思つてゐませんわ。わたしだと解ると、すぐに立つて、出て行つたんですもの。』

『どこまでも疑惑を持つてゐられるのですね。……いよいよ僕の立場はつらいですな。』

かう云つて苦笑したのは、原雄二郎であつた。

『疑ひをお解きになつては、くださらないんでせうかしら？』

原の細君もその尾について、心配さうに云ふのであつた。

『今井さんとおつしやるお方が、今夜いらつしやる筈ですの。お二人に來て戴いたのも、實は今井さんにお近づきになつていただきたいと思つたからですのよ。その方のお話を伺はないと、何とも申上げられませんけれども、大概は望がないかと思はれますわ。いつたん思ひこんだら、なかなかきかない氣性の人なんですから。』

『酒場の資本も僕が出したんだと、お聞きになつたら、ますます疑惑を深めるでせうし、世の中のことは、なかなかむづかしい。』

『いいえ、構ひませんの。わたしには別段、あの人ともとどほりにならうなんぞと云ふ野心もありませんし、ただ、あれのことで、……』

かう云ひながら、京子は、ピアノの前に向ふ向きになつて、譜を熱心に讀んでゐる妙子を眼顔で示した。

『あんなによく、似てゐらつしやるのにねえ！』

原の細君はかう云つて、ピアノの上の壁にかけてある啓三の寫眞を見あげた。

『まあどうにかなることでせう。』

と京子は云つて、苦しい胸のなかを笑ひに紛らしながら、椅子から立つて妙子のうしろへ寄つて行つた。

『お客様に、何か彈いておきかせになつたら？』

『これ、とてもむづかしいんですもの。』

『なんですの？』

『メンデルスゾーンの「ヴェニスのゴンドラの唄」と云ふの。やはり、「無言歌」のうちの一つよ。この前の「狩獵の歌」の方が、ずつと樂に彈けるわ。』

云ひながら妙子は、譜をピアノにのせて、鍵をうちはじめた。月のない夜のヴェニスの運河を、靜かに漕いで行くゴンドラの唄にふさはしい、物靜かな曲であつた。

まだ十歳の少女ではあつたが、五歳の頃からピアノを修業しはじめた妙子であつた。耳がすぐれていい上に、子供ながらもその道が好きと見え、熱心に練習を積むので、上達の早いのには先生も驚嘆するばかりであつた。

音樂の素質に惠まれてゐるらしい妙子を見て、母の京子は涙ぐましいほどの誇りを感じたのであつた。今は何もいらない。ただこの子を立派なピアニストに仕立てあげたいと、そればかりを念頭において、一流のピアニストの教をうけさせ、ここまでに育てて來たのであつた。

妙子は『ヴエニスのゴンドラの唄』を、途中まで彈いてはつかへ、彈いてはつかへ、何度も何度もはじめからやりなほしてゐた。

その時女中が、客の來たことを告げに來た。

『あ、いらした。……今井さんでせう?』

『はい。今井さんと、もうお一人、藤代さんとおつしやる方が、……』

『藤代さん?』

京子の胸は、早鐘をうつやうであつた。

原も、原の細君も、眼をそばだてた。妙子だけは、相變らず熱心に、ピアノを彈いてゐた。

『おとほし申して、……』

京子は女中にかう命じてから、ぢつと氣をおちつけて椅子から立ちあがつた。

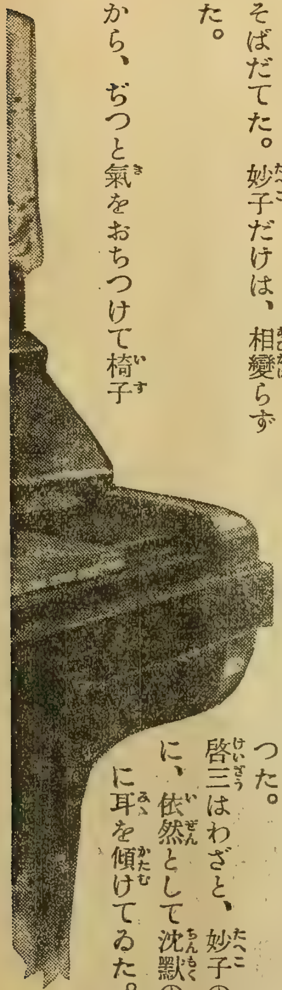
原夫妻もテーブルのまはりから退いて、壁際の長椅子に腰をおろした。

先にはひつて來たのは、藤代啓三であつた。今井讓吉があとにつづいた。

啓三は應接間にはひるや、そこに立つ京子と、ぢつと顏を見あはした。啓三は挨拶もしなかつた。京子も挨拶をしなかつた。

その次に啓三は、壁際の長椅子にかけてゐる原に視線をうつした。啓三の眼は、一瞬間ぐつと見開かれたやうであつた。

啓三の眉根が急にしかめられた。それは、すぐになごやかに解かれた。啓三は、ほんたうは廊下を來る時から、ピアノの音にばかり、氣をとられてゐたのであつた。まだ京子の顏も、原の顏も、はつきりと見たわけではなかつた。啓三の眉根のしかめられたのは、妙子が彈きぞこなひをしたからであつた。その、しかめられた眉根が、ぢきに解けたのは、妙子が自分の彈きぞこなひにすぐ氣がついて、また最初から彈きなほしたからであつた。



啓三はわざと、妙子の方へは眼をやらずに、依然として沈默のまま、ピアノの音に耳を傾けてゐた。誰一人、口をきくものもなかつた。

不意に啓三は、づ

かづかとピアノの方へ歩いて行つて、ものをも云はずに、うしろから妙子の小さな身體を抱いて、腰掛からおろすと、自分はそのあとへ掛けて、靜かに『ヴェニスのゴンドラの唄』を彈きはじめた。妙子は最初あつけにとられたが、たとへ見も知らぬ人と

は云へ、自分が彈き惱んでゐる曲を彈いてくれるのを見ると、すぐ熱心に、鍵の上を渡る手の動きを見まもるのであつた。啓三が來てからも、二度も妙子が彈きぞこなひをしたところへ來ると、啓三は注意をうながすやうに、はじめて妙子の方へ顏をねぢまげながら、眼の動きで、解つたかと訊ねるやうにした。敏感な少女は、すぐにその意を汲んで、大きくうなづきかへした。啓三の脣には微笑がうかんだ。

そこのところを何遍もくりかへして彈いて見せてから、やがて啓三は全曲を彈きをはつた。今度は妙子が、ふたたびピアノに向ふことになつた。すつかり會得をしたと見えて、妙子は完全に彈きをはることが出來た。

『よろしい！……何か別のを彈いて御覽。』

『何にしませう？「狩獵の歌」は？』

『結構。』

妙子は早速彈きはじめた。『狩獵の歌』は『ヴェニスのゴンドラの唄』の靜けさとはかはつて、輝かしい、そして終始狩獵の昂奮にをののくやうな、調子の早い曲であつた。妙子のまだのびきらない小さな手は、絕えず、めまぐるしく鍵盤の上を躍つて、しかも一つとして彈き違ひはなく、その上に曲の意味を正確に理解してゐるのには、啓三も驚かされてしまつた。こんな少女が、それほどの樂才を持つてゐようとは！……まさに驚異であつた。同時にまた、音樂にたづさはる啓三にとつて、絕大の歡喜でもあり、誇りでもあつた。

妙子は完全に彈きをはつた。

『素敵！　素敵！』

心からの歡び聲で讚めながら、思はずも啓三は拍手をした。

妙子はいくらか、はにかみながらも、にこにこして腰掛から降りると、啓三の前にぴよこんとお辭儀をした。

お辭儀をして、顏をあげた妙子は、今更のやうにしげしげと、啓三を見あげた。それからすぐに、壁にかかつてある大きな寫眞の肖像と見くらべた。

啓三もその寫眞像に見入つた。ピアノを前にして、正面に振りむいてゐる自分自身の半身像であつた。

『あれは誰？』

微笑しながら、啓三は妙子に問ひかけた。

『お父さまですの。』

『今どこにゐるの？』

『もうとうに死んでしまつたの。』

『お父さんはピアニスト？』

『え、さうなの。だから、お母さまは、妙子をピアニストにす

ゐんですつて。』
『お父さんと、この小父さんと、似てゐると思はない？』
『似てゐると思ふわ。でも、すこし年をとつてゐるやうだけれど、……』
はじめて笑聲が、人人の口から洩れた。京子は笑顔でゐながら、しきりにハンケチで涙を拭いてゐた。この十年間、誰をも恨まずに沈默のうちにこらへて來た心勞が、やつと報いられるやうな氣がした。原の細君も泣いてゐた。原は眼ばかりぱちぱちさせてゐた。畫家の今井は、横を向いてせはしく鼻をすすりあげた。
『あの寫眞のお父さんと、この小父さんと、おなじ人間だつたらどうする？』
『でも、をかしいわ。お父さまは死んでしまつたんですもの。』
『誰がさう云つたの？』
『お母さまが。』
『それぢや、お母さんに訊いて御覽。お父さんは本當に死んだのかどうか、もう一度はつきり教へて下さいつて。』
『ええ、訊いて見るわ。……ね、お母さま、妙子のお父さまは、死んでしまつたんでせう？』
京子は、すつかりハンケチで眼を蔽ひながら、
『いいえ、違ひます。そこにゐらつしやるお方が、妙子さんのお父さまなのよ。』
かう云ふと、京子は立つてゐる氣力もなく、椅子に腰をかけて、むせび泣くばかりであつた。
妙子はびつくりしたやうな眼で、啓三の顏を見あげた。
『お母さんの云つたとほりなんだよ。お父さんは、妙子の生れる前に、外國へ行つて、やつと今歸つて來たばかりなんだ。解つた？』
妙子はうなづいた。
啓三は妙子の肩を抱きながら、テーブルのそばに寄り進んだ。
『あなたは原さんでしたね？　僕の醜い誤解を、遲ればせながらお詫びします。命の恩人とも云はるべ

はい病の方へ耳よりな話

肺病、ロクマク、肺尖カタルでお悩みの方はお出下さい、病床三年苦しき體驗から不思議な特殊藥を發見し短期に元の體になりました、再生の喜びを頒つため以來幾多の同病を救つ居ります、同病お困りの方はいろ／＼迷はづお手紙下さい、私の治つた實驗談や特殊療法を無料で親切にお教へ致します・

東京市瀧野川區西ケ原町五五〇ノ二　牧田榮三郎

きあなたに、疑惑をかけるとは、誠に申譯のない次第です。』
『いや、どうぞさう改まらずに。誤解されるにはされるだけの缺點が、こちらにもあるのですから。』
『さうおつしやられると、却つて痛みいります。この十年間、京子がどれほどお世話になつたことか、……いづれそのことは、こまごまとお話も伺ひませう。……それから、今井君！』
呼ばれて讓吉は、まだ眼をうるませながら、にこにこ顔で寄つて來た。
『君にも感謝するよ。君がゐなかつたら、かうはならなかつたかも知れない。しかし、まさかこれが、君が段取をつけてうつた芝居ぢやあるまいね。』
諧謔的に啓三が云ふと、讓吉は頭を掻いて、
『いやあ！　こんな大詰が僕の頭で考へられるくらゐなら、僕はとうに脚本作家になつてゐるよ。そんなに冷かすもんではない。』
この會話で、一座には急に笑ひの聲が爆發し、今までのしんみりした空氣も破れて、陽氣になつて來た。
『それでは今井君、巴里以來、いつも君にはうつてつけの役目を、やつてもらはうか？』
『あ、解つたよ。宴會委員長と云ふやつだらう？』
またもや笑聲が起つた。京子も今は、すつかり涙を拭つて、晴れ晴れしい笑顔を見せてゐた。
『いいえ、今晩の委員長は、わたしにさせて戴きますわ。』
『では奥さん、いづれそのうち、再婚披露宴委員長を、僕に任命して下さいね？』
『あら！　知りませんわ！』
さすがに京子は赧くなつて、逃げだすやうに應接間を出て行つた。
罪のない笑ひが、一齊に京子のあとを追ひかけた。

（をはり）

キングレコード
三月新譜
海の小夜曲（セレナーデ）
時雨音羽作詩　春山一夫
竹岡信幸作曲　渡瀨春枝
大村能章編曲
何んと良い歌でせう。子守唄と軍艦マーチをあしらつた編曲は竹岡氏獨特のメロデーと相まつて靜かに唄ふ海のなつかしさを感ずる變つた味のレコードとしてすゝめ度い●●

著名櫻樹幹圍番附

東		
横綱	久保の櫻（三丈五尺）	山形縣伊佐澤村
大關	瀧櫻（三丈二尺）	福島縣中郷村
關脇	阿角櫻（三丈）	群馬縣新里村
小結	藥師櫻（二丈五尺）	山形縣蠶桑村
前頭	枝垂櫻（二丈五尺）	青森縣弘前市
前頭	勅使櫻（二丈五尺）	富山縣赤丸村
前頭	大櫻（二丈二尺）	東京府三宅島
前頭	松月寺の大櫻（二丈一尺）	石川縣金澤市
前頭	地藏ヶ平大櫻（二丈）	滋賀縣小椋村
前頭	山王の櫻（一丈九尺）	宮城縣北方村
前頭	金錫寺櫻（一丈八尺）	埼玉縣原市町
同	小泉の櫻（一丈八尺）	千葉縣久住村
同	觀音櫻（一丈八尺）	岩手縣松崎村
同	寶泉寺大櫻（一丈七尺）	福島縣上岡村
同	加夫良木の櫻（一丈六尺）	岐阜縣岐阜市
同	高野山御所櫻（一丈六尺）	和歌山縣高野山
同	堂の山大櫻（一丈六尺）	東京府三宅島
同	大夫櫻（一丈五尺）	福島縣一箕村
同	磯部の櫻（一丈五尺）	茨城縣那珂村
同	大麻櫻（一丈五尺）	福島縣磐梯村

中央		
行司	聖德太子櫻（一丈三尺）	岩手縣鳩岡崎村
行司	於阿茶櫻（一丈三尺）	宮城縣村田町
年寄	神代櫻（四丈五尺）	山梨縣實相寺
年寄	薄墨櫻（三丈八尺）	岐阜縣根尾村

西		
横綱	蒲櫻（三丈四尺）	埼玉縣石戸村
大關	櫻大明神（三丈二尺）	山形縣西根村
關脇	大島の櫻株（二丈七尺）	東京府大島
小結	十二櫻（二丈五尺）	山形縣蠶桑村
前頭	邊名の櫻（二丈五尺）	東京府恩方村
前頭	不動の櫻（二丈四尺）	岩手縣前澤町
前頭	景勝櫻（二丈一尺）	富山縣三日市町
前頭	大宮の大櫻（二丈）	茨城縣大宮町
前頭	三里塚傘櫻（一丈九尺）	千葉縣三里塚
前頭	靈社の櫻（一丈八尺）	東京府三宅島
前頭	姥ヶ崎大櫻（一丈八尺）	滋賀縣東小路村
同	世の中櫻（一丈八尺）	岐阜縣金山町
同	峰張櫻（一丈八尺）	福島縣若松市
同	保昌寺枝垂櫻（一丈七尺）	宮城縣平澤
同	高田の櫻（一丈六尺）	福島縣石川町
同	文珠堂姥櫻（一丈六尺）	福島縣高田町
同	種蒔櫻（一丈五尺）	山形縣荒砥町
同	高麗の枝垂櫻（一丈五尺）	埼玉縣高麗村
同	富士見櫻（一丈五尺）	東京府小金井
同	將軍櫻（一丈四尺）	和歌山縣猿川村

長岡規矩雄

九死に一生
熊本城脱出物語

與倉鶴子談
益田甫記

明治開化の新政を憎む保守的な舊士族連の結黨『神風連』が、熊本に暴動を起したのは、明治九年十月二十三日の夜陰。時の熊本縣令安岡良亮、熊本鎭臺司令長官種田少將・參謀長高島中佐などは賊刄に斃れた。第十三聯隊長であつた與倉中佐は、危地を遁れて九死に一生を得たのであつたが、續いて翌十年二月に起つた西南戰爭に、熊本城を死守して悲壯な最期を遂げた。

僅か半歳の間に二度も死線に彷徨しながら、奇蹟的に命拾ひをされた未亡人、鶴子刀自は、今猶矍鑠として牛込富久町の邸に八十五才の天壽を保つてゐられる。

豫て知遇を得た筆者は、一日刀自を訪れて、當時の回舊談をお聞きする機會を得た。此の一篇はその物語である。文中に『私』とあるのは、勿論刀自御自身の事である。

もう五十七年も昔の出來事ですが、私共が寢に就いてまだ間もない、十一時半頃の事でした。突然、庭先に當つて、

『氣を附けえツ！』

と叫ぶ物々しい哨兵の聲を聞きつけて、私ははつと夢を破られました。主人は夜具を蹴つて縁に馳け出し、

『何か？』

と問ひ返します。戸を開けると、隙間から庭先に斬り結ぶ白刄の影がちらと見えましたので、

私は我を忘れて寢卷一枚に細帶一つのまゝで二階に駈け上りました。その時、私は幹子（故陸軍中將與倉喜平氏未亡人）を脏つて居りまして、六月の身重でございました。

どうして越えたものかわかりませんが、乳程の高さのある高窓が、內庭に面して開いて居りましたのを越えて、私は屋根に遁れたのでした。暫はぢつと身を潜めてみましたが、誰か二階に追ひ馳けて來る樣子。ふと見ると樅の木の枝が、屋根の庇まで被さつて居ります。あすこまで行けばどうにかならうと思ひまして、私は恐る〳〵屋根の上を這つて參りました。が、夜露にぬれた屋根瓦、ましてや身重の事でしたから、そこまでたどり着くか着かぬに足すべらせて、私はすつてんどうと轉げ落ちてしまひました。

その下は大きな石の手水鉢、何處を打つたものか、そのまゝ氣を失つてしまひましたが、間もなく水の冷たさにふと我に返つて、私は內庭傳ひに垣を越えますと、外は竹の生ひ繁つた崖です。そこを又、ころ〳〵と轉がり落ちて身を潜めました。

與倉鶴子刀自

氣がついてみると、右の手首がめきめきと疼いて、どうする事もできません。顏には生溫るいものが、降りかゝつて居ります。私は痛む右手をふところにして、ふと家の方を振り返つてみました。と、早くも門際の長屋から火を噴き出して、焰は母屋をもなめて居りました。市中にも、あちこちから火の手があがつたものと見えて、焰が赤く空を焦がして居ります。舊士族の方々が『神風連』と云ふ徒黨を組んで、何かしら穩かならぬ計畫をめぐらしてゐると云ふ事は、豫てから耳にして居りましたが、其時は何の事やらわけがわかりません。何か惡い夢でも見てゐるやうな心地で、私は燃えさかる焰を見詰めて居りました。

さうしてゐるうちに、隣家の雨戸が開いて行燈の灯影が緣先に見えましたので、私はやうやくそこにたどり着いて、緣にどつかり腰をかけました。

『まア、奧樣。そ……そのお顏はどうなさいました。』

とその家の夫人に聲をかけられて、始

めて顔を撫でてみると、掌に血糊がべつとりとねばります。今も殘つてゐる額と眉間の傷跡はその時の形見なのでございます。

△

主人が兎も角も無事であつたと云ふ事を聞いたのは、それから間もなくの事でした。

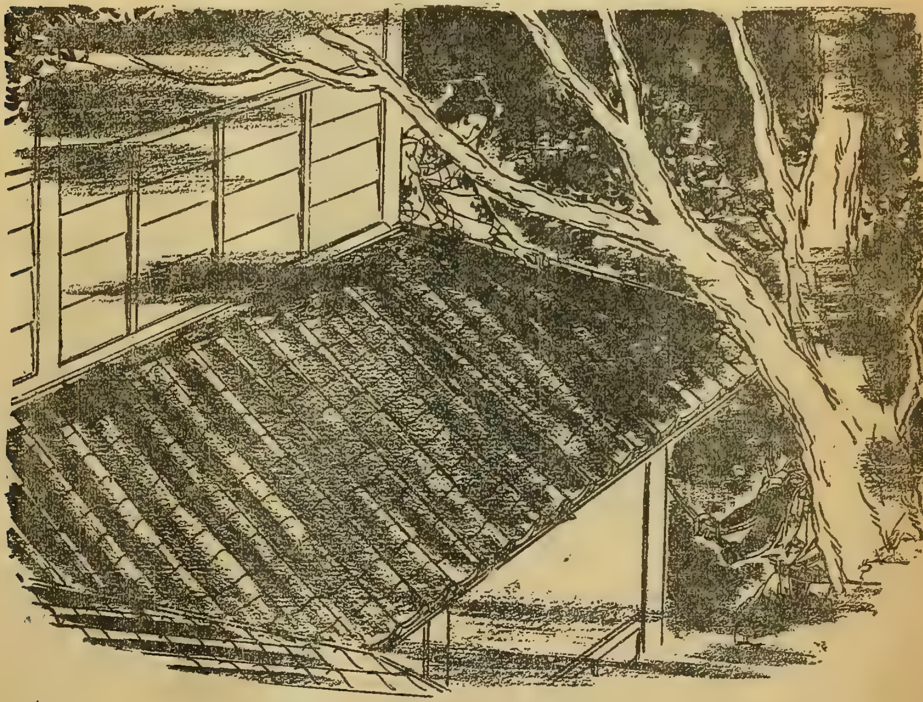
その夜、神風連の暴徒に襲はれましたのは安岡縣令、種田司令長官、高島參謀長、それに十三聯隊長の與倉と、太田黑さんと云ふ急進派の方五人、そして不思議にも與倉一人が無事だつたのです。

主人も私と同じ寢卷姿で脱出したのでしたが、すつぽりと裾をまくつて頭から被り門をぬけ出ようとしますと、背後から何かばさつと追ひ縋る者がありました。

『違ふ〳〵。人違ひぢや。』

と叫びますと、その者はそのまゝ行き過ぎてしまひましたが、與倉はその時、背に一太刀浴せられてゐたのでした。

その頃は、聯隊旗をそれ〴〵聯隊長の自



宅に奉安して居りましたので、私の宅にも橋がかりの別室に納めてございました。與倉はあまりに事が急でしたので、それを取りに行く暇もなく、殘念にも賊の手に奪はれてしまつたのでした。賊はその聯隊旗を先頭に押し立てまして、十三聯隊に押し寄せましたが、熊部と云ふ軍曹が勇ましく立向ひまして、遂に奪ひ返してくれたのでございます。

それから與倉は、その聯隊旗を旗竿から外して、自分の胴にしつかりと結びつけ、賊徒と奮戰したとかで、今ではほん

の僅かしか殘つてゐない聯隊旗の片隅に、與倉の血潮が黒く殘つてゐると云ふ事でございます。

△

神風連の暴動が終つて、まだ半歳にもならぬ翌明治十年二月には、鹿兒島の西郷さんの軍勢が熊本に押し寄せると云ふ騷ぎ。私は神風連の時に受けた右の手首の骨折が、まだ癒り切つてゐませんで、全く役を致しません。その上、もう臨月の身重、今日明日にも生れ落ちるかと云ふお腹を抱へて、熊本城内に籠る事になつたのでございます。

その時、女の身で籠城を致しましたのは、種田司令長官の後任として來られた谷干城様の奥様、玖滿子様と仰しやるとてもお偉い方でした。それに私と、私を迎へに參つたまゝ一緒にお城に籠る事になつた私の生母、鹽谷砲兵大隊長の夫人、それから神風連で御最期を遂げられた種田少將のお召使ひ（愛妾）のおかつさんと云ふ人、其他四五人のお女中衆だけでございます。

私共は二月十五日に家を出て、城外の田中と云ふお邸に入りましたが、いよいよ事態が急になつて來ましたので、十八日の朝、城内に籠る事になりました。その日は朝からちら／＼と雪の降る寒い日でございました。

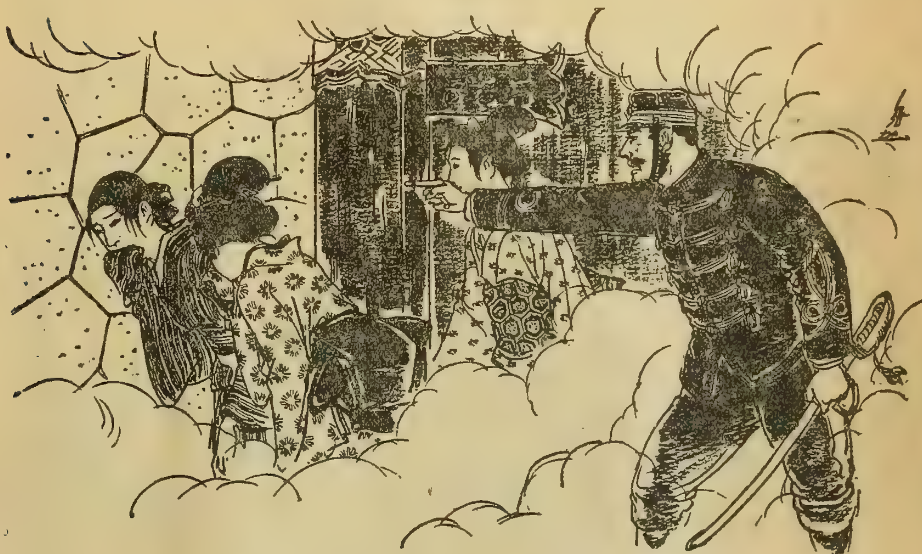
御玄關のくらがり御門から鶯の廊下をぬけて、千疊敷の虎の間に通されました。そこが私共の居場所に定められたのです。ところが谷司令長官を始め、高島中佐の後任の樺山參謀長（後の大將）、與倉、參謀將校の兒玉大尉（後の大將）などがうちつれて、臺場々々の見廻りに參りました留守中に、どうした事かくらがり御門から火を噴き出したのでございます。敵の廻し者が、兵糧運びにごつた返してゐる隙に、火を放つたものだと云ふ事でございました。その火がたちまちひろがつて虎の間も危險になりましたので、私共は天守閣の下に集つて、たゞおど／＼するより他はありませんでした。

そこへ火の手を見て、加藤清正が築城のみぎり、非常口として用意をして置いた開かず門の大きな石の扉を押し開けて司令長官始め、與倉などが馳けつけて參りまして、私共は非常口からお城をぬけ出し、後に幼年校ができたあたりのお長屋に避難を致しました。火はたちまち天守閣をもなめつくし、だん／＼上へと燒け落ちて行く有樣は、何とも云ひやうのない物凄さでございました。

二十日――二十一日――二十二日の未明には、いよ／＼敵の大軍が田原坂から押し寄せて參りました。と、その頃、丁度三時頃だつたと思ひます。私は虫がかぶつて來たのです。我慢に我慢をして居りましたが、夜がしら／＼と明けかゝる

頭には、益々陣痛が激しくなつて參ります。すると、たうとう敵軍から銃聲が起つて來る。それを合圖と云ふ具合に、私は女兒を生み落したのでございました。

城に籠る時には、樣々な産具から、産着、おむつまで、すつかり用意して來たのでしたが、お城の火事に殘らず燒いてしまひまして、何一つございません。お長屋のすぐ裏が炊事場になつて居りますので、お釜の洗ひ流しのお湯を貰つて、御飯粒のふはふはと泳いでゐるお湯で産湯を使はせ、籠城の御婦人方が帶や半襟などを繼ぎ合はせて、にはかに縫つて下すつた産着を着せると云ふ騷ぎ。おむつには、兵隊さんの襦袢にする巾地のもんぱの燒殘りをいたゞいて、當てたのでございました。そのおむつは代々孫達にまで使はせまして、今でも紀念品として家に殘してございます。



△

與倉はその日の晝、胸に敵彈を受けまして、すでに此の世の人ではなかつたのでございました。が、私に萬一の事があつてはと云ふ氣づかひから、誰方もその事を知らせては下さいません。

『聯隊長殿は一寸したお怪我で、あちらに休んでゐらつしやいます。』

誰に聞いてもさう申します。三日四日はその言葉を信じて居りましたが、そのうちに私も、朧氣ながら、主人はもういけないのだなと感付きましたが、他の方々に御心配をかけまいと、そ知らぬふりで過したのでございます。

赤ん坊には、谷長官が幹子と云ふ名をつけて下さいました。そんなどさくさの中に生れました幹子一人が、父の顏も知らずに育ち、今日も達者で居りますのは、何かの因緣とでも申しませうか。

戰爭は日と共に益々激しくなつて參ります。敵は眞正面の花岡山に陣を敷きま

して、どん〱砲彈を撃ち込みます。その目標が、炊事場を陷して兵糧攻めにするつもりらしく、私共のゐるお長屋の近くに、毎日四つも五つも大きな砲彈が落ちて參ります。三月三日には、たうとうお長屋の屋根を撃ちぬかれてしまひました。そこで私共は、お長屋からお城の空濠の中に天幕を張つて、そこに避難を致しました。

天幕の中には、谷長官の夫人と、私と、私の母と、赤ん坊の幹子と、宮崎大尉の夫人と、八才になる大尉の坊ちやんと、おかつさんと、他に女中が二人、その他の方々は、お城の火事の時にぬけ出したまゝ、再び歸つておいでになりませんでした。

お食事は、兵隊さん方には白い御飯が出ましたが、谷長官を始め將校方や私共は、粟のお粥でございます。それに鹽鰤と田作の茹でたものが附くばかりですが、そのおいしかつた事は、今でも忘れる事はできません。

さうして東京方の援軍が、田原坂をぬいて押し寄せて參りましたのが、四月十六日でございます。野津（後の大將）黒木（後の大將）さん方の軍勢が、城內の軍と合併しました時の嬉しさは、何と申してよいか、言葉では云ひ表はす事もできない程でございました。

谷長官の奥樣から受けました御親切は終生忘れる事ができません。今日では皆樣おかくれ遊ばして、籠城婦人の中の生き殘りは、私と幹子とたつた二人きりになつてしまひました。

名士の洒落

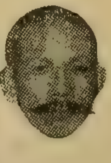
◎どうなるかい

貴族院の同成會の人達が集つて『會員が斯う減つちやア困つたものだ、一つ伊澤君にでも骨を折つて貰つて二十五名の交渉團體を作らないことには……』と頭をしぼつたが、中の一人がポンと膝を叩いて『これは會の名前が惡いからだ。同成會はドウナルカイに通ずる、これぢや會の前途もドウナルカイだ』

◎骨の折れる年

陸軍省の柳川次官、豫算獲得で一生懸命の眞ッ最中のこと、電燈のスキッチをいれようとして伸び上つた拍子に腰の骨がガクンと音を立てゝその儘腰が起たなくなつたので、次官『今年は何といふ骨の折れる年だらう』

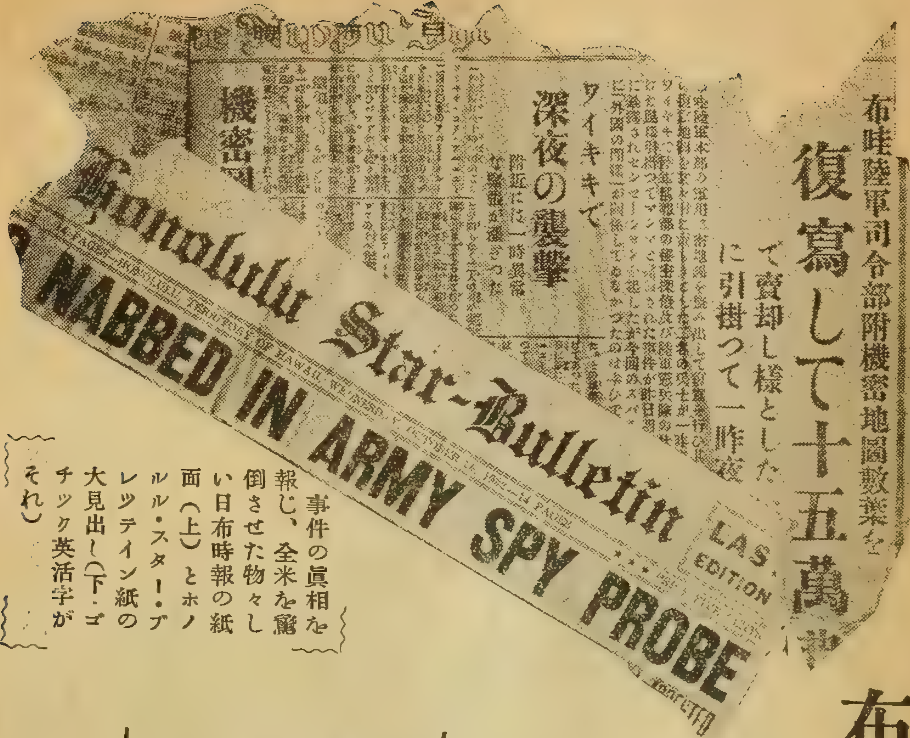
◎南の北軍これ如何に？



大演習供奉の歸途、同車した荒木陸相が三土鐵相を捕へ、突然『南の北軍司令官とはこれ如何に？』と洒落問答と出たものだ。すると鐵相一日考へ拔いた揚句やつと翌日になつて答へて曰く『縣知事を府知事といふが如し』

◎おあしを出してくれ

末次第二艦隊司令長官、日米の海軍を比較批評し『テンで問題にならぬ、いくら達磨藏相でもこの際海軍費に充分おあしを出して貰はなきあ――』



事件の眞相を報じ、全米を驚倒させた物々しい日布時報の紙面（上）とホノルル・スター・ブレッテイン紙の大見出し（下・ゴチック英活字がそれ）

布哇の機密 間諜地獄

在ホノルル、山下草園
嶺田弘畫

この實話は、昭和七年十月二十五日、始めて暴露された布哇陸軍情報部の機密地圖賣却事件の眞相を取扱つてゐる。太平洋中の小島が、いかに列國から重大視せられて居るか、して又、いかに巧妙なスパイ戰が行はれて居るか、それらの事實が、ハッキリとわれらの眼前に展開されるので、時節柄最も注目すべき好讀物であらう。——記者

クイーン座の花形

「あれかい、ナターリーつて女は……？」

ライトは、顎を突き出して、さう云つた。

「む！　素敵だらう」と、友達のクレーンは、眼を細くしてゐた。

ナターリー孃は今、ホノルル、市のクイーン座に開演中のウイルバー一座へ招かれて來た評判の踊子だつた。ライトもクレーンも、頭髮を眞中から綺麗に分けて、ブリユー・サージの背廣をきた青年だが、實は、布哇陸軍司令部附の軍曹だつた。ライトは理工科の出身、クレーンはカルバー陸軍士官學校を中途で退いたが、製圖や圖案の心得があつた爲、今では布哇陸軍司令部附の機密地圖係となつて居たのである。二人は初めからまるで兄弟のやうに親しかつた。で、一室に寢起きして居るくらゐで、暇があると手をとり合つて、此の秘密倶樂部の踊場へ現れた。二人とも一寸、踊りつかれて、籐椅子に倚りかゝつてゐたが、パッと白

百合の咲いたやうなナターリー孃の姿を見つめたまゝ、じつと眼を放さなかつた。

その間に着飾つた男女の群は、なだらかに、調子をあはせて縫つてゐた。二つの體がしツくりと一つに融け合つて、流れるやうな旋律を描き乍ら、感傷の波にのつて踊りくるつてゐた。纖弱なヒールが刻む鮮かなステツプ、巧みにリードする靴のタクト。踊は感興の頂に達しつゝあつた。この時、ナターリー孃は踊の渦巻からぬけて、二人の腰かけて居る方に近づいて來た。

『あ！』

ライトは、ふと自分の足に何か躓いたなと思ふと、

『あら、御免遊ばせ。』

と、ナターリー孃が、澪れるやうにニツこりと笑を投げかけてゐた。

『や、ど、どういたしまして。』

『ほんとに失禮しましたわね。』

なよやかなポーズをつくつて、隣の椅子に腰を下した。孃の傍には、タキシードを着込んだすつきりした紳士が立つてゐたけれども、ポツとしたライトの眼には入らなかつた。

隣り合つて坐つてゐたクレーン軍曹は、

（甘くやつたな、君は彼女と會話をまじへる光榮を荷つたのは、千載の一遇だぞ。）

さう云ふやうに、チクリ、チクリとライト軍曹の尻をつゝいた。

其の中に、踊の曲はかはつて、セントルイス・ホツプになると、孃はいきなりタキシードの紳士と立上る。そして仲好く手を組んで踊の波の中へ吸込まれて行つた。

『チエツ！』

ライト軍曹は、腹立たしげに、見るともなく孃の腰かけてゐた隣席の方へ視線を向けると、粋な小型な狀袋に入つた手紙が開封されたまゝ落ちてゐた。ライト軍曹は、好奇心にそゝられて、これを拾ひとつたが、丁度開封してあつたので、素早く取出して見た、いづれファンから寄せた艶めかしい文殼であらうと思ふと――

私のナターリーよ。

お前の評判は素的にいゝので、私も安心してゐます。バロン・モーレーは、お前にいる丈のお金を上げようと云つて居ります、でも、そのかはり、お前の骨折で、要塞のありかをかき込んだ地圖が手に入ると、大變都合がいゝと云つて居ります、M・S・アサマで、ホノルヽへゆくさうですから、一寸おしらせまで。　　母より

ライト軍曹の肩越しに覗きこんでゐたクレーン軍曹も、此の文句を見ると、さつと顔色をかへた。二人とも、どきんとしたらしいが、次の瞬間、顔を見合はせて、にんまりとした。

踊りつ語りつ

ナターリー嬢は、タキシードの紳士と二人して、又元の席へもどつて來た。そして、頻りにさがし物をして居るのが、只事ではないらしかつた。

『御免下さい、貴女のおさがしになつて居るのは、これぢやないですか。』

ライト軍曹が、ポケツトから手紙を出して見せた。

『まア、有り難うございます、わたし、ほつとしました……此方は、わたしの同伴者で、メイナードさんと仰在います、どうぞ、一度クイーン座へゐらしツて下さいませ、あなたさまは？』

手紙をうけとると、嬢は如才なくメイナード氏を紹介した。

『あ、さうですか、僕はライトです、こゝに居るのは、友人のクレーン君ですよ。』

『どうぞよろしく。』と、紳士は手をさし出して、二人の軍曹と握手した。

『では、お近づきに、あなたと踊りませうね。』

と、嬢は、もうライトと腕を組んで了つた。賑やかに調子をあはせて踊り乍ら、

『ライトさん！』

嬢の聲が樂の音の間を縫うて、ライトの耳元でさゝやく。

『失禮なことをお訊ねしますが、あなた、あのお手紙を讀みませんでしたか知ら？』

『開封してあつたでせう！』

『ぢや、讀みましたのね。』

『マ、さんからのおたよりでせう、あれは？』

『不可ないわね、……あなた秘密を守つて頂戴、それが爲にはわたし何んなことでも……』

と、嬢の聲が怪しくふるへを帶びた。

『分りました、僕も男です、あなたと誓つた以上、斷じて口外はしませんよ、あの中にあるバロン・モーレーつてのは、あれは何う云ふ方ですか。』

高速度滋養料

◇どりこのは、水に薄めてお召し上り下さい……上品な味
◇どりこのは、ジャムがはりに食パンへ……上品な味
◇どりこのは、牛乳に入れて榮養價倍加
◇どりこのは、ホツトケーキへ……トテモ美味

（全國食料品店藥店にあり）　一瓶　一圓二十錢

『わたしのお友達よ。』
『友達以上の方ぢやないんですか。』
『そんな邪推をなすつては不可ません、でも、隨分お金持なので、いろ〳〵な事を云ふのよ、……迚もわたしに出來ないやうな事まで、あゝだの此うだのツて。』
『M・S・アサマで來るんですつてね。』
『えゝ。』
『何處の國の方ですか。』
『某國人ですけど、混血兒かも知れませんわ。』
『あなたは、あんな事を賴まれて何うしました、……あなたの爲、きつと秘密を守りますから、仰在つて下さい。』
『わたしの不注意で、大事の手紙を落したのが悪かつたのよ、仕方がないわ、云つて了ひます、……わたしは、あの事については、何もかもメイナードさんに賴んでございます。』

『ぢや、メイナードさんも、バロン・モーレーのことは御存じですか。』
『えゝ、あの方はバロンの代理者でございます。』

『さうでしたか。』

踊り乍ら、戀の秘め言をさゝやくやうに、ヒソ／＼と語り合うてゐたので、この事は誰の耳にも入らなかつたのである。

ミス・M・A・P

布哇陸軍司令部の腦髓といはるゝ陸軍情報部では、主任のホップ中佐が、ホノルヽ・スター・ブルレチンの朝刊に眼をさらしてゐた。此は中佐の朝の仕事の一つなのである。

と、第一面の端に掲げられた特別廣告が、眼に留ると、ドキンと胸を打たれた。

ミス・M・A・Pは、誘惑にかゝつて、フラ〳〵と西の別莊を立出でた。併し彼女の身邊には、些かの危險もない。二三日の淸遊の後、必ずかへる。――プリンス

ミス・M・A・Pは、地圖孃となる。

ホツプ中佐は、ぎよつとして、ベルを押した。呼ばれた給仕卒が扉をあけて入つて來た。

『機密書類保管部副主任ドール中尉を呼びなさい！』

『はツ。』

給仕卒は敬禮して立去つたが、間もなくドール中尉がそゝくさと姿をあらはした。

『中佐殿、どういふ御用でありますか。』

『む、君にたづねるが、何か變つた事は起らなかつたか。』

『と申しますと？』

『君の部屋の中で？』

『一向！』

『主任のグリーソン大尉が、旅行に出かけたのは、いつであつたかな。』

『今から一月前であります。』

『其後、何か起つて居らねばならんのだが、……』

『とんでもない事であります、小官等の携つて居る事務は、最も警戒を要しますので、小官は無論部下に對しても、嚴重の上にも嚴重に申渡してあります、從つて小官等の部屋に限つて、異狀があらう筈はありませぬ。』

『よし、それならわしが出かけて行つて調べる。』

と、椅子から立上つた。

ドール中尉は、上官を案內して、自分の部屋へ入ると、そこに居た部下一同に對し、他室へ移動を命じた。

『ドール中尉。』

ホツプ中佐は嚴かに云つて、

『君は驚いちやいかんぞ。』

と、機密書類保管部倉庫の扉にがちやりと鍵を入れた。ぐるりと一轉し、暗號を合はせて、一方のボタンを押すと、電氣仕掛の精巧な扉がヂーンと微かに唸りつゝ獨りでに開いた。

『機密地圖の入つて居る抽匣を調べて見給へ。』

『はツ。』

地圖を收めてある抽匣をあけて見た中尉の顏色といつたらない。

『む！……』

と、唸き聲をあげたきりだつた。

（太平洋上の米國海軍根據地、ハワイのポールハーバー軍港）

『どうだな、異狀はないかな。』と、中佐は下僚の肩を輕く叩いた。

『はツ、……中佐殿は、この機密地圖の紛失して居ることを何うして御存じでありますか。』

それが、大きな疑問であつた。

『いや、騷いでは不可ない、……二三日經てば、必ず戻つて來ることになつて居る。』

『ほんとでありますか。』

『む、大丈夫だ。』

と、中佐は何も彼も呑みこんで居た。だが、ドール中尉は、一時はすつかり狼狽した、もし此の機密地圖が紛失すれば、自分が處罰される丈では濟まない、全布哇の防備を根本から建直さねばならぬ重大な問題となるからで。

『中佐殿、たしかに無事でせうか。』

『必ず無事だと信じてゐて間違はない。』

と、ホツプ中佐の言葉が、今の彼にとつては、何よりの命の綱であつた。

こんな大事件の突發したにもかゝはらず、主任の中佐は、不思議にも朗らかであつた。その日の夕刊の第一面には、次のやうな特別廣告がかゝげられた。

> プリンスよ、ミス・M・A・Pの家出は報告後に始めて知つた。けれども、家人は、彼女の理解者に信頼し、彼女の無事歸宅を信じて、心しづかに待つてゐる。
>
> ——執事

『ハヽア。』

此の夕刊廣告に見入つてゐたドール中尉は、

『これだな。』

と、秘かにうなづいた。

『執事といふのは、ホツプ中佐らしいぞ。』

謎の一つが解けたやうに思はれたが、餘のことは一向想像が

つかない。何にしても、大切な機密地圖が、再び彼の手にもどらなければ、おちおちと眠ることも出來なかつた。

二十三號室の主人

昭和七年十月二十五日の夕方であつた。ホノルヽ市ワイキヽのコア・アヴエニユー二四六〇番のアパートメント事務室では、管理人のジヨンソン爺さんが、紙幣を裏返しにして、蟲眼鏡で見つめてゐた。

『はてな、マツクや。』

若い事務員をよんだ。

『妙ぢやないかのう、……この紙幣は？』

『贋ですか。』

『うんにや、……この隅に暗號見たやうな印がついてゐるぜ。』

『どれ、どれ。』

マツクが見ると、星印の中に、番號が打つてある。

『これも、さうだらうが？』

『成る程。』

『誰から受取つたのぢやい？』

『二十三號さんです！』

『む、さうかの。』

『此間中から二月分室代がたまつてゐたんですが、先刻のこらずお拂ひになりました、何ならあと一年分、先拂ひにしようかなどと、冗談をいうて居りました。』

『さうか、特別賞與でも貰うたと見えるな、……それぢや、何んだな、この暗號見たやうなものは、役所の印たらう。』

『さうかも知れませんよ、……』

『受取つたのが、どれもこれも此の印がついてるからな、一寸不思議に思うたんぢやが、二十三號さんなら、コリヤ確かなもんぢやて。』

ジヨンソン爺さんは、安心したと見え、金庫の中へ藏ひこんだ。――

丁度、この時刻に、仲のいゝライト軍曹と、クレーン軍曹とは、手を組んで、海岸を歩き乍ら話して來た。そこには、椰子の樹や名もしれぬ廣い葉の熱帶植物が生ひ茂つてゐて、何處となく、のんびりとして居る。

彼等の眼の前には、丁度剃刀を植ゑたやうな、低い褐色の禿山が見える。頂きは、盆のやうに凹地になつてゐて、外間からは見えぬが、此の布哇の孤島を守る大事な要塞がこゝに在る。いざとなれば、幾十の砲門がスルスルと山の上面に砲口をあらはし、洋上三十浬の外敵を打碎くことが出來る。海岸から見え

ぬが、頂上近くには、數個の土穴があつて、平生は蓋がしてある。必要の機會には、此の蓋があいて、二十三吋が、いつでも發砲出來るやうに準備してある。夜になると、この小山の何れの部分かに、強力な探照光が發射されて、近海の敵ならば、海の底に潜水しない限りは、姿を隠すことは出來ない。又遙か西の方の入海のあたりには、無電柱が五六本、ニユツと聳えてゐる。彼等は、職業柄、どこにカムフラージユがあつて、どこに大砲がかくされて居るかも、凡そ當りはついて居る。

『ライト君。』

と、クレーン軍曹は、此の要塞を見乍ら、ふと今朝の出來事を思ひ出して云つた。

『驚いたね、實際、ホツプ中佐殿が、突然、やつて來て、吾々に次の部屋へ移動して、しばらく控へて居れと云うた時には、全くビツクリしちやつた。』

『ドール中尉殿から、話はなかつたか。』

『いや、何とも云はなかつたが、蒼い顏をして居つたな。』

『さうだらう、これが暴露すると、布哇丈の問題ぢやすまない、全世界の末梢神經がピクリとするほどの出來事だから……』

『だが、結局のところ、幾ら探しても分るまい。』

『燈臺下暗しと云ふからな、はツはゝゝ。』

彼等は、夕空を仰いで朗かに笑つた。今夜も又、例の秘密俱樂部のダンス・ホールへ出かけるつもりであらうか知ら？

十五萬弗の取引

夜十時過ぎだつた。

海風が微かに陸に向つて吹いて居る。椰子の葉が時々さらさらと鳴る。が、その合間は、闇夜がしいんと折り重つて靜まり返つて居る。

コア・アヴエニユー二四六〇番のアパートメント、第二十三號室の前にぬーツと現はれた怪紳士がある。

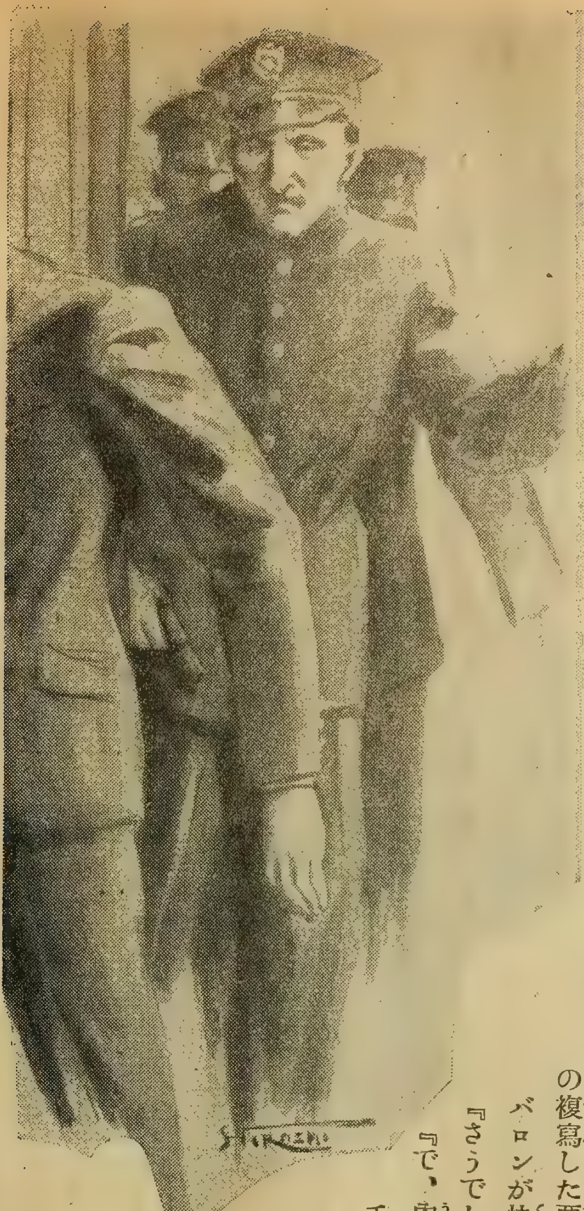
（何處かで、見たやうな紳士だが……？）

讀者諸君は、さう思ふであらう。此の怪紳士こそは、ナターリー孃のパートナーとなつてゐたタキシードの紳士メイナード氏である。改めてよく見ると、六呎たつぷりの巨きな軀、四肢が屈託なく伸びて居る、短く刈りこんだ髭は、美しく波を打つて居るブロンドの頭髮と調和して、何處となく高雅な氣品のある顏立である。今夜は、しツくりと身に適つた褐色の背廣服をきて、大きな皮鞄をかゝへて居る。

コツ、コツ。

メイナード氏は、二十三號室の番號札をチラとのぞいてから、

扉をノツクした。
『お入り下さい。』
中から微かな聲がして、音もなくスーツと扉が開かれた。メイナード氏が、辷るやうに室の中へ消え入ると、其處には、此の二十三號の室の主人が棒立になつて居た。
（誰？）
一人は、ライト軍曹。も一人は云ふ迄もない、相棒のクレーン軍曹――軍服をきかへて、脊廣服になつてゐた。



意外なところで、意外な三人の顏合せであつた。
『バロン・モーレーは、今ホテルに待たせてありますが、私が一切任せられて居るので、あなた方にはお眼にかゝりたくないさうです、又、その方がよろしいだらうと思ひますが……？』
と、メイナード氏は云つた。
『御尤も。』
と、ライト軍曹が輕くうなづいて見せた。
『そこで、早速、御約束の取引ですが、十五萬弗で、あなた方の複寫した要塞地圖を買收することは、バロンが快諾しました。』
『さうでしだか。』
『で、内金として、昨日お渡した一千弗を差引いて、其の金は、こゝに只今持參いたしました、……御安心下さい。』
『いや、いろ／＼御骨折を感謝します、……さうして、貴君に差上げる仲介料は、どう云ふことになりますか。』

と、ライト軍曹が云つた。

『その事なら御心配はいりません、バロンと私とは、一心同體ですからね、さうでないと此ういふ危どい仕事は、つとまりません。しかし御兩君にお近づきになつた爲、意外な拾ひものをしました、バロンも喜んで居りました、……では、とも角拜見させて下さい、そして一應、御說明を御聞かせ下さい、私からバロンに說明する必要がありますから。』

『說明なら、クレーン君の方が上手だ、……おい。』

と、クレーン軍曹をふりかへると、

『む。』

と、其儘、次の部屋へ入つて行つた。こゝが、彼等の仕事場なのである。陸軍情報部機密書類保管部に備へつけてある原圖は、兩軍曹の手によつて、此の仕事場で複寫されたのである。彼等は、これを複寫後、隙を見て原圖を元の位置に納めて置かうとしたのであるが、それが間に合はなかつたのである。從つて今のところ、原圖も彼等の手にのこつてゐたが、これは元より顧客のメイナード氏には秘密であつたのである。

卓上にひろげられたのは、精巧なる數枚の複寫地圖であつた。――

『この軍港はですね、米國に於て五千萬弗を費して設計したものですから、巡洋艦隊、潛水艦隊、水雷艇隊、ドライ・ドツク、航空、無電、電信、工廠、石炭、燃油庫等、すべて最新式の設備がしてあります、こゝに一々、記號がかきこんであります。』

『兵員は？』

メイナード氏がたづねた。

『さう、將兵合はせて四千名、雇員約千五百名ぐらゐつとめて居ります。』

『島の中央部、こゝが陸軍本部ですな。』

『さうです、此處には、約一萬三千の兵が駐屯して居ります、大砲、裝甲車、機關銃、爆擊機、偵察機、毒ガス、探照臺等、沿岸防備には、申分なく手配してあります、この記號が要塞內の大砲の位置であります。』

『驚きましたな、平和の姿でカムフラージュしてありますが、云はゞ太平洋のジブラルターですな。』

（遠景の山は最も偉力ある巨砲を武裝してゐるオアフ島の金剛峯）

メイナード氏は、感心して耳を聳てた。

『さうですとも。』

『これ程の機密地圖が、ほんとうによく手に入りましたな、御兩君の腕前には敬服いたします。』

『いや、吾々は何でもありません、これが職業ですから……、しかし此の機密地圖の一部が、わが情報部にあり、他の一部がバロン・モーレーの手にあるとすれば、十五萬弗は安いですよ。』

『全く……』

と、合槌を打つた刹那、どうしたハズミか、メイナード氏のポケツト・ナイフが、コトリと床の上に落ちた。

と、床下では、ピカツと光りものがした。

マツチの火だ！

多分、それが合圖であつたのであらう、アパートメントを取り卷いてゐた憲兵隊と警察署のラヂオ巡査隊とが、どつと嵐のやうに迫

つたのである。

二十三號室では、今丁度、問題の機密地圖の說明が終つて、メイナード氏が、殘りの金を二人に渡さうと、紙幣をつめた革鞄を開いた瞬間であつた。

扉を蹴破るやうにして、押入つた一隊の憲兵が、拳銃を擬して三人を包圍した。

三人は反抗しかけたが、迚も敵しやうがなかつたので、手をあげた。部屋には、機密地圖の原圖、複寫圖、複寫用機械、現金――證據物は揃つて居るので、三人とも其のまゝ檢擧されたのである。

アパートメントの近所のものは、多分二十三號室で、酒類を密賣してゐたのだらうと噂し合つてゐたくらゐで、兩軍曹の賣國的行爲については、何等知るところが無かつた。

プリンスの正體

M・S・アサマ號は、洋上を靜かに走つて居る。夢のやうな緑の島は、銀色の陽光の下にやさしく息づいて、見わたす限りコバルト・ブリユーの海は、船の舳に白い珠をちらして居る。飛魚がスイ／＼と刎ねたり、海豚の群が追はれて來たり、時々、波間には、平和な海の攪亂者たる鱶が、怪奇な白い腹を見せたりする丈で、太平洋の海は、穩かである。

秋空もからりと晴れて居る。

デツキの籐椅子の上に、腰を下して新聞をひろげて見て居る男、新聞にかくれてしまつて、顏は分らなかつた。

『陸軍二兵士の賣國未遂事件』と云ふ柱が仰々しく眼につく。

『布哇陸軍司令部附機密地圖數葉を複寫して、十五萬弗で賣却しようとしたが、陸軍當局の罠に引つかゝつて、一昨夜マンマと捕はる。』

これ丈が見出しだ。

『布哇陸軍本部の軍用機密地圖を盜み出して複寫を行ひ、其の複寫地圖を某々國に賣らうとした二名の兵士が、一昨夜（昭和七年十月二十五日）ワイキヽで陸軍情報部の秘密探偵及び陸軍憲兵隊の仕掛けた罠に引掛つて、マンマと逮捕された事件が昨日明るみに暴露され、センセーションを起したが、今回のスパイ事件に、「外國の間諜」が關係しなかつたのは幸ひであつた。』

以下、顚末がくはしくかゝげてあつた。

新聞を讀み終つた男は、

『ふゝツ。』

鼻笑して、新聞を折りたゝんだ處を見ると、これはしたり、

ライト、クレーン二軍曹と、一緒に捕つた筈のメイナード氏であつた。もう正體を暴露しても差支ないので、覆面をとるが、實は彼は、こゝに掲げてある陸軍情報部の秘密探偵が其の職務であつた。

二軍曹が、機密地圖を手に入れて、其の顧客をさがさうとして、『あさり』の爲、秘密倶樂部の踊場へ現はれると云ふ情報を耳にした彼は、その顧客になつて、眞相をつかまうとした。

（バロン・モーレー！）

そんな人物を勝手にでつちあげて、自分は『某國の手先』である、バロン・モーレーの代理人であると假稱し、ナターリー孃の助力のもとに、探偵を開始したのである。

お母さんから孃にあてた手紙も、無論假作だ、だが、これを不用意の中にダンス・ホール籐椅子の上へ取り落したところに、メイナード氏一流のからくりがあつた。

（罠はよかつたな、確かに罠に相違ない！）

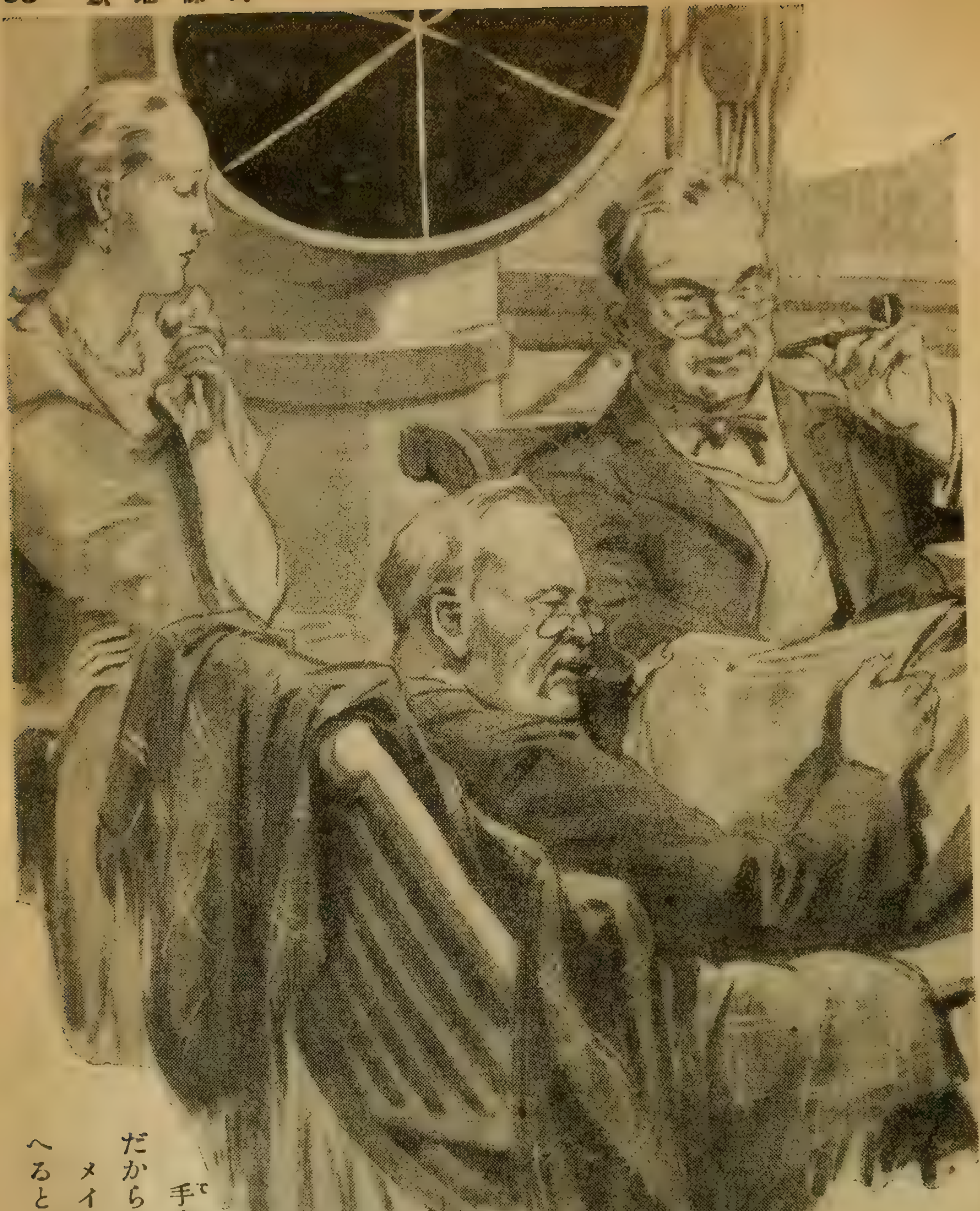
と、メイナード氏は、苦笑せざるを得なかつた。

で、バロン・モーレーの名代として、二軍曹に近づいて見ると、彼等の複寫した機密地圖が全く眞物であると確め得られたので、實は彼自身も愕然とした。何をかくさう、その時まで、陸軍情報部主任のホップ中佐さへも、地圖の紛失して居ることは、全く知らなかつた。だが、中佐は、メイナード氏の技倆を信じてゐたので、安心しきつてゐたらしい。

すべてが、調子よく運んで、裏に番號をつけた紙幣で金をわたした。これは、紙幣をばらまく容子で、共犯者があれば其の共犯者を捕へる手段となるからである。其の結果、二十三號室の當夜の出來事となつたのである。

新聞には記してある。――

『現場にゐた「某國の手先」と稱する探偵も二兵士と共に捕はれた。これは憲兵隊側の芝居であつて、二兵士をして、「某國の手先」を彼



等の同類だと最後まで信ぜしむる爲であつた、だから憲兵隊は、「某國の手先」を逮捕した後、別室で取調を行ふやうに見せかけて連出した。二兵士は營倉へ入れられて後、今でも尚「某國の手先」を眞實自分等の仲間と信じて居るかもしれない。』

(ところがどうだ、其の手先は、こゝに此うして居るんだから、妙だて!)

メイナード氏は、當夜のことを考へると、我乍ら、笑しくて堪らなか

つた。

『ふ、ふ、ふ……』

含み笑をして居ると、隣の長椅子に腰を下した品のいゝ老人が、ぎよろと眼を光らした。此の老人は、元海軍大尉として、軍艦にのりこみ、布哇にも駐在してゐたことがあると云うてゐた。

そんな關係で、メイナード氏とは、よく話の合ふ談友であつた。

『メイナードさん、何がをかしいかのう。』

『いや何、此の新聞を見ると、二人の軍曹が、ワナにかゝつて探偵につかまつたとありますので……』

『あゝ、此の賣國奴事件ですかのう。』

『さうです。』

『こりや全く甘く行きましたな、大當りですぢや、わしは歐洲大戰當時、布哇に居りましたがのう、此ういふことがありましたぢや、某國軍艦が、獨逸の軍艦ガイヤー號を追ひつめて來たことがありましたぢや、その時は米國も參戰し居つたで、その某軍艦にも入港を許しましたぢやが……』

老大尉は、髯をしごいて居る。

『ところがのう、此方の軍艦でも、水先案内でなうては動けないのに、その軍艦は、自由自在に港内を動きました、おまけに、毎日軍港の入口に三十分も停止し居つて、何をするのか、じつと動かない、陸上から私共が望遠鏡で見ても、どんな作業をして居るのか、少しも分らんのぢや、彼奴、可怪しいとなつたがしかし改めて訊問するのも角が立つと云ふので、其のまゝになつたがのう、三四日ばかりたつと、その軍艦は、錨を拔いたので、そのあたりを調査して見ると、何んと驚いたのう、丁度其の軍艦の作業して居つた位置の海底に穴があつて、綺麗な清水が湧いて居た、そこへパイプを突込んで、給水して居たことが分つたが、どうぢやい、此方では其んなものがあらうとは夢にも知らん、然るにぢや、某國軍艦は、それをちやんと知つて居るのが、一つの不思議ぢやらうが……？』

老大尉は、得意になつてまくし立てた。

『ふう、そんな事があつたのですかなあ。』

メイナード氏は、香の高い葉卷に火をつけた。

『そこでぢや、ですから機密地圖といふのは大事な上にも大事にせねやならん、……今度は、みな眼がさめたであらう。』

『御意見は御尤もであります、キヤプテンよ、それればかりでなく、此の常夏の島が、太平洋の平和を維持する上に於て、軍備上、非常に大切な位置にあると云ふことを、民衆に知らせる必要はありますまいかな。』

『そりやあるとも。』

『私共の注目して居るのは、そこです、何せ御承知のやうに、布哇と云へば、全島をあはせて、總面積は日本の四國ぐらゐの大きさですが、でも此の中には、二十萬の東洋人が居るのです。』

いざ事ある時には、此の島は、どうなるかと云ふ事を平時に於てハッキリと民衆の頭腦に燒きつけて置くが必要であります。それには、今度の事件などは打つてつけで、高が一枚や二枚の地圖を十五萬弗の大金で買收しようと云ふ事實は、此の島がどれ程世界注目の的になつて居るか、よく判ると思ひますがな。』

『さう、さう、それはさうぢやともな。』

老大尉は膝を叩いた。

『妙！　わたしも、さう思ひますわ。』

いつの間にか、ナターリー孃が、彼の背後に忍びよつてゐた。彼女も、今度の事件には、一役買つて出て、立派な働きをしたメイナード氏の助手である。實をいへばメイナード氏の力三分、彼女の力七分と云ふ割合になるかもしれない。

『ナターリーさん、好いところへ來て下さつた。』

メイナード氏は立上つて、

『ホップさんに、無電を打たねばなりません、一緒に無電室へ行きませう。』

と、元氣よく云つた。

二人のヒールの音が、波のざわめきの間を縫うて、輕く甲板の上から消えて行つた。

それから間もなくだつた。アサマ號の無電機は、盛んに動いて、次のやうな暗號電報を發信して居た。

親愛なるホップ中佐へ。

自分はアサマ號に搭乘して、しばらく布哇の地と別るゝに際し、今回の事件が、無事に解決したことを心から喜んで居ります。太平洋中の此の平和の島には、今や、眼に見えぬ鋭い透視眼が速射砲のやうに注がれて居ります、黑い手は蜘蛛の巣のやうにまつはりついて居ります、まことに物靜かな危險が、老人の忍足のやうに迫つて來て居ります、此の秋に當つて貴官の任務は、愈ゝ重且大でありますが、貴官の手一つで、此の島を守らうとしても無理であらうと思ひます、島人全體が心を一つにして之に當る必要があります、ついては、重營倉中に居る二人の軍曹は、成るべく輕い罪をもつて罰して下さい、賣國奴としては憎むべきでありますが、彼等は若氣の過から、こんな不都合なことを仕出かしたのですから。……此の事件は、彼等兩名を重く罰するよりも、軍備の重大さを大勢の頭に沁み込ませた事に於て、非常な効果ををさめて居ります、此の點をよく〳〵御考へ下さい。私達は、これから横濱に立ちより、ついで上海へ參ります。

M・S・アサマ號にて　　プリンス

プリンス！　プリンス！

これ實に米國陸軍の秘密探偵メイナード氏の綽名であつたのである。　（をはり）

すてうり勘兵衛（かんべゑ）

村上浪六
鰭崎英朋畫

金が敵の世の中といふ諺、それほど金を目の敵にする男でもないが、團子細工のやうには出來ず、なくて叶はぬ新世帶の勘兵衛、（まさかの時は兩刀使ひでない身、一本あれば人斬庖丁に充分と考へて、來吉正の脇差を二つ目の津國屋へ賣拂ひ、久しぶりに四十兩の小判を懷中に歸る途中、だしぬけの不意に背後より田島勘兵衛と呼止められ、おのれに生命の用あるぞといはれては、流石の大膽も平氣に其まゝ歩けない、はッと思はず振返る編笠越、相手も同じ編笠の武士、その隔たりは二間あまりの双方、嵐の前の靜けさで、互ひに動かない、

「いかにも田島勘兵衛、どういふ間違ひで覗うたか、生命の用ある相手を持たぬぞ、但し拔いて來れば一歩も退かぬ、誰彼の容赦ないが一應は面を見てくれる、尾羽うち枯しても腕は瘦せ浪人でない、笠を脫げ、笠の上から梨割にされたいか」

二間あまりを半分ほど近寄りて、

「ぬかしたな勘兵衛、この面を見て反り返るな」

「ふゝゝ反り返ると共に小手が伸びるぞ」

「伸びた小手に風を切る前、篤と面體を見て置け」

編笠を脫ぐと三十前後の凛々しい面魂しひ、中腰の首を前に突き出して、

「田島、忘れたか」

勘兵衛、その顏を一目、見るや否、

「や、川口」

「はッはッはッ、川口周藏、さア見付けたぞ、此奴め、この竹馬の友を捨てゝ今、どこに居る、然

し相變らずの勘兵衛、腕の瘦せ浪人でないとは賴母しい』

勘兵衛も笠を脫いで、滿面の微笑を浮べながらの呆れ顏、

『いたづら者め、よくも作り聲しをツたぞ、あぶない、もし拔打に遣れば何とする』

『はゝゝゝ拔打の名人、それ心得て二間あまり近寄らない、ははゝゝ兎も角も浪宅を見屆ける、案内せい』

『いや、それだけは許してくれ、長うは無沙汰せぬ、もう暫くの間、こゝ一二年の間』

『まかりならン、承知せンぞ、あゝいふ仔細の出奔、他人へは偖置、兄弟以上の我に一言もなく無斷で飛出すとは、けしからン奴、その腹癒せに今日こそは何處までも附纏うてやる、さア歩け、歩かンか』

『川口、志は嬉しいが、ちと恥かしい浪宅で』

『何が恥かしい、誰に恥ぢる』

『實は深川の萬年町で、みる影もない裏長屋に其日暮しの奴と相住居』

『萬年町でも千年町でも構はン、隨て行くぞ』

『其、その萬年町を近頃、やう／＼這ひ出して』

『これ田島、貴公にも似合はン事をいふ、武士として脇差を賣るほどの境涯、よく／＼の事と察して居る川口周藏に何のため、な、何のため居處を秘す』

『相すまン』

『相すまンと思へば歩き出せ、何を秘さう、實は、かういふところと口だけでは乘らぬぞ、場合によれば一夜、泊り込で、ゆる／＼夜明しに語りたい事がある、あの後の委細も知るまい、あゝいふ事で可惜ら生涯の埋れ木にさせたくない、是非とも泊り込で行末の相談、心を打明けて相談するもの、この川口周藏の外にあるか』

溢るゝ友情を一滴の淚に受けながら、泊り込で夜と共に話される苦しさよりも、往來で脫ぎ賣りの羽織から緣を繋いだ屑長の言譯は立つにせよ、ふとした事から盜み出した女俳優の中村鶴吉この言譯が苦しい、

彌勒寺の裏門に向うた入片町で、こゝからは目と鼻の間を、わざと方角違ひに林町の河岸から六間堀の山城橋、松井町の方へ歩きながら、

『あゝいふ事で、面目もない勘兵衛、その後は定めて一藩の取沙汰、わけて第一は君の思召、さぞ不埒千萬な奴と』

川口周藏、その返事しない、

『歩きながら話すべき筋合でない、委しい事は一切、落着た上で、ゆツくり語らう』

まづ一禮を演べたいが、禮もいへぬ有難迷惑の苦笑ひで、
『まだ一二年、どこへ消えたか隱れたか、行衞の知れぬ勘兵衞で居たかッたに、わるいところを見付けられた』
『どうせ、隱れる身に、よい事のある筈がない、はゝゝゝ』
『わるさが少々』
『少々ぐらゐ、わるい事を遠慮する男か、人に見られて氣まりの惡い貴公でもあるまい』
『ます／＼困る』
『困る事があれば猶更この川口、相談に乘るぞ』
『いよ／＼閉口』
『何が困る、何を閉口する、あれに懲りず、また女にでも取付かれたか』
『いや、決して』
『兎も角も浪宅へ、これから先へ行けば大川端に出るぞ、御舟藏と灰會所で、世を忍ぶに等しい浪人の住家はない筈』
『川口、あやまる、實は途中で、その親切だけを聞かうとして、こゝまで來たが、全くは方角違ひ、浪宅は後戻りになる』
『遁げようとしたな、此奴め』
『卑怯に遁げは致さン、苦しまぎれに、はゝゝゝ』
『卑怯でない證據を見屆ける、住居まで連れて行け』
『見屆けられに行く、行くが川口、こゝは勘兵衞の顔を赤めさせず、門口だけ見屆けて置てくれ、いつ幾日、どこへ來いといへば必ず時刻を違へず、きッと其處へ出かけて、ありがたく友達の情を受ける』
川口は笑ひながら首肯て、
『よし、泊り込は許してやる、門口まで行かう』
仕方なしに松井町から、また山城橋を渡りて、林町の一丁目より彌勒寺の裏門、入片町の二軒目に來た勘兵衞、戸口に立ちながら振返りて、
『かやうな見苦しい浪宅で』
『脇差を賣る浪人に門構への屋敷があるか、外出の時は誰が留守番する』
『召使ひの下男が一人』
『疑ふでないが、その下男を呼出して見たいな』
すぐに開く入口の格子戸を叩いて、
『長助、長助、今、歸ッたぞ』
重ね／＼勘兵衞の運が惡い、生憎その屑長は近處への買ひ物に出て、束の間も離れたくない鶴吉、待兼ねて居た聲に嬉しく、
『お歸りなさい』
こら待てといふ間もなく、押へて居る事も出來ぬ格子を開け

て、花のやうに出した鶴吉の顏、ぐいと睨まれて、はツと遁げ込だが、もう遲い、

目早く見て取りし川口周藏、勘兵衞の袖を三四間の先まで引いて行き、

『田島、あれは何ぢや』

刄向うて來る敵には仕損じのない勘兵衞も、親友の情義を斬り放す腕はない、おもはず自己の額を叩いて、

『あれは、彼女、あれに付ては、いろ〳〵と深い譯、いや、餘儀ない譯のある事、それは再會の時まで、見遁して貰ひたい』

『はゝア、泊り込といふ一言には恐れたな』

『この通り、頭を下げる、外の奴ならば何の遠慮會釋もないが、摑ンで抛げ飛すも容易い勘兵衞、この通りに弱いぞ』

この川口周藏には弱い勘兵衞、かうなる基は松平伊勢守の家來で三百石の小姓を勤めて居たが、をり〳〵大奥への内用を命ぜられたのが禍ひの種となり、伊勢守の側室に菊枝といふ五歳も年上の女に無

理な押付け業の戀を仕掛けられ、始めの間は幾度も遁げたが遁げきれぬ若氣の過りに生涯の一大失策、後で考へると、天魔の身入りしやうに、我ながら前後の差別なく引ずられて、その不義密通を露現の曉、家も知行も捨てゝ出奔した勘兵衞、腹かき切ツても申譯の立つべき侍の遣り損ひでなく、第一また君の御恥辱を明るみへの苦しまぎれに飛出して丸四年越、その後は如何になりしやら、お部屋の菊枝が身の上、どうなりしやら、人にいはれず聞かされもせぬ後悔慚愧の今更、友朋輩の中にも一入さらに兄弟のやうな川口周藏のため見付けられたのみか、その上また鶴吉の顏まで見られた勘兵衞、忍術の極意でもあれば此まゝ消えて無くなりたい、

『いつ、どこへ川口、この面を提げて行かうか』

『いや、それに及ばン、あらためて明日の夕方、また來る』

こゝまで押へて置けば大丈夫といふ顏で、其まゝ見返りもせず、さッさと立去る川口の後姿を見送りて、おもはず我身を嘲けるやうな獨言、

『女は大敵、大敵』

舌鼓を鳴しながら内へ這入れば、どう見ても大敵とは思へぬ鶴吉の顏、舞臺よりは猶更に近勝る美はしさ、もう藝も芝居氣もない、

『門口まで御一緒の方、どちらから』

『あれは元の友達で、今この境涯、まだ逢ひたくない時に出喰して困ッたよ、こゝまで隨て來られてね』

『まア、意地のお惡い人』

『おまけに運惡く、その顏を見られたぞ』

『どう、しませう』

『仕方がない、血眼で探し歩く太夫元の鬼熊に嗅ぎ出されたよりは、面倒も尠なからう』

『御飯炊きに傭うた女と、さう仰ッしやれば宜しいに』

『そンな飯炊きの下女があるかい、男殺しの毒藥に見えたかも知れない、はゝゝゝ』

今日の買ひ物は、米あげ笊に束子と葵卸しと金杓子と磨き砂の紙袋まで入れて來た屑長、これを臺所に置て六疊へ這入るや否、相變らずの頓狂な聲、

『やア、お歸ンなさい、けふは朝から日脚が薄くッて、近來にない寒さだ、事に依ると今夜ア雪ですぜ、今にも泣き出しさうな空ですからね』

『乃公も泣き出しさうな目に逢ッたよ』

『はゝゝ閻魔の笑ひ顏よりも大將の泣き顏は面白いでせうね』

『ふざけるな、全く今日は酷い目に逢ッたぞ、友達も友達、數ある中で一番に乃公の事を思ッてくれる友達のため、脇差を賣る時から後を付けられて、いやはや、ぎゆう〳〵遣られた、うか〳〵すると泊り込まれるところだッたよ、それを賴むやうにして、やッと門口で別れたが、明日の夕方また來るらしい、ゆる〳〵と落着た上、眞綿で首を締められるンだな』

『そ、そいつア大變だ、大將を眞綿の首締めにするやうな相手ぢやア傍に居るもの、ふッ飛されますね』

『もう、鶴の顏まで見られたンだからね、かうなれば萬事、打明けて逆寄せだ、これを全體、どうすれば宜いかと此方から乘し掛ッてやらう』

鶴吉、おもはず眉を顰めながら、

『わたし、いやです、いやですよ。かうなッた譯も知らない方に、まづ第一あの女を追ひ出せの、ためにならないのと』

屑長また横合から首を突出して、

『わッしも御免を蒙りますぜ、あの恍けた面をした奴、ありや

ア何のために飼はれてるンだ、抓み出して仕舞へは堪りませンよ、うるさくツても生涯、此まゝ大將に離れねエ覺悟で居るンですからね』

『わたし今、こゝを出されると、また鬼に捉まツて、どンな事になるか、わからない身體、ねエ長さン』

『なアに、そッちは安心ですよ、いくら昔の友達が何と意見したところで、まさか大將が今更、そンな痛々しい不人情な無慈悲な事ア出來ますめエが、わッしと來ちやア少々、心細い、つまり他人で、可愛がりやうのねエ面で、もう萬年町を出りやア厄介な野郎だ、なるほど、彼奴だけは入らねエと』

『いえ、長さン、もし、さうなれば、わたし喰ひ付てゞも引止めますよ、紅筆に書て丸めた紙を樂屋裏で拾ツて貰ツたり、遁げ出す時には、ぽか〳〵お氣の毒に頭を毆られたりして、一方ならンお世話を掛けたンですもの』

二人の馬鹿々々しい事を耳にも入れぬ勘兵衞、腕を組で目を閉ぢながら、暫く何か考へて居たが、急に思ひ出したやうな懷中から四十兩の小判、ぞろりと出して、

『ちと安いが四十兩で賣ツて來た、まア一年ぐらゐの間、これで米味噌の不自由もなく喰へるだらう』

四十兩の小判に目を剝き出した長助、

『ぴか〳〵と威張ツて居ますねエ』

『ぴか〳〵と光ツてるンだらう』

『いや、わッしの目には威張ツて居ますよ、これを大將、どこへ入れて置くンですね、金函も土藏もなくツて、物騷ですぜ』

『きさまに預けて置かう』

『まッぴら、戸締りしなくツても貧乏安樂で、ぐう〳〵鼾を搔いて來た奴が急に小判を持ツちやア夜、おち〳〵寢られませンよ、然し濟まねエこツた、大將に侍道具の脇差を賣らして仕舞ツた』

『なアに乃公が一人でも賣る時節が來たンだ、心配するな、それが盡きると、まだ捨賣にするものがある、今日、出逢ツた友達の親切は親切、乃公は乃公の勘兵衞だ、一足飛の大名になれる戰國でも亂世でもなし、この太平の世の中に此方の思ふ通り割込める場處のある筈もなし、どうせ浪人した以上、誰に遠慮のない浪人で行くところまで行かう、二度と再び社袴を着て主取する氣もなし、また出來ない譯があるンだ、惜しい友達を失ツても構はない、これが浮世を捨てたといふのか、浮世に捨てられたといふのか、どッちでも宜い、はゝゝゝ明日の夕方、もし來ても狼狽へるな、鶴は鶴で、怯めず臆せず舞臺度胸を出して、うンと綺麗に作ツて置け、ついでに長助、きさまも顏を洗

へよ、なぜ、さう、きたない面だ、多年の屑拾ひと屑撰りで自然に沁み込だ色が取れないンだな』

『染物屋の職人ぢやアなし、これが地色ですよ』

『ねエ鶴、芝居の方では自由に作れるといふから、この顏を何とか、もう少し見よく出來ないもンかね』

『ほゝゝわたしの方は、男の顏を拵へた事ありませンからね』

『おい長助、諦めろ、きさまを贔負の鶴も匙を投げてるぜ』

『はゝゝ此方は遠の昔から色氣を投げて居ますよ』

今日の夕方、その人が押掛けて來るといはれて、風の吹く日に火の用心するやうな鶴吉と長助、そツと臺所の片隅で聲を潛めながら、

『古い元の、お友達といへば長さン、お互ひに後から出來たものは、どうしても遠慮勝に氣が引けますねエ』

『かういふ時、さう弱くなツちやア猶更、向ふが強くなツて來ますよ、なアに屑屋であらうが女芝居の俳優であらうが、そりやア、もう帳消になツて仕舞ツた身體だ、また大將だツて、まさか友達のいふ事ばかり聞いて居ませンよ』

『ですがね、さも困ツたらしい顏で、何だか心に濟まない事があるやうに見えますよ』

『そこは大將、あれで案外、情に脆い方だから少しは氣まりの惡い事があるにしろ、舞臺度胸を出して綺麗にして置けといふくらゐだ、友達の親切は親切で受けるだけのこツた、惚れた女に代へられねエ』

『長さン、冗談ぢやありませンよ』

『はゝゝ大丈夫、わツしが太鼓の判を捺して置くが、そろそろ夕方になツて來やアがツた』

『歩けないほどの大雪にでもなれば宜いに、前夜、ちら〳〵と來て今日は此お天氣』

六疊に寢轉ンで居た勘兵衞、

『おい〳〵二人で、こそ〳〵何を饒舌ツてるンだ』

『夕御飯の相談をして居ますの』

『面倒だ、茶漬にしろ』

『だツて、お客樣、入らツしやるンでせう』

『料理屋とは思ツて來ないよ、どうせ食ツて來るだらう、茶を出せば宜いンだ』

『お菓子』

『入らない、今この貧乏浪人を承知だ』

短かい冬の空、はや暮れて來て、三人の夕飯も手輕く濟み、

行燈に灯を點けたが、まだ來ない、勘兵衞は小首を傾けながら、
『どうしたか、遲いな』
心にもない相槌を打たねばならぬ鶴吉、
『お差支の御用でも出來たンでせうか』
もし無理に泊り込むといへば、夜具が御座いませンの一本槍で突出さうとする長助、わざと皮肉に、
『お住居が分ツて居りやア、お迎へに出ませうか』
くす〳〵と笑ひ出した勘兵衞、
『はゝア、二人で何か相談したな、住居も心も分ツてるが使ひは偖置、風の便りも出來ないところだ、その中から來てくれる竹馬の友で、一方は現在、かうなツた此二人、乃公は苦しい立場だが昨日もいふ通り、度し難い奴とされて仕舞へば、それで事の落着、あとは血眼になツてる鬼熊だけの始末だ、これは彼奴あの小屋もの根性の強慾一點張で來るからね、あツさりと手を引くまい、乃公は浮世を捨てた氣でも浮世の奴め、まだ乃公を捨てゝくれないわい、はゝゝゝ』

來るか來るかと思うた其日の夕暮に來ないばかりか、あけの日も、また三日目も、何の音沙汰ない、
勘兵衞は心の內で、勤めの身に御用の都合と考へて居るが、二人は互ひに顏を見合しながら、ほツとして居た四日目、まだ霜も消えぬ早朝、門口を開けようとした長助の前に立ちし川口周藏、
『田島、もう起きたか』
田島といふ苗字も始めて聞た長助、だしぬけに胸倉を取られたやうな面で、さア來やアがツたと驚いたが、ぺこ〳〵頭を下げて、
『どなた樣で御座います』
『川口が來たといへば、わかる』
分ツて居るが分らない顏をして、
『風を引いて居りまして、まだ起きて居りませンが』
『起せ』
『かやうな狹い家で、取方付けます間、暫く』
飛込だ長助、鶴吉と枕を並べて居る勘兵衞の耳へ口、
『大將、いよ〳〵來ましたよ、門口に待ツて居ますよ』
『や、來たか』
びツくりした鶴吉、
『長さン、早く床を上げて下さい』
寢卷のまゝ脫捨てゝある着物を抱へて隣室の三疊へ遁げ込み、勘兵衞も不意討に逢うた氣で、長助は內と外と兩方に狼狽

へながら、やう〳〵門口へ出て、
『お待たせ致しました、どうか此方へ、見苦しう御座いますが』
出迎へるほどの家でもないが出迎へた勘兵衛、
『横這ひして來た蟹の穴で、かう早朝から來られては、すぐに通すところもない』
『まだ顏も洗ふまい、ゆるゆる』
『どう洗うても、出直せない顏で、はゝゝゝ』
ばた〳〵臺所で火を起しかけた長助、隣室の三疊では着物を着替て鏡臺の前の鶴吉、これは多年の馴れた幕間の修行で、さのみ慌てもせずに手早い、
やツと火のある火鉢を出して、また臺所へ走り込だ長助、二度目の火に湯を沸かしながら、そツと三疊の方を差覗き、そこへ先に顏の湯を持ツてゆきませうかといふ手眞似、いえ、お茶の方を先にといふ手眞似、六疊では主客の差對ひ、
『あの翌日の夕方に來る筈を、御用の多いばかりでなく、いろ

いろと考へた思案の末、入らざる餘談を置て、今日は右か左か、その本心を聞きに來た、その前に一應、例の事、相手方の菊枝どのは世上への外聞で何の御成敗もなく、無事に長のお暇となり、また若氣の過りともいへぬ言語道斷の田島勘兵衞、これも外聞かた／＼生涯お見遁しちや、但し他家へ仕官でも致さば、その分で差置かぬは君のお言葉ないにせよ、藩中の異口同音、貴公の兄御、世取りの田島幸兵衞殿はな、半年の閉門謹愼を許された後、あらためて三分一、これは自分から願ひ上げて百石になられたぞ、勿論、弟を見付け次第、兄として斬捨てるか、さもなくば詰め腹を切らせると人々への約束』

大盤石に押へられたよりも苦しい勘兵衞、次第に俯向いて來て、ぴたりと疊に兩手を突きながら、

『一言の申開きもない、あらう筈もない、この生命、いつ何時たりとも、惜みは致さンが、もはや四年越の今日、この面を曝しに出ては猶更、君へ對して有難き思召を逆に取るやうな奴となり、また兄へ對しても、あまりの押付け業となる奴、出合頭に斬られるより外、あるまい、他家への仕官は毛頭、それないための浪人』

膝を進めた川口周藏、

『然し田島、四日前、不意に逢うたは、よく／＼の友達緣、實は刄向へぬ弟を兄の手に打たせたくない、君への申譯ないにせよ、お見遁しを幸ひ、苗字を變て浪人のまゝ其、その腕を世に出して見る氣はないか、もし不埒な勘兵衞と知れて、お咎め

でもあれば、この川口周藏、無理に勸めたと罪は引受ける、ああいふ事が禍ひの基で身の埋もれる勘兵衞は仕方ないが、勘兵衞に持ツた武術まで埋めるは惜しい、願はぬ事ながら、一朝もし松平伊勢守に何事かあれば、その時こそ生命を的に馳付けて來い、それが田島、おわびの端にもなるぞ、兄の面目も立つぞ、苗字を變て町道場を開け』

ぽとりと一滴の涙を落した勘兵衞、

『そこまでは考へずとも、出奔以來、心の申譯に田島の苗字は誰にも、どれほどの氣を許したものにも口へは出さずに來た、さほどの業は持たぬが今日、見渡したところ市中の劍道指南は稽古型ばかりで、齒痒く思うて居た折柄、但し川口、もう一年、此まゝで行きたい、此まゝ捨てゝ置てくれないか、その用意に賣拂うた脇差、一年の間は武士とも町人とも付かぬ一本差の浪浪で居りたい』

じッと考へて居た川口周藏、急に首肯いて、

『よからう、いよ／＼町道場を開くとなれば、その算勘も立てて來たが、まづ一年間、心の深痍を養生するも宜からう、ところで今朝、門口を開けた男、あれは召使ひとして、もう一人、ちらと過日、顏を見た女、はゝゝゝ詮議するではないぞ』

『問はずに置てくれ、あれも一年の後まで』

聲を潛めた川口、

『菊枝どのに似たやうなものでは、あるまいな』

腹を立てたいにも立てられぬ身、また鶴吉の素性も今こゝで打明せない、

『むごい事、そりや川口、あまりに勘兵衞を、むごたらしう扱ひ過ぎる』

『いや、友達なればこそ、こゝまで無遠慮にいうて退ける、はゝゝゝせめて顏馴染になツて置かうか』

舞臺度胸を出せというたが、もう呼び出す勇氣もない、

『一年、一年、一年の間は萬事、許してくれ』

冗談にもせよ長助に金錢上では盗賊、女沙汰では姦通した事ないぞと戯れた勘兵衞も、たゞの姦通どころか、押付けられし戀ながら君の愛妾と乳くり合うた一生涯の後悔、心に恥かしくて堪らない、

『どこへ向ても、滿足に顏は上げられない』

總身の溜息を吐いて、

『身から出た錆、磨ぎ直すには骨が折れるわい』

かうなると川口も哀れ氣に慰め顏で、

『あやまツた事、あらためるに憚かるな』

『有難い』

『をり〳〵、また尋ねて來るが、内密で、内密で、今度は男と男と忍ぶ戀の通ひ路、はツはツはツ』
長居は苦しからうと、座を立ちて、
『や、其まゝ其まゝで』
門口まで送り出さうとする勘兵衛を押戻して、立去る足音を待兼た鶴吉も長助も一度に出て來て、
『大將、きれ〳〵で、はツきり聞えませンが話しの工合ぢやア、さう分らねエ人でもないやうですな』
『わたしは、隣室で、びく〳〵して居ましたよ』
『をり〳〵また遣ツて來さうですね』
『あなたの事を田島、田島と、始めは誰の事かと思ひましたに、今まで、わたしへも』
『わざ〳〵秘した譯でもないでせう、わツしも今日が始めてだ』
『つまり、どういふ事になりましたの』
『一年、一年と頻りに一年といふ事が聞えましたね』
『わたしの耳に聞えた、菊枝殿といふのは、男の名では、ないやうですね』
　サンざ川口に遣られた上、また二人に遣られて、ます〳〵苦しい勘兵衛、いつにない滿面を皺めながら、
『今の一人で澤山だ、さう右からも左からも乃公を窘めるない、流石の暢氣者も今日は少々、まゐツた、晝寢、いや、まだ早いな、朝寢でも仕直してやらう、敵には恐れないが、味方には弱い男だ、せめて半日、そツとして置てくれ』

兩國

廣小路の人氣を背負うた女芝居の一枚看板、病氣で休むとか死だとかいへば、わい〳〵騒ぐ奴の諦めも付くが、だしぬけの不意に姿が消えて、加之も本人が遁げたのでなく、樂屋から太夫元の家へ歸る途中で何者かに盗まれたといふ事は、誘拐と人掠への多い江戸の混雜中にも十日や半月で噂の種は盡きない、
　おまけに太夫元は世間普通の興行師でなく、賭博打と御用聞と二足の草鞋を穿て來たほどの男で、鬼熊ともいはれる藥研堀の熊藏が生面を逆撫にされて鼻毛を拔かれたと笑はれ、芝居は三日の木戸を閉めた間に何處から連れて來たか、中村鶴代といふ女俳優を上置として、やう〳〵五日目に舞臺を開けたが、中村鶴吉と、中村鶴代たツた一字の相違で比べ物にならぬ雪と墨、あゝも違ツちやア見て居れねエといふ評判ます〳〵高いだけに猶更、ばツたりと見物の足が寄らない、
　その上また鶴吉を追ひ廻した川瀬彌五郎といふ戀の敵役を

幸ひの先棒にして踏込だ萬年町も、一歩お先へ遁げられた後で、もぬけの殼に目を剝き出した鬼熊、嘘にもせよ上方筋へ高飛されたと聞いては、芝居も潰され自己の面も潰され、めちや〳〵に蹂躙られたよりも無念殘念の恨みは深い、

加之も萬年町へ踏込む前の日の宵闇に向けた敵役の川瀬もろとも五人を小兒扱ひにした奴、これから廣小路の女芝居を見に行くと吐した皮肉な奴、鶴吉を盜み出したは其奴に相違ないが、はツきり其奴の顔も知らず素性も知らず居處も知らぬ鬼熊、寒中の双肌を脫いで兩の拳を振廻したところで、雲を摑むよりも手掛りがない、

『覘ツた以上は地獄の釜の底でも腕を突ツ込む熊藏だ、今に見ろ、この乃公を馬鹿にしやアがツた野郎は一思ひに殺さねエ、此方の日割勘定で慰み半分の弄り殺しにするか、簀巻にでもして大川の水漬にしなければ腹の蟲が納まらねエ、また阿魔は廓へ叩き賣ツて全盛の花を咲かすも癪だ、田舍の飯盛に投げ込で、あの面を瘡ツ搔きの膏藥張にしてやるンだ』

子飼の女俳優が年頃になりて好いた男を拵へ、戀の闇路に遁げたといふだけの事、こゝまで毒々しく覘はずとも、商賣物の紛失を探すといへば濟む筈を、多年の惡黨自慢で、かういはねば

立たぬ鬼熊、また見付け次第に鬼の本性を現はして、さうするかも知れない、

この鬼熊に血眼で覘はれた勘兵衛と鶴吉は、この廣い江戸市中に油斷のならぬ陥穽を作られたやうなもので、うツかり門口へも出られず、星影のない闇の夜半でも、うか〳〵安心して外を歩けない、

今日も新世帶の買ひ物に彌勒寺橋を渡りて南森下町まで來た長助、小名木川の高橋から出て來た萬年町の幸助とばツたり出喰して、

『やア長さン、酷いね、外のものア兎も角この幸助に一言もなく、まさか夜遁げでもあるめエが、だンまりの引ツ越は酷いよ、とンだ上方の旅だ、馬鹿正直で本氣に受けて居たぜ』

『はゝゝゝすまねエ、すまねエが幸さン、あゝするには一時、あゝいはなければならねエ譯があるンだよ』

『今、どこだ、大將も例の綺麗なのも一緒だらう、あとの祭りに騒いで來た奴から聞いたぜ長さン、ありやア廣小路の名物女で、俳優ぢやアねエか』

『來やアがツたか、どうせ押掛けて來るだらうと思ツて、その前に奴等の頭の上を越て仕舞ツた藝だよ、ぢやア大略、わかツたらうが幸さン、とツ捉まると芝居でする明鴉の浦里よりも可

哀さうな女だから、つまらねエ口を辷らさずに置てくれよ、實ア大將だツて懷中へ飛込で來た小鳥だ、みす／＼網を張ツてるところへ放せねエだらう』

『貧乏しても男だよ、長さンに對してゞも、そンな罪な事をするもンかね、だが油斷ならねエぜ、あれからも三四度、いやな野郎が蚤取眼で樣子を見に來やアがるンだ、然し情は人のためならずさ、大將あの氣風で長屋中へ米俵を轉がし込だ一件、たしかに利いてるね、だれ一人だツて、よけいな事を饒舌る奴アねエよ』

『其うちに幸さン、また米俵を運び込む事もあるからね、一番こゝは長屋中が氣を揃へて、たのむぜ、おめエを疑ぐるンぢやアねエが今、どこに居る事も聞かずに置てくれ、好い工合の汐時を見て、此方から出掛けるよ、この六百文、買ひ物に出ようと思ツて居た六百だ、今夜の寢酒でも飲で貰はう』

『よしねエ長さん、買ひ物の錢を途中で』

『宜いよ、今日に限ツた買ひ物ぢやアねエ、持合して居りやア二朱か一分になる筈を、おめエ、まだ運がねエンだ、はゝゝゝ』

無理に六百文を手に握らせて、これにも方角を知らせたくない長助、もう買ひ物の用もないが、わざと其まゝ南の方に向ひ、北へ行く幸助と別れかけた時、ひよいと横合から飛出した奴、

『おい、少し聞きてエ事がある』

二三度も萬年町へ樣子を探りに來た奴で、屑長の顏は知らないが幸助の顏を見て、ぐいと手首を摑むや否、しまツたと素早い長さン一目散に遁げ出した後で、

『さア野郎、今こゝで立話をして居て遁げたなア誰だ、どこの奴だ、始めてゞねエ乃公の面ア分ツてるだらう』

長さンに遁げられて人質のやうに手首を摑まれた幸助、青くなりながら、

『知りませンよ』

『知らねエ奴と立話しをするけエ』

『久しぶりに逢ツたンで』

『嘘を吐け、ちらと耳に這入ツたぞ、ありやア女俳優でねエかと、萬年町の長屋に住で居る奴が女俳優といふ以上、同じ穴の狸だ、うめエ證據を握ツた、おとなしくすりやア荒ツぽい事しねエ、乃公の行くところまで隨て來い』

『きよ、今日は阿母の命日で、これから靈巖寺の隣りの淨心寺へ墓、これでも親の墓アあるンですよ、その墓參りをせうとする途中で』

『はゝゝ狼狽へて居やアがる、靈巖寺は過ぎた後で、高橋を此方へ渡ツて來たぢやアねエか』

『いえ、墓參りをして來た日で、こンな迷惑に引ッ掛ッちやア佛に濟みませンよ、どうか今日だけは、貧乏ゆるぎも出來ねエで居處の知れてるもンぢやアありませンか』

『文句なしに兎も角も、藥研堀の親分に逢ッて見ろ、それとも今、遁げた野郎の巣へ乃公を連れて行くか、どッちが前でも後でも構はねエ』

南森下町から入片町へは彌勒寺橋を渡るだけの事で、三四町の間を韋駄天の如くに遁げて來た長助、門口も閉め忘れた息切れの口早に搔い抓ンで置て、

『たゝ大將、助けてやッて下せエ』

返事もせずに首肯て腰に大刀の一本差、編笠を面深の急ぎ足で、彌勒寺橋を渡らうとする時、森下町の方から手首を摑まれたまゝ引ずられて來る幸助、目に見馴れた勘兵衛の編笠姿で、急に心強くなり出し、

『どこまで行くンですね、お上の捕物ぢやアなし、放して貰ひてエ』

『生意氣な事いふな、默ッて歩けよ』

『な、何を惡い事したンですね、誰と立話しをせうが此方の勝手だ、聞く事がありやア其方から萬年町へ來るが宜い』

『この野郎』

『どの野郎だッて理窟は理窟だ』

橋の中央で、ぽかりと橫面を喰はされた幸助、

『毆りやアがッたな』

『まだ足らねエか』

もう二つ三つ喰はしてやらうと、握り拳を振り上げたところへ、すれ〳〵に通りし編笠、その二の腕へ手を掛けたかと思へばまるで、小兒の人形を弄ぶやうに、ぐるりと一まはり舞して置て引寄せ、引寄せた奴の藻搔く動機を腰車に乘せた早業、おまけに彌勒寺橋の上から六間堀へ抛げ込だ手輕さ、抛げた方は手輕い業でも極月の寒中に水の中へ眞ッ逆さまの奴は手輕くない、ざンぶと音高く水煙を立てゝ加之も浮ぶか沈むか、それに構はず、さッさと平氣に橋を渡り行く勘兵衛の後姿、あまりの早さに呆れた幸助は言葉も掛けられない、其まゝ後へ引ッ返して遁げ出したが、これを向ふ河岸の物陰から見て居た長さン、ぶる〳〵と震へて、

『おッかねエ人だ』

走ッて歸ッた長助を待兼ねて、浮世繪の生きたやうな顏に心配らしい鶴吉、

『どンな事が出來たンですの』

『どうも、かうも、手品を使ッてるやうだ、こッちから見て居

て大將の編笠が橋の欄干越に動いたかと思へば、野郎が一疋、どこで習ツて來やアがツたか、みごとに手際よく宙返りして川の中へ、あゝなる型に出來た芝居の舞臺だツて、あゝは行きますめエ、それを見向きもせず、悠々と歩き出した大將、凄くなりましたね』

『まア、そンな事があツたンですか』

『其また大將を、ころりと遣る人があるンだから恐ろしい』

『どこに』

『こゝに』

『長さン、お禮をいひますから此方へ來て下さい』

『やア御免なせエ、冗談だ、はゝゝゝ』

その邊を退屈まぎれに歩いて來たやうで、ぶらりと懐手のまま立戻りし勘兵衞、笠を脱いで笑ひながら、

『長助、何でもなく、すンだよ』

『あれぢやア何でもなさ過ぎますよ』

『見て居たのかい』

『もし面倒なら助太刀に飛出さうかと思ひましてね』

『はゝゝゝその心掛けで安心した、鶴、乃公が居なくツても大丈夫だぞ』

『いえ、あなたが居ないと長さン、現に今も』

『しツ、隣家の猫め、あンなところに首を出して居やアがる、よけいなこツた、しツ、しツ』

その

野郎、簀巻にして大川へ水漬にすると喚き出した藥研堀の鬼熊、その前に自己の子分が彌勒寺橋の上から六間堀の川中へ投げ込まれて、幸ひ泳げるために溺れ死もしないが、寒中の濡れ鼠にされたばかりか、あツといふ間もない早さに木の葉の如く飛されたと聞て、畜生、ふざけた眞似をしやアがると吐鳴りながらも、實は聊か心の底に薄氣味が惡い、

情夫に金と力はない、色男の相場は昔から今に至るまで、ひよろ〳〵した奴で、吹けば飛ぶやうに出來て居る筈を、此方から向うたものが吹飛されるとは、ふしぎに相場外れの凄い奴、そりやア一筋繩で行くめエと、いくら思案を仕直して見ても、編笠の浪人風といふだけで、やはり素性も居處も分らない、

然し上方筋への高飛は嘘の皮で、森下町の立話しから直ぐに現はれて來た足取は、たしかに其奴その近くに相違ないと、そろ〳〵方角を嗅ぎ出された勘兵衞、鶴吉は猶更、ちらと障子に映る鳥の羽影ほども見せられない、

世間の忙がしい師走の二十三日、この年の瀬に追はれもせぬ風で、ゆッたりと彌勒寺橋の上を南より北へ通る深編笠、その背後から六七人の荒男が額越の眼に隨て來て、

『やい編笠、待てッ』

振り返りし編笠、

『何の用がある』

『往來を呼止める商賣ぢやアねエ、用があるからだ、いやに今日は飾ッて居やアがる』

『無禮ものッ』

『無禮ものだア、眞面目な侍らしい事を吐すよ』

『や、此奴め』

『此奴も何奴もあるか、うぬに無禮咎めをされるもンぢやアねエぞ、此方から骨を粉にしてやらうと思ッて來たンだ、女盜賊め、俳優ッ喰ひ奴』

片手に編笠を脫いで片手に大刀の柄を握りながら、

『松平伊勢守の家來、この川口周藏に女盜賊とは、言語道斷、けしからン事をいふ奴、そッ首は胴に付けンぞ』

案外の人違ひと見て、わッと走り出した中から遁げ後れた奴の襟首を摑むや否、足蹴に引倒して取て押へ、

『不埒千萬な奴共、おのれを詮議する』

『まゝ眞ッ平、人、人違ひで御座います』

『人違ひ、身に覺えのない事、人違ひに相違あるまいが、無禮は許さン、人違ひの仔細を申し聞いた上で無禮打の覺悟せい』

『お助け、人並の數にも當らねエもので御座います、お助けを願ひます、實は此邊に編笠の浪人で、廣小路の女俳優を盜ンで遁げた奴が、そ、其奴と間違ひましたので』

この邊で編笠浪人、女俳優を盜み出したと聞て、はッとした川口周藏、

『こら、助けてやるが、何といふ女俳優か』

『一枚看板で、中村鶴吉と申します』

『ふウ、して汝は』

『盜まれました太夫元の子分で、それがため芝居は、めちや〳〵で御座います』

この上の詮議したくない、わざと笑ひ出して、

『はゝゝ間違ひにも人違ひにも程度のある奴、行けッ』

生命から〴〵遁げて行く奴を見返りて、暫く橋の袂に思案の腕を組で居たが、急に足を早めて入片町へ勘兵衛の門口、

『田島、田島』

臺所口の腰障子を開けて首を出した長助、すッと引ッ込めて鶴吉の耳へ、

『過日の難かし屋が來ましたぜ』

『むつかし屋、長さン、そンな事いふと叱られますよ』
『だツて難かしい事を並べる人だ』
田島と呼ばれた聲に勘兵衞が出て、
『やア、これは』
『また遣ツて來たが、差支は』
『ない』
いかにも心易げに通りて、打解けた笑顏、
『かうして居れば年の暮も、正月もなからう』
『人交はりもせず、世間に離れた氣樂さで』
『はゝゝゝ時に田島、鶴吉は、どうした』
過日、ちらと顏を見たゞけで、名を知る筈もない川口から不意に鶴吉といはれて、流石に赤らみし勘兵衞の面を射るやうな目で、
『どうして田島、さう女の盜み癖が付いた、一度ならず二度までも、たとひ

如何やうの譯あるにせよ、取られた方から見れば正しく生盜人に相違ない、あたら男で居ながら、なさけない、何が不自由に、さういふ淺ましい事をしてくれる』
それはと、口まで出かけたが、今更こゝで誰に聞て來たかともいへず、第一また我身の潔白も立たぬ勘兵衞、兩眼を閉ぢて

差俯いた横顔に聲を潜めながら、
『大名のお部屋から芝居小屋の女俳優とは、田島、あまりに念が入り過ぎるぞ』
襖越に耳を欹てゝ居た鶴吉、かうなれば隱れて居れない、そツと開けて、坐りながら靜かに辷り入りし身の運び工合は、やはり舞臺馴れた修行で、もはや少しも惡びれずに、
『わたくしが中村鶴吉で御座います、兩國廣小路の芝居小屋に賤しい未熟な藝を恥かしくもなく、人樣に見せて居りました女俳優で御座います、さもしい事を申上げますが、太夫元の親方へは長年の間、晝、夜、目の舞るほど一生懸命に働きまして、損を掛けた覺えのないもので御座います、それを絞り足らいで、藝の外に身を賣れと無慈悲な難題、或時、居るに居られぬ苦しさのあまり樂屋裏から逃げ出しましたところへ運惡う、通り合した人、助けられましたのが基で、盜むの盜まれたのと、ほゝゝゝちよいと持運びの出來る手輕い品物では御座いませンし、少しは舞臺稽古も致して居ります身、もし盜まれまいと思へば、さう小兒のやうに掴まれもせず、すりぬけて外へ走る事も存じて居りますが、どこへ行くにも行きどころのないもの、どうか此まゝ置て戴きたいと、實は、わたくしから無理に願ひまして』

額越の目千兩に勘兵衛を見て、
『あなた、なぜ、はツきりと、さう仰ツしやらないンです、お聞き申せば、御兄弟のやうな間柄ぢや御座いませンか』
こゝが急所で、大切な場合と思へば、年は十九でも、うぶの函入娘でない鶴吉、覺えた科白でないが一言の淀みもなく演べ立て、川口周藏に向ひ、目に涙を浮べながら、兩手を合した容らしさ、
『田島、もう歸る、門口まで出てくれ』
勘兵衛を門口へ連れ出して、
『あれは、あのまゝにして置けよ、なか／＼、しツかりしたところがある、然し太夫元とかいふ奴の手は、この邊に廻ツて居るぞ、油斷するな』
實は今あの橋の上で、これ／＼と委しく話して、懷中の紙入より十兩の金、
『さうでなくとも今日、持ツて來たが、これは田島、あれに遣りたい』
押戻さうとする手を拂うて、
『あれに渡せ』
内では臺所から這ひ出した長助、鶴吉の前に例の頭を振立てながら、
『叶はねエ、あゝなると本職だ、迚も叶はねエ、うまいもンだ、そツと覗いて居ましたが、幕切れの泣き落しに手を合して拜ンだ工合、好い型でしたなア』
くやしまぎれの鶴吉、長助の手を搔き捲りて、
『芝居ぢやありませンよ』

脇差の四十兩、川口周藏の十兩、合して五十兩は世間を張らぬ一年の三人暮しに何の不自由もない當時の大金、年の暮が來ても大晦日が來ても、浪人住居の氣樂さ、わけて長助は生れて始めての天下泰平、
『おかげで今年の暮は樂隱居してるやうなもンだ、あンまり樂すぎて身體の始末に終へねエ、何か忙がしい用はありませンかね、鐵砲笊を荷いで出ると江戸市中、きのふ今日は煤拂ひの大掃除で、屑屋の書入れ時ですがなア』
我身の前後を考へて見れば、安樂でも泰平でもないが、顏色に出さず笑ひながらの勘兵衛、
『はゝゝやはり屑屋が戀しいかい』
『ど、どうしまして二度と再び、あンな商賣したくはありませンが、かうなると手持無沙汰で困りますよ、今頃は萬年町で長屋中の大騷ぎでせうよ』

『貸借の出來ない長屋中に年の暮の騷ぎがあるかね』

『ありますよ、一文だツて貸すものゝねエところへ借金取の來る筈アありませンが、あれでも大將、正月が來るとなりやア餅騷ぎだ、飯は喰はなくツても人間並に正月を祝ツて、のし餅の一枚ぐれエ、何とか工面したいのが人情ですよ、わツしは去年の暮、三日の稼ぎで二朱と八百の錢を殘した大盡氣取に例の幸助、お人よしの彼奴が可哀さうですからね、さア一枚、買ツて來いと錢を渡すや否、野郎め有頂天の横ツ走りに飛出しましたが、急に歸ツて來ねエ、餅屋ア一町足らずのところで何をして居やアがるかと、ふしぎに思ツて居ると大將、生憎その大晦日の前は二日續きの雪なら宜いが、どしや降と來て、嬉しさの餘りに慌てゝ歸る途中、泥ツ溜りの中へ落しやアがツて、まツ黑になツた餅を提げた泣ツ面、やア長さン、すまねエといふ拍子に野郎その餅で顏を隱したから堪りませンよ、おまけに今、搗いたばかりの柔かい奴で、べツたり喰ツ付て仕舞ツて急に取れねエ、はゝゝゝやう／＼放して見ると、目も鼻もねエ化物だ』

その幸助の顏を知ツて居る勸兵衞も鶴吉も猶更の可しさで、轉げるやうに笑ひ出したが、また哀れに眉を顰めて、

『おい鶴、あの場合、お前は二日でも三日でも身體を置た樹蔭だ、また乃公のためにも迷惑した男だ、あすは大晦日で今夜の內に餅の二三枚と幾何か付けて遣りたいね』

鶴吉も思はず小膝を進めて、

『是非、さうして下さい、罪のない好い人ですからねエ』

『どうだ長助、ついでに今夜、外へも一枚づつ配らうぢやないか、三月越に一蓮托生の仲間入して來た勸兵衞だ、あかの他人が困ツてるとは思へないよ』

ぽンと手を叩いた長助、

『この前は四俵の握り飯で、この暮は餅の總振舞ひ、功德になりますよ、どこに居るか知らねエでも陰ながら大將の御無事を祈りますぜ』

『然し長助、うるさい時だ、あの萬年町から何か手蔓を引出さうとする奴等が覘ツてる時だから、うか／＼また調子に乘ツて、よけいな事を饒舌るな、默ツて幸助のところへ運び込だ上、あとで配らした方が宜からう、きさま口を出したり手を出したりすると却ツて、よくないぞ』

『や、その邊は大將、ぬかりませンよ』

『早速、餅屋へ注文しろ』

『ありがてエ、こンな伸々とした氣持の宜い年の暮は始めてだ、これが四十二の厄當りといふンですね、はゝゝ』

『なるほど、來年は四十三だな、いつの間にか乃公も二十九に

なる、向ふ一年また此まゝとすれば三十年を反古にして仕舞ッた、鶴も二十歳になるンだな』

『いやですねエ』

『いやでも一人だけ年を取らずに居れまい、はゝゝゝもし舞臺

に出て居るとすれば、これからが女俳優の生命で、たまらない正味が出るンぢやアないかね』

『知りませン』

『長助は四十二の厄當りだが、お前は女の十九で今年が生涯の大厄だツたね、どンな男でも撰取りの出來る中から、わるい男に』

ぷいと座を立ちし鶴吉、

『長さン今朝お掃除、まだでせう、ぐづ〳〵何をしてるンですよ、わたし掃き出しますから拭いて下さい、おいやなら遣りますよ、お晝の買ひ物、宜いンですか、水瓶、汲であるンですか』

追ひ立てられるやうに慌て出した長助、

『大將、つまらねエ事いはずに置て下さいよ、いち〳〵此方へ風向が荒く來るンですか

らな、やれきれねエ、はゝゝゝ』

百兩の小判を拾うたよりも、すツとして好い氣持の長さン、すぐに餅屋へ飛込で、のし餅を二十枚の注文、

けふの夕方までに頼むぜと念を押して、日の暮れるを待兼ねたが、風呂敷で背負へる筈がない、餅屋の小さい手車を借りて曳き出した嬉しさ、高橋と正覺寺橋を渡りて、萬年町へ來ると、むく／＼と俄かに鼻の頭が高くなりし心地、

そツと長屋の入口から様子を窺へば、もはや今年の暮を觀念した兩側は戸を閉め切りて、ひツそりとした哀れさ、餅車を一間ほど引込で置て、忍び足に幸助の門口を開けると、身の膏は盡きたらしいがまだ少し行燈の油があると見えて、燈心一筋の薄明りに腕を組みながら、ぼンやりとして居る、

『おい幸さン』

『やツ、長さンか』

『靜かにしろ、のし餅を持ツて來たンだ、別に一朱が添へてあるンだ、大將からだぜ』
『おらア泣くよ、長さン、泣くよ』
『泣く前に、おめエ何枚ありやア宜いンだ』
『何枚、持ツて來てくれたンだよ』
『二十枚』
『えツ、二十枚、さうは一時に食へねエ、黴が生えるよ』
『知れた事いへ、兩側で十七軒だから一枚づつとして三枚、いや四枚、おめエの分だ』
『見せてくれ、兎も角も二十枚、どンな面をして居やアがるか餅の奴が重なり合ツてるところを見たいよ、どこにあるンだ』
『長屋の入口にあるから一まづ此家へ運び込で、おめエが配り役だ、乃公は忙がしいから後を賴むよ』
『さうすると毎年この暮は餅の心配ねエな』
『馬鹿野郎、人の好い割に慾張ツて居やアがる、近處が騷ぎ出すと面倒だ、早く出ろ』
幸助を連れて長屋の入口へ來ると、一人の奴その餅車の梶棒を摑む背後に三四人の奴が居て、
『おい、この年の暮この長屋に餅車たア年代記にもあるめエ、どういふ譯で何處の何奴が運び込ましたか、見當は付てるが幸ひの證據に誂へ向の押へもンだ、大晦日の帳尻は金錢ばかりぢやアねエ、女盜賊の勘定もするンだ、さア惡く間違ツて動くと身體が長く伸びるぞ』
三尺の一方口で奥に逃げ場のない袋長屋、わめいても叫ンでも入片町へは聞えず、いくら力ンで見ても幸助と長助の二人では手も足も出ない、

（つづく）

快刀亂麻の如き齒切れのよい快筆、瀟洒な筋の展開、全く息をもつかせぬ面白さです。今や本篇は天下至るところ大評判大人氣です。まだお讀みにならぬ方がありましたら是非御吹聽下さい。

忠烈義烈、萬人感動！
實に面白い、實に痛快!!
評判講談 黑田騷動
栗山大膳誠忠錄とも云ふ。芝居や映畫でもヤンヤと云はせた類のないお家騷動を背景に忠臣大膳の大活躍。講談獨特の面白さ!!

布装美本 定價一圓・送料十二錢・大日本雄辯會講談社

都會を憧れて

浅原六朗

小說『嘆きの都』を讀んで、中村武羅夫さんの數多い作品のうちでも、時に女性の運命を描いて哀切、その變轉のなかに悲壯な感情をもつた作品だと思ふ。しかも、これらの哀切なる運命が、單に作者の空想的ロマンスから出發せず、もつと現代の社會問題のなかから出發してゐる處に意義がある。

都會中心の文明は、田園に多くの悲劇をもたらした。都會を憧れ田園をきらふ青年子女、農村は捨てられ、老いたる父母は嘆き、都會には無數の地方からの子女が集まつた。都會の誘惑の中で、彼女たちは、どんな悲劇と幸運を經驗しなければならないか。

現代日本の大きな問題だ。そして若き女性にとつても大きな問題だ。この問題を作者はあくまでも誠實にとりあつかつた。讀む者をしてしぼるやうな涙をながさしめる。

× × ×

華やかな燦たる文化の裏面、それは醜き愛慾物慾恐ろしき誘惑迫害の渦く戰慄すべきルツボである大都會、大東京の眞中に北國の寒村から、多難多岐の半生を踏み出す純情の一處女の血淚受難史、中村武羅夫先生著『嘆きの都』は一年中で一番誘惑の多い春を控へて『本書こそは現代の世相を暴露し、若き青年子女へ一大警鐘を亂打せる名著だ！ 青年子女は勿論、親達も是非一讀して置かねばならぬ』といよ〱大評判、飛ぶ樣な大賣行です。まだ讀まぬ方はすぐ御一讀下さい。定價一圓六十錢送料十四錢本社發行

少年時代の讀物の感化

山中峯太郎

少年にとつて、偉い人の傳記を愛讀するは、實に有益な事である。それは、英傑の行蹟と人格とが、知らず識らずの中に、少年の人格を立派に感化するからだ。

僕は今度、大日本雄辯會講談社から發行された『少年講談』を讀んで、痛切にその感を懷いた。實に、少年時代の讀物の感化は、その人の生涯に、重大な影響を及ぼすものだ。殊に、將來の日本を雙肩に負ふ少年少女諸君の讀物として、この『少年講談』こそは絕好のものであると思ふ。

× × ×

全十三篇、何れも名篇傑作揃ひ！ 少年少女諸君大熱狂大評判。而も大人が讀んでも面白く一家中皆で樂しめる絕好の家庭讀物！

▲塚原卜傳 ▲近藤勇 ▲左甚五郎 ▲笹野權三郎 ▲孫悟空 ▲堀部安兵衞 ▲塙團右衞門

▲由井正雪 ▲山中鹿之助 ▲彌次喜多道中記 ▲岩見重太郎 ▲寛永三馬術 ▲里見八犬傳

（各冊八十錢 送料十二錢）

三ブちやんのお花見
小寺鳩甫作
花が咲きました
野にも山にも……
あの着物はたしかに姉ちやんだ
姉ちやんはいつ腰が曲つたんだらう
あら三ブちやん
えゝッ
今日はお花見だよ

⑥
おーい君ッ……待つてくれ給へッ……
⑦
いようーこれは三ブちやん
⑧
おぢさんも今日は花見なんだよ
⑨
おや母ちやんのやうだが今度は化かされないぞッ
⑩
三ブちやん三ブちやんてば
⑪
なぜ返事をしないの
ええッ

12
さあーお花見に行くのよ
いやだいッ
13
その人たちは旧式なのよ
お化けする花見はいやだいッ
14
お化けを人に見せる人花を見ない人なんだね
そうそう早くしないとお父さんお待ちかねよ
15
ぼくらがほんとに花見をするのだね
そうだよそうだよ
16
おみやげは帰りに買ふものだよ
17
ぼくお腹がへつちやつたんだよ

ご馳走を喰べたのだからしつかり歩るくのだよ
お父ちやんもう歸へらうよ
たいだまッ
いろいろご馳走をたべてねおみやげ買つてね
……
花はすつかり咲いてて？
……
三ブちやんも矢張り花を見無い組だつたのね

大日本雄辯會講談社ニユース

滿洲青年慰問團 社長邸訪問

滿洲派遣軍將士慰問のため、今回報知新聞社にて組織された、擧國的青年團代表二十餘名の慰問團は、去る一月十一日東京出發以來、奉天、新京、チ、ハル、山海關と、滿洲各地を馳せ巡り、見事にその重任を果たして歸京、二月三日、社長邸を訪れました。社長は永く引籠中にも不拘、邸内にて盛大なる午餐會を催してその勞を犒ひ、代表團の土産話を興味深く聽取されました。

尚、その節、社長の演說は報知新聞映畫班によりトーキーに收錄されました。

本社出版部の大活躍

矢繼早に續々と良書を世に問ひ出版界讀書界の絶讚驚嘆を博しつつ、飛躍的な發展を遂げ來つた本社出版部では、陽春の候を迎へ、更に勇躍、努力又努力、一段と苦心研究を重ね、左の如き優良書を世に送り出すことになりました。

日本イソップ繪物語

本書は數多いイソップ物語の中から、特に子供達の喜ぶもの百一篇を選び、之に美麗な挿繪が總計約五百枚もついて、只繪を見るだけでも面白いもの、著者はラヂオの子供の時間や、幼年倶樂部で小さな子供達の間に大人氣の村岡花子先生です。（定價一圓三十錢）

少年少女小說の廉價出版

『少年倶樂部』『少女倶樂部』に連載され、少年少女間に熱狂的の大人氣を博した評判の五大小說が、稀に見る大廉價で出版されることになりました。

南洋一郎先生著『吼える密林』
佐藤紅綠先生著『少年聯盟』
佐々木邦先生著『村の少年團』
山中峯太郎先生著『萬國の王城』
千葉省三先生著『陸奧の嵐』

米國新大統領『ルーズベルト』

大江專一先生著

著者は在米十七年、ルーズベルトに私淑せる新人。いまや世界の富强米國を背負つて立つ彼の經歷人物抱負を、最もよく描ける、萬人必讀の大快著。（定價一圓三十錢二月末發賣豫定）

三上於菟吉先生の『日本の魂』近く出版

別欄にもある通り、三上先生はいたく時局に感ずるところあり、廣く日本國民に訴へんと、山陽先生の日本外史にも比すべき『日本の魂』目下大熱意を以て執筆中。

早くも大活動を開始した 全國巡回教育映畫會

第二國民の德性涵養、思想善導の大目的を以て新に設立された本社全國巡回教育映畫會では、更に陣容を整へ、玆に實益興味兩全のフイルムを嚴選し、東京近縣を皮切りに、全國巡回の壯途に上りました。刻下非常時の際、此の有意義な企てに對し熱烈なる御援助を賜はります樣、更めて御願ひ申し上げます。

壓倒的大賣行 愈々評判の キングレコード

日に月にその聲價を高め、壓倒的賣行を示して來たキングレコード部では、新に淸新明朗な傑作盤を製作、愈々家庭に街頭に華々しく送り出すこととなりました。

兒童劇『笑ひの關所』ダンス・ミュージック『東京うれしや』『街の日ぐれ』流行歌『君泣けば』『淚なき國』行進曲『海の小夜曲』『空の行進曲』小唄『からかさ』『有明』落語『支那そば』朗讀『落花の雪』琵琶『城山』等、凡て材料、歌詞、演出者の選擇に、他の追隨を許さぬものがあり、今や斯界の王座を獲得せんとするの盛況にあります。

新學期をひかへ 注文殺到の『自習画帖』

本社出版の『自習画帖』は、之さへあればどんなに圖畫が嫌ひな生徒でも必ず好きになれるし、好きな生徒は益々上達すると云ふので、何處の學校でも、何處の家庭でも大評判です。見るだけでも面白く、手本としては一番。新學期には是非子弟に與へたいと、各學校や書店からの注文が早くも殺到してゐます。

『イノール』は大評判

最も進んだ胃腸藥として、非常な好評を博してゐる『イノール』は、田口醫學博士多年苦心研究の結果だけあつて、醫家も推奬され、一度用ひた方は、その効果に驚嘆されて居ります。

『どりこの』の海外輸出 日増しに激増

本社發賣の滋養料『どりこの』は、近時三井物產、住田物產兩會社の手を經て海外への輸出が日に盛んとなり、歐米でも非常な歡迎を受けて居ります。

惜しまるゝ 故 丸山豐作氏

社員丸山豐作氏は一月三十一日午前零時半心臟狹窄症の爲に、忽焉として長逝された。氏は明治二十六年群馬縣山田郡毛里田村に生れ、大正五年群馬縣師範學校卒業後、直ちに教鞭を執られたが、野間社長の崇高なる人格と、雜誌報國の尊き理想に感激し、同十三年本社社員となり、永らく少女倶樂部編輯局に勤務、恪勤今日に至つたものであるが、その圓滿なる性質と、眞摯熱烈なる態度とは、全社員の欣慕尊敬の的であつた。

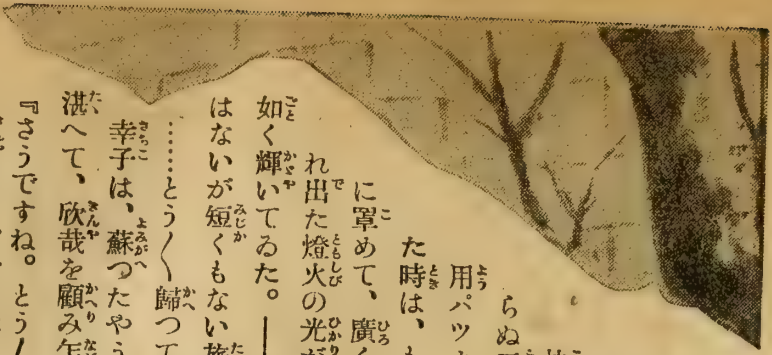
年齒四十一、その人格力量共に今後大いに期待さるべきの秋、遂に不歸の客となられたことは、悲しくも惜しき極みである。

長篇小說

晴曇

久米正雄
大橋月皎畫

戀人幸子を黒田に奪はれた辻村は、其黒田に懷姙の身で捨てられた房子を、同情から我妻とし、前者の結婚式に同伴で臨んだが、席上房子は俄に産氣づき、恰も黒田等が箱根の旅舍で、初夜の歡喜に醉つて居る時刻、死の苦と共に男兒を分娩した。折柄駈けつけた彼女の妹貞子は、辻村と二人、複雜な感情の裡にも無事の出産を喜んだが、それも束の間、出血過多の房子は、漸う貞子に嬰兒の養育と、辻村の世話を願ふ悲痛な言葉を言ひ殘した儘、再び醒めぬ眠りについてしまつた。(前號迄の梗概)



待つてゐたもの

　春のやうな幸福の名殘りと、淡く快よい旅疲れに、夢見心持の失せやらぬ二人を乘せて、東京驛差廻しの自家用パッカードが、駒込の斯波邸へ歸り着いた時は、もう仄青い黄昏の色が、門内の樹々に罩めて、廣く迎へるやうに開かれた玄關に、溢れ出た燈火の光が、恰も二人の新生活を、祝福する如く輝いてゐた。——新婚旅行に出てから五日目、長くはないが短くもない旅路の果に、彼らは吻と息づいた。

……とう〳〵歸つて來たわね、私たちの家へ。——』

　幸子は、蘇つたやうな頰に、最早他人ではない微笑を湛へて、欣哉を顧み乍ら云つた。

『さうですね。とう〳〵。……』

　欣哉も、意味の深い微笑で應じた。

『私たちの新らしい部屋、もうすつかり用意が出來てゐるかしら。』

『さうですね。——もうちやんと出來てますよ、きつと。』

　斯波家では、結婚後の彼等の生活のために、邸の裏手の方へ、廣く深い庭を潰して、別棟の新邸を建て、それを渡り廊で連絡するやうに、前々から準備をしてあつた。その新築が、彼等の結婚と殆んど同時に出來上つて、新婚旅行から歸る迄には、家具調度其他一切、整ひ盡してゐる筈だつた。

『どんな風に出來上つたかしら。』

『さア。——君が設計した御自分の部屋と云ふのは、きつと素晴らしいものになつてゐるさ。』

『さうだといゝけれど。……早く見たいわね。』

　車は、やがて玄關口へ、スーツと辷り入つて、ピタリと横付けにされた。

　見ると、玄關の敷臺の向うには、女中たちが並んで、——恐らくは半ば好奇に滿ちた眼で、若主人夫婦の初めての歸りを、迎へてゐるやうだ。

　が、幸子は、運轉手の戸を開けるのを待ち兼ねて、少しも惡びれずに、裾を飜して下り立つた。彼女よりも寧ろ、欣哉の方が少し恥れて、もぢ〳〵顏を赤くし乍ら、それでも新郎の貫祿を見せて、ゆつくり續いて下りた。

『……お歸り遊ばせ。』『お歸んなさいませ。』

　女中や小間使たちが、口々にさう云ふ中を幸子は『只今。』と

鳥渡點頭いて、草履をぬぎ初めた。

『まア、お孃さま！』女中たちの中から、古くから居る淸が、驅け寄るやうに前へ出て云つた。『お目出度うございます。御立派な奧樣におなんなすつて。――でも、ちつともお變りなく。……でももうお孃さまでなくて、ちやんとした奧樣でゐらつしやるんですものねえ。』

彼女はさう云ひ乍ら、急に淚をはら〳〵と滾した。

『まア、厭な淸。――そんなに冷すもんぢやないわ。』

『旦那樣も、お目出度う存じます。――ほんとにまるでお二人とも、畫に描いたやうで。……』

『いや、どうも難有う。』

欣哉は仕方なしに苦笑する外無かつた。

『ねえ、淸や、お母さまは何方？』

『御居間にゐらして、お歸りを待ち兼ねていらつしやいます。奧さまも旦那さまもさぞ、お喜びでございませう。』

『ねえ淸や。それから私たちの部屋は、もう片づいてゐて？』

『え〻〳〵。それはもう、何から何までちやんと。――お二人がお入りになれば、それでもう何もかも宜しいやうに。……あのお孃さまの、いえ奧樣のお新らしいピアノが、お部屋一ぱいにのさばつて、待ち兼ねて居りますよ。』

『さう。もうあのグランド・ピアノが入つてるの。』

『ですけれどまア、早くお奧へ御挨拶にいらして、それからゆつくり離屋の方へ、おいで遊ばしませ。其間に淸やが、すつかり燈火を點けて置きますから。……』

二人は、拭き拔いた廊下を傳はつて、父母の居る奧の居間へ赴いた。

そこには、彼女の父母であり、彼の舅姑である斯波氏夫妻が彼らの來るのを待ち兼ねてゐた。

『お母さま。只今！　あら、お父さまもゐらしたのね。』

幸子は飛び付くやうに云つた。

『何ですねえ、幸子。立つたまゝでそんな事を。もう子供ぢやアないのに。』

『あら、御免なさい。』彼女はやうやく膝をついた。『でも、ほんとに懷しかつたんですもの。……』

『お蔭さまで、只今、無事に旅行を濟ませました。難有うございます。』

後から從いて、欣哉がさう畏まつて挨拶した。

『あゝ、お歸んなさい。』母夫人は滿悅した顏で、二人を並べ眺めた。『でも、ほんとによかつたねえ。』

『いや、御苦勞、御苦勞。』

父も云つた。――何が御苦勞だか、鳥渡幸子には可笑しかつたが、又適切な挨拶なやうな氣もした。

『で、』母夫人が、笑ひを含み乍ら、わざと訊ねた。『どうだつたね、旅は？　樂しかつたらうね？』

『えゝ。鳥渡ね。でも思つた程ぢやなかつたわ。だつて欣哉さんが、そんなに嬉しさうぢやないんですもの。』

幸子は、わざとさう甘えるやうに、横から良人の顏を、ちらと覗いた。欣哉は何かなしに、赤くならずに居られなかつた。

『まア、そんな事を云つて。』母夫人は宥めながら、欣哉の方を向いて『でも欣哉さん。ほんとに此の子の我儘には、時々、お困りになつたでせう。』

『いゝえ、どう致しまして。そんな事決してありません。』

『どうだね。』父も口を出した。『一度も喧嘩をせずに濟んだかね？』

『度々やりましたわ。お父さまとお母さま位。』

幸子の言葉に、欣哉は苦笑した。

『へ、、、。お父さま位なら、結構だ。』

『で、』母夫人がふいと云ひ出した。『お前たちの旅先へは、誰も何とも云つて行かなかつたらうね？』

『は？　何ですか。――誰も何とも云つて來やしませんでしたが。……』

幸子は、欣哉を顧みた。

『何か、此方へ云つて來たものがあつたんですか？』

欣哉は、ふいと眉をひそめた。

『いえ、そんなら何でもないんですがね。幸子の友達で、高見澤さんと云ふ方から、祝電を打ちたいからと云つて、旅行先を知らせろと云ふ、お電話があつたんですけれどね。それから又貴方のお友達で、澤野さんと仰有る方から、矢つ張り同じやうなお電話だつたんですけれど、若しかしてそれを知らせたりすると、得て、惡戯めいた事をして、お前たちを驚かせたりし勝ちなものだから、お敎へしなかつたんですよ。』

『さうですか。――それはどうも、色々と御心配をかけまして。』

欣哉はやつと胸を撫で下した。

『ぢやア、一旦、お前たちの部屋へ行つて、寛いで、平常着にでもお着かへなさい。お湯もお前たち專用のが、もう眞新しく沸いてるし、久しぶりで旅の垢を落して、綺麗になつて、顏を合せるやうにしなさい。』

『まア。――厭な母さまね。ぢやア行きませうか。』

『――では、鳥渡御免蒙ります。』

二人は立上つて、自分たちの新らしい離れ座敷の方へ、前後して歩いて行つた。

離れの方には、すつかり茶の仕度までして、清やが待つてゐた。

『――さア、此處がお二人さまの、お居間ですよ。ちやんと座布團の通り、差し合ひでお坐り遊ばせ。』

『あら、隨分粋な火鉢ぢやないの。』

さう云つて幸子は、その紫檀作りの小さめな長火鉢に、わざと斜に寄り添うた。

『それで丸髷にお結ひになつたら、何て又お似合ひになるでせう。』

『もうい丶わよ、清や。』

『はい〳〵。では、どうぞ御ゆつくり。』

『お前が云はなくつても、ゆつくりするわよ。自分の家ですもの。』

『これは〳〵、ほんとに清やも出過ぎましたね。――あ、それから是は、お留守中に參つたお二人さまへの御手紙。此方が奥さま。此方が旦那樣。お祝ひの電報も交つて居りますよ。』

さう云つて、清は二束に分けた書束を、そこの紫檀の餉臺の上へ置いた。

『あら、さう。』

幸子は、取り敢へず、それに手を出して、親しい友からの手紙に、貪りついた。

欣哉も、そこに坐つて、何氣なく、直ぐそれに目を通した。何か怖いやうな氣持を、その書狀束に感じ乍ら。

すると、果して、その中の一通に、裏を返して見ると、堂々と辻村伊助と署名したのを、は

つきり見出した。鳥渡厚い日本風の封書だつた。

切つて讀まうか、讀むまいか。ふいと彼の手は躊躇した。が、讀まないのは、敗けたやうで、業腹だつた。——彼は思ひ切つて封を切つた。

と、中には割に大きな書體で、嚴かに書いた文面があつた。

『前略、御免下され度候。
辱知の荊妻房子儀、此程より妊娠中のところ、昨日愛宕下小島病院にて、男兒分娩仕候際、産後の經過思はしからず、遂に死去仕候間、此段御通知申上候。

尙、生兒は頗る健全にて、人工營養を以て發育の望み充分に有之候へば、他事乍ら御安心下され度候。

先づは右取急ぎ通知のみ。』

そして宛名は、わざと斯波欣哉殿としてあつた。

それを一讀すると、さすがに欣哉は、愕然と手が顫へるのを覺えた。

出産!? 死!?

彼は先づ辻村が、腹立ち紛れの脅かしに、そんな虚妄を書いて寄越したのではないか、と思つた。が、それにしてはその字句が餘りに重大だつた。そしてその文面から、墨色から、一種の凄い氣分が滲み出してゐるやうなのを感じて、彼は自分の頬の、血が見る／＼引いて行くのを覺えた。さう云へばあの夜、黒い大きな蛾が、ばさと飛んで來たのはその兆だつたのだらうか、……

房子の死?! ほんとに死んだのか?!

彼は、一種の衝撃に、心臟の血が止ると共に、又、ふッと其後から、よかつた、助かつた、と云ふやうな氣がした。もう、死人に口なし! もうかうなつたら、誰が何と云はうと、神さ

『晴曇』の唄

時雨音羽

きのふやさしき
人を知り
けふは悲しき
唄を知る
シグナルの
まゝにならぬは
戀のみち

へだての垣に
身をよせて
咲かねばならぬ
身のあはれ
くるしさに
仰げばさびし
みだれ雲

までない限りは、白を切つて切り通せる。……それは死人には濟まないが、仕方がない。それが自分の生きる道なのだから。……

『……どうなすつたの？　それは何？』

ふいと、幸子から、聲をかけられて、彼は無意識に、ハッとその手紙を引込めた。

『いえ、あの、』彼は蒼白い頬に、狼狽の色を隱さうと努力し乍ら、聲を押へて靜に云つた。『實は辻村からの手紙なんですけれどね。とう／＼あの妻君が、お產で死んださうですよ。』

『えッ、お產で？　まア！　何日？』

さすがに幸子も吃驚して、目を瞬り乍ら、氣味惡げにその手紙を覗き込んだ。

『何でも、あの日らしい知らせですけれどね。』欣哉は强ひて平靜に、『でも、眞僞の程は、確めて見ないと分りませんよ。ひよつとするとわざとこんな事を云つて、僕たちを驚かしたのかも知れませんから。』

『でも、まさか、そんな噓は云つて來ないでせう。』

『噓にしては、念が入り過ぎてゐますけれどね。――併し又、わざとこんな事を云つて來るのは、どの點から見ても、僕たちに對する厭がらせに違ひありませんからね。』

『ほんとにお亡くなりになつたとすれば、可哀さうは可哀さうね。――でも仕方が無いわ。私たちのせゐではないんですもの。ね？』

『えゝ、あのホテルでの卒倒だつて、あんな場所へ、平氣で連れて來た辻村に、寧ろ責任があります。――可哀さうだけれど、僕たちは放つて置く外はありませんね。』

欣哉は蒼白な額に、薄く油汗を浸ませながらも、併しキッパリ云つた。

本の頁を
閉るごと
この一生の
儚なさよ
すてられて
憎い男と
いへもせず

きのふは曇り
けふは晴れ
人のゆくての
浮き沈み
シグナルの
まゝにならぬは
世のさだめ。

『でも欣哉さん。貴方ほんたうにあの房子さんと、問題になるやうな關係は無かつたのね？　執拗いやうですけれど、もう一度それを、私に念を押させて頂戴。ね？』
『それは、前に云つた通り、大丈夫です。』
欣哉は身じろぎもせず、靜に云つて退けた。前々からの云ひがかり上、その肚はもうすつかり決まつてゐるのだつた。
其時、廊下の方で足音がして、一人の小間使が現れた。
『――御免下さいまし。』彼女は閾際に手をついて『鳥渡若旦那様に、太旦那様がお勤向の事で、御用がおありになりますさうでございますから、御書齋の方へいらして頂きたいと、さう仰有つておいでございますが。……』
『あ、さう。では鳥渡着物を着換へて、直ぐ伺ふからと、さう申上げて置いて呉れ給へ。』
何かドキリとしたものを感じながら、欣哉は立上つた。

白狀

使ひの女中の言葉では、何か勤口の事に就いて、話があると云ふのだが、改つて斯波氏から、歸る早々何の話があるのだらう。――さう疑ひ乍ら、欣哉は和服に着換へて、早速母屋の方へ出掛けて行つた。
斯波氏の書齋は、二階の奥深いところにあつた。その家の中の勝手は知つてゐるが、途中の廊下を傳はつて行き乍ら、彼は是が自分の家かと思ふと、不思議な氣がした。緣

あつて婿養子となつた以上、それに違ひないのだが、まだそれが現實的に、身に沁みて信ぜられないのだつた。夢のやうだと云ふ程でなくても、何か不安なものが、その空氣の中にあつた。――彼は一種の心寒さを豫感したのだつた。が、併し彼は、出來るだけ氣を張つて、新らしい舅の前へ出ようと思つた。

深閑とした奥の書齋からは、謦咳の音が洩れた。それも何か重大な用談らしく、一種の劇的な感じで、欣哉の心を臆病にした。

『――御免下さい。』

彼は出來るだけ朗らかな聲を出して、入口の襖障子の前に立つた。

『あ、欣哉君か。――入り給へ。』

中からは親しげな、鷹揚な聲がした。

『失禮致します。』

一種の就職志望者が、メンタルテストでも受けるやうな氣持で、彼は中へ入つた。

中には、威ついばかりの紫檀の机を前にし、何か由緒ありげな支那燒らしい陶火鉢を横に、重役と舅との全威容を示して、斯波氏は坐つてゐた。和服を着てゐるので、寧ろ粋な旦那とも見える氏は、又、その半ば白い頭髪と、幾らか炯々たる眼光で、書棚を背に、一種の漢學者のやうにも見えた。――親しいが澁い顔をしてゐた。是は油斷が成らぬ用談だぞ！　早くも欣哉の第六感は、その豫斷に戰いた。が、何だらう。家憲でも申し渡すのかしら。それとも是からの世に處する、一片の訓話でもするのか。まさかにあの事を咎めるのではあるまい。……あの手紙で、既に脅やかされてゐる事を。――併し、それも決して在り得べからざる事ではなかつた。否寧ろ、一番警戒すべき事柄だつた。が、それならば、もう既に何事も、凡て知らぬ存ぜぬで、通して來ただけに、肚は出來てゐる筈だ。――自分の幸福のため、自分のやうな秀才が、世の中に成功するためには、その位の犠牲は覺悟しなくてはならぬ。その決心が其點では、彼に微かな安心を與へてゐるのだつた。

『さア、どうぞ。――そこへ坐り給へ。』

斯波氏は太い手で示した。そこには既に設けの座が、座布團が厚い茶綸子の光澤を見せて、敷かれてあつた。

『は。――』思はず畏つて、欣哉は坐つた。

『まア、樂にし給へ。もう君、そんなに僕の前で、鯱虎張らなくてもいゝんだよ。』

強ひて微笑を含んで、斯波氏は云つて呉れた。が、欣哉に取つては、さう云はれゝば云はれる程、と云ふより舅と婿だと思

へば思ふ程、ずつと前よりも固くなるのを覚えた。

『は。――では、御免蒙ります。』

彼は辛うじて、膝のあたりを崩した。

『君は煙草はやらなかつたのかね？』

『――いゝえ。喫まない事もありませんが。……』

『ぢやア一つ、どうだね。是は吾輩門外不出のハヴアナだ。』

斯波氏は、さうして一面親しみを見せるためか、美しい商標のついた葉巻函を、自分も一本取つた後、机の上から欣哉の方へ押し進めた。が、それも怖くて、欣哉には鳥渡手が出兼ねるのを、彼は強ひて鞭韃して、

『では、頂きます。』と、取るだけ取つた。

彼だつて、重役候補の身として、葉巻の喫ひ方位は、充分心得てゐた。

斯波氏が、まづ先に、紫の煙を吹かした。そしてその煙の中から、靜に云つた。

『どうだつたね、新婚旅行後の忌憚のない感想は？』氏はその古めかしいハネ・ムーンと云ふ言葉を、アネ・ムーンと云ふやうに、其方の素養豊かな正式な發音で云つた。

『どうやら、うまく行きさうかね？』

『はア、お蔭さまで。……私としては、大丈夫と存じますが――。』

矢つ張り岳父として、そんな心配をしてゐるのか、と、欣哉は一種の安堵と共に、稍々涙ぐましくなるのを感じた。

『だが、どうだね、幸子は？　君のやうな頭のいゝ男に、食ひ足りるかね？　――餘り、人形めいた、と云ふよりは近代的お孃さんめいた、我儘なオボコ娘に過ぎはしないかね？』

『いゝえ、そんな事はありません。寧ろ潑剌として、端倪すべからざるものがある位です。』

『ハ、ヽ、ハ。いや全く、此頃の若い娘の心理には、端倪すべからざるものがあるよ。――だが、その動作の方は別として、どうだい？　房子さんと云ふ人と比べて。……幸子で我慢出來るかね？』

『えツ？　何ですつて？　何を仰有るんです？』

思ひがけぬ立合の、全く思ひもかけぬ一と突きだつた。欣哉

どりこの
高速度滋養料
エネルギーの瓶詰！
飲めば、忽ち！血となり肉となる

（全國有名藥店にあり）

は、危ふくその一撃に、土俵を割らうとして、辛うじて踏み堪へた。が、その腰は既に斯波氏の奇襲で、崩れかゝつてゐるのを、自分でどうともする事が出來なかつた。

斯波氏は、その態を靜に見て、又靜に云つた。

『だが、欣哉君。君、そんな事は、僕にだけは匿さなくたつていゝよ。いや、寧ろ、匿さないで呉れ給へ。――僕だつて君、一人前の苦勞はした男だ。その位の事に對する理解は、少しは持つてゐる積りだからね。』

欣哉の敗北は、もうその一言で完全だつた。彼はもう既に、駄目だと觀念した。が、駄目だと觀念すると同時に、聰明な彼は、もうその敗北に伴ふ痛手が、思ひの外に少くて濟むかも知れないのを、見透して了つた。――もうか

うなつては、適宜に兜を脱いで、降參して、捕虜となつて、甘んじて對手の寛大な裁量に任せる外ない。――だが彼はまだ、ハツキリは云へなかつた。

『ですが、どうして又そんな事を、――そんなに御存じなんですか？』

それが又彼には、不思議でもあり、心外でもあつた。

『いや、それに就いては、君は、勿論、あの澤野と云ふ、君の友達の醫學士を知つてるだらうね？』

『はア、知つて居りますが。――では澤野が？……』

欣哉は何ものとも知れぬ、一種の勃然たる怒りを心奥に感じた。

『うむ。その澤野君と云ふのが、實は君たちの新婚旅行中に、儂を訪ねて來てね。儂も忙しい身だし、又會體の知れぬ人物なので、適宜にあしらつてゐたんだが、その中にふいと會つて見ると、その話をし出したんだ。』

『あゝ、さうですか。』欣哉は蒼白に燃えて、『ではあの澤野が、辻村の依頼でも受けて、そんな陰へ廻つての、中傷に出たと云ふ譯ですね？』

『いや、儂も初めはさう思つて、幾らか彼等の心事を疑つたが、澤野と云ふ人も、辻村君もそんな氣持は少しも無いらしいんだ。此の自家の婚姻を邪魔して、此方にケチを付けると云ふやうな。――殊に辻村君は、此件に關しては、何も知らないらしいんだ。知らないどころか、寧ろ、是以上

の事は不問に付さうとさへ思つてるらしいんだ。』
『では、澤野は、どうしようと云ふんですか？』
欣哉は、詰るやうに云つた。
『その澤野君とやらは、只、此の事件を傍から見て、二人の友人の中へ入つて、公平に色々考へた末、此儘では、叉餘りに世の中が不條理過ぎ、公正で無さ過ぎると感じたんださうだ。そして、それを公正に解決するのが、おせつかひかも知れぬが、自分の一種の社會的責務だと思つたんださうだ。一個の醫師としてゞなく、君たちの友人としてだね。で、兎も角も、萬事を儂に打明けて、どうしたら一番穩當で、公正な解決だらうと、相談をして來たのだがね。――勿論辻村の立場には、同情してに違ひないが、……いや、寧ろその房子と云ふ人の立場に、同情を感じてかも知れん。』
『はゝア、さうですか。――ですが、いづれにしても、一種の越權は越權ですね。そして矢つ張り、弱者に對する同情を押し賣りして、強者の優位を傷けようとする、一種の中傷と嫉妬ですね。――女性風な感傷的正義を振りかざして、下から泣言交りの訴へにかゝる、一種の弱者の暴虐ですね。――私に遠慮なく申させて下されば、此の人生は戰場です。しかも一方の血路を切り開いて、拔け出る白兵戰場です。挺身して、他を顧みず、奮闘しなくちやなりません。だからそのため傷いたものや、切り伏せたものを顧みてゐては、到底武勳を建てる事は出來ないのです。そして一人の男が、衆に拔ん出て成功するためには、幾人かの敵を對手にし、幾人かの犧牲を拂はなくちやならないのです。そんな事に、一々ものゝ哀れを感じてゐては、眞の男としての仕事は出來ません。――尠くとも私はさう信じて、此處迄邁進して來たのです。』
『成程ね。その心掛の程は、豪氣でもあり、私たち事業家に取つては、賴もしくもある譯だがね。』と、斯波氏は一息吐いて、
『併し、それは君、一つは犧牲にも依り切りだよ。餘り大きな犧牲を拂ひ過ぎては、必ずその反酬が來る。――欣哉君、君の犧牲は、君の子を姙娠して、それを生んで、死んで了つたと云ふぢやないか？』
其言葉は、今出るか〳〵と思つてただけに、かうなつては、欣哉に取つて驚くに價しなかつた。
『さうださうですね。それは辻村からも、一片の通知がありまして、私も知つては居りますが、當人は可哀さうですが、併し又考へやうに依つては、彼女自身が強ひて選んだ道で、寧ろ彼女の責任とも云ふべきです。そしてその子供の件だつて、果して誰のものか、分つたものではありません。』
『それはさうかも知れん。が、澤野醫學士の說では、尠くとも子供の狀態に依つて、醫學的に受胎の月日だけ證明されるから、後は其時の當事者の、誠意[illegible]持つ[illegible]無いと云ふんだ。』

『で、彼らは、だから其子は飽く迄僕の子で、どうだと云ふんでせう。』欣哉は又間接に反撃した。

『それは死んだ女の人も、辻村君も、自分たちの子として、育てるからいゝと云ふんださうだがね。――君は君として、たとひ朧ろげでも其子が自分の子かも知れないと思つたら、幾分責任は感ぜずに居られないだらう？』

『さア、僕に取つては、正直の所、人情が無いとか無慈悲だとか云ふより、父としての實感が、殘念乍ら少しもありませんね。――たとひ僕の子としても、僕としては、そんな事のないやうに、充分注意に注意をしてゐたのに、先方の烏渡した失敗から、そんな結果になつたので、僕としては寧ろ、そんなものの存在が、初めから腹立たしい位です。――ですから其子は、決して僕の子ではありません。房子の子です。又、辻村の子で無いとも云へません。だから辻村がそれを自分の女房の遺兒として、育て上げると云ふのなら、それでいゝと僕は思ひます。――僕はそれで御心配なさる必要は無いと存じます。大變精神的な御迷惑を掛けて、お父樣には濟まないと思つて居りますが……其點は僕が責任を以て、私の思ふ樣に解決致します。』

『と云ふと？』

斯波氏は、一種の信頼と不安とを以て、欣哉の强氣な顏を、――白く冷徹そのものゝやうな顏を見凝めた。

『私としては、何處迄も此儘押し通す外ありません。』

『處で、君は此の一件を、幾らか幸子に白狀してゐるかね？』

ふいに、改めて斯波氏が訊ねた。

『いえ、そんな事件のあつた事は、幸子さんも大分知つてますし、又、彼らの言葉に依つて、そんな事は度々暴露されましたが、まだ私の口からは、一言も肯定した事はございません。――私はそれが二人に取つて、幸福だと信じて居りますから。』

『ふうむ。――だが、君、果してそれを幸子に知らした方がいいか、又は默つてゐて、儂の胸に收めつきりに收めて、絕對秘密裡に何とか解決した方がいゝか、それは儂も彼女の父として、烏渡考へなけれやアならない問題だぜ。相當六ケ敷い問題だが。――六ケ敷いと云へば、一體此の解決法は、儂にも果してどうするのが一番いゝか、まるで見當がつかない。欣哉君。君達も最高學府を出て、そしてお互に親友であつて見れば、過ち多い若い日の此麼立場を自分達でどう裁いたらいゝか、道がありさうなものぢやないか？欣哉君。君も一つ熟考して呉れないか。』

さう云はれると、さすがに欣哉も凭向いて、ぢつと暫らく考へてゐた。が、やがて、突然顏を上げて、蒼白く端然と坐り直して、云ひ出した。

『いや、宜しうございます。では、すつかり先づ事情を、幸子さんに白狀して、こゝで幸子さんの裁斷を仰ぎませう。――それが結局一番だと存じます！』

（つづく）

民謡

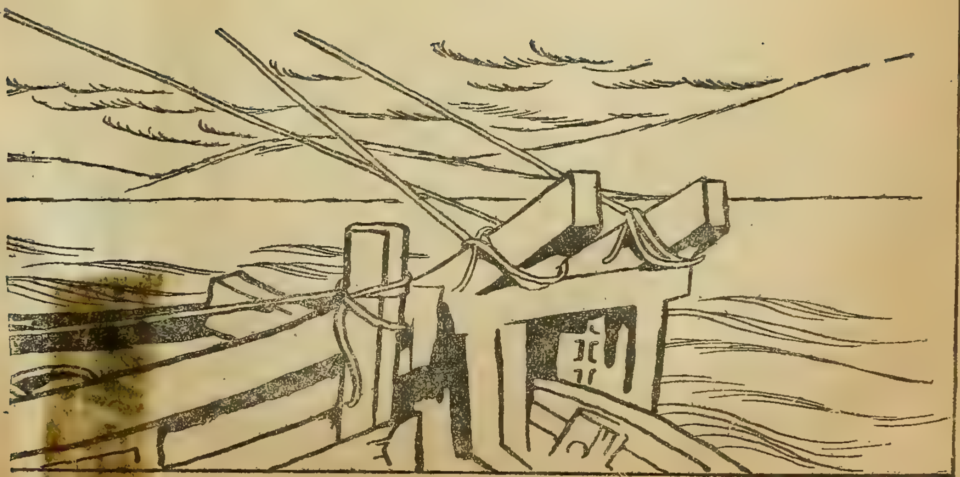
沖の鷗

川路柳虹

波はゆさゆさ、ホイ、春の海、
船は帆揚げた、櫓をあげた。
沖に光るは波がしら、
白い鷗のあの翼。ホイ、ホイ。

波はゆさゆさ、ホイ、島のかげ、
船は帆かけた、舵曲げた、
可愛いアンコも岸に出た、
見送りませうと、目に涙。ホイ、ホイ。

波はゆさゆさ、ホイ、帆のきしみ、



船は離れる、水澪が引く。
いつも火を噴く三原山、
あつい情けの風も吹け。ホイ、ホイ。

波はゆさゆさ、ホイ、春の海、
赤い椿の咲くかげに
今も忘れぬ娘のなみだ、
沖の鷗の白い羽根。ホイ、ホイ。

さし画　川上　四郎

戀のロマンス 遠洋心中

―川上音次郎と貞奴―

江見水蔭

馬に乘る藝妓

新派劇の元祖、それは角藤定憲といふのが本統でせうが、最初に東京で旗擧興行をしたのは川上音二郎で。兎に角新派劇をして今日あらしめた川上の勳功といふものは偉大でありまする。と同時に、川上を其所までにした背後には、日本女優のトツプを切つた貞奴の有つたといふ事も、否み得られない事實でせう。

この二人が、どうして結び合はされたか。その當時の社會狀態、花柳界や演藝界の空氣からして說き起すと、迚も長篇に成りますから、略しますが。

明治二十四年頃は、東京花柳界の全盛期で、時の大臣級の人で、料理屋や待合、船宿などへ、耽溺しないのは殆どなく、伊藤博文、井上馨、松方正義、いづれも此方での筆頭。謹嚴らしい山縣有朋大將の如きも、決して隅へは置けぬ通人でありました。

この大頭連に、半玉時代から可愛がられたのが、貞奴の前身、濱田屋の奴。よし町藝妓の花形中、斷然リード。新橋柳橋の名妓連も、奴の盛名に一時壓倒されてゐた。

『藝妓で馬に乘る』これが大評判。

大坪流の馬術師範、草刈庄五郎先生の本所緑町の馬場に、紫に白の露絞りの袴を穿いて、乘馬の稽古に通ひ、木造で愛宕山を模擬した高櫓に平氣で馬を乘り上げて、その振袖を春風に飜へしたといふのですから、兎に角變り種の藝妓でした。

『淺草の鳥越座で、壯士が芝居をしてゐる。立廻りが眞劍で面白いさうだが、一體どんなだか、見に行つてやらう。』

よし町の料理屋岡田の女將。世辭金三婆烏の一人で名高かつた人。これが發起人でよし町藝妓の一流どころ、錦糸、さん子、小照といふ連中と共に、冷かし半分で押しかけて見た處が、其時の狂言が『板垣退助遭難實記』それが意外に面白く、今までの歌舞伎の型を破壞して、一種特異の演出であつたので。

『今夜、あの俳優達を呼んで、遊んで見よう。』と成つて、福井樓へ川上音二郎、藤澤淺二郎、其他數名を招きました。

招きに應じて來た俳優、それを見て藝妓連は、皆、アツと驚きました。

福助と小錦

いくら壯士芝居の役者だからと云つて、最少し扮裝が調つてゐるだらうと思つてゐたのが、いづれも紺飛白の筒袖に、白木綿の兵兒帶といふ、純然たる壯士風。政治運動で暴れ廻る時と同じ姿で現はれて、遠慮會釋もなく――君――――僕――自由――壓制――漢語混りで藝妓半玉に對するのですから、これは驚いたのが當然で。

その時代の役者は、別して風俗が柔弱で、縮緬の長羽織、中にはモミ裏の着物を着てゐるのもあらうといふ。それに馴れてゐた眼。實は馴れ過ぎて鼻についてゐる藝妓達。

『あら、變つてゐるね。』

『サツパリしてゐて、この方がいゝね。』

妙な方に群集心理が向きました。別して其中で奴。英雄、英雄を知る。變り種藝妓が變り種の役者を認めたのは當然で、其中の座長たる川上音二郎に、早くも好意を寄せるに至りまして、濱町の岡田へ、奴と川上とは、席を替へて飲み明かしにゆきました。

ところが、この時分に、奴は當時人氣第一の中村福助（今の歌右衞門）とも戀の噂が立つてゐました。又、これも人氣第一の相撲横綱小錦八十吉とも、特別の交際が結ばれてゐるといふ噂。どちらも共に、色男中の色男。俳優で福助、力士で小錦といへば、一寸現代で例の取り樣のないほどの人氣者。それを兩手に操つてゐた奴が、その二人を弊履の如くに捨て、一個の壯士俳優たる川上音二郎と手を握つたのですから、これ又當時大評判。

（故川上音二郎氏）

戀の競爭者

然るに、その川上に對して、一人の競爭者が現はれました。それは同じ、よし町の小照。後に伊井蓉峰の女房に成つた人。それが川上と深く成つたので、勝氣の奴が躍起と成つたのは、申すまでもない事でした。

勝名乘は遂に奴に上りました。幾多の波瀾の有つた結果が、正式の結婚といふ處まで進みました。

これに就て一ツの隱れたる挿話が有りますので。それは、奴には小錦、福助の二人の他に、半分お客で、半分愛人ともいふべき通人が附いてゐました。その頃は若手實業家――今では〇〇王とまで云はれる大實業家の〇〇〇〇氏。

『わたし、いつまでも藝妓はしてゐられませんから、嫁入りしたいと思ひますが、福助の方にしませうか、川上の方にしませうか。あなたのお差圖におまかせします。』

これは實に、一石二鳥の戰法で、然ういふ相談をかければ、旦那との緣も綺麗に切れるといふ。それをズバ〳〵と云つて退ける度胸は、さすがに奴式で、又それを平氣で受けて相談に乘つた〇〇氏も、確かに通人で、所謂〇〇式で。

『それは川上の處へ行くがいゝ。』

何故〇〇氏が、川上を指定したかといふと、この島は、福助の處へ行くと、もう再び戻つて來ない。川上の方は、壯士上り、亂暴な生活をしてゐるのだから、意地で一度は行つても、必らず破裂して、又戻つて來る。斯ういふ腹であつたとか。これを文壇の老將〇〇氏に向つて、先年〇〇氏が打明けたのを、私は此所に請賣りです。

さて、奴は、二十二歳にして立派に廢業して、公然川上の妻と成り、その財産は勿論、衣類持物、すべてを川上に打込んで、彼の新劇運動を援助し、三崎町に劇場川上座（當時としてはモダン建築）の建設。その資金を殆ど奴の手一ッで調達して、良人の成功を祈つたのでありましたが、どうも、川上の操行が、丙であり、丁であり、零であり、各方面に問題が起りまして、奴としては心平かなるを得ません。東京第一流の藝妓が壯士役者の世話女房とまで成下つて、これ程までに盡してやつた、その誠意に對して、自分の顏に泥を塗るやうな事をされたのでは、自分としての立場がない。それで尼法師に成るつもりで、緑の黒髪を、惜し氣もなく斷り落しました。

それが川上座の開場式の當日。さすがの川上も之にはビックリ仰天。疊に頭をすりつけて平あやまりに謝罪したので、納まらぬ成りに其場は納まり、斷髮を隱すべく黒色の手巾で頭を卷いて、開場の式に列したといふ。これでは貞奴が斷髮の元祖とも云へるのです。

（貞奴氏）

遠洋心中

その後、川上が政治運動に狂奔し、自から衆議院議員の候補者に立つて、高木正年、平林九平等と、激烈な競爭を試みて慘敗。東京中の新聞が筆を揃へて、狂人扱ひにして了つたので、川上は全く行詰つて了ひました。就中、黒岩涙香氏の毒筆で（それに小林天龍も加はつて）猛撃を川上に加へたので、短氣な川上は極度に憤激して。

『萬朝報社へ斬り込んで、黒岩涙香其他を鏖殺にする』といふ昻奮ぶり。

それを奴の貞子は留めて。

『あなたは、もつと大きな人物かと思つてゐたのに、新聞社へ斬り込むなんて、ケチな了簡。まア氣を抜きに散歩でもしませう。』

　誘ひ出したのが永代橋下手から築地河岸。そこに海軍省で拂下げに出してゐるヨツトが一隻。ポカリ〳〵上汐に弄ばれてゐるのを見出しました。

『これ、これ、これに乗つて、行く處まで行くに限る。』

　早速そのヨツト型の端艇を百七十圓で買つて、それに川上夫婦と、姪の繁子といふ十歳の少女と、愛犬一頭とで乗込んで。積荷としては夜具にトランク、銃二挺、ピストル二挺、ビスケツト、パン。それが明治三十一年

九月——二百十日の魔日に當るのを、わざ〳〵築地から出發。横濱までは船宿の主人が、操縦法を教授かた〴〵同乗。それからは無經驗の夫婦で無茶苦茶。唯一氣に沖へ沖へと乗出したのでありました。

『人を殺して小さな牢の中で死ぬるのは馬鹿らしい。廣い海の中へ乗出して、行當りバツタリ。無人島へ着いたら、そこで暮らさう。難船して死ねば、それも好い。』

　これが二人の本統の腹の中でしたが、口の先では、まさか遠洋心中に行くとも云へぬので『ボートで太平洋を乗切つて、世界漫遊をしてくる』これを新聞では又攻撃の材料として『いよ〳〵川上は發狂した』と、その非常識を嘲りましたが、當人達の眞意は、前述の、運命を天に委せる爲の、大冒險の首途に他ならぬのでありました。

　それに何故、姪の繁子を連れたかといふ疑問が起りますが、この繁子といふのは、川上の實妹の子で、三人兄弟の一番の姉娘。その妹の子が早川雪洲夫人の鶴子。末の妹がよし町で藝妓に出た澄子。

然るに、この繁子は、實の親兄弟には親しみが薄く、川上夫婦を兩親の如く慕つてゐて、まるで實家では一人退け者にされてゐたので、後へ遺すのが不憫であつたといふ。それ故で

した。

　これからが有名な川上夫婦のボートの冒險航海。長さわづか十四呎。龍骨に鐵板が張りつけてあつて、顚覆せぬ用意がしてありました。名前だけは堂々新日本丸と命名しました。

　暗夜、横須賀軍港に乘込んで、取押へられ。新井少將から忠告されても肯かず。繁子と犬とを留めて到頭二人で相模灘から伊豆の下田。こゝで唐人お吉研究家の村松春水氏にめぐり合つたり。御廐崎の岩礁に乘上げたのも知らず、夫婦高鼾で寢てゐたり。遠州、紀州、兩洋の難航海の後。兎に角、神戸に到達したのは、全く盲蛇の無茶苦茶の成功。

　此所で洋行の計畫を眞面目に立て、其旅費をつくる爲に興行して、多少の成功を見。更に在米同胞中の興行師と握手して、夫婦の他に姪の鶴子、門人其他を引連れて、先づ桑港に渡り、忽ち其興行師と衝突して、獨立で興行。この時に初めて、本名の貞子の貞の字を奴の上に重ねて、貞奴と名乘つて、女優として舞臺に立ち、世界的に名聲を博するに至つたのでありました。（をはり）

さしゑ――鈴木朱雀

リウマチ神經痛の自家療法

原因の毒素を取り去らねば此の病氣は治らぬ

　リウマチスや神經痛、ぜんきはいくら藥を服用しても、病氣の原因から治さねば、たとへ一時は治つた樣でもすぐ再發するものであります。病の原因を治すには、內服療法によらねばならぬ事は勿論でありますが、今迄賣出される賣藥は、アスピリンの如き一時的の麻痺藥か、或は下劑を主としたる一時押への氣休め藥が多く、原因に對して有効なものは中々見付かりません、そしてあれかこれかと迷つて居る中に病氣はだん〳〵重くこぢれて來ます。此病氣の原因は體毒、淋毒、梅毒、蓄毒、其他血の檢査をしても分らない勞廢物や種々の惡熱毒素が淋巴腺や骨關節に結滯してそれが深因で冷へたり打つたり使ひ過ぎたりして弱つた所が痛み出すものであります當院のお知らせする秘方は二千年來の皇漢醫方のもたらせる、排毒素療法で、病根とも云ふべき痛みやしびれを發作發病する、淋巴腺や骨關節の惡熱毒素を小便と共に取り去りますから實に合理的に自宅で治す事が出來るのであります。その治療成績のよい事は、有名な脇本醫學博士を始めとし責任ある糸山海軍々醫、其他の先生方も各々有効なる事を認められ實驗證明書を寄せられて居ます。當院では一昨年本誌に此の漢方秘方の公開を發表して以來數知れぬ全快者から淚の出る樣な禮狀や感謝狀を頂き澤山下さいます。此病氣でお困りの御方は色々と迷はず、この有効な漢方自宅療法で健康な身體になつて下さい。本誌愛讀者には無料でくはしくお知らせ致しますから今スグはがきで申込んで下さい。

宛名は　大阪府中河內郡布施町荒田

招福院

日本アルプス秘話

埋藏金七つの瓶

岸井紫浪

一

明治三十七年四月二日の夕方、
富山驛の貨物積み込みに傭はれた小口平太郎が、勞働を終へて、いざわが家に歸らうとした時、ふと、うしろから、

『おい、平太郎ぢやないか。』

と聲をかけられたので、何氣なく振り返ると、思ひがけなくもその昔、足尾銅山に働いてゐた頃世話になつた横田新兵衞といふ親方であつた。

『おゝ、これは新兵衞親方、お久しぶりで……』

『うむ、この奧の方に、ちつとばかり用事があつてやつて來たんだ。』

『それは〳〵――、何はともあれ、きたないところですが、どうか、私の家へお寄りなすつて――』

『さうか、ぢや、ちよつと邪魔をするかな。』

そこで、平太郎は、新兵衞親方を伴なつてわが家に歸り、近所の小料理屋からとり寄せた仕出し肴で酒を酌交はしながら、一別以來の積る話に花を咲かせて居りましたが、

『時に、親方、どうせ今夜は當地にお泊りになるんでせう、ごらんの通りの獨り者、何のお構ひもできませんが、このまゝ私の家へお寢みになつてはいかゞです。』

『それは願つてもない好都合だ、ぢや、氣の毒だが、一晩厄介になるとしようか。』

『よござんすとも――』

『時に、どうだ、お前に頼みたいことがあるんだが――』

『へえ、どんな御用で――』

『先刻も云つたやうに、俺はこの奥の方に用事があつて、明日出かけるんだが、何しろ、行く先が、人家もない山の中で、おまけに三四日はかゝると思ふ、で、どうしても、食料や野宿の用意をして行かなきやならないんだ、ついては何とか都合してお前一緒に行つてくれまいか、無論、日當は出すが――』

『へえ、ようがすとも。一方ならぬお世話になつた親方のこと、日當なんぞの御心配には及びません、一緒にお供しませう。』

『ぢや、明日の朝は、なるべく早く發ちたいと思ふから、すまないが、今夜のうちに、これで山行きの支度をしてくれ。』

さう云つて、十圓札を一枚差し出した。平太郎は云はれるままに、それで四五日分の食料品や野宿に必要な品物、それから、特に新兵衛親方の希望で、シャベル一挺とを買ひ求め、その夜は二人、枕を並べて寝につきました。

二

翌朝、未明に起きて、道を東の方日本アルプスの山地へととりましたが、千垣のあたりから、俄かに右に折れて、和田川に沿うた山地へさしかゝつてからは、始終新兵衛親方が先に立ち、時々何やら紙に書いた地圖のやうなものを眺め〳〵、殘雪に蔽はれた道なき山路を分けて行くこと三時間ばかり。間もなく日が暮れたので、その夜は、とある岩かげで野宿をなし、次の日も一日中山の中を歩いて、同じく野宿。かくて、三日目の午後三時頃、とある山の中腹についた。此處は一反歩ばかりの平地が南に向つて開け、北國の四月といふのに、こゝばかりは雪の影さへもなく、遙か日本海が一望の下に見える。新兵衛親方はどつかとそこへ腰をおろし、

『平太郎、今夜はこゝで野宿と決めよう。』

『へえ、でも、まだこんなに陽が高いぢやありませんか。』

『まあ、いゝから、こゝにしようよ、第一、暖かい上に、こんな見晴らしのいゝところは、滅多にないからな。』

『さうですか、ぢや――』

といふので、平太郎は、早速岩と岩との間に野宿の用意、附近から集めた枯枝をもつて焚火をしながら、携へて來た蕎麥粉と魚の干物で夕食をすませて、しばらく四方八方話に耽つてゐるうちに、やがて、日が暮れて、頭の上にきら〳〵と星が瞬きはじめる頃、二人は晝間の疲れで、いつしか、ぐつすり寝込んでしまひました。

それから、どの位時間が經つたか、ふと、峯を渡る寒い夜風に平太郎が眼をさまして、傍らを見ると、一緒に寝てゐた筈の新兵衛親方の姿が見えません。

『はて、をかしいぞ。』

と思ひながら、折柄五日月の淡い光りに、あちらこちらをすかして見ると、恰度そこから三十間ばかり離れた大木の根元を、シャベルをもつて一生懸命に掘つてゐる新兵衞親方の姿が眼に映りました。

『妙なことをするわい。』

と思つた平太郎は、氣どられないやうに、またごろりとそこへ横になつたまゝ見てゐるうちに新兵衞親方の身體が、土の中へ吸ひ込まれるやうに、かくれてしまひました。

『はてな、いよ〳〵もつてをかしいぞ、さう云へば、道々地圖のやうなものを見ながら來たのも變だし、まだ陽の高いうちから、こゝへ野宿をしようと云ひ出したのも不思議、第一、かうして一緒に來た自分に、用事のことを、これんばかりも數へないのからして妙だ。』

そんなことを考へてゐるうちに、またひよつこり穴から姿を現はした新兵衞親方は、土をもと通りにした上、足音を忍ばせて、野宿の場所へ歸り、やがて、ごろりと平太郎の傍へ横になりました。

三

間もなく、新兵衞親方は、鼾を立てゝ前後不覺に寢入つた樣子に、先刻からの親方の行動が不思議でならなかつた平太郎は、そつと起上つて、シャベルを手に持ち、例の大木の根元へ行つて、掘り返された眞新らしい土を搔きのけると、下から板石が現はれた。それをとりのけると、恰度人がやつとはいれる位の穴だ。はてなと躊躇したが勇氣を起して、恐

は恐はながら中へはいつて見た。どうやら廣い地下室らしい。思ひ切つて、用意のマツチをすつて見て、あつと驚いたのも道理。廣さ十疊敷ばかりのその地下室の正面一段高いところに、ぼろ〱になつてはゐるが、金色まばゆい二領の甲冑が恭しく飾られ、その前に、直徑二尺四五寸もあらうと思はれる瓶が七つ、ずらりと一列に並んでゐるのでした。

そこで、今度は、マッチをすり〱、その瓶の一つの蓋を開けて見て、あつと叫んで、思はず尻餅をついた。中には、マッチの灯とは云へ、夜目にもしるき黄金の光──大判、小判が一杯詰つてゐるのです。平太郎はがた〱ふるへながらも、次々に瓶の蓋をとつて見ると、そのどれもこれもに、同じく大判、小判がぎつしり詰り、蓋にはいづれも『七ノ一』と書いた數字がはつきりと讀まれました。

『うむ、さては、新兵衛親方は、この金を探しに來たのか。』

これで、新兵衛親方の不思議な行動の所以をはじめて知つた平太郎は、そのよく足を踏みしめ踏みしめ、夢に夢見る心地で穴の外へ脱け出しもと通り板石を伏せた上から、叮嚀に土をかぶせた後、何喰はぬ顏をして、野宿の場處へ戻*

*り、そつと新兵衛親方の傍へ横にならうとした時、今まで眠つてゐるとばかり思つた新兵衛親方が、むつくり起きあがつたと思ふと、いつにないいかめしい聲で、

『おい、平太郎――』
『へえ――』
　さては見咎められたかと、うろたへる平太郎に、いきなり、懐中に呑んでゐた短刀をつきつけながら、
『きさまは、あの寶藏の中へ足を踏み入れたらう、さあ、この秘密を知つたからには、生かして置けない、この場で眠らせてやるから、さう思へ。』
　と云つて、今にもとびかゝらんず勢ひで、ぐつと睨みつけたその形相の物凄さ。平太郎はもう生きた心地もなく、中腰になつたまゝ、がく〳〵する膝頭で、思はずあと退りながら、
『お、親方、ちよつ、ちよつと待つて下さい、いかにも、私はあの寶藏の中へ足を踏み入れましたが、まさか、あんな秘密の場所とは、夢にも知りませんでした、もと〳〵、親方が何のために、こんな山の中へ來たか、その譯さへ知らない私、親方があそこを掘つてゐる所をさへ見なければ、決してこんな大それた眞似はしなかつたのですが、親方のしてゐたことが不思議でならなかつたので、惡いとは知りつゝ、つい恐いもの見たさに、とり返しのつかないことを仕出かしました、親方が、私を生かして置けないと仰言るのも、決して無理とは思ひませんが、お願ひです、親方、どうか、生命だけはお助け下さい、その代り、親方の云ひつけなら、私のこの首にかけて、どんなことでも聞きます、誰にも口外するなと云へば、口が腐つても云ひません、今後富山の市から、一歩も外へ出るなと云はれゝば、それも守ります。』
　赤心を面に現はし、涙を流して平謝りに謝ると、新兵衛親方も、やつと少しく顏色を和らげ、
『平太郎、今云つたことは、嘘ではあるまいな。』
『決して嘘ではありません。もし嘘だつたら、その時こそは、いつ何時でも息の根を止めて下さい。』
『よし、ぢや、お前の言葉を信じて、眠らせることだけは許してやらう、ところで、平太郎――』
『へえ――』
『お前も、知らない前なら兎も角、あゝして、寶藏の中へ足を踏入れたからには、どうしてあんな大金が、こんな山の中に埋めてあるか、その譯を知りたいだらう。』
『へえ、そ、それは――』

『いや、遠慮しなくともよい、知りたいと思ふのがあたりまへだ、今その譯を話してやるから、聞いてゐろ。』

さう云つて、新兵衞親方が語り出したところによると――

四

今から凡そ三百五十年の昔、天正十二年に、豐臣秀吉が織田信雄と難を構へるや、當時、越中一圓を領して、富山城に據つてゐた佐々內藏助成政は密に信雄と款を通じ、且德川家康と誼みを結んで、中原の鹿を爭はんものと、腹心の家來數人と、日本アルプスのザラ〳〵峠を越え、間道から濱松へ行つて、家康に西上をすゝめたが、家康はそれを肯んじませんでした。ところが、このことを知つた秀吉は、翌天正十三年前田利家を先鋒となし、兵十萬を率ゐて富山城へ押し寄せたので、成政は、萬一一敗地に塗れた時は、日本アルプスの險に據つて、秀吉と最後の雌雄を決しようと、その時の用意として、

軍用金百二十萬兩を、件の場所へ埋藏して置きました。然るに秀吉の攻擊が急で、成政は脫出する暇もなく、居城を十重二十重に圍まれたので、今は止むなく秀吉の軍門に降りましたが、それでも、秀吉に對する敵意を飽くまで捨てず、秀吉の命で、その話相手として京都に滯在しながらも、いつか機があつたらと思つてゐるうちに、天正十五年秀吉の九州征伐に從つて、肥後の熊本に轉封せられ、居ること僅かに半年ばかり、領內に起つた土豪、農民の一揆を、自力で鎭めることができなかつた故をもつて、遂に大阪へ呼ばれて、秀吉から切腹を命ぜられました。が、これは表面だけで、その實、切腹したのは、成政の替へ玉で、ほんものゝ成政は、一旦熊本へ歸り、秀吉に對する憤恨から、かねての計畫通り、腹心の家來數十人をつれて、密かに舊領越中へ潛入。軍兵を集め、例の埋藏金を擁して、日本アルプスの險に據り、秀吉に對して反旗を飜へさうとしたが、事前に發覺して前田利家の手のものに追はれ、ザラ〳〵峠附近で行方不明になつたまゝ、生死のほども判明せず、恐らくは、一同山中で餓死

したのだらうとは、幾つかの稗史類にも說かれてゐると云ふのでした。

語り終つた新兵衛親方は、更に語をついで、

『な、平太郎、そんな譯で、あの埋藏金は、佐々成政が軍用金として埋めたのを、とり出す暇もなく死んでしまつたので、そのまゝになつたものだ、金額は當時の金で百二十萬兩、時價にして、ざつと五千萬圓、七つの瓶の蓋のどれもこれもに「七ノ一」とあるのは、數十箇の瓶がある證據、あとのは、あの寶藏の床土の下へ埋めてあるんだ、ところで、佐々成政が埋めたといふ證據だが、ザラ〳〵峠が佐々峠から訛つたものだと云はれ、その奥には內藏助平があり、またこの近くにある大坂森、小坂森の地名が、大酒宴、小酒宴といふ意味で、成政が酒宴を開いた場所だと云はれてゐるのは、成政がザラ〳〵越えをした以上、さもあるべきことで、別に不思議はないが、この向ふに、鎧脫ぎといふところがあり、甲冑を着て山を歩くと重いので、鎧を脫いだ所だと云はれてゐるのは、あの寶藏の中に鎧が飾つてあるのと、ぴつたり符合するばかりでなく、龜谷は瓶谷で、覗かずは、金を埋めてあるから覗く勿れといふところから來た地名だ、その外、あの埋藏金が、成政の埋めたものだといふことを證據立てるいろ〳〵な傳說やら、語り傳へもあるが、現在その眼で實物を見たお前には、この上云つて聞かせる必要はあるまい、な、平太郎、判つたか。』

『へえ、よく判りました、ところで、親方は、一體どうして、あの埋藏金の秘密を知つたのです。』

『それだ、平太郎、かうして、埋藏金のいはれ因緣を聞いたからには、俺がこの秘密を知つた經緯も一緒に聞きたいだらうが、それは今から三年後を待て、といふのは、ある事情のために、三年後でなければ、金輪際云へないのだ、俺が今度やつて來たのは、たゞあの埋藏金が、事實あるかないかを確めるためで、折角あると判つても、矢張り事情のために、今度は掘り出すことができないのだ、然し、今から三年經てば、大ぴらに掘り出せるから、その時は、お前も仲間に入れてやる、それまでは、たとへどんなことがあつても、他人に口外してはならないぞ、もし、話をしたら、今度こそは、お前を生かして置かないから、そのつもりでゐろ、いゝか、三年だぜ、待ち遠しいだらうが、三年待て。』

話してゐるうちに、早くも東の空が白みかけた。朝食がすむと、二人はその場をあとに富山へ歸着しました。翌朝、新兵衛親方は、山行きの日當として、辭退する平太郎に無理矢理五圓を與へ、かたく三年を約して歸つて行きました。

五

やがて、三年の年月は、水のやうに流れましたが、平太郎が首を長くして待つてゐた新兵衞親方からは、何の音信もありません。

『あんなに堅く約束をしたのに、どうしたといふのだらう、何か來られないやうな事故でも起つたのかな。』

さう思ひながらも、新兵衞親方の住所を聞き漏らした平太郎は、直接手紙で問ひ合はせることもできず、今日は來るか、明日は姿を現はすかと、ひたすらその來訪を待ち佗びること、また一年ばかり。それでも、新兵衞親方からは、何の音沙汰もないので、今はじつとしてゐられなくなつた平太郎は、各地の知己友人に新兵衞親方の消息を問ひ合はせたところ、夕張にゐた昔の友人から、新兵衞親方が、已に一年半ばかり前に同地で病死した旨報らせて參りました。その手紙を手にした平太郎は、一時は驚ろくとともに、がつかりいたしましたが、すぐに頭に閃めいたのは、自分が新兵衞親方に替つて、埋藏金を掘り出してやらうといふことでした。で、早速山行の支度をなし、希望と勇氣に胸を躍らせながら、單身、かねて心覺えの道筋を辿つて行きましたが、四年前の記憶に誤りでもあつたのか、探しても探しても、あの埋藏金のあつた場處へ行きあたりませんでした。けれども、どこまでも希望を捨てることができなかつた平太郎は、この上は神佛の力を借りる外はないといふので、思ひ切つて住所定めぬ行者となり、爾來、今日まで、二十年あまり、朝夕神佛に祈願をこめながら、日本アルプス地方に雪のあるうちは、佐々成政の舊領で、且つは新兵衞親方の出身地である熊本地方を、そして、雪が消えて若草が萠え出す頃になると、日本アルプスの峯々、谷々を彷徨して、埋藏金の手がかりとそのありかを探究して居ります。

筆者が、友人で亞細亞探險旅行家柴田富陽氏の紹介により、平太郎爺さんに淺間溫泉で會つたのは昭和三年の冬のこと。以來、平太郎爺さんの消息には杳として接しませんが、もし、再び相會ふことがあつたら、この問題について、もつと詳しいその後の調査探究談を聞くことができるだらうと思つて居ります。(完)

▲顏剃りアトのお手當に就て…

顏を剃つたアトを其儘にしておくと、ヒリヒリ痛んだり、皮膚が荒れたりするのでどうも困る……と、よく仰言います。かういふ時にこそ、桃谷の美顏ユーマーを御活用下さい。ホンの一二滴お附けになるだけで完全に皮膚を消毒し、皮膚も荒れず、剃刀マケもせず、本當に重寶な美容液です。それにこのユーマーは少しも刺戟性がなく附けたアトがトテも爽快ですから、どなたでもキット御氣に召します。毎日の洗面や入浴の後にも、どうか御愛用下さいませ。荒れを防ぐは勿論、暫く御常用になれば、キメの細かな、ツヤ〳〵とした美しいお顏になります。

▲美顏ユーマーは全國の信用ある化粧品店にあります

立美
妖説
好色櫻（かうしよくざくら）
本田美禪
志村立美畫

京侍と陸奥の人買

猪の藏人はこくり〳〵と舟を漕ぎながら歩いてゐる。昨夕は後の宿の平賀に泊つて、長者(旅籠屋の事、兜屋ともいつた)の家の女中相手に、飲みすぎたので疲れてゐるのだ。

『あゝ眠い！　今日は什うしても國分へ着いて、懷かしい御主君のお顏を久しぶりで拜さにやならぬに………』

ふと氣がついて呟きながら、すた〳〵七八歩ゆくかとおもふと、またその足は鈍くなり、こくり〳〵と舟を漕ぎ出す。

『これは可ん、俺は何かに憑かれてゐるのだ。昨夕の宿の飲みすぎぐらゐでこんなに眠いはずはない。尤も節は卯月中葉で、おくれて春の訪れるこの信濃路は丁度今都の彌生中葉と同じく、眠氣のさし易い氣候なのだが、何にしても少し可異い……』

また氣がついて呟きながら、ぐい〳〵足を運んでゐると、何時とはなしに眠氣を催ほし、歩は自づから鈍くなる。

『まつたく是れはやりきれん！　四年ぶりでお屋方樣や、北の方樣にお目にかゝつて、而て御成人あそばした姬君樣のお姿を……と思つて樂んで下向したのに！』

また氣がついて呟きながら、眼を張り開いて大跨に歩をすた〳〵と運んでゐると、ぼうとして夢見るごとくに心の働きが鈍くなり、張り開いた上下の瞼も縫はれるやうに食ッついて來る。

時はまだ五つ半頃。

それに素走らしい好天氣！

街道筋の兩側に枝をひろげて立つてゐる松や、杉や、檜の老樹の、翠したゝる間には、ちらほら山櫻が咲いてゐる。

『お侍樣、お侍樣！』

呼び起されてはつとして、藏人は眼を開いて見ると、旅人らしい町人が自分の側に足を投げ出し、右方へお

いた小荷物に體を斜に凭せかけ、笠を尻に敷いてにや〳〵してゐる。

藏人はあまりの眠さに、彼自身でも知らぬ間に、路傍に美くしく生えてゐる小草の上へ轉がつて、ぐつすりやつてゐたのであつた。

『はゝゝゝゝゝ御風流なお晝寢ですなア。』町人はまだにやにやしてゐる。

『什うして？』

藏人は訝かつて訊く。

『什うしてツて貴下今時分、それにこの評判の墨染櫻の下へ來て、大の字狀になつて寢てゐらつしやる。御風流では御ざいませんかね。』

『成程。』藏人は仰ぎ見た。

意識して花下を撰んで、夢を貪つてゐたわけではないが、いはれて見るとそのとほり、わが頭上には美しく、薄呉藍に滿朶を染めた櫻の花が擴がつてゐる。

『さういはれると面目ないが、實は恐しく眠氣が催し、自分でも知らぬ間にこの有樣となつてゐたのだ。』

『じや矢はり御美男なので、この櫻の木の精に見込まれ、誑かされてこの下で御寢なつたので御ざいます。』

『何ツ。』藏人は改めて頭上の花を見直しながら、『櫻の精に魅られた？』

『へえ、こいつは實に不思議な妖樹で、不斷は然うでも御ざいませんが、この花の咲きます頃には、綺麗な顏の男を見ると、すぐ變な了簡を出し、誑かして自分の根株へ引き寄せるので御ざいます。』

『莫迦を申すな。』

『いゝえ本堵で。』町人は何所までも眞顏を崩さずに語りつゞける。『で、一名は助平櫻、好色櫻とも土地の者らは呼んでをりますので御ざいます。』

『不思議な櫻もあつたものだな。』

『何か艶ツぽいお夢でも御覽になりはいたしませんか。』

『否や何にも。』

『それはお仕合せで御ざいました。艶ツぽい夢を見たものは、ぢき變な病氣にかゝつて、命を取られるので御ざいます。』

『莫迦々々しい！』

藏人は冷笑しながら、

『萬物の靈長たる者が、非情の樹木などに魅入られて……はゝはゝゝ、取るにも足らぬ話しだが、然し何か、この土地の人間は、然うしたことを申してをるのか。』

『申してをるのかでは御ざいません。實際に毎年あるので、みな怖がつてをりますばかりか、崇め奉つて注連まで張つて、御覽のとほり神木として祀つてをりますので御ざいます。何しろあな千年からも經つとる老木で御ざいますから。』

『さういへば太さと申し、根株に近い幹などは空洞になつてゐる鹽梅といひ、かう何となく神通力でも持つとるやうな感じがいたすな。』

『まつたく是れはありふれた櫻の木では御ざいませんです。』

『然しお身は斯う見たところ、この土地に住む者とも思へぬ。我ら同樣、旅姿をしてゐるではないか。』

『奧州の者で御ざいます。』

『それに何でこの土地のこの奇怪なる木のことなどをさう詳細に知つてゐるのだ。』

『毎年爰を通りますので。』

『あゝ其れで。』

藏人はちよつと頷き、

『而て何所へまゐるのだ。』

『京の方へ上りますので。』

『何を商賣にいたしてをるのだ。』

『好色師で御ざいます。』

『はてな？』藏人は首をひねつて『かうしよくとは、色を好む師とでも書くのか。』

『然やうで御ざいます。』

『變な商賣もあつたものだが、お身はそれほどに色ずきか。』

『御冗談ばつかり仰しやる！』

五十格好の旅人は、一癖ありさうな四角な顏を、惡狡すさうに崩して續けた。

『手前が色を好むのではなく、お色好みの歷々衆から、賴まれまして綺麗な女を買つて步くので御ざいます。』

『ではつまり人買ひなんだな。』

『然やうで。』

『そんな用で京へゆくのか。』

『何にしろ手前生國、奧州邊は御承知通りに、まだ今もつて八幡太郎が貞任宗任を征伐にいらした頃と大して變らず、ま、いつて見ると夷の國でな、開けんもので御ざいますから、美人があまりをりません。顏だけは相應に見られる者がをりますが、服裝が惡く、理粧が下手で、紅白粉を用ゐるものは滅多にないやうな有樣ですから、豪族衆や分限者のお色好みのお心を滿足さすやうな好い玉は見つからんので御ざいます。』

『で、京へいつて上臈を――といふわけなんだな。』

『然やうで。』
と、旅人は頷き、
『鴨川の水で磨いた、お顏も肌も玉のやうに綺麗な御女性といふものは、外には迚も御ざいませんです。』
『然うだ、京は美人の名所だ。』
『失禮ながら貴下樣もその京の方のやうにお見うけしますが。』
『然うだ、躬は京の侍だ。』
『それに何でこんな所へ……？』
『實は今國分にゐられる。』
藏人はいひかけて、旅人の顏と樣子とに觀察の眼を注いでゐたが、暫くすると言葉をつゞけた。
『舊主櫛笥前大納言、貞茂卿の御謫居をお訪ね申すつもりで來たのだ。』
『それは〳〵！國分のお屋方（大納言の居所なので土地の者はさう敬稱してゐた）へいらつしやるので？』

『その樣子ではお身もまた、主人の卿のおん事を知つとるやうに思はれるから、いはずもがなのことながら躬はちよつと辯じておきたい。』
藏人は白皙だちの綺麗な顏を曇らして、辯護をするやうな調子で初めた。
『四年前に御主君が當地へ御流謫になつたのは、鎌倉管領持氏卿が室町御所にお負きなすつて、武威を關東に振はれた際、持氏卿に御內通なすつたためであるやうにいひふらされてゐるのだ

が、實はそれは御冤罪、跡形もない事なのだ。』
『然やうで御ざいますか。』
『尤も卿の御勘氣は、まだ今もつて御赦免がなく、あのやうにしてゐらつしやるから、事情を知らぬ爰らの者らが、謀叛人として

陰にあつては、兎角のお噂まうしても決して不思議、ではないのだが、寔はそんな譯なのだ。』
『よう分りまして御ざいます。』
『で、躬はお悼はしくて耐らないので、浪人して都にあつても、種々才覺して心づくしの物など買うてお送りまゐらせ、餘所ながら御主君をお慰め申してゐたのだが、何にしろ四年來――其れに何時までも配所におはして……と思ひまゐらすといよいよ耐らず、やもを暮らしの世帶を疊んでとう〳〵京を立つて來たのだ。』

『それは珍らしい御忠節！　伺つただけで手前めは涙が零れまして御ざいます。』

『はゝゝゝゝゝ。』藏人はがらりと碎けて、わざと朗らかに哄笑しながら、『初見のお身を摑まへて無用のことを話してのけたが、是れも何かの因縁だ、愚な奴と笑うてくれるな。』

『頓だ事です。』

『時に、お身の名は何といふのだ。』

『金太左衛門と申します。』

『稼業は好色師で名は金太左衛門！　俗にいふ色と慾との二道かけておゐやるわけだな。』

『あはゝゝゝゝお口の惡い！』

『其れは然うと好色櫻に魅入られたために晝寢などして、あつたら暇を潰してしまうた。どりや、そろ〳〵と參るとしようか。』

猪の藏人は直垂の塵を拂つて體を起すと、塗りの剝げた侍烏帽子の纓をしつかりと結び直して、腰に吊つたいか物作りの太刀の鍔際を左手で握る。

『お名殘りをしうは御ざいますが、ではお別れといたしますかな。』

金太左衛門は笠を持ち、起ちあがつた體の肩へ、旅行用の小荷物を投げかけようとしたが、（はてな？）といふかと思ふと、一抱へほどある好色櫻の根株の後へ屹と眼をやる。

迷惑千萬奇怪な麗人

街道近く日あたりの好い櫻樹の前の平地には、離々とした若草が丁度毛氈でも敷いたやう、綺麗に一面に萠え出てゐるが、根株の後には四五尺の去歳の枯草が茫々と八重むぐらして這つてゐる。その中からによつきりと人間の足が見えてゐるのだ。

『お侍様！』金太左衛門は覺えず呼びかけ、『彼所に誰か轉がつて寢てゐるやうで御ざいます。』

『おゝ成程。』

『あれもまた美男子で、好色櫻の精に魅入られ、引ツ張り寄せられて他わいなく寢轉けてゐるんでは御ざいませんかな。』

『然しあれは女のやうだ。足の裏を此方へ見せて、並べて二本出しとるが、あの格好は男ではない。』

『さう仰しやれば女のやうだが、おゝ！　赤い物も見えてゐますよ。』

『はゝゝゝゝゝ好色師だけあつて逸早く際疾いとこを見つけるな。』

『死んでゐるんではありますまいな。』
『大丈夫！　あのぽつてりと肉附の好い、脹ツ脛の色艶に徴して見ても知れてゐる。然もあれは若い娘だ。』
『さう聞いては放つちやおけない。行つて見ませう。』好色師は商賣がらだ。拾ひ物でもしたやうに大欣びで走り寄る。
藏人も熱い血の燃えさかつてゐる青年だ。好奇心に唆られて、後にくツついて來て見ると、推測どほり若い娘が仰向けになつて仆れてゐる。
素走らしい麗人で、眼を堅く瞑ぢてゐるところをおもふと眠つてゐるに相違はないが、服裝はあまり見よくない。髪もまた亂暴に、艶よく丈にあまるのを、枯草の中に散らばしてゐる。
『お起きなさいお女中さん、什うなすつたんで御ざいます。』好色師は信切に肩に手をかけて搖振つた。
『む、む、むう……』
娘は唸きながら眼を開く。
『什うしたんです本當に？　斯う見たところお姿は旅のお人のやうにも見えぬし、ひよつと御病氣でもなすつたんでは？』
『はい、いゝえ……』
娘は尙も夢見るやうに四方をきよろ〳〵と眺めてゐたが、意識だけはつきりと取り戻したやうに蒼ざめた面に生氣を湛へると、俄に起きあがつて白い手を支き、
『實は昨晩、豫てからわたくしを狙つてをりました多勢の惡者共に掴まりましてね、もう少しで厭な所へ連れてゆかれようとしましたところを、やつとのことで逃げおほせ、災難だけは遁れましたが、家へ皈りますと又候ふ惡者共に襲はれる懸念があるもので御ざいますから、爰へ來ていろ〳〵と思案に昏れてをります中に、つい何時となく眠氣を催ほし……』
『では近所のお女中なのだな。』默つて聞いてゐた藏人は、同情をして優しく訊ねた。
『ついこの先の野澤の者で……』
初めて眼をあげて藏人の面をじつと仰ぎ見た娘の顔は燒くやうな赤味をもつて輝いた。同時に（おや！）と驚異の叫びを心の中であげたやう、體をちよつとびくりとさせたが、其れは他人には分らなかつた。
『あはゝゝゝゝ。』好色師は皮肉に笑つて、『油斷がならない、もうすぐにほの字にれの字だ。』
『でも……』娘は矢はり藏人の面を眈々と見まもりながら、『あんまり不思議で、どうお見あげ申しましても……相違ないんで御ざいますもの。』
『相違ないとは？』

藏人は怪訝な顏する。

『今まで夢に見てをりました、そのお方樣にそつくり其のまま……』

『莫迦々々しい、夢の話しか。』

『でもわたくしは本當に……まア什うしたら好いでせう！』羞耻の情にたへないやうに、娘は顏をぐたりと垂れると、本意なさゝうに溜息をする。

『什うしたら好からうなんて、お前夢にこの方と懇ろにしたところでもひよつと見たのではないのかい。』

『…………』

『呆れたね、いや、わしは恐ろしくなつて來た。』金太左衞門は言葉のとほりに、ちよつと身ぶるひをしてから續けた『櫻の精の所業なんだよ。このお侍樣はお心がしつかりとしてゐらつしやる上、お腰には降魔のお太刀をお佩きになつてゐらつしやるんで、さすが評判の好色櫻も手を出しかねてぢり〳〵してゐた。其所へ幸ひにもお前さん見たいな人がやつて來てゐて、然も昨夕の騷ぎに疲れて、ぐつすりとよく寢てゐるところを見たもんだから占めたとおもつて、すぐお前さんに乘り憑り、わが本望を達したんだよ。』

『これ〳〵。』

藏人は苦笑しながら、

『くだらんことを申しちや可ん。櫻の精の有無は兎も角、櫻の精が人を惑はし、その夢の中で猥らな事を……などといふことのある筈がない。』

『でも現にこの人が。』

『もう好い！』藏人は煩げに、『寔であれ嘘であれ、躬はそんな埒もない話しを聞いてゐる暇を持たん。些とも早く國分の屋方へゆかねばならぬ體だが、然し。』いひかけて娘へ眼を向け、『今聞けばこの先の野澤の者の娘とか、野澤ならば通り道ゆゑ、一緖に連れてつて進ぜよう。』

『難有う存じます。』また眼をあげて藏人の綺麗な顏をうつとり見ながら、『けど家へ戻りますと、また惡者がやつて來て煩いことを申しますから……』

『では什うすれば好いといふのだ。』

『御信切なお言葉に甘えるやうで御ざいますが、願へますことなれば、貴下樣のいらつしやる許まで御一緖にお連れなすつて……』

『そんなことは迚も出來ない。』

『でもわたくしは其れより外には……』

『安心する術がないといふのか。』

『はい。』とはつきりいひ切る。

鐵腸男子の魂もとろりとさせさうに魅力をもつた瞳をじつと藏人の面にすゑて眼じろぎもせぬ。この願ひが通らねば、梃でも爰は動かぬと決心したやうな狀さへ見える。

『恐ろしい事になつてしまつた。』好色師は交る〲に二人の狀を見ながら續けた。『お侍樣！　あなたお氣をおつけにならぬと、この娘にお命をお取られなさるかも知れません。什う考へても櫻の精がしつかり乘り移つてゐるんです。』

『莫迦を申すな。夢を見たのは偶然で、またこの人が初めて會つた躬にこのやうな無理をいふのは、さうしなければ什うにもならない苦しい境遇にあるからだ。ま、兎も角も野澤の家まで一緒にいつて取らすとしよう。家には兩親がゐるのであらうな。』

『はい、父さんが一人をります。』

『母はないのか。』

『小さい時に亡りました。』

『お身の名は何といふのだ。』

『墨染といひますが……』

『何ツ？』いさゝか愕然とした顏で、娘の狀と櫻の幹とを猪の藏人は見比べた。

都では諸人から、猪と綽名して呼ばれるくらゐの剛勇無双の荒武者なのだが、さう絕對に無關心ではゐられぬやうな奇怪な事を、重ね〲次ぎ〲に聞かされたので驚いたのだ。『呼びにくいので頭名だけを……』と娘は續けた。『墨、墨と呼ばれてをります。』

『成程。』

『で、近所の人は好色櫻に願でもかけてわたくしが生れたやうに申してゐますが、決してそんなわけではないので、父さんが物好きに、櫻の花の綺麗さにあやかるやうにと考へて、付けてくれたんださうで御ざいます。』

『然やうか。』

藏人は頷きながら、

『が、何にせよ今いふとほりに、躬は大切な體であるから、お身のいふやうに何所までも一緒にまゐるわけにはゆかんが、父御に會つて、事情を篤とたゞした上で、もし什うしても一臂の力を貸さねばならぬやうならば、その時はまた其のやうに考へて見て取らすといたさう。さア兎も角も起つたら什うだ。』

『は、はい……』

『剛情張ると放つてゆくぞ。』

『まア！』お墨は驚いて慌てゝ起つと、はだけた前を掻き合

はす。
亂れた髪は其のまゝで、蓬に肩へ垂れてはゐるが、何にしろ稀有の麗人！　事實において櫻の精が脱け出して來て爰に一人の女性を形づくつたかと思はれるほどの美貌家なのだ。身裝風俗などは什うであらうと、その眞價には影響はない。

藏人はその美人を從へ、烏帽子直垂の浪人姿の、歩を悠々と蹈んでゆく。

好色師はその後から續いた。

（まつたく是れは素走らしい。次第によつては黄金を十枚ぐらゐ並べても好い）さう思ふので執拗に彼はお墨から離れないのだ。

『金太左！』藏人は氣がついて、屹とふり返つて詰るやう、『お身は此方へまゐつては、道の方角が違ひはせんか。』

『殺生なことを仰しやいますなよ。手前の商賣は好色師、かういふ玉を見かけては迚も素通りは出來ません。』

『だが躬が付いてをつては駄目だぞ。』

『お侍樣！』

と、お墨が叫んだ。

『何だ？』

『あれ、あれへ惡者が……』

お墨はぴつたりと藏人の體へすり寄つてわな〳〵と戰きながら向ふを指さす。

人相の極めてよくない、汚い身裝をした厭な野郎が、十五六人固まつて此方へ向いてやつて來る。手には銘々に棒切れや錆刀などを引ツ提げて、眼をぎろ〳〵と光らしてゐる。昨夕手に入れた大事な玉に逃げられたその劫腹がまだ癒えないでゐるらしい。今日こそ一つ草を分けても――といふやうな恐ろしい決意をもつてゐることは、そのぎろ〳〵と光る眼で左右の地物を眺めては、罵りながらやつて來る樣子に見ても想像がつく。

『お身を苦しめる惡者と申すは彼奴らのことなのか。』

『はい……』

『好しツ。』

藏人は頷くと同時に腰のいか物作りの大段平をするりと拔いた。

陸離として日射に輝く！

美丈夫の義に勇む白刄亂舞の活劇は、一瞬の後に演じ出されて、血煙は舞ひ人の頭は手鞠のやうに飛びさうな殺氣を捲き起してゐるのだが、それは今爰では說くまい。

秘められた戀の合奏

今宵は中秋明月の夜だ。

櫛笥前大納言貞茂は、縁側近く敷かれた圓座に、流謫の身の粗末な衣服をまとうた老體の胡坐を組んで、瓶子の酒を酌みながら、今山の端からのツと出た濃い樺色の滿月を、物思はしげに仰ぎ見てゐる。

一座には北の方、是れもまた情けなく老い、都にあつて榮耀榮華に暮らしてをつた四年以前の、夢偲ばるゝ瓜核顔にはすつかり皺が刻まれてゐる。着てゐる物も矢はり粗末だ。主人の卿が鐵漿や靑黛おくことを廢してゐるやう、かの女も矢はり紅粉を粧ふことを廢してゐるので、ちよつと見ると中農程度の老夫人としか見うけられない。

雲上人のなれの果！　別してそれは悼ましく他人の眼には見えるのである。

莚一枚ほど隔つた位置に、猪の藏人は侍してゐる。次の間には二人の下人と、女の僮とがゐるのだが、聲高くは話しをせぬので、ゐるか什うかさへ分らぬくらゐだ。

夜はまだ宵の口である。

短檠の灯は觀月の邪魔にならぬやうに壁際へ遠ざけられてほんやりしてゐる。

『斯うして月を見るにつけ、菅右府公の昔が偲ばれ、漫ろに涙含しくなるわの。』

貞茂は嗟歎した。眼の中には言葉のとほりに儚ない露がきらめいてゐる。

『でもこの頃は藏人がゐて、何吳となく忠實によく御介抱申しあげ、わらはらの及ばぬところを取りつくろてくれますほどに、以前のやうにお心淋しくお過しあそばしはなされますまい。』

『其れは然うじやが。』貞茂は眼を此方へ移して『藏人とてまだ若い身そらじや。其れに猪と呼はるゝ猛者じや。よき主もつて都にあらば、男相當、器量相當、忠心相當の立身出世の出來ようものを氣の毒千萬！　それをおもふと忠實に仕へてくれる信切が、麿にはいつそ心苦しい。』

『又してもそのやうな埒なきことを仰せあそばす。忠臣は二君に仕へず……。この春まで隼る心をじつと押し耐へて都に止まり、心にもない浪人暮らしを一人で立てゝをりましたのは、はは。』藏人は淋しく笑つて『せめて變りゆく都の有樣、君に寃罪をお着せまゐらせ、斯やうに情けないお暮らしをあそばすやうにおさせ申した室町將軍家の消息や、鎌倉、中國、九州邊に威をふるふ管領共の興廢を飛脚をもつて御報まゐらせ、また時時は都の物など……といふ存念のありましたため。それでなけ

れば今年まで都にをりはいたしませんです。』

『も、もういうてくれるな……』

貞茂は指先で涙をそつと拭きながら、

『その眞心を聞くほど愁い。効なき麿が主人であるため、あつたら若い侍に浪人暮らしをさせたばかりか、いくその心盡しをさせた。またいふやうで甚だ何じやが、おん身の遠く送つてくれたあの獅子形の香爐だの、今爰にかうやつて酒酌むたびに出して用ゐる土盞臺だのを見るたびに、麿はどのやうに滿足したらう。昨年姫に送つてくれた錦の帶の屆いた時には、姫のみでない、麿も北の方も嬉しさについ聲をあげて泣いたくらゐじや。』

『もう什うか然やうな仰せは……』と恐縮しながら、今度は藏人が主人を止めた。『ふツつり今日かぎりお止め下さい。』

『でもあのやうな結構なお品は迚も當地では求めることが出來ぬので、姫はあれを寶のやうに……。ほゝゝゝゝゝ。』北の方は朗らかに、座をにぎはさうとするやうに、わざと聲をあげて高く笑つて、『姫といへば今晩は、この一年に一ぺんの月見もせずに臥つてゐますが、あれ

がゐぬと何となく物足らぬやうに心淋しく、わが夫折角の御酒宴もお興がうすいやうにおもはれますゆゑ、まゐつて連れて參じませうか。』

『いや捨ておけ。』貞茂は遮つた。『餘のことでない。風の心地で那アやつて部屋に閉ぢこもつて寢んでゐるのじや。』

『でも重いのでは御ざいませんゆゑ。』

『いや。』貞茂は頭を振つて、『輕うても病氣は病氣じや、無理をして重うさせては取り返しのつかぬ事となる。其れよりは藏人に、一つ朗詠でも吟んでもらはう。什うじや行らんか。』

『は、濁聲で我流の下手屎。其れよりはわが君の

御美音で是非お久しぶりに。』

『はゝゝゝゝ、麿の朗詠も久しいものじやが、今のやうに肝腎の前齒が落ちてしまうては什う踠いても巧うはまゐらぬ。さ、もう一つまゐるから、しつかり飲べて酒の力で、おん身お得意の白樂天でも思ふ存分に吟んで聞かしや。』

『では何も御一興。』

北の方が執次いで、其れへなみ／＼と酌してくれた土盞の酒をぐツぐと呷ると、藏人は吟じはじめた。

『遲々たる鐘漏、初めて長き夜。耿々たる星河、曙ならんと欲するの天。』

貞茂は上々機嫌で、靜かに手拍子を打ちながら、自分でもまた聞えぬほどのかすかな聲で唱和してゆく。

『鴛鴦瓦冷じくして霜の花重く、舊き枕、故き衾、誰と共にかせん！』

藏人は美聲を張つた。彼は弓箭執る武夫だが、雅信流の朗詠には佳なりに深い稽古を積んで、都にあつては、風流三昧に世をおくる殿上人の間にさへも持て囃された名手であつた。

『行宮に月を見れば心を傷ましむるの色、夜雨猿を聞けば腸を斷つの聲。』

彼は朗々と吟じつゞける。と、箏の音が聞えはじめた。

『おや、姫が！』

北の方は覺えずいつた。

『おゝ姫じや。然も朗詠に合はしてゐるのじや。』貞茂も耳を傾け、聞きすましながら續けていつた。『あの樣子では心配はない。病痾も本復したらしい。』

『折角の合奏じや、藏人、今度は催馬樂を唄うてやつての。』

『は……』

藏人は胸を騷がしはじめた。

彼はふかく秘めてゐる或る感情の琴線を、軟かい白い手で撫でられたやうな心地がしたのだ。心の中に張り詰めた多くの絃を一齊に掻かれたやうな氣持がしたのだ。それは感謝すべき感觸だつた。張つてはゐても冷たくて氷のやうに畏縮してゐた。それが今春風一來、嬉しくも暖かく溶かれたやうな心地がしたのだ。ぞく／＼しないわけにはゆかない。

『夏引きの白糸、七はかりあり、狹衣に織りても着せん、汝妻はなれよ。』彼は催馬樂を唄ひはじめた。

と、呉藍姫の靜かに彈ずる彼方の部屋の箏の音も、一緩、一急、金盤に珠を轉ばすやうに冴え、錚々として和されてゆく。かき鳴らす白い手の、絃を辷り絃をおすその巧みさがあり／＼と眼に見えるやうに思ひなされる。

『かたくなにものいふ女かな。汝厭ぎぬも、わが妻のごとく、袂よく、着よく、肩よく襟やはらかに、縫ひきせめかも――』藏人は秘めてゐるわが熱烈なる情懷を、美音に托して其れとなく箏の主へと訴へてゆく。

こんなことで配所における淋しい觀月の酒の座も、案外賑やかに興がやられた。

すんだ頃は九つをすぎ、丑みつ近くならうとしてゐた。

恐ろしき夢魔物語

藏人は眠れなかつた。

で、起き出て窓を開け、やゝ西天に傾きかけた月を眺めて溜息したり、呉藍姫の寢所の方を眺めてにつと笑つたりして、ひとり狂態を演じてゐたが、暫くするとまた臥褥へ入つた。が、矢はり眠れなかつた。眼は意地惡く冴えかへり、心は槌で打たれるやうな苦痛と懊惱とでぢり〳〵して來る。

(俺は何といふ莫迦だらう！　姬君のお心が、よし多少俺に傾き、什うか思召してゐらつしやる氣ぶりがあるにしたところで、家來の身では什うにもならない。第一そんな僭上な考へなどを起しては、今日まで四年間忠臣面して、まめやかにしてお仕へ申した心づくしも泡となる。野心があつて然うした事をしてゐたやうに解られてはこの藏人の武士が廢れる。殘念だが思ふまい。いや、僭越な戀などを御主君樣の姬君にお寄せ申すことは斷念しよう。今夜かぎりふッつりと！)とは思つても胸の火は依然と強く燃えさかる。什う踠いても眠れない。で、天井をじつと睨んで、自分の弱い心を嘲り、腐つた魂を呪つたりして、輾轉反側、尙ほ寢返りを續けてゐると、

廊下に低い足音がする。

それは衣ずれに交つて響いて、拔足でもするやうに、やゝ間をおいて聞えたのだが、入口の戸の前まで來ると、かき消すやうにぴたりと止まつた。

『姬君が見えたのだ。あの足音はたしかに然うだが、一たいどんな御用事で……？』

彼は眼を閉ぢて狸を初めた。

と、こつ〳〵と拳が戸に鳴る。其れは影のやうな低い音だが、昂奮をした彼の耳には鐘の音のやうに高く響いた。

『ぐう！　ぐう！』

彼は空いびきを搔き出した。

『藏人……藏人……』

今度は聲が微かに聞えた。

もうかうなつては狸は出來ない。彼は飛び起きて戸を開け

けた。
『姫君では御ざいませんので……？』
『叱ッ！』
『は。』彼は口へ手をやつた。
　その間に內へ入つた姫は、さすがに心咎めるやうに、敷いてある臥褥とは間隔をおいて坐つたが、寢間着のまゝの婀娜な姿は、やゝ硬張らしてゐるかに見える。
『どうあそばしたので御ざいます。』訊ねながら藏人も、姫とは少し離れた所へ坐つてわざと空ッとほけた。
『是非とも聞いてもらはねばかなはぬ事があるのじやが……。最前はいと興があつたの。』
『お蔭樣で某がしも不斷よりよく唄はれました。』
『そなたの好い聲であることは、かねがね父母にも聞いてゐたがの、那程とは思はなかつた。』
『痛み入ります。』
『で、今いうた話じやが……』
　姫はいひかけて口を噤んだ。この三四日風邪と稱して一間の中にたれ籠めてゐた。そのせゐかも分らぬが、窓にさす月光に撫でられてゐる橫顏は、やつれて酷く蒼ざめてゐる。
『どんなお話しで御ざいます。』
　藏人は促した。
『そなたはこの春爰へ來た時、野澤の宿で墨染とかいふ哀れな娘の災難を救うてやつた話しをしたわの。』
『は、いたしたやうに覺えてをります。』
『その娘が二三日前から、わらはの夢に現はれて、無體なことを申すのじや。』
『何、お夢に？』
　藏人は眼を覺えず見はつた
『それも唯の有樣ではなく、恐ろしい形相で、來るたびごとに潸々と淚を流して咽びいつては、妾を怨み口說くのじや。』
『…………』
『藏人どのはわしの男じや。不思議な緣で契り交して今は身重になつてゐる。それにまたこの頃は、恐ろしい人買と惡人の手に囚はれて、非道な折檻をうけてゐる。什うかして夢になりとも藏人どのゝ枕に現はれ、この事をよくお話し申して、救ひを求めたく思ふのじやが、藏人どのは胴慾でわしをお嫌ひになつてゐる。枕に通ふことさへもお許しになつて下さらぬ。それといふがそもじのやうな女が側にゐるからじや……といふやうなことを申しては――』
『お待ち下さい。』

事ごとに驚きながら、默つて聞いてゐた藏人は、このとき手をあげて遮つた。

『それは本當で御ざいますか。』

『何しに噓をそなたに申さう。』姫は昂奮した面もちで男を一眼見てから續けた。『で、怨めしいはそもじじやが、もしこのことを藏人どのに話してくれたらば其れにめんじて怨みを解いてやらうも知れぬ。契り交した男には會ふよしもなく泣いてゐる。お腹の嬰兒は折檻の手をあてられて苦しんでゐる。もしこのままで二三日すごせば、母子共に人買と惡人の手で殺される。戀敵のそもじを捉へて、かうしたことを賴むのは外道に慈悲を乞ふのと同じで、肯かれようとは思はぬが、女には女同志の義理人情がある筈じや。わしは構はぬがお腹の嬰兒をもし些つとでも悼ましく思うてくれる心があつたら、そもじの口からこの事を藏人どのに話してほしい。もし悋氣してわしの賴みを放つておくやうなことでもあれば、不本意ながら執り殺す。呪ひ殺して腹を癒る。その考へでゐるといつてはわらはを恐ろしい眼で睨む。昨夕などは口から火を吐き、頭髮などは一本殘らず口繩のやうに戰がしてゐた。その形相の凄じさ！　今考へてもぞつとするのじや。』

『はゝゝゝゝゝ、あはゝゝゝゝゝゝ。』

藏人は絕仆をした。徹頭徹尾痴人でなければ說かない筈の夢物語りを、眞顏で姫はやつてゐるのだ。抱腹しないわけにはゆかない。

『何を笑やる？』

『でも姫君はあんまり莫迦げた、はゝゝゝゝ。』

『笑ふどこの騷ぎではない。』腹立たしげに姫は叫んだ。『そなたが旅の憂さはらし……ぐらゐにおもうて、みだらな事をしておいたその罰が今わらはに來たのじや。』

『頓でもない！』藏人はやゝ眞顏になつて『では姫君はお夢のことを、お夢どほりにそつくりとお信じになつてゐらつしやるので？』

『信じたうはないけれど、一夜ならず三夜までも同じ夢を見るんじやものを。今夜だつて寢ればまた襲はれるのに相違ない。』

『分りました。』

『どう分つたと申すのじや。』

屹となつて姫は詰つた。かの女も胸に秘めてはゐるが、藏人が來てから此方、次第に強く燃えて來る戀心には惱んでゐたのだ。話せばそれで一も二もなく解決のつく事件なのだが、然し自分から打ちあけて要求するほどの勇氣はなかつた。で、自然

內訌をする。忍んでいはぬ戀ぐらゐ苦しいものはないのであるから、內訌するに從つてその戀心は熾烈となつた。身を燒くばかり灼熱して來た。其所へ恐ろしい夢を見たのだ。無關心でゐるわけにはゆかない。風邪と稱して寢込んでゐたのも、その半分は惡夢のために惱みつくして疲れた體を、休めるための手段であつた。

双美相抱く一刹那

『それはつまり姫君が。』

藏人は言葉をつゞけた。

『それがしのお話し申した女のことを覺えてゐらして、いろいろと御不憫に思召されてゐらしたところへ、やゝ念入りの御風邪で、お熱のために御疲勞あそばし、お身もお心も不斷よりお弱くなつてゐたものですから、性の惡い畜生夢魔めが、其所へ付け込んで惡戲に、さうした變な有樣を御覽に入れたので御ざいます。』

『違ふ〳〵！』姫は頑是ない小兒のやうに、頭を強く振りながら『たゞ夢魔の惡戲だつたら、三よさも續けて見るはずがな

い。そなたは必と諺にもある、旅の耻ぢはかきすてぐらゐにおもうて契り交はして來たのじや。さうでなうてあの人が嬰兒まで作る道理はないわよ。』

『さう什うも夢の事など眞面目にお取りあそばすお方にお出會ひ申しては敵ひませんです。』

『でも正夢に相違ないので、わらははそなたの話しより、夢に現はれるあの人の話しの方を寔とするのじや。』

『御冗談では御ざいませんよ。』

『でも口先では什うにでも僞はることが出來るによつての。』

『仕様もない。』藏人は舌打ちをした。

『では本當に契りはせぬのか。』

『どうなりと御勝手に思召しどほりにしてお置きあそばせ。』

『怒つたのかや?』

『…………』

『本當にそなたのいふやう、契らんのなら嬉しいけれども……』

呉藍姫はいひかけて惱ましさうに溜息すると、扱きの間へ白い手をじつとさし込んで頭を垂れる。たゞ一場の惡夢と見るには、あまりに念が入りすぎてゐる。然も墨染なる娘の異形は、追つても叱つても晝夜の別なく髣髴として現はれて、わが眼の前から去らぬのである。

『何を考へてお在あそばす?』

『…………』姫は答へぬ。

『まだ御疑念が晴れませんけりや、改めてその時の模樣を詳細にお話し爲ませう。』

『…………』

『曾てお話し申しましたは、たゞ墨染といふ娘を助けた――といふことだけで御ざいましたが、實はその節、十人ほどの惡者を斬りすてたので御ざいます。』

『まア!』姫は驚いて顏をあげると、氣支ふやうに藏人を見た。

『尤も斬つた惡者は、その界隈の者からも蛇蝎のごとく嫌はれてゐる破落戸共で御ざいますから、土地の者は却つて欣び、地頭からもお咎めがなく、無事にすんだので御ざいましたが、困るのは娘に懸想し、金をばら蒔いて惡者共に娘を攫はした土地の豪族、佐久一郡に威をふるふ百濟の馬之亮といふ者で。』

『待ちや!』と姫は抑へて『その者なら昨年わらはを……』

『御存知なんで御ざいますか。』

『知つてをる段でない。』

姫はまた昂奮しながら、

『父君は無禮な緣談、返事をするも汚らはしいとて、使の者を罵つてお皈しあそばしたほどじやから、そなたにも口を噤んでゐらしたものと考へられるが、あらう事かあるまい事か、其奴は金をしたゝか積んで、わらはを妾にと申して來たのじや。』

『其んなことが御ざいましたか。』

『それも一度ではないのじやよ。』姫は悔しさうな調子で續ける。

『斷つても斷つても、執念く申し込んで來るのみか、終には矢はり惡者を金におかして多勢雇うて、當地へそつと入り込ませ、隙を見てわらはの體を攫はせようとした事さへあるのじや。』

『不屆き至極な!』

『じやが今はそなたがゐるゆゑ、いかなる者がまゐつても少し

も懸念するには及ばぬ。父君はじめ下人までみな安心して暮らしてをれるが、喃う藏人……』

『は。』彼は胸をどきりとさせた。

『そなたは何時までも爰にをるわの。』

『仰せまでも御ざいません。』

『而て、あの……』姫は月を浴びた顏を反向けて、暫くもぢもぢとしてゐたが、『あの太刀で今いうた惡者共を害めたのかや。』

　壁に立てかけた太刀へ眼をやる。言葉は軌道外へ反らしてやつたが、その樣子には耐らなく多情な濃艶な痴態が見える。

『然やうで御ざいます。』

　電波のやうに或る物をびり〳〵と感じながら藏人は、囈語のやうな調子で答へた。

『而てあの……』

　姫は尙ほもぢ〳〵しながら、

『恥かしいことを訊ねるやうじやが、そなたは北の方を迎へる時には……。ど、どのやうな女子をむらやる。』

『は……』

『諺にもいうてある。戀には上下の隔てがないとか。況て今は配所の人の子……。喃う藏人！　そんな者の娘であつたら、そなたは貰うても好いのであらう。』

『は……』

　藏人は喘いで答へた。

　火事は近くなつて來た。火の手は彼の身邊をもうすつかりと包んで來てゐる。胸にある半鐘は擂られるやうにぢやん〳〵高鳴る。主從の別などを考へてゐる場合ではない。

『ひ、姫君！』

『藏人！』

　何時とは知らずぢり〳〵と近づいてゐた二人の體は、俄かに手を執つて抱擁し合つた。

と、丁度その時。

　黑裝束の曲者が、窓から首を突ツ込んで、內の樣子を窺つた。

『むツ！』叫びながら藏人は、姫から飛んで離れざま、壁に立てかけた太刀を握つた。

　容易ならぬ物音が、突として大納言夫婦の居間の方から聞えた。

（賊だなツ）とは思つたが藏人は、姫を置いてはゆかれなかつた。今見た黑影も賊の一人だ、窓外にもまた無數の賊が潜んでゐるに相違ない。さう思ふと心は隼るが、無謀には主人夫婦の居間の方へは飛んでゆかれぬ。で、まづ彼は姫を負つた。姫の扱きでしつかり負つた。負ふと共に太刀を拔き、主人夫婦の居

間の方へと一直線に猪突した。

と、その跡へひらり〳〵と、窓から飛び込んだ曲者の覆面をした一團は、藏人の後を追ひかけた。

『話しに聞いた樣子では日本一の猛者らしい。』

『油斷して不覺を取るなよ。』

『合點だ。』と呼應しながら、草鞋をはいた足を飛ばして母屋の方へ追ひ迫る。

もうこの時は藏人は、主人貞茂夫婦の寢所の入口に立つて奮鬪してゐた。

斬る、突く、拂ふ。たゞ一本の段平は、電火の空にひらめくごとくに、はと思ふ間に走つては、その都度さつと血汐を飛ばす。眞向梨割りから竹割り、胴斬り袈裟がけ車斬りなど、其れは鮮かな手の中だつた。

義憤に燃ゆる美丈夫

『ふん然やうか。では矢はり姫君がお夢に御覽なすつたとほりに、誘拐されてゐるんだな。』

『お夢にといひますと？』

『いや、それは此方の話しだ。』

『然やうで御ざいますか。』

『誘拐されて何所へやら押込められてゐるといふ話しも矢はり本當か。』

『へえもう其れは聞いてさへぞつとするやうな酷い目に會はされとるさうで御ざいます。』

『だが何だつて罪もない女を捉まへて苛らしくさう折檻をするんであらうな。』

『其れは斯うなんで御ざいます。人買さんが、都から今度買つて來た女子衆は、どれもみな普通の代物、折角奧州へ連れていつても、京上臈と銘打つて、豪族衆から大金取つて、賣り込むやうな別嬪さんではないんださうで御ざいます。手前もちよつと見ましたけれども……』

『ふん、成程。』

『で、什うかしてお墨さん――この春ちよつと當地で見かけた墨染さんを買つてゆきたい。あれならばしつかり儲かる――といふ肚で人買さんは、お墨さんの父親にその相談をしたんださうです。』

『ふん成程。』

『ところがあなた肝腎の墨染さんが什うしても首を横に振るもんですから、人買さんも劫を煮やして、とう〳〵あなたこの土

地のよくない人達を抱き込んで……といふわけなんで御ざいます。』

『では父親は承知の上か。』

『其れは什うか存じませんが、何にしろ小百姓、それに酷い貧乏で、三年來の御年貢が溜まつてゐるさうで御ざいますから、ことによると承知の上で、さうしてわざと自分の娘を人手にかけて折檻をさしてゐるのかも知れません。』

『あの親仁ならやりかねぬ。』

『お客樣は御存知で？』

『この春一度會つただけだが……』呟くやうにいひながら、胡坐を組んで坐つた體の小膝をちよつと搖振ると、猪の藏人は腕組みをした。

彼は姫に強要されて、かの女が夢に見たとほり、お墨が囚はれてゐるか什うかを、調べるためにやつて來たのだ。で、宿もこの野澤なる長者の家に取つたので、夕餉の折敷の一酌に旅中の憂さを遣りながら、女中相手に先刻からお墨のことを訊ねてゐたのだ。

『で、そのお墨は。』拱いた腕を解きながら、藏人はまた訊ねはじめた。『何所でそんな目に會つてゐるのか、その場所を汝は知らぬか。』

『そ、それは……』

女中はちよつと躊躇してから、

『噂に聞いてをりますばかりで、よく知らぬので御ざいますが、よし知つてゐましても迂濶には申しあげることは出來ませぬ。』

『什ういふわけでな。』

『もし人樣に話した事が、惡者共に知れますと、後の祟りが恐ろしいので……』

『成程。』藏人は苦笑しながら、『では強ひて訊ねんが、今いうた好色師も、無ろんこの家にゐるんだらうな。』

『然やうで御ざいます。』

『いつから當家に泊つてゐるんだ。』

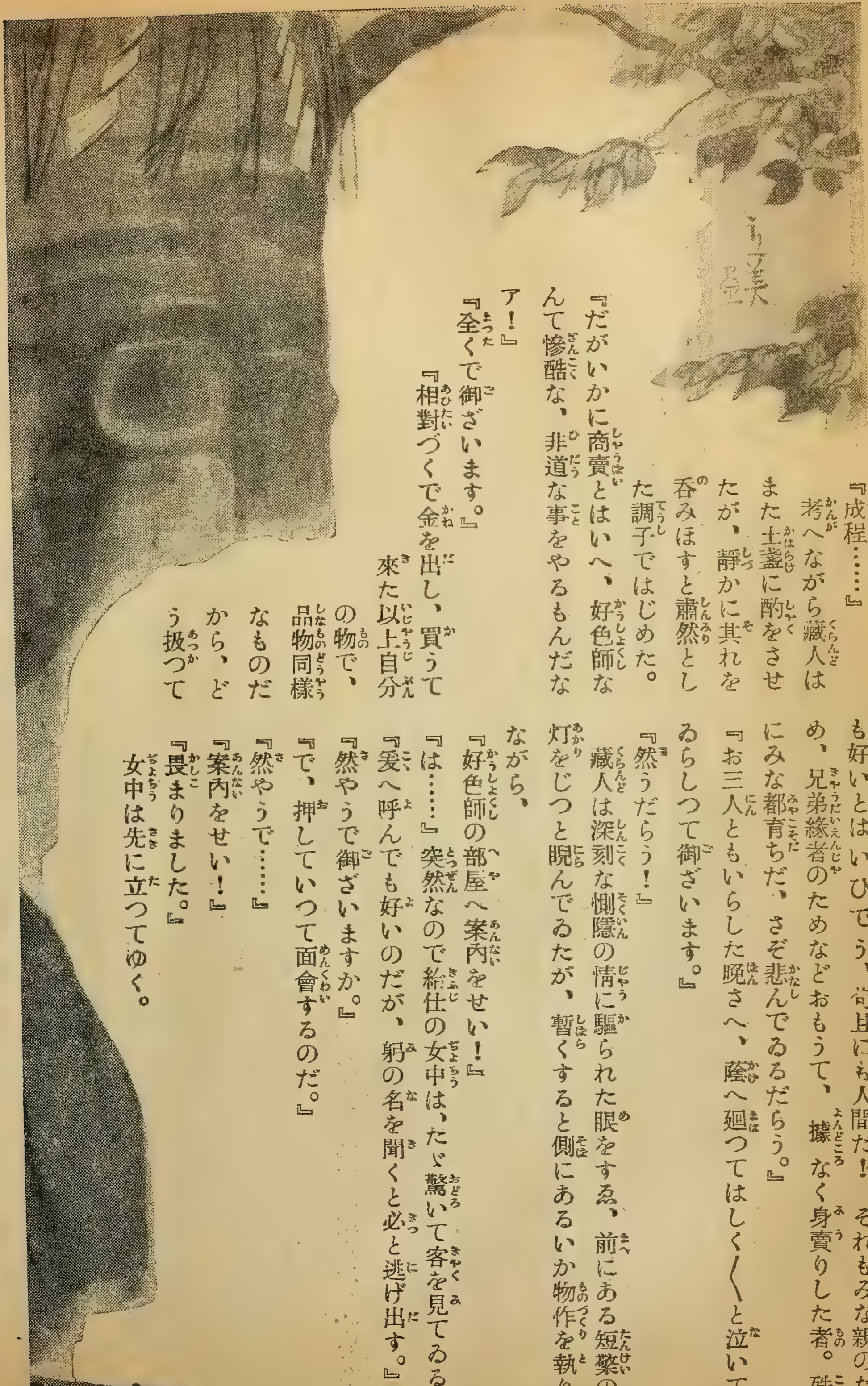
『七日前からで御ざいます。』

『今度買つて來た都の女も、矢はり當家に泊つてゐるのか。』

『いゝえ、來た日にはお泊りでしたが、この人達にも逃げられる心配があると仰しやつて、人買さんは三人とも、翌朝すぐに何所へやらお遣りなさいまして御ざいます。』

『これもまた惡者の手で護らしてゐるんじやないのか。』

『多分そんなことで御ざいませう。事によるとお墨さんと一つ所へ押し込んで、惡者共に番人がさせてあるのかも知れません。』



『成程……』考へながら藏人はまた土盞に酌をさせたが、靜かに其れを呑みほすと肅然とした調子ではじめた。

『だがいかに商賣とはいへ、好色師なんて慘酷な、非道な事をやるもんだなア！』

『全くで御ざいます。』

『相對づくで金を出し、買うて來た以上自分の物で、品物同樣なものだから、どう扱つても好いとはいひでう、苟且にも人間だ！ それもみな親のため、兄弟縁者のためなどおもうて、據なく身賣りした者。殊にみな都育ちだ、さぞ悲んでゐるだらう。』

『お三人ともいらした晩さへ、蔭へ廻つてはしく／＼と泣いてゐらしつて御ざいます。』

『然うだらう！』

藏人は深刻な惻隱の情に驅られた眼をする、前にある短檠の灯をじつと睨んでゐたが、暫くすると側にあるいか物作を執りながら、

『好色師の部屋へ案内をせい！』

『は……』突然なので給仕の女中は、たゞ驚いて客を見てゐる。

『爰へ呼んでも好いのだが、躬の名を聞くと必と逃げ出す。』

『然やうで御ざいますか。』

『で、押していつて面會するのだ。』

『然やうで……』

『案内をせい！』

『畏まりました。』

女中は先に立つてゆく。

義憤に燃え
た藏人は、いか物作を揺りながら
悠々と步を運んで續いた。

* * * * * *

この春は妖艶に、うす呉藍に美しく、滿朶に花をつけてゐた墨染櫻は、鬱蒼とした靑葉をもつた唯の喬木の姿となつて、雜草中に立つてゐる。

その一抱へもあるやうな、凹凸とした根株の端へ、猪の藏人は好色師金太左衞門と腰を並べて、足を踏み開いて掛けてゐる。昨夕强談し

て或る事を金太左衞門に約束させた、その約束を履行さすため、彼は彼を拉して來たのだ。

『金太左！』

『は……』好色師は惶々こたへた。

『無論逃げはしないであらうが、逃げたとて逃がしはせんぞ。』

『否え決して……。お約束の四人の女を、あの者共が連れて來て、貴下樣のお氣にめすやう四ツくりお話しのすむまでは、人質になつた考へで神妙にしてお側にをります。』

『無論人質に取つたので、あの者共にもしお身が、女を連れて逐電するやう吹ツ込んでゝもあらうものなら、躬は本當にこの場において、お身をすツぱりと行つてしまふぞ。』

『其れはよう心得とります。』

『躬は國分でもこの春爰で惡者共を斬つたやう、十八九人斬つて來た。』

『またお行りなさいましたか。』

『うん、』藏人は大きく頷き『それも矢はり惡者で、然もこの春金をばら蒔き、惡者共を抱き込んで墨をさらはした當地の豪族、百濟の馬之亮の旨をうけ、躬の御主君の姫君を奪ひにうせた者なので、躬の斬り得になつたわけだが、田舍へ來ると面白い！　此方の所爲が正當で、斬らねばならぬ者らであつたら、いくら斬つても地頭から面倒なことはいはれない。都では斯うはいかんが、はゝゝゝゝゝ。』わざとから〱と哄笑しながら、

『で、爰へ約束どほりに、四人の女を連れて來るお身に雇はれた惡者共も、躬を見損じてじたばたいたすと、お身と共にぶツた斬るから、さう覺悟してをるが好い。』

『大丈夫で御ざいます。貴下樣のお噂は彼奴らも聞いてをりますし、手前からも懇々と申し聞かして御ざいますから。』

『それならば好いけれど、躬は當國へまゐつて以來、非違檢擧の役人が少ないためには溢れ者らが良民共を苦める無慙な有樣を見るにつけ、今後も緣のあり次第片ツ端から斬つてすて、良民保護に任じようとの義憤の念に燃えてゐるのだ。』

『御尤もで御ざいます。』

『だが考へると不思議でたまらぬ。』

やゝあつてから藏人は、櫻の枝を仰ぎ見ながら、

『この春爰でお身から聞いた、この妖木の好色話しは、執るにも足らぬ迷信として躬は聞き流してゐたのだが、今日までの出來事は、さうのみいつて貶せない證據を擧げて見せてをる。然も墨は姙娠してをる……といふやうな話しだが、其れは寔か。』

『本人はさう申してゐますが、いかにあなた櫻の精が、貴下樣の身代りとしてあの人を誑かしたにいたしましても、眞さか姙

娠をさすやうな氣支ひなどは御ざいますまい。あれはつまり口實で、さういつたらば賣られないでもすむかと思つての狂言だらうと、睨んでをりますので御ざいます。』

『成程！』

藏人は大きく頷き、

『然う申せば然うかも知れんが、何にせよこの木には、慥に生きた魂が舍つてゐるやうに思はれる。情事のことは兎も角も、花時分には誑かされて、幾人かの人が每年々々命を取られるといふ事が事實であれば什うしてもさう思ふよりは仕樣がないが、さうすると不祥の妖樹だ。此儘でおくわけにはゆかんな。』

『といつて千年以上の年劫を經てゐます上、御覽のとほり注連まで張つて、神木として土地の者らは崇めてをりますので御ざいますから、什うする事も出來ません。』

『然しこのまゝでは捨ておけん。今日の墨が躬に對し、果してどんな樣子をするか見屆けた上で什うにかいたさう。助平櫻！　好色櫻！　いかに王城から遠くはなれた爰らにあつて千年の壽を保つてゐる老樹とはいへ、あまりに言語道斷な奇怪な眞似をしすぎるやうだ。のう然うは思はぬか。』

藏人は體を起して、また今更に老樹の幹だの、四方に張つた枝だのを非難の眼をもつて見廻はしてゐる。

このとき街道の向ふから、人相の惡い七名の破落戸共に護衞され、白い顏の四人の女性が、步を力なく蹈んで來た。好色師に買ひ取られ、都から連れて來られた女性とお墨なのである。

『參りました貴下。』好色師は藏人に指さしながら注意した。

『おゝ成程、やつて來たな。』

『斯うしてこんな所から遠目に見てもお墨さんだけは、あれ、あのとほりに違つて見えます。』

『躬は女の器量のことなど、餘人のやうに注意せぬので、この春もうつかりと、たゞ見すごしてゐたのだが、さういはれると成程好いなア。』

『好いどころでは御ざいません。啞ッ！　これは氣うとい、飛んで來ますよ。』

『狂人のやうに見えるでないか。』怪みながら藏人はかの女の狀に注目してゐる。

まつたく其れは狂態なのだ。

脛も露はに、絡はる湯具を蹴開いて、たツたと宙を馳けて來る。丈にあまる黑髮は後へ伸びてざわ〳〵してゐる。魅入るやうに藏人の面へ屹と向けた眼は、異光を帶びて輝いてゐる。この數日間殘虐な鞭をうけて疲れた體は、へた〳〵になつてゐるのだが、其れにも拘はらずしやんとして生氣に充ちてゐるかに

見える。だが顔色は物凄く、眼尻が吊つて蒼ざめてゐる。其れがさうした意氣込みで一直線に飛んで來るのだ。（鬼になつた！　蛇になつた！）と囃したいほどに凄絶だ。

『まつたく是れは少し變だぞ。』

と、呟いた藏人の體へさつと飛びついて、お墨はわつと泣聲あげた。

呪はれた運命の子

『何をするのだ！』

藏人は二三歩よろけた。

鐵砲玉が飛んで來たやう、どしんと胸へ當りざま、兩手を首へくるりと巻きつけ、力を入れて締められたので、さすがの彼も佇立した身の中心を失つたのだ。

『ようおいで下さいました。わたくしはもう嬉しくて……』

身をふるはして男の顔へ自分の顔を押しつける。

『其んなにしては息が出來ない。』

『構ひませんわよ！』

『莫迦なことをいうては可ん。折角汝を救ひに來たのに。』

『それはよう存じてゐますが、いえ、難有くおもつてゐますが、然しわたくしは什うしても……。この春お目にかゝつた際にも、泣いてお願ひ申したとほりに、貴下様のいらつしやる所へ連れていつて頂かなければ、承知が出來ぬので御ざいます。』

『まア兎も角も少し落ちつけ！』

（厭です、厭です）といふやうにぐい〳〵とぶら下つてゐる體を搖振り、『そんな事をいつて小兒のやうにお欺しなさらうとなすつても、もう今日のわたくしは、決してその手には乘りません。』

『困つた奴だな！』

藏人は立腹しながら、

『何にしても手を放してくれんと、話しをすることも出來んじやないか。放せ、放せといつたら！』

（厭です、厭です）といふやうにまた體を搖振る。

『聽き分けのない！』

耐りかねて藏人は、首に卷かれたお墨の兩腕を兩手でぐつと摑むとひとしく、身踠きをするかの女の體を大地へどうと投げ出した。

はずみをくつてころ〳〵と雜草の上を轉がつたお墨はすぐに跳ねおきた。起きると共に兩手をついて藏人の顏を鋭く見あげた。

もうこの時は氣の毒な運命をもつ三人の女性も側へ寄つて來てゐた。七名の破落戸も、同じく側へ寄つて來て、にや／＼笑ひながら立つて見てゐた。

『什うなりとなすつて下さい、いえ、すぐにお殺し下さい！』呪はしい聲でお墨は叫んだ。藏人の顔を仰ぎ見てゐるその眼の中には涙に交つて、怨みの色が凄く出てゐる。『失禮ながら生きてゐる間は迚もあなたのことは思ひきれぬので御ざいます。』

『勝手なことを申してをらずに、躬のいふことを聞くが好い。』藏人は喝みつけた。

『伺はんでも分つてをります。貴下樣はわたくしの、あの胴慾な父親に金でもお與へ下すつて、その人買ひめにわたくしを渡さなくても好いやうにして下さらうといふお積りでせうが、其れは却つてわたくしにはお怨めしいので御ざいます。何度くり返して申し上げても詮ないことゝは存じますが、貴下樣のお側から離れる氣にはなれません。什うあつてもわたくしをお見捨てになるお積りでしたら、この場ですぐにお殺し下さい。女が斯うと一旦おもつた……失禮ながらこの方と思ひ込みました一念は、火で燒かれても消えません。よし體だけは灰となり、風に吹かれて散りうせましても、一念だけは生き殘り、思つたお方のお側に居ります。燒かれた火より尚ほ强い猛火となつて生き殘り、思うた方のお命を燒きつくさねばおきません。況てわたくしは不思議な御緣で、懇ろにして頂いて、身重になつてゐるのです。人に買はれて思はぬ男に身を任すことは出來ません。女の貞操、女の道、女の意地は命にかへても守らなければならないものです。其所にゐるお人達！』涙に光る眼をあげて三人の女性をじつと見ながら『都の人は人一倍戀するやうに聞いてをります。あなた方も都ではみなそれ／＼に戀をして、切ない愁いお思ひをなすつたお覺えがありませう。默つて聞いてゐらつしやらずに、わたくしになり代り、このお武家樣にわたくしの悲しい戀の叶ふやう、什うかお願ひなすつて下さい。お聞きのとほりわたくしは身重になつてゐるのです。たゞ一とほりの戀仲や浮氣沙汰では御ざいませんので、命をかけてゐるのです。もしこのまゝでこの方に捨てられるやうなことでもあつたら……いえわたくしの願つてゐるやう、一緒に連れていつて頂けなければ、この場で舌を嚙んで死にます。あの櫻の木の堅い根株へ頭をぶツつけて御覽に入れます。石榴のやうに碎けた中から、戀に破れた黑い血がどく／＼流れ出る狀は、まアどんな物と思召します。喃えお願ひで御ざいます！　女同志は何とやら……、喃えお願ひで御ざいます！』と絕叫しながら、膝をつき直して三人の女性の方へ兩手を合せる。

『分りました。』

『お悼はしく存じます。』三人の女性らは、耐らなくなつて泣き出しながら、『仰しやるとほりわたくし達も、みな相應に都では戀した者で御ざいます。』

『親の貧苦をすくふため、買はれてまゐりはいたしましたが、わかれた時のあの人の姿は今も眼の中にまだ其のまゝで殘つてをります。』

『何にしろ奥州までは山も河も通し馬！　あの憎らしい馬子づれに馬のお臀を叩かれて、追ひ立てられてゆくのですもの。別れた人の事なりと考へ出して懇ろにした嬉しい夜の睦言でもくり返して見てゐませんと、やり切れたものじや御ざいませんよ。』

『わたくしのは豫てから。』

一ばん年若な色ツぽいのが、のろけ半分にやり出した。

『死ぬ時には一緒にといふ約束になつてゐたので、別れるときには男から、蹈んだり蹴たり毒づかれたり、散々な目に出會ひましたが、それもみなわたくしを可愛くおもうてゐてくれる心の證據かと思ひますとね、蹈まれた痕も難有く、蹴られた跡も懐かしく、惡口雜言を吐ッかけられたこの體中が賴母しく、ついその痕へ觸つて見ては、泣いたり欣んだりしてゐましたの。』

（吐かすもんだな！）好色師は呆れ返つて、三人の顔をまじまじ見てゐる。

『其れに今あなたのやうな。』色ツぽいのはすぐに續けた。『しつかりとしたお心で、さうまで強い愛着をお持ちになつてゐらつしやる。失禮ながら感心しました。』

『といふよりは恥ぢ入りました！　都へ捨てゝ來た戀人たちは、今どのやうにわたくし達を怨んで泣いてゐるでせう。目に見えるやうで御ざいます。』

『些との間、お待ちあそばせ。』

比較的年嵩な一人は藏人の前へと馳け寄り、大地に手をついて頭を垂れた。

其れと見ると外の二人も、同じく馳け寄つて地上に手を支き、口を揃へて哀願し出した。

『お願ひで御ざいます！』

『御覽のとほり、お聞きのとほりに、墨染樣は命をかけて貴下をお慕ひ申してをります。』

『精しいことは存じませんが、子までなしたお交情との事。御迷惑でも御ざいませうが、おいであそばす所までお連れになつて上げて下さい。』

『憚りながら母子二人のお命にさへかゝはる事です。』

『もし入らぬ他人の節介、聞く耳持たぬといふやうなお苛いこ

とを仰しやれば、わたくし達もあの人同樣、爰で舌を嚙んで御覽に入れます。』

『櫻の根株へぶツつけて頭を割つて御覽に入れます！　奧州下んだりへ連れてゆかれて、鬼同樣の恐ろしい男に肌をふれますよりは、いつそのこと今爰でさうして死んでしまつた方が、どれだけ優しか知れません。』

『實をいふと三人共に、來る道中の旅籠々々で、今日は死なうか明日は死なうか……と思つてをつたので御ざいます。』

『其所へ今あの方の、一念凝つた御覺悟を伺つたもので御ざいますから、その決心はすつかり据つて、死にたくなつてまゐりましたの。』

『喃えお願ひで御ざいます！』

『どうかあの方の切ない願ひを、お聽きになつてあげて下さい。』

『もしお厭だと仰しやれば、今いふとほり四人揃つて……』

『喃え、お願ひで御ざいます！』

額を草にすりつけて、聲を揃へて泣きながら、哀願したり威かしたりする。

藏人は驚いた。

饒舌なのは女の特質。空吹く風と同樣に聞きながしておけば好いものなのだが、然し是れはそれとは異なり、首を横に振らうものなら、言葉のとほり枕を並べて死にかねまじき勢ひなのだ。お墨にふかく同情をする、その一面では自分自身の、薄命なのを悲しむあまり、眞劍になつて死なうとの覺悟をすゑた連中なのだ。打ツちやつておくわけにはゆかない。

『什うしたものかな。』

藏人は低音で、側に立つてうな垂れてゐる好色師の顏を見ながら諮つた。

と、彼の返答は意外であつた。

『お侍樣！　この女達の有樣を、あなたはどう御覽あそばしました。』

『迷惑なものに思つて見てゐる。』

『手前は熟々と發心しました。』

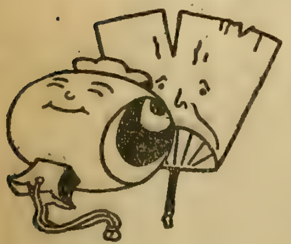
『何？』藏人は眼をすゑて見守つてゐた好色師の面をじつと見直した。

『貴下も多分さうさせる積りであんな御無理を仰しやり、手前を威かして四人とも爰へお引かせになつたのでせうが、今はもう貴下樣からいはれるまでも御ざいません。手前は三人共今爰で、證文を卷いて皈してやります。』

『其れは頂上！』

藏人は感嘆をした。
『あゝした事を聞かされましては、鬼でも默つてはゐられませんよ。』
『偉い！』藏人はまた感嘆をした。
『長いあひだ人買ひをして、多くの女を泣かせましたが、全く罪な商賣でした。』
『其所で今日からは佛になつたか。』
『然やうで……』好色師は頷きながら、『で、貴下樣はお墨樣を什うしてお上げあそばすお積り？』
『不本意だが彼女の願ひは斷わるほかに道はないのだ。』
『では那程に申してゐるのに。』
『何といはれても致し方ない。何をされても致し方ない。躬はやがて結婚をしなけりやならぬ女性があるのだ。』
と、藏人が斷言した時、
退屈さうに先刻からこの場の樣子を見聞してゐた破落戸共は驚いてお墨の側へ馳け寄つた。
呪はしい聲を高くあげると、同時に舌を噛みきつて、前へがつくりと突ッ伏したお墨の口からは黑い血が、ぶち蒔けたやうに流れ出てゐる。
『とう／＼行つたか！』
藏人は見て歎息をした。
『御覽なさい土地の人らが恐つてゐるとほりです。』好色師は注連のあたりを怖ろしいさうに見ながらいつた。
『さういへば然うかも知れんが、然しこんなことが實際に屢々あられては大變だ。躬は今も申した通りに地頭に訴へてこの妖樹を斫らせる。』
『さうして頂けば土地の者らも、どんなに欣ぶか知れません。』
『必と行る。其れが墨への追善だ……』
いひながら藏人は、かの女の側へしやがむと共に、かの女をぐいと抱きあげた。
呪はれたる運命の子よ！
怨みを呑んで閉ぢた眼は、開くよしもなくぴつたり縫はれて、鼻から下を血まぶれにした面の色はすつかりと死灰のやうに蒼ざめてゐた。

（完）



笑と怒

○怒つて暮すも一生、笑つて暮すも一生
○笑顏に優る化粧なく、笑顏に當てる拳なし
○石で來たのを石で受ければ兩損なれど、綿で受ければ双方笑顏
○我が怒れば人も怒り、我が笑へば人も笑ふ
○不和の家には貧乏神、笑ふ門には福の神

懸賞 讀物投票 募集

『冨士』を讀んで感激させられた、『冨士』は實に面白い、よくもかう一流大家の小說を集めたものだ、と云つた投書が毎日机上に殺到します。これは不可ない、かう云ふものを載せたらどうだ、と云ふやうな御注意もある。かうした御手紙を見ると我々は實に愉快です。是でこそ我々は皆樣の爲にどんな苦勞も惜しまない、もつと良くしよう。もつと喜んで戴かうと一生懸命です。

本誌は皆樣の雜誌です。良いが上にも良くする爲には皆樣の御指示によつて我々が苦心しなくてはならない。皆樣の大多數の御滿足を得る樣に努力してこそ『冨士』は更に〳〵良くなる。それでは皆樣はどんな小說が面白いか、どんな讀物が良いか、どんな記事がお好きか、是こそ我々が一番知りたいところなのです。

何卒、皆樣、是非本誌をより良くする爲に尊い一票を投じて下さいませ。

尙、此の機に本誌全般の批評なり、御注意なりを頂くことが出來ましたら望外の幸ひに存じます。

問題

本誌四月號掲載の讀物中どの讀物が一番面白いか。

賞品

一等（一人）桐胴火鉢（一對）
二等（五人）銘仙座布團（五枚組一組宛）
三等（五十人）美術置時計（一箇宛）
四等（千人）特製冨士メダル（一箇宛）

規定

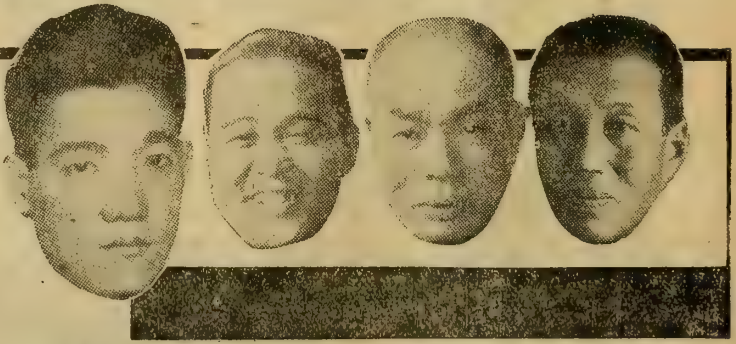
一、本誌四月號を讀んで一番面白いと思はれた讀物の題名を葉書の裏に書いて下さい。只一つを定めかねる場合は二つ乃至三つまでは併べて書いてもかまひません。
一、葉書の裏面に『讀物投票』と朱書し、その下に住所氏名を明記して下さい。
一、締切――昭和八年四月五日。
一、應募者多數の時は抽籤を行ひ、千五十六人を選んで受賞者とし、更に抽籤を行つて等級を定めます。
一、受賞者發表――冨士六月號
一、宛名は『東京本鄕駒込冨士懸賞係』

特輯

笑（わらひ）の探檢隊（たんけんたい）

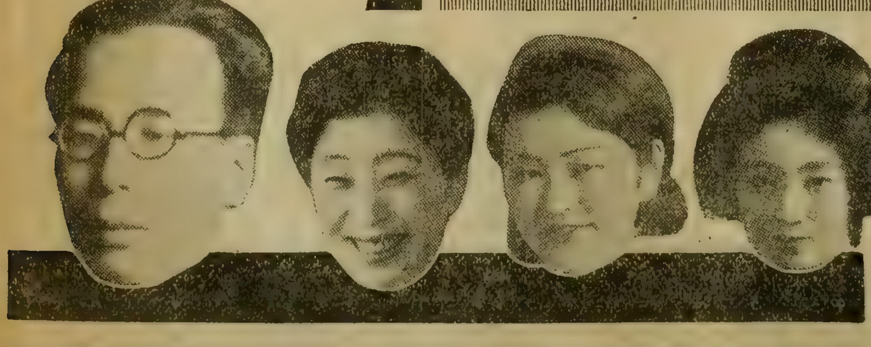
1

第一班向つて左より 徳川夢聲 榎本健一 大岡怪堂 水ノ江瀧子 中野かほる



2

第二班向つて左より 和田邦坊 林家正藏 西村樂天 井上劍花坊



3

第三班向つて左より 川上三太郎 森律子 メイ・牛山 後藤市丸

第一班

本社前出發の光景

班長——徳川夢聲（指揮並に作）

隊員——
榎本健一
大岡怪童
中野かほる
水ノ江瀧子

笑の鑛脈は何處

ユーモアは何處にでもある。東京にもジュネーブにも、總理大臣官邸にも、ルンペンのアパートにも、到る處に埋沒してゐる。

然し、金鑛と同樣に、折角のユーモアも、技師がボンクラだと、つい見逃して了ふ。

所で、吾が探檢隊第一班には、次の如く天下の名技師が揃つてゐる。

榎本健一君。——改めて御紹介するも可笑しいくらゐ。雷名轟くエノケン氏。淺草の人氣王。如何なる悲劇も、一度、同君の手にかゝるや、忽ち觀客を笑殺する。鉛を變じて黃金にする、笑の鍊金術師である。

大岡怪童君。——これがまた恐るべきユーモアの辣腕家。カイドー君、一度哄笑すれば天地一瞬にして朗らか也。更に一度、號泣せんか、今苦味丁幾を飲んだばかりの閻魔樣がゲラ〳〵笑ひ出す。

水ノ江瀧子孃。——吾等のターキーこそ、女性のモーリス・シュバリエである。なんと明朗なる1933年の乙女よ！宜なり。松竹樂劇部の人氣を其の双肩に擔へるは。

中野かほる孃。——喜劇プロダクションのピカ一。これはまたゾッ

とするやうな美人である。ロイドを見よ、キートンを見よ、チヤツプリンを見よ、――喜劇の名優は皆美男、然り而して、喜劇の名女優はカホル嬢の如く絶世のシヤンたるを要す。
以上、男女4名の名技師を率ゐる、小生の責任やまた重大。いでや、笑の金鑛を、物の見事に掘り當てん。

チンドン學校特待生

先づ、本社から手近な所で、チンドン學校に出掛ける。實を云ふと、この金鑛は、既に幾多の『ユーモア技師』たちによつて、發掘されてゐる場所――云はゞ散々に荒らされてゐる山なんであるが、名技師は廢坑と雖も捨てず、一應は調査して見る事にする。
講堂に入つて見ると――と云つても、ありふれた講堂を想像する勿れ、入口の汚れたガラス戸を開けると二坪ばかりの土間がある。――これ即ちチンドン學校の教室でアルデス
正面の欄間には、2枚の賞状が額に納まつてゐる。1枚は『當會議所主催廣告祭ニ千葉縣銚子市ヤマサ醤油株式會社ヨリ參加セラレタル貴音樂會舞踏式宣傳ハ動作並ニ音樂トモ頗ル優秀ニシテ時代ニ適合シ一般觀衆ノ注目ヲ惹キタリ依テ之ヲ感謝ス――水戸商業會議所』と云ふ、いとも嚴そかなるもの。1枚は、關東チンドン競技會で優勝第一位の榮冠を得た證。これを見るだけで、如何に本校の校長先生が斯界のオーソリチーであるかゞ解るであらう。
教室の左手なる、ガラス戸棚の中には、タンバリン、コルネット、バリトン、クラリオネット、サキソフオンなど、燦然として――と書きたいんだが、實は曇然として、暗然として、濕然として並んでる。殊に、5挺ばかりのクラリオネット、全部口嘴が抜きとつてあるのは、不心得な生徒のカツパラヒに備へタリ――と見たは僻目か『チンドン藝術速成科』に入門した、4人に向つて、今や校長先生は、ドテラ姿に威儀を正して、ウンチクを傾けらるゝ。

（一同神妙にチンドン學の講義拜聽）

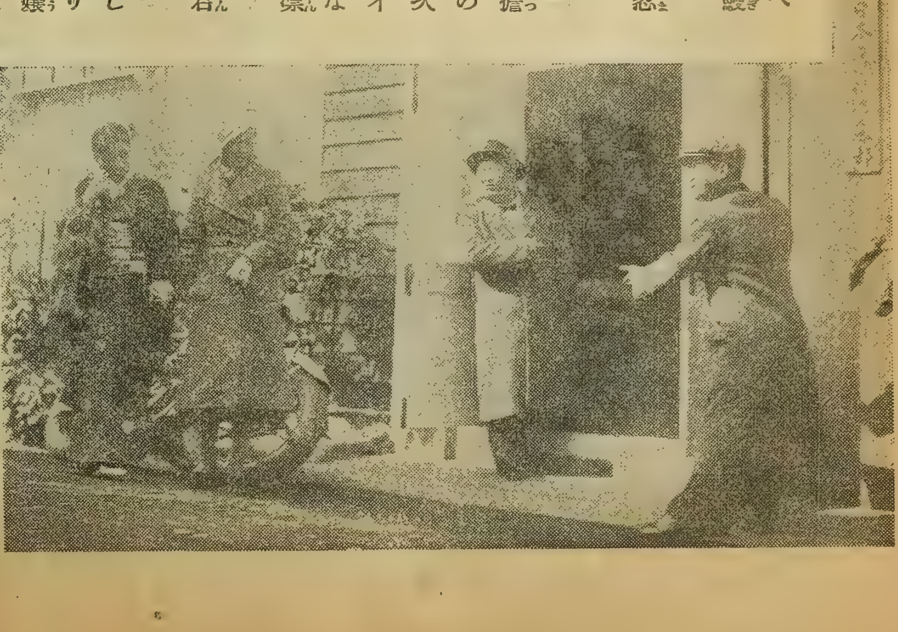
『いゝですか。スッチャラカチヤン、チヤカ、ドン〳〵――と斯う輕く鳴らさんければイカンです。音樂の方が一通り出來たら今度は舞踏、即ち歩行き方を練習するデス。これが調子よく行かないと、どうしても鳴物が打てない。吾がチンドン藝術に於ては、音樂と舞踏は、車の兩輪の如く、いづれが缺けても完全でない。それから、吾等のステーヂ、つまり天下の大道デスナー、それに出場した際には、恥しいだの、極りが惡いだの人並みな量見を持つ可からず、人間とは音さへすれば集るものなり、要するに養殖場の鰻や鯉と同じもの也、と思ふが宜しい。』

で、早速、戸外實習てえ事になつたが、忽ち鰻や鯉の數が雲集して、交通停止！

オールスターチンドン隊の圖

先頭が吾等のターキー。鮮やかに『富士』と染め抜いた大幟を擔いで、レヴュウ張りの潑剌たる舞姫ぶり。次いで、エノケン、カイドー兩君の飄逸輕妙な足どり。カホル孃の凛とした三味の音〆め。

やがて、エノケン君が『靴屋の大將』を、例の鹽辛聲で唄ひ出したのが、脱線の始まりで、今度はターキー孃が『ラヴ・パレード』を玲瓏と唄ふ、――それ



（拳闘倶楽部入口で兩君、兩孃の勸誘にこれ務めてゐます。）

に合して調子好く、スッチャラカチャン、チャッ、ドン〱とカイドー君、――カホル孃の三味線がまた達者なもので、――流石の小生も呆然たるばかりであつた。

『うーむ、斯んた素晴しいチンドン屋は見た事がねえ。』

と、群集は思はず感嘆する。

校長先生も舌を捲いて曰く、

『いや、恐れ入りました。諸君は實に、チンドン學界のキリン兒である、天才である！これなら一日、2圓50錢は確かでありますゾ。』

サンドバッグと
押合の水ノ江孃

高速度拳闘選手

下目黑の日本拳鬪倶樂部に行く。

入口で一寸ゴテついた。と云ふのは小生が兩孃に向つて『貴女方も一ッ、試合をやるんですナ。』と冗談めいて云つた（實は、もし出來たら、その惱ましきポーズを、カメラに收めたいと思つたんだけれど、）――それが崇つて、兩孃とも仲々、道場の玄關へ這入らうとしない。

兩君、口を酸つぱくして勸誘した結果、彼女たちは『ヂヤ、見物するだけヨ。』と云ふ條件で、やうやく入場する。

向つて左渡邊氏對エノ建君の試合、隨分
變テコなエノ建君の構へに御注意。

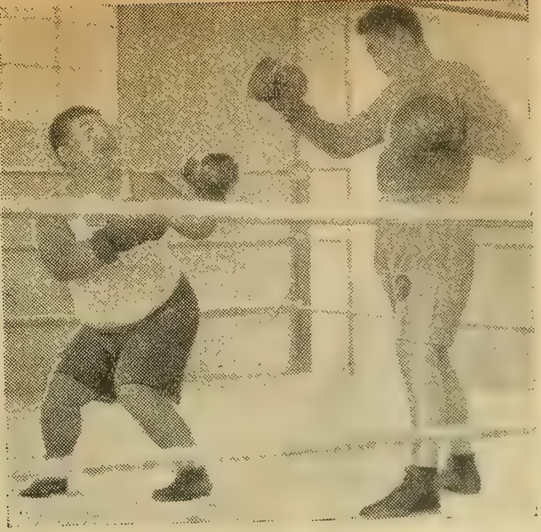
ところがデス。内へ這入ると、御覧の通り、姫御前のアラレもない、ターキー孃は偉大なる、サンドバッグと取組んでキヤッキヤといふ茶目り方です。

カホルさんは、自發的にグローブをつけ、眞

に迫る獨り拳鬪をやらかしました。
それがその、小生の心掛けが悪いのであらうが、ドーモその、見た感じがソートー惱ましきものでアルデス。

やがて會長の渡邊勇次郎氏（御承知の日本拳鬪界の開拓者、元老です）が、兩君に稽古をつけて下さる事になつた。

裸體になつて見ると、エノケン君、小ぢんまりと緊つた肉體、腕から胸へかけての肉づきなんぞは、フライ級の選手と云つても可笑しくないくらゐ。但し、何處となくゴリラ然としてゐるのが缺點。



（向つて左怪童君の逃げ腰の構へです）

渡邊會長ニコ〳〵しながら、

『さア、遠慮なく僕を毆つて見給へ。力一杯にバアンとやつて御覽。』

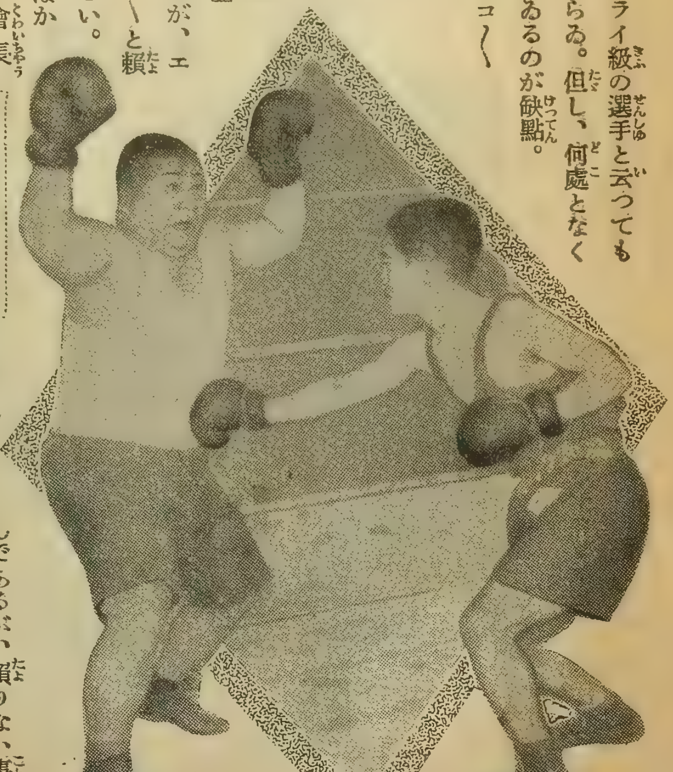
と仰言るんだが、エノケン氏ヨタ〳〵と賴りない事夥しい。

それでも2回ばかり死物狂ひで、會長の顔を目がけて、ストレートと出たが、輕くあしらはれて、

『いけねえ！ なんだか銅像と喧嘩してるみたいだ。ウッふ――。』

とベソをかいてアタ〳〵となつた。

續いて、カイドー君が會長に對つた。肥つてる事だけは河馬の如くで、實に大したもんであるが、賴りない事は前選手とポチ〳〵。第一、御覽の通り、その構へ方が情けない。妙にお尻を敵に向けて、トボトボ然とした構へだ。



エノケン對カイドー！の古今無類の珍試合

一通り教授されてから、愈ゝ、エノケン對カイドーの試合となる。前者が13貫強、後者が27貫弱――即ち約110ポンド對220ポンド、フライ級とライトヘビー級だ

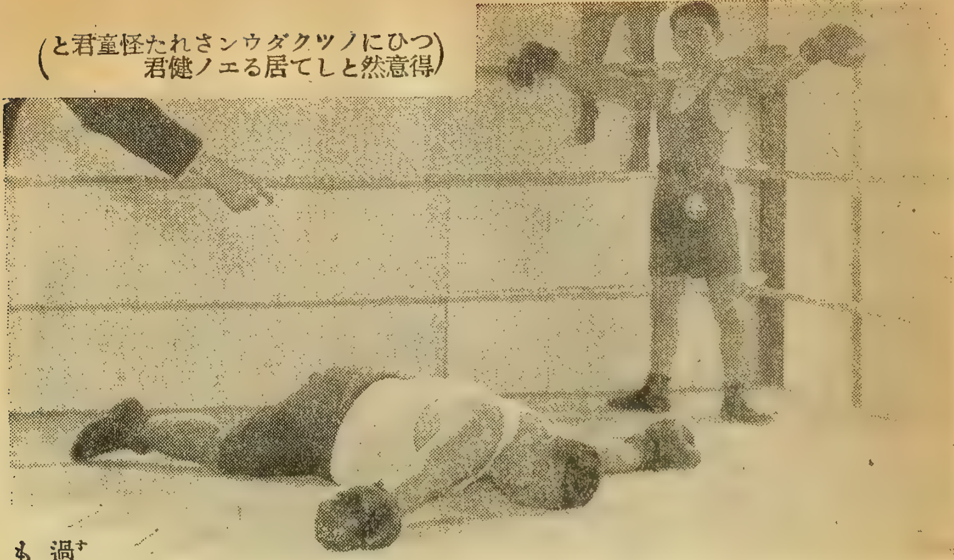
から、本來ならこんな組合せはないんだが、さて始まつて見ると、凡そ空前の珍試合となつた。

（第一ラウンド）。コンゴリラ・エノケン選手は、專ら凄い構へで、兩腕を機關車みたいに廻しながら、敵の隙を伺つて、グルグルとリングを飛び歩行いた。デビルタンク・カイドー選手はお團子を8個ばかりコネて、固めたやうな構へで、虎視タンタン。竟にこの回は、グル〳〵廻りの白眼み合ひだけで、一度もパンチなしで終り。

兩選手共グロッキーの名人です

（第二ラウンド）。俄然、手に汗を握らせた——と書きたいが、實はガゼン爆笑の渦巻きを起した。エノケン選手の珍ラッシュ！何ういふ隙があつたか、電光石火、エ選手の右拳が、蟇の如きカイドー選手の、臍のあたりにポコンと入つた。（亂暴な拳鬪デスナ）トタンに、カ選手はカマキリ見たいに、兩手を擧げたのは、如何なる運動神經の作用か、なんとも不思議な現象であつた。『チャンス〳〵』と、ターキー孃は同じ松竹のヨシミでエ選手に聲援する。エノケン君、得たりとばかり、更に左拳を以

（エノケン對カイドーの珍試合に爆笑する兩孃）



(つひにノツクダウンされた怪童君と得意然として居るエノ健君)

つて敵の脅を攻撃せんとした刹那、カ選手無我夢中で兩手を打おろして、これがエ選手の頭のテッペンに偶然ドンと來て兩選手ともグロッキーはダラシがない。

『カイちやん、シッカリ!』カホルさんは東活のヨシミで、カ選手應援だ。

もつとも、この兩孃の應援たるや、絶えずゲラ〳〵笑ひながらの應援だから、力の拔ける事夥しい。

(第三ラウンド)。

兩選手とも、眞劍になつて、空氣をモツパラ毆りつけてスキング、アッパー・カットなど秘術を盡す。さもなければ、四ツに組んだ相撲の態でクリンチになる。相撲となるとエ選手、忽ち押しつぶされてギウとなる。

『そんな拳闘はないよ。ブレーク〳〵!』と、會長のレフエリーが來て分ける。

竟に、寫眞の通りカイドー選手、ノックダウンされちまつたが、實は、肥滿り過ぎての、呼吸切れで倒れちまつたので、何もエノケン選手得意になるがものはないのである。たゞ彼氏の方が、呼吸が長く續いたと云ふだけ――は心細い。

到る處で滑稽笑ひの花を咲かせ、正に抱腹絶倒、爆笑の渦を卷起した吾が探險隊第一班は、御覽の通り。エノ健君の爲に見事ノックダウンされた怪童君の呼吸切れ暫し癒えず、一同眉を顰めたが、間もなく元氣全く恢復。扨次は何處を襲撃すべきか?指揮者夢聲氏を中心に圓陣を描いて、鳩首合議策戰數刻、と突然水ノ江、中野兩孃から何事かを夢聲氏にコツソリ耳打ちした。腕拱いてゐた同氏、ハタと膝を打つて破顔一笑、『直ちに出發!!』命令一下自動車は早くも滑り出した。

『おいッ、何處へ行くんだらう!!』怪童、エノ健、共に眼をパチクリ。

目指すは何處? 天機漏らすべからず!!

第二班

浮世「四人男」

文と畫 和田邦坊

班長 漫畫家 和田邦坊
隊員 川柳家 井上劍花坊
同 落語家 林家正藏
同 漫談家 西村樂天

ずらり、から並んだ浮世四人男。漫談家の西村樂天、落語家の林家正藏、川柳でお馴染みの井上劍花坊、それから僕と――かういふ順序で、見たところ氣の利いた顏は一つも無い。よくもこんなガタもの丶面を集めたものである。『富士』の記者も仲々人が惡い。それに浮世四人男、これはチト語呂がよくない。いかに當世は何處も人減らしをしてゐるといつても、かういふのは五人男に昔から相場が決つてゐるものだ。

(劍花坊)

『え丶、卒爾ながら申上げます。』

と仲間で一番口の達者な樂天が申出た。

『こ丶へ一つ美しい辨天小僧をお加盟下さらんことを、切に僕達は願ふデス。』

すると、女好きの正藏が、

『美しい女の子など、抑も源平の昔より結構でげすな。アーホッ、アーホッ、ホッ。』

と嬉しさうにこみ上げて來る。この男は人間離れのした實に面白い笑ひ方をする。アーホッ、アーホッなんて笑ふ奴は上野のペリカン位のものだらう。

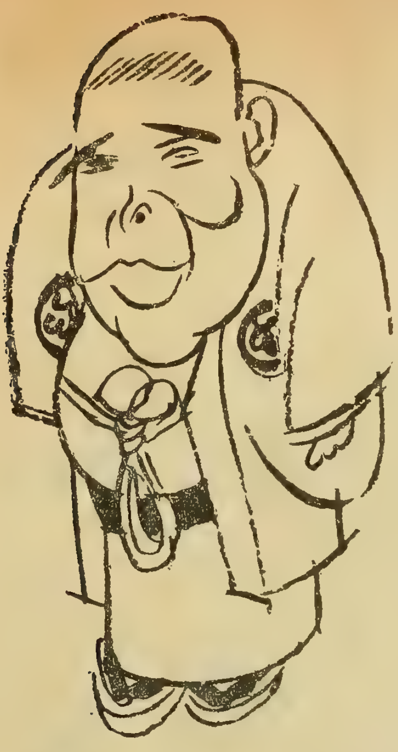
『どうでせう、劍花坊先生。』

僕が年長者の彼へ相談する。

『綠中紅一點、またよきかな。』

うわッ、彼は實に破鐘の如き聲を出す。こんな大きな聲を出す先生は、僕が中學時代の體操の先生以外にない。體操の先生に呶鳴りつけられて、耳が惡くなつた生徒を僕は十人も知つてゐるから、彼から離れて先づ耳を警戒した。劍花坊先生當年六十四歳である。僕の名と同じ坊仲間だが、彼のは明治三年生れの坊ちやんだから、坊でも坊の値打ちが違ふ、僕のおやぢ見たいな坊だ。おやぢ坊まで辨天小僧を要求してゐる。よつて、相談の末、日本映畫會社へ電話を掛ける。これは林家正藏相勤める。

『もうし、もうし、そちらは――あのう。』



（正　藏）

彼は彼の妙な癖で、片手で涎でもすくふやうに口を蓋して物をいふので、薩つ張り向ふへ通じない。樂天が、

『おい、正ちやんや、戯談ぢやねえ。もつとシッカリやんな。お前がお得意の高座の源平合戰ぢやねえンだぜ。相手は生きた女優さんだよ。別嬪さんだよ。えへッヘッ。』

『それぢや、初めからやり直しますわ、アーホッ、アーホッ。』

と羞しさうに女のやうな嬌態をしながら、

『そちらは日本映畫の撮影所ですね。オホッ、さうですか、あのう、わたくしは林家の正藏でげすの、おわかり?』

『お前の名前なんかいはなくつたつていゝよ。』僕が注意する。

『あのう、あなたさまは女優さんの、あのう樂天さん相手のお名前は何ンといつたかな。』

（邦　坊）

『櫻井京子だよ。』

『あ、その櫻井京子嬢であらせられますか、あらせられますか、あつ、さよであらせられますか、これは〳〵お初にお目もじ、あのわたくし林家の――どうかお見知り置きを、で、おついでの節はどうぞ寄席へもお越し下さいまして、あの近頃は寄席も不景氣でげしてな……』

『不可ないよ正ちやん、こゝは高座ぢやねえンだつたら、サア、その受話器をこつちへ寄越しな。』樂天が遂に彼の受話器を取り上げる。これ〳〵しか〳〵の理由にて、辨天小僧が足りない、どうか一口入つてくださいとい

ふ交渉をうまく纒める。

早速、雜誌社の自動車が迎ひに出ることになつた。正藏が、

『櫻井京子孃は美人でげすかい。』

『一寸いゝ女だよ、正ちやん眼鏡を持つて來たかい。』

樂天が强度の近視眼の彼の爲めに心配してやる。

『おツ、いかにも殘念、無念。肝腎の眼鏡を忘れて來ちやひまして、わしや辛いでげす。さういふ美人が來るとは露知らず、凡夫のあさましさ、眼鏡は昨夜取引銀行の方へ。』

『やれ〳〵、曲げたかい。』

『今頃は庫で眼鏡の野郎も、さぞ殘念がつてゐることでげせう、オホッ。』

『眼鏡を曲げて、お女郎買ひといふ大將だから叶はねえ。』

『全く――不良少年でげすな。』

『邦坊氏。』例の破鐘の劍花坊先生の聲だ。

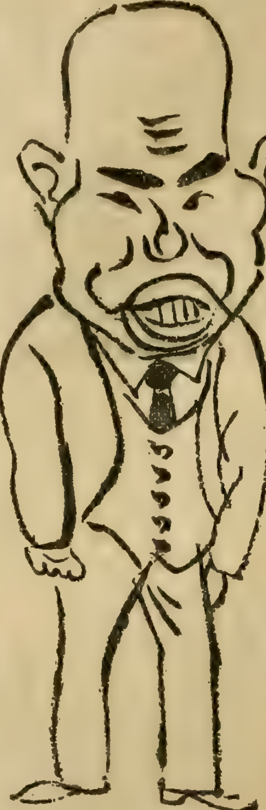
『こりや如何なることに相成るのぢやな、男四人に女一人、チト解せぬ。』

『趣向がございます。』

『ウン、さすがは邦坊氏、よき思案でも――』

僕が彼の耳のそばへ行つて、

『これ〳〵しか〴〵。』



（樂天）

『ナ、ナ、何ンぢや儂が荒尾讓介とな。』

內密でいつても、彼のは三人前の咽喉だからみんな聞えてしまふ。

『金色夜叉を地でやるデスか。』

と樂天が乘り出して來る。

『いや、こりや近頃面白いでゲス。』

正藏がやつて來る。仕方が無いので、ことの計畫をつぶさに話す。

『で、さしづめお宮が櫻井京子、小生が貫一といふところでゲスな。』と正藏。

『いや、色男役は斷然こちらであるデス。』

樂天が頭を撫で上げる。劍花坊先生は諦めてゐるのか、

『仕方が無いです、儂や荒尾讓介をやるです、あゝ。』

といつて、老體溜息をついてゐる。

『邦坊先生は何をやるです。』

『僕は貫一ならやつてもいゝ。』

『そりや不可んです。漫畫の貫一などは無いです。貫一はやつぱり僕にどうだ。』

『わたしは女の子にやさしいでげす。』

各自主張して一議決せず。それでは一同、鏡と相談をしようといふので、萬世橋詰めの食堂の大鏡の前へ、ずらりと三つの顏を並べた。いづれを見てもコレが色男役貫一といふ代物ではない。仕方が無いので僕、

『それぢや一つ人相見に見て貰つてから決めようぢやないか。』

『それは名案。』

『誰がいゝだらう。』

『骨相學の泰斗、芝の石龍子先生などはどうです。』

『そんな大家を煩はす人相でも無いが、後くされの無いやうに、では、石龍子さんに決めるか。』それでは早速出掛けようといふので、

皆んな喰ひかけたパンを半分にして、一躍芝山内、石龍子邸へ自動車を飛ばした。

先生へことの次第を申上げる。

『さよでございましたか、それは〳〵よくこそお出で下されました。ご覽の通りのバラックで——サアずつとお通り下され。』

誰も家のことなど訊ねてゐないのに、石龍子先生は自分で住居を氣にしてゐる。そのくせ、少しもバラックらしくない瀟洒た座敷に先生坐つてゐるのである。

大兵肥滿、五月人形の辨慶によく似てゐる先生で、やつぱり辨慶見たいな聲を出す。

『やあ〳〵、いゝ、こなたは——』

と團扇ほどある天眼鏡を斜に構へて兩眼キッと見開くあたり、相當なもンである。劍花坊先生先づ罷り出る。

『サア、もう少し前へお寄り下され。それからそこへ一の字を書いて、左樣——フーム、なるほど。』天眼鏡を取り上げる。

『こなたはよい鼻を持たれてゐる、これを美術鼻、一名セルフエーステーム。但し强情我儘ローマンノーズ、いかにも强情、ところがこなたの額はフレンドシップ友情に暖い。』

先生は一々英語を遣ふ。

『殊によき人相で——この眉毛の長いところが、卽ち文學に親しみ人に愛さるゝ相でござる。』

先生が手を出したので何をするのかと思つたら、劍花坊氏の眉毛をピン〳〵引張つてゐるんだ。彼、痛いのを我慢して嬉しさうに引つ張られてゐる。

『左樣、先づ無難でフレンドシップに厚いところなど、この人は荒尾讓介などは相當なところでござるな、エヘン。』

といつて、天眼鏡を下げた。劍花坊、

『石龍子二兩がところいひ當てる。』

と商賣の川柳を一句ものして引き下る。次は西村樂天、

『僕は一度先生に見て貰つて二兩拂つたこと

があるです。僕は絶大なる先生の讃美者であるです、えへツへツどうぞよろしく……』

石龍子、やをら天眼鏡を取り上げて、

『こなたはこの中で一番慾が深いお方ぢや。』

『人相に出てゐますか。』

『心相は色に表はると申してな、それ、この耳朶、この眉毛の色ぢや、何時も大きく儲ける爲め努力してゐるが一向に……』

『えへツへツ、懷中が暖くなりませんです。』

『左樣なくてはならぬ。この頭が――』

と彼のいひだこのやうな頭を叩いて、

『大望を抱かず身分相應に勉強しなされ。』

と叱られてゐる。

『結局どういふことになるですか。』

『先づ、お宮を横取りした富山など分相應でござらう。』

『富山とは辛いです。』

と彼が非常に殘念がつてゐる。樂天が殘念がると猿のやうに齒をむき出す。次に僕が出たら先生はいきなり僕の鼻のつけ根を指で押へつけた。

『先生、痛いよ。』

『これ〳〵。』と先生が鼻の上を叩いて、

『この鼻のつけ根が硬いのが洵によろしいのぢや。これをギリシヤ型と申して藝術家の相ぢや、古代ギリシヤの人間は皆なかういふ鼻でござつた。』

『先生、痛いよ。』

『これがまた非常に臆病でな、我儘な相ぢや、人との交際が洵に惡い。眉毛に桃色ざしたるは觀察力に富んだる相、漫畫家などはよろしいな。こなたは何もしないで漫畫を勉強しなされ、和田劍花坊の前に和田劍花坊なく。』

『先生、僕は劍花坊ぢやありません。邦坊です。』

『左樣か――いやもう、どちらの坊主でも同じことぢや、あはーツはーツ、折角勉強しなされ。』

先生草臥れたのか少々怪しくなつて來た。

『あ――ホツ、あ――ホツ、えゝ手前林家正藏でげすお手柔かに。』

と正藏が高座へ上る恰好そのまゝで進み出る。机の上の天眼鏡を取り上げて、

『えゝ、偉大なるレントゲンでげすな、閻魔大王の持つてゐるのと同じ奴でげす。これで小生の鼻毛などご覽遊ばしますかな、恐れ入谷の鬼子母神、おつと……』

『これ〳〵、何をしなさる。商賣道具をさう手荒にしては困る。』先生が叱つて、

『サア〳〵前へ出て、もう少し、もう少し、なるほどこなたは諧謔性の極、落語家として天才的發達でござる。それこの左眉、これが非常によろしい、性的の話には持つて來いでござる。』

『生れながらの助平。』

『これ〳〵、要らぬことをいはぬがよい。先づこなたなどは柔かで女に好かれる相でござるぞ。』

先生が指の先で彼の左眉をポン〳〵と叩く。彼が嬉しさうに口を蓋して嬌態を作る。

『先生、男振りが惡くても女に好かれるですか。』

樂天が不平さうに異議を唱へる。

『男振りを見てゐるのではござん、人相を見てゐるのぢや。』と先生。

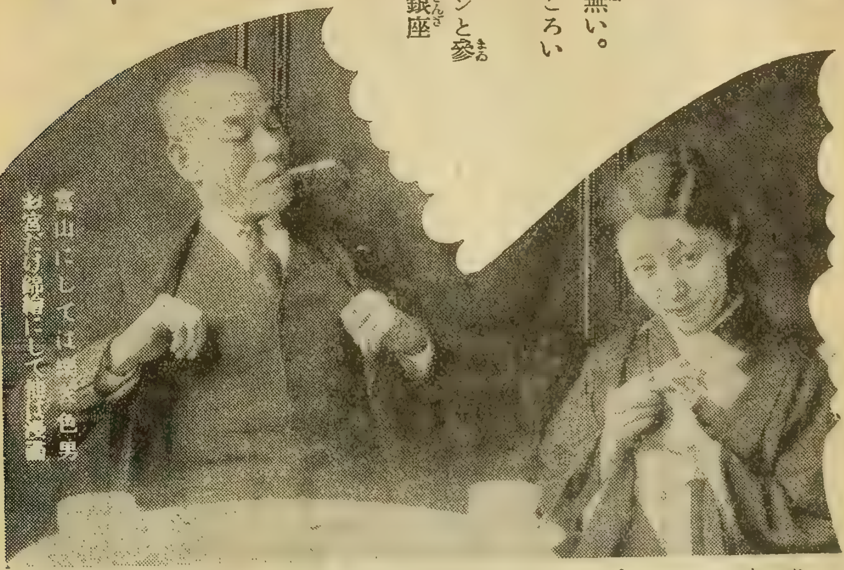
『斯くて、貫一の役は林家正藏へ仰せつけら

る。』

といつて、彼自身も仰せつけてしまつてゐる。仕方無く遂に彼正藏、色男でも無いのに二枚目役の貫一を乘つ取つてしまつた。落語家などといふものは仲々抜け目が無い。

『石龍子二兩がところいひ當てる。』

と劍花坊、オホンと參らせて一同退出。銀座へ出て兎に角飯を喰ふことに決める劍花坊の荒尾讓介林家正藏の貫一、樂天の富山、もうスッカリ振り當ての役になり切つて、樂天が、富豪富山顏して、



『飯はエスキモーにしよう。』

と自分が奢るやうなことをいつてゐる。正藏奴、

『宮さんは念入りなお化粧してゐるのか、馬鹿にお出でが遲いでげす。』

と宮さん〳〵と仲々煩さい。

エスキモーの二階で定食を喰つてゐたら、階下から今櫻井京子が監督と一緒に來たといふ知らせがある。

『ヤツ、宮さん――』

といつて正藏フオークを持つたまゝ、眼玉を白黒させてゐる。

『おい、貫一どうした？』

『何だい、こいつ咽喉が詰つてらア。水だ水だ。』

水を飲ませてグワンと一つ背中をどやしつける。

『あゝ苦しいッ。』

『周章てちや不可ねえ、しつかりおしよ。』

そこへ、櫻井京子孃、シヤナリ〳〵と現はれる。

『わたくし、櫻井京子、どうぞよろしく。』

『ハイ、手前貫一でげす、えへッへッ。』

と一番に進み出たのが正藏だ。

挨拶が濟んだ後でも、正藏ボンヤリ立つてゐるので、

『正ちやん早く飯を濟せな。』

『手前、もう腹が一杯でげす。』

『そんなに見惚れちや相手へ惡いよ。』

『えへッへッへッ。』

と口の邊へ涎を垂らしてゐる。小さい聲で僕へ、

『手前は貫一でげすから、當然彼女と一つマントに――』

『まだ早いよ。』

『善は急げ。』

『戯談ぢやねえ。』
櫻井京子、鼻の高い美人だ。彼女は非常に痩せてゐるのに、監督はビール樽のやうに肥つてゐる。西村樂天、
『僕はもうこゝで宮さんへダイヤモンドの指輪を渡すことにするです。』
といつて、彼女をボックスへ伴ひ、寫眞で見ても判るやうに、まるで海から揚つたいひだこが電車と衝突したやうな顏をして、
『宮さん、僕は宮さんにダイヤを進呈するです。サア、お手をお出しなさい。』
と彼女の手を引ッ張つてゐる。宮さんは何もいはない。
『いゝです、宮さんによく似合ふです。このダイヤは十五カラットあるです、正に時價二萬兩!!』
『本當かい。』
と正藏が半疊を入れる。樂天、
『馬鹿ッ、本當ならこつちが貰はア。』
晝間だけ光る指輪を下女貰ひといふ川柳があるが、お宮の貰つた指輪はパットの銀紙だ。それを指へ當てがひ、世にも嬉しさうな表情をする、女優の商賣もこれで仲々辛い。

（讓介を俺は高田で行くと云ふ）
劍花坊

監督が、僕に、
『お宮が先にダイヤを貰ッてしまつたんぢや貫一お宮のカルタ歸りのマントの中は駄目になりましたね。』
『止めちまひませう。』
すると、正藏眞蒼になつて、
『そんな殺生なことは無いでげす。マントの中へ入りたいばかりにこつちは苦勞しとるでげす。何卒一つ――』
と叩頭百拜するので、少し筋は通らぬが正藏今日の執心に免じ、カルタ歸りを撮ることにした。高座で着るお椀ほどの大紋附きの揃ひ、これが錦紗お召と來てゐる。仲々洒落れた貫一で、トンビの羽根を片方擴げて、
『あのう、宮さん、どうぞお入りなすつて。』
『オホホホ嫌やだわ。』
『さう仰言らずにどうぞ。――寒いでげすから。』
『まア――』
櫻井京子、お宮の型よろしくトンビの中に包まれる。
『結構なお髮でげすな、プーンと香ふこりや何といふ香水でげす。ウビガン、さよでげすか。おやまア襟首のおキレイなこと、眼とひ、高いお鼻、キッスをするには持つて來いのいゝお唇でげす。宮さん、もう少しこちらへお寄り遊ばせ、女の子の肌はまことにお柔かいもので、えゝ手前光榮に存じます。』

正藏無闇に光榮がつて、段々彼女へ接近の度が緊くなる。

『あれッ。』

彼女の悲鳴、監督が『ストップ』と聲をかけた。

『實に殘念でげす。あーホッ、あーホッ。』

と貫一フラ〳〵になつてゐる。

『隨分、ひどいわ。必要以上に抱きしめるんですもの。』お宮さん相當怒つてゐる。

こゝから熱海の海岸へ行くつもりだつたが海岸はチト寒いので、松屋の屋上で『今月今夜――』の名臺詞をやることにする。

『あゝ宮さん、……かうして二人が一緒にゐるのも今月今日、もう十分位の間だね……』

『今月今夜だよ。』とこつちから注意してやる

『いや、まだ宵闇迫らんでげす。お前が僕の顏を見るのも只今限り、お前が寄席でも來なくちやもう見られない。僕がお前に物をいふのも今日限り、映畫で見たのぢや詰らねえ。二月の十七日……』

『一月だよ。』

『今月は一月だい。――宮さん、よく覺えてお置き、來年の今月今日、貫一は何處でこの――待つてくれ月がねえ。』正藏あたりを見廻はして、

『さうだ、あの廣告球を見てゐるのか。多分女房と一緒に松屋のマーケットへ來て見るだらう。……再來年の今月今日、十年後の今月今日、……一生を通じて僕は今月今日を忘れんよ。忘れるもんか。――尤も手前當年四十歳でげすから先へ死にやす。――死んでも僕は忘れんよ。いゝかい宮さん、一月の十七日だよ、來年の今月今日になつたら、僕の淚ぢやねえ、キット廣告球を雨で濡らせて見せるから……廣告球が廣告球が雨に濡れて破れたら宮さん貫一は寄席の樂屋で當り錢が少なくて今日のやうに不景氣な面をしてゐると思つてくれ。』

彼の臺詞が濟むと、今度はお宮の番だが、彼女はトーキー女優ぢやないから徹頭徹尾默つてゐる。正藏焦立つて續ける。

『もう宜しい。……よろしい。お前の心はよく判つた。夢だ！　長い夢を見てゐたのだ……宮さん何を泣くのだ、お前は、チッとも泣くことは無いぢやないか……』

『オホッホッホッホッ。』

『さうか笑つてゐるのか。ちつとも笑ふことは無いぢやないか。……空笑ひ

だ!!』

　こゝで、ポンとお宮を蹴上げるのだが、

『どうしたものでげせう。』

　といつて、正藏相手へ相談してゐる。

『どうぞ――』

『それぢやご免なすつて。』

とご覧の通り、カッポレでも踊るやうな恰好で足を上げた。

『はッ、よいとな――エッサアッ、サア。』

　と獨りで踊り出す。

　第三場面は、荒尾讓介出演の場である。六十四の荒尾讓介である。荒尾讓介も寄る年波で、ついたステッキが年寄杖のやうで具合が悪い。聲だけは三人前あるから劍花坊先生の荒尾は聲だけ聞いてゐると一番いゝ。この寫眞は、

『宮さん、お待ちなさい。』

　と彼が川柳に作つたやうに高田張りで、お宮を引き留めるところだつたのに、劍花坊先生、うつかり、

『お若いの、お待ちなせえ。』

　とやつたので、荒尾讓介が幡随院長兵衛になつてしまつた。

『何アに?』といつて、お宮が振り向いて

『あら、荒尾のお爺ちゃん。』

『お爺ちゃんは困る。』

『だつて――オホッホッホッ。』

『宮さん、間はあなたの爲めに、今は何をしてゐると思ひますか、彼は、彼は……』

『彼方で獨りでカッポレ踊つてゐますわ。』

『うわッ。』

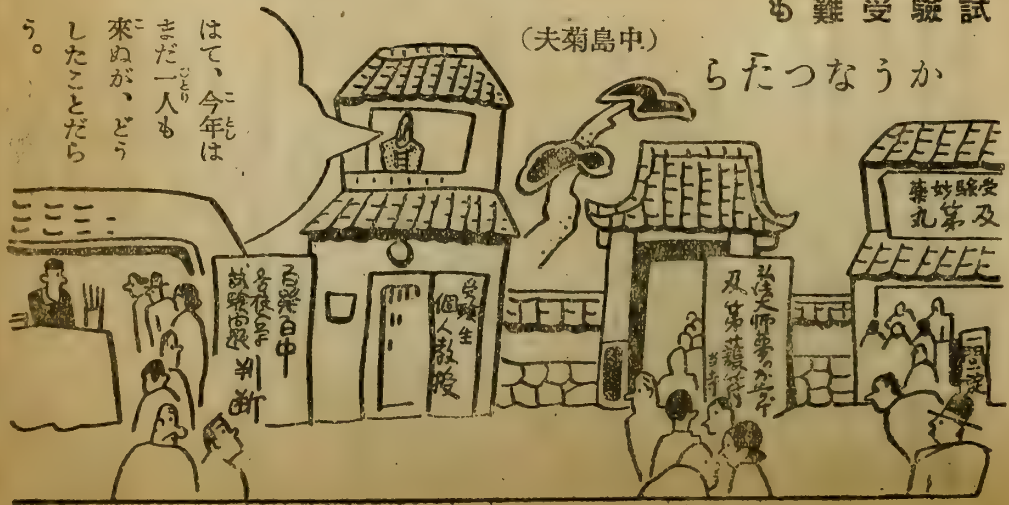
（續く）

川柳――劍花坊詠

試験受難も

（中島菊夫）

かうなつたら



第三班

明朗なる女軍出征

見られよ、諸君――。

さて我が隊はダンゼン全く男子禁制の純女性軍であるですゾ。美しき三勇士であるでス。

この三勇士が

〽丘を越えて

行かうよ

班長
川上三太郎

隊員
森律子
メイ・牛山
後藤市丸

眞澄の空は朗らかに晴れて……

とチンドン屋のクラリオネットが奏でて行つた朗らかな上野驛の、新しい正面大玄關へ、すらりと立つたから耐らんでス。忽ち尻尾のない野次馬が、ドロ〳〵、ドロと立ち塞がつてしまひました。

『やあ、森律子だ！』
『まあ、メイ・牛山さんよ。』
『スゲエぞ彼女――市丸！』
『ホイ、ホイ、ホイ！』
『アリヤ、アリヤ、アリヤ！』

これで警笛が鳴れば全で火事である。見る見る三人は黒山のやうな人波に包圍されてしまつて身動きも出來ない。待ち合せて居た自動車の運ちやんは元より、凡そモノゴトにビクともしない寫眞班のM君も案内役の記者殿も、全で屋根から落ちた芋蟲みたいに、丸くなつてハニカンだのであります。

然しそれもその筈です。何故かと言へば、今日これからの攻撃に際し、正面から堂々敵に打つかる本隊の總大將森律子さんが、淑やかな洋髮に白い毛の襟卷深く、愼ましやかな風姿に對し、これは斷然粹な洋裝、ウエーヴは元よりお手のもの、ひらりと輕快そのものゝやうなメイ・牛山さんである。これだけでもダーと來る。況やそれへ加ふるにミス・アサクサわれ等の市丸さんが、やあこれはまた滴るやうな高島田にすつきりとした襟足白

く、緋の帶揚も胸高に、袂に偲ぶ江戸紫の褄深う、すんなりとした立風姿。總師の森さんを丹頂の鶴と見れば、メイさんは正に維納の乙鳥、ミス市丸これやこの隅田の朝の都鳥であらう——であるでス。

ところが無尻尾性野次馬は、益ゝ以て殖えるばかり。この分では三勇士まだ出陣しない中に敵へない最期を遂げさうであります。そこで案內役の記者君一策を案じました。

『ヤア、また來た、あすこに!』

さうしてその指差した方をみんなが見てゐる瞬間に、三勇士を醉拂ひのやうに自動車の中へ押し込みました。

『そら、前進!』

颯とクラッチが入る——、途端に野次馬の一人が叫びました。

『ヤア、あの面の長い奴が三人を何處かへ誘拐するぞ!』

『野郎、ノバセ!』

ノバされては大變であるでス。そこで運ちやんに怒鳴りました。

『全速力だ! 逃げろ。』

『何處へ逃げませう。』

かうなれば最初の豫定も何もありません。全速力——全速力!

『落ち行く先は……』

『九州相良ですか?』

『いや、淺草の三筋町——』

悟道軒圓玉師を襲ふの卷

昔のモボと今のモガ双方舌端火花を散して激戰

こゝは淺草三筋町——悟道軒圓玉師のお宅であります。

『實はカク〱シカ〲の理由で。』

すると圓玉師は講談みたいにカンラ、カラカラ、

『あはゝはゝ。』

と笑ひました。さうして、

『そりや君、矢張り女雛でさあ。』

と言ひました。

『チョナン? へ、エ、女雛ですかな。』

さうして、

『ドリヤ私も女雛に遭ひませうか。』

と言ひながら、空氣のやうに二階へ上つて行きました。迚も皮肉な爺さんですゾ。

さて戦端は先づ女軍の總帥森律子さんに依つて切られました。

『早速伺ひますが、昔のモガと今のモガと、何方がモガ的モガでしたらうか？』

『そりや昔のモガの方が無論モガ的モガでしたよ。』

記者は圓玉師の入歯を心配したが、別に飛び出しませんでした。

『すると昔の方がモダンだと仰言るんですか？』

これはメイ・牛山さんの、不服らしい反問です。

『私の若い時分のモガと言つたら、今より迚も飛び放れたウルトラ・モダンだつたね。』

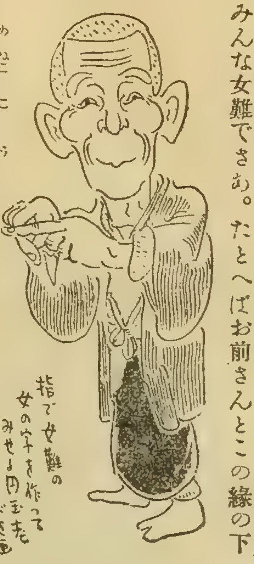
『あら、ウルトラ――だなんて、凄いわね。』

と市丸さん、眼を丸くする。

『何しろ海老茶の袴に深靴を穿いて、それで髪はと見れば銀杏返し。それで自轉車へ乗つて飛び廻つたもんです。』

『あら、自轉車に――？』

圓玉老曰く『女難ですとも。女難てエのは何も女にモテるばかりぢやごわせんぜ。女についての災難はみんな女難でさあ。たとへばお前さんとこの縁の下で雌猫が子を生んで始末に困つたとする――猫が雌である以上、矢張り女難だあね。猫でさへさうだ。況や人間の……』



『明治十二三年頃の自轉車は、前輪がウンと大きく、後輪は極く小さいので迚も不安定。然し長い袖でヒラヒラ風を切つて行く風情は一寸好かつたね。』

『まあ、全く超モダンだわ。』

『ところが本當の超モダンは馬に乗つたね。それでペラ〳〵英語を喋つて矢張り海老茶袴。斯う横ッチョに向いて乗つたのです。それで着物は振袖。だから長い袂がヒラ〳〵と――』

と早くもその隙へ斬り込んだメイさん。

『あらまた袂がヒラ〳〵ですか。さぞ綺麗な方ばつかりだつたんでせう。』

『サア……綺麗――濃艶といふ點からいへば、今の女の方がシャンですね。何しろ貴女のやうな方が居て、何んなにでも捏ち上げちまふから。』

『捏ち上げるはないでせう。』

『何しろ今のは皮膚の上へ〳〵と塗り上げてゆく。昔の化粧は中へ〳〵と磨き込んでゆく――その違ひはあるな。自家のばアさんなぞ今でもその癖が抜けず、糠袋の外は使ひません。』

三勇士モロにアテられる。

『おや〳〵、では隨分お若い時は美人でしたわね。』

『そりやね、へ、へ、――』

これではならぬとあつて森さん體を躱す――。

『ところで江戸趣味の方のモガは何んなで御座いましたでせうか。』

『そりや何と言つても辰巳の羽織でせうね。』

『深川の藝者衆ですのね。隨分粋だつたんですつてねえ。』

これは市丸さんの羨やましさうな聲である

その頃のモボの一人に悟道軒

圓玉師が吾妻下駄の説明をしてゐるところ——向つて右から森律子、圓玉、後藤市丸、メイ・牛山の諸氏

です。

『その代りお金は他の四五倍だね何しろみんな座談が上手で、三日位はお客がつかまへられて居て退屈を感じなかつた。冬でも素足に吾妻下駄ときまつてゐた。』

『吾妻下駄といふと?』

メイさん、靴ならダンゼン通であるが、下駄の方は眼をパチ〳〵。

『吾妻下駄は辰巳の藝者が初めて履いたんですよ。男の薩摩下駄、あの後の方へ樫齒を入れた斯うい ふ恰好の……』

何しろ人間が下駄の形をするのだから、幾ら圓玉師でも骨である。二三度やつてみせる。そこを寫眞班、パチリ——。

『あ、不可ねエ。妙なところを撮つたねエ、お前さん』(諸君・寫眞をもう一度御覽なすつて下さい)

『寫眞の氣を揉まないで、吾妻下駄の方を何うぞ。』

『あゝ、さう〳〵。深川は御承知の通り水場でせう。草履なんぞぢや、迚も歩けないし、さうかと言つて天氣の好い日に此の頃の郊外の奥様のやうに足駄も穿けない。そこを吾妻屋金八といふ小間物屋が狙つて——』

『つまり足許をつけ込んだのね。』

あつぱれ市丸さん——。

次に森女史、

『昔のモボさんから見た今のモボは如何です?』

『さやうさ。今のモボは昔のモボに較べると確かに勇氣があるね。』

『勇氣が?』

『兎に角昔のモボは總てが消極的で臆病でさあ。たとへば吉原へ遊びに行く奴はチヤンと吉原へ行く。淸元を唸る奴はチヤンと唸る。將棊をさす奴はチヤンとさす。總てがまともさね。そこへ行くと、今日のモダンボーイは勇ましい。懷中に二十五錢位しかなくつたつて、悠然と銀座をブラつく。新宿を歩く、淺草へのす。さうして珈琲一杯を二時間位かゝつて飲んで、終電車で下宿の二階へ歸りカス

明治のモボ北國通ひの図

テラの噯出すなんてエ藝當は、先づ並大抵の勇氣ぢや出來ない技さね。』
『なアるほど。すると今のモボさんの方が不良なんですね。』
『然し大體から言へば今のモボの親が悪いんだよ。』
『親が？　ですか。』
『さやう。昔の親はモボに言ふ小言が好かつたね。迚も情があつた。沁々身に沁みたね。』

『何ういふお小言を頂きましたの？』
『先づ私が一晩遊んで翌くる朝ボンヤリ歸つて來る。』
『あら〳〵――』
『すると親父の曰くでさ。ヤア歸つて來たな。サア〳〵オイ誰か直ぐ風呂を沸かしてやれ。サア〳〵湯へ入れ。入つたか、入つたら直ぐ寝ろ――さう言つて私を無理に寝かせて夜具の上から斯う押へながら、グッスリ寝るんだぞ、お前は身體が弱いからな――私は夜具をかぶつて涙が出た。』
『まあ――』
みんなホロリとしたでス。
負けず嫌ひのメイさん、口惜しがつて最後の一彈。
『けれど先生。今のモボさんの小言は、それでは駄目ですわ。』
『はてね――？』
『だつてそんな事を言はれると、ＯＫ――とばかり、早速グッスリ寝て、また出かけますから。』
『マキッタ――』

朝倉仙人臍問答の巻

おヘソを撮して寫眞班三美人になぐられる

『濟みませんが、此處から少しお歩きなすつて下さいな。』
と自動車がガタリと止つて運ちやんがさう言つたでス。
深沈たる谷中墓地を抜けて行く三人の楚々たる後風姿は實に好いですナ。運ちやんの如きは、まだ窓から首を出し口を開いて、遙かに恍惚たる敬意を表して居るでス。
やがて第二番目の大敵である彫塑界の一人者東京美術學校教授朝倉文夫先生のお宅へ着

きました。

『何うぞこちらへ――』

玄關の脇に大きな菰かぶりの酒樽がありました。誰が飲むんだらう――と心配してゐると、今度は庭いっぱいの池へ出ました。その緣を歩いてゆく三人の風姿を見て、池の中の緋鯉が、

『おや、人間の緋鯉が通る――』

と驚きました。それから大きなアトリエ。天井が一體あるのかしらと思ふ程背の高いアトリエです。

そこへ朝倉先生の溫顏が現はれました。

『やあ、お揃ひですな。』

何だか若い仙人みたいな方であるでス。斯らいふ人が年を取ると、雲へ乘つて何處かへ行つてしまふんぢやないかと、思ふ人であるでス。

『先生、この三人の方の寫眞を撮りたいのですが、先生のお心任せの姿勢をおこしらへ下さいませんでせうか。』

『さあ、では、まあ、こちらへおいでなさい。一寸――そこへ立つて御覽。』

アトリエの所々に裸體になつた女の像が、寢轉んだり背伸をしたり、足を曲げたり頰杖をついたりしてゐます。その中へ三人は立たされました。市丸さんは自分もいまに衣類を脫がされるんぢやないか――と心配になつて來ました。そこで恐る〳〵訊ねたでス。

『あの――先生。先生は隨分女の方を――女の方の裸體を御覽になりまして?』

然し朝倉仙人は飄々たるものです。

『見ましたよ、三千人ばかり――』

『ヒエー、三千人……』

ではあたしたちを入れると三千三人になると市丸さんは直ぐ寄算をしました。がその三人になりたくないでス。そこでまた仙人の心を反らさうと努めました。

『先生――先生はあの、唄がお好きでいらッしやいますか。』

『唄――?さあ、僕は唄より臍が好きです。』

『ヘソ?』

『さう。お臍です。』

三人共聲を上げました。

『あら!』

『あら!』

『あら!』

然し仙人は三人の形を直しながら、平然として話しました。

『始終人間の身體を硏究してゐるのでね、自然臍の事も考へて見たのですが、兎に角臍は人體の中心で、日本人は臍が身體の重心になつてゐます。さうして下へ六分、上へ四分の割合で伸びてゐるのが日本人です。』

森總帥は流石に勇敢です。

『全くあすこがノッペリして居て何もなかつ

睨まれてきまりが悪いヘソ三ツ
朝倉先生が三女性軍にヘソの講義をしてゐるところ——向つて右から朝倉先生、森律子、メイ。牛山、後藤市丸の諸氏

たら、随分ヘンでせうね。彫刻にしても畫にしても、さうなると何だかダラシがなくなつてしまひますもの。』

と巧く調子を合せました。

『先生、おヘソでその人の性格とか强弱とかが解るでせうか。』

これはメイさんです

『解ります。先づ一番理想的な臍はマン丸くつて周圍が高く、眞中がヘコンでゐるヤツです。恰度林檎の尻のやうに引緊つてゐる。さういふ臍の主人は必ず健康體です。ところが縦に長い臍があります。柿の種みたいに。さういふ臍の持主は先づ榮養不良ですな。そ

懸賞寫眞

當選發表

本誌新年號誌上で募集の第三回懸賞寫眞は、應募者多數に上り、何れも苦心の作でした。嚴選の結果、優秀、佳作の入選者は左記の通りであります。

優秀作

○爛漫（賞金三十圓） 瀧野川區中里町 森 溪水
○日の出（賞金十五圓） 明石市櫻町 北村喜多藏
○ナオミちやん（賞金十圓） 堺市戎之町 田中 文郎
○犬と猫（賞金十圓） 神戸市湊東區楠町 森本 清次
○山羊（賞金十圓） 神戸市須磨區衣掛町 久保 雅俊

佳作 賞金五圓宛

○スキー 和歌山 猪野喜三郎 ○田植 東京 岡田光影

れから脂肪過多の人の臍は横に長い――。』

『まあ、さうですかねえ。』

『性格的に言へば臍が上を向いてゐる人は頼りになる意志の強い人で、下向の臍は意氣地なしの人間ですよ。』

『人相や手相のやうに臍相でその人の運命が解るでせうか？』

相變らずメイさん奇問を發するでス。

『或程度までは解りますな。たとへばその人の臍の大小で總領か二番目かなんてのは直ぐ解ります。』

『まあ。』

『臍は總領が一番大きくつて、二番目、三番目となるに從つてだん〲小さくなつてゆきます。僕はそれを當てる事は名人ですよ。何しろ三千人からのモデルの臍を見て來たんですから。』またそろ〲話が三千人に歸つて來たので市丸さん、心配になる。

話の間仙人は三人の形を色々に直して居たのでしたが、やがて滿足したやうに言ひました。

『さあ、ではこゝらのところを撮つて頂きませうか。』

寫眞班のM君はソレとばかりにシャッターを握りました。ところが仙人はまだ三人をジロジロ眺めてゐるのです。

市丸さんは氣になりました。

『先生、何をあたしたちを御覽になつていらッしやるんです。』

すると仙人は言ひました。

『貴女がたの臍の所を見てゐるのです。』

『あれ！』三人は思はず兩手で帶の上から三ツのおへソを押へました。

ところをパチリ――。あとで寫眞班のM君は三人になぐられたでス。（次號へつゞく）

○つがひ　明石　枝吉延太郎　○春の惠み　大阪　山田勝晤

賞金三圓宛（寫眞一點につき）　○苺狩・田植歌（二點）―枝吉延太郎○鳩の群・海の風景（二點）―北村喜多藏○冬の夕暮・雪（二點）―猪野喜三郎

賞金二圓宛（寫眞一點につき）　●女の子達―杉本赤陽●朝海―岡島英夫●カンガルーの角力、睡蓮、猿の角力（三點）―森本清次●冬、スキー場（二點）―猪野喜三郎●海女―枝吉延太郎●モルモット、猿（二點）―北村喜多藏●猿、春、豚の顏、夏（四點）―久保雅俊

選外佳作　賞五十錢圖書切符（一點につき）

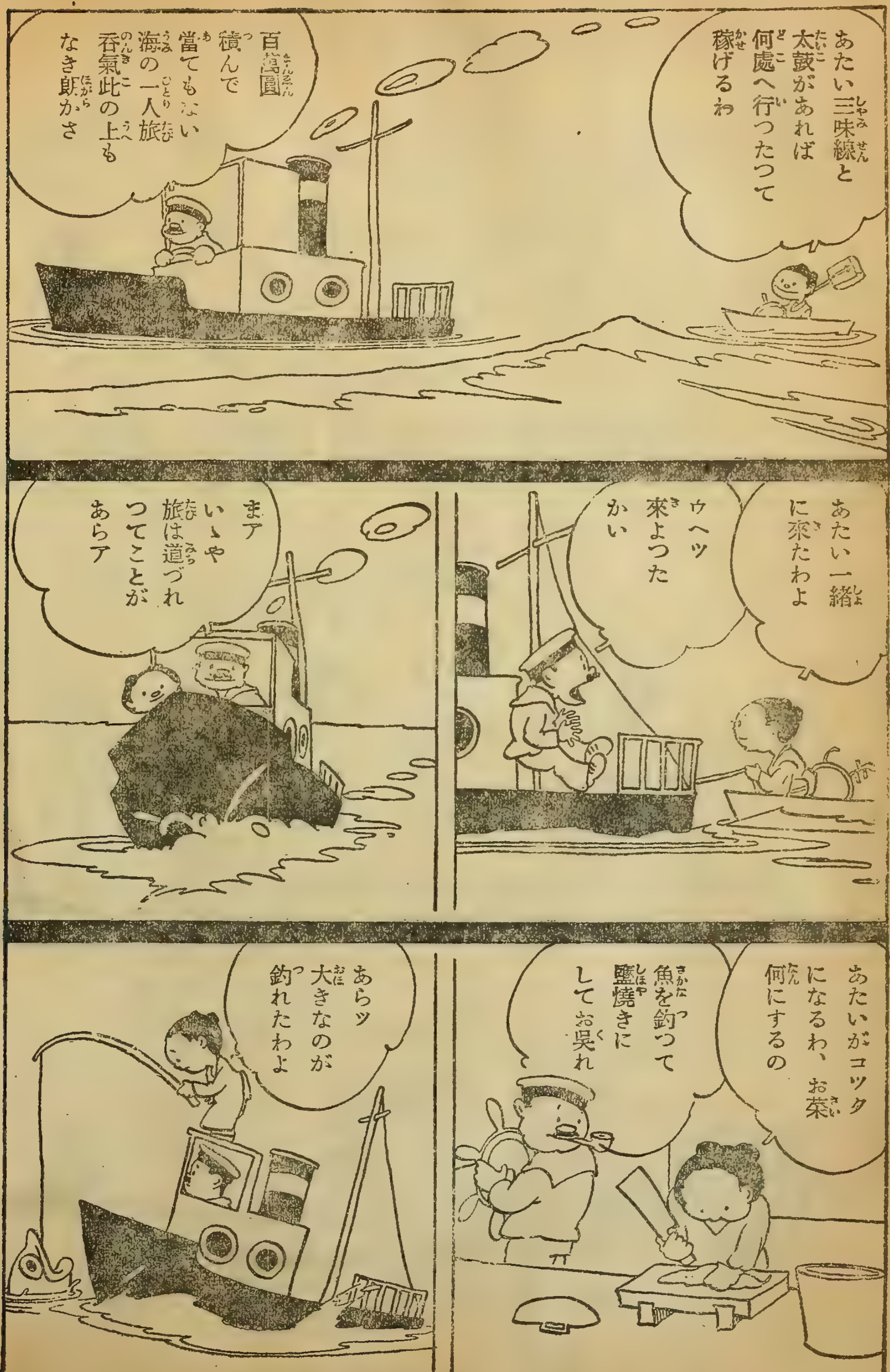
▲野球選手　一寸一ブク（二點）―藤原清▲可愛い子供　森繁逸▲和ちやんの笑顏　小後貞正男▲笑つて泣いて　岡本重勇▲微笑　田中文郎▲小さき怒　武內秀浩▲生後百日　大黑光三▲笑顏　岡島英夫▲海女の作業　枝吉延太郎▲緋鯉　岡田光影▲逹つさん　大橋紅陽▲子供の笑顏　金崎一平▲子供　大和紅陽▲子供　龜山政一▲爆笑　四條丹次郎▲磯乃春　森本清次▲兄弟　久保雅俊▲燈籠、子供と犬、母と子供（三點）―山本助三郎▲笑顏、姉妹、地藏めぐり（三點）―北村喜多藏。

連載漫畫

無軌道船長

田河水泡

をぢさん、お金があるなら、お酒を呑むより世界漫遊した方が面白いわよ
成程おめえの言ふことは確かだ
有難う俺アそこまで氣がつかなかつた。早速出掛けるよ
あたいも一緒に行き度いなアー
ねえつれてつて頂戴よ
そりやア駄目だ何しろ荒海を乗り越えるのだからな
あたい無理にもついて行くわよ
幸ひ日和が好いや本日出帆と云ふことにしよう


あたい三味線と
太鼓があれば
何處へ行つたつて
稼げるわ
百萬圓
積んで
當てもない
海の一人旅
呑氣此の上も
なき朗かさ
あたい一緒
に來たわよ
ウヘツ
來よつた
かい
まア
いゝや
旅は道づれ
つてことが
あらア
あたいがコツク
になるわ、お菜
何にするの
魚を釣つて
鹽燒きに
してお呉れ
あらツ
大きなのが
釣れたわよ

（さて次號にはどんな破天荒の事件が起るか？　いよ〳〵面白くなります。）

時代小説

伊達事變

白井喬二

齋藤五百枝畫

亂行に耽る伊達綱宗に、畢生の戀人雪乃を側女として召上げられた三澤頼母は、懊惱呻吟、遂には自暴自棄とさへなり、恰も藩内の諫死組の者から頼まれたを幸ひ、歌會の席上主君綱宗の面前で切腹しようとしたが、其時當の戀人の姿を垣間見るや、忽ち又生の執着を覺え、自分の妹初子が同じく殿の側女であるのを奇貨に、これに縋つて唯一目雪乃に會へる機會を、強ひて拵へて貰つた。所がこれが、折惡く彼を裏切者と憎む諫死組の者に邪魔された爲、脆くも不首尾に終つてしまつた。

此矢先き御殿の一間では、隱居退身願への署名を、老臣達から強制された綱宗侯が、無量の思ひで端坐してゐた。(前號迄の梗概)

最後の夜

一

未練――と云つてよいか、とにかく、隱居承諾書に書判を捺すまでに、心に映る影をみんな拾ひ集めて、最後の名殘を盡さうとするやうな、不意の出來心……とでも云ふのに近い氣持でした。

呼ばれて、

「はい……」

といつて、そこへ畏つた女。

それが、而も、偶然當の雪乃でありました。

「おゝ、恰度よかつた。」

と綱宗はつぶやきました。

「何か、御用でございませうか？」

「さう――」と考へ、「少し今夜は用もあるゆゑ一服、茶を立てゝもらはうか。」

「はい――」

と冴えた答へとともに、體を靜かに起して、雪乃は、次の間へ下つて行きました。そして、そこから、暫く、茶釜や茶杓の音が、こつこつと、小當りの、然し、快い響きを立てゝ居りました。

やがて雪乃は、こつちへ出て來て、臺皿の菓子と、薄茶茶碗とを綱宗の前におき、

「お召し上りくださいませ――まことに、不出來でございますが。」

と一寸、伏目になりました。

「いや、退儀であつた。」

綱宗は、懷紙に菓子を取り、鷹揚に、茶を啜りましたが、その時、……目が、茶碗の緣の上からちらりと雪乃の顏を見ました。

透綾に近い、淺黄の羅衣が、今宵の雪乃を一層美しく、むしろ清麗とでもいふやうにすつきりと引立てゝ居ります。

「如何でございませう？」

『結構ぢや、冷加減も程よい。』
『では、いま御一服。』
『うむ、後でまた――』綱宗は、輕く辭退して、それから靜かに、『そこの簾を一寸まきあげてくれぬか。そこを揚げると、涼しい風がとほる。』
『はい！』
　雪乃は、すぐ立上つて、御廊下近の部屋簾の前に跪き、やの字結の帶と、新しい足袋裏と、少しばかり、チラと、白い、脛口とを覗かせながら、するする――と御簾を捲き揚げました。
　繪に畫いたやうな姿でした。
『雪乃。』
と綱宗は、御簾を捲き終つて、こつちへ戻つて來る雪乃を待構へたやうに呼びました。
『はい。』
といつて、急いで坐りました。
『そなたは……まだ、新しく仕へたばかりであつたなう？』
　そんな事は、訊かなくてもわかつた事でした。
『はい。』

『何か心配事でもあるのか？』
綱宗は、突如斯ういつて、名殘の一つである雪乃の顔を、今は、むさぼるやうに見詰めました。
『いゝえ――』雪乃も、見返して『なぜでございます？』
『たゞさう思へる。何となく憂はしげな樣子ぢや。』
『いゝえ。』
『さうか。いや、憂はしげにうつるのはわしの目のせゐかも知れぬ。多分さうだらう。然し、憂ひも喜びも今夜限りぢや。さう思ふと、どうやらわしは、昨日のわしでは無いやうだ。それが今、かうやつてそなたと向ひ合つてゐてはツきり分る。』
『…………』
『昨日のわしは、大名としての意地を立て通す事ばかり考へてゐた。初子の計ひを、轉覆すことばかり考へてゐた。それがため、そなたを、態と無いがしろにして來た。見て見ぬ振りをして來た。然し……今夜は違ふ。始めて安心して、そなたを見る事ができる。そのつもりで、そなたを呼んだのだ。何故、そなたを呼んだか知つて居るか？』
『いゝえ。』
雪乃は要愼深く首を振りました。
『それはな――』と綱宗は遲疑なくいひました。『そなたをたゞの腰元とは思はぬ。始めは――刺客かと存じた。』

二

『まあ。』
と、雪乃は思はず聲を擧げました。
『始めはぢや――』と綱宗は、漸く緊張を解いて、目に柔らぎを浮べました。『これが戰國時代なら、全く、さう思うたかも知れぬ。が、後ではわしの考へが變つた。』
『どうお變りでございました？』
と雪乃は、急に物が云ひ易くなつたやうに、つけつけと問ひました。
『刺客でもなければ敵の間者でもないと。』
『ほゝ……それは、當り前でございませう。』
『處が、敵の間者ではないが……どうやら、味方の間者らしいとな。』
『あら。』
『さう存じて見ると、眼が違ふ。ほかの腰元とは眼が違ふ。それは恰度初子の眼のやうにわしを責めてゐるのだ。あの眼色ならわしは身に覺えがあるから、はゝア、こいつ、味方の間者ぢやなとすぐ氣がついた。』

『…………』

雪乃は默つて伏目になりました。

さすがは大身に据るべき人です。初子の方が、足止の策として殿附に選んだ美しい雪乃を、わざと見て見ぬ振りをしてゐながら、ちやんと、これだけの觀察をしてゐるのです。味方の間者――うまい皮肉。遊蕩問題で多少意固地になつてゐるから、幾らか邪推のお蔭もあるだらうが、それにしても父駒北庄八郞、並びに伊東七十郞の指金に依つて江戶屋敷へ住込んだ雪乃を、それと稍や近い喝破り方をしてゐるといふ事は、迚も凡倉殿様では出來る藝當ではありません。雪乃は、本當に間諜に入り込んで露見したほどに恐入つた氣持がしました。

『な、さうであらう?』

さう、諭すやうに云はれて、雪乃は隱す氣になれませんでした。

『はい――でも、間者などとは。』

『比喩ぢや。』

『はい。』と雪乃は肯いて、『妾、殿様のお身近にお侍へするなどとは夢にも思ひませんでしたから……初子の方様の御様子なり、御思召なりをよくお探りいたしてと……』

『探ると申す以上は、やはり間者ぢやな。』

『いえ、さういふ譯では。』

『はゝゝ、そんな事は、どうでもよい。それは、そなたの父の考へか?』

『…………』

『さうぢやらう。』

『それもございますし。』

『父は駒北と申したな。駒北何であつたか?』

『庄八郞でございます。』

『さうか。やはり、國詰のお爲派仲間だな。』

『お殿様のお身の上を、朝な夕な御案じ參らせまして。』

『その心配も、今は、水の泡ぢや――』さういつて綱宗は、慨嘆するやうに云ひました。『わしが、頑固を立通したので、たうとう隱居ぢや。』

『無念に存じます。』

と雪乃は男勝りの調子で手をついて、

『――父は男の子を持ちませんので、女ながら、妾に忠義をせよとて御江戶屋敷へ差遣はしたのでございます。それに……何の御奉公も出來ませぬ內に、そのやうな事に相成りましては、妾は此のまゝ父の許には歸れませぬ。さきほど何か憂ひがあるかと仰せられましたが、若しかあれば、それが表に現はれた

のでございませう。』

『さうか――』

綱宗は肯いてゐましたが、小刀を一本腰に佩し、

『少し話がある。納涼臺へ出よう――跟いてまゐれ。』

と云つて立ち上りました。

三

納涼臺……と云つても金屏風が立廻してあり、欄干寄りの御簾には朱房が下り、絹包みの雪洞が、朧ろ月のやうに茫と照して居る、二段上りになつた疊敷の中二階でした。

そこへ坐ると、何だか却つて話が仕惡くなつたやうです。暗いせゐもあるが、一つには、雪乃の顔が、姿が、あまりに美しく、らふたけく、目の前に坐つてゐるからでもありませう。

それに涼しいせゐもあります。

室藏から急に廣い場所へ出たやうに、いきなり、この涼しさに包まれては、頓には言葉の出ないのが道理です。

『實をいふと――』

と綱宗は、沈默を破つて、

『――忠義には懲りてをる。』

これは、いつも云ふ事です。

『はい。』

雪乃には、その意味がよくわからないので、たゞ返事だけして置きました。

『忠義は口にしやすく、亦、行ひにも現はし易い。然し、眞の忠義といふものはその中にいくつあるか分らぬ。餌食につく魚と申すか、忠義にあつまる家來は多いが、その餌食には、鈎がつき、糸が下り、竿があつて、そこに釣人の控へて居ることを知る者、知らうとする者は、案外少ない。忠義の美名が人々を惑はすのだ。それでよいか、わるいか、わしは此身を以て試さうとして失敗した。わしのためにする忠義であるのに、その忠義が到頭わしを亡ぼしたのだ。つまり、忠義の美名の下に不忠をはたらいてゐることに人々は氣がつかぬのだ。永久に氣がつくまい。そして、彼等は伊達家忠臣錄の中にその名を留めるだらう。彼等はそれで滿足であらう。そして後世でもそれを疑ふ者はあるまい。――なぜ、わしの道樂がわるいか。』

さういつて綱宗は、言葉を切りました。

雪乃は、その議論に感心しませんでした。自分の身を辯護してゐるとしか思はれません。たゞ普通より物を深く考へてゐる人だといふ事は納得できました。そして、意地になつて居るといふ事も分りました。家來との意志も、まるで疎通を缺いでゐる

るやうです。こゝは家來の方も惡いと思へます。疎通を計るのは殿様からすべきでなく、家來の方からすべきものでせう。それを、ぱき／＼、忠義の一手で疊み込んで、少しの妥協も假借もなく、片付けて行かうとするのは、家來の方にもたしかに手落があるやうに思へます。――雪乃にも、さうは考へられますけれど、それにしても道樂……遊蕩を、みづから辯護してゐる態度には感心できませんでした。

雪乃は默つて居りました。

『どうぢや？』

然し、さういつて、綱宗は、苦笑でもしてゐるやうな聲で、

『いや――その話はもう止めに致さう。隱居と決つた今、道樂の是非を論ずべきでもあるまい。たゞ、隱居と同時に、わしの遊蕩も最早や止めぢや。』

と結論をつけるやうに云ひました。

『今少しお早く、お止め下さいますれば……』

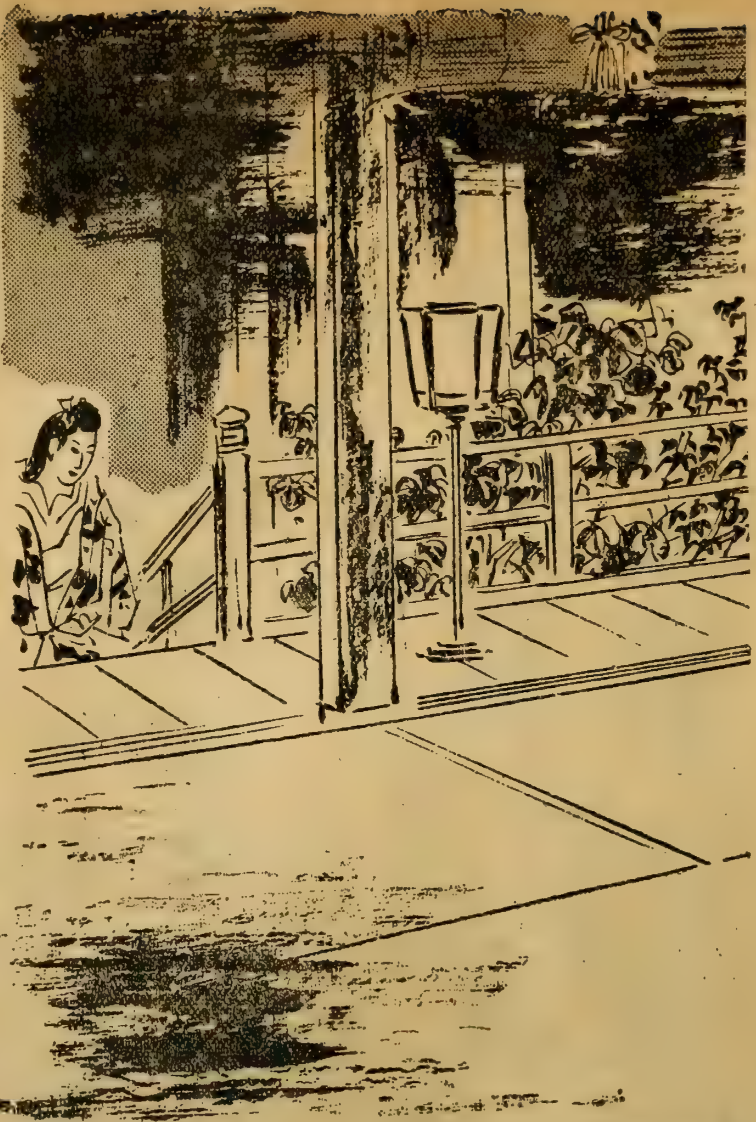
云ひ過ぎたかと思ひましたが、雪乃は、思ひ切つてこんな事を答へて見ました。

綱宗は別に怒りませんでした。

『そのやうな事を――家老共も申した。』

『はい。』

『隱居の後なれば少し位ゐの御遊蕩は……と申した。道樂を差止めようとはせん。可笑しな話ではないか。いゝか、考へても見よ。』



『はい。』

『隱居の後ならばしてもよく、大名の内はしては成らぬ。そんな馬鹿な話があらうか。それは僞善ぢや。高が道樂の前に、人間を二つに使ひ分けねばならぬやうな大名が、何の役に立つ。イザ戰場へ出た場合劍槍矢彈をも恐れぬ大名が、道樂の呼聲に怖れたじろぎ、隱居までしなくてはならぬといふ法がどこにある。——さういふ事をさせるのが、即ち彼等の忠義ぢや。』

火を吐くやうな言葉が、涼しい風を沸沸と熱しさせるほどでした。

四

雪乃は、今度の話はいくらか分りました。多分、大名の權威を主張してゐるのでせう。つまり——大名が道樂に負けてしまつた事を口惜しがつてゐるのでせう。

『いや、又、その話になつた……はゝゝ。』

さういつて綱宗は、言葉を切り、

『雪乃、涼しいか。蚊が居るな。』

さういつて、團扇懸へ手を伸ばす綱宗に、

『蚊遣をいたしませうか。』

と雪乃は訊きました。

『いや、それには及ばぬ。蚊などは何ともない。――たゞ、お前に一つ聞きたい事がある。』

『はい。』

『それは。』と考へ、『お前は、大名のわしと、隱居のわしとを違つた風に考へるか？』

『…………』

雪乃は、質問の意味がよく分らないので默つて居りました。

『わしの方では、お前に對して、違つた風に考へる。』と綱宗は、自分の方から續けました。『――大名の內は、お前を見向きもせなんだわしが、愈々隱居と決ると、お前の事がふと胸に浮んで來た。お前は一體、……わしに、どれだけの仕へをするつもりで參つた？』

『妾……』といつて、雪乃は薄明の中で顏を赧らめました。

『心でお仕へするつもりで……』

『心で？』綱宗は、暫く考へてから、冷かに笑ひました。『さうか〳〵、わしも凡夫ぢやなう。思ひ過ぎをいたして居た。恥ぢてよいかも知れぬ。――ゆるしてくれ。』

『まあ。』

『いや本當だ。』としみ〴〵と云ひました。『人間は變なものぢやなう。道樂だ、遊蕩だと煩さく云はれてゐる時は、案外堅固であつたに、今の心が、今そなたに對してふと抱いた心がだ、それが、本當に道樂の氣持と云ふものかも知れぬ。正しくさうだ。最後に破戒した僧のやうなものだ。それは……誰も知るまい。さすがの家老も知るまい。これは、お前だけの胸にいだいて、勘辨してくれよ。』

『はい……』

と答へましたが、俯向いた雪乃の耳の邊りが、一層赧くなつて居りました。そして、次ぎには悲しい氣持が起つて來ました。

綱宗の言葉は、今夜の雪乃に、始めて心を動かしたことを告白してゐるのです。流石に上品にそれを告げ、そして手際よく引ッ込めました。相手の精神を尊ぶところは、決して狂暴な殿樣でもなく、好色な暴君でもない證據でせう。――然し、これだけでも雪乃には、充分の恥しさであり、亦、淡い悲しみでもありました。

『お殿樣……』と打伏して、『妾こそ御免遊ばして下さいませ。さきほど、間者と仰せられましたが、あのお言葉が身に染みて辛う存じます。』

『何の――』と否定して、それから透かすやうに雪乃の方をみて、『おや、お前なぜ泣く、泣くことはない。もう、何も彼も濟んだことだ。通雨のやうなものだ。』

『はい。』雪乃は、袖口を顔にあて、ほんとうに啜り泣いてをりました。『妾……尼になつた氣持で、御奉公申上げたのでございます。それだのに、それだのに……』
『それだのに？』
『何の御奉公もできず、たゞお殿様をお苦しめする事ばかりで……』
『今夜の事か。』
『どうぞ御免遊ばして。』身を沈めるやうにして、詫つて居ります。『殿様の最後の夜をお汚しした憎い女となり終せまして。』
『それはわしが悪いのだ。お前に落度はない。もう泣くな。な、もう泣くな。』
『はい……』
といつて、やつと上げた顔は、薄明りに睫毛がしつぽりと露をふくんで、黒々と、長く、美しい光りを帶び、今までよりも幾層倍も魅力のある風情でありました。
『う！』と綱宗は、咽喉元で唸りました。『雪乃、もうよし！退ツてくれ。こゝはよい。わしももう居間へ引取る。た、退儀であつた。』
それから自分もスグ立ち上つて、よろめくやうに、二三歩あるきましたが、いつの間にか雪乃の背後に廻つて、
『な！』
といつて背へ手をかけた時、御平間の方に跫音がして、初子の方が這入つて來ました。

討状

一

『お差支へございませぬ？』
綱宗の肯くのを見て、
『御免遊ばしませ――』と初子の方は欄干近に坐り、そしてすぐ團扇を拾ひあげました。『まあ、こゝのお涼しい事。雪乃もこゝへ來や。千兩の値打がありますよ。』
『はい。』
雪乃は、居住居をたゞして少し下座寄に座を移しました。
『そこでも風が通りますか。』
『はい、お涼しう存じます。』
『さうかえ。』
それから綱宗を顧みて、

『何かお召上り物でも取寄せませうか？』
『いや、何も食べたうない。』
綱宗は、邪慳に首を振りました。
『左樣でございますか……』初子の方は、すぐ氣を換へ、『今夜は特別の晩ですから、妾、いつまでも御伽いたすつもりで參りました。』
『……………』
綱宗は默つて居りました。
『雪乃も、よく仕へてくれましたね。』初子の方は優しくさう云ひましたが、さう云ひながら、熟々と雪乃の美しさに目を瞠つた樣子です。『妾が、お前を殿附にしたのですが、お前もあんまり早々なので、勝手がわからず、隨分お困りでしたらうね。でも、本當によく仕へて吳れました。殿樣に、今度のやうな事が起らねば、いつまでも仕へてもらふのだけれど……』
と口籠るやうに云ひました。
雪乃は、
『はい。不束者で何もできませず……』
と、これも口籠つて答へました。
綱宗は、
『今、何刻か？』
と訊きました。
『はい、四ツ（十時）に近うございませうか。』
『もうさうなるか。』
『夏の夜はすぐ更けますから……』
『氣のせゐか、ひどく、靜かぢやな！』
『はい。家來一同、たゞ今、各居間にて謹愼中にございますから。』
『何？』
『家老達も、今夜は一晩端坐いたしまして、殿樣御捺判の刻限の終りますまで、それとなく、御勤仕いたします由にございます。ですから……その氣が籠つて、今夜は、こんなに靜かなのでございませう。』
『ふーむ、さうか。』
綱宗は、さすがに沈痛な聲音を、齒の間にかみ締めました。
初子の方は、目を逸らすやうにして、
『雪乃。お前、一寸、今のうちに、あちらの御寢間をとりかたづけて來て吳りやれ。』
と命じました。
『はい。』
と云つてすぐ座を立つて、中二階を下りて行く雪乃の後姿を

見送りながら、

『殿様。』と初子の方は云ひました。『雪乃につきまして、一寸、お耳に。』

『何だ？』

『今夜限り、お暇を賜はり度う存じます。』

『殿附を解けと申すのか。』

『はい。』

『現金ぢやなう。』

と綱宗は不快さうに呟きました。

『是非……さういふ事に。』

『それはお前の考へか、雪乃の申條か。』

『妾からのお願ひでございます。』

『ふむ。』と、目を向けて、『何故だ。そちは、白粉まで剝いで、あれを、わしの傍附としたのではないか。如何に隠居と決ッたからとて、あまりに現金過ぎはいたさぬか。人を弄ばぬものだ。

——わしは、意地でもあれを手離さぬと申すかも知れぬぞ。』

『今夜にかぎつて、何故、そのやうな事を。決して隠居ときまつたからと申すわけではありませぬ。』

『それでは猶ほと悪い。暇を取らねばならぬ者を、なぜわしの傍附とした？』

『その事でございます……妾も、あの子を妾の身代りのつもりで差出したのでございますが、後にて知りました。あの子は、夫ある身でございます。』

『な、何と？』綱宗の聲は、激しく弾みました。『夫ある身？これ、そのやうな者をのめ〳〵……身共を傷けるつもりか。杜漏な！』

『はい。』

初子の方は覺悟をきめたやうに、

『まだ輿入は濟みませぬが、親の許した許婚がございます。』

『同じことだ！』

『はい。全く、妾が悪いのでございますから……』と初子の方は、手をついて、『如何やうなお咎めを蒙りましても。』

『お前をとがめて何うなる？』

『殿様、その許婚と申しますのは……妾の兄でございます。』

『何？』

『兄の頼母でございます。』

『お、さうか！　それでは、昨夜、諫死組を斬つた下手人も多分そちの兄だな！』

『え？』

二

初子の方としては、思ひ設けぬ結果となりました。元より……叱責を覺悟で、賴母と雪乃の間柄を申し出でたのです。事實を云はなければ、或ひは、隱居所までも雪乃を連れて行くことになるかも知れないからです。粗漏杜撰は叱られても、それは一旦の事、きつぱり暇が取れゝば、兄賴母の前途を明るくしてやる事ができます。亦、一つには家名を保つために白粉を剝いだ自分でも、隱居の後々までも、それを忍ばなければならぬ筈はありますまい。矢張り女です。そこには多少の嫉妬もありましたらう。それに、既に手のついた雪乃なら仕方がないが、今夜になつて節を屈しようとした綱宗を、默つて見てゐる氣持にはなれませんでした。

　たゞそれだけのつもりでしたが……飛んだ事になつてしまつたのは諫死組

慘殺の一件です。

　綱宗が、これを賴母と感づいたのは敏感です。さう感づく以上は、ゆふべ雪乃が裏畑へ出た時、何者か闇の中で云ひ寄つた男のある事を、ちらと小耳に挾んでゐたのでせう。おそらく、附添の老女の口からでも、漏れたにちがひないが、賴母が許婚

だと聞き、それを昨夜の男と結び付け、而も同時に行はれてゐた諫死組の刄傷事件を、直ぐ頼母と睨んだところは、さすがに烱眼なものでした。

初子の方に取つては、いはゆる、藪蛇でありましたらう。

けれども、初子たりとも、よくその眞相は知りません。

『まさか、兄が……人を殺めるやうな事はございますまい。そんな兄ではございませぬ。』

と一應辯解して見ました。

『さうかな。』

と綱宗は考へて居ります。

『何ぞ、お心當りがございますか？』

『心當りと申すこともないが……勘だ。』

『いゝえ、兄に限つてそんな事は。』

『さうかな。さつき、檢擧書を下げ渡してしまうた。これがおれの最後の命令書だ。しばらく見合せておけばよかつた。』

その言葉は、兄に好意を寄せるらしい口吻なので、初子の方は、思はず膝を乘出して、

『どのやうな檢擧書でございました？』

『いや、諫死組から討狀が出たので。』

『え、討狀？　では仇討を？』

『うむ、公に許すことゝなつたのだ。』

『それで、それで……』と初子の方は、息をはずませて急きこみました。『それをもうお下げ渡しになつたのですね。』

『さうだ。』

『いえ、いえ、そんな事は構ひませぬ。まさか、兄ではありますまい。さうです。そんな筈は……』と云つてゐる内に、兄に違ひない！　と心の内で叫んで居りました。ふだんから、諫死組には度び〳〵脅迫かされてゐた兄です。あの晩は、その人たちの諫死を斷つたと云つてゐたから、戸外に出た時諫死組に襲はれたのかも知れない。それで兄がよくせき肚に据ゑ兼ねて斬つたのだらう。――兄だ。やつぱり兄だ。さう叫ぶ心を、頭を振り〳〵わざと抑へて『でも仇討をお許しになるのは少し早まりは致しませんでしたか。よく調べて見もしない内に。』

『諫死組は忠節者だといふ、家老達一同の意見だ。わしは、つまり、最後まで、この忠義のために頭が上らなんだわけだな。』

さういふ綱宗は、もう大悟した人のやうに、言葉は皮肉でも、態度はすつかり落着いてをりました。

その時、一人の腰元が、入口に畏つて、

『御臺樣。』

と囁くやうに云ひました。

『はい。』

と振り向く初子の方に、その腰元は、何か云はうとしてモヂモヂと當惑の樣子で控へて居ります。

『何ですか？』

と訊返されても、

『あの……』

とやつぱり目が困じ果てゝ居ります。

『一寸、お待ち。』

と、初子の方は、何か樣子ありげに思つたのか、直ぐ立ち上つて、その腰元のところへスル〳〵と出て來ました。

『何ですか？』

『あの……』と絶え入るやうに低い聲でいひました。『三澤頼母樣が、たゞ今お越しになりまして。』

『え？　どこに。』

『お控の間にお待たせいたして置きましたが……これから直ぐどこかへ行らつしやるからと仰つしやいまして。』

『あゝ分りました。』初子の方は、腰元の耳に口をつけて、『誰にも云はないでおいで、今すぐ妾が行きますから。』

それから何氣ない風で、納涼臺の方へ戻りました。

三

やがて、又、その納涼臺の間から出て來た初子の方は、そわそわと目の色を浮はずらせながら、それでも、品を失はぬ程度に足をはやめて、消え込むやうに控の間に這入りました。

賴母は、朱蒔繪緣の衝立の蔭に、身をひそめるやうにして坐つて居りました。

『おや？』と始めは、目で、うろうろ、その邊を搜さなければならぬ位ゐ、小さく、身を屈めてゐたのです。『お兄樣。』

『おゝ！』

と嗄れた聲でいつて、賴母は衝立緣に手をかけて直ぐ立ち上りました。目がおびたゞしく狼狽へて居ります。

『どうなさいました。』

『初子。』と手を振つて『やつと門限に間に合つた……度び〱で迷惑だらうが。』

『それよりお兄樣、昨夜は？』

『有難う。』と聲を呑んでお辭儀をしました。『會ふには會つたが、闇の中でもあり、思はしく行かなかつた。然し、お蔭で、雪乃の心持はよく分つた。すつかり分つた。』

『さうですか、それは好ございましたね。』

初子の方は、それを諒解のついた意味にでもとつたのか、輕く受けてから、

『今一つの事は？』

とやゝ、強い目色でヂッと見詰めました。

『今一つの事？』

『それ。』初子の方は、賴母の方へ口を寄せて、『諫死組を斬つた事。』

『あ？』

『どうです。やつぱり、お兄樣ですか？』

『やつた、やつた。』と譫言のやうに云つて、賴母は、衝立の緣を變な手つきでバタ〱と叩きました。『わしだ。たしかにわしだ。物事が、だん〱切羽詰つて來た。』

『切羽詰つたといへば……』初子の方も、囁くやうに、『諫死組から討狀が出たさうですよ。』

『知つてゐる。今奴等に、追はれて來たのだ。』

『え、追はれて？』

『昨夜から身のおきどころが無くなつた。』

『こゝへ來らしたら、なほと發見りやすいでせう。』

『途中で蒔いて來たが、多分、こゝに目星をつけたらう。もう、表に迫つてゐるかも知れぬ。こゝにゐる內は大丈夫だが出たら

ば事だ。』
『いゝえ！』と初子の方は首を振りました。『こゝでも大丈夫ではありません。仇討のお許しが下つたさうですから。』
『何？　仇討の許狀が？　そ、そりや本當か。』
『本當です。家老たちが、さういふ事に取計つたさうです。』
『ば、馬鹿々々しい。』と賴母は、たうとう、衝立を押しやるやうにして此つ方に出て來ました。『納得づくの果し合ひではないか。而も、向ふの方から斬つてかゝつたのだ。それが、どこに仇討となる。武道に反する依怙の沙汰だ。』
『でも、家老たちは、諫死組を忠義一徹の仲間として取扱つたのださうですから。』
『ふうむ、さうか！』
と賴母は、素直に肯いて、しばらく考へてゐましたが、
『よし！　それではわしは、こゝを退散しよう。』
『どこへ行らつしやる？』
と呟きました。
『わからぬ。』
『江戸を落ちますか？』
『いゝや！』と首を振りました。『雪乃への申條がある。』
『それで、今夜いらしたの？』
『つい、ふら〳〵と。』
『後日を待つて下さい。』初子の方は、次の間からずつしりとした金包を持つて來ました。『これを持つて一先づどつかへ身を隱してください。もう、殿樣が隱居と決つた後まで、諫死組などに係り合つてゐる事はつまりませぬ！』
『では。』賴母は、それを受け取りました。『こんなには要らぬが。』
『いゝえ、逃げる身にはいくらあつても足りますまい。』
『さうか……ぢや、一時、借りて行かう。』
金子を懷中に藏ひ込んだ時、どや〳〵と向ふの廊下口に亂れる足音がして、
『お庭改めのお許しが出ましたぞえ。御局樣、腰元衆は、お自部屋からお出ましなさらぬやう！』
といつて、部屋々々を觸れあるく女の聲が聞えました。
『ふう、來たな！』
賴母は、初子の方に一寸目挨拶を投げ、すぐ、そこから出て行きました。

四

庭へ出たのが、少し遲かつたやうです。

もう外庭には人の氣配がしました。

賴母は、

『討狀が出てゐる以上、こゝで斬りつけて來るやうな事はあるまい。多分、引ッ捕へて正式の仇討を行ふつもりだらうが……こつちも、成べく、手荒な眞似をしたくないものだ。』

と考へました。

庭改めといつても外庭だけの事です。勿論、中庭や內庭へ、如何なる者でも紛れ込める筈はありませんから、かういふ場合、外庭だけで澤山でした。賴母は、それと知りつゝその外庭へ飛び出

したのは、妹初子に迷惑をかけたくないと思つたからです。

此の夜中、家老が庭改めを許したのは、頼母と知つてか知らずか、とにかく、諫死組殺しの下手人が邸内へ入りこんだ旨の訴へをうけたからでせう。

されば、不利と知りつゝ、止むをえざる頼母です。

たゞ、直線に入口を突破すべきか、外庭を一廻りして血路を求むべきか、今は、二つに一つの方法よりありません。

いづれにしても難澁です。

二歩三歩、五間十間……刻み込むやうな切迫感。自然と爪先は砂を嚙んで、走り氣味となります。

『あそこに！』

といふ聲がしました。

續いて、ばた〳〵と人の駈集つて來る跫音がして、

『一寸。』

と呼止める聲と、

『誰人ッ？』

と誰何する聲とが、こつちの逃げ氣味に乘じて、

『こら、待てッ！』

と變りました。

待つてたまるものか。――頼母は、すぐ植込の中に紛れ込みました。

そして奥へ入りこむやうな足取りを取りながら、實は、築石の間を雁木形に縫つて、一刻も早く外側へ出るやうに志しました。

これが多少好かつたのか、一團となつた足音は、植込の中へ釣込まれて、そつちへ雪崩込んで行つた樣子です。が、それは束の間でした。一人だけ外側を急速力に廻つたものがあるのか、塀寄に曲つた途端に、その者と、パッタリ顏を合せてしまひました。

『おゝ。』

と向ふでも不意を喰つて、驚いて立ち止りました。

『御苦勞。』

と突嗟に云つて見ましたが、

『三澤氏だらう？』

と向ふでは、それに胡魔化されず、立ち直つて行手を封ぎました。

『いや。』

『ぢや、今夜の合言葉は？』

『何？』

『それ。』と向ふでは弱點を突いて、矢庭に詰寄りました。『三澤

氏、一寸用がある。武士の禮は重んずるから、御庭内を亂さぬやう、我等に同道してくれ。』

『どこへ行くのだ。』

『君は、昨夜、この横道で、諫死組の田子を斬つたらう？』

『田子だか烏賊だか。』場所柄にない諧謔が出ました。『果し合ひを請まれて相手になつた。それがどうした。武士の禮を重んずるなら、手前の不覺と斷念むべきだ。』

『だから、その點、同道して吳れゝば分る。』

『こつちはそんな餘裕は持たぬ。』

『では、同道せぬと申さるゝか。』

『折角だが。』

『それでは人を呼ぶぞ。』

『勝手にせい。』

賴母は、いきなり、目の前の据石を飛び越えて走りました。

かうするより仕方がない。問答してゐる内に人が集つて來るし、捕つたら理窟は通りません。仇討許狀が出てゐる以上、どうしても果し合ひの蒸返しとなるでせう。さうすれば、相手は誰か諫死組の腕利の者が立向ふにちがひないから……先づ、此勝負、勝味はないものと思はなければなりません。

同じ死すべき命なら、まだ、もう少し持堪へて行ふべき仕事がありました。

戀の仕事です。

『こら待てッ！』

といふ怒號を背後に聞きながら、賴母は、『雪乃、雪乃、雪乃。』と心に叫んで居りました。『雪乃の爲にこんな事になつた。だが、それはおれが優柔不斷だからだ。なぜ、今夜も死を賭けて會はなかつた。會つて最後の言葉を訊かなかつた。それを聞かないばつかりに自分の結末がつかない。どんな事に出逢つても負けて逃げなければならぬ。強くなれぬ。命が惜しい。かうやつて又しても逃げまどつてゐる。まるで生きてゐる亡者だ。あゝだが、雪乃の心は大概讀めてゐる。もう、おれの心から去つてゐるのだ。たゞ、應でも、否でも、愛憎盡しでも、何でもいゝから、彼女の口から、もう一度、はつきりと聞きたい。さうでなくてはこの亡者は、白晝、行方知れずさまよひ歩くより仕方がない。亡者を成佛させるのは、たゞ彼女の聲だ。その聲で、ぐさりと、止めを刺してもらひたい。愛すべき彼女。憎むべき彼女。――もう何が何だか分らない。』

さう思つた時、塀の頭に手が懸つて居りました。

『こら！』

と後ろから、縋り付かうとするのを、
『えいツ！』
と塀の上から、後手に拔討ちにして、賴母は、ヒラリと地面に飛び下りました。

わかれ

一

引過ぎは、また一時のさんざめきです。後は少し靜かになりました。新内の流しも遠のいて行つた樣子です。

いつか新吉原の京町に來て、一つの布團の中に寢てゐた賴母。思へば飛んだところへ來てしまつたものです。生れて始めてのこと、勿論仙臺などでも惡所通ひをした事もなく、さういふ方面の友達交際もなかつたので、賴母はまだ童貞でした。その童貞がいきなり、吉原へさまよひこんだのは、惡となく善となく、行き場所に困つた時、とにかく、人間にとつて、尤も行き易い場所はこゝなのかも知れません。

障子が開いて、
『ようお寢つて居なんす。』
と女が顏を覗きこんだ樣子です。
勿論、狸寢入でした。
女は、そんな事は疾くに知つてゐるのか、クス〳〵笑つて、
『もし！』
といつて這入つて來ました。
賴母は全身を顫はせて、
『一寸。』
と遮つた時、廊下の方にバタ〳〵草履の音がして、
『芝の出雲町の方から、お駕籠に召していらしたお客樣は居なんせぬか？』
と訊いて步いてゐる聲がしました。
『あ？』
と思つて賴母は布團の上に起上りました。
『あら、どうしなんした？』
と相方が、目を瞠りました。
『待つてくれ、馴れぬから……』
『馴れぬ？　ほゝゝ。』と女は笑ひました。『馴れぬなら馴らして上げませう。さ、さ、そんなに木の株のやうに堅く坐つて

ゐるものではありんせぬ。さアと云つたら。』
　と白い手が、肩の邊り膝の邊りへしんなりと絡まりついて、柔かく寢かさうとします。初心の客と見て取持もいゝのでせう。それに水際立つた賴母がこゝへ來て持てぬ筈はありません。
『いや、少し……』
『何が少しでありんす。厭なお方、まア、そんなに四角四面に畏つたりして。』
　それもあるにはありました。兎に角、綺麗に紅粉を裝うた若い女が――賴母には裸體に思へるほどの長襦袢で、身近に摩に寄添うてゐるのですから、賴母は、胴震ひに近いものを全身にも膝頭にも感じました。が、そのほか、今一つ、彼を坐らせてしまつたのは、今遣手女の觸れてあるいた言葉でした。出雲町の方から駕籠に乘つて來た客……といふのは自分です。
　さては、諫死組に氣取られたか？
　眞ツ直ぐ通し駕籠に乘つたのが惡かつたのです。勿論、この家と目星をつけた以上は、四の五のいへばこゝへ乘込んで來るでせう。さつき、濱屋敷を脱出する時、一人斬つて居ります。都合二人を手にかけた自分、彼等が必死の追擊は當然な事です。されば、逃ぐるにも、愈ゝ必死の覺悟を要します。

『それとも妾が嫌ひかへ？　嫌ひなら嫌ひというてくんなまし。』
『いや、そんな事はないが……一寸、待つて！』
　と手を遮つて、聞耳を立てるその耳朶へ、相方の唇が不意に摩寄つて來ました。
『では、あなたは、出雲町から來さんした客かえ？』
『え？』
『何ぞ理由がありんせう。』と呑み込んで、『侍衆が今四五人登樓りんした樣子ゆゑ。』
『え、もう登樓つた？』
『見付かつてはいけぬかへ？』
『さ、成可く見つかりたくない。筋違ひの仇討を望まれ、多勢に無勢、こゝで果し合ひとなつては、所詮勝味がない。』
『あゝ、分りんした。それなら妾が逃がして進ぜるゆゑ。』女は賴母の手を引ツ張つて立ち上りました。『その代り、また、來て下さんせ。ね、いゝかえ、裏を返して。』
『うむ！』
『こつちへ。』
　と云つて、長廊下の突當り、道具部屋らしい間を二つ三つ通り拔けた裏窓、開けると表構とは似ても似付かぬ、裏長屋めい

た板屋根が、ごちや〳〵並んで居りました。

『こゝより他には逃路はありんせぬ。』

女は指して、そして振顧つて莞爾笑つて見せました。『こゝは情夫新道と申します。』

『おゝ忝けない。』

『直ぐ大門を出てはいけぬぞへ。かういふ時、仲間の者が一人や二人、きつと張番をしてゐるものゆゑ、こゝから、ほれ、左の、あの凹みの所から降りて、矢張り、どこぞへ、明方まで登樓りんす方が。』

『さうか、分つた。忝けない。又來る。お前の名は？』

『錦糸。』

『あゝさう〳〵――では、左樣なら。』

賴母は屋根の上に這ひ出しました。

二

二度目の青樓は、そこから一二町はな

れたところでした。

今度は前より一層宏大な家でした。部屋も夜具も立派でしたが、金も高く取られました。その代り、出て來た相方がツンとそつぽをむいて一向いゝ取成しをしてくれません。標緻も惡くはないが、少し肥つちよの大柄で、二の腕をむき出して、向ふをむいてさつさと寢てしまひました。

賴母には、却つてこれが氣樂でした。……が、背中合せの威壓を受けて、中々寢つかれないので弱りました。

ウト〳〵と一睡後、小用に起きたが、案内知らずに歩いたので、多分、客用ではないと思はれる、奥まつた便所まで辿りついて終ひました。

用を足して出て來ると、どこかで、人聲がします。

手水鉢横の櫺子窓から、ふいと向ふを覗いて見ると、賴母は、

『ほゝ？』

と目を瞠りました。

大方、此家の別宅でせう。砂敷の廣庭、向ふに立派な中木戸、晝を欺くばかり明煌々と無數の行燈がとぼり、木戸の内側には、どうやら駕籠が一挺置いてあるらしく、外側には此家の亭主、幇間、女中等が大勢整列して、中から今誰か出てくるのを待つてゐる樣子です。

『おや〳〵、大藩御歸館の圖か？』

ふと、そんな事を思つた時、別宅の中からドヤ〳〵出て來たのは、大藩ではなく若い侍姿でした。後ろに、五六人の家來を隨へ、多少、醉が廻つてゐるのか、足取は放縱で輕々と地を踏んで居ります。

『御前樣、お歸りにございまするか。』

亭主や雇人の頭が一齊に下りました。

『あゝ亭主か、毎度退儀ぢやなう。』

さういつて快活に扇子を振つた若侍……と思つたのは、誰あらう、伊達綱宗でありました。

『あ？』

賴母は、欞子窓に喰下るやうにして驚きました。

いつ遊興に來たのか、夜明近の薄闇の中を、これから駕籠を飛ばして、離屋敷へ歸らうといふのでせう。

近代の巨匠神田伯山
最後の名長講!!
江戸の花 野狐三次
〽芝で生れて神田で育ち、今ぢやに組の纏持……侠血義血、江戸一番の伊達男が痛快無類の大活躍、名講談中の名講談

布裝美本　定價一圓　送料十二錢　大日本雄辯會講談社

『いつも〳〵何の御風情もございませず。』

『いや、亭主、愉快であつた。』

綱宗は、立ち止つて、そして、一寸、息を呑むやうに皆を見渡しました。

それから、目をしばたゝきました。

『皆にも、いかう厄介かけたなう。』

『あ、滅相もございませぬ。』

『わしは……今日から隱居ぢやぞ。雲が破れ、旭が昇ると同時に、わしは今までのわしではなくなる。亭主、元氣でくらせよ。』

『はい……御前樣、今後も御見捨てなく。』

『有難う。』と綱宗は云ひました。『だが亭主、わしはもうまゐらぬ。わしは仕事をするために、こゝの人達の様子を見るのを好んだ。それが愉快であつた。そちたちは偽りがないなう。言葉に衣着せず、笑ひたい時によく笑ふなう。そこがよい。大名も、その心持をよく味へば、よき仕事ができると思つた。わしは多少溺れたかも知れん……然し、そちたちも承知の通り、女に溺れたといふ噂は偽ぢや。なア、さうぢやなア。はゝ、そんなことはどうでもよい、それではみんな、達者でくらせよ。』

『はい。』

木戸外の人々は、深く頭を垂れました。

『薫々。』綱宗は振りかへつて呼びました。薫といふのは綱宗に仕へた京町山本屋の相方です。『おや、そち泣いてゐるか。泣くな、何が悲しい。悲しいことなど何がある。そちたちと遊ぶ間、わしは懸引をせなんだ。だから、かうやつて別れるにも懸引はない。たゞ明けつ開けの心だ。そちたちはみないゝ者たちだ。争ふ時には本氣で、むき出しで争うてゐる。悪口でも賞め口でも、飾りげなしに大口に叩いて居る。さうだ、だから薫、お前泣きたいから泣くのか。それなら泣け、かくさず泣け。』

それから、じりじりと木戸口の方をむいて、

『おゝ、そこに丁六も居るな。力兵衛もか。あゝ勝半、さんま、辨慶……』綱宗の聲は咽喉の所でむせびました。『そつちに居るのは、おせんに、おこよに、お達か……世話になつたな。我儘を申したな、勘辨してくれよ。わしは、永く〲、一生そちたちの事を忘れぬぞ。むき出しの心で愉快に遊んだ人間最上の法悦を、わしは、決して〲忘れぬぞ。その心を大名の心の鉢に植替へんとしてわしは失敗した。然し、その恵みは永く〲忘れぬぞ。では、みんな、達者で暮してくれよ。』

歡欷の聲が、そこゝから起りました。

『殿様も、お、お丈夫で。私達も一生涯お慕ひ申します。』

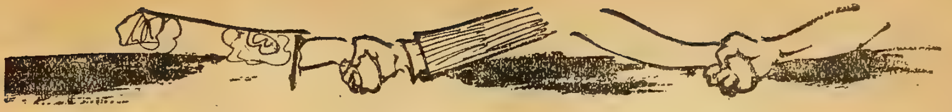
『あゝ有難う、では左様なら。』

綱宗は駕籠に乗りました。

頼母は、こつちの窓に取付いたまゝ何時かさめ〲と泣いて居りました。

（つゞく）

キングレコード
三月新譜
君泣けば
西條八十作詩
江口夜詩作曲編曲
獨唱 渡邊光子
編修發行
大日本雄辯會講談社



＝滑稽詩＝

相互扶助節

サトウ・ハチロー

お湯屋の中で　あんまさん
お湯を汲むのに　大弱り
そこで熊さん　とんで出て
お湯を『あいよ』と　汲んでやる
お禮に肩をば　あんまさん
『おもみしましよ』と　トントントン
　これもひとつの　相互扶助
オヤ〳〵まつたく　ほんとだね

飯は炊けたが　菜がない
女房留守で　大弱り
その又隣りも　女房留守
お菜はあるけど　飯がない
そこで二人の　亭主どの
兩方持ち寄り　夕ごはん
　これもひとつの　相互扶助

オヤ〳〵まつたく　　ほんとだね

男やもめは　ほころびを
縫へずに袖が　宙ぶらりん
見かねて向ひの　女中さん
お貸しなさいな　縫ひませう
ありがと、それでは　薪割りを
あなたに代つて　いたしませう
　これもひとつの　相互扶助
オヤ〳〵まつたく　ほんとだね

荷物をかついで　田舎道
うしろから來た　自轉車が
國道へ行くのは　どちらでせう
そこで案内　てしあげよう
自轉車の主は　よろこんで
荷物はこちらへ　のせませう
　これもひとつの　相互扶助
オヤ〳〵まつたく　ほんとだね

さしゑ＝川原くにを

笑話

探偵眼

『君んとこの細君は左ぎつちよだらう?』
『大したものだね、まだ會つた事もないのに、どうして君に。それが判るのだ?』
『だつて、君の右の頰ぺたが年中赤く腫れてるからさ。』

ゴンドラ

彼女——あなたは伊太利も御旅行なさいまして? ベニスはいかがでした?

夫人——左樣、あそこには約一ケ月も滯在しましたのよ。
彼女——まあ、ゴンドラいかゞでした?
夫人——あゝ、ゴンドラですか。あれには飽き〳〵しましたわ。何しろ夕食のお菜には屹度出されるんですもの。

煮た犬よりも

友達の樣にして可愛がつてゐた太郎君の愛犬が、或る日、火災に逢つて家と共に燒死した。
太郎君が餘り悲觀するので、母親が慰めて、
『今にね、似た犬を探してあげますからネ。』
すると太郎君は首を横に振つて
『いやだ〳〵、煮た犬なんか、いやだい。僕は燒けた犬が好きなんだい。アーン〳〵。』

引く手あまた

『僕はあのダンサーにさう言つてやつたよ。——若しお前を口說きにやつて來る男があつたら、片つ端から射ち殺してやるから——つて。』

『さうしたら、あのダンサー、何て返事したい?』
『——それぢやアどうぞ、機關銃を用意して來て下さい——、だとさ。』

もつとも至極

裁判官『してお前が追剝に逢つたのは、何時頃だつたか？』

被害者『さあ……。それはちよつと：追剝に訊いて頂かないと解りかねますが……。何しろいきなり肝腎の時計をとられちまつたんで、つい時間を見るひまがなかつたんで、ハイ。』

つんぼ

乞食――奥さま、ついいんぼでびつい い、この可哀さうなわたくしに、何卒下されませ。

奥様――お前にせではないかい？

乞食――何かお言ひのやうですが、この通りのついいんぼで聞えません。……どうぞやいくらか頂かせて下されませ。

奥様――あら、ほんとだわね。いくら上げようかしら？

乞食――はい、五十錢お惠み下されませ。

胸におぼえが

――お宅に前にゐた女中、大變氣立のよい女らしうございましたわネ。

――えゝ、眞個に正直者でした。

――よかつた事、今度あれが宅へ來ましたのよ。

――あらッ！ でも奥さま、お氣を付け遊ばせ。あの女あれで嘘つきなんですから、何でも言ふこと御信用なさつては不可ませんわ。

忽ち經濟的

妻の母『パン子や、女中なんかにさせるより自分でお料理をした方がどれだけ、經濟だか知れないでせう？』

若い妻『えゝ、あたしが料理をするやうになつてから、主人だつて今までの半分しか食べないやうになりましたわ。』

支那奥地に産する植物の實

視力の恢復増進に効果ある……

七度の近視が十五度に、亂視も漸次正確に見え出し、老眼も更生し、腦の作用も驚く程よくなる新療法

此の世の中で眼の悪い位不自由なものはありません。進歩した現代の醫學を以てしても近視や亂視や遠視などは治療法にも殆んど良法なく、殊に老眼などは生理的に自然になるものと考へられてゐただけに別に問題にもしてゐなかつたのであります。

或る植物の實で視力が恢復

併し或る植物の實で不思議にも、視力障害に著しい特効あるものが發見されてゐるのであります。これこそ全く世界に類のない特殊植物の實で、日々コーヒーやお茶の代りに用ひれば衰へかけた視力がめき／＼恢復する貴重薬で、その名を『エモヂン』といひ、視力の増進に驚くべき効驗を有し、近視や亂視もこれに依つて治るといふ事が多くの確信ある實驗によつて事實上明らかになりました。

百日服めば夜目が利く

エモヂンは支那の奥地に産する特有の植物の精粋より得たるもので、不思議な効果を有する貴重薬として、支那では、昔から腦及び視力恢復の常用に珍重されて來たものであります。これを彼の地の傳説によつて調べて見ると、『エモヂンを百日服めば夜目が利く』とさへ云はれてゐる位で、誠に世界にも稀な貴薬と云ふ事が出來ます。

保健飲料として常用さる

エモヂンは又保健飲料として風味頗るよくお茶やコーヒーの代用ともなり、日常これを用ふれば頭腦明晰となり、便通を整へ、心身爽快となり神經衰弱や腦病にも効驗があり、益々身體を健康に導き、著しく視力を増進し眼疾に幾多の効驗ある事は實驗者が等しく立

證せられて居る處であります。故に近視の人、亂視、遠視、老眼、弱視に用ひて視力を増進恢復し、その他あらゆる眼病にも著しい効果があります。

ですから、眼を多く使ふ人、眼のわるい人眼病を患ふ人は常に視力を補給せねば亂視や遠視や近視になるばかりでなく、早く老眼になります。かうした人には確信を以て『エモヂン』をお奬めいたします。まだお試みにならない方は是非御愛用下さい。

エモヂン

視力恢復増進の貴薬

十七日分…一圓五十錢
五十五日分…四圓
送料内地十五錢、領土四十二錢
東京・本郷（振替東京六六二九）
大日本雄辯會講談社
代理部
EMODIN

此の事實を御覧下さい

視力恢復、増進の喜び！

○近視の度が進まぬ様になる

佐賀縣杵島郡武雄町 樋渡 輝吉殿

近視、四月頃よりエモヂンを服用致して居りますが、以前は度が進んで居りましたが、服用する様になつてからは度が進まず喜んで居ります。この様なら漸次良くなると思ひ役所に勤める身で激務の餘暇を見ては眼の保養を怠らずしてエモヂンを愛用して居ります

× × ×

○廣告に優るその効果に驚く

東京牛込 高木 幾造殿

昭和六年六月二十三日より貴社發賣のエモヂンを使用せしに近視眼は薄紙を剝す様に日一日と具合よくなり、自分は勿論、家族一同非常に喜んで居ります。世の中には廣告のみは立派で、實質は零の藥が多いが、エモヂンは廣告に優る効果を持つて居ります。その後は知人のみならず眼病の人様にはこの藥を極力奬めて居ります。

× × ×

○視力眼に見えて増進醫者も驚く

富山縣滑川町 水野 庄通殿

小生視力増進を計る爲め、エモヂンを服用致しました。元來高貴藥はのみにくいのに反し、エモヂンはコーヒーの代用になり、服みよいのは嬉しかつた。小生はトラホームを患ひ、現在醫者に通ひ居り、醫藥とエモヂンを同時に服用して居ります。その爲め視力が日々目に見えてよくなつてゆきます。その効果には今更の様に驚いて居ります。

御申込次第『眼病一般知識』を進呈致します

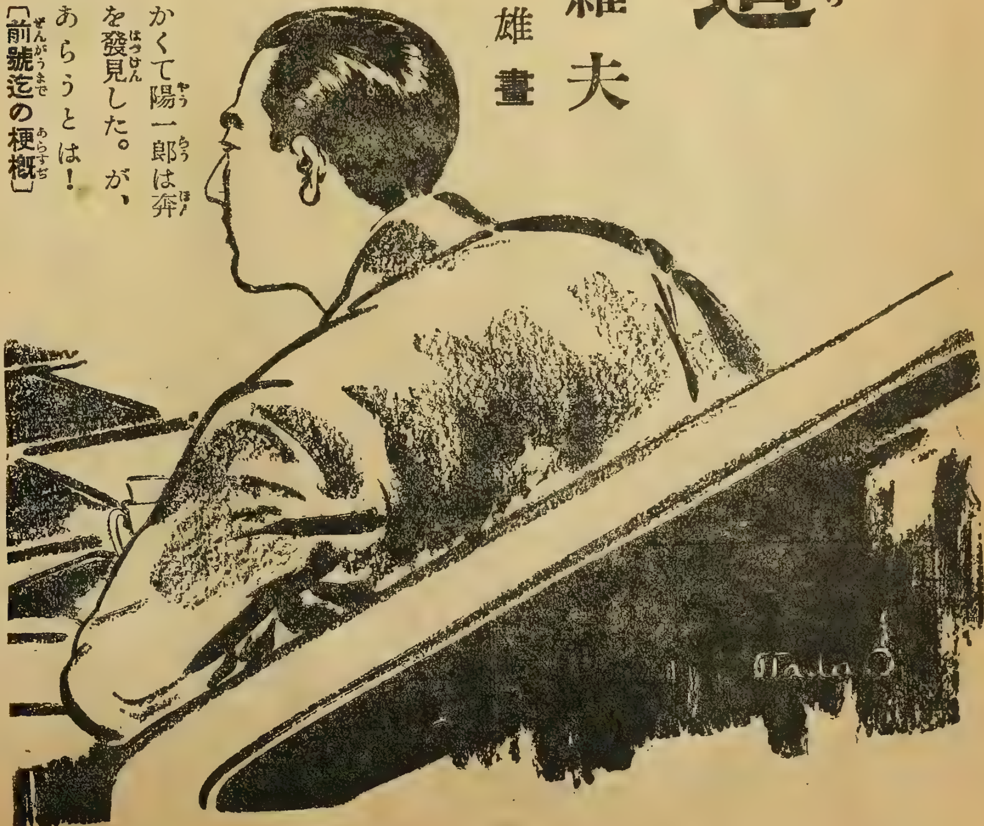
長篇小説

薔薇色の道

中村武羅夫

寺本忠雄畫

放埒に耽る高濱陽一郎青年は、嘗て自分の自動車で、或老人を轢倒して問題を起した。だが一方彼はこよない純情の持主で、瀕死の床の踊子マユミを、一旦の義氣から正心誠意看護し續けた。然し其心盡しも今は冗で、マユミの命は次第に細り、たゞ最後の思出に、『別れて久しい妹の絹子に、唯一目會ひたい』と歎願する。かくて陽一郎は奔走し、遂に其絹子が、銀座のサロン春に女給となつてゐるのを發見した。が、驚くべし、此絹子こそ、嘗て彼が其車に轢倒した老人の娘であらうとは！奇しき緣を痛感しつゝ、陽一郎は徐に來意を語り出した。〔前號迄の梗槪〕



姉の消息

絹子は、若しや兄の源吉か、父が、この人に對して、何か惡いことでもしたのではないか知らと思ふと、不安で堪らなかつた。でも、醉つたまぎれなら、どんなことをするか知れない父であるけれども、酒さへ飲まなければ、猫のやうに溫和しい。だから、父が、まさか惡いことなどするとは思へなかつたけ

れども、兄の方は、性根の腐つた無頼漢である。ちよつとした ことにも因縁をつけて、どんな亂暴を働くか知れない。

わざ〳〵陽一郎が、自分を訪ねて來たといふのは、きつと兄の問題に違ひないと思つた。源吉が、何か惡いことをして、そのために、わざ〳〵訪ねて來たのに違ひないと思つた。

それにしても、どんな惡いことをしたのだらうと思ふと、用事があるとだけ言つて、陽一郎が、まだ、何んにもその內容に觸れない中から、絹子は、氣が氣ではなかつた。彼女の小さな胸は、張り裂けんばかりに、高く動悸がして、おど〳〵したやうな眼が、陽一郎の顏を仰いでゐた。

だが、陽一郎は、直ぐには用件に觸れなかつた。

『君は、こゝには、もう長くゐるの?』と、聞いた。

『いいえ。』

絹子は、かすかに言つた。

『どれくらゐ?』

『まだ、こゝに來てからは、一年にはなりませんの。』

『それまで、どこにゐたの?』

『方々に。』

『やつぱり、銀座?』

『えゝ。』

『そんなに、方々變つたの?』

『二三度。』

『ぢや、そんなに度び〳〵、變つた方ぢやないぢやないか。二三年の間に、二三度變つただけぢや。』

『あら、よくご存じですこと。』

と、絹子は深い潤みを持つた美しい瞳を見張つた。

『何を?』

『わたしが、二三年も女給をしてゐるなんて。』

絹子は、ほんのり顏を赧らめると、長い睫毛に掩はれて、陰影の多い眼を瞬きすると、そつと伏せてしまつた。その羞恥の表情は、純眞そのものと言つても好かつた。これが、二年も三年も、女給なんかしてゐる女とは思へなかつた。

『やつぱり、隣りのおかみさんが、話して聞かせたのだよ。』

陽一郎は、見てゐれば見てゐるほど、話してゐれば話してゐるほど、絹子の純眞さに對して、深い魅力と、愛情とを感ぜずにはゐられなかつた。

『まあ。』

絹子は、ぱつちりと眼を見張つて、陽一郎の顏を仰いだが、隣りのおかみさんも、何んだつて、そんなに何もかも、この人に喋つたのだらうと思つた。この人も、また何んだつて、人のことを、そんなに何から何まで、聞いたのだらうと思つた。

（わたしが、どこで女給をしてゐたつて、何年間女給を働いてゐたつて、そんなことは、どうだつていいぢやないの。それが、この人に、一體、どんな關係があるのだらう？）
絹子は、陽一郎が、わざ〳〵自分を訪ねて來たことが、ますます疑問に堪へられなかつた。
『僕は、君を、迎ひに來て上げたんだぜ。』と、陽一郎は突然言つた。
『えつ。』
絹子は、咄嗟には、陽一郎の言葉を、理解することが出來なかつたので、更に大きく眼を見張つて、またゝきもせず、陽一郎の顏を見入つてゐた。
『びつくりした？』
陽一郎は、かすかに肩を搖すつて、微笑した。
『わたしを、迎ひに來て下すつたとおつしやるのでせう。』
『さうだよ。』
『だつて〳〵、それならわたしを、どこへ連れて行かうとおつしやるの？』と、絹子は恐怖に滿ちたやうな表情をして、息を彈ませてゐた。
『横濱だよ。』
『えつ、横濱？』
『イヤなの？』
『だつて〳〵。』
と言ひかけて、絹子は咽喉が詰つたやうに、後がつゞかなくて、顏が眞赤になつて、深く喘ぐやうに、息を吐いた。
『行かない？』
『だつて、わたし、何んのために、横濱に行かなくてはならないのでせう？　わたしには、分りませんわ。』
『さうだ、僕は、まだ、その理由を話さなかつたのだな。』
と言つて、陽一郎は笑つた。
『えゝ。』
『君の姉さんから頼まれて、迎ひに來たのだよ。』
『姉から？』
『それでも、僕と一緒に、横濱に行くのが、イヤなの？』
びつくりしたやうに叫んで、絹子は息を呑んだ。
『いゝえ。』
絹子は、聞えるか聞えないか、分らないくらゐ低い聲で呟くと、かすかに頭を掉つたが、でも、疑問に滿ちた眼が、燃えるやうに輝いて、陽一郎の顏に、喰ひ入るやうに見入つたまゝ、動かなかつた。
『急いでゐるんだから、直ぐに、一緒に來て貰ひたいのだ。』

『あなたは、兄さんに頼まれたのぢやありません？』

絹子は、三年も四年も、行方不明になつてゐる姉が、突然、この人を頼んで迎ひに寄來すなんて、そんなことは信じられなかつた。

或ひは、兄の源吉が、何か企らみでもして、自分を迎ひに寄來したのかも知れない。さう言へば源吉は、この二三日、家には、ちつとも姿を見せたことがない。どこへ行つて、何をしてゐるのか、知れたものではない。

絹子は、油斷してはならないと思つた。場合に依れば、自分の骨肉の妹でも、陷穽に落し入れて、喰ひものにしないとは限らない源吉だつた。

『兄さんだつて？』

陽一郎は、不思議さうに反問した。突然、兄に頼まれたのではないかなどと言はれても、陽一郎には、何が何んだか、さつぱり分らなかつた。

『えゝ。』

『君の兄さんなんて、僕は、知らないぢやないか。』

『ご存じないの？』

『知らないね。』

『では、本當に、姉さんから頼まれて、わたしの迎ひに來て下すつたと、おつしやるの？』

『その通りだよ。』

『不思議だわ。』

絹子は、溜息を吐いて、首を傾げてゐた。

『信じられないの？』

『えゝ。』

『だつて、君には、姉さんが一人、あるのだらう？』

『でも、ないと同じことですわ。』と言つて、絹子は悲しさうに頭を垂れた。

『どうして？』

陽一郎は、眼を見張つた。

『二年も三年も、行方不明になつたまゝ、生きてゐるのか、死んでしまつたのか、何んの便りもない姉なんですもの。』と、絹子は力なく言つた。

『ところが、僕が、君を迎ひに來たのは、行方不明になつてゐるその姉さんから、頼まれて來たんだぜ。』

『えつ。』

『姉さんは、今、死にかけてゐるんだよ……』

『まあ、どこで？』

『横濱の病院で。』

『それは、本當ですか。』

絹子は、さつと顏色を變へて、息を彈ませた。

『本當ならこそ、僕は、斯うしてわざ〳〵、君の迎ひに來たんぢやないか。』と、陽一郎は力を籠めて言つた。

『でも……』

『やつぱり、信じられない？』

陽一郎の秀麗な顏には、ほのかな苦笑が浮べられた。

『…………』

絹子は、俯垂れたまゝ、信じられるとも、信じられないとも、答へなかつた。彼女は、陽一郎を疑つてゐるわけではないけれども、二年も三年も行方不明になつたまゝ、便りを缺いてゐた姉が、突然、横濱の病院で、死にかけてゐると聞いても、容易にはそれを、本當だと信ずる氣持ちになれなかつた。

信じないわけではないけれども、信じるまでには、相當の經過を要するわけだつた。

『君の姉さんは、横濱のK・Sキャバレーで、働いてゐたんだよ。』

陽一郎は、絹子が、遽かには信じられないだらうといふことが、だん〳〵分つて來た。

誰だつて、絹子の立場に身を置いたら、二年も三年も行方不明になつてゐた姉から、突然、迎ひに來たのだと言つても、信じないのが當り前でもあれば、信じられないのが、尤もである。

それを信じさせるには、もつと靜かに、もつと精しく、もつと具體的に、話すよりほかはないと思つた。

『えゝ。』

絹子は、頷いた。

『知つてゐるの？』

『さうだといふことは、聞いてゐましたの……』

『僕はね、そのキャバレーで、君の姉さんを知つたんだ。』

『いつ頃から？』

『つい最近さ。』

『まあ。』

『ほら、いつか、君の父を轢いて、君の家まで、送り屆けたことがあるだらう。』

『えゝ。』

『あの時、初めて君の姉さんを、知つたのさ。』

『まあ！』

絹子は、(どうして？)と言ふやうに、不思議さうな眼ざしをして、陽一郎を見てゐた。

『今考へて見れば、K・Sキャバレーで、君の姉さんを初めて

知つて、その歸りに、つまり君のお父さんを、轢いたといふわけなんだ。』

陽一郎は、ちよつと感傷的な氣持ちになつて、瞬きした。

『……………』

絹子は、無言のまゝ、これも感慨深さうな色を浮べてゐた。

『その時には、君の姉さんは、既に不治の病氣に冒されてゐたんだよ。不治の病苦に喘ぎながら、華やかなキヤバレーで、働いてゐたんだよ。』

『それで、いつ頃から、病院に入ることになりましたの？』

『三週間ばかり前さ。』

『まあ。』

『二人は、箱根にドライヴしたんだ。僕のロードスターに、姉さんを乘せて、蘆の湖まで行つたんだ。』

『……………』

絹子は無言のまゝ、陽一郎の顏を見つめてゐたが、彼女の二つの黒い瞳は、涙に光つてゐた。

『蘆の湖に行くまでは、大へん愉快がつてゐたんだけれども……尤も、僕が、姉さんを誘ひに寄つた時には、姉さんは氣分が惡いと言つて、寢てゐたんだよ。だから僕は、ドライヴは止した方がいいと言つたんだけれども、姉さんは、どうしても行くと言つて、聞かなかつたのだ。だから、たうとう出かけたのさ。』

『それから？』

絹子は、またゝきもせずに、一ぱい涙を湛へた眼で、ぢつと陽一郎の顏を見詰めたまゝ、一生懸命な調子で、後を促して、息を呑んだ。

『蘆の湖に行くまでは、大へん機嫌が好くて、姉さんは子供のやうに喜んで、燥いでゐたんだ。蘆の湖に着くと、自動車を降りて、ボートに乘つたりしたんだがね……』

『そして、どうしたの？』

『湖畔に上つて、少し休みながら話してゐる時に、姉さんは、喀血してしまつたんだ。』

『えつ、喀血！』

絹子の顔は、眞蒼になつた。

『そのまま、横濱まで歸つて、入院したのだ。』

『それで、容態は？』

絹子は、低い聲で言つて、はげしく呼吸を喘

がせてゐた。
『好くないのだ。』
陽一郎は、急に沈んだ表情になつて、悲しさうに言つた。
『醫者は、どう言つてゐるのでせう？』と、絹子は不安さうに言つた。
『二三日が、どうかと言ふんだ。だが、今夜にも、どうなるか分らないから、そのつもりでと言はれてゐるんだ。』
『まあ。』
『姉さんは、自分の身に、死期が迫つてゐることを、ちやんと、自分で感じてゐるんだよ。』
『……………』
絹子は、無言のまゝ、悲痛な眼ざしをして、陽一郎の顔を仰いでゐた。
『あまり、神經を興奮させては、イケないと思つて、醫者の診斷なんか、もちろん内證にして置くんだけれども、神經が過敏になつてゐるものだから、すべてのことが、分るんだね。』
『……………』
絹子は、やつぱり無言のまゝ、痛ましさうな眼ざしをして、かすかに〳〵頷いてゐた。
『それで姉さんは、生きてゐる間に、どうしても、君に一度會ひたいと言ふんだよ。ほかの誰にも、會ひたくないけれども、君だけには、是非一度、會ひたいと言ふんだよ……』
『それで、あなたが、わざ〳〵迎ひに來て下すつたのね。』
『若し、ぐづ〳〵してゐて、間に合はないやうなことがあつてはならないと思つて、これでも、どれくらゐ氣を揉んだか、知れないんだよ。』
と、陽一郎は、かすかに笑つた。
『濟みません。』
絹子は、低い聲で詫びると、頭を下げた。
『では、來てくれる？』
『えゝ。』
『直ぐ來られる？』
『直ぐにまゐりますわ。』
『ぢや。』
陽一郎は、もう立ち上つた。
『ちよつと、待つてね。』
『どうしたの？』
『マネージャーに、さう言つて斷つて來なくてはなりませんの。』
『さうか。では、僕も勘定しなくてはならないから、扶美子を

直ぐ來るやうに、呼んでくれたまへ。』

『えゝ。』

　絹子が、急いで行つたかと思ふと、快活な扶美子が、入れ違ひに、にこ〳〵してやつて來た。

『まあ、もうお歸りになりますの。』と、扶美子は眼を見張つた。

『また來るよ。』

　と言つて陽一郎は、十圓の紙幣を一枚渡した。

『あら、オレンヂエードを、たつた一つだけね。』

『お釣りはチップだ。』

『有難う。――また入らしてね。』

『あゝ。』

『イヤ、こんなに急いでお歸りになつてしまつちや。』

『今夜は、仕方がないんだ。』

　そこへ絹子が、支配人の許しを得て、外出の支度をして、やつて來た。

この姉、この妹

　絹子が、陽一郎に連れられて、姉の病室に入つて行つた時は、もう十二時に近い時分だつた。

『あゝ、絹ちやん。』

　瀕死のマユミは、高い熱のために、痩せこけた顔を、燃え立つやうに眞赤にして、窪んだ眼を、大きく見張つて、キラ〳〵輝かしてゐた。

　廊下に足音が聞えたと思ふと、かすかにノックして、背丈の高い陽一郎の姿と共に、部屋の中に入つて來た妹の姿を見ると、マユミは我れを忘れたやうに、息を彈まして、妹の名を呼んだ。

『姉さん！』

　絹子も、人前など考へてはゐられなかつた。行きなり泣き聲を絞るやうにして叫ぶと、ベッドの傍に駈け寄つた。

『どんなに心配して、一生懸命に待つてゐらしたか、知れませんわ。』

　看護婦は、絹子にとも附かず、陽一郎にとも附かず――二人にさう言つて、氣を利かせて、部屋から出て行つた。

『待つてゐたのよ。待つてゐたのよ。どれくらゐ待ちこがれてゐたか、知れなかつたのよ。』

　と、一氣に言ふとマユミは、切なさうに深い息を吐いた。

『わたしだつて、どんなに會ひたかつたか知れなかつたの。』

　絹子は、何んだか夢でも見てゐるやうな氣がした。

こんなところで、こんな工合にして、こんな姿の姉に會はうとは、絹子は、全く思ひがけなかつた。飲んだくれの父と、無頼漢の兄との間で、味氣ない月日を送りながら、いつでも思ふのは、姉のことだつた。今までにだつて、どれくらゐ懷しいと思ひ、會ひたいと思つたか知れない。萬一、姉に會へる日を想像し、會ふ場合を想像して、どれくらゐ、獨りで胸を躍らせたり、息を彈ませたりしたことがあるか知れない。

それが、今斯うして、こんな姿の姉に會はうとは！

絹子は、誰の眼にも、既に、あり／＼と死相の現れてゐる姉の姿を見て、口を利くよりも、先づ胸が、一ぱいになつてしまつた。

『わたしね、初めは、誰にも會はないつもりだつたの。』

マユミは、苦しい息遣ひを、少し休んでから、なるべく氣を落ちつけるやうにと努めながら言つた。

『まあ。』

『絹ちやんにも、誰にも會はずに、このまゝ、一人で死んで行くつもりだつたのだけれども……』

『まあ、死ぬなんて。』

『でも、わたし、急に絹ちやんだけには、會ひたくなつたの。會ひたくなつたばかりではない、どうしても、會はなければならない必要が生じて來たの。』

『どんなこと？』

『後で、ゆつくり話すわ。とても息が苦しくて、わたし、思ふやうに喋べれないの。言ひたいことや、話したいことが、山ほどあるんだけれども、胸が痞へて、何んにも言へないの。』

『……………』

それは絹子だつて、同じことだつた。言ふべきこと、聞くべきことが、いくらでもあるやうな氣がしながら、何から、どう話したらいいのか、たゞ、胸だけが一ぱいになつて、何んにも言へなかつた。

『絹ちやん。』

『え。』

『變つたわね。』

『わたしが？』

『とても、美しくなつたわ。』

『まあ。』

絹子は、眼を見張つて、含羞むやうにほんのりと、顔を赧らめた。

『ほんたうよ。見ちがへるやうに、美しくなつたわ。』

『そんなこと……』
『どうでもいいと言ふの？　いゝえ、さうぢやないわ。』
『だつて。』
『もつと近く來て……もつと能く顏が見えるやうに、わたしの傍に寄つて……大丈夫、肺病なんか、傳染りはしないから。わたしに觸らして……手を握らせて……』
『わたし、姉さんの病氣なんか、ちつとも怖いとは思ひませんわ。』
『でも、用心しないとね。——あゝ、何んて軟らかな手！　あんたの身體には、健康と、青春の力強い生命とが、漲ぎつてるのね。』
『…………』
絹子は無言のまゝ、姉の手の中に、自分の手を任せてゐた。
『斯うして手を握つたゞけでも、それがハツキリと分るわ。若さと、力強さと、美しさとが！　いつまでも〳〵丈夫で、生きてゐてね。人間は、たとへどんな境遇でも、生きて行くといふことが勝利なのよ！　死んでは駄目！　わたしのやうに死ぬことは、敗北なの！　若くて、健康で、生きて行くといふことは、そのことだけで、立派な、美しいことだわ！』
マユミは、どうかして氣を落着けるやうにと、自分でも一生懸命に努力しながら、話してゐる中に、だん〳〵興奮して來るのを、どうすることも出來なかつた。二つの瞳は、いよ〳〵炎のやうに輝き、顏は、ます〳〵眞赤になつて、呼吸が苦しくなり、烈しく咳き込んで來た。
『姉さん、そんなに興奮なすつてはイケませんわ。もつと、落着いて下さらなくちや……』
絹子は、びつくりして、姉に取られてゐた手を振り放すと、自分の方に向いて、横になつてゐる姉の背中を、やさしく撫でてやつた。
自分の手を握られた時に、痩せこけたマユミの手が、かさかさに乾いて、既に冷たくなつてゐることが感じられたが、今、背中を撫でて見ると、ピヂヤマの下に、背筋が、骨と皮ばかりになつて、痛々しく尖つてゐることが感じられた。
絹子は、人間がこんなになつて、まだ生きてゐられるといふことが、不思議な氣がした。はつきりした意識があつて、話したり、聞いたり出來るといふことが、恐ろしいやうに感じられた。
『いいのよ〳〵、そんなことをしてくれなくたつて……わたしは、直ぐに落着くから。』
マユミは、背中を撫でてゐる絹子の手を、拂ひのけようとし

たが、既にそれだけの力がなかつた。

『あんまり、興奮しない方が、いいよ。』と、傍から陽一郎も注意した。

『どつちにしても、今となつては、同じことだわ。』

『そんな、棄鉢なことを考へるのは、好くないね。』

『あゝ、わたし、あなたにお禮を言ふのを、忘れてゐたわ。』

『何んのお禮だね？』

『わたしが、我儘なことをお願ひしたのに、斯うして直ぐに、妹を連れて來て下すつて、有難う。』

『なに、そんなことなら、何んでもなかつたよ。』

『直ぐ分つた？』

『あゝ。直ぐに分つたさ。』

『絹ちやん。』

マユミは、妹に呼びかけた。

『え。』

絹子は、マユミに向ひ合つて、椅子に腰かけてゐた。

『お父つさんや、兄さんは、どうしてゐるの？』

『…………』

絹子は、答へることが出來ないで、俯垂れてしまつた。

『相變らず、お前一人に、いろんな苦勞をかけてゐるんだらう？』

『そんなことはないけども。』

『いいわ、隱さなくたつて。わたしには、ちやんと分つてゐるんだから。』

『まあ。』

『あんたは溫和しいから、どんな目に逢はされてるか知れないと思ふと、わたし、胸が痛くなつて來ることが、何度あつたか知れないの。』

『姉さん、わたしのことなら、大丈夫ですわ。そんなに心配して下さらなくたつて、ほんたうに大丈夫ですの。』

『大丈夫なことがあるものか！　わたしには、よく分つてゐるわ。』

『お父さんや兄さんだつて、鬼ぢやないんですもの。』

絹子は、淋しく微笑した。

『姿は鬼でなくたつて、心は鬼も同じことだわ。』

『姉さん。もうそんなことをおつしやるのは、止してね。』

『どうして？』

『だつて。』

『わたし、あんたのことを思ふから言ふのよ。』

『でも、いくら言つたつて、どうすることも出來ないわ。』

『なぜ?』

マユミの二つの瞳が、鋭く輝いて、絹子の顏の上にそゝがれた。

『父なり、兄なりですもの。どうすることも出來ないわ。』

絹子は、力なく言つて、かすかに溜息を吐いた。

『ぢや、絹ちやんは、一生犧牲になるつもりなの?』

『…………』

絹子は、俯垂れたまゝ、答へることが出來なかつた。

『わたしのやうに、逃げ出してしまふと、いいんだわ。』

『まあ!』

絹子は、呆れたやうに眼を見張つて、姉の顏を見詰めた。

『尤も、折角、逃げ出したつて、わたしと同じやうに、こんな風になつて――肺病になつて、野たれ死にしてしまふんぢや、仕方がないけれども。』

マユミは、瞳をキラ〲と輝かして、顏を歪めて笑つた。瘦せて小さくなつた顏が歪み、瞳が病的に、燃えるやうに輝いてゐるのが、氣味が惡いと同時に、痛々しく感じられた。

『どうして姉さんは、そんなヤケなことばつかり、おつしやるのでせう。』と、絹子は悲しさうに言つた。

『いいわ、もう意地の惡いことなんか、言はないから。』

『…………』

『堪忍してね。』

いつの間にか、マユミの眼には、一ぱい涙が溜つてゐた。

『あら、そんなに、謝つたりなんかなさると、わたし、どうしていいか、分らないぢやありませんか。』

絹子は、心から當惑した。姉の絕望、神經の興奮、どうすることも出來ない悲痛な氣持ち――そのために、意地惡くなつたり、誰かに突つかゝらずにはゐられないやうに、焦り〲して來る感情は、絹子にも能く分つたけれども、どう言つたらいいのか、どうしたら慰めることが出來るのか、分らなかつた。憖ひ同情したり、慰めるやうなことを言つたりすれば、瀕死の病人は、餘計に心を苛立てたり、感情をたかぶらせたりするに違ひないのだ。

――どうしていいか分らないだけに、絹子は、一層痛ましくもあれば、姉の身が、悲痛でもあつた。

『もういいのよ、わたしのことは、そんなに心配しなくても。』

マユミは、心から後悔したやうな色を浮べて、涙に潤んだ瞳に、柔順な色を湛へて、氣の毒さうに言つた。

『姉さん、どんなことをおつしやつたつて、わたし、何んとも思つちやゐませんわ。』と、絹子は素直な氣持ちで、沁み〲し

た愛情を籠めて言つた。

『わたし、少し疲れたの。』

マユミは、につと微笑して、子供のやうに邪氣なく言つた。

『少し、やすむといいね。』

と、陽一郎が傍から、兄のやうな優しさで言つた。

『えゝ。』

マユミは、微笑ん

だやうな瞳で、陽一郎と妹とを、さも〳〵懐かしさうに見比べながら、かすかに頷いた。

『ほんたうに、少しおやすみにならないとイケませんわ。』

絹子は、姉が少しやすめば、この苛ら苛らした神經も、少しは落着くだらうと思つた。

『あんた、ゐてくれる？』

『わたし？』

『わたしが、眠つてゐる間に、歸つたりしちやイヤよ。』

『あら、わたしそんなことをして、歸るものですか。』

絹子は、むきになつて打ち消した。

『さう。ぢや、いつまでも、ここにゐてくれる？』

『えゝ。』

『でも、歸らなくちやならないぢやないの？』

『どうして？』

『だつて、うちで、心配してゐやしないかしら。』

『わたしが、一日歸らなくた

つて、二日歸らなくたつて、そんな心配なんかしてくれる者は、一人もゐやしないわ。』と、絹子は淋しさうに笑つた。
『さうね、あのお父つさんと、兄さんのことだから。』
　マユミの瞳にも、ふと、さびしさうな影が浮んだ。
『でも、そんなことは、わたし、どうだつていいの。』
『さうね。いくら何んと思つたつて、仕方のないことだから。』
『わたし、こゝに附いてゐますから、姉さんは、おやすみになるといいわ。』
『わたしが、眼をさますまでゐてね。』と、マユミは子供のやうに、念を押した。
　彼女の眼は、さも〳〵疲れたといふやうに、半ば閉ぢられて、その聲も、次第に懶さうになつて來た。
『えゝ。』
　絹子は、頷いて見せた。
『まだ、話があるの……わたし、どうしても話して置かなければならないことがあるの……』
『だから、それは後で、伺ふわ。』
『そのことを話すまでは……歸つてはイヤよ。』
『歸りませんわ。』
『高濱さんもね。』
『僕も、こゝにゐるから、安心して、眠るといい。』
　陽一郎は、力強く約束してやつた。
『有難う……二人とも……どうぞ……』
　マユミは、瞼を閉ぢたまゝ、夢うつゝのやうな聲で言つたが、そのまゝ、やがて穩かな寢息に變つてゐた。
『いい工合に眠つた。』
　陽一郎は、絹子と眼を見交して、かすかに呟くと、息をひそませるやうにして、微笑した。
　それから、そつと椅子から立ち上ると、足音を盗むやうにして、窓際に寄つて行つた。
　窓の外の夜空には、夜更けの淡い月が、ぽつかりと浮んでゐた。

死の後に見る

疲れたのか、安心したのか、マユミはすや〳〵と、二時間近くも、穩かな寢息を立てゝゐた。
　こんなに平和で、氣持ちのいい眠りを、たとへ一時間でも眠つたことは、近頃のマユミにはないことだつた。
『まあ、ほんとに能くお眠りになつて……』

部屋に入つて來た看護婦は、そつとベッドに寄つて行つて呟くと、額や、痩せて尖つた鼻の頭などに滲んだ汗を、ガーゼで拭いてやつた。

看護婦は、やすませたけれども、陽一郎と絹子と、二人は起きてゐた。しんとした病室に、二人だけ起きてゐても、別に話すべきこともなかつた。

どこかの洗面所で、水を使ふ音や、氷を缺く音が、時々、かすかに聞えた。看護婦か、附添ひの人々が歩くのだらう。廊下に懶さうなスリッパの音が、時偶、ばたり〳〵と聞える。そのほかは、マユミの靜かな寢息が聞えてゐる以外、しんとしてゐた。

絹子は、陽一郎が姉に取つて、どういふ關係だか分らないので、何んと言つて口を利いたらいいか、分らなかつた。歸つてくれてもいいといふわけにも行かないし、やすんでくれとも言へなかつた。

でも、どういふ關係にもせよ、誰からも捨てられ、誰からも顧みられない姉を、こんなに親切にしてくれるかと思ふと、絹子は、陽一郎に對して、深い感謝を捧げずにはゐられなかつた……

『あゝ、二人とも、こゝにゐて下すつたのね。』

二時間くらゐは、眠つたゞらうと思はれる頃、マユミは自然に、ぽつかりと眼を開いた。

安らかに、快く眠つたせゐだらう。眠る前までの苛立たしさや、險惡さは消え失せて、マユミは穩かな眼色をし、平和な表情を浮べてゐた。――すつかり、人相が變つてしまつたやうな、印象を與へられた。

『お眼ざめになつて？』

絹子は、微笑みながら言つた。慾目かも知れないけれども、この工合だと、若しか元氣を囘復するのではないかと思はれた。

『いい心持ちに、眠つたわ。』と、マユミはにこ〳〵した。

『ほんたうに、いい心持ちさうに、眠つてゐらしたわ。』

『こんないい心持ちに眠つたこと、近頃にないことなの。』

『好かつたわ。』

『氣分が、さつぱりしたわ。』

『元氣を出して……早くよくなつてね。』

『えゝ。』

マユミは、何か考へ深さうな眼ざしをして、かすかに頷いた。

『好かつたな、能く眠られて。』と、陽一郎もベッドの傍に寄つて、にこ〳〵してマユミの顏を覗いた。

『わたしね、お願ひがあるの。』

マユミは、穩かな微笑を含んだ眼で、さも〳〵懷かしさうに、しげ〳〵と陽一郎の顏を仰ぎながら、甘えるやうに言つた。
『何んでも、言つてごらん。』
『絹ちやんにもお願ひがあるの。だから、お二人で聞いて頂きたいの。』
マユミは、穩かな表情をしてゐるけれども、その眼にも、顏にも、次第に必死の色が現はれて來た。
『え〻。』
絹子は、姉が改まつて、二人にお願ひがあるなどといふのは、一體、どんなことだらうと思つて、ちよつと不安な氣がしたけれども、頷いて見せた。
『その前にね、わたし、絹ちやんに、聞きたいことがあるの。』
『どうぞ。』
『本當のことを、返事してくれなくちやイヤ。』
『それは、もちろん、本當のことを言ひますわ。』
『約束してね！』
『え〻。』
絹子は、強く頷いて見せた。
『絹ちやんは、今、思つてゐる人があるの？』
『えつ。』
絹子は、姉の意外な問ひに、眼を見張つて、息を呑んだ。
『愛してゐる人のことを、わたし聞いてゐるのよ。』
『わたし……そんな人なんか……』
絹子は口籠つて、はつきり言へなかつた。
『愛してゐる人なんか、ゐないのね？』と、マユミは一生懸命に、念を押した。
『え〻。』
『戀愛したことがあるの？』
『ないわ。』
絹子は、だん〳〵勇氣を回復して、死んで行く姉のために、何もかも正直に答へることにした。
『ぢや、結婚の約束した人なんか、ゐないのね。』
『え〻。』
『絹ちやんは、處女だわね？』
『え〻。』
絹子は、極りが惡くて、顏が眞赤になつたけれども、でも、はつきり頷いた。
『ぢや、高濱さんと二人で、結婚して貰ひたいの。』
『えつ。』
『わたしのお願ひなの。高濱さんは、わたしが、この世の中で見

つけた、たつた一人の、立派な、頼もしい方なの。わたし、自分が生きてゐられゝば、そして清淨な身體なら、もちろん自分で結婚するのだけれども……わたしが高濱さんを知つた時には、わたしは、どうすることも出來ない身體なんだもの。だから、わたし、絹ちやんにお願ひするの。あんた、高濱さんと結婚してね。わたしに代つて、わたしと同じやうに、誠と純情とを捧げて、どうぞ高濱さんのために、立派な妻になつて上げてね。』

『だつて……』

絹子は、どう言つて答へたらいいか、途方に暮れてしまつた。

突飛と言つたらいいか、向ふ見ずと言つたらいいか、あまり出しぬけに、結婚の話なんか持ち出されても、直ぐには答へることが出來なかつた。

殊に、姉は、陽一郎に對して、どれだけの理解があり、どれだけの愛情があるか分らないけれども、絹子は、今夜で、やうやく二度會つたばかりで、まだ沁み〴〵とは、口を利いたこともない。どういふ人間かといふことも分らないし、また、愛情などといふ氣持ちを感じてもゐない。

それを、突然、結婚しろと言はれても、承知していいのか、斷る方が本當なのか、分らなかつた。

『イヤなの？』

マユミは、眼を輝かして、聲を險しくした。

『いゝえ。』

絹子は、かすかに答へて、頭を掉つた。

『ぢや、結婚してくれる？』

『でも、餘り突然なんですもの。』

『いくら突然だつて、わたしは、絹ちやんの幸福といふことを、ちやんと考へてゐるのだから、安心して、わたしの言ふことを、承知したらいいのよ。』

『それから、高濱さんだつて、どう思つてゐらつしやるか知れないし。』

『ぢや、高濱さんが、結婚するとおつしやれば、あなたは結婚するのね？』と、マユミは必死に追求した。

『えゝ。』

絹子は、かすかに頷いたが、恥かしさのために、高濱の方を、見ることも出來なかつた。

『高濱さんは、大丈夫よ。』

と、マユミは情熱に輝く炎のやうな瞳を、陽一郎にそゝいで、

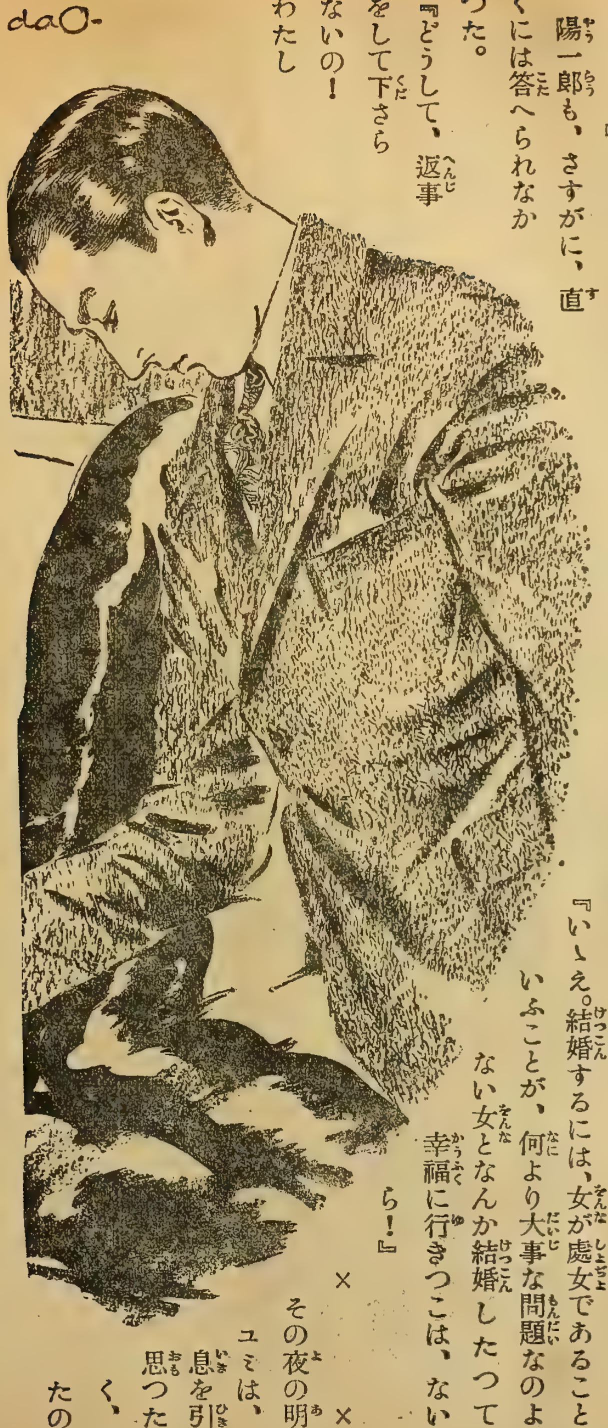
『高濱さん、わたし、あなたを愛してゐるの！　だから、わたしの代りに、絹子と結婚して下さるわね。妹は、それは〳〵素直で、純潔なのよ。妹を愛してやつてね！　どうぞ、あなたの力で、妹を幸福にしてやつてね！』

　さう言つてマユミは、切なさうに呼吸を喘がせたが、その時、痩せた小さな彼女の身體は、一團の赤熱した炎のやうに、眩しく感じられた。

『………』

　陽一郎も、さすがに、直ぐには答へられなかつた。

『どうして、返事をして下さらないの！　わたしのお願ひを、まさか、あなたが聞いて下さらない筈はないでせう。』と、マユミは詰るやうに言つた。



『それは、承知しないことはないが。』

『さう！　結婚して下さるのね！』

『あゝ、結婚するよ。』

『妹は純潔な處女なの。』

『處女とか、純潔とか、そんなことは僕に取つて、大した問題ではないが。』

『いゝえ。結婚するには、女が處女であること、純潔といふことが、何より大事な問題なのよ。さうでない女となんか結婚したつて、決して幸福に行きつこはないのですから！』

×　×

　その夜の明け方、マユミは、たうとう息を引取つた。思つたよりも早く、臨終が來たのである。

マユミは、今にも息を引き取らうとする時、自分の兩方の手を、陽一郎と、絹子とに、しつかと握つて貰つた。

『わたしは、仕合せだわ……何んて平和で、安らかなんでせう……』

と、苦しさうな息遣ひをしながらも、

マユミは、割りにハッキりした聲で呟いた。

『わたしの身體を通して、あなた方の手は、今、しつかりと繋がつてゐるのよ！　いつまでも〳〵離れずに、幸福に暮らしてね！　わたしは死んでも、それを見てゐるわ。ぢつと見てゐるわ……』

それが、マユミの臨終の言葉だつた。

暁近く、窓の外は、次第に明るみが射して來て、通り雨だらう。はら〳〵と、廂や羽目を打つ音が聞えた。（つゞく）

西洋講談

愛の復讐

天狗太郎

嶺田弘畫

襲つて勝利

結果如何にと案じてをりましたる雉子彥滿都彥の一行、三度目に出してやりました三鐵坊主が引返してまゐりませぬ。さてこそ今度はいよ〳〵龍九郎の在所を嗅附けたに違ひない。大いに力を得まして、

「急げ〳〵！」

と、しきりと馬を乘りすゝめて來ますと、とある深い谷の松林の中に殘つてゐた新しい蹄の跡。敵間近にありと見てとり、更に斥候を放

つて捜索をいたさせますると、果せるかなその奥にある二軒の小舍、中に龍九郎一行が潜んでゐるらしいとの報告でございます。

そこで一同は馬を停めて策戰協議に移る。雉子彥はずいとみんなを見渡して、

「伯父上には、まづ龍九郎を生捕り下されい。倉平、汝はかまはず擔床を目掛けてすゝめ。よいか。決して他に目をくれてはならぬぞ。家來共はそれ〴〵從者に立向ふやう！」

その龍九郎一行の中には、阿能人といふ獨逸きつての豪勇無比な武士が加はつてゐることがわかつてをります。雉子彥自身はそれと一騎討をしようといふ譯。手筈を整へて再び馬に跨り、肅々と枚を啣んでやつてまゐりますると、報告どほり二軒の小舍がある。前に多數の從者に圍まれて休息してゐる二人の武士。一人はいはずと知れた讐敵龍九郎。間諜に入込んだ三鐵坊主も、何喰ぬ顏で主人の劍を磨いでをります。

「進めッ！」

頃合やよし矣。命令一下。こちらの一行は、忽ち疾風のやうに砂塵を捲いて突込んでまゐりました。

「やッ、敵襲！」

素破！ 敵もさるもの。不意討に驚きはしたものゝ、直に立上る。手筈どほりに龍九郎を目ざした滿都彥、老いたりと雖も腕は筋金入り。猶豫もくれず相手に摑みかゝり、いとも鮮かにその場に蹴倒します。

中に一人、阿能人は流石に有名な武士。にんまり笑つて雉子彥を見やり、

「來るか、小童。組まう！」

「應！」

最初から劍を交へばこそ。二人はいきなりがッきり取組んで、上になり下になりはげしい揉合をはじめました。

この間に、味方の家來共は、敵の從者を棍棒で撲倒して一人殘らず縛取る。暢氣なのは三鐵坊主、わざと縛られておいて、さも吃驚した顏附きでしきりに喚立てゝをります。

『えいツ！』
『何をツ、うぬ！』
金石相打つところ火花發す。見る眼も凄いのは雉子彦と阿能人との格鬪。生木の枝から液を絞出すほどの力を持つた雉子彦ではありまするが、相手はもつと大力。おまけに大兵肥滿。まるで熊とでも取組んでゐるやう。勇奮一番、隙を覘つて地に投附けようとすると、さはさせじとしつかり抱附いて來た阿能人。力に任せて緊附けるので肋骨がミリ／＼と音を立てる。鎧でも着てゐなければそのまゝ折れるかと思はれるのを必死に耐へる苦しさ。見る／＼顏が蒼褪め、眼が血走つてまゐります。
『やツ！』
これでは負けだ。半ばは棄鉢。掛聲諸共强引に打つたる腰車。

業は利いたが、小兵の悲しさ。ダツとばかり一緒に倒れる。してやつたりとすぐ樣のしかゝつて來る阿能人、その場に雉子彦を抑込んでしまひました。
あはや雉子彦の生命は風前の燈火。と見た滿都彦、捕虜にした龍九郎を家來に渡しておいて、野猫の如く走つて來て阿能人の頸をぐさと短刀で刺す。悲鳴をあげて引繰返るのを下から撥返して、首尾よく繩をかけます。
これで味方は大勝利ですが、雉子彦の顏色は浮かない。地上に坐つたまゝはげしく息を吐いてゐます。滿都彦は心配して、
『雉子彦、如何いたした。どこか怪我でもしたのか？』
『いや、怪我はいたしませぬ。したが、一騎討にこの不覺をとりましたことが一生の恥辱でござる！』
なぞと殘念がつてゐるところへ、倉平が例の女巡禮の首の根ツ子を摑んで小舍の中から出て來ました。一眼見た雉子彦、忽ち飛上つて、
『菊耶姫！　菊耶姫！』
名を呼びながら小舍の中に驅込んで行つてみますると、

案の定です。薄暗い片隅になつかしいその姿がある。雉子彦は、我を忘れて犇とばかりに抱緊めました。

　すると意外、菊耶姫は雉子彦を見忘れたのでございませうか。おそろしげに身を悶えて叫聲を立てます。

『あれい、放して、堪忍して……!』

哀れな美姫

『何、放せと？　これ菊耶姫、拙者ぢや。雉子彦ぢや。そなたにはこの約婚の夫がわからぬのか？』

　やさしく問へども訊けども空蟬の、菊耶姫はたゞ〳〵捕へられた小鳥のやうに逃れよう逃れようと焦るばかり。」

長い間の恐怖に祟られて哀れにも發狂し、戀しい人の面影さへも見分けることが出來なくなつてゐるのでございます。

あまりのことに茫然自失、雉子彦は、窶れてはゐてもまだまだ美しい菊耶姫の顔を暫くじツと胸も張裂けんばかりの氣持で眺めてをりましたが、かうなつたのも原因を訊せば龍九郎の暴虐からです。矢庭に表へ走出し、

『おのれツ!』

一刀の下に眞二つと、劍を拔いていきなり龍九郎に斬つてかかります。滿都彦は、あなやとその前に立塞がりまして、

『こ、これ、雉子彦、血迷うたか、いやさ、亂心いたしたか?』

『血迷ひもしませう。亂心もいたしませう。伯父上、この手を、手をお放し下されい!』

『放さぬ。めつたに放しはせぬ。腹の立つのも無理からぬが、復讐は後で出來る。龍九郎は生捕りにした上、虞蘭土伯に差上げるのぢやといふたでないか。手向ひ出來ぬ捕虜は殺さぬが武士の作法、よもや忘れはすまいがの?』

いはれてみれば道理至極。やう〳〵雉子彦も自分を取返して、

『はい、伯父上、よツくわかり申した!』

しほ〳〵と引返して行く小舍の中。再び菊耶姫の傍に坐つて、たゞ〳〵深い哀憐の涙に暮れてゐます。

こちらは滿都彦、やがて倉平に命じて生捕りにした阿能人を曳出させます。滿都彦を見ると、その巨漢は肩を怒らせて、

『やア〳〵貴殿は、何故武士の名譽も思はず、森に出沒して追剝を業とせらるゝか?』

と詰問する。阿能人には雉子彦達が一行を襲つた理由がわからずにゐるのでございます。泥棒呼りをされて滿都彦の顔色もさツと變りましたが、そこは老巧、すぐに自分を抑へまして、

『何、拙者が追剝? 然らば貴殿は惡魔の味方ぢやわ。同行せられたる龍九郎、武士の風上におけぬ殘忍非道な男。貴殿も一緒になりてあれなる少女を虐ぐるを傍觀されたでござらうがの。いやさ、自ら手を下して拷問されたでござらうがの?』

『神かけて左樣なことはござらぬわ。したが、あの少女は……?』

『あれこそ須秘豹城主虞蘭土伯の愛娘、拙者が甥雉子彦の約婚の妻。これだけ申せばわれ〳〵が貴殿を襲うた理由もおわかりでござらうがの?』

『や、や、あの娘が虞蘭土伯の……?』

『左樣。狂人になつたのも、原因を訊せば十字軍の武士が奸謀

をもつて誘惑したためでござるぞ！』

いはれて阿能人、はじめて樣子を知つて呆れることやゝ暫し。やがて形を改めて、

『左樣でござつたか。しかし拙者は武士の名譽にかけて、誓つて少女を見たことも、まつた拷問に手を貸したこともござらぬ！』

と、眞心を籠めての申開き。龍九郎と同腹とすれば重い刑罰を加へるつもりでゐた滿都彥も、最早疑へない。捕虜として須秘豹城へ同行のことを申渡し、武士らしく寛大に、武器こそ取上げましたが、手の縛めだけは解いてやります。阿能人は非常に悅びまして、與へられた食物を鱈腹食べ、まもなく雷のやうな鼾聲を立てゝ眠つてしまひました。

この阿能人の縛めを解いてやつたことこそ一生の誤り。その晩はそのまゝ小舍に一泊、翌朝になつてみますると、いつも菊耶姬の傍に附切つてゐました例の女巡禮の姿が見えない。素敏い奴よと舌を卷きましたが、相手は女。たかをくゝつて碌に追跡もせず、滿都彥は倉平を呼出しまして、

『さて、倉平、その方は一足さきに龍九郎を護送して須秘豹城へ歸るやう。』

といふのは、いきなり菊耶姬を連れて歸つたのでは、八木枝孃の立場が困る。前もつてそれと敎へて須秘豹城を立去らせておかうといふ滿都彥の苦衷。倉平も察して眼を潤ませましたが、ともかくも龍九郎を馬に縛附けて一足さきに出發いたしました。

殘つた滿都彥が小舍の中に引返してみますると、雉子彥は昨日から菊耶姬に附切り。夜も一睡もせずにさま〴〵看病してをりますが、どうもまだ正氣に返らない。蒼褪めた顏で見上げて、

『伯父上、このやうな森の中より、空氣の燥いた、太陽の暖い土地へ連れて行けば、菊耶姬も全快するかも知れ申さぬ。すぐに發足せうではござらぬか？』

といふ。今は八木枝孃のことも忘れるほどに菊耶姬に深い同情を感じだした滿都彥、快く頷きまして、

『左樣、然らばさういたさう。』

家來達に仕度を命ずるために小舍を一歩踏出した一刹那、滿都彥は、まるで大地に釘附けにされたやうにその場に立竦みました。

逆に捕はる

驚いたも道理。こはそも如何に。戸外はさながら厚い壁を築

いたやう。思ひがけない敵の歩兵の一隊、槍と斧とでぐるりと小舍を取圍んでをります。

『むゝ、獨逸人ッ！』

　さッと飛退き身構へする。聲に驅出して來た雉子彦、同じく驚愕はいたしましたものゝ、流石は武士。きつとなつて劍の柄を握緊めました。

　この時、つか〱と敵の中からすゝみ出ました二人の武士。一人は捕虜にしてゐた阿能人、から〱と打笑つて、

『ほゝウ、そこに立ちたまふは雉子彦殿に伯父の滿都彦殿。因果は廻る小車とやら。捕虜であつた拙者が、今度は貴公達を捕虜にいたすのぢや！』

『う、うぬ！』

『待て、雉子彦！』

『かくなつたる上は、刀の目釘のつゞく限り……いざ、伯父上！』

『待てと申すに。逸まるな！』

　かうなつたのも、原因はといへば阿能人を寛大に取扱つたため。宵のうちにひそかに例の女巡禮を逃し、附近に屯してゐる味方に急を告げさせたので、さてこそこの救援となつたのでございます。

　その阿能人が、捕虜になつてゐた時とは打つて變つて、傲慢無禮な態度、言葉。面憎しとばかり、雉子彦は齒噛みをして飛びかゝらうといたしまするのを——滿都彦も決して臆病な武士ではない。よしや雲霞のやうに押寄せて來た大軍であらうとも、味方は雉子彦一人で澤山、必ず蹴散して血路を開いてみせるだけの勇氣は持つてをりまするが、如何にせん、油斷大敵、二人は今は素肌です。甲冑も附けてゐなければ、馬にも乘つてゐない。見れば家來共は、もう槍を伏せて降伏してをります。このまゝでは戰ひたくも戰へないので、しきりに逸立つ雉子彦を制します。

　と見た阿能人、いよ〱圖に乘り、

『どうぢや、滿都彦殿、早く誓ひの言葉を述べらるゝがよいではないか。さなくば繩目の恥辱を與へ申すぞ！』

『むゝ、最早詮方ないわ！』

　この上反抗してみたところで無駄なことがわかつてをります。滿都彦は、口惜しさを抑へて劍をそれへ投出しまして、

『然らば捕虜になり申さう。したが、こゝに困つたことがござる。貴殿もご承知のあの菊耶姫、このまゝ死なせでもしては神の怒りがおそろしい。故郷へ歸れるやうお許しが願ひたい！』

『素より拙者は、婦人に對しては非道はいたさぬ。二人のうち

一人がこゝに殘り、一人が連れて歸られたらよからう。ぢやが、定めた時に、定めた場所に立戻つてもらはねばなりませぬぞ！』

『ならば二人とも、武士の名譽と弓矢にかけて、きつと立戻ると誓へば如何でござるかの？』

なか〳〵押の強い懸引です。滿都彦は、自分も雉子彦も、ともかくもこの場をなんとか無事に切拔け、一度は揃つて須秘豹城へ歸つて行かうといふ考へなのですが――さう旨くは問屋が卸さない。阿能人としてみますと、積土軍と戰つて敗北し、おまけに自分までが捕虜になつたほどです。手を空しく歸つて行つたのでは重い罰に處せられる。否が應でも一人は引張つて歸らうとして、頑として肯入れません。たうとうこの談判は不調に終りました。

しかしやはり一人だけは釋放して菊耶姫を送屆けさせてくれる譯。滿都彦はきつと決心してすゝみ出まして、

『さらば拙者が殘らう。甥雉子彦の方を放還して頂きたい！』

といふ。雉子彦は慌しく遮りまして、

『あいや、伯父上には、何卒菊耶姫を送屆けて下されい。拙者が殘り申す！』

『いや、拙者が殘る！』

『伯父上には老先き長からぬお身の上、萬一のことがありましては……！』

『さればこそ拙者が殘るといふのぢや。そちはまだ前途のある身。老いたるものが若きものに代るのは當然ぢやわ！』

讓合つて果しがない。といふのは、二人は積土軍に味方して十字軍を破つてをります。獨逸盟社の統領の前に連出されると即座に生命を取られるかもわからないからでございます。

『ふム、そちはそれほどまでにこのわしを思うてくれるか？』

『伯父上、思はないでなんといたしませう！』

『よし〳〵、それならば猶更わしが殘る。ソレ、な、あの菊耶姫を本復させることが出來るのもそち一人ぢや。行け。行け！』

こゝらは東西變らない人情の美しさでございます。雉子彦も、菊耶姫のことをいひ出されると心が後へ殘る。といつて、たゞ一人の伯父を見棄てられもせず……言葉以上に當惑もいたしましたが、いつまで讓合つてゐても仕方ないこと。一先づこの場は伯父に任せておいて、至急適當な善後策を講ずべきだと考直し、いはれるがまゝに仕度のために小舍の中に取つて返しました。

その間に、滿都彦は、阿能人と賠償金の額について相談す

る。捕虜を釋放する場合には賠償金を取るのが當時の習慣だからでございます。と、暫く經つと、やがて雉子彦が菊耶姫を兩手に抱へて小舍から出てまゐりまして、

『さらば、伯父上、暫くの……！』

『むゝ、道中隨分と氣を着けての。たゞ、一言、途中で倉平に追附くやも計られぬが、憤怒に任せて龍九郎を手にかけることは相ならぬぞ。そちの名のみか、このわしの名譽も穢すことぢや。わかつたか？』

『その儀はご安堵下されい。伯父上を取返すまでは、虞蘭土伯にも手を下すことを猶豫して頂く所存！』

『よし、よし。然らば無事での……！』

折惡しく、菊耶姫はどうやら發熱でもしたらしい樣子。窶れてはゐても神々しいまでに美しい顏を雉子彥の肩に靠せ、苦しげな息遣ひで――雉子彥の方も伯父を殘して行くことゝいひ、一方ならぬ心痛です。足許も定らぬやうな恰好に、菊耶姫を胸に、一僕を從へてよろめき〳〵發足いたしました。

流石にその光景には獨逸武士も感動し、深く同情いたしました。が、それにもまして感慨無量なのは伯父滿都彥。雉子彥の後姿をじツと見送つてをりましたが、だん〳〵森陰に隱れて見えなくなりまするとやがて自分に獨語ちました――。

『まア、よいわ。わしはどうならうと、雉子彥さへ無事であれば滿足ぢや！』

讐敵の護送

お話變りまして、こちらは龍九郎を護送して一足さきに須秘豹城をさして出發いたしました倉平。滿都彥が心配したほどもなく、雉子彥はたうとう最後まで追着きませんでした。

それも道理。若くて元氣のいゝ倉平は、龍九郎が老年で脾弱なことなぞにはちツとも頓着ない。遮二無二、夜も晝も乘りつづけて行つたからでございます。

急ぐ譯は、八木枝孃を菊耶姫に會はせたくないからです。その八木枝孃は倉平にとつてはもとの主人、どんなに深く雉子彥を愛してゐるかよく知つてをりますだけに、菊耶姫を取返したといふことを報告するのはほんとに辛い役目。八ツ當りがついことに龍九郎の上に及びまして、

『やい、老耄、何をぐづ〳〵してゐるのか。急げツ！』

因果應報とはいへ、哀れなのは龍九郎でございます。めちやくちやに馬をひツ叩く。殊に耐へられなかつたのは、森の中にゐる蚋や蚊の群。煙のやうに襲ひかゝつてまゐりまするが、手も足も縛られてゐるので思ふやうに追拂ふことが出來ない。途

中ですつかり弱つてしまひました。

はじめ龍九郎は、食物を絶つて餓死し、一刻も早くこの恥辱から遁れようといたしましたが、それと悟つた倉平、容赦はない、食事の度毎に短刀を取出して、

『こら、狼、おれはなんとしても貴様を須秘豹城の殿様の前まで生かして連れて行かねばならないのだ。食はぬとなれば口をこじ開けて押込むがそれでもよい

か！』
なぞと脅す。そんなことをされたのではいよいよ武士の恥辱。龍九郎も止むなく口にいたします。
　晝は太陽が目標。夜は星をたより。道があらうがあるまいが、森を突切り、谷を越え、瀧の音を下に聞いて崖を渡り、廣い沼を迂回してやうやく人里に出る。狼の皮を着た杣夫達がこの二人を訝しげに見送つて、
『獨逸人！　獨逸人！』
　叫びながら後を追つて來て弓を射る。危く矢が耳許を掠めて飛去つたのも一度や二度ではありませんでした。
　それよりもつとうるさかつたのはだん／＼須秘豹城が近附いてから。十字軍の武士が捕虜になつて連れて行かれると聞くと、あたりの町家や百姓家からわツと見物人が驅出して來て、
『旦那、お願えだ、捕虜を下され。みんなで叩殺してくれるだ！』
『うんにや、おいらは決鬪するだア。先祖代々、薪を切つて來た腕前だ！』
　なんていふ天晴な腕自慢のものまでが現はれて來る始末。それを怒つたり、叱つたり、苦心慘憺、さま／＼面倒を切抜けてやつと無事に須秘豹城へ到着いたしました。
　この倉平の歸着いたしましたのが、恰度、日も黄昏時。それと知つて、第一に八木枝孃が驅出して來て迎へます。
『お孃さま……！』
　胸が痞へものもいへない。倉平は、暫くは言葉もなくその前に跪く。八木枝孃は知つてか知らずか、手をとつて扶起して――捕虜の龍九郎は一先づ城内の獄屋へ。八木枝孃は倉平を人なき一室へ連れてまゐりまして、
『して／＼、早く知らせておくれ。みなさまはご無事かえ？』
　いふ聲も枯野に亙る風、わな／＼とはげしく戰いてをります。倉平も同じく聲を顫はせて、
『はい、若殿さまは素よりのこと、老殿さまにもなんのお變りもござりませぬ！』
　といふのは、雉子彥達が逆襲を受けて却つて阿能人のために捕虜にされたのは倉平が出發した後のこと。滿都彥が身代りになつて殘つたなぞといふことはすこしも知らないからでございます。
『それは何より重疊ですこと。左樣なればあのお方のお在所も……？』
　いはずと知れたことです。あのお方とは菊耶姫のことであります。
『は、はい……。』
『何、わかつたといひやるのかえ？』

『左様でござりまする。菊耶姫さまには、ともかくも手前どもが救取りました！』

『あの、菊耶姫さまを、そなた、そなた達が救ひ……あゝ、神様、神様、有難うございます……！』

口にはいへど、さツと變る顔色。八木枝孃は、深い絶望に忽ち眞青になつてしまひました。

全くのところ、倉平のその一言は、八木枝孃の年來の希望を木葉微塵に打碎いたのでございます。最早なんとしても雉子彦と添遂げられるといふ見込みはなくなつたのであります。

哀れなのは八木枝孃、暫くはわな〱と木の葉のやう震へてをりましたが、もと〱なか〱雄々しい性質。まもなく健氣に自分を取返しまして、菊耶姫の身の上についていろ〱訊きます。それと見て倉平もいくらか落着き、知れる限りのことを語つて、

『左様な譯で、いづれ遠からずこのお城へお歸りのことゝ存じまする。それ故、手前、一足さきに、急いでお知らせにまゐりました！』

病氣と聞けば、そこは女性。八木枝孃も悲しみを忘れて心から菊耶姫に同情して涙を流しましたが、

『それはまア〱なんにしてもよいことを知らせておくれであつた。虞蘭土さまにもさだめしお悦びでございませう。申上げてまゐります。』

力はなけれど急ぎ足。八木枝孃は虞蘭土伯の部屋へと赴きます。

復讐が來た

こゝは城中の一室、虞蘭土伯の居間でございます。八木枝孃が靜かにはひつてまゐりました。

當時はまだガラスだの、紙だのいふものはございませんので、窓には鞣皮が張つてありまして、室内はいつも薄暗い。適當な場所に据ゑられた安樂椅子には——痛ましや、往昔は須秘豹城の猛者とおそれられましたる虞蘭土伯、人もこれほどまでに變るものかと思はれるほどの有樣。顔色は飽迄蒼白く、胸まで垂れた灰色の髯と殆んど同じ色。抉取られた兩眼を空に瞶つたまゝ、じツと身動きもせずに腰掛けてゐる姿は、どう見てもこの世に生きてゐるものとは受取れない。まるで骸骨でございます。

そればかりではない。須秘豹城へ歸つて來てからの虞蘭土伯は、姿ばかりか心までも非常に變りました。朝夕、祈禱懺悔に身を委ね、食物といへばパンと水。そのほかのものは何一つ口にせず、着物も鋤野城以來。例の、侮辱のために團兵太から與

へられ、一夜を城門の外に立明した時の布嚢を纏ひ、綟れ〳〵になつた粗末な帯を結んでゐます。傍の卓子の上には、十字架と、水と、パンが一片。これが昨今の心境を語るすべて。仕へるものは殆んど八木枝孃一人きり――不思議に、虞蘭土伯には、はじめから八木枝孃がひどく氣に入つてをる。やさしく仕へるばかりではございません。兩眼を失ひ、舌を抜取られてをりますので、自分の氣持を他人に傳へることはなか〳〵容易でない。それを、八木枝孃は、女心の深い注意から、ち

よツとした身振り、唇のわづかな動き方でもすぐに讀取ることが出來る唯一の人。今では虞蘭士伯の傍に附いてゐなくてはならない介添となつてゐるのであります。

さて、部屋にはひつてまゐりました八木枝孃、虞蘭士伯の足許に跪き、殘つてゐる左手をとつて唇にそツと當てます。不意に菊耶姬が救はれたなぞといつては悅びのあまり身體に障りでも起つてはならないといふ綿密な心遣ひ。何事かあるといふ暗示を與へておいてから、

『虞蘭士さま、お悅び遊ばして下さりませ。たゞ今、倉平がよいお報知を持つてまゐりました……！』

發狂してゐるといふことだけは別。龍九郎が生捕りになつて連れて來られたことも一緒に、靜かに聞いた概略を傳へました。

眼は見えず、ものはいへなくとも、耳には不自由はない。虞蘭士伯は、頷きながら聞いてをりましたが――語り終つてもまるで何事もなかつたやう。何等感情を現はすやうな身振りも、表情もいたしません。たゞ、傍にあつた十字架を取上げて神に祈禱を捧げはじめました。

その氣持もどうやらわかる。妨げをしてはならない。八木枝孃はそつと立上つて、跫音を忍ばせて部屋を出て行きましたが――その晩のことです。家臣の一人が見まはりに來て部屋を覗いてみますると、虞蘭士伯は、まだ床に跪いたまゝ熱心に祈禱をつゞけてをります。

いや、夜中だけではない、たうとう夜明けまででした。虞蘭士伯は、血の汗が滴るかと思はれるほどに祈りつゞけました。

何を虞蘭士伯はそんなに祈つたのでせう？ 菊耶姬が無事に取返されたことの神の恩寵を？ 捕虜は手にある。復讐の時が來たことの感謝を？ それは誰にもわからないことでございます。

翌朝になつて、八木枝孃が居間にまゐりますと、虞蘭士伯は、身振りでもつて、倉平と捕虜に會ひたいといふ意味を告げます。そこですぐにその手配がされました。

當時にあつては、復讐は素より當然のことです。まして龍九郎が虞蘭士伯に加へた殘忍極る所業に至つては、倶に天を戴かざるほどのもの。どれほど重い刑罰を下しても決してひどいといふ筈はない。それを見るべく、老臣をはじめ家來一同、城中にゐるものは一人殘らず集つて、ずらりと部屋の左右に居流れ、固唾を呑んで控へます。

その日はなんとなく險しい天候で、部屋の中は殊更陰鬱でございました。まもなく倉平が御前に伺候し、つゞいて捕虜の龍

九郎、兩手を胸のところに縛られたまゝ、牢屋から曳出されて連れて來られました。

變つた虞蘭土伯の姿を見ると、倉平ははじめから胸一杯。それよりもつと驚いたのは龍九郎。死人のやうに蒼褪めてゐなわな震へてをります。

やがて老臣から兩人が御前に出たことを言上いたしまするど、虞蘭土伯は倉平を傍近く招いて、菊耶姫が救はれた當時の顚末を詳しく聞きたいといふ。そこで、ぽつ〳〵語りだしました。

無論、八木枝孃同樣、虞蘭土伯を落膽させてはならないと考へて發狂のことは申しませんが、憎くて耐らない龍九郎を極刑に處してもらひたいため。倉平は、はげしい虐待に菊耶姫がどんなに見る影もなく瘦衰へてしまつたかといふことを、特に力を籠めて述べます。

この話の間に、どうやら暴風雨がだん〳〵近附いて來た氣配。部屋の中は一層暗くなつてまゐりました。

ところが、虞蘭土伯はと見れば、まるで化石してしまつたかのやう。眠つてゐるのかと思はれるほどに身動き一つしない。たゞ、菊耶姫がどんなに慘酷なめにあはされたかを聞いた時だけ、穴のやうに窪んだ眼の跡から、熱い淚がほろ〳〵と流れて來ただけでございます。

實際、虞蘭土伯の感情はもう死んでゐるのかも知れない。その中で、わづかに、菊耶姫に對する愛だけが殘つてゐるくらゐにしか考へられないほどであります。

不意に、ごろ〳〵と聞えて來だした遠雷の音。同時に、稻妻がくわツと室内を明るくしました。

居並ぶ家臣達は、咳一つするものもない。重苦しい沈默の中から、遠雷はだん〳〵と近附き、電光が斷間なく皮張りの窓を鳴しだします。

おゝ、なんといふ凄い光景！ 龍九郎にとつては死の神が迎へに來たと思はれたのでせう。時々窓を見上げてぶる〳〵と身震ひいたします。

『閣下、閣下を苦しめました狼が御前にをりまする。如何に處置してよいか、御意のほどをお示し下されい！』

やがてのこと、老臣の一人が促立てるやうにいふ。虞蘭土伯は頷いて、龍九郎を身近に連れて來るやう手眞似で命ずる。すぐと近侍の二人がその肩先きを攫んで前に押出しました。

さながらありし日の記憶を辿つてその面影を思ひ出さうとするやう。虞蘭土伯は暫く龍九郎の顏を撫でまはしてをりましたが、手はだん〳〵と下つて胸に、縛めた繩に觸れました。

はツとした様子に、虞蘭土伯は一時龍九郎から手を退けましたが、今度は何物かを求めるやうな身振り。早くも家臣の一人が察しまして、

『短刀を！』

聲に應じて一人が捧げます。虞蘭土伯は、それを拔放ちて握緊めました。

神の如くに

復讐の時が來ました。愛妻を繩で撲殺し、娘を誘拐して虐待を加へ、あまつさへ自分の兩眼を抉取り、舌を拔き、片腕を斷落した讐敵の一人、龍九郎は捕はれとなつて眼の前にをります。虞蘭土伯は、殘りの左手で短刀を逆手に持ちました。

おゝ、その短刀こそは、虞蘭土伯が幾多の戰場で澤山の人の止めを刺し、有名武勇をあげさせた業物。血を見ねば鞘に收まらないほどのものでございます。

はためく雷。電は閃く。この復讐は、素より正當ではございますが——骸骨と化した虞蘭土伯が、探り手で今に龍九郎を刺殺すかと思ふと、氣は强いやうでも流石は女。傍で眺めてゐる八木枝孃は凄く、怖く、ぞツと背筋に惡寒を感じて思はず眼を瞑りました。

息詰る一瞬間、家臣のものがその尖先きを瞶めた中から、虞蘭土伯の短刀を握緊めた手の甲が龍九郎の身體を探る。ぶすり、一閃、捕虜を縛つた繩はばらりと切落されました。

あツとこれに驚く一同。いふまでもない。虞蘭土伯は、怨み重なるその讐敵を宥してやらうとするのであります。なんといふ氣高い心でありませう！　とはいへあまりに寛大すぎ、洪量すぎる。第一に倉平が不平の呻聲を發し、家臣達もがや／＼騷ぎだしました。

たゞ、その中で一人、僧官だけは非常に悅びました。兩眼から淚を流して、

『閣下、閣下に於かせられましては、この捕虜に自由を與へるご所存でござりまするか？』

然りの意です。虞蘭土伯は大きく頷きます。

憤怒と不平の呻聲は、ます／＼高くなつて來ました。すると、僧官は、その人々に向ひ、聲をはげまして、

『おの／＼方、なんと聞かれしか。我殿の御心は、古の聖者の御心、いやさ神の御心でござるぞ。いづれも跪き召されい！』

流れる淚を拭ひも敢へず、僧官はその場に跪く。祈禱の聲が口を衝いて高く發しられだしました。

『天に在る我等が父よ、願くば御名を崇めさせたまへ、御國を

監らせたまへ、御心の天になるが如く、地にもならせたまへ……!』

奇しき力に動かされて、一同も胸に十字を描いてその場に跪きます。祈禱はつゞきます――。

『我等に罪を犯す者を我が宥す如く、我等の罪も宥したまへ!』

この句に至つて、みんなは思はず頭をあげました。見ると、虞蘭土伯の顔は、天の光に照されたかのやうに燦いてをりました。

それから間もなく、土砂降りの豪雨が横薙に叩附ける中を、馬の足搔きを早めて走つて行く二人の武士。一人は龍九郎。一人は須秘豹城の老臣。老臣は、住民共が龍九郎の釋放されたことを知り憤怒のあまり途中で撲殺しもしかねまじき氣配。萬一のことがあつたのでは、折角の虞蘭土伯の慈悲忍辱も水の泡。それを慮つて國境まで送屆けてやらうとするのでございます。

相變らずつゞいてゐる電光と雷のはためき。二人は、默々と

乘りすゝむことやゝ暫時。

その間にも、老臣は、これほどまで殘忍酷虐な龍九郎を無事安全に故郷へ歸してやることが如何にも殘念で耐らない。國境まで送屆ければ自分の役目は濟む。その上で決鬪を挑んで殺してしまはうかと幾度も考へましたが――やはりそれでは虞蘭士伯の氣持に叛くことになります。怒つた牛のやうに荒い鼻息をしながらやうやく自分を抑へて國境に着く。そこで馬を駐めて、

『さア、こゝが國境でござるわ。後悔が貴殿を殺さずばほかに害を加へるものもない。いづれへなりと勝手に行かれよ！』

積る欝憤をその一言、後悔したら死ねといはんばかりでございます。老臣は吐出すやうにいひ棄てゝ、もと來た道へととつて返しました。

取殘された龍九郎。さながら喪心したやう。自分で自分がわからない。詮方なく動きだしたものゝ、夢に夢見てゐる心地。單騎、ぼんやりと林をさしてすゝんで行きます。

いつのまにか日がとつぷりと暮れました。どう考へても變です。偶然に一命が助かつたといふことが、なんだか天と地とが引繰返つたやうな氣持。考へ〳〵すゝんで行くうち、突然、暴風雨の中から聲があつて、

『進め、進め！』

ぎよツとして振返ると、こはそも、闇の中にくツきりと立ちたる騎馬の骸骨。死の姿でございます。龍九郎はおそる〳〵、

『呼んだのは貴殿か？』

訊くに頷く骸骨。こつ〳〵骨を鳴らして近附いてまゐりまして、

『さうぢや、わしぢや。さ、ぐづ〳〵せずに進んだ、進んだ！』

反抗することの出來ない大きい力でございました。龍九郎はこの死の姿に導かれて林の中へとはひつて行きました。

悲しき旅路

翌日は、打つて變つて、昨日の暴風雨なぞは知らぬ顏の上天氣。一天拭つたやうに晴渡り、陽の光が強くて眼を害ふかと思はれるばかりでございます。

恰度、その前日に龍九郎が通つて行つたと同じ路です。三人の旅人が、須秘豹城へ背を向けて行つてをります。二人は若い女で、一人は男――女は八木枝孃とその侍女。男は倉平でありました。

といふ譯は、いふまでもなく倉平が持つて歸つた報知から、菊耶姫が救はれて、不日雉子彦に連れて歸られるといふのに、須秘豹城にぐづ〳〵とゞまつてゐることは出來ない。虞蘭士伯にも默つて立去つて行くのであります。

『もう〳〵わたしの一生はおしまひになりました。これから後は、たゞ〳〵神さまのお慈悲に縋つて生きて行きませう！』

さして行く手は、滿都彦の非常に懇意な僧正のゐるある僧院。そこに暫く厄介になるつもりで――やさしい女らしい希望も今や朝霧のやうに消えて、八木枝孃の胸は深い悲しみで一杯。傍から侍女が慰め顏に、

『お孃さま、左樣なことをお考へ遊ばしてはなりませぬ。あなたさまほどのお方には、どのやうなよい婿君でも降るほどに……。』

『いえ〳〵、わたしはもう……！』

戀しい人は世の中で雉子彦たゞ一人。今までひそかに胸に描いてゐたやうな樂しい生活はもう絶對に來ないのだと考へますると、そんな慰めがなんの役に立たう。つい思はず涙含まれて來ます。

同時に、長く須秘豹城にとゞまつてゐたことを顧みて、ひどく羞しくなりました。我知らず頬を赧くして、

『それにしても、雉子彦さまには、きつとわたしを蓮葉な女とお蔑みなさるに違ひない。下心あつて長くゐたのではないけれど……その罰でせうぞえ、今、こんな悲しい思ひをするのは！』

たうとう耐らなくなりました。八木枝孃は馬上のまゝ、兩手で顏を覆つて泣きだしました。

この時、顏色を變へて前方から走つて來た一人の獵人、一行に出會ふとかなたを指ざして、

『旦、旦那、大變でござりまするだ。たしかに獨逸方と見える武士が、首、首を縊つて死んどりまする！』

『何、獨逸の武士が首を縊つて？』

面妖な、と考へましたる倉平。獵人と一緒に馬を飛ばしてまゐりましたが、まもなく晴々した顏をして引返して來まして、

『因果覿面、お孃さま、昨日釋放された龍九郎が、あの林にて首を縊つてをりまするぞ。立派な鞍が盗まれずに殘つてゐるのを見まするとて正しく自殺。これで胸の痞もずんと下りました！』

その通り、事實、龍九郎が縊死して果てゝゐたのでございます。とはいへ、まさか棄てゝもおけない。倉平は、附近の獵人達を呼集め、死骸を埋葬してやつた後、また三人は馬をすゝめます。

暫くたつと、眞先きに乘りすゝんでゐた倉平が馬を駐めました。後なる八木枝孃を振返つて、

『お孃さま、下世話に縊死者の繩を拾うて來ると運が向くと申しまするが、あなたさまのお幸福は神さまからお授りになるもの。縁起でもない繩なぞ拾ふに及ばぬと思ひ、わざと棄てゝまゐりました！』

といふ。これも女主人を思ふ心から。八木枝孃は默つて脣を噛んでをりましたが、やがてのことほツと深い溜息を吐き、しほ〳〵と獨語のやうにいひました――。

『昔はわたしも幸福ぢやつた。けれど、今はもう、神さまのお力でも、とても幸福は望めませぬ！』

悲戀の旅はどこまでもつゞきます。果してこの八木枝孃の幸福は、神さまでも望めないものなのでございませうか？　一方、今は悲しい生ける屍の菊耶姫を抱いて歸城を急ぎつゝある雉子彦の身の上に、途中何等の變化も起らずにしまふものでせうか。また、讐敵龍九郎は自滅いたしましたが、滿都彦は獨逸方の捕虜となつてをります。それを救出さねばならない仕事もある。事件はまだ〳〵これから複雑となつてまゐります。（つゞく）

在米十七年の新人大江専一先生の大熱著出版！

ルーズベルト

一九三三年の世界史に巨大なる足跡を印する者は誰ぞ！

見よ！　世界の富強、北米合衆國に君臨する新大統領ルーズベルトの全貌！

全米一億三千萬大衆の輿望を負うて第三十二代白亞館の主人として世界の舞臺に登場した巨人、彼フランクリン・ルーズベルトは果して如何なる人物ぞ！　キツと結んだ唇、高く秀でた鼻、烱々として人を射る眼光、而して滿面に溢る〻彼の温容。

聞け！　全米に嘖々たる新大統領の名聲！

著者の熱筆は縱横に躍つて人間ルーズベルトの風丰眼前に躍如！　眞に感激全卷に溢る

名家に生れ何不自由なき少年時代を送つた彼は、人一倍の孝行者であり且又運動好きで、あらゆるスポーツを好んだが、特に海に強き母の血を享けた彼は、一しほ海上に興味を持ち、つひに三十一歳の若年にして海軍次官の榮位に昇り、歐洲大戰勃發するや直ちに有史以來未曾有の大海軍擴張案を確立して、僅々三ケ年にして八十餘萬噸の新艦大建造を完成し、次いで米國がかの永

き傳統、モンロー主義を打破してこの大戰に參加するや、或は陸兵の輸送に、或は北海の大封鎖に、屡〻決然たる戰略を敢行して世界の耳目を聳動せしめ、或は醜惡その極に達したる政界に身を投じては決死その廓清を圖り、或は病を得ては難病と闘ひ、つひに之を克服して今日あるを得るに至る等々、飽く迄所信を斷行する彼の勇氣、彼の努力、彼の決斷、而して高潔なる彼の人格！

か丶つて今各國の難關たる軍縮問題、戰債問題、極東問題は剛毅果敢、勇猛不屈の彼に依つて如何に展開されるであらうか、彼こそは眞に全人類に赫奕たる一箇謎の大惑星である

フランクリン・ルーズベルト

曩に大統領ウィルソン失脚して以來、合衆國は正に共和黨の天下であつた。爾來十有二年、民主黨の氣勢擧がらず僅かに在野黨として空しく苦難の星霜を經過した、然るに突如フランクリン・ルーズベルト民主黨を代表して立候補を宣言するや、國民の支援は翕然として起り、彼は破竹の勢をもつて反對黨の牙城に肉迫し、遂に壓倒的の大多數を以て當選の榮冠をかち得るに至つた。これこそ全世界を驚倒させた近來の大快事、彼の明朗なる顔貌と堂々として力強き演説は如何に聽衆を熱狂せしめたか！　彼が不自由な脚を運んでその巨軀を壇上に現はす時、滿場は彼の爲めに悉く魅せられる。彼の武器は實に正義であり、熱であり、意氣である。

著者は年齒二十一歳にして渡米し紐育日米新聞記者として活躍すること十七年、米國事情に最も精通せる少壯熱誠の士である。不幸病に犯され最近歸朝、今ルーズベルトと同じ病患を得て、彼と同憂の心を熱筆に托し、決然以て本書を成す。言々句々之皆熱と血！　加ふるに獨特の麗筆は一讀何人をも讃嘆せしめずには措かない。

讀め！而して知れ！　これこそ興味と感激の絶頂をゆく日本全國民必讀の大偉人傳！

四六判美本・定價一圓三十錢（送料十二錢）　全國書店にあります　東京本郷　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

斯の如き人に『どりこの』を推奨す

……春先きは病氣が起り易い、誰方も心得べき豫防法治療法の實際……

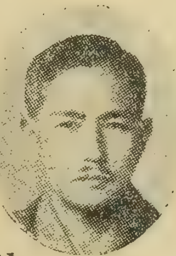
結核症の人に合理的滋養料

呼吸器科 醫學博士 鴻上慶治郎

結核の豫後は財布の重さに正比例すると云はれて居りますが之はつまり良い空氣、良い食物の必要である事を云つたものでありませう。斯の樣な良い榮養は結核豫後上、好結果を齎すものでありますが、兎角人工榮養は榮養價と吸收と味との三つの點を揃へて持つて居りませんので、此の點が在來の人工榮養品の缺點であると申してよいのであります。

然るに『どりこの』はたやすく吸收される性狀を有つて居り、且つ榮養價が大で加ふるに『アミノ酸』を含んで居りますため、味が極めてよく、まことに三點完備の何人にも適する滋養料と申してもよく、結核症の人にはこの上ない滋養料としてお奬め致し度いものです。

最も理想的な小兒の榮養料



小兒科 醫學博士 中島正德

小兒の腸の病氣がなほりかけた時とか、肺炎のなほりかけた時などには、その優れたる成分から見ても、子供に好まれるその美味な點から云つても『どりこの』が最も理想的な滋養料であると思ひます。

又『どりこの』は、病氣の子供によいばかりでなく、健康な子供に日常お八つ代りに與へるのも大變よろしく、保健上の意味に於ても確かに好い結果を齎らすものと思ひます。

それから赤ん坊の離乳期ですが、兎角失敗のあり勝ちな大切な時期だけに、わけても食事時間を嚴守する必要がありますが、さういふ時にも、食事の合間に空腹を訴へて泣くやうな場合、この『どりこの』

を與へることは、非常に結構な事であると存じます。

胃腸の弱い人に絶好！

醫學博士　佐多芳久

胃腸の弱い人には普通流動食が良いとされて居ますが、たとへ流動食でも、やはり胃腸でよく消化しなければ吸收されませんから滋養にはなりません。流動食をとるやうな人は乳飲兒か、又は重症で胃腸の消化作用の衰へてゐる人ですから、消化の必要のないものでなければなりません。ところが『どりこの』は少しも消化する必要もなく飲めば直ぐ滋養分として吸收される成分から出來て居りますから、極めて調法及び合理的な流動性の滋養品であります。故に胃腸の弱い人には絶好です。

發育不良や虛弱體質者に

醫學博士　柳澤信賢

『どりこの』の中に含まれてゐる『アミノ酸』の中のグルタミン酸は、身體組織の原基であるばかりでなく、味も非常に良く、且つ胃液の分泌を盛んにし、從つて消化を助ける特性は、發育不良兒、虛弱者の滋強榮養料として、『どりこの』は殆んど理想に近いものであります。

殊に産前産後の婦人に

醫學博士　小倉清太郎

『どりこの』は甘くて、香りもよいので、子供に大變喜ばれる事と思ひます。發明者が權威のある人ですし、含有してゐる成分も非常に良いものですから、産前産後の御婦人、殊に産前の婦人には、これを飲むのが一番良いと思ひます。

× × × × ×

高速度滋養料『どりこの』は……

『どりこの』は人間の身體に是非とも必要な葡萄糖、果糖と、消化作用を助け、又其れ自身強力な消化力を持つてゐるアミノ酸を主成分としてゐる滋養飲料で、飲めば胃腸の働きを要せずに、直ちに消化吸收されますので、胃腸病の人、消化不良の人、食慾不振の人によく、又結核患者、神經衰弱、熱性諸病、貧血症の人には絶好の榮養料であり其他病後、産前産後、老衰者、腺病質、發育不良、乳離れ母乳少なき小兒等には是非ともお奨めしたいものであります。尚御家庭でお茶がはりに召上つても非常に結構なものです。『どりこの』は全國有名藥店、食料品店で販賣して居ります。

長篇小説

地に爪跡を殘すもの

佐々木邦
細木原青起畫

秀才の豐彦君と堅固君は、智惠子さんといふ美女を中に暗鬪を續けたが、それが軈て土地の新聞に取沙汰される迄になつたので、智惠子さんのお父さんは、爾來兩者と我娘との交際を斷つ事にし、最後の思出に三人を連れて一日の淸遊に出かけた。所が其途中、一頭の奔馬が突如智惠子さんに襲ひ掛るといふ椿事が起きたが、此時身を以て彼女を庇ひ、爲に全身に甚い怪我を負うたのは、兩秀才の何れでもなくて、却て彼等が、新聞の取沙汰の揑造者として憎む小泉君だつた。二人は複雜な衝動を感じつゝ、此傷つける友の病床を見舞うた。（前號迄の梗概）

三人三樣

豐彦君と堅固君は小泉君を町立病院に見舞ふのが差當りの日課になつた。小泉君は毎日待つてゐた。初めの中は話が柄になく

精神的だつた。命拾ひをしたのだから、感銘が深かつたのだらう。大死一番と覺悟を極めた瞬間、自分の過去と現在と未來が電光のやうに頭の中で閃いたとか、あのまゝ往生すれば人間苦を免れるんだが、矢つ張り罪障が深いのだらうとかと言つてゐた。

『腕を折つたのにも神意があるんぢやなからうか？ 今までは腕の人間だつたが、今度は頭の人間に生れ更れといふ教訓かも知れない。』と悟りを開いた。しかしグン／＼快方に向つてから食慾が出て來たらしい。無暗に食ふこと飲むことを話し始めた。

『おい。この分なら、もう小橋饅頭が食へるよ。』

『食ひたいかい？』

『當り前さ。カステラ責めだもの。君達初め皆カステラばかり持つて來る。』

『氣がつかなかつたね。』

『小橋饅頭を三つ四つ持つて來いよ。』

『お安い御用だ。』

と豐彥君が請合つた。小橋饅頭は實質をもつて鳴る一個五錢の大饅頭だ。

『おい。ビールはいつになつたら飲めるだらう？』

『今に飲めるよ。』

『飲ませてくれ。』

『容態次第だ。』

『何分頼むよ。』

『宜いとも。』

とこれは堅固君が引受けた。

小橋饅頭には間もなく有りついたが、病室でビールは穩かでない。しかし小泉君はいつもそれを催促する。

『おい、堅固君、この間の約束は何うしてくれるんだい？』

『何だつけな？』

『惡い癖だぞ、しらばつくれて。』

『忘れちやつたよ。』

『ビールを飲ませるといふ約束だつた。』

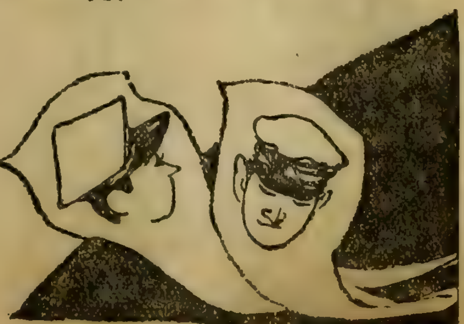
『うむ。しかし容態次第といふ條件がついてゐる。』

『容態が好いぜ。今朝院長さんが褒めてゐた。』

『しかし未だビールなんてところまで行かないよ。』

『いや、行つてゐる。』

『それぢや院長さんに訊いて見ようか？』



『訊いても本當のことは言はない。醫者つてものは用心一方だ。重くさへ言つて置けば直つた時自分の手柄になると思ふから、ビールなんか滋養があつても決して飲ませないよ。』

『滋養はないよ。』

『あるさ。元氣がつく。』

『怪我人が醉つ拂つて何うするんだい？』

『しかし君は確かに飲ませるといふ約束をしたぜ。』

『あれは氣休めだ。』

『ひどいよ。』

『もう少しの辛抱だ。』

『覺えてゐろ！』

『凄いな。』

『この恨みは決して忘れない。』

と無論冗談だつたが、飲みたいことは眞劍だつた。退屈するものだから、愚圖ばかり言ふ。

或日藤井先生が見舞ひに來た。先生は休暇中東京へ行つてゐて、歸つて來たばかりだつた。

『飛んだことだつたね。昨日佐藤君から聞いて驚いた。』

『有難うございます。』

『何んな具合だね？』

『右の腕が利きません。』

『ふうむ。』

『この通りです。』

と小泉君は腕を動かして見せた。利かないのではない。肩から上へ擧がらないのだ。尤も繃帶で吊つてある。

『しかし英雄的行動をやつて人の命を救つたんだから、光輝ある記念だと思へば宜い。』

『はあ。』

『痛むかね？』

『いや、もう。』

『堅固君と豐彦君から詳しく聞いたよ。豪い。無條件で敬服した。』

『しかしもうマスキユラー・クリスチヤンになれませんな。』

『なつてゐるんだよ、もう。斯ういふのがマスキユラー・クリスチヤンだ。』

『はゝあ。』

『心身共に健全だつたから、然るべき時に然るべき行動が出來たのさ。』

と藤井先生は懇切に慰めた。

『先生。』

『何だね?』

『僕はもう學校をやめます。』

『何うして?』

『腕がこれぢや一年志願をしても駄目です。苦しい勉強をして卒業する必要がなくなりました。』

『それは少し見當が違つてゐやしないかね。』

『然うでせうか?』

『學問は學問、兵役關係は兵役關係だから、兵隊に出られないからつて勉強をやめることはなからうと思ふ。』

『はあ。』

『續けてやるんだね。』

『しかし腕がこれぢやベース・ボールも出來ません。』

『樂みがないかね。』

『はあ。柔道も駄目です。好きなことが何も出來なくなつて、勉強ばかりしなければなりません。』

と小泉君は利害得失を考へた結果らしかつた。運動專門の男だから、腕が利かないと、事實、學校へ行く必要がなくなつてしまふ。

『まあ〳〵、もう少しのところだから、辛抱して卒業するんだね。』

『大丈夫でせうか?』

『今度は大丈夫だらう。』
『先生が引受けて下されば奮發してやつて見ます。』
『ハツハヽヽヽ。』
『先生、何うですか？』
『大丈夫だよ。先生が引受けて下さる。』
と豐彦君が先生に代つて答へた。
『先生だつて分つていらつしやる。もう決して心配は要らない。』
と堅固君も先生に責任を負はせた。
『まあ〳〵、無論及第出來る積りでやるさ。』
『何うぞ宜しく願ひます。』
『僕が引受けるからつて、勉強しなければ駄目だぜ。更生一番、大いにやるさ。』
と藤井先生も仕方がない。結局保障を與へた形になつてしまつた。
最初小泉君に感心した豐彦君は追々考へ方が變つて來た。
『君、小泉は矢つ張り小泉だね。』
とツク〴〵言つた。
『無論さ。君は買ひ被つてゐるんだよ。』
と堅固君は遠慮がない。
『快くなるに從つて、生返つて來る。』
『あれは矢つ張り頭を打つたんだよ。』
『何うして？』
『打ちどころが好かつたものだから、一時悧巧になつたんだ。見給へ。快くなるにつれて元の馬鹿に戻つて來る。』
『ひどいことを言ふね。』
『ハツハヽヽヽ。』
『實際昨今は悉皆元の小泉だ。見上げた男だと思つて敬意を表したら損をした。』
『僕達が英雄だと言つて褒めたものだから、奴さん、一時その氣になつたんだらう。』
『それもある。しかし大死一番だ。あの瞬間は確かに普段の小泉君以上になつてゐたんだ。あのまゝ死ねば確かに英雄だつたんだ。』
『生き延びたものだから、ダン〳〵箔が剝げて來たのかい？』
『何うも然うらしい。』
『褒めたり貶したりぢやないか？　君は何うも感心し過ぎるよ。』
『君よりも正直だからさ。』
『來たね。』
『ハツハヽヽヽ。』
『この間の仇討ちだらう？』
『この間つて？』
『あの日さ。小泉君が怪我をする直ぐ前さ。』
『うむ。』
『問題は何うなるんだらう？』
『知らん。』
『靑木さんの當分つてのはいつまでのことだか確めて置く必要があ

るぜ。』
『さあ。』
『智惠子さんの卒業までといふ意味か知ら?』
『その邊だらうね。しかしそんなことは何うでも宜い。』
『拔け駈けをする積りならね。』
『おい!』
『何だ?』
『いや。よさう。その通り直ぐ喧嘩腰だ。』
『何方が?』
『それだからよさうと言ふんだよ。』
『よさう〳〵。詰まらない。』
と二人は氣がついて差控へた。
青木さんも度々見舞ひに來た。これは義理がある。智惠子さんの爲めに小泉君が怪我をしたのを目に見てゐるから、氣の毒で溜まらない。青木さんと奧さんが代り〳〵にやつて來た。
『何うですかね? 腕は。』
と青木さんはその度に訊いた。
『相手が小泉さんだからね。青木の娘の爲めに息子が不具になつたと末代まで言ひ觸らされます。』
と豐彦君と堅固君に歎息を洩らした。
或日、智惠子さんも一緒に來た。小泉家からは妹の富子さんが詰めてゐた。豐彦君と堅固君も來てゐたから、病室が賑かになつた。
『小泉さん、本當に濟みませんでしたわね。』
と智惠子さんがお禮を述べた。
『何あに、構ひませんよ。ハツハヽヽ。』
と小泉君は寢臺の上に胡床をかいて、上元氣だつた。
『早く直つて下さい。』
『はい。』
『大丈夫?』
『もう後四五日です。』
『御血色も好うございますわね。』
『今ビールを飮んだところです。』
『まあ!』
『ビールですつて?』
と青木さんが聞き直した。
『ハツハヽヽ。』
『內證ですよ。』
と堅固君が言つた。
『亂暴だね。』
『飮ませなければ拔け出すと言つて、富子さんを苛めるんです。仕方がないから、僕が行つて買つて來ました。』
『何方も何方だな。』
『僕はもう明日から來ません。病人だと思つて下から出れば好い氣になつてゐる。』

『僕も御免だ。青木さん、僕は看護婦操縦の役を仰せつかつたんです。』

『そんなに憤るなよ。宜いぢやないか？』

と小泉君が宥めた。怪我人と見舞人の間に一悶着あつた後らしかつた。

『明日からは又お父さんに來て戴きますから。』

と富子さんは小泉君を睨んだ。

『大變な御病人ね。』

『困りますのよ。』

『先生に言ひつけて上げれば宜いぢやございませんか？』

と智惠子さんは富子さんと話し始めた。

『小泉さん、皆心配してゐるんですから、大切にしなければいけませんよ。』

と青木さんが諭した。

『はあ。』

『直れば幾らでも飲めるんですから。』

『もう直つたんですよ。』

『未だ〳〵輕はずみは出來ません。』

『醫者つてものは重く言つて置けば直つた時手柄になると思つて、ああしちやいけない斯うしちやいけないと勿體をつけるんです。』

『腕は何うですか？』

『このまゝ固まるんださうです。』

『困つたことですな。』

『何あに、構ひませんよ。』
『不自由でせう。』
『肩から上へ擧がらない丈けです。箸も使へるし、字も書けます。少しも差支ないんですけれど、肩の筋が詰まつたんださうです。』
『後から溫泉へ行つたら何うでせうか？』
『成程、これは占めた。』
『駄目ですよ。飲むことばかり考へてゐちや。』
『ハツハヽヽヽ。』
『私の方の小作にも矢つ張り怪我をして腰の立たなくなつたものがありましたが、溫泉で直りました。筋さへ伸びれば宜いんですから、決して諦めることはありません。』
『はあ。』
『初めから見ると、少しは快くなつてゐるんでせう？』
『いや、同じことです。』
『何の邊まで擧がりますか？』
『これつきりです。』
と小泉君は右腕を前へ突き出して顏を蹙めた。擧げる努力したら痛かつたのだ。

『困つたものですな。筋揉みに揉んで貰つたら何うでせう？』
『それもやつて貰ふ積りですが、學校へ行きますから、當分はこれで宜いんです。出來る人は手を擧げて！　僕は出來ないから、手を擧げる必要がないんです。』
『呑氣なことを言つてゐるんですね。』
『腹が立つても人を撲れないから、喧嘩が出來ません。精神修養になりますよ。』
『成程。』
『まだ／＼種々ありますよ。今更仕方がないですから、便利な方丈け考へることにしてゐます。』
『本當にお氣の毒ですなあ。』

と青木さんはもうそれ以上尋ねなかつた。

『そこが矢つ張り小泉君の豪いところだよ。』

と豐彥君が褒めた。

『何處が？』

『怪我をして便利なことはない筈だが、不便なことを考へたつて仕方がない。』

『うむ。それだからさ。』

『然う悟りを開くところが豪いと言ふんだ。』

『おい〳〵。褒めるなよ。又增長して我儘を言ひ出す。』

と堅固君は嚴しかつた。

小泉君は調子に乘つて、頻りに喋り出した。一杯機嫌もあつたらう。しかし冗談が追々に眞面目な述懷になつて來た。

『僕は斯うして每日寢て考へてゐる間に自分つてものが分つて來て、將來の方針が定つたよ。』

『何をやるんだい？』

と豐彥君が訊いた。

『人間には夫れ〳〵分つてものがある。僕の分は龍尾村か精々藤島で働く分だ。君達とは分が違ふ。』

『そんなことはないよ。』

『いや、君達は中央へ出て一旗揚げる分だ。二人とも屹度何か仕出來すよ。』

『さあ。』

『大いにやつてくれ。』

『やるにはやる積りだけれど。』

『分つてものは定つてゐるんだから仕方がない。僕はもう駄目だ。』

『妙に悲觀しちやつたね。』

『今度で悉皆分つた。』

『何うして？』

『秀才には生れたいものだと思ふよ。今度といふ今度はツク〴〵感じた。』

と小泉君は腕を組んで考へ込んだ。

『元氣を出せよ、おい。』

と堅固君が勵ました。

『うむ。』

『分なんてものがあるものか？　努力だよ、人間は。』

『いや、分は確かにある。』

『あると思つたら、その積りでウンと努力をすれば宜いんだよ。』

『それだから分のないものは辛い。分のある人間の倍努力しないと一人前になれない。』

『君、學校の成績ばかり分だと思つてゐると大間違だぜ。僕はこの間も、そのことを堅固君に話した。君には君の分がある。豪い天分がある。』

と豐彥君が言つた。

『何ういふ天分だい？』

『今度のことで分つてゐる。』

『怪我をしたからかい？』

『うむ。しかし怪我そのものぢやない。その精神だ。』

『立派なものですよ、小泉さん。』

と靑木さんが側から褒めた。

『皆が認めてゐる。マスキュラー先生だつてこの間來て感心してゐたぢやないか？』

と堅固君も慰めた。

富子さんとヒソ／＼話し續けてゐた智惠子さんはもう倦きたと見えて、

『豐彥さん、歸りません？』

と囁いた。

『さあ。』

『御一緒にね。』

『町へお寄りになるんぢやないですか？』

『いゝえ。この間の續きよ。その積りで來たんですわ。堅固さんも、ね。』

『はあ。』

『お父さん、未だ？』

『もうソロ／＼御無禮するかな？』

と靑木さんは白縮緬の兵兒帶から大きな銀時計を出して見た。

『靑木さん、秀才には生れたいものですよ。』

と小泉君が言つた。

『はあ？』

『僕はこれ丈けの怪我をして、漸く人間並みです。』

『何ういふ意味ですか？』

『僕は今まで智惠子さんから人間らしい言葉をかけて戴いたことがありません。』

『………』

『分のない人間は可哀さうなものです。』

『兄さん、兄さん。』

と富子さんが制した。

靑木さんは困り切つたやうだつた。

『小泉さん。』

『はあ。』

『そんなことを仰有らないで下さい。智惠子が惡かつたかも知れませんが、私はお氣の毒でお氣の毒で、お父さんのところへ每日のやうにお詫びに上つてゐるんです。』

『今のは冗談ですよ、靑木さん。』

『それなら宜いですけれど。』

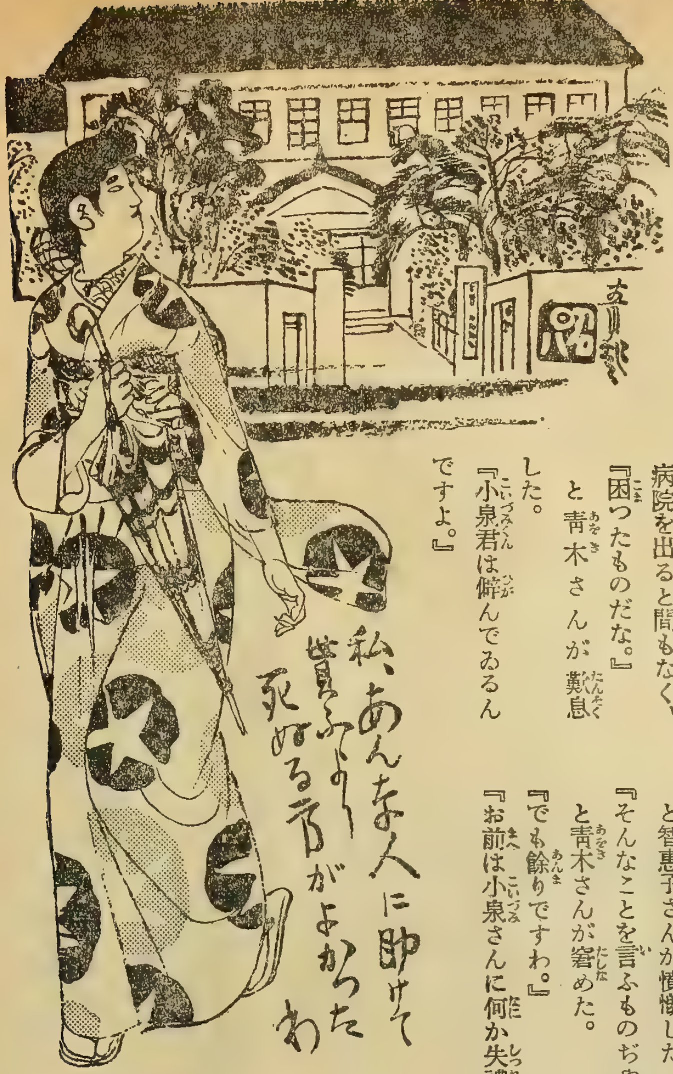
『濟みませんでした。』

『智惠子や、御挨拶を申上げな。』

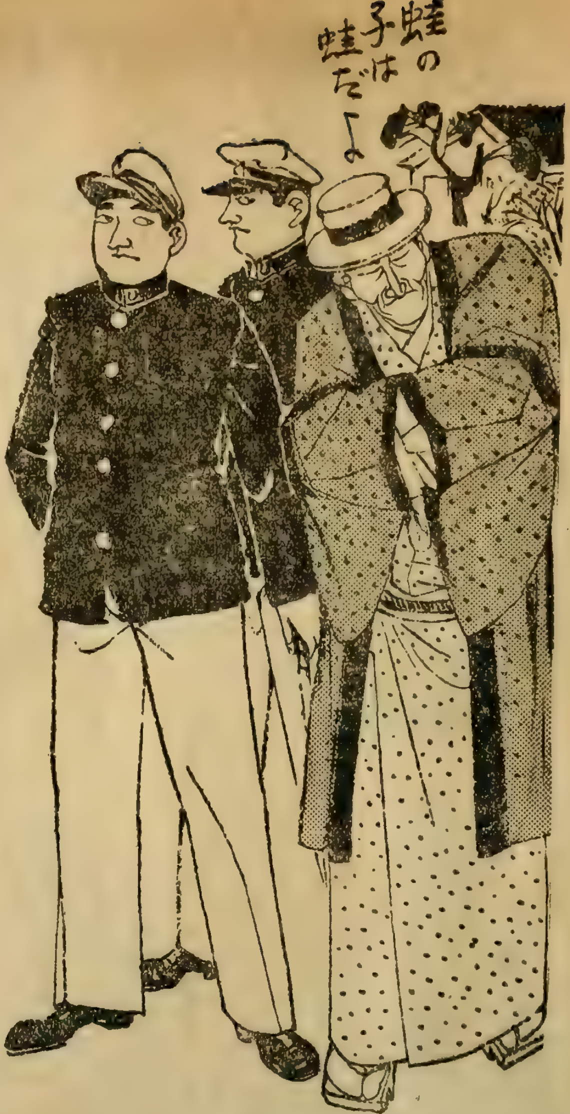
『小泉さん、私、助けて戴いた御恩は決して忘れませんよ。』

と智惠子さんがお辭儀をした。

『もう宜いですよ。』
『失禮致します。』
『それぢや私も。』
と青木さんが立ち上つた。豐彥君と堅固君も續いた。
『おい。又來てくれよ。』
と小泉君が呼んだ。



『よし〳〵。』
病院を出ると間もなく、
『困つたものだな。』
と青木さんが歎息した。
『小泉君は僻んでゐるんですよ。』
と堅固君が言つた。
『何うも料簡の分らない男だ。』
と豐彥君は首を傾げた。
『分つてゐるさ。』
『英雄的行動も押し賣りをしたんぢや値打がなくなつてしまふ。』
『矢つ張りあれ丈けの人間だ。蛙の子は蛙だよ。』
『私、あんな人に助けて貰ふよりも死ぬ方が宜かつたわ。』
と智惠子さんが憤慨した。
『そんなことを言ふものぢやないよ。』
と青木さんが窘めた。
『でも餘りですわ。』
『お前は小泉さんに何か失禮なことでも言つたのかい？』
『小泉さんこそ失禮よ。』
『何うして？』
『學校の行き歸りに私の側へ寄つて來るんですもの。』
『ふうむ。』
『交際して下さいつて。』
『それは宜しくないね。』
『私、煩いから、優等生でなければ口をきゝませんつて言つて上げましたの。』
『成程。』



『それを恨んでゐるんですわ。』
『しかし助けて貰つたんだから、恩を忘れちや濟まないよ。』
『お父さん、御恩は御恩ですけれど、私、今からお斷りして置きますよ。』
『何だね?』
『小泉さんは私を貰ひたいのよ、屹度。私の爲めに怪我をしたからなんて言つて來たら、何うなさるお積り?』
『無論斷るさ。』
『大丈夫ね?』
『恩と緣談は違ふ。』
『違つても、あゝいふ分らない人ですからね。私、その積りで、餘りお禮なんか申しませんの。宜いわね、その方が。』
と智惠子さんは豐彦君と堅固君の方へ向き直つた。二人は頷いた。固唾を呑んで聽いてゐたのだつた。
『そんな心配はしなくても宜いよ。』
『でも。』
『小泉さんとはお父さん同志反りが合はないから大丈夫だ。』
『私、小泉さんところの人、皆嫌ひですわ。村から憎まれてゐるんでせう?』
『そんなことはない。』
『いゝえ。評判ですわ。』
『それは一代であれ丈けの身上を起すくらゐの人だから、何うせ好くは言はれない。謂はゞ立志傳中の人物だ。』
と青木さんは婉曲に貶した。
『ハツヽヽヽ。』
と堅固君が笑ひ出した。
『何ですか?』
『僕はいつか豐彦君のところで土用乾しの時、小泉さんの詫證文を見

せて貰ひましたよ。』

『はゝあ。』

『大きな聲ぢや言はれませんが、昔、お宮のお賽錢をちよろまかしたんですつてね。』

『そんなこともあつたやうです。』

『僕達のお祖父さんに取つ捉まつたんです。幾ら金が出來たつて、あゝいふものが殘つてゐるんですから、大きな口はきかせません。』

『兎に角、拔け目のない人ですよ。』

『本當だつて僕のところだつて……』

『よせよ。詰まらない。』

と豐彦君が注意した。

『構はないよ。隨分恩を仇で返されてゐるんです。』

『それは皆知つてゐます。私も飛んだ人とかゝり合ひになつてしまつて、實は困つてゐるんです。』

『何かあるんですか？』

『今回の事件です。精一さんが智惠子

の身を蔽つて怪我をしたんですから、私はあの晩改めて家の方へ挨拶に行きました。相手が相手です。話がむづかしくなると困ると思つて、平あやまりにあやまりました。「御心配には及びませんよ。廻り合せと時の機みで、何方が上にならうが下にならうが仕方がないぢやありませんか？」と大變分り好いんです。私は小泉さんも村一番になつたから人格が出來上つたわいと思つて感心しました。』

『成程。』

『ところが後がいけません。』

『はゝあ。』

『時にいつかお願ひして置いたことは何うして下さいますかと來ました。さあ。考へたけれど分

りません。何でしたかと訊いて見たら、田地の交換です。忘れてゐましたが、實は去年何かの會の時、小泉さんが相談を持ちかけたんです。小泉さんは田川に可なり持つてゐるんです。私は松崎に丁度それくらゐあるんです。しかし小泉さんの田川田地は干損場ですから、年貢が思ふやうに入りません。それを君は田川で丁度好いから引き取つて、松崎の方を渡せと斯う言ふんです。』

『成程、考へてゐます。』

『尤もその折は歩をつけると言ひました。それを思ひ出して、一體幾ら歩をつけるんですかと訊いたら、「歩なんて、君、この際だ」と來ました。』

『はゝあ。』

『この際を利用してゐるんです。拔け目のない人ですよ。』

『さうして交換なさるんですか？』

『いや、眞平です。しかし催促しますよ。見舞ひにも來ないなんて言はれると困りますから、いつも歸りに寄るんです。「度々有難うございます。俺も伜が片輪になると、これから又一足掻き足搔かなければなりません。青木さん、そこをお察し下さいよ」と絡みつきます。』

『あれはスッポンといふ綽名がついてゐます。食ひついたら放しません。』

『權利も何もないのに斯うですから、成程、あの人に金を借りでもしたら、迚も助かるまいと思ひました。』

と青木さんは持て餘してゐるやうだつた。

『お父さん。』

と智惠子さんが呼びかけた。

『何だい？』

『私、もう小泉さんのお見舞ひになんか參りませんよ。』

『お前はもう宜い。一遍は行つて置かないと後から口がきけない。』

『お父さんは又いらつしやいますの?』

『それは仕方がない。』

『豐彦さん、あなたは?』

『さあ。もう三四日ですから、行つてやります。』

『富子さんが待つていらつしやいますからね。』

『そんなことはありません。』

『オホヽヽ。』

『何ですか?』

『私、御退屈でせうねつて訊いたら、富子さんは「いゝえ、豐彦さんと堅固さんが毎日來て下さいますから。」つて仰有いましたわ。御一緒にお歸りになるんですつてね?』

『この二三日丈けです。』

『結構ね。』

『………』

『堅固さん。』

『僕はもう行きません。』

『まあ。何故?』

『先刻斷りました。』

と堅固君は機敏だ。

折から先頃椿事のあつた地點へ差しかゝつた。

『こゝでしたね。』

と青木さんが言つた。

『こゝでした。』

と豐彦君が應じて、堅固君も周圍を見廻した。稍お冠を曲げたと思つた智惠子さんが、

『豐彦さんも堅固さんもこの間の續きにしませうよ。もう今日がお仕舞ひよ、乾度。』

と寄り添つた。

『お二人とももう間もなく東京へお出掛けですね。』

と青木さんも思ひ出した。

『はあ。』

『しつかりやつて下さいよ。』

『はあ。』

『この松原へ出世地藏を建立する日が早く來るやうにね。』

『さあ。出世なら堅固君でせう。』

『丁度そんなお話をしてゐたところでしたわね。あら〳〵、又馬力が來るわ。』

と智惠子さんは懲りてゐる。馬力が來た。

『怖いんですもの。』

『用心が好いんですね。』

『やあ。小泉さんが來る。』

と青木さんが見つけた。小泉君のお父さんだつた。間もなく行き會つた。

『これは〳〵。』

『今お見舞ひに行つて歸るところです。御元氣でしたよ。』
『皆さん、何うも有難う。』
と小泉さんは若い連中に輕く會釋して、靑木さんと立ち話を始めた。
三人は目くばせをして、先に歩き出した。
『もう當分お仕舞ひね。』
と智惠子さんは右と左へ公平に微笑を分つた。
『はあ。』
『夢ね、中の松原も。』
『はあ。』
『私、悲しいわ。これで當分お別れになるのが。』
『當分つて、いつまでですか？』
と堅固君が具體的のところを訊いた。
『當分は當分よ。』
『御卒業までですか？』
『さあ。お父さんのお心持、私には分りませんけれど。』
『あなたのお心持では？』
『長い當分かも知れませんわ。』
『はゝあ。』
『あなた方が龍の首を取つてお出になるまで。』
『本當ですか？』
『オホヽヽ。』
『嘘でせう？』
『オホヽヽ。』
と智惠子さんは焦らすのが樂みだ。
『本當ですか？　智惠子さん。』
と豐彥君も促した。
『お約束ぢやありませんか？』
『しかし龍の首はこゝ三年や四年ぢや取れません。』
『駄目？』
『はあ。僕達は卒業しなければ問題にならないんですから、こゝ當分見込が立ちません。』
『その當分よ、私も。』
『成程。』
『堅固さんは何う？』
『さあ。』
『龍の首よ。』
『駄目？』
『學校へ入つたばかりですから。』
『はあ。』
『でも取れる見込はあるんでせう？』
『ありますけれど、當分駄目です。』
『その當分よ、私も。』
『分りました。矢つ張り長い當分ですな。』
と堅固君も失望した。

豐彦君としては出世作が龍の首だ。堅固君としては外交官試驗合格が龍の首だ。何方も當分問題でない。

『私……』

『何ですか?』

『智惠子さん。』

と二人は右左から寄り添つた。

『これが當分どころでなくて長いお別れになつてしまふかも知れないと思ふと悲しいわ。』

『そんなことはありませんよ。』

『そんなことがあるものですか?』

『でも……』

『何故ですか?』

『私、豐彦さんも堅固さんも同じやうに好きよ。さうして何方も同じやうに私のことを思つて下さるんですから、困るぢやありませんか?』

『………』

『何方も秀才ですもの。何方つてことが言へませんわ。』

『………』

『お父さんお母さんにも然う申上げてありますの。』

『何う申上げてあるんですか?』

と堅固君が念を入れた。

『何方つてことが申上げられませんつて。』

『はゝあ。』

『それで私、鬮にしましたの。』

『はゝあ。』

と豐彦君が腦天あたりから聲を出した。

『自分で拵へて自分で引いて見たのよ。初めに堅固さんが當りましたわ。』

『成程。』

『一遍ぢやいけないと思つて、もう一遍引いたら豐彦さんよ。』

『はあ。』

『その次も豐彦さんよ、それから又堅固さんよ。』

『鬮つてものは一番初めが本當でせう?』

と堅固君が主張した。

『でも豐彦さんが可哀さうだと思つたんですわ。』

『それから引かない方が宜いです。』

『堅固さんが二度で豐彦さんが二度になつた時、今度は決勝だと思つて引いたら、豐彦さんが出ましたわ。』

『成程。』

『私、堅固さんがお氣の毒になつて、又引いて見ましたの。今度は堅固さんよ。』

『決勝で定めなければ果しがありません。』

と豐彦君も不服を申出た。

『全く果しがありませんわ。お仕舞ひには何度引いても代り〲に出るんですもの。』

『………』
『何うしたら宜いんでせうね？』
『豐彦君。』
と呼んで、堅固君が立ち止まつた。血相が變つてゐた。
『何だい？』
『こゝで君とジャンケンをしよう。』
『………』
『ジャンケンで定めよう。宜いでせう？　智惠子さん。』
『さあ。』
と智惠子さんは堅固君の短兵急に驚いたやうだつた。
『いけないよ。』
『何故？』
『そんなチャンスで定めべき問題ぢやない。』
と豐彦君も顏色を變へてゐた。
『しかし智惠子さんの意思に從へば宜い。智惠子さん、何うですか？』
『………』
『壓迫するなよ。』
『鬮もジャンケンも同じことでせう。』
『でも、ジャンケンですと一遍で定つてしまひますわ。』
と智惠子さんは決し兼ねた。
そこへ青木さんが汗を拭きながら追ひついた。
『何をしてゐるんですか？』
『御老體をお待ちしてゐました。』
と堅固君が氣を利かした。まさか智惠子さんをジャンケンで定める相談中だつたとも言へない。
『御老體は些つと嚴しいですよ。』
『ハッハヽヽ。』
『私や御兩君のお父さん達あたりは壯年です。小泉さんぐらゐから御老體の部に入ります。』
『小泉さんは又田地のお話でしたか？　大分お手間が取れました。』
と豐彦君も氣が咎めて紛らした。
『今日はそれが出ませんでしたが、うつかりお世辭を言つて、此方から招いた形です。』
『はゝあ。』
『小泉さんは息子さんの見舞ひでなくて、商賣用らしかつたです。』
『成程。小鞄を提げてゐましたね。』
『お暑いのに御精が出ますなと褒めたら、「悴が片輪になると思ふと、又一足掻き足掻かなければ追つつきません。そこはあなたもよく分つてゐて下さいます」ともう定めてゐるんです。』
『ハッハヽヽ。』
『始末にいかない人です。これは結局此方が負けでせう。』
と人柄の好い青木さんは到底小泉さんの敵でない。
『大汗よ、お父さん。』
と智惠子さんが注意した。

『うむ。急いだものだから。』

『私達、ノロ〳〵來たんですけれど。』

『暑いですからね。少しその邊の木の蔭で休んで行きませうか？』

と堅固君は手間を取りたがつた。

『いや、もう一息です。』

『これで當分お目にかゝれないかも知れませんから、お名殘り惜しいです。』

『はあ。當分。』

『その當分が今問題になつてゐました。』

『成程。この間の續きでしたな。』

『はあ。』

『當分は矢つ張り當分ですな。ハツハ、、、。』

『ハツハ、、、。』

『何れお沙汰を申上げますよ。この間申上げた通り、それまでのところを當分。』

『分りました。』

『豐彦さんもね。』

『承知しました。』

と豐彦君が頷いた。

『卒業するまでは世間が煩いですから。』

『はあ。』

『卒業しても當分はお茶だの花だの何だのといつて、毎日のやうに藤島へ通ひませうからな。』

『御道理です。』

『女子大學は漸く思ひ止まつてくれましたが、種々と註文があるやうです。一々言ふことを聽いてゐると、何年かゝるかも知れません。まあ〳〵。それまでは當分といふことに、何うぞ。』

と青木さんは要領を得ない當分だつた。

『僕達も當分勉強一心にやります。』
と堅固君が言つた。
『それに限ります。外交官でしたね？　堅固さんは。』
『さあ。』
『智惠子から聞きましたよ。』

『おい。君かい？　銀時計の外交官つてのは。』
と豐彦君は思ひ知らせる機會を得た。智惠子さんが上京したのは銀時計の外交官と見合ひをしに行つたのださうだ。それだから君は諦めろと堅固君は小泉君を傀儡に使つて豐彦君に忠告したのだつた。
堅固君は流石にまづい顔をしたが、靑木さんが話しかけるのを幸ひに、
『はあ。文官試驗よりもむづかしいんです。風采が惡いと落第します。』
と聞えない風を粧つた。
『無論でせう。西洋へ行つて日本を代表するんですから。』
『競争が激しい丈け、やり甲斐があります。高商あたりからも受けますが、大學でないと通りが惡いらしいです。』
『官途は大學ですよ、何處でも。』
『殊に外務省畑は大學の秀才の寄り集まりださうです。何しろ三十人に一人ぐらゐの割合ですから、一遍で通れば鬼の首です。』
『龍の首よ。』
と智惠子さんが言つたけれど、堅固君は耳にも入れない。村に辿り着くまで靑木さんと話し續けた。

豐彦君には堅固君の心持がよく讀めた。智惠子さんが何方とも決し兼ねてゐると承知して、早速お父さんを動かす積りだ。矢つ張り策士だ。方向轉換が實に速い。これでは敵はないと思つた。

『出世は運ですけれど、罷り間違つても公使ぐらゐまでは行きさうですな。』

と青木さんは煙に卷かれたやうだつた。

堅固君の家は村へ入ると殆んど取つつきだ。門前へ來ると、

『それでは青木さん、智惠子さん、失禮致しました。』

と言つて、堅固君は豐彦君の存在を忘れるほど屈託してゐた。

豐彦君はもう二三町智惠子さんのお供が出來る。

『一寸、豐彦さん。』

と智惠子さんが急に聲を潜めた。

『はあ。』

『私、堅固さんの心持が分らなくなりましたわ。』

『何故ですか？』

『ジヤンケンの意味よ。』

『ジヤンケンはジヤンケンです。』

『あなたが紙を出して、堅固さんが石を出せば、堅固さんが負けるんでせう？』

『無論です。僕が鋏を出して、堅固君が紙を出しても、僕の勝ちです。』

と豐彦君は鋏を出して見せた。

『厭な人！ 私、ジヤンケンの說明を伺つてゐるんぢやありませんわ。』

『失敬しました。』

『負けても宜いんでせうかね？ 堅固さんは。』

『宜いことはないでせうけれど、そこが一か八かです。』

『でも手を一遍斯う出せば定つてしまふんですから。』

と智惠子さんは紙を出した。

『簡單ですよ。』

『本當にそんな簡單なことで定める勇氣があつたんでせうか？』

『奴はいつでも勇氣凜々です。』

『でも手を一遍斯う出して、それで失策つて私が貰へなくても宜いやうなら、些つとも賴もしくありませんわ。』

『然うですよ。』

『私を大切とも何とも思つてゐて下さらないんですわ。』

『然うですよ。それですから、僕はこれはいけないと言つて反對したんです。』

と豐彦君は又鋏を出した。

『何んですか？ ジヤンケンをしてゐるんですか？』

と青木さんが振り返つた。もう豐彦君の家の門が近かつた。

（つゞく）

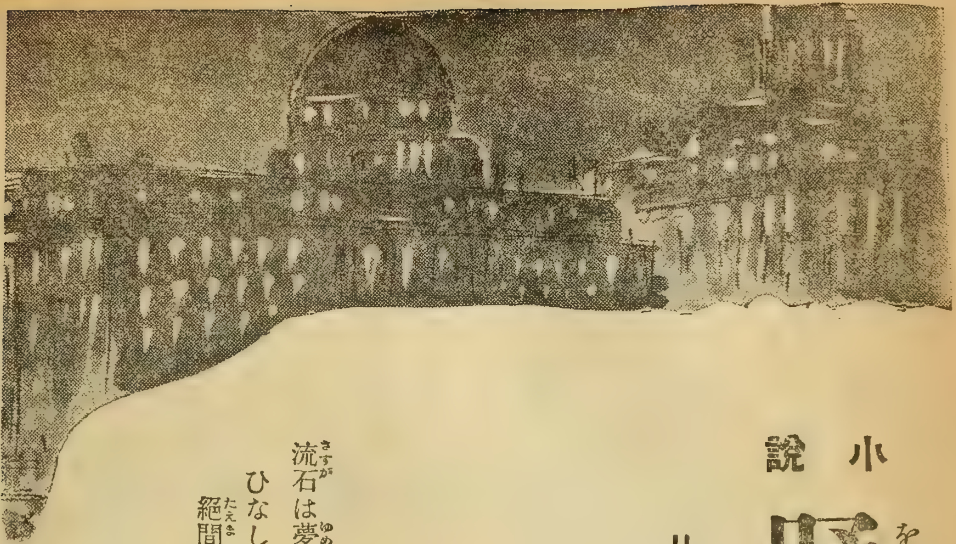
大評判の「佐々木邦全集」全十巻・各巻一・五〇 分買も出來ます

これだけはぜひ讀んでおき度い

大評判の名小說御紹介！

左に揭げた小說は、重版又重版、今飛ぶやうに賣れてゐる小說で、本社が責任をもつてお奬め出來るもののみです。即刻御一讀下さい！ 何れも本社發行、全國書店にあります。書店に賣切れの場合は直接本社へ御註文下さい。（振替東京三九三〇）

菊池寛先生著	心の日月	女心を描き盡したと云はれる名小說。初戀の人を追つて、大東京の職業戰線に、誘惑、迫害と鬪ふ處女の純愛	一・五〇	一二
中村武羅夫先生著	嘆きの都	五色のネオン明滅する都會を憧れつゝ、北國の寒村を捨てた一處女の受難哀史。見よ！恐ろしき處女地獄	一・六〇	一四
長谷川伸先生著	馬頭の錢	惡より善に甦らんともがく若者の難行苦行を中心に善惡入り亂れ、興味と感動の頂點を行く傑作中の傑作	一・五〇	一二
佐藤紅綠先生著	富士に題す	受難と感激に渦卷く日露戰爭當時の混沌たる國內の驚くべき世態人情風俗を赤裸々に暴露せる一大社會小說	二・〇〇	一六
本田美禪先生著	覆面の女將軍	大構想ユーゴーの作に優ると云はれる名小說。秀吉、淀君、淸正、美小姓を廻つて、覆面怪女の活躍と悲戀	一・八〇	一四
佐々木邦先生著	新家庭双六	美男で無邪氣な卑見君と美人で我儘な花嫁の德子さんとの新家庭に次々起るとんだ悲喜劇著者會心の傑作	一・七〇	一二
小島政二郎先生著	新版 義士銘々傳	忍苦犧牲の半生を送つた赤穗義士達の人間的半面を描き出して全讀者の紅淚を絞る名小說	一・六〇	一四



小說

踊る張學良

＝戰か、亡命か、彼は果して何處へ行く＝

野村愛正

加東三郎畫

夜の享樂境

流石は夢の國、享樂の國の支那である。どんなに夜が更けて來ても、時間なぞには一向お構ひなしに――彩燈の影深き廣いホールの一隅では、惱ましくもまた浮立つやうなジャズが絕間なく演奏をつゞけてゐる。すつきりした背廣服のモダンボーイの胸に靠掛つて楚々とステップの步を運ぶきらびやかな緞子服の女、肥滿した紳士と相擁した洋裝斷髮の活潑な女學生なぞが入亂れて、タンゴやホックス・トロットが次から次と繰返された。

牀を磨る微かな音の層積、人と香料のいきれ……！

寫眞は張學良

最近、といつても一年あまりのことだが、この北平は目立つて繁榮しだした。滿洲事變以來、東三省方面の富豪連が競つて避難して來たのと、河南あたりの住民が飢饉や土匪に追はれて集つたせゐだといはれる。急激に四五十萬もの人口が増加し、街も數年前に較べると見違へるほど綺麗になつた。

殊に、その主權者が、麻雀は本家本元發生の國といふので素よりのこと、ゴルフ、テニス、ダンス等、モダンなものならなんでも來いといふ張學良である。上の好むところ下みなこれに倣ふといつた譯で、洋服の着こなし方までがすつかり洗練されて來て――ダンスの流行の凄じさはいはずもがな。夜になると王府井大街や長安大街あたりを公々然と腕を組んで押歩く若い男女が多くなり、事大主義的な老人連をして長嘆息せしめるほどになつて來てゐるのだつた。――さうした新時代の北平を代表するダンスホールの中には、今や、踊狂ふ人々の息苦しさが發するのかも知れない。薄い霞のやうなものがぼんやり立罩めてゐる。犇と身體と身體を寄合つた男女の眼は恍惚と醉弛み、頬が燃える。爛美と癡頽のジャズは、やがて『オーイ、オイ。』から『燈を消して寢ませうね。』に移つた。

『おや、學良ぢやないか?』

『學良？』

『學良だ！』

ふと氣が着くと、みんなの踊つてゐるホールが見下せる一つのボックスに、女優に女學生、ダンサーなぞといつた一群の美女達に取卷かれて、さかんにお世辭や愛嬌を振撒かれゐる一人の青年紳士がある。やゝ膨ぼたく見える顏の、鼻下に髯のある、立派な體格をした——年恰好といひ、紛ふ方なしだ。その青年紳士こそ、現に北支總司令といふいかめしい地位にある張學良に間違ひなかつた。

『いつのまにやつて來たんだらう、この頃はめつたに外出しないといふ噂だつたが？』

『さうだな、誰とも面會しないほど嚴重に警戒してゐるといふことだのに……？』

實際、稀しい。過去數ヶ月前までは、かうした學良を見掛けることは敢へて珍とするに足りなかつた。否、連夜のやうに出歩いてゐたものだが、昨年十一月頃からぱつたり姿を見せなくなつて——北平の西城、順承王府に閉籠つたきりである。數千の手兵と鐵條網に護衛されて、わづかにその日〳〵を送つてゐるといひ傳へられた。

勿論、暗殺を恐れる結果である。誰がそれをする？ 學良は、目下、非常な惡評と苦境に立つてゐる。日本や滿洲國政府よりも、支那それ自身の國民を警戒しなければならない立場におかれてゐるので——それはともかくもとして、久振りにダンスホールに姿を見せたといふことが、異狀にみんなの注意を呼んだ。あちこちで私語が起つた。

『張將軍よ！』

『すてきね！』

大體、學良に對する批評はかつきり二つに分れてゐた。一つは、若くて美貌に自信を持つ女達で——學良の若い女を誘惑する手腕は有名なものである。尤も、一昨年、胡蝶といふ映畫女優にぞツこんまゐつて、十萬圓投出して自由にせうとしたが、見ン事失敗した。果ては檻禁して暴力にまで訴へようとしたといふ話もあるが、これは特別だといつていゝ。モダンな女學生が好きで、かつてまだ奉天にゐた當時、滿洲の高官連の子女を敎育してゐる同澤女學校をさん〴〵荒して、彼の妾の養成所だといはせたほどの凄さがあつた。

現在、學良には、第五夫人まである。しかし多妻主義の支那では、そんなことはまるで問題でない。何しろ北支那の支配者なのだ。年齢もまだやつと三十三。地位があつて、權力があつて、金があつて、おまけに色魔的不良で——何から何まで條件

が備つてゐる。而も、ダンスホールに出入りする裡には、市井の中から埋れた美玉を掘出さうとしてゐるやうな意味もあるやうに考へられる。たとひ今は政治的に多少不評判であらうと、第七第八夫人は愚か、第十三夫人くらゐを目標に接近を圖らうとする野心家の女達の間には、まだ〳〵好評嘖々たるものがあるのだつた。

學生の詰問

その女達の反對は、若い學生連だつた。三々五々、だん〳〵額を集めて、

『諸君、學良の奴は實に怪しからんぢやないか？』

『さうだとも。二十萬の同胞が、熱河の曠野に屍を晒す覺悟で戰つてゐるのだ。にもかゝはらず、その主班たる彼が、ダンスホールに出入するとは何事か？』

『國民に謹愼の意を表して蟄居してゐるならまだ許せる。これでは默過出來ない！』

由來、支那は文字の國、言葉の國である。血の氣が多いばかりではない。感情があつてはじめて言葉が發するのではなくて、その逆に、言葉のために感情が誘發されて來て——國家の非常時を意識してゐるなら、まづ自分達の方からダンスホールを遠慮すべきであらうが、それは個人主義の發達した支那では非論理である。爲政者は爲政者、自分達は自分達なのだ。學生連は、滿洲を語り、東洋を論じ、學良を非難して痛憤しだした。

無論、その中には、何も國家の重大事を憂慮してゐるものばかりではない。言葉に刺戟された彌次的雷同者もあれば、學良の女にもてることが癪に觸つてゐるものもある。何かの機會に自分を偉く見せたがつてゐるものも交つてゐる。喧々囂々、口角泡を飛ばして學良を罵つた果に、

『いづれにしても國家のために默視するに忍びない。行つて學良を詰問せうぢやないか？』

『よからう。行け〳〵！』

爛れた歡樂の園のダンスホールに、時ならぬ旋風が卷起つ

名句植物訓

○木犀や匂ひ過していやがられ。
○若竹やどれが尺八火吹竹。
○澁柿や色に迷ふは人の常。
○人をとる菲果して美しき。
○葉櫻や忘れて通る人ばかり。
○はびこりて風の苦になる芭蕉哉。
○根をしめて風にまかする柳哉。
○低頭をする心や高し百合り花。

た。十數人の學生達は、どや〳〵と打連れて學良のボックスに押掛けて行つた。

この間に、學良は、氣に入りの女の手をとつて數番を踊り、またもとの席に歸つて休息してゐた。素破！やつて來た學生連を見てあたりのものが顔色を變へて立騷ぐのを靜かに制して、

『何、自分に話がある？よし〳〵、こゝで會はう！』

どの程度に自分が國民の非難を購つてゐるかといふことくらゐはちやんとわかつてもゐる。それだけの覺悟があればこそやつても來たのだ。驚きはしない。

學良は、從容として學生連を傍近く招いて、

『諸君、用事といふは？』

『張將軍、われ／＼は閣下に一言質問したい。閣下の故鄕滿洲は、あの通り日本に蹂躙された。にもかゝはらず、昨今の閣下は何をなされてゐるか……？』

一人の學生がすゝみ出て、たう／＼とやりだした。言葉の上だけでは熱血溢るるばかりの慷慨悲憤の態度で、

『南方に於て組織された抗日救援會では、既に幾回となく閣下に多大の軍資金を提供したと聞く。然るに、閣下は、その後一寸の國土でも奪還されたか？晏如と日々を送つてゐるゝところより察するに、閣下は滿洲を放棄する意志だと見るほかはない。この點、はつきりと承りたい！』

『待ちたまへ、諸君！』

支那では、人氣がなくなると馬賊でさへも飯が食へなくなる。まして政治家に於てをやである。その心得はありすぎるほどあるので――學良は、爛れた生活の影響から來たやゝ憂欝の漂ふ眉を伏せて、神妙な恰好にじツと聞入つてゐた。が、相手の言葉の終るを待つて、さも／＼感動したらしい表情を浮べた顔をあげて、

『諸君の非難は當然である。自分は萬死に價する。しかしながら、自分も中華民國の一員である。國家を憂ふる點では決して諸君に劣らないつもりだ……！』

『否々。將に首鼠兩端を持した、賣國的行爲だ！』
『何をツ？。』
飛んだ彌次に對して、學良は怫然と色をなした。聲を荒らげて、
『その一言は聞棄てにならない。果して自分の行爲が賣國的であるか否か、こゝに歷然たる證據をお眼にかけよう！』
常人から見ればいくらか意表に出て人心を收攬することに妙を得てゐる學良だつた。蟄居ばかりしてゐたのではいよ〳〵非難が昂まつて來る。それを切拔ける一策として――多少の危險が伴ふことは豫期してゐる。はじめからちやんと一つの目論見があつた。學良はすぐに使を自分の居城順承王府に走らせた。

確かに狡い

まもなく使が走戻つて來て、命ぜられたものを齎した。何かと見れば、それは全部日本の新聞の切拔きで、
『さア、諸君、これを讀んでみたまへ。その上で猶賣國的だと斷定さるゝなら、甘じて汚名を受けるよりほかはない。賢明なる批判を待つ！』
その新聞の切拔きは、全部學良自身に關する記事ばかりである。土匪の指嗾だとか、不正規軍の活躍だとか、悉く反日的、抗日的なもので、而も誰にも讀めるやうに飜釋まで添へてあつた。
『諸君、ご覽のとほりだ。日本からは蛇蝎の如くに思はれてゐる自分の行動が、果して憂國的に非ずと非難を受くべきものであらうか？　然らば、いづれが憂國的であり、賣國的でありまするか、その限界を諸君より聞きたい！』
――かつて一昨年、招かれて南方に赴き、國民議會に列した際の出來事である。恰度、學良が、七名の議長團中より選まれて議長席についてゐた時、浙江省選出の代議士で、蔣介石の舊師某が演壇に立つて、吶々として王道政治を說きだした。その論旨の陳腐さに、戴天仇が眞先きに失笑し、議場が騷然として來た。
すると、議長席にあつた學良は俄かに聲を勵まして、『諸君ツ今こゝにわれ〳〵の尊敬する蔣主席の恩師が立つて立派なる演說をされてゐるにもかゝはらず、私語し嘲笑するといふのは何事か。議長の命令に從はないものは容赦なく除名退席を命じますぞ！』と怒鳴つた。
その聲に一同がひたと沈默する。ところが、學良はすぐ後で、『今いつたことは議長としてゞある。年少な自分が先輩諸氏に

對してかゝる言葉を發したといふことは恐縮に耐へない。議場の整理が行き屆かなかつたのは、畢竟自分に能力がないからであるから辭職する。』といひ出して、却つて多大の賞讃を購つたといふ。これはあまりにも有名な話だ。

つまり、そこに學良の人を喰つた度胸と、巧みに現在の地位を保つて行つてゐる狡智があるのである。まして相手は、とるに足りない、まだ嘴の黄色い學生連で、丸めこむくらゐは造作はないのだが——學良は、もつと奥の方まで考へてゐる。それは、ほんの一些事にしか思はれないこんなことが及ぼす意外な影響といふものを非常によく知つてゐるが故だつた。

いひ替へると、さうした學生連を懷柔することも、落目になりかゝつてゐる自分の人氣挽回の一策だつたからである。それ故、わざ／＼日本の新聞の切拔きを取寄せたりなぞ手數をかけたので——學生連が沈默すると、學良は得意になつた。昂然と肩を聳かして、

『ご覽のとほりだ。微力ながら自分は、誠心誠意、全部をあげて日本と戰つてゐる。これは何人と雖も認めてくれてい丶筈だ。たゞ、容易に勝利を得られないといふのは……中國の兵に對して日本の兵が強いとはいはないが、目下のところ武器が整つてゐる。飛行機にしろ、大砲にしろ……』

『閣下……！』

『待ちたまへ。しかしだ、日本何ものぞ。その富力と人口を見るがいゝ。われ／＼は四億の民と、數十億の富を有してゐるではないか。もと／＼金のない日本は、若干もなく滿洲の經營難と、われ／＼の抗日のために財政的に破産する。われ／＼國民が一致結束して奮起すれば、滿洲の回復はいふまでもなく、立どころに懾服してしまふのだ。その時こそわが中華民國が東洋の盟主となるのだ。それは遠い將來ではない。すぐそこまで來てゐる……諸君、暫くだ。ほんの暫くの間だけ、托するに自分をもつてして隱忍してくれたまへ！』

面接したものに對しては、めつたに敵意や反感を抱かせたことがないといはれるほど學良の社交的手腕は巧妙を極めてゐる。眞劍な調子でたう／＼と經綸抱負を述立てられると——どこまで信をおくに足るかは別だ。もと／＼支那人は大言壯語が好きである。學生連は、すつかり煙に卷かれたり、魅惑されたりして、苦もなくまゐつてしまつた。

そこへ近侍の部下の一人が、顏色を變へて慌しくやつて來た。學良を認めて、

『閣下！』

と呼んで、何事か一大事が起つたとでもいふやうな樣子に耳

打ちをする。學良もちよツと眉を顰めたが、またすぐに平靜な態度に返つて——頷いて何事か囁き返す。その部下が諒承して立去つた後で、學良は再び學生連に向つて、

『さア、諸君、國家の問題は問題で、こゝはこゝ。こゝは國家を論ずべき場所ではなく、ダンスをするところだ。時たま浩然の氣を養ふのも大いによろしい。一緒にやらうぢやないか！』

如何にも英雄在閑日月といつた恰好である。笑つて親しげに一人の學生の肩を叩き、自分も新しく美女と腕を組んでまたまたジャズの嵐の中に紛込んで行つたが——それからまもなくだつた。ふと氣が着いて見まはしたが、まるで消えてしまひでもしたかのやう、學良の姿はそのホールの中には見えなかつた。

軍隊の動搖

とツくに二時を打つた。やうやく順承王府に歸つて來た學良は、さき程から待受けてゐた榮臻、王樹常の二人をその奥まつた一室に招いた。

『や、どうもお待たせした。寛いで話をせう。煙草はどうだね？』

この順承王府に於ける學良の日常生活は、王侯貴族のそれである。善美を盡し、傲奢を極めてはゐるが——もと〳〵學良は、部下に對してもそんなに驕らない。操縦術をちやんとよく心得てゐる。去就變背の定りない支那人を相手に、ともかくも相當な人材を集めて心服させてゐる理由はさういふところにもある。まして滿洲事變の勃發以來、南方の人達にもひどく頭が低くなつたといはれる今日、如才なく愛嬌を振撒きながら二人を席につかせた。

『閣下、危險ではありませんか、夜遊びは？』

『何、それほどでもないさ。で、急用といふのは？』

二人はちよツと顔を見合せた。榮臻は學良の總參謀、王樹常は北平駐屯軍の師長、一口にいへば參謀總長と近衛師團長とでもいふ格で——このほか萬福麟、湯爾和、湯國楨、朱光沐、山海關にゐる何柱國、天津の于學忠などが學良の腹心である。概してみなまだ若いが、部將としては腕も腹もかなり出來た人物揃ひだといつていゝのだつた。

『どうも朱慶瀾氏の態度がわれ〳〵には氣に入りませんね！』

『ふム、何かあつたか？』

『いや、別に取立てゝいふほどのこともないのですが、あまりに横暴すぎますよ！』

『さうか？』それは勿論さうだといふやうに學良も頷いた。その朱慶瀾といふ人物は、抗日救援會の首領である。南方か

ら集めた金によつて十萬の不正規義勇軍を編成し、目下熱河省方面に進出して活躍をつゞけてゐる。學良からいへば一種の外様で――表面は對日援助といふ名目ではあるが、一面からいへば學良の行動を生溫しと見ての南方から派遣された監視者だとも考へられる。多少の横暴はやむを得ない。が、そんなことのためにわざ／＼榮臻や王樹常がこの深夜に打合せにやつて來たとは思はれなかつた。

『まア、あそこには萬福麟君がゐる。なんとか旨くやつてくれるだらう！』

『ところが、なか／＼さう行かないのです。折合ひがよくない結果、どうやら二箇旅ばかり動搖……』

『何？』

『その情報が今晩はひつて來たのです。惡くすると寢返りを打つて滿洲國の方に加擔しさうなのです！』

『給料は？』

『渡つてゐます！』

『ふム……』

うま／＼學生連を說得していくらか得意な氣持でゐた學良も、これはまたかなりの重大事である。憂欝にならざるを得ない。眉を顰めてすつかり考へ込んでしまつた。

『すこし金をくれてやりますか？』

『いかん。斷じていかん！』學良は、強く首を振つた。

『しかし……』

『二箇旅ばかりの向背はどうならうと構つたことではない。ただ、金をくれると、それを眞似て次から次と動搖を來すかも知れないのだ。惡い例を殘すことはいけない！』

『それはさうです。その通りです！』

幾度か同じやうな經驗を持ち、煮湯を飲んだこともある人達である。話が早くわかる。榮臻と王樹常の二人も頷いて、そのまゝ深く沈默した。

華麗を極めた部屋の中を、燈火だけが明々と、瞬きもせずに照してゐる。曉近い街の騷音もまだこゝまでは聞えて來ない。ひつそりと靜まり返つて――その沈默は重い。と、學良はやをら身體を起して立上り、跫音を殺して柔らかな敷物の上を二足三足歩いたが、ふとまた立止つて二人を顧みた。

『全體、黃金の花瓶はどうなるかな？』

『日本もなか／＼頑張りますな。しかし最後の土壇場へ行けばきつと屈服しますよ！』

『それアきまつてゐる。まさか聯盟を脫退して、世界を相手にするほどの勇氣はあるまいが……』學良は再び歩みつゞけた。

かつて國際聯盟の調査委員の一行がやつて來た時のことである。支那では賄賂は公然であつても、流石に現ナマを摑ませるといふ譯には行かない。そこで學良は一計を案じて、潰しにしろといはんばかりの頗る目方の重い黄金の花瓶を作つて贈ると——果せるかな、意外に局面が有利に展開した。爾來、彼等は國際聯盟のことを黄金の花瓶と稱して、飽迄效力を疑はずにゐる。が、その學良の額にもあり〳〵と焦燥の色があつた。

圖に乘つて

——われ〳〵日本人の中で、おそらく張學良の名を知らないものはあるまい。あまりにも毎日のやうに眼に觸れてゐる。しかしそれではどんな人物かといふことになると、これはまた反對に、知つてゐるものの極めて尠いのに驚く。

その素生だけなら誰でも知つてゐる。綠林から出て滿洲を從へ、最後には北支那全體を支配した一代の梟雄張作霖の息子で……一般の人が知らないのも無理ではない。常々滿洲や支那に深い注意を拂つてゐた政治家達までが、極最近までは眞のその人物を知らなかつた。

たいていの政治家が口を揃へていつてゐた——學良は、親の光りの中で乳母日傘と大切に育てられた、我儘一杯なお坊ちやんだと。學歴もない。アメリカ人の家庭教師に育てられたといふが、そのほか

は親父の張作霖が奉天に立てゝゐた陸軍講武學堂といふ士官の養生所を出ただけである。

而も、若い頃から漁色家である。我儘なお坊ちゃんだと思つた方が至當かもしれない。

しかしほんの一部の人達の間には、早くから親父よりしぶとい、末恐しい奴だといはれて注目されてゐた。こんな話がある。學良は、おん曹子であるが故に十七八の頃から一方の軍司令官として度々實戰にも加はつてゐたが――まだ親父の張作霖が生きてゐた奉直戰爭當時、自分で親しく戰場を驅巡つて陣營に歸つて來て、あそこ、こゝに味方の將校の死骸が打棄ててあることを指摘して運んで來させ、鄭重に葬つてやつた。

その後で部下を集めて演說して曰く、

『兵卒の戰死者は數が多いのだから時と場合にはそのまゝにしておくのも萬やむを得ない。しかしいやしくも忠死した士官以上の死骸は打棄てゝおいてはならない。眼に着き次第叮嚀に葬れ！』と。

われ〳〵日本人では當然のことだが、支那人には稀しい。部下の將校達はすつかりこれに感激してしまつて、彼のためには生命を棄てゝ惜くないといふ氣持を起させた。奉直戰爭に勝つた半面には、さうした學良の力が非常に與つてゐるのである。

それでは溫情的な男かといふと、決してさうでもない。父作霖の變死後、彼はまだ年齢も若く、手腕のほどもわからないので、東北の政權は楊宇霆に歸するよりほかはないといはれた。

內外共にそれを認めた。

この頃のこと、楊宇霆の父親が北平で死んだ。學良は早速驅附けて行つて、非常に親切に葬式を手傳つてやつた。否、その態度があまりに卑屈で、まるで師父に仕へるやうな有樣だつたので、

『そら、學良が及ばないことを知つて楊宇霆の機嫌をとりだした！』

と、みんなが口を揃へていつたものである。ところが、その結果はどうであつたか？ 學良は、幾分か自分に自信が出來て來ると――機先を制して根を刈つた。會議と詐つて楊宇霆を奉天郊外北陵にある別邸に招寄せ、部下に命じて拳銃で射殺してしまつた。

また、日本に對する態度もそれと同じである。張作霖が死んだ當時は、日本の力を借りなければどうしても滿洲は維持して行けなかつた。そこで陶尙銘といふ男を寄越して日本の政治家達に泣附かせた。

正直なのは日本の政治家である。人物もまだよくわかつてゐない。親父があの通り死んだのだから可愛さうだと惻隱の情を起して、學良のいひなり放題に助けてやつた。

もしこの時、自然のなり行きに任せて棄てゝおいたらどうなつたか？ とつくに滿洲は崩壞してしまつて、今度のやうな滿洲事變も起らず、從つて聯盟の脫退問題などもあり得なかつたのだ。心ある人々はみんなさういつてゐる。

その學良が、日本の政治家の恩義に報ゆるに何をもつてしたか？

一口にいへば、與しやすしと甘く見て舐めてしまつたのだ。だん／＼自分の勢力が確實に扶植されて來たことを知ると增長して來て、日本を滿洲から驅逐する計畫を立てだした。

勿論、その背後には、アメリカ財閥といふ魔手が動いてゐるからでもある。葫蘆島に大連に匹敵するほどの大掛りな築港する。滿鐵と併行線を造る。滿洲在住の我同胞に迫害を加へる――耐りかねて抗議を持出すと、一應はい／＼とはいふ。決して否とはいはないが、同時に中止もしない。ます／＼抗日の基礎を固めて行く。

いふまでもなく、滿洲は日本の生命線である。前後二回に亙る大戰に生靈十數萬の骨を埋め、數十億の資本が投じられてゐる。學良如きに權益を蹂躙されて耐らうか。たうとう火蓋が切られた。滿洲事變が起つた。

前後して滿洲國が生れた。その結果、學良は故鄉滿洲を失つて、北平に籠居するのやむなきに至つたのである。

聯盟へ期待

自ら蒔いて自ら刈つたのだ。學良の今日はすべて自分で招いたもので、すこしも他人を怨むことを許されるものではない。

素より學良は馬鹿ではない。否々、ちよツとした眼先き小手先きが利き、小智慧がまはり、圖太くて金儲けの旨いことでは、今は親父の張作霖以上だといはれるだけあつて、滿洲を失つたことについては內心ひどく後悔してゐる。あゝまで日本に對抗するではなかつたと思つてゐる。

たゞ、この後悔はあまりに晩かつた。もうどうにもならない……！

由來、支那人の性癖として、はつきり他人の所有だときまつてしまへば何事もきつぱりと潔く思ひきるが、中途半端だと容易に諦めない。たとへば滿洲は日本が占領したと假定する。それならとツくに手を引込めてゐたらうが、さうでなく獨立したのである。まだ海のものとも山のものともつかないと考へるところに學良の未練が働く。

まして自分の出身地ではあり、無限の寶庫である。回復出來るものなら一寸の地でも取返したい。

同時に、繰返していふが、滿更馬鹿ではない。日本を相手に戰爭しては全然勝味のないこともよく知つてゐる。

現在、學良の立場とすれば、どうにもならないと知りながら一寸の地でも回復したいといふ未練の方はそつくり聯盟に任せておいて、寧ろ自分はこのまゝ北平を守つて徐々に南方に手を伸して行きたい考へを持つてゐる。これが最も安全な道であり、賢明なやり方ではあるが、しかし國民がそれを許してくれない。なぜお前は眞劍に滿洲を取返さうとしないかとしきりに

（張學良第一夫人）

責める。
戰爭すれば負けなのだ。負ければ沒落の一路を辿るよりほかはない。だから戰爭はしたくないが——といつてその氣持を明らかにすれば、國民の信望を失つてしまふ。それではやはり現在の地位が保てない。

要するに、學良は、日本と自國民との間にあつて板挾みになつてゐるのだ。詮方なく、山海關や熱河方面の軍隊をしてしきりに挑戰的態度に出させてはゐるもの〻——決して戰意があるのではない。一つは聯盟を牽制する意味であり、一つは口やかましい國民の眼を誤魔化してゐるのである。

さうして自分が救はれる唯一のものとして聯盟の解決を待つてゐる。今の學良を救つてくれるものは聯盟よりほかには絕對にない。

假りに聯盟が滿洲國の獨立を認めたとする。學良にとつてはそれでもい〻のだ。失地回復に努力しないといふ國民の非難に申譯けが立つので。

それで滿洲も諦める。河南方向へ勢力を伸して再生の道も講じられる。

また、反對に、聯盟が滿洲に於ける支那の宗主權を認めてくれ〻ば勿怪の幸ひだ。たとひ日本が脫退しても、相手はもう自分ではない。他人の褌で相撲をとるのだ。どツちに轉んでも損はない。

この聯盟が解決をつけてくれるまで、學良としては全力を盡さなければならないことが一つある。それは熱河を死守するといふことだ。

滿洲國は熱河省は自分のものだといふ。しかしこの上熱河まで失つたのでは、いよ〳〵國民が默つてゐない。それでは聯盟に救はれるまでに沒落する。學良の希望と運命は、その一點に賭けられてゐるので——突然、深夜に榮臻と王樹常の二人がやつて來てひそかに軍隊の動搖を傳へた。たとひ二箇旅でも方面が方面なので影響が頗る大きい。學良も焦燥と苦惱の虜にならずにはゐられなかつたのだつた。

なんにしても棄て〻おいたのでは大變なことになる。學良は、兩腕を組んで、しきりに部屋の中を行つたり來たりしながら考込んでゐたが、何事か心に浮んだらしく急に二人を見返つた。

『ぢや、まだ、表面的には廣く知られてゐるといふ譯ではないのだね？』

『さうです。一般的にはまだ誰も知つてゐません！』

一言にいへば、味方の中に忍ばせてあるスパイからの報告だといふのである。學良は大きく頷いた。

『よろしい。それでは……』
ちらと學良の頬にある陰慘な影が現はれてすぐに消えた。近近と二人を傍に招寄せ、耳に口を接して囁くと――刹那、愕然と二人の顔に驚きの表情が浮んだ。が、敢へて反駁はしない。默つたまゝ頷いたが、顰んだ眉はなか／＼晴れなかつた。
『それよりほかに方法がない。榮臻君、ご足勞だが頼む！』
『承知しました！』
曉の色は既に窓のカーテンに濃い。相談は終つた。何やら元氣のない榮臻を中に三人は立上つた。

鳴る機關銃

雪はそんなでもないが、コチ／＼に凍附いてゐた。刄のやうに鋭い風が、頬の肉を削取つて持つて行くかと思はれるくらゐ冷く吹いた。
『おう、寒いぞ！』
『寒いな！』
もう暫くの間錦州に近い省境の、五家子といふかなり大きい村落に駐屯してゐる熱河混成第十二師第三旅の士官達はその宿舎から出て來た。ぞろ／＼とつながつて城門の方に歩いて行つた。
『檢閲も激勵もおれ達にはもう用はない。いゝ加減でよしてくれ！』
『叱ッ／＼、あまり大きい聲をするな！』
すつかり灰色に曇つて、今にも雪がちら／＼舞つて來さうな空模樣だつた。一同は、村落の外廓を圍む城壁の外に來て止つた。
『おッ、第二旅の士官達もやつて來たぜ！』
『簡單に一緒にやつてしまふのだな。ご苦勞千萬だ！』
數日前から、學良の總參謀榮臻が、目下この方面で日滿聯合軍を相手に戰ひつゝある軍隊を犒ふ意味をかねて、士氣興振のためにやつて來るといふ情報がはひつてゐた。今日がいよ／＼その檢閲の日なので――榮臻は城壁の上に立つて一場の訓示を與へるといふ。仰ぐと、既に先着した幕僚達の、しきりと準備を急いであちこちする姿も見られた。
その城壁の下には、二箇旅の士官達を合せるとかれこれ三百人近く集つてゐる。下級士官の木綿の外套も、流石に裏だけはいづれも毛皮で――待つ間は長かつた。みんなはだん／＼退屈しだして、
『もしこゝのところに日本の飛行機がとんで來て、爆彈を一つどかんと落したらどんなものだらう？』

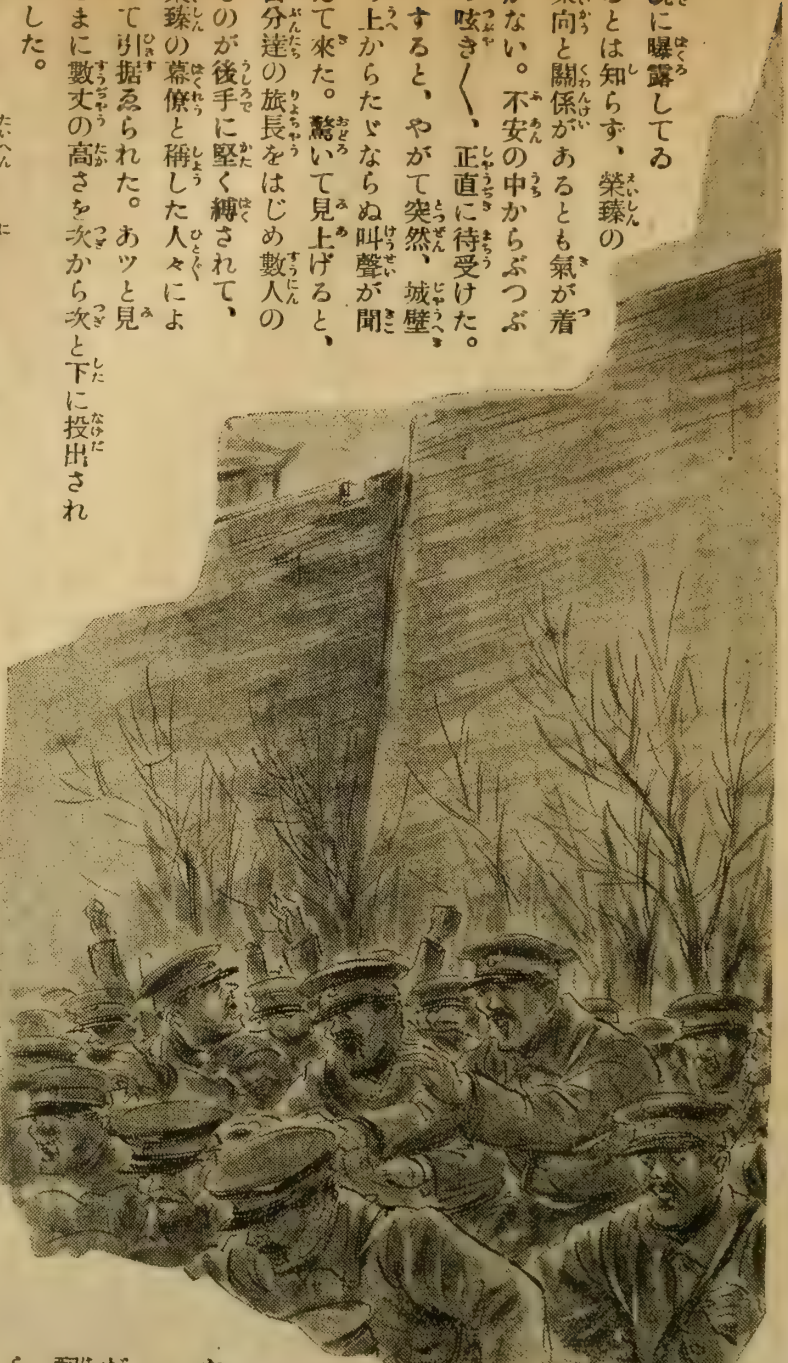
『ウフ、桑原々々。もうそんなことはしないよ！』
長い劍をがちや／＼鳴したり、欠伸をしたり、冗談をいつたりしてしきりにがやがや騷いでゐる。しかし榮臻の一行はなか／＼姿を見せなかつた。
午前十時すぎから集つて、午後の二時近くになるのに、それでもまだ到着しない。寒さの中に棄てゝおかれるといふ不滿より、次第に一種の凶兆を感じて來て、
『一體全體どうしたといふんだ？』
『何かあつたのか？』
元來、この二箇旅は、はじめは學良直系ではない。湯玉麟の軍隊なのだが――湯玉麟が滿洲國に加擔したり、また寢返つて學良と喰附いたりしてゐる間に、いつのまにか萬福麟の手に屬したやうになつてゐた。が、あまり優遇はされない。そこにない／＼での不平があつた。
その上、最近では、救國後援會の朱慶瀾一派が干渉して無暗に戰鬪を強ひる。日本兵は強くて、飛行機は怖い。死ぬのは嫌だ。どうせ附いたり離れたりして來たのだからどちらでも同じことだ、危くない方がいゝといふやうな譯で、ひそかに滿洲國へ降服の話がすゝめられてゐる。主立つた士官はみんなそれを知つてゐるが――まさかまだ

既に曝露してゐるとは知らず、榮臻の來向と關係があるとも氣が着かない。不安の中からぶつぶつ呟き〲、正直に待受けた。

すると、やがて突然、城壁の上からたゞならぬ叫聲が聞えて來た。驚いて見上げると、自分達の旅長をはじめ數人のものが後手に堅く縛されて、榮臻の幕僚と稱した人々によつて引据ゑられた。あッと見るまに數丈の高さを次から次と下に投出されだした。

『うわッ、大變ッ、逃げろ〲！』

最早かうなつては陰謀發覺を悟らずにはゐられない。三百の士官は愕然と色を失ひ、投出された旅長達が蛙のやうに潰れたことも見屆ける暇あらばこそ、蜘蛛の子を散らすやうに我れがちに逃出しかけたが——すぐにぎよッとして立止つた。足が化石したかと思はれるやうに動かなくなつた。



こはそも如何だ。いつのまに配備されたのだらう。その前面には、大小十數銃にあまる機關銃が、銃口を揃へてずらりと並べてある……！

引返さうにも、背後は煉瓦の城壁である。而も、その上からは、十數人の兵士が装彈した小銃を擬してゐる。絶體絶命、到

底遁れる路はないのだが――それでも士官達は逃出さうとした。魂も身に添はず走つた。

タカ、タカ、タカと、すぐに襲ひかゝつた息苦しい爆音。機關銃の一齊射擊だ。サツと雪が赤く染つて、大鎌で薙ぐ茅野のやうに、バタ〳〵〳〵と片ツ端から倒れて行く。悲鳴、泣聲、呻く聲、唸る聲――三百名一人殘らずだつた。そのまゝその場で鏖殺された。

まもなく銃聲は鎭つた。地獄の光景さながらに累々と折重なつて倒れた死骸の上に、やがて粉雪がちら〳〵と降りはじめた。

何處へ行く

さうした慘劇の行はれた翌日だつた。學良は、稀しく北平に駐在する二三の外國新聞記者達と會見した。

『何かニユースがありますか。壽府の形勢は如何です？』

例によつて如才がない。勿論、三百人鏖殺のことは電報によつて詳しく知つてゐるが、學良にとつては遠い世界の出來事にしかすぎなかつた。

『いや、壽府の形勢は、僕達より閣下の方がよくご存じの筈です。實は、それについてお話を伺ひにまゐつたのですが……』

人をくつてゐることではどちらも負けない方である。外國新聞記者達は、眼で見るよりも嗅分けるのが達者だといふやうな鼻を學良に向けた。

『日本の態度はなか〳〵强硬ですな。いよ〳〵脫退を決意したやうですが、閣下は前々からかうなるご豫想をお持ちでしたか？』

『まア、そんなものでせうな。』學良は平然として答へた。

『假りに日本が決行したとします。聯盟規約ではまだ二ケ年間は束縛される義務がありますが、脫退した以上はあるひはそんなものには服從しないかも知れません。そのため對滿政策が今よりもつと硬化して、どし〳〵積極的に出だした場合、閣下は如何なる態度をおとりになりますか？』

本音を吐くと、學良は、最近ひんぴんとはひつて來る情報には、內心かなり狼狽を感じてゐた。掛聲ばかりで決行するやうなことは萬あるまいとたかをくゝつてゐた日本も、今度こそいよ〳〵決意したらしい。これはことだつた。

脫退後の日本は、新聞記者のいふ通り、必ずやもつと積極的に出て來るに違ひない。而も、手賴りにしてゐる聯盟には、その日本を抑附けてくれるだけの力がないこともだん〳〵わかつて來たし――他力本願の土堤が崩れだした。學良は、ほんたうは、

その後の自分のとるべき態度をまだ知らなかつた。

しかしまだ〳〵日本も脱退したのではない。まだ〳〵一縷の望みも殘されてゐるやうに思はれる。學良は大きく笑つた。

『その時には大いに爭ひますよ。日本がいゝことを教へてくれました、自衞權の發動といふ言葉をね。今度こそ僕が自衞權の發動を行使する番です。はゝゝゝ。』

ふと、その學良の頭に、一艘の汽船が映じて來た。汽船は、今、太平洋の波を蹴立てゝ東へ〳〵とすゝみつゝあつた。

その汽船には何が積込まれてあつたか？ 學良が、北平在住以來、ひそかに淸の宗室から掠奪した世界無比の財寶である。ザツと一億圓といはれてゐるが、實際の價格は十億を越えるだらうと稱せられるほどのもので、アメリカへ輸送されつゝあるのだつた。

——滿洲事變このかた、學良は、アメリカ財閥に對して、武器彈藥、その他軍資金などを合せて約二千萬元ほどの借金をしてゐる。が、拔目のないヤンキーは、聯盟と日本の態度によつて早くも見切りをつけた。半ばトリツク同樣な口實の許に、その莫大な財寶を自分の國に引取つてしまつた。

たゞ、學良は、まだそのアメリカ財閥の計畫をはつきりとは悟らずにゐる。萬一のために備へた準備金のやうに思つてゐるので——たとひ日本が聯盟と絕緣して滿洲國が熱河省を奪取し、自分が現在の位地を失はうとも安心だつた。アメリカへ亡命すればいゝと考へてゐる。で、また學良は新聞記者達に笑つて見せた。

『諸君、ともかくも僕は聯盟を信賴してゐる。すべての問題はその公正なる批判と所置とに待つとして……いくらか春めいて來ましたね。如何です、一緒に後庭でテニスでもやりませんか？』

いざといふ場合には、いつでも北平を飛出すやうにちやんと飛行機の用意までしてある。だん〳〵深く自分を省みてみると、考へることが怖くもあり、わからなくなつても來る。學良は、その氣持を誤魔化すためのやうに洒蛙々々と暢氣なことをいつて、新聞記者達を煙に卷いて歸しておいて——夜になつた。學良は、今度は順承王府内にある廣いホールで、夫人達や、妾や、女優や、さま〲な女達を集めてダンスをやりだした。

タラ、タラ、タラ……！

踊る。踊る。學良は踊る。喘ぎながら、悶搔きながら、運命の銀盤の上で——明日は亡命かも知れないが、それを誰が知らう。何處へ行くか自分にもわからない。たゞ〳〵すべての望みを今だにまだ聯盟にかけて、女の細腰を抱いて目まぐるしくぐる〳〵と踊りつゞけるのだつた。

（をはり）

金の延棒

前田曙山
近藤紫雲畫

地底に埋もれた

大阪落城を見て居た人の話

明治二十年の春、私の父が內務省の一官吏を奉職して、大阪へ在勤してゐた時でした。豫て見知り越の山田正一郎といふ、土木工事の請負者が突然私宅を訪ねて來ました。

『私は非常に國益になる事を目論見ましたが、それは地の底へ埋つてゐる寶を發掘したい考へで、實は御內願に出たのです。』

眞面目くさつて言ひ出しましたから、一應其趣意を尋ねて見ると、

『外でもありませんが、大阪城天守臺跡の周圍の濠の發掘許可を願ひたいので、彼處の濠の跡は殆んど埋つてゐますが、其濠の底には、太閤樣の寶物だつた黃金の鷄を始め、軍用金の用意に貯へて有つた金の延棒などが埋つて居ります。それは落城の時に、投込むだのを、其儘埋てしまつて有ります。』

『成程大阪落城の時に、さういふ事が有つたやうな言ひ傳へを聞いた事があるがそれは落城後大阪城の金銀が案外少なかつた處から、さういふ風說が傳はつたに過ぎまい。』

さういふと、山田は携さへて來た寫本や書類を取出して父の前に擴げました。

『此通り、寶を投込むだといふ聞書、又は見聞錄など、いろ〳〵書いた物はありますが、それを發掘したといふ事は記してありません。私は此事を思ひ附くと、一年もかゝつて調べましたが、どうしても掘出した事はないのです。して見ると豐太閤の一代の富といふものは、今日まで地の底へ埋つてゐる譯ですから、許可にさへなれば、全部私の費用で發掘して其收獲の六分を御上に納め、四分を私の利得といふ事に願ひたいので、私は少くとも時價五六十萬圓、或は百萬近くの物があると思つて居ります。』

彼の目論見書によると、堺監獄の囚徒を使役するので、普通の土工を使用する半額の經費で上るが、それでも尙數千圓を要する冒險事業でした。

『一體君はどういふ動機から思ひついたのかね。』

『落城當時其寶を投込むのを見て居た人から、直接聞きましたやうな譯で。』

『君はどうかして居るではないか、妙な事をいふね。』

『いや、精神は何ともしてゐません。實際見てゐたといふよりも、指揮した人から聞きましたので。』

熱誠滿面に溢れ、眞劍になつて膝を進めました。

月明林下に美女の靈告

山田組といふと、其頃同業者間に信用が厚い、立派な請負業者でしたが、生野の銀山、佐渡の金山などと、一攫千金の仕事に手を出し、悉く失敗した爲、借金で足搔が取れませんでした。其處で一山當てなければ、彼は首を縊つても追附ないほど、苦しみ踠いて居ました。すると或夜、彼は偶と天王寺細工谷の我家を出て、茶臼山から安居の天神附近を散步しました。

社の境內の梅林は、雪を飾り、玉を綴り、暗香浮搖する花の眞盛りでしたが、偶と見ると、ドンヨリした月を背に、嬌冶な女の姿が、彼に向つて靜々步いて來ます。まさに、月明林下美人來るの詩を其儘です。

此夜陰の梅林に美女の獨步きは、梅花の精が人に化り出でたとしか考へられません。二人は漸く近づきました。見ると月下の美人は、年の頃三十餘り、丈なす綠の黑髮を長く垂れ、色白の瓜實顏で、飽まで氣品の高い黑目勝の澄んだ瞳、笑はゞ綻びる朱の蕾の唇に、鐵漿黑々の

古風な化粧、桃山風の刺繍を盛上らした襠衣に、白綾に紅梅衣を襲ねた粧ほひは繪にある上臈が抜け出たので、今の世の姿とは思はれませんでした。

山田は餘りの美しさと氣高さとに氣怯れして、恭しく腰を跼めながら、謹しむで道を譲るべく、鄭寧に目禮しました。

『其文字は孰れから參つた。』

上臈の口を洩れる玉の聲は、迦陵頻伽よりも麗はしく、山田の俗耳を淸らかに洗ひました。

『手前は此近邊の者で御座います。月夜の面白さに、思はず此梅園に迷ひ入りまして御座ります。』

無風流な山田としては、一世一代の洒落た答へでした。

『殊勝らしの者や。其文字の床しい心に賞で、妾の寶を取らせるで有りませう。』

思ひもよらぬ尊き棚牡丹の福音に、山田は辱けなさが身に沁みわたりました。

『恐入りまして御座います。手前は今不如意の苦しみに悶え居りまする。尊き御方様の御助けを戴きますれば、枯れた骨が蘇生りまする。』

『妾の寶といふは、黄金の延棒三十八本、黄金の鷄二番、同じく黄金作の鎧太刀、其外大判小判幾函とも、妾は數を知りませぬが、大阪城中天守臺の下の濠の中に埋めて有りまする。幾百年とも知れず、人の世の外に秘め置くは、天の寶を私するに似て心外でなりませぬにより其文字に取らせまする。早う掘り出してたもれ。』

夢に夢見る朦朧たる山田は、上臈を怪しみもせねば、其言葉

を疑ひもしません。

『恐入つた事で御座りまする。然し御城內の內濠といふは、荒方埋りまして、平地に相成り、御城は陸軍省と內務省との管轄に相成り居りますから、いづれで御座りませうか、手前には見當さへも附きません。』

『天守の乾にあたる處に、內濠の跡といふのが有りまする。其底にこそ、太閤殿下榮華の筐の七珍萬寶が埋れて有りますのぢや。』

『それこそ內務省の所轄に御座います。併し憚かりながら、恁様の古い事を御存じ遊ばす御方様は。』

不審の眉を昂げる山田の顏をジツと見入つて居た上﨟の花の顏を、見る〳〵一陣の狂風が吹き去つたかと思ふと、綠の髮は颯と浪打ち、絖かと滑かに艶かな面は、俄かに蒼白く變じて、

陰々たる鬼氣人に迫り、春に魁ける梅の園生は、忽ち秋風落寞たる荒野と變じました。

『優しうも尋ねくれしよな。妾こそは淀の御と呼ばれて、女ながらも怨み重なる關東と鎬を削り、戰ひには勝ちながらも、天運窮まつて、果敢なく城頭の露と消え、千載不滅の憤ほりを抱く祀られぬ鬼の魂でありますぞ。妾滅亡の時、太閤殿下が心に罩めて蓄へ置かれし金銀財寶の敵の手に渡らん事を惡み、事窮まれりと見し時、兵者に吩咐けて、濠の底深く投げ下したぞ、關東の者も覺る事なく、今日まで埋れて有りますのぢや。其文字が取出してたもらば、妾が冥路の供養ともなり、又御國の御爲ともなるで有りませうぞ。』

嬌嗔を帯びて甲走る聲に、山田の魂は有頂天に迷ひ出で、物恐ろしさに、五體が竦むで了ひました。

『ア、御方様が噂に名高い淀君様に御座りまするか。手前一命にかけても、仰せを果しまする。難有い事で御座いまする。此上は今少し明々白地に其場所をお示し願ひまする。』

山田は恐る〲身を乗出して、淀君の妙なる裳に縋らうとしました。

『卑しい身で推參な男ぢや……天守の乾と言へば、其文字の心でよう工夫しや。』

颯と裳を拂つたので、山田はパッタリ轉ぶと、前に在つた釘の折が額に突刺さり、アツと顔を押へた途段に、彼は始めて生れ出たやうに我に返りました。

梅林と思つたのは、我家の寝間で、媚めかしい餘香が薫じるのは、床に置いた盆梅のしめやかな薫りで有ります。彼は鬱散の晩酌にまはされて、轉寢の夢に入つたのでした。

『あゝ夢だつたのか。』と、心地惡い背の冷汗に眉を顰めながらも、額を釘で突いたと思つたのは、身に金が入る兆である。今まで思ひ附かなんだ内濠の埋沒金、五臓の勞とは言へ、正しく天の憐れみから、淀君が夢枕に立つたのだと信じた山田は夫から一年餘りも、大阪戰史を始め、各種の文献を渉獵し、學者や故老に尋ねなどして、落城當時財寶を濠へ投じたといふ認めは有つても、夫を掘出したといふ記録もなく、傳説も無いといふのを確かめると、發掘費用の豫算を編み、始めて父の許に内願に來たので有りました。

掘出された三韓時代の瓶掛

二百八十年來地底深く埋沒しつゝ有つた金の延棒を掘出すといふ噂が、パッと大阪市中に擴がりました。尤も其當時は只城内の土木工事と揚言したに過ぎぬけれども、人の口は塞ぐ由が有りません。我も〱と見物が引きも切らぬ有樣、五尺掘つた、八尺掘つた、一丈だ、一丈五尺だと、日々土砂を起して行く工事の進捗に、市中の好奇心は愈々唆られて來ました。

然しそれにも増して、眞劍必死の目を睜つて、發掘の結果を待設けて居るのは當の山田正一郎で、彼は若し不成功に畢れば、男の面目にかけても、此儘生きて居られない。始めは夢に淀君の示驗を受け、利得から思ひ附いたのでしたが、恁まで世間から騒がれると、意氣で立つ山田組を、此時に叩き潰すか、旗を擧げるか、損益よりも命の問題となつて了つたのです。

『君、もう三丈から掘つたやうぢやが、何も出ぬではないか。恁便々と工事が延びると、管理上非常に困る。それも何分

でも希望があればぢやが、今の樣子では殆んど絶望ではないか。』と、父は自分の責任から考へて、早く見切を附けさせたいと思ひました。

『どうか今少し目を閉つて居て下さいませんか。もう五尺掘るまで。』

此處で中止となつては、虻蜂取らずですから、山田はうろたへました。

もう此時分には、資金が缺乏して來て土工の方へ拂ひが惡くなる、囚徒の勞役は引上げられて了つたから、山田は寢ても寢附かれぬ四苦八苦に悶えて居たのです。

金が出なければ死ぬ、寶が掘り出されなければ、其場を去らず腹掻つさばく、彼は掘つた眼で發掘の廣場を睨めて居ました。

もう人夫の數は少なくなつてゐましたが、夫でも其處彼處で、土を掘り返す音が尚斷續して聞えて居ます。血走つた山田の眼には、天守閣の礎石の上に、なごやかな日射を受けながら、一代の驕婦淀の御が、男の魂を吸ひ取るばかりの微笑みを湛へ、白魚を並べた蒲柳な指で、寶の處在を指し示して居るかに仄見えます。

『ヤア何か有つたぞ。』

突然深い穴の底に、脅えたやうな喊聲が上りました。一人の人夫が鍬を杖突きながら、高く差上げた片手に、眞黑な泥まぶれの物を振下げてゐるのです。

二三人の仲間は、バラ〳〵と駈け集りましたが、夫よりも先に、一足飛びに駈け附けたのは、山田正一郎で有つた事は勿論でした。

『何だ〳〵。』

『何だか解らないけれど、こんな金です。どうも戰に使つたものらしいんで。』

物をも言はずに山田が受けて見ると、夫は正しく鐵で鍛へた頰當で有りました。

『これが出るやうなら、何か出る。ドシドシ遣つてくれ。』

線香の火より小さいけれど、眞暗な希望の中に、チラリと光が見えたのです。

續いてボロ〳〵になつた太刀が出る、兜の鉢が蝕ばまれて掘り起されました。南蠻渡りかと思はれる瓶掛が出ました。

『刀や兜なら合戰の武器ですから、此處に埋りもしませう。然し瓶掛は御座敷道具ですから、城の櫓から價値の有るものを投げ込んだ事が證明されます。』

山田は鬼の首でも取つたやうに、瓶掛を父の處へ見せに來ました。

『これは瓶掛ではないが、一種の茶釜ぢやな。日本でも南蠻でもない、古く朝鮮から渡つたものだらう。此細い毛彫の唐草模樣は、三韓時代の古い樣式のやうに思はれる。』

父は骨董にかけて、一隻眼を持つて居たので、通ぶつて說明しました。

此品は確かに奥向のお次で使用され、不時の御用に供へる爲、普斷に湯を沸らせつゝ有つたものだらうと考へました。して見ると山田が言ふ如く、城の櫓から投げ下したと推測されぬでもありません。

人夫達も景氣附いて、元氣よく掘つて行きますと、城の家根の瓦を止めたと覺しき素銅の大釘、一尺もあるのが、二三十本發掘されました。城が燒け落ちた時に、濠の底へ埋まつたものと想像されます。

美女の靈が賜はつた金の護花鈴

消えなんとした希望が蘇生り山田は寢食を忘れて指揮監督を續けましたが、二十五尺を過ぎると、又何にも出なくなりました。人夫は落膽して働かなくなる、大雨が降つて穴へ水がたまる、發掘地は見る〳〵荒廢して了ひました。

其中に上司から嚴ましい苦情が起つて來ます。山田はモウ少し〳〵と哀願する。彼が現在數千圓の金を擲つて居る事を知つてゐる父は、板挾になつて當惑してゐる處へ、千代田文庫を預かつて居る歷史家が、九州へ史蹟調査に行く途中、親友だつた父の許を尋ねて來たので、父から其話をすると、歷史家は噴き出さんばかりに笑ひました。

『では其財寶を投込むだといふのは噓でしたか。』と、父が訊ねますと、

『それは君本當さ、其事實は正に在るが併し君考へても見たまへ。狸老爺とさへ言はれる權現樣が、大阪方が金銀を濠の中へ投込むだのを知らずに居る筈はなく知つて捨て置く道理はないではないか。』

『ぢや其後に掘出した事があらうか。どんな記錄を見ても、其事は書いてない。』

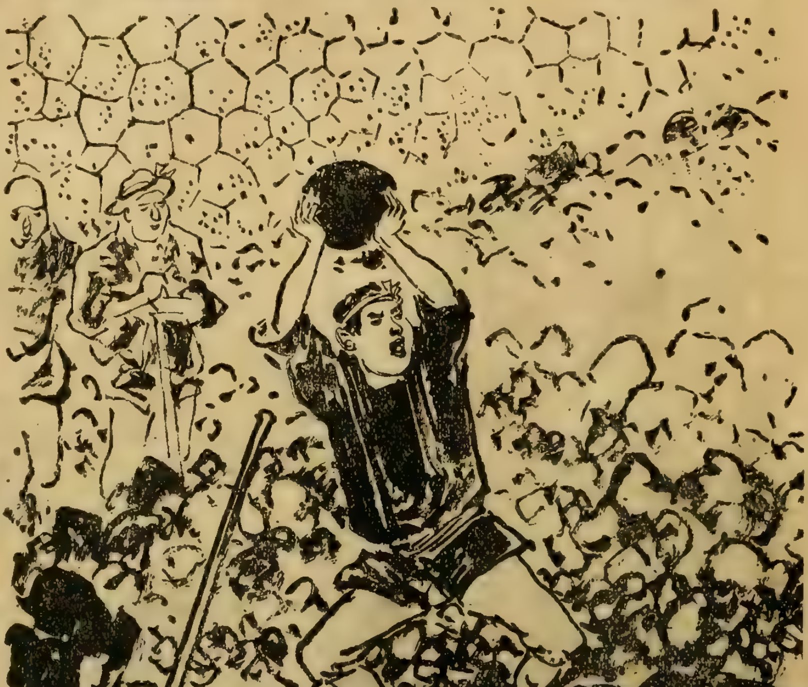
『それは德川の方で秘密にやつたからさ。大阪落城の翌年元和二年の二月に、本多正信の建議で、濠を浚つて皆取り出して了つてゐる。其金の棒は幕府財政の缺乏から、其後度々通貨に鑄いた事の有る唐竹の金の生子と言つて金藏に貯蓄して置いたのが夫さ早く僕に知らせて呉たら、無用な事はさせなかつたのだ……千代田文庫の記錄書の中に、チヤンと載つてゐるもの。千代田文庫といふのは

徳川幕府から明治政府へ引繼いだ昔の圖書館だね。』

父は此説明に、ギヤフンと打のめされて了ひました。幾ら掘つても、黄金の鷄が晨を告げる道理は有りません。

空中樓閣となり、畫餅となつた山田は、全精氣を此時に消耗し盡して、氣ぬけがしたやうになり、影法師の如くフラ〳〵して居ましたが、死んでまで男を操る淀君の夢の中の靈、失敗した塹濠の無駄掘、そんな事を胸に描きつゝ、怨めしさうに時折濠端を徘徊してゐました。事業には失敗する、世間には顏向ならず、遂に死を決して、小雨そぼふる夕暮に、發掘跡の深淵に身を投げて自殺を企だてました。

然し幸ひな事に、自分の配下に使つた事の有る久藏といふ男が、偶然其場を通り合せ、投身と見るや、健氣に飛込むで救ひ上げて見ると、舊雇主の山田だつたのです。さうして不思議な事には、半死半生になつて居る山田の右手に、堅く握つてゐたのは靑錆の噴いた握拳大の金色した鈴でした。醍醐の花見の護花鈴か何か知りませんが、彼は身を投げて底深く沈み、苦しみ踠いて居る中に、我知らず手に握つて來たのでした金鍍金か、誠の黄金か知りませんが、彼は水中に於て、淀君の靈が賜はつたので、純金に相違ないと堅く信じ、明治二十六年、天壽で寂しく死ぬまで、一生涯手放しませんでした。



（をはり）

憂國の士細井肇先生著「日本の決意」をお覽なさい、本書は眞に國難日本必生の道を說いた萬民必讀の國民讀本です。
（定價五十錢　送料八錢　本社發行）

長篇現代小說

東京哀歌

加藤武雄

山川秀峰畫

「直接には、別にどういふ關係も無いので御座います。えゝ、別にお友達つてわけでも。奈々子さんの方では、私の事なんか御存じ無いかも知れません。」

「それなのに、何うして？」

と、二三子は訊いたが、襟子は答へ無かつた。襟子は、張りつめた表情で、眞直に眼を見据ゑてゐた。一刻も早く奈々子に會はなければ――奈々子を、あの怖ろしい惡魔の手から救ひ出さなければ――と、襟子の心はそれで一ぱいだつた。

その夜・第一景

「何だか、私にはわかりません。あなたと奈々子さんとは、何ういふ御關係なんでございます？」

駛り出した自動車の中で、二三子は訊いた。遮二無二と、襟子から急き立てられて、二三子は、襟子を奈々子に會はせる爲めに、今、自分の寓へ戻つて行くところだつた。

「伴さんて方は、あなたとお親しくしていらッしやいますの？」

二三子の方では、訊き度い事、訊かなければならない事が澤山あつた。

「いゝえ、それ程、お親しいッてわけではありません。」

「奈々子さんは、何か大變苦んでいらッしやるんです。それで私、その苦みの原因が伴さんて方にあるのぢや無いかと思つて――それで、今日、伴さんをお訪ねしたんで御座いますけど――。」

二三子は、一語一語に、襟子の顔色をうかゞふやうにしながら、

「私、若しかしたら、奈々子さんが、その伴さんて方を愛してゐるのぢや無いかと思ふんですけど――そんな點で、何か御氣附きはございませんか知ら？」

「私、宜く存じませんけど――多分、然うだと……然うだと思ひます。」

「矢張ね。」

二三子は、溜息と共にうなづいた。そして、やゝしばらく、躊躇の末、その探り足の一歩を、思ひ切つて踏み込んで見ると云ふ風にして問ひ進めた。

「それで、その方の方では、――伴さんて方の方では何うなんで御座いませう？」

襟子にとつて、それは此上も無い慘酷な問ひだつた。が、問はれた以上、襟子は答へ無ければならなかつた。

「伴さんの方でも、愛していらッしやるのだと思ひます。」

純情の青年伴廉吉が、命をかけて思慕する從妹の奈々子は、今や柴田と名乘る恐しい獸人の魔手に陷らうとして居る。此秘密に逸早く氣附いたのは、其廉吉に人知れぬ戀情を寄せる可憐な女給襟子だつた。彼女は廉吉を愛すればこそ、其畢生の戀人の危急を默視出來なかつた。苦い〳〵體驗に依て、柴田の獸性を殘らず知る彼女は、どうがなして奈々子の危急を救はうと思ひ、折よくも邂逅した奈々子の友人二三子に向ひ、『一刻も早く奈々子さんに會はせて下さい。』と、前後を忘れて呼びかけた。(前號迄の梗概)

『それぢや、お互ひに愛してゐながら、何うにもならないツて云ふやうな事情があるので御座いますわね。』

『えゝ、多分。――でも、そんな事は私には判りません。』

襟子は喘ぐやうに云つた。

『それで、あなたが、奈々子さんにお會ひになり度いツてのは？』

『奈々子さんは、今、何をしていらツしやるので御座いますの？』

襟子は、答へる前に問うた。

『何を？――あゝ、お仕事のこと？　奈々子さんはダンサアになつていらツしやるんですの。』

『ダンサア？』

襟子はうなづいて、

『私、奈々子さんにお目にかゝつて、注意して差上げ度いんですの。奈々子さんは、今、大へん危險な場合に立つていらツしやいます。』

『危險な場合に？』

二三子は色を變へた。

『えゝ、惡い男と近附いていらツしやいます。惡い、怖ろしい男と――。私、奈々子さんがその男と一緒にいらツしやるところをお見掛けしたので御座います。』

『まあ！』

『そして、何うかしてお目にかゝつて御注意申上げ度いと思つてゐたんですけど、御住所がわからないので――でも、本當に宜う御座いました。あなたにいらしツて頂けて――。』

二三子にはわからなかつた。然う深い知合でも無いといふ奈々子の爲に、此の人が何うしてこんなに一生懸命になつてゐるのか？　が、そんな疑問に拘泥してゐられる場合では無かつた。襟子の態度なり、語氣なりに、ひどく切迫したものが感じられた。二三子自身にもほのかに豫感せられてゐた不安――それが、はつきりとした象を彼女の前に現はした。

『その惡い男ツてのは？』

二三子は訊かずには居られ無かつた。

『まるで、惡魔なんですの。あんな怖ろしい男とかゝり合つたら、どんな事になるか知れません。』

『まあ！』

と、二三子は息を呑んで、

『何うしたと云ふんでせう。奈々子さんは――。そんな怖ろしい男と？』

そんな會話のうちに、自動車は二三子の寓に着いた。未だホ

オルへ出掛ける時刻には間があるので、奈々子は寓に居る筈だつた。

が、奈々子は居無かつた。たつた今、出掛けたといふのだつた。

『まあ、もう出掛けたの？』

『お勤め先の方へでは無かつたやうですよ。』

と、階下の主婦が云つた。

『自動車の運轉手か何かが名刺をもつて迎へに來て、それを見ると、奈々子さん、大急ぎでお支度をしてお出掛けでしたよ。そこの角のところに、立派な自動車が停まつて、立派な旦那さんが乘つてゐて、奈々子さんの出て行くのを待つてゐたッてことですよ。私や見やしませんでしたがね。』

『まあ！』

二三子は、襟子と顏を見合はせた。

『屹度、屹度、あの男ですわ！』

襟子は眞靑になつた。

その自動車が何處へ奈々子を乘せて行つたかが、判らない以上、策の施しやうも無かつた。自分が居合はせさへしたら、どんな事をしてでも引止めたのにと、二三子は口惜しがつた。

二三子は、少し經つてから、近所の公衆電話へ飛んで行つて、ダンス・ホオルの方へ電話を掛けて見た。未だ來無いといふ返事だつた。――一時間ばかりして、もう一度掛けて見たが、矢張、未だ來ないといふ返事だつた。

ホオルの方を休んで、その紳士と何處かへ行つたのだ。

そしてその迎へに來た紳士といふのは、疑ひも無くあの重田なのだ！　然う思ふと、襟子は、もう居ても起つても居られ無かつた。自分の眼に見えぬところで、何か非常に怖ろしい事が起つてゐる――。その凶々しい映像の前に、襟子はわなゝき慄へるのだつた。

重田がどんな男かを知らない二三子は、併し、その不安も恐怖も、襟子ほど鋭い實感としては感じられぬらしかつた。

『でも、そのうち歸つて來るでせう。昨夜、私、ずゐ分云つて上げたから、今夜はそんなに遲くはならないでせう？』

二三子は、却て慰め顏に、そんな風に云つたが、襟子には、その香氣さが腹立たしい氣がした。

『奈々子さんが、その男と一緖にゐるところを、何時御覽になつたんですの？』

息づまるやうな無言の後に、二三子が訊いた。

『昨夜ですの？』

『昨夜――何處で？』

『銀座の珈琲店で。私、珈琲店に出て居りますの。』
『あ、然う？ 實は私も珈琲店に出て居るんですの。』
二三子は、一寸、親みを含んだ微笑を見せたが、襟子は、にこりともせずに、
『奈々子さんは、いつ頃から、あの男と知合になつたのでせう？』
『さあ、私も、そこんところ、はつきりとは存じませんの。大へん、親切にして呉れる立派な紳士があるツて、昨夜もそんな事を話してゐましたから、私、決して油斷しちやいけないツて、昨夜も呉々も云つたのですけれど――。』
二三子は、然う云ひながら、ふと、机の上に眼をやつた。机の上にのつてゐる一枚の名刺が二三子の眼についた。何氣無くそれをとりあげて見て、
『あ、これですわ。これが、その男の名刺ですわ。』
襟子は、奪ひ取るやうにして、その名刺を見た。
（柴田敏夫）とあつて、その肩のところに、
（お迎へにまゐりました。直ぐにお出掛け下さい）
と、走り書きがしてあつた。

柴田敏夫――それが、重田俊行の變名である事は疑ふ迄も無かつた。走り書きの筆蹟にも覺えがあつた。襟子は、その名刺の端に刷り込まれてある住所を、
（麻布區××町×××番地）
と讀み取ると、
『この男ですわ。私、これから直ぐに、此の男のところへ行つて見ます！』

云ふより早く起ちあがりかけた。
『あなたがいらツしやるなら、私も一緒にまゐります。』

『いゝえ。私一人でまゐります。』
襟子は、青白い頬に異常な決心を浮べて云つた。
『でも、そんな怖ろしい男のところへ？──まあ、待つて下さい。それに、今行つたつて、まだ戻つては居無いかも知れませんわ。』
『兎に角、私行つて見ます。いゝえ、斯うしてあの男の居るところさへ判れば、私、どんな事をしてたつて、奈々子さんを救ひ出して上げますわ。では、御免下さいませ。』
云ひ捨てると、襟子は、二三子の答へをも待たずに、階段を駆け降りて行つた。まるで物に憑かれたやうな様子だつた。
襟子は、二三子の家を出ると、帯の間から、その名刺を出し

て、そこに記されてある重田の住所を讀み直した。麻布××町と云へば、こゝから、然う遠くは無い筈だつた。すぐその足で、と思つたが、思ひ直して一應自分の家に引返す事にした。

『あら、姉ちやん、戻つて來たの？』

黄昏の部屋に、しよんぼりと坐つてゐたるり子が云つた。

『えゝ、一寸忘れものをしたのよ。』

襟子は押入を開けて、何か物を搔き探るやうにした。

『何、探すの？』

『何でも無いのよ。』

探しあてたものを、帶の間にしつかりと挾むと、さりげ無い顏をるり子に戻して、

『もう電氣をつけなきやいけないわ。そんな暗いところで讀んでゐると眼を惡くするわ。』

『えゝ。』

るり子は、讀んでゐた雜誌を膝の上から除けると、

『何うかしたの？　姉ちやん。』

襟子の、啻ならぬ樣子が、るり子の注意を惹いたのだつた。るり子は、異常な昂奮と緊張とを見せた姉の顏を、いぶかしげに打戍つた。

『何でも無いのよ。お隣のお兄さん、未だ歸つていらツしやらない？』

『先刻歸つて來たの。でも、歸ると直ぐにお客樣なの。』

『お客樣？』

『えゝ。頭の禿げたおとしよりの人よ。』

『然う？』

襟子は、一寸の間、隣室の氣配に耳をたてゐるやうにしてゐたが、ふと、思ひついたやうに、卓の傍に寄つて行つて、抽出しから書簡箋を出して、鉛筆で二三行の走り書きをした。そして封に入れると、封筒の表に（伴廉吉樣）と書いた。

『お手紙？』

るり子が覗き込んだ。

『お隣のお兄さんへ上げるの？』

『上げ無くてもいゝの。若し、あとで、私の事をお兄さんがおきゝになつたら、その時これを上げるのよ。あとで――あとになつてからよ。』

『あとで？　あとになつてから？』

『えゝ。』

るり子は腑に落ち無さうな顏をした。

『るりちやん！』

襟子は、いきなり、るり子を抱き寄せると、力一ぱい抱き締めて、

『姉さんは馬鹿な女だわ！　――でも、あんたも今に大きくなつたら、姉さんの氣持がわかる時が來るわ。』
『何云つてるの？　姉さん。』
るり子は、けげんさうに瞬きをした。襟子の眼からは涙が流れた。
『あら、姉さん。』
るり子は、びつくりして、涙に濡れた姉の顏を見つめた。

その夜・第二景

廉吉は、その時、絶體絶命といふやうな氣持で、その突然の訪問者と相對してゐた。それは、青江家――奈々子の家の執事の大崎老人だつた。
『や、どうも、こんな處にいらツしやらうとは――？』
と、大崎は部屋にはひつて來るなり云つた。
『ぢや、あれから、ずうツと、こゝにお住居だつたので？』
大崎は、青江家の人々が然う信じてゐるやうに、廉吉が奈々子と結婚生活を營んでゐると信じてゐた。奈々子の父の欽藏の意を傳へる可く、廉吉の住所を此處彼處と探し歩いて、探しあぐねた末に、廉吉が曾て住んでゐた此のアパアトで訊いたら、何かの手蔓が得られるだらうと、それでこゝへやつて來て見ると、廉吉は相變らずこゝに居たのである。大崎は、餘りにも殺風景な部屋の様子を、きよと〳〵と見廻しながら、
『こゝにおすまひだと知つたら、何も大骨折つて探し廻ることは無かつたのです。ぢや、お孃樣も、こゝに御一緒で？』
廉吉は當惑して、
『もう一つ部屋が借りてあるのです。』
『もう一つ？　なるほど。』
『だが、奈々子さんは――奈々子は、今日は留守なのです。』、
事實を告白するには、それだけの用意が要る。今のところは兎に角一時を糊塗する外は無い。廉吉の答へは苦しかつた。
『お留守で？　なるほど。』
大崎老人は、覺束無げにうなづいて、
『こんな事を申しちや、あんたには失禮になるが、お孃樣も、斯う云ふお生活は、ずゐ分、えらい事でせうな。今まで斯うして、抛ツて置くなどと、旦那樣も全く氣がお強いといふもので――ところで、伴さん。氣のお強い旦那樣も、今度といふ今度、すつかり折れておしまひになりましてな。』
『はあ。』
『實は旦那樣は、一月ばかり以來、御病氣でしてな。昨今のところ、仲々御重態なので御座います。』
『御重態？』

『輕い腦溢血で、お倒れになつたのですが、どうも思はしくない御容態でしてな。紐育の若旦那様の方へも電報をお打ちしたやうなわけでして――それで、お嬢様にも、是非會ひ度いと仰有るので御座います。考へて見れば、彼女も可哀さうなものだ。件も眞面目な男だし、改めて結婚を許してやる事にして、邸へも出入させようし、又、生活の方の面倒も見てやる事にしようと、斯う仰有るのです。』

『然うですか？ それは――。』

廉吉の額には、冷たい汗が滲んだ。

『いや、今までにも、十分そのお氣持はおありだつたのですが。何せ、御存知の通り、奥様は、お嬢様とは生さぬ仲といふわけで、その奥様の前もある事で――そこが、仲々むつかしいところでな。』

『それは、判つて居ります。』

他の聲のやうな聲で廉吉は答へた。

『ところで、然ういふわけですから、今夜にも、あなた方をお伴れしようと思つてまゐつたのですが――何せ、御病人の事ですし、思ひ立つと又性急な御性分なのでな。』

廉吉は、ぎゆう／＼と押しつめられた氣持だつた。何う答へやうも無い――。

『お嬢様のお出掛け先が、わかつて居りましたら、私がお迎へにあがつて宜しいのですが――。』

『それが、一寸わからないのですが――。』

『では、お歸り次第、お伴れ下さるやうに。』

『はあ。』

と、廉吉は重苦しくうなづいて見せて、

『叔父様は、そんなに酷くお惡いのでせうか？』

『一日二日を爭ふといふ程ぢや無いのですが――。』

と、大崎老人は、憂はしげな顏を、靜かに振つて見せて、

『兎に角、容易ならん重態で、いらツしやるのですよ。』

『そんな事とは、些とも知りませんでした。』

『お嬢様も、嘸、吃驚なさる事でせう？ ぢや、どうぞ、今晩にも――と云ひ度いところですが、今晩お歸りが遲くていらツしやるやうでしたら、明日はお早くいらしつて下さいまするやう。私は、早速歸りまして、旦那様に御報告申上げます。何せ、お住所が判らんので、此の私も大苦勞でしたよ。』

大崎は歸つて行つた。

大崎が歸つたあと、廉吉は、茫然自失といふ態で、そこに坐り續けてゐた。奈々子の父はその死の床で奈々子を呼んでゐる。だが、奈々子は何うしてゐるか？ 廉吉は、その後の奈々子の

消息については何にも知らないのだ。

——どう、すればいゝか？

——どうしやうも無い！

　どうしやうとも無い——と云つて、この儘に抛つては措け無い。どんな事をしてでも、奈々子を探し出して、その父の許に伴れて行か無ければ——。

　扉が開いた。るり子の、くるりと圓い眼が覗いた。

『お兄さん。お客様、もう歸つたの？』

『あゝ、もう歸つた。』

『あのね、姉ちやん、へんなのよ。』

『姉ちやんが、何うかしたの？』

『私を抱いて、涙をぽろ〳〵と溢して——そして去つちやつたの。』

『然う？』

『そしてね。』

　るり子は、衣嚢の中に手を入れた。今、姉の遺して行つた手紙がそこにはひつて居た。るり子は、それを出して廉吉に見せようと思つた。が、直ぐに思ひ返した。矢張、いけない。あとになつて見せるのだと姉ちやんは云つてゐた。だから、今見せてはいけない——。

　廉吉は、いつものやうにるり子の相手にならなかつた。彼はつと立ちあがると、壁にかけてある外套を取つた。

『あら、又、お出掛け？』

『あゝ、出掛けるんだ。』

　廉吉は、お愛想一つ云はずに、るり子をそこに殘して、ことりことりと階段を降りて行つた。るり子は、泣き出しさうな顔で、そのうしろ姿が、肩だけになり、頭だけになるのを、階段の降り口で見送つてゐた。

その夜・第二景

　それから二三十分の後、廉吉は、小日向臺町の、樺山行雄の家の門に立つてゐた。若しかしたら、樺山が奈々子の行衛を知つてゐるかも知れない。別れてしまひはしても、何かの交渉が、二人の間に續いてゐないものでも無いから——と、然う思つて、廉吉は訪ねて來たのであつた。

　案内を請ふと、客間に通されたが、行雄が姿を現はしたのは、二十分も待たされてからであつた。

　行雄は、はひつて來るなり、露骨に敵意を示した眼で、じろりと廉吉を見て、

『何か御用ですか？』

と、もう喧嘩腰だつた。

『少しお尋ねしたい事があつて、うかゞつたのです。』

『何ですか？』

『奈々子さんは、今何處に居るんでせう。御存じは無いでせうか？』

『へんなお尋ねですね？』

『至急、奈々子さんに會ひ度い事があるのです。御存じだつたら教へて下さい。』

廉吉は、單刀直入に云つた。相手の思はくなどは顧慮してゐられない、切迫詰まつた氣持だつた。

『は、は！』

と、行雄は冷たく笑つて、

『奈々子は君の細君ぢや無いですか？ 奈々子が何處に居るか何うして居るか？ 君自身一番よく知つてる筈ぢやあ無いですか？ 何だつて、僕のとこなどへ訊きに來るのです？』

『樺山君、君は未だ誤解してゐる――。』

『誤解？ 誤解とさへ云やいゝ氣になつて。他を愚弄するのも好い加減にしたら何うだ？』

行雄の言葉附には、亂暴と云ふ以上、野卑な調子があつた。暗い眼の色にも、頬のあたりの骨立つた險しい顔附にも、放縱な生活からの荒みが見られた。

『愚弄などと、それが君の誤解です。是非奈々子さんに會はなきやならない事があるのです。知つてゐたら教へて呉れ給へ。』

『丁度、そんな風に、僕も君に賴んだ事があるね。だが、その時、君あ、どんな返事を僕にして呉れたね？』

『僕は本當に知ら無いのです。』

何處までも下手に出て、一生懸命に哀願する廉吉の顔を、行雄は、小馬鹿にしたやうな眼附で、まじ〳〵と眺めてゐたが、

『わかつた！ 君は、ぢやあ、奈々子に逃げられたんだな？』

そんな誤解は何うでも宜かつた。廉吉は、唯、奈々子が、何處に居るかを知りさへすれば宜いのだつた。

『は、は！ 君も逃げられたんだな。そして、血眼になつて、あとを追蒐け廻してるッてわけか？ 因果應酬ッて奴だ。思ひ知つたか？ とでも云ひ度いところだね。』

『君が思ひ度い通りに思つて呉れ給へ。僕は是非あの人に會はなきやならない事があるのだ。』

『は、は、は！ 逃げられたのだ！ 逃げられたのだ！』

行雄は、さも愉快さうに聲をあげて笑つて、

『どうして、あの女は君なんかの手におへる女ぢや無いからな。

——僕も可笑しいとは思つてゐたのだ。あの女が、ダンサアになつてゐるなんて——。』

（ダンサアになつてゐる）——それを聞咎めた廉吉は、

『ダンサア？』

屹となつて問ひ返した。

『——といふ噂だね？　は、は！』

と行雄は笑つて、

『伴君。君に忠告するがね。グラン・ブルジョアの令嬢から、ダンサアになる位の女だ。とても君の手にやおへないだらう？　まあ、思ひ切る事だぜ。——いや、斯うなると、轉た同情に堪へんといふわけさ。男性同志の情誼として忠告してあげるんだ。思ひ切り給へ。』

『ダンサアになつて、何處のダンス・ホオルに出てゐるんです？』

『赤坂の帝京ダンス・ホオル。僕あ、會つた事は無いが、何でもそんな噂だ。』

『然うですか？　それだけ訊けば——や、どうも有りがたう？』

廉吉は頭を下げて禮を云つた。

『あの時、あゝして僕を追ひ返した君と、かうして敎へてあげる僕と、一體何方が紳士的かね？』

行雄は嘲るやうに笑つた。

『ありがたう！　どうもお邪魔しました。』

廉吉はさう云ふと、そゝくさとそこを辭した。一刻も早く奈々子に會ひ度い——その事しか考へ無い廉吉は、行雄の家を出ると、タキシを拾つて、赤坂のダンス・ホオルに走らせた。

自動車は間も無く、そこに着いた。

ダンス・ホオル——などといふものは、廉吉にとつて全く未知の世界だつた。廉吉は、階段を上ると、少し氣おくれしたやうに、そのホオルへはひつて行つた。

眼に見えぬ泉のやうにバンドから湧き起る樂の音、さま〴〵の色彩をカクテルにしたほの暗い照明、袖を飜しながら、スカアトをひらめかしながら、幾十百の胡蝶のやうに、それ〴〵の相手に抱かれてくる〳〵と舞つてゐるダンサア達——。

それが、タンゴだかワルツだかをさへ知らない廉吉だつた。廉吉は、唯、瞳を凝らして、そのダンサア達の中を物色した。みんな同じやうな顏に見えた。夢の中の光景のやうな朧ろげな光線は、その中から、一つの顏を探し出すのを妨げた。

控への席も、踊りに來た人達で一ぱいだつた。その人達の群から、少しはなれたところに、一人の美しい婦人が、一人の紳士と何か囁き合つてゐた。

『どうしたんでせう？　居無いやうね。』
『居無いやうですね。』
『よしちやつたのか知ら？』
『さうぢや無いと思ひます。休んでゐるんでせう？』
『その男ツてのは、どんな男？　――その男、今夜は來て居無い？』
紳士は、そつとあたりを見廻すやうにして、
『來て居無いやうですね。』
『だけど、康夫さん、あんたも、案外駄目ね？』
『いや、どうも――。』
『少し、輕蔑したわ、私。』
『何しろ、あゝいふ凄いのがついてゐちやあ。』
『そんなに凄い男？』
『とても――。』
と、康夫は云つた。
『ギヤングですよ。それも、親分株だつてことですからね。』
『まあ、そんな奴。そんな奴が、こんなところへ來るのか知ら？』
『いや、見たところは、立派な紳士なんですよ。大學教授とでもいつたやうな恰好をしてゐるんですからね。』
『そんな奴とかゝり合つてあの女、ひどい眼に會ふわね。』
婦人の――それは、瑞枝だつた――瑞枝の顏には、邪惡な微笑が浮んだ。
『馬鹿な人！　立派な夫がある筈なのに。』
『え？　あの女、人の細君なんですか？』
『然うよ。』
『なあんだ？　ぢやあ――。』
康夫は、びつくりしたやうに、瑞枝の顏を見上げた。
『何もそんなに驚く事は無いわ。』
『驚く事は無いツて――一體、あんたは、どうして僕にそんなへんな註文を出したんです？』
『どうしてツて事も無いのよ。たゞ、一寸した氣まぐれなのよ。』
瑞枝は、白々と笑つて見せた。
『氣まぐれだけぢやあ無いでせう？　どうも何かわけがありさうだな？』
『テストよ。あんたは、ぢや、落第ね。――同じ狼にも、小さい狼と、大きな狼とがあるのね？』
『何ですツて？』
『あんたは、小さい狼よ。そんな大きな狼がついてるんぢや、小さい狼は、要らないわけね。』

『何を云つてるんです？』
康夫は、少しむつとした。
『兎に角、あなたはテストに落ちたのよ。狼になるなら、大きな狼になるもんよ。』
『だつて、他の細君ぢやあ――。』
『さうよ。他の細君なんかに、うつかりちよつかいを出すもんぢやあ無いわ。――ね、康夫さん、私も他の細君よ。』
瑞枝は、言葉は冗談らしく、しかし、その眼は嚴しく康夫の顏を見つめた。
と、その時、曲が止んだ。ぱつと明るくなつて、ダンサア達は、花の散るやうに崩れ、散つた花が枝に戻るやうにそれ〴〵の席に着いた。
『矢張、ゐないのね。』
すらりと並んだダンサア達を、もう一度眺め渡すと、
『矢張、ゐないやうね。つまんない、歸りませう。』
瑞枝は、さう云ひながら歩き出した。歩き出しながら、見るともなく見やつた瑞枝の眼に、客席のむかうの端れに立つてゐる一人の男の顏が映つた。
瑞枝は立ちすくんだ。
その、異常な熱心さで、ダンサア達の方を眺めてゐる男――それは廉吉だつた。絶えて久しい廉吉だつた！

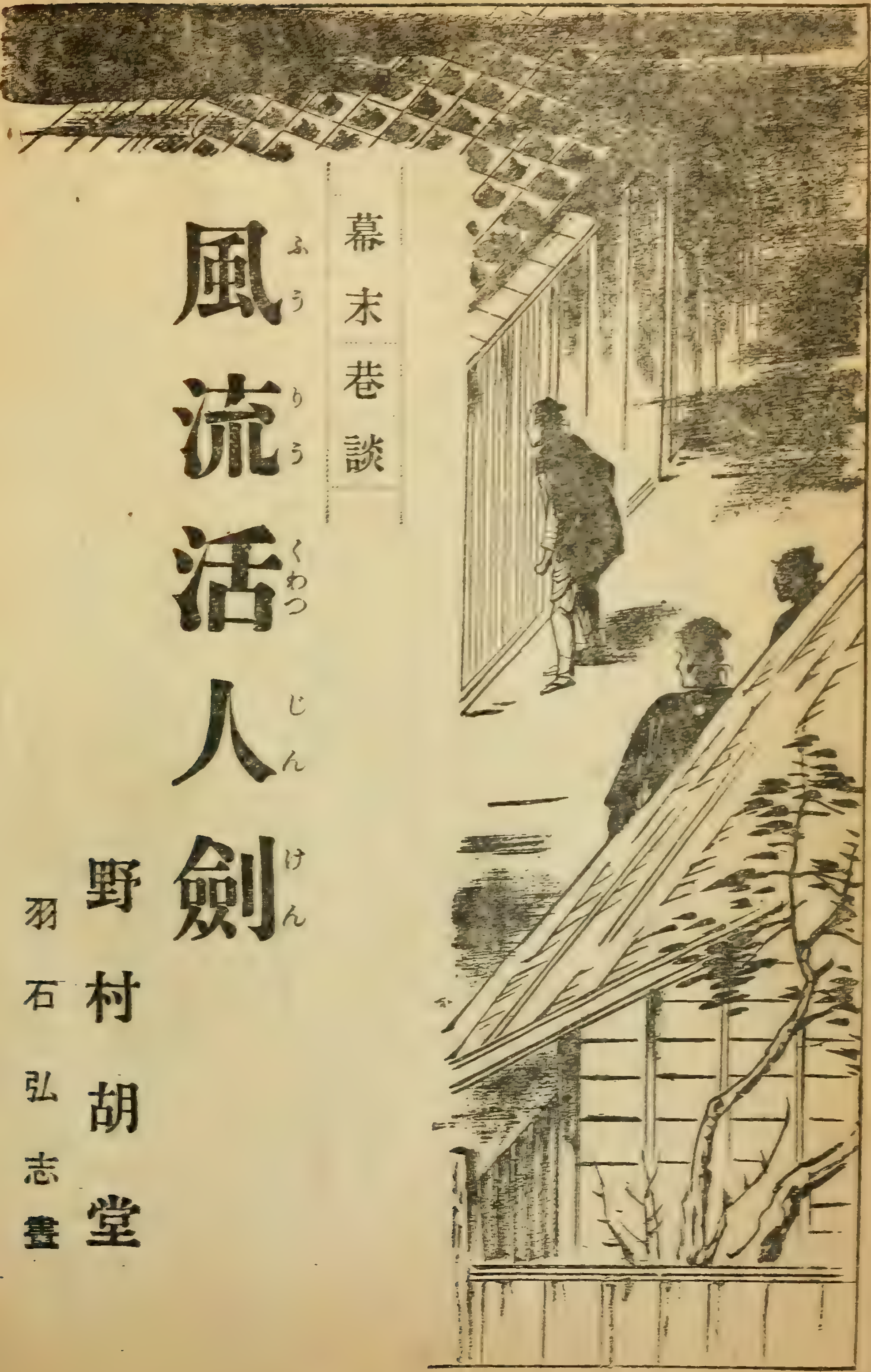
自分のまごころを蹈みにじり、自分の愛を古草履か何かのやうに取扱つた男、つれない男、にくい男！――瑞枝は思はず全身の血が湧き返るのを感じたが、その湧き返る血の底から、何とも云へぬなつかしさが、噴井の水のやうに迸りのぼつて來るのを制へる事が出來無かつた。
にくみよりももつと強いもの、恨みよりももつと強いもの、――にくみを凌ぎ恨みを超えて、ただ、一向に靡き寄る思ひ。瑞枝は、その思ひを制へる事が出來無かつた。
瑞枝は、我を忘れて、廉吉の方へ歩み寄つた。
『伴さん。』
呼ばれて、廉吉は、はつと眼を瞠つた。
『私よ。お忘れになりましたの？』
『や！　瑞枝さん。』
『しばらくで御座いましたわね。おかはりは御座いません？』
『ありがたう。あなたも――。』
廉吉は、じつと瑞枝を見た。昔の通り、美しく澄んだ眼であつた。
その美しく澄んだ廉吉の眼で見られると、瑞枝は、濁り荒んでゐる、今の自分の氣持がはづかしかつた。
『私は、この通り、すつかり變つてしまひました。』
瑞枝は、顏を伏せて云つた。
（つゞく）

幕末巷談

風流活人劍（ふうりうくわつじんけん）

野村胡堂

羽石弘志畫



村どんと玉ちゃん

―體術の玄妙―

「村どん。」

お玉は暖簾の間から半分顔を出して、惡戯つ子らしく、ニツコリしました。背丈も伸び切つて、美しさにハチ切れるやうな娘姿ですが、十五になつても、まだ童心が拔け切れない朗らかなお玉だつたのです。

> 妖女お蘭、怪少女お玉を先手とする錢五組の陰謀團、並にこれを援ける怪劍士篠原求馬の活躍は、幕府捕方を終始奔命に疲れさせた。だが此一味の埋藏する三十五萬兩の軍資金を、幕府財政建直しの爲に欲して止ぬ阿部伊勢守は、飽迄も彼等の追窮に苦心慘憺し、とゞ一味の怪手品師駒井駒造と呼ぶ老人を自邸に拉して、金の在處を鞫問しようとしたが、早くもそれを看破つた怪手品師は、突如電氣と物理學から割出した不思議な遁身術で、其訊問の座を遁れ去つた。所が其時訝しいかな此怪老爺は『天窮民を恤れむ』と挾紙した十個の千兩箱を、伊勢守の面前に殘してゐた。
>
> （前號迄の梗概）

「お呼びで御座るか。」

村之介は納戸の襖に凭れた身體を起して、パツの惡さうな顏を擧げました。遠州縞の袷に前垂掛、貝の口に結んだ帶まですつかり丁稚になり切つて居りますが、大前髮の艶、美玉の如き面は兎も角として、左樣然らばの侍言葉がすつかり打ち壞して了ひます。

「ホ、ホ、何んといふ言葉だらう、そんな丁稚はあるもんぢやない。」

「……………」

村之介は美しい眼をパチクリさせました、少し冗談氣があつたら「そんな娘つてあるもんぢや無い。」と言ひ度かつたでせう、お玉の調子はそれほどいけぞんざいだつたのです。

「お前さんは一體何をしに此處へ來て居るの。」

「質屋渡世見習。」

「それから？」

「お玉殿から體術の指南を受ける爲――」

『それから？』

『…………』

『戸棚や天井裏を覗いたり、物置へ潜り込んだりするのは、あれは何んの修業なの？』

『えツ。』

『先刻は井戸の中を半刻も見て居たぢやないの、間拔けな恰好つたら無かつたワ。』

『…………』

『二日二た晩の間に、お前さんの見ないところは、糠味噌桶の中だけさ、序にあの中も見ちや何う？』

『…………』

　村どんの大縣村之介は全く一言もありません、――篠原求馬の首よりは、三十五萬兩の隱し場所を探せ――と言つた、主君阿部伊勢守の心持をくんで、質屋の丁稚に住み込んだ翌る日から、機會ある每に加賀屋の家の中を探し廻つたのは、お玉に言はれる迄もなく、少し功を急ぎ過ぎた形だつたのです。

『そんな事ぢや良い番頭になれつこは無い、今のうちに追つ拂つて了へツて爺さんが言つて居るよ、それより體術の方を敎へてやらう、お出よ。』

　顏にも樣子にも似ず、何んと言ふ下司な口をきく娘でせう。

　それよりも村之介を驚かしたのは、いきなり跳び付いて、愚圖々々する手をグイと引かれた事でした。年は若いが相當鍛練を積んで、滅多に物驚きをしない村之介ですが、若くて美しい娘に、手を引かれたのはこれが始めての經驗です。

『あツ。』

　驚く隙もなく引張り出されたのは、狹い中庭、母屋と藏の間になつて、跳ぶにも駈けるにも不自由ですが、その代り、外からは滅多に見られる場所ではありません。

『こんな事が出來るかい。』

　お玉は母屋の庇を見上げて居りましたが、――エツ――と小さい掛聲を一つ、大地を蹴ると、身體は宙を飛んで、庇へ輕るく指先が掛ります。

　次の瞬間には、別段何處へ力が入る樣子も無いのに、お玉の身體はキリ〳〵と卷くやうに上つて、屋根の上へそつと立つて居ります。庇も鳴らず、裾も亂さず、實に非凡の輕業、見て居る方の胸がすきます。

『えツ。』

　續いて村之介、眞劍勝負のやうな掛聲を一つ、漸く庇へ飛付きましたが、勾配の付いた屋根の上へ、何う工面をしても這ひ上る工夫が付きません。

『さア、確りおしよ村どん、何んて不器用だらう、人が見たら吹き出すぢやないの。』

力づくで、モリ／＼這ひ上らうとする村之介の襟髮を取つて、お玉は辛くもこの體術のお弟子を引上げました。

ホツ、と太息、美少年村之介も、すつかり汗と埃になつて了ひましたが、それを見イ／＼、面白さうに笑ひ崩れるお玉を見ると、衣紋を直したり、汗を拭いたり、すつかり萎氣込んで了ひます。

『お前さんは武術の心得があつても、身體が堅いから駄目さ、私は子供の時から酢を呑まされて、十年も輕業の修業をしたんだもの。』

『…………』

村之介は默つてこの怪少女お玉――物を隱すことさへ知らない、純情的な娘を見やりました。言葉にも、仕ることにも似ず、それは又何んと言ふ美しさでせう、少し上氣て、ポーッと頰を染めたのさへ臈たけて、夕陽の庇の上へ膝を揃へた恰好は、全く筆にも口にも及びません。

『何んて騷だい、猫か、犬か。』

物音に驚いて、お勝手から飛出した主人の九兵衞、頭の上の庇に、寄り添ふやうに押し並んだ、美少年と美少女を見ると、すつかり面喰つて了ひました。

『やい／＼／＼何んて騷をするんだ、お玉坊もお轉婆が過ぎるぞツ。』

白髮首を振つて睨め上げると、昔錢五の千石積で、荒くれ男の船頭衆を叱り飛した鹽つ辛い調子が出て、思はず村之介も冷りとします。

『爺さん、體術のお稽古だよ、村どんがおいらに勝てないうちは、篠原の小父さんと立ち合ひが出來ないんだとさ。』

とお玉、九兵衞を見下してケロリとして居ります。

『馬鹿ツ、降りて來い、屋根が代無しだ。』

以ての外の九兵衞の前へ、

『此間、間拔けな捕方が荒したんで、屋根はどうせ滅茶々々だよ、直して置かなきア漏るよ。』

さう言ひ乍らお玉は、構も直さずにもんどり打ちました。足が庇を離れると、見事に蜻蛉返りを二つ、大輪の花が落ちたやうに、あつと言ふ間もなく、九兵衞の前へ立つて居ります。

『何んて事をするんだ、危いぢやないか。』

と九兵衞、

『大丈夫さ、爺さん、おいらは二三日凝として居ると、身體が熟んで仕樣が無いんだ、少しやらしておくれよ。』

『馬鹿なツ。』

と言つたが、九兵衞もこの娘が可愛くてなりません、高貴の血筋を引いて居ると判つて居るくせに、榮華も富貴も捨てて、お噺の娘分に甘んじ乍ら、精一杯無邪氣な我儘を發揮して居るお玉が、本當に孫のやうに思へて仕樣が無かつたのです。

『村どん御覽よ、今度は竹登り、これは千番に一番の兼合さ、首尾よく相勤めました節は、お手拍子位賴むよ。』

さう言ひ乍らお玉は、物干竿の逞ましいのを一本外して、狹い庭へトンと立てました。

『最初は鯉の瀧上り。』

何んと、娘になり切つたお玉が、赤い裾を膝に挾むと、大地の上の青竹へスル〳〵と登つて行くではありませんか。

『あツ。』

お玉の重みで、竹は斜に倒れました、九兵衞の口から漏れた驚きの聲は途中で消えて、竹の一端が三間ばかりもあらうと思ふ藏の庇に觸ると、お玉の身體は竹に添うて、逆樣にスツと伸びて、美しい鳥のやうに、土藏の大屋根に登つて了つたのです。

『危ねえ、何んてことをするんだ。』

吐き出すやうに言ふ九兵衞の上から、

『ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ。』

お玉の朗らかな笑ひが、春の大氣を搖がして響きます。

『お玉坊、宜い加減にして降りて來い、俺は水天宮樣へお詣りに行つて來るんだ。』

と下から九兵衞、

『姐さんは？』

『帳場に居るよ。』

『それぢや行つてお出よ、――あ、あ、村どん、爺さんと一緒に行つて見ない？』

『えツ。』

まだ母屋の庇の上に居る村之介は、お玉の言葉が腑に落ちない樣子で上と下と、兼合に見やりました。

『水天宮樣の賽錢箱に三十五萬兩隱してあるかも知れないぢやないの。』

『…………』

村之介はすつかり苦り切りましたが、九兵衞が出かけて行く樣子を見ると、それでも不安になつたものか、あわてて屋根から滑り降りて、

『お伴仕る。』

先へ廻つて格子を開けました。

『へツ、お伴仕ると來たね、――先觸れ、伴廻りの用意はよいか。』

九兵衞も飛んだ剽輕者でした。兩袖を突張ると、いそ／＼と飛んで來る娘のお蘭を顧みて、カラ／＼と笑ひました。

エレキの巢を破つて
駒造と鐵心

『何んの見張りだ。』

『あ、大藏先生。』

『黑船の、精が出る喃。』

『へエ――』

御用聞の黑船の丹七も挨拶に困りました。相手は町道場を開いて居る痩浪人、突つ離せばそれ迄ですが、何分近頃は、老中阿部伊勢守に喰ひ入つて、八丁堀の旦那衆とも懇意にして居る跛者劍客の大藏鐵心、迂濶な口をきいて、妙なところから睨まれてもつまりません。

『言ひ憎からう――、が俺にはよく解つて居る、手品師駒井駒造見張りの爲であらう。』

『へエ――』

場所は兩國。お京の隱れ家の路地に網を張つて、子分の朧の三太と鼻面を並べて居るのですから、これは大藏鐵心でなくとも、その奥に住んで居る、駒井駒造の見張りと見當が付きます。

『御老中阿部伊勢守樣の御前で、火惡戲をした不屆者、切支丹宗徒の疑までである駒造だ、なぜ踏込んで縛らぬ。』

大藏鐵心は、妙に嗾かけるやうな調子です。

『それは不可ません、先生、縛り度くもお許しが出ねえ。』

餘計な事を――と言はぬばかり、丹七も少し反抗的でした。

『お許し？　何處のお許しだ、お前は十手捕繩を預る身だらう。』

『へエ。』

『御老中に臭い焰硝を嗅がせた者を縛るのに、お許しが要ると言ふのか。』

『手品のことまではとがめ立ては出來ません、それにお土產が一萬兩だ。』

阿部伊勢守の緣側へ、千兩箱を十箇、杉なりに積んだ駒造の惡戲を、黑船の丹七も悉く承知して居たのです。

『何んだ氣が小さい、たつた一萬兩で謀反人同樣の曲者を見のがす氣か、――あの男は殘りの三十四萬兩の在所も知つて居るのだぞ。』

『へツ、それが何うしました。』

『締め上げて白狀させるんだ、大した手柄だぞ。』

『これが三十五兩位だとピンと來るが、三十五萬兩なんと來

た日には、ボーッとなるだけでこちとらには見當も付かねえ。』

暗の中から、朧の三太が口を出します。

『誰だ？』

『へエ、あつしで――』

『丹七の子分か、あつしと言ふ面ぢや無いぞ、馬の草鞋見たいな野郎だ。』

『へエ――』

『丹七、兎も角踏込んで見よう、伊勢守樣は三十五萬兩で一生懸命だ、駒造を引叩いて口を割らせると、俺は直參に御取立て、お前だつて、與力の株位にあり付けるかも知れない。』

『先生、あつしは？』と三太、

『又あつしか、お前は十手に赤い房が付く、――それで不足なら象眼でも入れて貰へッ。』

『へッ。』

『俺一人で踏込んで手柄をしようと思つたが、相手が惡いから十手を振り上げないと縛るキッカケにならない、――惡いやうにはしない、後で文句があつたら、此大藏鐵心が引受ける、サア。』

大藏鐵心は大跛者を引き乍ら路地の奥へ入つて行きました。

黑船の丹七と朧の三太も、その強大な意志の力に引摺られるやうに、その後に從つたのは言ふ迄もありません。

三人はお京の家の前を素通りして、駒井駒造の隱れ家の前に立止ると、暫らく何やら打合せました。やがて、

『今晩は、中の鄕の加賀屋から參りましたが。』

朧の三太が表を叩きます。

中では何をして居るのか、暫らく手間取りましたが、二度目の拳をあげて、

『今晩は。』

叩かうとする三太の前へ、板戸は五六寸ソッと開きました。

『何んだい。』

顏を出したのは紛れもない駒井駒造、五十過ぎの老實な顏が、後ろから背負つた灯に、少し傾きます。

『お蘭さんに賴まれて來ました、ちよいと耳を――』

『內緖の話なんかあるわけはねえ、用事なら其處で言つて貰はうか。』

駒造は用心深く闇を透します。

『此處ぢや話が出來ねえ、中へ入れて貰はうか。』

『御免蒙らう。』

『え？』

『懷中に十手が突つ張つて居るぢやないか、そんな間拔けな人

間に用事は無い。』

駒造は身を引いて、ピシリと板戸を鎖さうとしましたが、いけません。

『御用ツ。』

三太は早くも片足を入れて、十手を振り翳ります。

『神妙にせい。』

と續く黒船の丹七、

『默れツ。』

駒井駒造は、一間ばかり飛退くと、行燈を小楯に二人の捕方を見詰めました。

『何が默れだ。』

『手品師の駒井駒造、すが無い渡世をして居るが、御用呼はりをされる覺えは無いぞ。』

『御老中面前に於て切支丹の邪法を行ひ、その上焔硝まで焚いて、逃げ亡せたお前だ、覺えは無いとは言はさぬぞ。』

『いや、御老中阿部伊勢守は、世にも聞えた名智の方、この駒造を縛る因縁は無い。』

『言ひ譯は役所でせい、三太、それツ。』

丹七に勵まされて、サツと飛込んだ三太、敷居を跨ぐと、

『あツ。』

釘付けになつて了ひました。

『三太、何をして居る。』

續く丹七、戸を蹴倒して飛込まうとすると、

『待つた丹七、うつかり入ると、蜘蛛の巣に掛るぞ。』

後ろから大藏鐵心、丹七を引戻すと、有合せの筵を一枚、小楯のやうにかざして、丹七が倒した板戸を踏んで入りました。筵に當つて、バラ／＼と手切れるのは、本當に蜘蛛の巣ほどの細い針金、三太はこれに引掛つて藻掻いて居たのです。

針金には駒造得意のエレキテールが通じてあつたのでせう、人間を立ち縮ませるほどでなくとも、觸ればピリ／＼來るのを、何んにも知らない三太は、突嗟の間に膽を奪はれたのでせう。

『お、庵原。』

『默れツ、諸葛。』

庵原山之丞、諸葛亮三郎の昔に返つて、二人は睨み合ひました。

『何用あつて來た。』

と駒井駒造の諸葛亮三郎、一歩退つて身構へました。

『知れたこと、阿部伊勢守様の御指圖で、其方を縛る爲だ。』

大藏鐵心の庵原山之丞はそれを追ひ詰めるやうに一歩進みました。

同門と言つても、年齢は十以上に違ふでせう、駒井駒造の胡麻鹽になつた頭、地味な木綿縞物の袷に比べて、太藏鐵心は跛こそ引け、苦蟲を噛み潰したやうな面構ですが、月代もまだ青青と、黑羽二重の着流しも、何んとなく豪勢です。

『馬鹿な事をツ。』

『何が馬鹿だ、切支丹のエレキテールなどを用ひて、愚民を惑はす不屈な奴、――丹七、それ。』

鐵心が片手を擧げると、兩掖から丹七と三太、

『御用ツ。』

バツタのやうに飛付きました。がいけません。

『無禮者ツ。』

左手を鉾に、屹と睨む駒造の眼は、兩國の見世物小屋で、猛虎を睨み縮めるのを賣物にして居る名題の眼力です。打見たところ、何んの他愛も無い中老人ですが、これにハタと睨まれると、大抵の人間はエレキを掛けられた蛙のやうになるのですから、鍛練の力は恐ろしいものです。

『えツ、それしきの事に驚く奴があるか、退け〳〵。』

大藏鐵心は二人を掻き退けて正面に立ちました。當時の大劍豪、千葉定吉を驚かしたといふ腕前、邪惡な太刀筋には相違ありませんが、これは容易ならぬ達人です。その上、駒井駒造と同門で、精神術にも、忍術にも通じた曲者、劍道に晦いだけに、この立ち合は、駒井駒造の方に七分の弱味があります。

小判、小判、小判

秘密の穴の奥に

まだ宵、近所の衆も起きて居る筈ですが、この騒に脅えて顏を出す者もありません、いや、顏を出すどころの沙汰か、バタバタと戸を閉めて、單ら掛り合ひにならない工夫をするのが精精の有樣、薄情なやうですが、幕末の江戸の物騒さは、全くさうでもするより外に自衛の道が無かつたのです。

『己れツ、奸盜。』

駒井駒造は、兎もすれば壓倒される氣力を振ひ起して、正面から鐵心を睨み据ゑました。

『獸並に扱ふと當が違ふぞ、それツ。』

サツと拔いた一刀、駒造の鼻の先を撫でてスーと闇を劈きます。

『あツ。』

非凡の精神力を持つた駒造ですが、悲しいことに劍法を知りません、紫電一閃、サツと面を撫でると、思はずハツと氣合の破れを生じます、それを付け入つた大藏鐵心、

『えーッ。』

と寄ると猛烈な體當り、駒造は、脆くものけ樣に倒れました。

『それッ。』

顎をしやくると、飛付いた丹七と三太、

『神妙にせい。』

あッと言ふ間に雁字がらめにされます。

大藏鐵心はそれを外へ引出させて、一とわたり、隱れ家の中を見廻しました。行燈を片手に、お勝手から居間へ、たつた一つの奥の六疊へ、それから、押入、戸棚、落し、裏板、と一わたり探しましたが、三十五萬兩は愚か、ろくな調度もありません。

『チエッ。』

舌打を一つ、外へ出て來るのを迎へて、

『先生、金は？』

丹七が顏を出します。

『此處へ置くやうな馬鹿でもあるまい、喃諸葛。』

『…………』

大藏鐵心に差覗かれると

縛られたまゝ駒井駒造は、やけに外方を向いて了ひました。

『先生、引揚げませう。』

『待て〳〵もう一つ見て置くものがある。』

丹七を待たせて、大藏鐵心の足は、壁隣のお京の隱れ家に向つて居りました。

『庵原、罪が深や――、其處は見るな。』

縛られたまゝ乍ら、駒井駒造は氣が氣ぢやありません、雇ひ婆さんは夕方から留守で、家の中には、美しいお京がたつた一人居る筈、其處へ狒々のやうに多情で、ゴリラのやうに狂暴な大藏鐵心の庵原山之丞が入つて行つたら、何んな事になるかも解らなかつたのです。

『爾う言はれると見たくなるから不思議さ。』

大藏鐵心は、お勝手の戸へ手を掛けて、力任せに引開けようとしましたが、鍵が掛つて居るのか、ビクともしません。

拳をあげて二つ三つ叩きましたが、もとより應のある筈もなく、中は森閑として、人の居る氣合も無かつたのです。

『よしッ、その儀なら。』

鐵心は朝比奈門破りの型に、朽ちかけたお勝手の戸へ構へました。

『庵原、其處には何んにも無い、頼むから止せ。』

と駒井駒造、全く氣が氣でない様子です。

『馬鹿ッ、俺は頼まれた事を聽いた例の無い人間だ、面白いものを見せてやる、默つて見物せえ。』

容赦も躊躇もありません、力任せにウムと押すと、古い杉戸はメリ〳〵ッと碎けて、今までそれを押へて居たらしい、お京の必死の姿――少し取亂して艶かしくさへある美しい姿

——は、
『あッ。』
と言ふ間もなく板敷の上に倒れて了ひました。
『お蘭は何うした、——どつこい、お前でも宜い。』
鐵心の手が伸びると、飛起き樣逃出さうとするお京は、襟首を摑んでズル〳〵と引戻されます。
『あれツ。』
『騷ぐな娘、お前はお蘭より若いだけが取柄だ、道場へつれて行つて、可愛がつてやる。』
何んと言ふ無法でせう、藻搔き拔くお京を横抱きに、鐵心はお勝手口へヌッと出ました。世を忍ぶ姿乍ら、手觸りのゾロリとした身扮も、馥郁たる香料の香も、中年男の爛れ切つた鐵心の腸をかき亂すに充分でした。
身體を捻つて、灯に照すと、亂るゝ紅、白脛、玉を伸べた首筋が捻れて、ガックリ島田の根が弛むのを合圖のやうに、
『タ、助けてエ——』
ツイ娘らしい悲鳴をあげて了ひます。
『ハツ、ハツ、ハツ、これは良い、もう一つ張上げて見な、その邊から武者修業が飛出すかも知れぬぞ。』
鐵心は頰を歪めて、苦々と笑ひました。
ギュッと抱きすくめると、骨細な娘の身體は、鐵腕の中に消えて了ひさうですが、そのくせ、豐かな凝脂が、不思議に彈力的な手答を、鐵心に享樂させるのでせう。
『た、たすけ——て。』
振り仰ぐ顏は、少し逆上て、大きい黑い眼が、淚も無く泣いて居ります。
『中を探せ。』
お京を手放すのが惜かつたか、今度は三太を顎で指圖して、家の中をあさらせました。
行燈を片手に、暫らく家中を覗き廻つた三太、
『何んにもねえ。』
フラリとお勝手へ戻つた時でした。今まで三太の動きを熱心に見詰めて居た駒造、ホッと安堵の吐息を漏して、お京と顏を見合せます。
『待て〳〵、この家の中に金があるに相違ないぞ、——これ諸葛、どうせ知れることだ、器用に白狀して了つてはどうだ。』
大藏鐵心は、早くも駒造の唯ならぬ樣子を察して、詰め寄ります。
『言ひ度くない——と言つたところで、聽かずに濟ませる其方

『ではあるまい、何事も天命だ、如何にも金の在所を敎へてやらう。』

『あツ、駒井の小父樣。』

驚くお京を眼で制して、駒造は續けました。

『その代り、その娘、お京殿を放せ。』

『えツ。』

『お京殿を放したら、金の隱し場所を敎へてやらう。』

駒井駒造はさすがに拔目もなく交換條件を持出しました。

『いや、金の在所を言つたら、この娘を許さう。』

鐵心も拔目の無い商賣人です。

『馬鹿なツ。』

『でもなければ、此儘引揚げて、家一軒打ち壞して探すまでだ、喃、丹七。』

『さうですとも、先生。』

駒造の繩尻を取つた丹七も合槌を打ちます。

『よし／＼それでは仕方が無い、敎へてやらう、奥の部屋の床の間に掛けてある三幅對、あの眞ん中の日の出の幅をあげて見るが宜い、一寸判らないが、丁度掛物の幅に壁がガンドウ返しになつて居る、下の方を押すと口が開くから、其處を見るのだ、中に何があるか、それは言ふ迄もあるまい。』

駒造の說明を聞くと、三太は行燈を片手に大急ぎで奥の間へ飛込みました、見ると成程三幅對が掛つて、中のを上げて見ると、其下はガンドウ返しになつて居ります。

『何うだ。』

外から大藏鐵心、

『ガンドウ返しはあります。』

『中は、急いで見ろ。』

『待つて下さい。』

三太は言はれた通りその下部を押すと、壁の中にポカリと大穴が開いて、何やら箱のやうなもの――、手を入れてかき廻すと、ザクリと重い金の手觸りです。

引出して見ると、行燈の灯に燦として五六枚の小判が耀くのでした。

『有つたツ。』

三太は全く仰天して了ひました。

それを聞くと大藏鐵心、

『丹七、その男を逃すな。』

とたつた一言、さすがにお京を捨てゝ、家の中へ飛込みます。

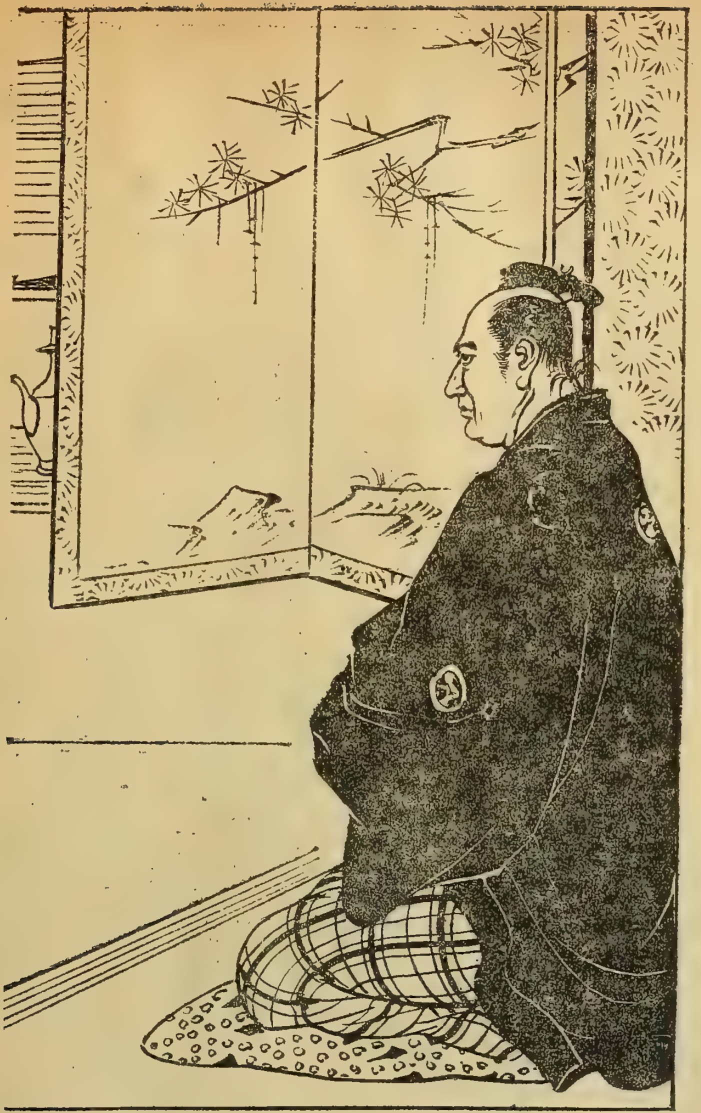
『先生、小判、小判、小判。』

眼の色を變へて騷ぐ三太を突き退けて、

『馬鹿ツ、小判が化けて出はしまいし。』

幅を外すと、ガンドウ返しを押して、行燈を差し入れました。が、中は鼻の先が支へるほどの小さい穴、箱と言つたところで、怪し氣な手箱が一つ、中に、小判がほんの二三十枚あるだけです。

『これは？』



鐵心は首を傾げましたが、思ひ直して、其邊の壁やら、穴の中やら、床板やらを叩いて見ましたが、外に箱らしいものも、金らしいものもありません。

『これだけか、金は？』

『ヘエ――』

『三十五萬兩にしてはあまり少いぞ。』

鐵心は默つて考へ込みました。三太のあわてた様子を見ると、ガンドウ返しがあつたり、穴があつたり、手を入れると金があつたりしたので、面喰つて大きい聲を出した事情も判らないではありません。

『ハツ、ハツ、ハツ、見付かつたか、庵原、其處には小出しの金が二三十兩ある筈だ、今夜の手間代には充分だらう。』

外からは駒井駒造、縛られ乍らも、宜い心持さうに高笑ひを飛ばします。

『己れツ。』

と大藏鐵心、歯嚙みをしたが追付きません、お京は宵闇の中へ逃込んで了つて、手に殘つたのは、三十五萬兩の萬分の一に足らぬ小判だけ、鐵心は思はず側に居る三太の髻を掴んでポカリとやつて居りました。

『めツ先生ツ。』

八丁堀へお蘭が

―命請の訴訟―

お京は其儘中の鄕へ一と走り、九兵衞やお蘭に事の仔細を話しました。

『何うしよう爺さん。』

お蘭は水天宮様から歸つたばかりの九兵衞の胸倉を取りさうな氣組でしたが、

『俺には何うもならねえ、こんな時は篠原様が居てくれると、何んとかなるんだが――』

さう言はれると、この年寄から、大した智惠が絞れさうも無いことをつく／＼感じます。

『村之介様。』

『ハイ。』

外に居た大縣村之介は、お蘭に呼ばれて皆んなの前へ出ました。

『お前さんは阿部伊勢守様の家來だわねえ。』

『左樣、三四日前までは、伊勢守樣家中に相違御座らぬ。』
『兩國の手品師駒井駒造といふ方が、大藏鐵心と岡つ引の丹七に縛られて行きなすつたが、いゝいゝ指圖は伊勢守樣から出たといふ話さ、お前さんちよいと御主のところへ歸つて、貰ひ下げて來て下さいません？』
お蘭はいとも手輕なことのやうに言ひますが、
『それはなりません。』
村之介は疊へめり込むほど落付いて了ひました。
『何がならないんだえ。』
『元のお主には相違ありませんが、永の御暇を頂いた上は、最早御目通りも叶はず、よしんば、御近く參つても、左樣な事は申上げられません。』
『本當？　村之介樣。』
『致し方も無い事で御座います。』
『チェッ、馬鹿にして居るよ、御主と緣が切れたやうな顏をしたつて、物置や戸棚ばかり嗅ぎ廻つて、玉ちやんにまでからかはれりや世話は無いやね、お前さん見たいな猫つ被りの大噓吐きは無いよ。』
『…………』
『爺さんを撫めて、此處へ置いてやつた私の親切も知らずに、何んて圖々しいんだらう、だから私は侍が嫌ひさ。』
『…………』
『村之介樣が聞いて呆れらア、村どんの村公の村野郎、今度はお主のお蘭樣の言ひ付けだよ、キリ〳〵阿部伊勢守の屋敷へ行つて、駒井駒造といふ意氣な小父さんを伴れて來な、それが出來なきア、給金を出さないよ、業ア見あがれ。』
『あッ。』
恐ろしい啖呵、八つ山下のお蘭で鳴らしたこの美女の脉管には、沸々とたぎり返る血が流れて居るのでした。
『お蘭姐さん。』
『何だい玉ちやん。』
お蘭は村之介の後ろ姿を見送つて、今度は玉ちやんのお玉を迎へました。あんなにポン〳〵言つたのに、心配相な顏の奧から、もう笑ひがほぐれて來るお蘭だつたのです。
『岡つ引が闘り合つて居るなら、與力の佐伯東一郎とか言ふ人に賴んで見ちや何う、あの人なら話が判りさうよ。』
『さうね。』
お蘭の顏には始めて光明が浮びました、八丁堀の與力のうちでは、一番學問も武藝も確かな上、薄々はお玉の素性を知つて居る佐伯東一郎に賴んだら、或は物にならないでもあるまいと思つたのです。

さう思ひ付くと、一寸の猶豫もするお蘭ではありません。用意の金、――少し持重りのするのを帶へ挾んで、後を追ひ縋るお玉は店の用心に殘したまゝ、町駕籠を呼んで、八丁堀まで駈けさせました。

幸ひ佐伯東一郎は在宅、夜中乍ら、お蘭を迎へて、話の筋を聽きました。この人は齋藤篤信齋門下の逸才で、若いがよく出來た人物、錢五の遺產三十五萬兩に絡む訴へと知つて、顏見知りのお蘭を、敷居の外乍ら、次の間へ通して、細々と事情を聽き取つたのです。

『駒井駒造を縛つた、――ホウ、それは不怪い、係の俺に何んの話も無く、丹七や三太が勝手に縛るわけは無い――、阿部伊勢守樣は何んにも御存じないことだ、待て〳〵。』

佐伯東一郎は手を拍つて、丁度八丁堀へ顏を出して居る、丹七を呼ばせました。

『丹七、誰に賴まれて駒井駒造を縛つた。』

高飛車に一本、

『へエ――、その、切支丹宗門の疑ひもあり、御老中樣御前を騷がした太い奴で――』

丹七はすつかり參つて、敷居際に額を揉み込むやうに冷汗を拭いて居ります。

『駒井駒造の罪を數へろと言ふのでは無い、誰が縛れと言つたのだ。』

佐伯東一郎は一寸も假借しません。

『へエ――、その、大藏鐵心先生が差支が無いと仰しやつて、三十五萬兩の隱し場所を白狀させれば、私には、その――』

『馬鹿ツ、――その繩付を何處へやつた。』

『大藏鐵心先生の道場。』

『呆れた奴だ、直ぐにも繩付を取返さなければ、間違の基だ、案內せい。』

『へエ――』

黑船の丹七、まるつ切り代無しです。

紅絹裏に顏を埋めて
―惱ましき新太郎―

加州の萬石家老、橫山遠江の甥同苗新太郎は、丁度この刻限に、フラ〳〵と濱町のお京の隱れ家近くやつて來ました。

新太郎が此處を訪ねるのは幾月振りでせう、一度は伯父にも世にも背いて、一緒にならうとした二人ですが、フトした事から疎々しくなつて、今では灯を慕ひ寄るのさへ、何んとなく後ろめ度い氣がしてならなかつたのです。

新太郎は此時二十六才、白皙隆準のおつとりした美丈夫、當時江戸でも屈指の使ひ手ですが、何んの因果か、敵同士のお京と激しい戀に墮ちて、怪劍士篠原求馬と、幾度も幾度も命を賭けて爭つて來たのでした。

お京は、錢屋五兵衞の孫娘で、加州の家老で、五兵衞一族の罪を裁いた横山遠江とは、天地容れざる敵同士です。

その甥の新太郎と、割りない仲になるとは、何んといふ運命の惡戲でせう、その爲にお京は、錢五組の殘黨とも疎々しくなり、幼な馴染で親同士の約束した許嫁の篠原求馬は、怨を呑んで姿を隱して了つたこともあつたのです。

それほどの仲の新太郎が、近頃お京を振り向いても見なくなつたと聞いて、昔の戀の苦さを忘れ兼ねて居る求馬が、もう一度、新太郎を斬る氣になつたのも無理の無いことでした。新太郎の伯父の遠江は、元より父の敵、この二人を討つ爲に、求馬は滅多に拔いたことの無い刄を拔かうとの誓を立てたのです。

併し、新太郎は決してお京を忘れたのではありません。一時、お京との仲を聽いて赫怒した伯父の遠江が、近頃、錢屋五兵衞の遺した金が三十五萬兩、錢五の殘黨の手に入つたと聞いて、幕府の手で沒取される前に、加州藩沒取漏の不淨財として、これを自分の手に納めようとしたのです。

『新太郎、其方に家督を相續させるのも近々であらう、氣に入

つた嫁があるなら申せ。』

そんな判り切つた謎を言つたり、寵臣の大伴猿右衛門に言ひ含めて、近頃は、新太郎とお京を接近させようとする色さへあらはになつて來たのでした。

若くて純情的な新太郎に取つて、伯父の態度はとてもたまらない戀の冒瀆でした。火の付くほどお京に逢ひ度がつて居るくせに、三十五萬兩に眼がくれると思はれるのが嫌さ、一つは伯父の道具になつて、錢五の殘黨を裏切るのがつらさに、幾月も幾月も、お京の隱れ家を訪ねなかつたのでした。

併し、近頃は、その我慢さへ續かない新太郎でした、錢五組の者が捕られたとか、お救ひ小屋へ金をバラ撒くとか、いろいろ世上の噂を聞くにつけて、お京の安否を知り度さで一杯になつた胸を抱いて、我にもあらず、心覺えの濱町の路地へ、橫山新太郎は辿つて居たのです。

雨戸は嚴重に締つて、中からは灯も漏れませんが、お勝手口へ廻ると、戸が一枚碎かれて、ポカリと闇に開いた口が、何んとも言へぬ恐ろしい豫感を、新太郎の胸に焦き付けます。

『ハテ？』

新太郎はもう躊躇して居る場合ではありませんでした。腰を探つて火打袋を出すと、行燈に灯を移して、一とわたり家中を見廻しました。

恐しく取散らばして居りますが、お京の姿は何處にも見えま

せん。
新太郎はワク／＼する心持で、部屋部屋から、押入まで覗きました。
『何んか有つたに相違ない――』
それは判つて居りますが、何んな變事があつて、お京は何處へ行つたか全く見當が付かなかつたのです。
此儘お京と別れて了ふのではあるまいか、――何うかしたらお京は誘拐されるか、殺されて了つたのかも知れない――。
新太郎はさう思ふと、何んとなく涙組ましい心持になります。刄を取つては人におくれを取る新太郎ではありませんが、苦しさと戀の感傷が、すつかり弱い心持にして了つたのです。
『お京、お京。』
新太郎はさう言ひ乍ら、其處に脫ぎ捨ててあつたお京の袷を抱き上げて、我にもあらず顏を埋めました。三月越逢はないお京のおもかげが、その仄かな移り香の中に活きて、次第に新太郎を、夢見るやうな甘美な心持に誘ひ入れます。

隻手劍豪の眼は
――淵の如く對手を吞む

隻手の劍豪篠原求馬は、三日三晩横山遠江を付け狙ひました。本鄕の上屋敷、小梅の別莊、その他、到る處に出沒して、不倶戴天の怨を、もう一度――と思ひましたが、相手の警戒が嚴重で、何うしても寄り付くことが出來ません。
せめては、可哀想なお京を捨てた新太郎を探して、胸の透く一と太刀を見舞つてやらうと思ひますが、駈け違つて、これにも逢ひません。
乏しい蓄も盡きて、此上は何うする工夫も付かなくなつた求馬、足は自然に濱町の路地へ向ひました。
其處には昔の許嫁で戀人で、自分の眼の玉よりも大事に思ふお京が隱れて居る筈です、錢五組の寶は、一文も貰ひ度くないと言つた求馬ですが、何も彼も事と志と喰ひ違ふと、お蘭やお京や、駒井駒造を思ひ出さずには居られないのが、また求馬の感傷でもあつたのです。
尾羽打枯らした羊羹色の紋附、右手は肩からガクリと削がれて、刀の柄を押へた、たつた一本の左の肘も何んとなく寒さうですが、求馬はそんな事にこだはる人間ではありません。
表口へ廻つて、そつと押して見ましたが、中から灯が漏れて居るのに、嚴重に締りがして開き相な樣子もありません。
もう亥刻（十時）過ぎでせう、お京を起すでもあるまい――、せめて、隣の駒井駒造に逢つて、積る話でも仕ようと思つた求

馬、妙に物懐かしい心持で、お京の隱れ家の外を一と廻り、お勝手口へ出て驚きました。戸は滅茶々々に打ち碎かれて、次の間のあたり、灯の陰に、何やら武家姿の者が蠢めいて居るのです。

お京に間違があつたのではないか？

恐ろしい疑が胸に湧くと、同時に求馬の足は敷居を踏んで家の中へ飛込んで居りました。

『己れツ。』

『曲者ツ。』

飛込んだのと、疊の上に踞がんで居たのと、彈き上げられたやうに相對しました。

淡い行燈の灯で、お互に顏を讀むと、紛れも無い敵同士、逢ひも逢つたり。

『や、篠原。』

『横山か。』

『久し振りだな。』

『探したぞ。』

『何の用だ。』

『言ふまでも無い、命を申受けるのだ。』

『何をツ。』

二人は屹となりました。

よく／＼見ると、新太郎の手に持つたのは、今まで顏を埋めて居たお京の着物、紅絹裏がゾロリとこぼれて、その艶かしさと言ふものはありません。

『何んだ、それは、見苦しいぞ。』

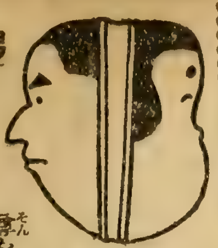
求馬のたつた一本の腕は眞直ぐに伸びて、怪しい紅絹裏を指しました。

『あツ。』

さすがに新太郎も赤面します。

『恥を知れツ、馬鹿奴ツ。』

男性女性訓言集



○婦人は舌を以つて働くよりも寧ろ針を以つて働く事を遙かに良い事と思ふ可きである。（ナポレオン）

○一夫一婦終身同室、相敬して互に獨立自尊を犯さゞるは、人倫の始なり。（福澤諭吉）

○男子は胸壁に上りて銃丸を放つべし。女子は病院にありて創痍を包むべし。（シモン）

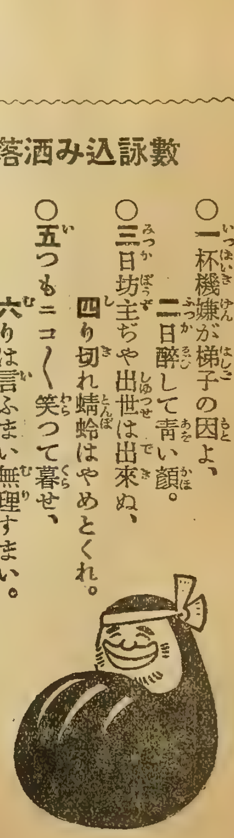
○處女に於いて弱かりし所は母となりて强くなるべし。（ユーゴー）

あまりの事に踵を返す篠原求馬の後から、
『己れ、無禮ツ。』
横山新太郎は抜く手も見せずサツと斬りかけました。
『何をツ。』
求馬は身をかはして、ピタリと正面を切ります。
『えツ。』
續いてもう一と太刀、齋藤の塾で流行つた鬼勸流の猛烈な突きに行くのを、求馬は危ふく身を開き乍ら、
『少し腕は上つたな、――がそんな事ではまだ〳〵。』
二人はクルリと位置を入れ換つて、行燈を中にピタリと睨み合ひました。
求馬はまだ抜きません、いや、恐らく最後まで抜かずに、この素晴らしい對手を斃す積りでせう、左の拳に柄を叩いたまゝ、蒼白い顏を眞直ぐに、淵の如き深怨の瞳が、ジツと新太郎を見据ゑます。
横山新太郎、打物取つては名だたる使ひ手ですが、求馬の瞳――猛虎を睨みすくめた瞳の前には、泥の如く醉はされる經驗を持つて居るのです。
『え――ツ。』
渾身の氣力を振り絞つて、新太郎は氣合を掛け乍ら、眼の前の魍魎を拂ふやうに首を振りました。
ジ、ジ、と燈心が油を吸つて、丁子が溜つたか、四方はめつきり薄暗くなります。
『え――ツ。』
新太郎はもう一度氣合をかけました。大きな魔の淵のやうな求馬の瞳が、自分を呑まうとして、その中から、チラ〳〵と、紅絹の裏が、――お京の顏が――。萬華鏡のやうに搖ぎ出るのです。
『新太郎、宜いか、斬るぞ。』
深沈たる求馬の聲。

（つゞく）

數詠込み洒落都々逸

○一杯機嫌が梯子の因よ、二日醉して靑い顏。
○三日坊主ぢや出世は出來ぬ、四り切れ蜻蛉はやめとくれ。
○五つもニコ〳〵笑つて暮せ、六りは言ふまい無理すまい。
○七や通ひが度重なれば、八がて簞笥が空になる。
○九もる月影辻占わるく、十けずむすばる胸の綾。

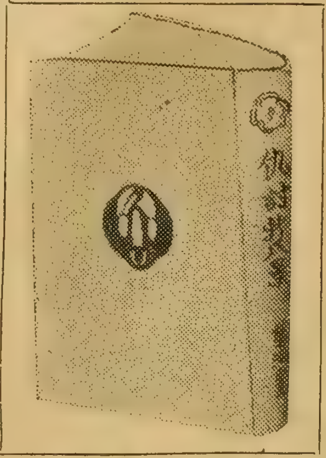


誠也

『仇討物語』の絶品！

仇討は古來日本武士道の美德として國民の間に大いに賞讃され來つて、遠く鎌倉時代の名高い曾我兄弟の仇討以來明治三年高野山に於ける日本最後の仇討に至るまで大小實に數百を以て數へられてゐる。父母の仇、主人の仇、妻子兄弟の仇討等種々あるが中には唯冷酷な武士道の掟に制せられて、討たでもと思ふ仇を討ち、討たれずとも濟む仇を討たれ、或は涙を呑んで愛人を刺し、心に詫びて友を斬る等實に涙なくしては見られない幾多の悲劇が繰り返へされた事は言ふまでもない。

我が文壇の雄菊池寛先生がこれら幾つかの名仇討を拉し來り多彩絢爛なる名筆を驅つて描かれた『仇討新八景』こそは祿に離れ、父母に別れ、薪に臥し、膽を嘗め、行方定めぬ怨敵を搜して、旅から旅へ憂身をやつす仇討の慘苦を始め、自ら討つ者を探して討たれる旅を續くるもの或は長年尋ねあぐんだ仇に巡り合うて無念の返り討ちになる者或は父子三代に亙る大復讐、等々眞に讀む者をして或は怒らせ、或は泣かせ、思はず我を忘れて熱讀陶醉せしるめもの。これこそ仇討物語の絶品であると到る處に大好評を博し、飛ぶ樣な大賣行を示して居ります。



定價一圓二十錢（送料十錢）振替東京三九三〇

止みさうもないよと假裝雨を見る（小萩）

川柳漫畫 いのちの洗濯

見よ！　天下一品！！

谷脇素文先生大名著

忽ち五十三版！！

月日は廻る、浮世行進曲・男の世界女の世界、義理人情、家庭レビュー、道樂くらぶ、子供の天地……等々名川柳名漫畫一千數百、病氣見舞や一家揃つての和樂に最好適！

定價一圓八十錢送料十二錢、本社發行。

花の山下戸はあやまる役にされ（[illegible]）

藝界噂

接吻の味

米國映畫界切つての二枚目ニール・ハミルトンは、今までのスクリーン生活で、六十七人の異つた婦人と接吻をしたが、これはまた彼が六十七種の異つた接吻を經驗したわけになる。彼が語るところによると、

『ラブ・シーンを撮る場合には必ず相手女優の個性を考へてやらないと失敗する。キッスもそのつもりで相手によつて仕方が違ふ。』

と、ある。

ハミルトンが分類した五名の著名な女優のキッス振りを紹介しよう。

『ヘレン・ヘイスは最も理想的、ジョーン・クローフオードは現實的、エリッサ・ランデーは理智的、メリー・ブライアンは純眞そのもの。』

で、あるさうだ。

御あいさつ

『新劇場』の稽古中、瓦斯の爲めに窒息して死にかゝつた藤間房子と坂東簑助、

『ねえ簑助さん、若しも本當に死んだら、世間では何て云ふでせうね。』

『簑助は物好きな奴だつて云ふに定まつてゐます。』

お房さんいやな顔

賣出し嬢

蒲田映畫『眠れ母の胸に』に出演してゐる村瀬幸子最近の心境をしみじみ語つて曰く、

『あたしはお盆と暮だけが忙しいのよ。不斷はまるつきり、ひまなんですもの。』

これが蒲田の企畫部（宣傳部）での述懐なので、ウルサ型が寄つてたかつて、

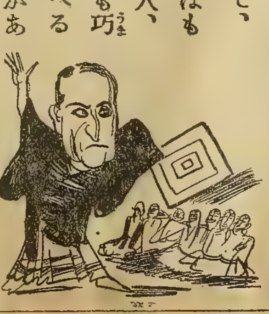
『ぢや、まるで大賣出しの人間だね。』

と、云ふ事になり、忽ち『賣出し嬢』といふ綽名が生れたとは、チト氣の毒。

幸四郎の聲色

松本幸四郎、この間ある宴會に行つて、九代目團十郎の切られ與三の聲色を使つた、それが又馬鹿に巧いので、一同やんや〳〵の大喝采、幸四郎エヘンと一つ咳拂をして、

『僕はもう一人、とても巧く使へる聲色があるんだが、聞かせようか。』



と云ひ出した。一同、是非と頼むと今度は勸進帳の辨慶で、

『これは松本幸四郎の聲色です。』

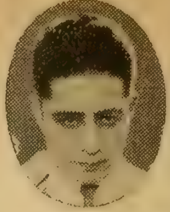
と眞面目な顔。

美人の效目

日活の伊奈監督、『拾つた女』の完成を急がせられ、廣瀬恒美等のスター連を引率して、この寒空に

ばなし

徹夜でロケーションとなつた。ぼやくまい事か——一同、京都の眞ン中四條河原町でブル〳〵震へ乍らの演技を續けてゐると何しろ繁華なところなので、附近のカフェーから美



人連がワンサと押しかけての見物である。これには一同、急に元氣づいて、精一杯の熱演振り、比叡颪も何んのそのといふ意氣込み、その中に東の空が白

んで來たので、伊奈監督、小膝をたゝいて、

『徹夜の撮影は四條河原に限る…………』

と、ふれ廻つてゐる。

ナ、ナーンダ

一つ金一千圓也、但し狐の襟巻一箇、と云ふ素敵な奴を、人もあらうに千惠藏がある女に贈つたと云ふ噂がぱつと立つた。

『まあ、隨分ね。』

『その貰つた奴つて、一體どこの何奴?』

『まあ、そんなに興奮しつこなし、その貰ひ手は、えゝと、その、千惠藏の……その……大事な〳〵……』

『じれつたいわね、早く仰有いよ。』

『ウフ、お母さんなんだよ。』

『馬鹿らしいッ。』

世界一の伊達者

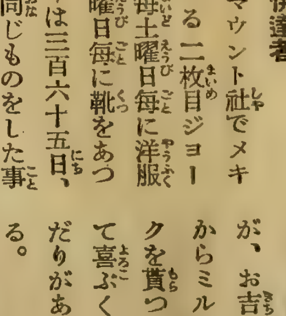
最近米國パラマウント社でメキメキ賣出してゐる二枚目ジョーヂ・ラフトは、毎土曜日毎に洋服を新調し、毎水曜日毎に靴をあつらへる。ネクタイは三百六十五日、一日と云へども同じものをした事がない——即ち毎日新らしく買ふわけだ。彼のすつきりしたお洒落れ振りはスクリーンばかりでなく、その生活にまで及んでゐるわけだ。流石の洒落者アドルフ・マンジユウも彼の前には兜を拔いで、

『ラフトこそ世界一の伊達者だ。』

と、折紙をつけてゐる。

雪洲しやれる

『女人哀詞』で、雪洲のハルリスが、お吉からミルクを貰つて喜ぶくだりがある。



『君は隨分物喜をする性だね、高がミルクぢやないか。』

とからかふと、雪洲無器用な日本語で、

『まるで故郷でウシ(家)のチ、(父)に逢つたやうな氣がシュルんでありましよう。』

○『この頃は生木の筏だ』『なぜさ』『氣(木)が浮かぬ。』

○『あの人も失業で火のない爐だれ』『何のことだい』『まゝにならぬといふことさ』

長篇小説

善は滅びず

佐藤紅緑

林唯一畫

毅と魚子とは紳商北畠昌平の愛子として育つたが、實は彼等は眞の兄妹ではない。一は捨兒、一は陸軍大將大槻武文の隱子なのを、共に昌平が義に依て引取つた間柄である。仍で大槻大將は、頻りに『この兄妹を夫婦にしろ』と昌平に勸告する。だが當の毅は、愛妹の未來の夫に畏友の的場讓二を薦めて止まない。初夏の或一日、兄妹は此的場と更に其の妹の千鶴子を加へた四人で、那須野の溪流に釣魚を樂む。此時魚子は、的場と唯二人で木蔭に語らつたが、的場の口から『僕等兄妹は日蔭者、呪はれた生涯の人間です。』と聞かされて、思はず何事かと胸を轟かせた。（前號迄の梗概）

田舎教師

讓二は暫らく躊躇して復た語り出す。

『貴方は三十年勤續の小學敎師が縣から表彰されたといふ新聞記事を御覧になつた事があるでせう、僕の父は矢張り其の一人です。父は水戸の生れです、水戸には昔から水戸派の學風が盛んで忠君愛國の思想が凡ての根柢をなして居ます。父は母に別れてから僕と妹の二人のために終生鰥暮らしを決心し、片田舎の小學校々長をして僕等を育てました。學校は田舎の事ですから木造ではあるけれども松山を背にした日當りの可い廣々した土地で、井戸が非常に深いので夏になると氷の樣に冷たい水が出ました。學童が段々殖えて來るに從つて敎室も段々建て増しをし、學校の格も昇進しましたので校長も僕の父よりもつと偉い人でなければならなくなりました。さうして東京から其の偉い人が來る事になりました。そこで前校長たる僕の父は當然他校へ轉任になる筈でしたが、父は其れを拒みました。私は此の學校が好きだ、私が手しほにかけて育てた生徒と別れて他の學校へ行くのは何より辛い、待遇はどうでも構はないか

ら私を平教員として此の學校へ置いて下さい、父は恁う言ひました。さうして新任の校長を歡迎しました、學校が立派になつた、校長さんも立派な人が來て下すつた、恁う言つて心の底から喜びました。間もなく學校は御眞影を拜戴しました。其の頃から學校に當直を置く事になりました。當直料として一晩に十錢を貰ふのです。若い教師達は當直を厭がりましたので、父は喜んで其の代理を勤めました。父は非常に勤勉で又た非常に儉約でした、僕等二人の學資を貯めるためにどれだけ骨を折つたか知れません。父は酒が好きでしたが儉約のために酒を斷ちました、だが母が死んでから不眠症に罹つたので寢しなに五勺づつ飲む事にしたのです、當直の夜には折り〳〵一合になります、學校で酒を飲むのは禁ぜられて居ますが、校長は中々理解のある人で、不眠症の藥として飲むのは差支ないと父にだけ許しました。

或夜僕と妹は父が當直なので年老つた伯母さんと三人、枕を並べて寢ました。恐ろしく風の吹く寒い夜で、外行く人の足音がカン〳〵と響きます、僕はうと〳〵とすると伯母は慌てゝ僕を搖り起しました。

「火事だよ讓二！」

半鐘の音が寒天に聞えます、僕が十五で妹が十の時です。

「何處だ〳〵。」と外で叫ぶ聲。

「學校だ。」と屋根の上の聲。

僕は跳び起きて一散に學校へ驅け付けました。現場へは未だ幾人も來て居ません、僕は、父の事が氣掛りなので、「御父さん〳〵」と聲を限りに叫びました。三年生の教室が盛に燃えて其れと向ひ合つた建物を晝の如く明るく照して居ました。僕は眞直に當直室へ行たが父の姿が見えません、小使室へ行くと小使は女房と子供を伴れ、火の粉を防ぐために頭にバケツを被つて逃げる處でした。

「御父さんは？」と僕は訊きました。

「知りません〳〵。」小使はさつさと

走りました、僕は不圖氣が付いて直ぐ奉安室へ驅け付けました。其處にはもう隣室まで火が移つて居ます。と見ると父は扉口に蹲んで一生懸命に鍵の孔に鍵を合はせて居ります、鍵は二三十も繋いであるので、狼狽せる父には何れが其れだか解らなかつたのです。父の手はがた〳〵顫へて白髪頭が炎に照らされて居ます、父は狂氣の如く鍵を鳴らしたが

どうしても扉が開きません、此時ぐわら／＼とものゝ崩れる音がして眞赤な火柱が廊下に倒れて來ました。僕は夢中に父の身體を攫んで背中に背負ひました。』

　譲二は此處まで語つた時恰ら追懷に堪へざるものゝ如く眼を濡らした。魚子は默つて聽いて居る。水の流がさつさと岸の木影を搖がして行く。

『背中に負はされた父は狂氣の如く下せ／＼御眞影を出さなきやならんと僕を叱るのです、併し僕は一生懸命でした。僕は火が既に奉安室に移つたのを見ました、御眞影も大事ですが父の生命も大事です、引返した處で火は一面に天井を這つて居ます。迚も間に合ひません。僕は體操場の隅に父を下しました、父は最早や僕を叱りませんでした。さうして兩手を大地に突いて燃えしきる奉安室に向つて禮拜しました。

　村の消防隊が來ました、僕は喪神した父を扶けて家へ歸りました。僕は直ぐ寢床にもぐり込みました、折り／＼眼を開いて見ると父は疊にぴたりと坐つたまゝ何時までも／＼泣いて居ました。僕も悲しくなつて泣きました。父は水戸派の教育を受けた人ですから尊王の志が非常に篤く、いつでも新聞の附錄とした兩陛下の御姿を見る度に憤慨して居ました、新聞の附錄なんかにして若し疎末にする樣な事でもあると勿體ないぢやないか、父は恁う言ふのでした。

　父の氣象を知つてるだけに僕は胸が痛くなる程心配しました、軈て僕がうと／＼となりました、と又もや伯母さんに起されました。

「御父さんが變だから從けて行つてくれ。」

　僕は起きて直ぐ父の後を追ひました、多分火事場だらうと思つたのです。行つて見ると果して父は大勢の中に立つて居ました、火はもう消えて只だ煙が眞白に靡いて居ました。先生達や校長は父を慰めてくれました。

「放火だらうね。」と校長が言ひました。

「私の責任でございます。」と父が言ひました。

「教室から出たのかね。」

「私の責任でございます。」

「小使が火鉢を能く始末しなかつたんだらう。」

「私の責任でございます。」

「火事だと解つたのが晩かつたのですか。」

「私の責任でございます。」

「御眞影を出す暇がなかつたのかなあ。」

「私は酒を飲んで眠みましたので熟睡しました。」

父は狂的に叫んで大地にドウと坐つた。

「此の不忠者を踏んで下さい、蹴つて下さい、此の世の見せしめに八割にして下さい。」

人々は沈默しました。

「これは不可抗力だから仕方がありません、風が强かつたから氣が付いた時にはもう間に合はなかつたでせう。」

校長は父を庇ふ様に言ひました。

「いや〳〵、私が醉つて熟睡さへしなかつたら……」

「醉つたのぢやありますまい、藥を飮んで眠つたのでせう。」

「いや酒を飮んだのです。」

「あゝ。」

何處までも潔白な父の言葉に、校長も暫らく途方に暮れました。

「では私が第一に進退伺を差出す事にしませう。」

校長も父も此の事件に就いては極めて寛大な恩典に接しました。併し父は直ちに辭表を呈出いたしました。

僕は父と校長の問答を今でも記憶して居ます、此の問答こそは僕の精神にどれだけ强い力を與へたか知れません。校長は父の辭意を飜へさせようと村民を代表して父に迫りました。

「貴方は三十年間貴方の手に依つて開拓された此の村を見捨てる氣ですか。」

「見捨てはしません、益〻此村の敎育のために盡します。」

「併し辭職をなさるのは？」

「御上に對して不忠の行爲あるものは斷然其の懲罰を受けなきやなりません、不忠者を宥して置くと此の村の風敎は何に依つて維持が出來ませう。」

「貴方は不忠者ではありません。」

「酒を飮んで職を怠るのは不忠者であります。」

「貴方の心持は何人も知つて居ります、今度の事は不可抗力の災難として縣廳も村人も認めて居ります。」

「不可抗力といふ言葉は西洋の言葉です、日本には不可抗力なるものはありません、御眞影を守るための宿直です、其の任を全うせずして不可抗力のために火を失したといふ事になると不忠の上に不忠を重ねるものです。」

校長は暫らく溜息を吐きました。

「併し的場さん、政府でも寛大にして下すつたのですからね。」

「あゝ校長さん。」

父は額に一ぱいの汗を搔いて苦しさうに叫んだ。

「御寫眞と玉體とは同じです、私は御眞影を紙で作つたものとは思ひません、御眞影は玉體で勅語は御聲であります。私は朝には身を浄めて床の間の兩陛下に御挨拶を申上げます、學校へ

參りますと又た御挨拶を申上げます、四六時中、陛下に拜謁して居ります。其れが今度……其れが……私が一合の酒で以て御眞影奉安の務を怠るなんて私は生きて居られません、切腹して御詫を申上ぐべき筈ですが、私は教育家です、陛下に捧げた身を勝手に殺す樣な事を人に教へたくありません、私は此の埋合せが出來るまでは生きて居ます、さうして屹度御詫をいたします。」

「貴方は實に立派な教育者だ。」

校長は父の手を取つて男泣きに泣きました、父も泣きました、村の人は此話を聞いて皆な泣きました。

父は其れから酒をふつつりと止めました。夕方になると每も淋しい顏をして暮れ行く空を眺めるのが今でも眼にちらつきます。父は學校を辭めてから畫を畫きました。其れは重に歷史畫で、神武天皇や楠公父子などが得意でした。今でも僕の村へ行くと父の畫いた額を八幡樣や、御寺で見る事が出來ます。

父は僕に日本外史を敎へました。夕飯が濟むと父の聲が朗々として庭の竹林に響きます。

「外史氏の曰く、吾れ舊史を讀みて事の此に至るに及び未だ曾て筆を投じて歎ぜずんばあらざるなり。」

尊王思想を鼓吹して武門武士なるものを罵倒した山陽先生の名文を讀みゆく中に父の眼はいつも感激の涙に濡れるのでした。

半年の後に御眞影が下賜されました、學校の建築が出來上りました、父は再び過失のない樣に鐵筋で以て奉安殿を造る樣に村會に歎願しました、だが村が貧乏なので其れも出來ません。そこで三方を煉瓦にして扉に欅の厚板を假に用ひる事にしました。

「あれでは安心が出來ない、何とかしたいなあ。」

父は其れから一生懸命に畫を畫いて方々の人に賣り付けました。元より無名の新米畫家ですから誰も買つてくれません、買つてくれる人はあつても、其れは一家の生活費になるだけで迚も奉安殿を造る費用にはなりません。

或日父は僕と妹を呼んで恁う言ひました。

「私はある本を讀んだ、其れに恁う書いてある、或る子供が腕白で仕樣がない。そこで其の御父さんは子供が惡戲をする度に柱に釘を一本づつ打ち付けた、一と月の後には柱が釘だらけになつた、御父さんは子供に向つてお前が善い事をしたら柱から釘を一本づつ拔いてやると言つた。子供は心を改めて善い事をする樣になつた、釘は段々拔かれた、終りには一本も無くなつた、子供は大變に喜んだ、すると御父樣は恁う言つた、釘は拔

けたが痕が消えないぢやないかと、お前達はどう思ふか。」

「痕が消えないと困りますな。」と僕は言ひました。

「消えない位なら抜かなくても同じ事だわ。」と妹が言ひました。

「ところが、釘の痕を消す法がある。」と父が言ひました。

「鉋を掛けるんですか。」

「鉋を掛けると柱が細くなる。」

「何か塗るの？」と妹が言ひました。

「其れぢやゴマカシだ。」

「ぢやどうするんです。」

「考へて見ろ、宿題だ。」

父は座を立ちました、僕と妹と二人でいろ／＼考へたが解りません、一度悪い事をすると一生其の痕が消えないとすると實に大變な事だと僕は思ひました。

其の夕方に僕等は食卓に着くと父が言ひました。

「今朝の宿題が解つたか。」

「解りません。」と僕が言ひました。

「新らしい柱と取替へると可いわ。」と妹が言ひました。

「さうだ、其れだ。」と父は箸を捨てゝ膝を打ちました。「千鶴子能く言つた。」

僕は其れには不服でした。

「新らしいのと取替へると、其の柱だけが周圍の古い柱と釣合はないぢやありませんか。」

「兄さん、釣合はなければ家を皆んな新らしくすると可いわ。」

「えらい千鶴子。」

父は大きな聲を擧げました。

「あつ。」と僕も思はず聲を立てました。一本の柱の古疵のために全部を新築しなければならない、小さな罪を償ふためには絕大の犠牲を拂はなければならない。其れは何といふ深酷な事だらう、だが父の考はこれであつたのです。

四月の花時、菜の花が一面に田圃を彩る頃には村の人は大抵野良に出ます、僕は妹を伴れて植物の採集に半日を費やし、家へ歸つたのは薄鼠色に春の日も暮れて銀色の月が山の端に艶やかに出た頃でした。父は山の芋でとろゝを作つて僕等を待つて居ました、僕等が腹一ぱいにとろゝを食べて居ると突然半鐘の音が夕暮の村の雑音の中に聞えました。

「火事かしら。」

僕が言ふ間もなく父は箸をがらりと捨てゝ飛出しました。

學校だ！

私は父の後を追ひました。老人の走る形は實に變なもので首

と胴だけが些とも動かず、手と足だけが器械の人形の樣に動きます。帽子も被らず草履を引掛けて、一丁も走るともう息苦しさうです、僕は直ぐ父と並びました。

「先に行け、御眞影を〳〵。」と父は喘ぎながら叫びました、僕は全速力で走りました、學校の玄關が盛に燃えて居ました。元來今度の新築は、奉安室には特に念を入れて粗末ながら三方は煉瓦になし、鐵の扉は東京に注文したのが期日に間に合はなかつたので假に欅の厚板にしたのでした、いくら厚くても木材では火に燒けます、僕は恁う思つて第一番に奉安室に飛び込みました。さうして御眞影を肩に捧げた時入口はもう炎に包まれました。僕は逃げるにも逃げられません、庭に面した方に窓があります、窓の外は鐵の格子で內部は鐵の開き戶です、黑い煙と鉛色の煙は火の光に追ひ立てられて室內一ぱいに漲つて來ます、僕はもう顏を上げる事が出來ません。

「もう駄目だ。」

僕は恁う思ひました、實際あの時、僕が何にも考へなかつたら其の儘死んだのかも知りません、だが突然僕の頭に閃めいたものがあります。

「御眞影を捧持してるんだ。」

僕は父が嘗て御眞影は卽ち玉體なりといふ言葉を矢の如く憶ひ出しました。此時の僕の氣持は迚も言葉には言ひ表はせません、僕の大なる責任、御眞影を護衞申し上げて居るといふ深い義務觀念、日本國民として、天皇陛下の臣として當然盡さねばならぬ奉公の至誠が勃然として僕に驚くべき勇氣を與へました。

「陛下の稜威を以てすれば猛火と雖も靡服するだらう。」

僕は內側の鐵戶を開きました、もう背中に火が迫つて來ます、僕は硝子戶と其の外にある鐵の格子を目蒐けて奮迅の勢で身體をぶつ付けました。めり〳〵と音してさしもに堅固な鐵格子が鉛の如く歪みました、だが僕の身體を入れるには餘り狹いです。火は既に壁を這つて天井を舐めて居ます。此時窓の下に父の聲が聞えます。

「讓二！ 讓二！ 早く〳〵。」

「御父さん、これを。」

僕は直ぐ御眞影を窓の外に差し出しました。

併し父の目には其れが能く見えなかつたのです。「早く早く！」父は鐵の格子を力に任せて折り曲げました。僕は直ぐ窓を飛降りました。其時父は猛虎の如く窓に跳び上りました。

「御父樣、御眞影は僕が持つて居ます。」と僕は叫びました。

「さうか、可かつたな、天皇陛下萬歲！」

父は炎々たる火炎を背に負うて窓口に立つて兩手を高く擧げ

ました。其の一刹那です、二階の大きな屋根が怪鳥の翼の如く半空を截つて落下しました。土煙と火の粉は火山の灰の如く漲りました。

「御父様！」

僕は呼んだが聲がありません。

「御父様！　御父様。」

僕は全く狂氣です。其時僕の聲を聞いて校長が驅けて來ました、僕は御眞影を校長に渡して手當り任せに瓦や壁を掘りました。

校長の指圖で消防がやつて來て瓦の間から父を引き出しました。父はもうぐつたりとなつて居ます、あの「バンザイ」と言ふ聲と共に父は屋根の下になつて死んだのでした。

醫者が來たが駄目でした、僕は村の人々と共に父の死骸を護つて家へ歸りました。

葬式が濟む、一と月二た月は毎日妹が泣いて居ました、僕が十六で妹は十一です、快活で能く笑ひ能く唄ふ妹の性質は一變しました、默つて脣を噛んで何かしらん獨りで考に沈むのでした。と或日妹は恁う言ひました。

「兄さん、御眞影のために死ぬのが忠義でせうか。」

「無論だ。」と僕は言ひました。

「でも御寫眞は又た拜戴が出來るでせう、人の生命は一度死ねば二度と生きられないわ。」

僕は忠義といふ事に就て妹に教へました。菅公は筑紫に流されても天皇から賜はつた御衣を毎日々々拜んで丁度天皇の御前にあるかの様な氣持で暮して居た、本當に陛下を愛し奉る念が深ければ御衣でも扇でも御杖でも何に拘はらず其れが陛下であるといふ氣持になれる。父の如き忠誠の士は御眞影を決して單なる寫眞とは思はない、それが日本人だ、お前も僕も御父さんが旅行で御留守の時には御父さんの寫眞を飾つて御飯を供げる事がある、それと同じ氣持で、父の死は蓋し忠義のためだと言ひ得るのだと言ひました。併し妹には其れがどうしても解らない様でした。

「でも御眞影のために死ぬよりも、生きて居て陛下のために何か御役に立つ様な仕事をする方が可いぢやないの？」

「生きるのも忠義だ。死ぬるも忠義だ。」

「でも兄さん。」

妹は涙をはら〳〵と流しました。

「御父さんばかり何故忠義をしなければならないの？　村の人は誰も死なゝいぢやないの？　御父さんだけ死なして置いて……」

「だから御父さんはえらいんだよ、いつか柱の釘の話をお前は聞いたらう、御父さんはこれですつかりと前の罪が消えたのだ。」

村の人達は空前の盛大な儀式で父の葬式を營んでくれたのみならず、官廳からも相當の褒美を貰ひ、有志者から莫大な見舞金を貰ひました、私達兄妹は伯母の手で不自由なく暮らす事が出來ました。

父の壯烈な死を憶ふにつけ、僕の精神は次第々々に忠君愛國の熱氣が加はるばかりでした。僕は村の人々に感謝し、美しき山河に感謝し、僕の健やかな肉體に感謝しました、凡てが感謝だらけです。僕の中學校は又た僕を感謝の中に育てゝくれました。然るに世の中は段々に變りました、何時からといふ事なしに凡てのものが變つたのです。日本の文化が進むに從つて田舍の隅々まで波動を受けます、汽車が通ずる、電燈が點る、いろ／＼な工事のために東京から請負師や土工などが入込む、村の娘達は半熟の東京言葉を使ふ、今までになかつた刄傷沙汰や姦通事件が起る。

或日妹は僕に恁う言ひました。

「私日本はいやになつたわ。」

「どうして？」

「日本人は決して忠義ぢやないわ、皆んな惡い事をしてるんですもの、忠義だつたのは家の御父さん只だ一人だけよ、損だわ損だわ。」

其れは妹の十四の年でした、僕は妹の思想の變化を確かに見ました。周圍の不純な空氣に感染して、小さな胸に早くも萌したのは「利己主義」の恐ろしい芽でした。其の中に又も驚くべき事が起りました。

或日此の村に不思議な音響が起りました、詰襟の服を着て赤い帽子を被つた一行が救世軍の旗を立てゝ太鼓を叩いて通るのでした。村の人は皆な笑ひました、併し彼等は平氣でした、さうして馬糧小屋を借りて演說をしました、僕は行かなかつたが妹は友達と共に傍聽に行きました、翌日も亦た其の翌日も。

すると四日目に妹は基督教信者になりたいと言ひ出しました。これには伯母も僕もひどく驚きました。伯母は熱心な日蓮宗です、言葉を盡くして其の不心得を諭しました、だが妹は肯きません。伯母との間に激しい論爭が起りました。僕は困つた事だと思ひながら妹の考に充分の愼重さを以て聽きました。

「耶蘇教なんてあれは異人の教です、日本には昔からの宗旨があります。」と伯母が言ひました。

「佛教だつて印度から來たものよ。」と妹が言ひました。恁ういふ風に理窟では妹が仲々伯母よりも上手です。僕は妹の熱情

的な眼を初めて見ました。此の熱情は現在の社會に對する凡ての不滿から天の一方に何ものか安住の地を求めようとする憧憬の熱情です、母に別れ父に別れ、落莫たる家庭にありて其の幼々しき純潔な眼で以て此の世の醜惡を凝と見詰めた時に當然起るべき大きな煩悶です。いやな世界から脱れて清淨な十字架に全身を捧げたいと思ふのは無理でありません。孤獨な彼女は父の愛を失ひ、母の愛を失ひ、絶望の極、神の愛に縋らうとして居るのです。

恁う思ふと僕は泣きたくなりました。僕は彼女を開放して好きな通りにさせるが可いと伯母に言ひました。だが伯母は肯きません、夷狄の宗教を信ずるものは日本人でない、父の子でない、父は忠義で死んだのに娘が異人になつては的場家の恥辱だ、どうしても千鶴子が耶蘇になるなら私は自害して御先祖に申譯をする。伯母は恁う言ひます。其れも尤もだと僕は思ひました。

親類や村の人や校長は代り代りに妹を説得しました。

「私は止めます。」と妹は言ひました。僕は此の時の淋しい顔を記憶して居ます。

其の問題は其れで濟みました。すると其れから間もなく妹は一室に籠つて僕とも伯母とも口を利かなくなりました。彼女は無暗矢鱈に手紙を書くのです。其れは一日に二三通、多い時には四五通です。毎日學校で顔を合はせる友達に送る手紙なのです。或時僕は妹の机の抽出を見ると手紙がぞろ／＼出て來ました。其の中に僕は戀文らしきものを發見しました。相手の男はGといふのです。昨夜の月は血の様に紅かつたとか、二人で駱駝に乗つて砂漠を歩いた夢を見たとか、花に接吻して居る蝶々の心臓の響きを私は聴いたとか、其れは歯の浮く様な悪文學の一節から抜萃した様な文句でした。僕は吃驚して跳び上りました、其夜妹を呼んで詰問しました。

「Gといふのは誰か。」
「誰だか知りません。」
「知らん者に手紙を出すのか。」
「知らなくたて可いのよ、私が勝手に書くんだから。」
「勝手に男の處へ手紙を書くなんて、僕は許さん、斷じて許さん。」
「兄さん！」と妹は目に一ぱいの涙をためて言ひました。「私は御父さんも御母さんもなし、キリストもなくなりました。私は一人ぽつちで淋しいぢやないの？　手紙でも書かなければ……恁うして私を愛してくれる人を假りに定めて手紙を書いてる中は淋しくないんですもの。」
「さうか。」
僕は鋭どいメスで胸を突かれる樣に思ひました、妹は空想的の戀人を作つて自らを慰めて居たのです。同時に僕はそこに妹の危險を感じました。
其冬伯母が死にました、僕は妹を伴れて東京へ出ました。僕は御覽の如くぶつきら棒で交際下手で而も外出嫌ですから親友といへば毅君と其他二三人しきやないのですが、妹はあの通り御轉婆でのんき者ですから誰とでも直ぐ心安くなります、僕は實際妹を東京へ伴れて來たのが非常に可かつたと喜んで居ます、田舍と異つて東京には友達が多く出來ますからね、其れは妹の樣に絶えず愛を求めて居る者には絶好の土地です。妹は一度び信ずる友達には滿腔の愛を捧げるのです。全然友達を我がものにしてしまふか、但しは自分が友達のものにされるか、どつちかにしなければ氣が濟まないのです、ですから彼の熱情は間々相手の友達に壓迫を感じさせます、大抵のものは堪へかねて彼女から逃げて行きます、妹は能く人を愛する代りに又た人を憎みます、愛か憎か、二つの中一つで決して中間を取る事は出來ないのです、そこで僕は彼が若し異性を愛する樣な事があつたら其れこそ大なる危險が起りはせぬかと心配して居ます。僕は妹に其の事を訊くと彼女は恁う答へました。
「兄さん、私が戀をしたら私の破滅ですわ、私に戀される人も破滅ですわ。」
「お前はどんな人に戀をするのか。」
「私の熱情に負けない樣な人よ、でもそんな男は一人だつてありやしないわ。」
妹は恁う言つて笑ひました。僕は妹に戀愛に就いて訊きました。
「お前は男に對して餘り多きを望み過ぎやしないか、お前が夢みてる樣な男は實際にあるかどうかね。」
「ありますわ。」
「僕は無いと思ふ、お前の考では戀愛至上主義だ、戀愛のため

に一身を捧げる男でなければならない。」
「さうですとも。」
「ところが男といふものは戀愛ばかりに一身を捧げられない。」
「何に捧げるの？」
「君と國にだ、君國が第一で戀愛は第二だ、戀愛至上主義は女なら可いかも知らんが、男はさういふわけに行かん。」
「どうして？」
「若し君國に事ある場合には妻を捨てゝ君國の事に死するのは男兒の本懷だ、だから本當に良人を愛する女は、良人をして充分に君國に盡さしめる事を主としなければならん、良人を助ける、良人と自分と二人分の奉公をする、其れだ。」
「でも私はそんな事は考へられないわ、私は良人で、良人は私でなければなりません。私は良人の凡てを握る、良人は私の凡てを握る、さうでなかつたら。」
「其れはむつかしいな。」
「むつかしくないわ。」
「まあ理想の人を探して見るさ。」
僕も笑ひました。ところが幸か不幸か、妹は猛烈に戀をする相手が出て來ました。』
長い物語を續けてる中に釣竿はいつの間にか流れて碧潭に射し込む木の間の日光は早や向ふ岸の百合の一叢に屆く樣になつた。魚子は呼吸を殺して讓二の話が續くのを待つて居る。
『妹は正直です、僕に何も彼も打明けて相談します、僕は喜んで贊成しました、妹の戀人は僕の尊敬する親友ですから、併し……』
讓二は突然言葉を止めた。彎曲した岸の岩の間から毅と千鶴子の姿が現はれた。
『釣つた〳〵實に能く釣れた。』と毅は言ふ。
『何が釣れた。』と讓二が言ふ。
『うん、釣れたよ、釣竿が二本！　其の一本には山女が引掛つて居た。』
『あら、其れは私達の釣竿よ。』と魚子は腹を抱へて笑つた。

（つゞく）

『善は滅びず』を讀んで

名古屋市　蛯江光一

『冨士』を本屋から求めて來て、先づ第一に讀むのが佐藤先生の『善は滅びず』です。少年時代に『一直線』を讀み、それから『鐵の花環』を讀んで、それから是が第三回目だが、何時でも讀んで行く中に、ぐんぐん引きつけられてゆくのが佐藤先生の小說だ。何て小氣味の良い小說だらう。――この先を考へてゐる豆の蔓――絶えず此不撓な意氣で明日の天地に健實な邁進を續けてゐる先生、私は斷然『冨士』のピカ一小說として『善は滅びず』を愛讀してゐます。

優等生をつくる秘訣

お子供さんの進級卒業を前にして、どこの御家庭でも、優等の立派な成績を得られることを希つてゐられるでせう。

優等生をつくる秘訣は何か――學校の先生と力を協せて、日頃から、家庭敎育に十分心をお用ひになることです。本社發行の『少年倶樂部』は、この家庭に於ける課外讀本として、立派にその使命を果してゐると、各方面から折紙づけられてゐます。優等賞を得られた子供さんには、一層熱心に『少年倶樂部』の愛讀をお續けさせ下さい。まだ『少年倶樂部』を讀んでゐない子供さんには、この四月號から是非お讀ませ下さい。

兒童の成績がキツトよくなる

新しい國史の覺え方

文部省監修官 藤岡繼平

私は今度、少女倶樂部に依頼されて、『廻轉國史盤』といふ四月號附錄の校閲をしましたが、その內容を檢討して見て、眞に便利なものだと感心しました。

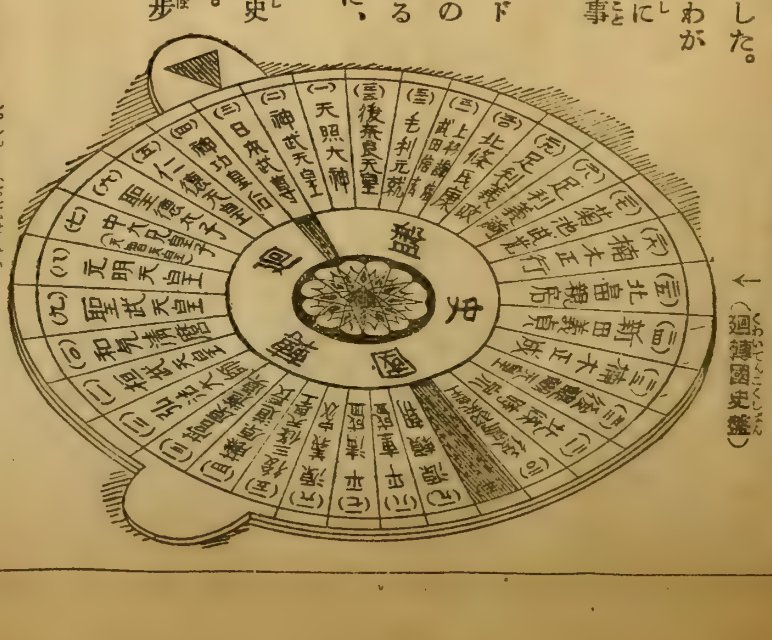
數多い學課の中でも、國史は、世界に比類のない、わが日本の輝かしい由來を物語る尊い學課と信じてゐる私にとつて、この樣な新しい國史の勉强法が工夫された事は、この上もなく嬉しいことでございます。

御存じの通り、國史勉强のコツは『ダレガ、イツ、ドコニ』といふ、つまり、人と時と場所との關係を覺えるのにありますが、この國史盤は、二枚の厚紙の圓盤をぐるぐる廻すと、あらゆる國史の事柄が、興味深く、明瞭に、不思議な程早く覺えられるのです。

これさへあれば、國史勉强の興味は增し、これ迄國史が嫌ひであつた兒童迄國史を好く樣になると思ひます。また、このために、一般兒童の國史の成績は驚く程進歩するに違ひありません。

入學試驗や學期試驗の折柄、誠に重寶なものが工夫されたものだと思つて、心から喜んでゐます。家庭の父兄方にもお奬め致します。

（寫眞は藤岡先生）



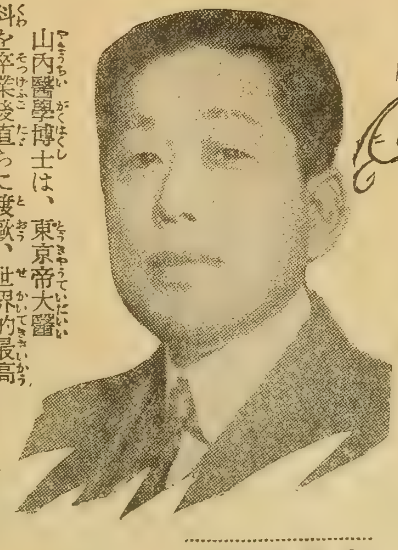
←（廻轉國史盤）

少女倶樂部四月號は特大號で、この『廻轉國史盤』のほかに、『學習百科繪本』といふ折本と、『漫畫のチャップリン』といふ漫畫の本が附錄につき、しかも定價は普通號通り五十錢です。何を措いてもお子樣方にお奬め下さい。

結核・貧血・神經衰弱の治療はかうするのが最良

今日の進歩した醫學を以てしても未だに的確な直接療法のないのが結核であります。然しながら結核は全治しない病であるかといへば、事實に於ては比較的治療し易い病氣であると謂へるので、二期三期といふ患者でも榮養と療法の如何によつて確かに健康を恢復せしめることが出來るのであります。

死體解剖例について調べた處によると、その一萬人中七割五分卽ち七千五百人までは生前結核に罹つたものであつた相でありますが、驚くべき事は、その七千五百人中の僅か四割が直接結核の爲めに斃れたものであつて、殘りの六割は所謂かたまつて治癒したもので、結核の爲め命を失つたものではなかつたといふ事であります。而もこれには何等結核に對する特別の療法を行つた形跡が認められないといふ結果から考へて、この大部分の結核患者は、自分で知らぬ間に結核に罹り、又知らぬ間に結核を治してゐたのであることが立證された譯であります。



山内保博士

山内醫學博士は、東京帝大醫科を卒業後直ちに渡歐、世界的最高學府として有名な巴里パストール研究所に於て人類の父とまで稱せられたる醫聖メチニコフ博士の助手として十年餘の長年月親しく師事し、ブレーヴロールを創製されたのであります。

▲昔から四百四病▼

と謂はれた程種類の多い病氣の中、

▲當て山内博士が▼

獨逸ストラスブルヒ大學に於て、一萬人の

▲これは何故か▼

といふと、元來人體には抗病力といつて

病氣を自然に治す機能が備つてゐてあらゆる病毒菌を白血球の力によつて喰ひ殺し、病氣を征服すると同時に、病氣を豫防することが出來るからであります。

從つて、結核は勿論他のどんな病氣でも、この抗病力が强くあれば、藥物の力を借りずとも容易に治癒し又速やかに健康を回復し得られる譯であります。

處が、何かの原因で全身神經、特に胃腸の吸收神經が衰弱したり疲勞したりすると、忽ち血行に障害を起し、續いて貧血を來して、肉體保護の上に最も重要な役目をなす白血球の食菌作用が著しく乏しくなり、つまり抗病力を失ふ爲めにいろ／＼の病氣に冒される樣になるのであります。結核も必ずかうして體力抗病力の弱つてゐる隙に乘じて冒すのでその病原體は結核菌であつても、その眞因は神經の疲勞衰弱と貧血にあることは明白であります。

▲結核全治の根幹▼

斯樣な譯で近時權威ある醫學者間に於ても結核の治療は究極する處、患者の榮養を良好ならしめ、健康的血液を增殖して、抗病力、食菌血球の增殖を圖ることが結核全治の根幹であり、又早道であると提唱される樣になつたのでありますが、事實結核は此の如き狀態以外に於ては絕對に治り樣がなく、又此の如くにして結核が完全に治癒することは病理解剖の上に於て立派に證明されて居ります。

▲然らば如何にして▼

白血球を增し、抗病力を强くすることが出來るか、これには何といつても神經を强壯にし、造血作用を昂進させる榮養を十分に補給することがよいのであります。

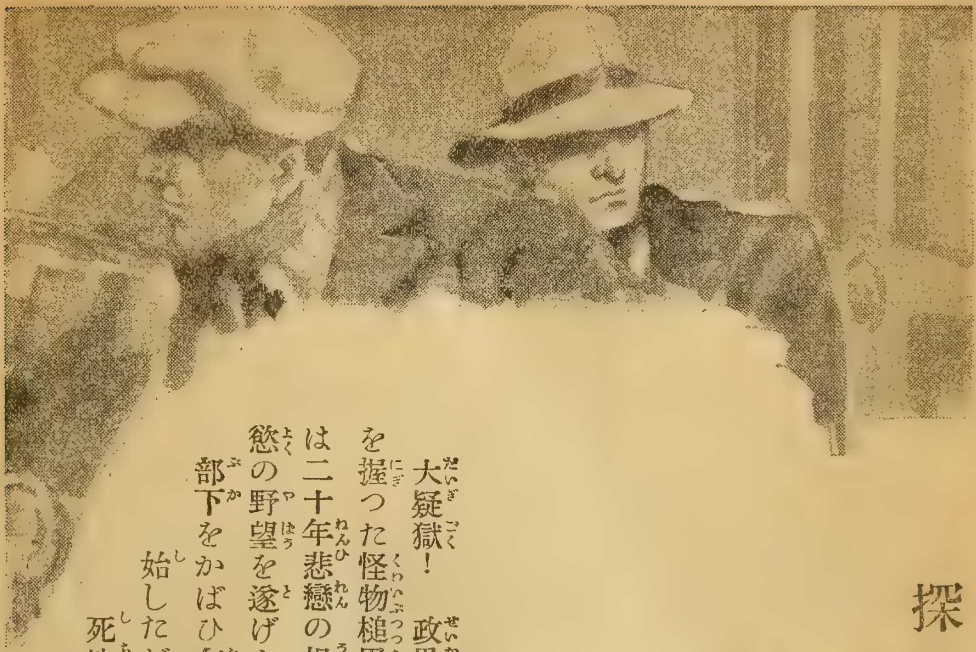
しかし實際問題として、結核患者は總て全身の神經が衰弱し、胃腸の消化吸收力が鈍つて居りますから如何なる貴重藥でも、滋養物でも容易に吸收されず、これに對する適切な榮養劑がなかつた爲め、從來は臨床醫家もこの缺陷を承知しながら已むなく在來の藥物榮養療法を行つてゐたのであります。

▲山内博士の創製にかゝるプレーヴロール▼

此の難問題を完全に解決した唯一の藥が山内博士創製の『プレーヴロール』であります。『プレーヴロール』は胃腸は勿論全身の各器官の微妙な作用を支配してゐる神經實質が病的に疲勞衰弱してゐるのを直接に、而も非常に早く健康に復歸させ、同時に衰へてゐる胃腸並びに造血器にも最も適切な養分と活力を與へて、新鮮なる健康血液を多量に增生せしめ、全身の機能を旺盛にする特殊藥を配劑し而も普通容易に消化し難き是等の藥成分を容易に消化吸收せられる狀態となし、如何に消化機能が衰弱し、食慾が減退してゐる患者にも飮用し得られる樣工夫した斷然新性質の榮養劑であり、又神經强壯、增血劑であります。

右の理由によりこれを用ふれば神經機能は活潑となり、血色素、白血球は增生し、抗毒素に富んだ血球が增生し、治癒力旺盛となり健康細胞を新生增殖し病氣を輕快全治せしめるのであります。

プレーヴロールは一瓶二圓八十錢、全國藥店にあり。藥店に賣切れの節は送料内地三十三錢領土六十二錢を添へ東京本鄕・大日本雄辯會講談社代理部へ御註文下さい。（振替東京六六二一九）



探偵小説

死の密約

保篠龍緒
岩田專太郎畫

大疑獄！　政界の巨頭、當路の大官等をめぐる鐵道大疑獄の秘鍵、極秘の密約を握つた怪物槌田代議士が、一方に政界へ脅迫の魔手を延ばすと同時に、他方には二十年悲戀の恨みに復讐の惡鬼となつて悲運の美しい未亡人目加田久美子へ情慾の野望を遂げようと計つた。が然し此處に一代の俠盜紳士泉龍川が奮然として部下をかばひ乍ら、久美子未亡人を助けて怪代議士と火の出るやうな闘爭を開始したが、槌田代議士の恐るべき奸智には流石一代の大盜王もしばしば死地に陷るやうな羽目になつた。龍川が、遂に最後手段の決心をした時、早くも怪代議士の魔手は久美子と龍川の上に伸び、龍川

を東北の果に誘ひ出し、久美子を關西、寶塚のホテルの一室に監禁して仕舞つた。力と頼む龍川逮捕の公電は、久美子を絶望のドン底に陷れ、惡魔は最後の勝利に醉ひしれて暴力をふるつて久美子から最後のものを奪はんと詰め寄つて來た。

嗚呼久美子、悲運の久美子が今將に淫獸の犧牲となつて、あの清淨な肉體を喰ひあらされようとする貞操の危機一髪！その瞬間に忽焉と密室内の一隅から躍り出した三箇の黒怪物！憤怒と正義に燃えるピストルの銃口に恐怖と驚愕の爲め流石の怪物槌田も化石したやうに立ちすくんだ刹那、さつと背後から襲ひかかつた人影！

その瞬間！　チラッと久美子の目をかすめたものは泉龍川の姿だ

つた！
龍川の出現。俠盗龍川の再現！
奸惡槌田の奇謀に陷つて、遠く東北の溫泉場で警視廳の手に捕へられた筈の俠盜龍川が、意外にも風のやうに此處に現れたのだ。恐ろしい奇蹟、嬉しい奇蹟だつた。
『來いツ！　新吉、大丈夫だツ！』
とあの底力のある聲で朗かに叫ぶ聲を聞いた時、久美子は安心と嬉しさにホツと氣がゆるむと同時に氣が遠くなつて仕舞つた。
龍川は必死にもがいて抵抗する槌田代議士を片腕でグツと抱きしめ乍ら、片手で、クロロホルムの布片をその鼻口に押しつけた。
恐ろしい腕の力、槌田は一再ならず龍川と戰つたが、彼がこれ程の怪力を持つてゐようとは思はなかつた。片手ながら緊めつけられてゐる胸は肋骨がミシ〳〵と折れるやうな氣がした。
『ウーム。』
と槌田が唸つた。
『新吉來いツ！　留も來いツ！　ピストルなざあ不用ねえ！手傳へ！』

久美子のゐる長椅子の陰から飛び出した新吉と馬留の二人が槌田を押へつけた。
『……ゴリラ野郞、もうヘナ〳〵になつて來た。……縛つちまへ。』
流石獰猛奸惡の槌田代議士も斯うなつて仕舞へば、もう他愛なく壞れた人形のやうにクタ〳〵と床の上へ打倒れた。
新吉と馬留とで代議士の身體を荷物か何かのやうにぐる〳〵繩をかけた。
『アツハヽヽヽ。』龍川は心から朗かに笑つた。
『成功、成功、大成功！　新吉喜べ、馬留喜べ、次郞喜べ、久美子さん喜べ。怨敵退散、惡魔調伏、六根淸淨、お山は晴天ぢやア！』
彼は室內を踊り廻つた。踊り廻つて室を一巡すると久美子夫人の前に來た。
『次郞喜べ、浩君喜べ！　久美子さん……喜べ！？？？』
絕望のドン底から歡喜の絕頂へ一氣に吊り上げられた久美子はグツタリとして失神してゐた。
『や、や、や……久美子さんまでが氣絕して仕舞つたぞオ！』
彼は無遠慮に彼女を抱き上げた。
『ホラ、ホラ、ホラツ！』

まるで赤子を綾すやうに揺ぶつた。久美子はかすかに眼を開いた。そしてその顏に寂しい微笑が浮んだ。微笑、微笑、微笑！　幾年振りか、多難悲痛な彼女の人生行路での始めての微笑だつた。微笑と同時に彼女の眼からは止め途なく大粒の涙がドツとあふれ出した。

『泉さんツ！』

久美子は龍川にすがりついて、ガツシリした彼の胸に顏を埋めてひた泣きに泣いた。

『ア……あ……ありがたう……』

喜びと感謝の言葉も出ない。出るものは女の身の、唯涙ばかりである。

『難有いぞ、辱けないぞ、勿體ないぞ。』と龍川頓狂に叫んだ。

『泣くな嘆くな涙すな、涙をさめエて、笑顏をあげてエ、唄をうたへば故郷の踊り……』

彼は久美子を抱いたまゝ踊り出した。

『踊れ、踊れ、踊らぬものに、誰れが、お嫁に行くものかア、……アツハヽヽヽ。』

涙の顏をあげて微笑する久美子の兩頰に大きな音のする接吻を與へた龍川、

『アツハヽヽ、一つは次郎のだ、一つは浩少年のだ、そしても一つは、おまけだ。』

と彼は再び夫人の額に口づけを贈つた。そして思はず頰を赤らめて夫人の前を二三歩退くと丁寧に敬禮して、

『奥さん、すべては終りました。惡人が滅びて善人が榮えました。次郎の命は確實に取り止めました、浩少年は安心です、そしてあなたには和やかな平和の生活が始まります。龍川、謹んで御喜びを申上げます……おい、新吉、留、そつちは片付いたか？』

『よく眠つてまさあ。』

『では、御祝ひを申述べろ。』

『お目出度う御座いやす。』

『ぢやあ、祝杯だ。代議士先生、ちやんと祝杯の用意までしておいてくれたんだ。』

『でも……』と久美子がいひ澱んだ。『あの飾玉は？……』

『飾玉？……あの密書ですか？　よろしい解つてゐます。……が、何しろ、腹がへつては戰が出來んですから……』

彼は無遠慮に卓上のサンドウイツチをつまみ上げて、シヤンパンを杯に波々とついだ。

『おい、新も留も來て遠慮なく祝杯をあげろ。』

『遠慮はしませんや、首領。』

『久美子さんも一杯いかゞです。』

最前まで死と屈辱の苦杯だつた杯は、今は歡喜と勝利の祝杯に變つた。彼は祝杯を終ると、今迄の素頓狂だつた龍川は俄然大盜王泉龍川に變つた。彼は漫然と祝杯を擧げてゐたのではなかつた。彼の腹中には、槌田を捕へてから、對村瀨、そして又、次郎救出の爲めの方策を練つてゐたのだつた。槌田は捕へた。が然し大疑獄の連判狀はまだ手に入つてゐない。死の密約が手に入つたとしても之れを如何に利用するか？　村瀨官房主事を動かす方策はどうしたらいゝか？　最後の策戰、一歩をあやまれば九仞の功を一簣に虧いて仕舞はなければならない。殊に陰險奸智、術策と謀略に富んだ政黨人相手である。萬全の上にも周到な用意がいる。龍川はそれを考へてゐた。

『おい馬留、お前は市中へ行つて大一番のトランクを買つて持つて來い。人間の入る位の大きさだ。何？　ホテルで文句をいつたら目加田夫人の御注文だといへ……それから新吉、お前は、自動車を一臺買つて來い。中古でも構はんが、車體の大きい、速力の出る奴だ。中古でも五六千圓はするだらう。自動車を買つたらお前は自動車の運轉手になり濟まして、いゝかげんな制服を着て來い。これから出がけに大澤とかいふ例の奴の動靜も當つておけ。』

『かしこまりました。然し、首領、金は？』

龍川は槌田のチョッキを捜つてふくらんだ紙入を取り出して中をあらためた。

『ホホオ！ ごまんと持つとる！ ぢやが……』

龍川は尚ほ槌田の小さな鞄を開けて見た。

『フフン。こゝにも二萬ばかりあるぞ。奴さん、大阪へ來て少からぬ金儲をやつたらしい。』

新吉と馬留はもう金を貰つて出て行つた。龍川は久美子の隙を見て莫大の札束を自分のポケツトに入れて仕舞つた。

『久美子さん、貴女は出發の仕度をして下さい。』

『出發？』

『十時四十分の汽車には悠々間に合ひます。此處にゐても仕方がない。』

『でも……あの飾玉は？』

『東京へ戻つてゆつくり搜します。』

『でも……もしも……』

『このゴリラ野郎の身體に聞きます。今此處で此奴の持物を引

くりかへして見た處で恐らく發見は困難でせうし、又その時間がありません。此處にある主だつた品物と、彼奴の身體を東京に運んで、ゆつくり調べます……』

『でも……もしも。』と彼女は尙ほ躊躇した。『槌田は中々白狀するやうな男ではありません。恐らく死んでも白狀はしまいと思ひます。ですから……』

『白狀させて見せます。』と龍川が斷乎としていひ切つた。

『ハア。』

答へた久美子の表情には押へ切れない不安があつた。と同時に彼女の內心には、如何に泉龍川を信用してはゐるものゝ、萬一彼が飾玉を手にし、あの密約を握つた時、大盜龍川の本性を現はして、第二の槌田になつたらどうしようといふ不安もひそんでゐた。

龍川はさうした久美子の表情をぢつと見詰めてゐたが、默つて室內を靜かに步き始めた。が、キツと結んだ唇、烱々と輝く眼には、室內にある一つ一つの品物の中まで射通すやうな銳さが籠つてゐた。久美子も默つて彼を見守つてゐた。

深い沈默の時が十分、二十分と過ぎた。

彼は相變らず默々として、卓子の上においてあつた未開封の葉卷の箱を取り上げた。

『久美子さん。』と彼は穩かな聲でいつた。『用意の品物の來るまで、いかゞです、煙草でも召し上がりませんか？　上等な葉卷ですよ。頗るうまいです。これは……』

『いえ、私、煙草など……』

『では、我輩一本頂戴するとしよう。』

龍川はその箱を暫く上下にくりかへして眺めてゐたが、

『おいツ！　大將ツ！　ゴリラの大將！』と倒れてゐる槌田に向つて叫んだ。『大切な葉卷を一本頂戴するぜ。東京から大阪まで、貴樣が肌身離さず持つて來た煙草だ。だが、貴樣は今迄一度も葉卷を吸はないぢやあないか？　我輩が貴樣の家に居候をしてゐた時からでも、貴樣は葉卷を吸つた事がなかつた。我輩は貴樣が葉卷嫌ひだと思つてゐたんだ。だが、その葉卷を旅行にまで持ち廻つてゐる處を見ると、此の葉卷、餘程貴樣の御氣に入りと見える。がその御氣に入りの葉卷を貴樣は封を切つてない。ハツハツハ、、、、葉卷は吸ふものよ。箱を見て樂しむものぢやあないぜ。それとも魔除けか？　だが、我輩、まだ葉卷の箱がお守りになるつてえ事は聞いた事がない。折角貴樣が後生大切と持ち廻つてゐる葉卷だ。これだけは貴樣の身につけて東京へ持ち歸つてやらうなあ。だが、我輩は葉卷が大好物なんだ。貴樣が吸はなければ、我輩が代つて一本吸つてやらう。

アツハヽヽヽ』

葉巻の箱を差上げて、朗かに大笑した泉龍川、ナイフを出して封を切つた。

『さあ、蓋をあけるぞ、槌田、いゝか。』

叫んだ彼はパツと蓋をあけた。

『いよう！ 素晴らしい葉巻だ。これぢやあ、肌身離せないぞ、槌田。……久美子さん。あなたも一つ召し上れ。』

彼は中から一本の葉巻を取り出しながらいつた。

『いえ、……私は……』

最前から不可解な龍川の言動にいぶかし乍らも、龍川のつまみ上げた葉巻を見て、躊躇した。

『さう仰しやらずに、この素晴らしい葉巻を一目御覽下さい。』

久美子の眼の前にヌツと差し出された葉巻の箱。久美子は一目見てサツと顔色を變へて、その箱に飛びついた。

『アツ！ 飾玉ツ！ 飾玉！』

葉巻の箱の中央に燦として輝く飾玉一箇。兩側には葉巻があるが、中央には綿をつめてその中へ飾玉を入れてあつた。

封印した葉巻の箱、その中に問題の飾玉が隱してあつたのだ。何といふ巧智だ。奸惡槌田の身邊を、村瀬始め如何に必死になつて捜しても發見されないも道理こそ。卓上に、或は机上に、無雜作に投げ出されてある未開封の葉巻煙草の箱、その箱の中に一代の大秘密を封じ込めてあらうとは、決して氣がつくものではない。

『最も安全な隱し場所は最も人目につき易い所である。』

とポーだつたか、デュパン探偵だつたかゞいつた。槌田がかつて龍川を刑事と思ひ込んで村瀬宛の手紙を渡した時、その手紙にも、

『……君の求むる所のものは君の手の届く所にあつた、否、君は手をふれた……』

と書いてあつた。手を觸れ得るやうな手近な處、確かにさうだ。この葉巻の箱を差したのだ。槌田はひそかに自己の巧智をほこると共に、人々の無智を嘲笑つてゐたに相違ない。

流石は大盜泉龍川、彼が槌田の邸に忍んでゐる間に、彼は槌田の書齋、寢室等に置いてある一品一物にも深甚な注意を拂つてゐた。だから今、彼がホテルの内槌田の室内でその持物を調べた時、不圖、見なれた葉巻の箱に目をつけたのだつた。

葉巻の箱！ 嘗て槌田の書齋の机上に始終ころがつてゐた葉巻の箱、彼が幾度か手に觸れた事のある葉巻の箱、誰れかからかの貰ひ物らしく、無雜作に封も切らずに投出してあるんだと思つてゐた葉巻の箱、それが今、この重大な旅行先の卓上に矢

張り無雜作に投げ出してある。不思議な葉卷の箱だ。と思つた時、龍川は『……君の求むる所のものは君の手の屆く所にあつた……』といふ手紙の一節を思ひ出した。

『これだ！』明察神の如き龍川は、忽然として悟つたのだ。

この葉卷の箱の中、其處に護符があるんだ。さもなければ、何んでわざ〳〵古びた葉卷を、こんな旅先まで持ちあるく必要があらうか？　烱眼、透徹、大盜龍川の面目はこゝで始めて發揮された。

果然！　開かれた玉手箱には至寶が在つた。

水晶の飾玉！

『アッ！』と叫んだ久美子夫人は飾玉に飛びついた。『これです！　これです！　この飾玉です……こゝが……この底が開くのです……あゝ……』

激情に興奮した彼女の手はブル〳〵慄へて開かない。龍川は彼女の手から飾玉を受取つて、無雜作に底を開けた。

飾玉の內部は腔になつてゐて、その中に丸く圓めた紙切が疊み込んであつた。

『死の密約！』

疊み込まれてあつた特別製の薄い紙、それが贈收賄の契約書だつた。

政界の巨頭、當路の大官等の名前がズラリと列記され、甲越鐵道會社長が最後に署名してある。

『ウーム。』

龍川は唸つてヂッとその秘密契約書を眺めてゐたが、何故か次第に顏色が變つて來た。

『ウーム。』再び唸つてヂロリと倒れてゐる槌田代議士を眺めた。『畜生ッ！　やりやあがつたなッ！』と口の中で呟いて一歩二歩槌田に近づいた時、久美子の室の扉を叩する音が聞えて來た。

トランク詰め

新吉と馬留が各ゝ變裝して戾つて來た。

久美子の室には大型革張りのトランクが持ち込まれた。龍川は新吉を手傳はせて正體もなく眠りこけてゐる槌田代議士をそのトランクに詰め込んだ。

『我が愛する代議士閣下、汽車の寢臺よりちと窮屈かも知れませんが、然しまあ棺桶よりは數等ましであります。トランクの四方には穴があけてありますから、呼吸に必要な空氣だけは十分御吸ひ下さい。……ア、それからまだクロロホルムが御座います、シャンペン代りにちと御あがり下さい……』

龍川は冗談をいひ乍らも注意深く槌田の脈を見て、トランクへの詰め込みを終つた。

『このトランクを自動車へ積み込め……それから久美子さんの仕度が出來たら、一所に出かけて下さい。ホテルの帳場には「槌田さんは急用で三四日留守をする、室はそのまゝにしておいてくれ」といつておきなさい……』

龍川は細々と引き上げの注意を與へた。

久美子等三人を送り出すと、龍川は槌田の室へ引き返して、室内を整理し、扉の鍵をかけた。

ホテルを出た龍川は、先發の三人が待つてゐる自動車まで悠悠歩いて來た。

『さあ出發だ！』と龍川が輕々といつた。『最終の上り二三等急行に間に合ふやうに驛へ走つてくれ……俺と久美子さんは汽車で歸るから、お前達二人は徹夜で東京へ引き上げろ。途中で、時々トランクの中を注意しろよ。』

龍川達は汽車に乘つた。天下の代議士を詰め込んだトランクを乘せた自動車は東海道を一直線に東へ走り出した。

『ハツハヽヽ、面白い冒險でしたよ。』と龍川は久美子から、僞電で呼び出された經過を聞き乍ら、食堂車の一隅で杯を重ねてゐた。

『僕の方も、何しろ奥州くんだりまで引張り出されたんですからね、とにかく槌田つて奴は敵ながら偉い奴です……え？ ホテルへ現れたのが奇蹟？……ハツハツハヽヽ、奇蹟でも何んでもありませんよ。……』

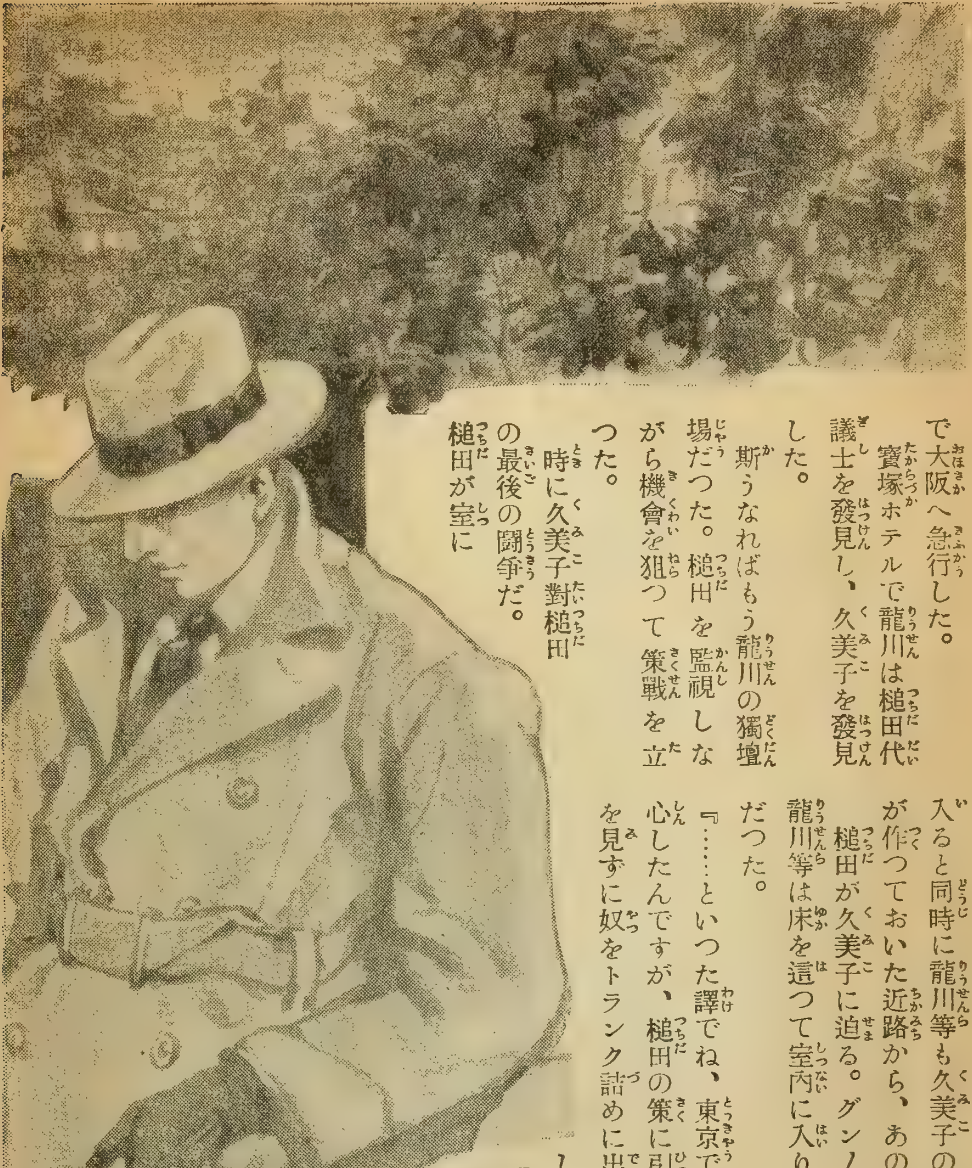
龍川は『こいつ怪しいわい』と早くも福島で氣がついたのだつた。で部下に怪婦人の跡を逐はせる一方、龍川も驛を調査した。と果然、怪しい男女を發見し、大澤が槌田宛に打つた電報まで探知する事が出來た。

『やりあがつたな！』と早くも槌田の奸策を觀破した龍川が齒嚙みをして叫んだ。

驛で怪婦人と大澤との合圖を知つた龍川は次の停車驛で、怪婦人に知れぬやうソツと汽車から飛びおりて仕舞つた。そして折から入つて來た上りに飛び乘つた。と驛で、例の大澤が乘り込んだので、車中大澤を監視しながら東京に引き返すことが出來た。

危い所で策の裏をかゝれたとは知らぬ大澤が車中から打つた槌田への報告電報は、これを言ひつかつた車掌を龍川が言葉巧にあざむいて、すつかり讀み取つて仕舞つた。槌田は大阪の寳塚ホテルにゐる！ 然も槌田は久美子を誘ひ出してゐるらしい。

大阪へ！ 龍川等は羽田の定期航空會社へ馳けつけて飛行機



で大阪へ急行した。寶塚ホテルで龍川は槌田代議士を發見し、久美子を發見した。

　斯うなればもう龍川の獨壇場だつた。槌田を監視しながら機會を狙つて策戰を立つた。

　時に久美子對槌田の最後の闘爭だ。槌田が室に入ると同時に龍川等も久美子の室に飛び込んだ。そして久美子が作つておいた近路から、あの場の光景をぢつと眺めてゐた。

　槌田が久美子に迫る。グン／＼迫る。夢中になつてゐる隙に龍川等は床を這つて室内に入り込み、椅子の陰に隠れてゐたのだつた。

『……といつた譯でね、東京で、暴力でも槌田を攫はうと決心したんですが、槌田の策に引かゝつたのが反つて幸ひで、血を見ずに奴をトランク詰めに出來ましたよ。矢張り天は昭々として正義を照らすです。』

『で、これからはどうしませう？』

『これから？　先づ第一に久美子さん、あなたは安靜にお休みなさい。後は僕が引き受けます。』

『と仰るのは？』
『あの密約の魔力を利用して、村瀬をとつちめ、次郎の釋放方をやらせるんです……何の、かうなれば萬事こつちのものです。』
『でも槌田の仕末は？』
『槌田から例の密約を取り上げて仕舞へば、彼奴は木から落ちた猿、水を離れた魚です、……もうこつちには用がない。自滅しますよ、御安心なさい。』

『でも密約は手に入れたではありませんか……それだのにトランク詰にして……』
『何時、手に入りました？』
『でも……最前、葉巻の中から……』
『ハツハヽヽヽ、さうでしたねえ……』
何故か龍川笑つて答をぼかして仕舞つた。
『トランク詰の槌田大將、今頃はどこを走つてゐる事やら……』
龍川はヂツと窓外の闇を眺めた。何かしら一脈の不安を感じ乍ら久美子も默つて同じやうに闇を見つめてゐた。

人生の行路、人間の運命、それはあの闇のやうに暗く、すべてが逆睹し難いのではあるまいか？

汽車は運命の暗を突いて猛然と走つてゐる。

『さ、久美子さん、寝臺でゆつくり御休みなさい。』

龍川は立ち上つた。

最後の一戰

『……要するに、君は、前代議士目加田未亡人の息、次郎が望水莊殺人犯ではないから、次郎の罪の輕減方を運動して欲しい。その代償として、槌田代議士が所持してゐた甲越鐵道疑獄の秘密契約書を提供する……といふのですな。』

と村瀬官房主事はぢつと相手の男を眺めた。

相手の男といふのは目加田久美子の紹介狀を持つて來た辯護士で、年は四十年輩、顎髯をつけて、眼の鋭い暴力團員の感じのする男だつた。その辯護士が意外の事をいひ出したので、村瀬もいさゝか驚きもし面喰ひもした。

『君は、非常に望水莊事件に詳しいですが、どこで調べられたですか？』

と村瀬主事は辯護士達川逸巳といふ名刺と本人とを半々に見くらべ乍ら訊ねた。達川などといふ辯護士は餘り聞いた事もないし、そして本人が語る殺人の經過はまるで見て來たやうに詳細を極めてゐた。

『……實は、關係者の一人、泉龍川から聞いたのです。』

『龍川から？』

『左樣。』と辯護士は平氣だ『元來、望水莊事件といふのが、槌田代議士から例の密約を奪ふ爲で、これは目加田夫人の參畫が動機になつてゐます。そんな關係で其後龍川もこの事件に關係して來た事は、貴下も御承知の通り、從つて龍川は久美子夫人を援けて密書奪還に努力する事になりましたが、幸ひその目的を達しましたので、龍川から委細を聞きました。で久美子夫人から一切を委任されて本日御伺ひ致した次第で御座います。』

『フーム。』村瀬主事はぢつと相手の顏を見乍ら考へてゐた。

『……で、その密約といふのは、今、御持ちですか？』

『持つてゐます。』

『拜見しませう。』

達川辯護士は鞄の中から小さい紙片を出して卓上においた。

密約の連判狀だ、村瀬氏はそれを手に取つて、眺めたり、すかして見たりしてゐた。

『どこにありましたか、これは？』

『槌田の卓上においてあつた未開封の葉卷の箱の中に隱されて

ゐました。』

『葉巻の箱？　未開封の？　フーム、成る程、考へたものだなあ。……成る程、飾玉の中に入つてゐたのですね……』

暫くの間、考へてゐた村瀬主事は、靜かにその紙片を辯護士にかへした。

『目加田夫人に御傳へを願ひ度い。御希望の件は乍遺憾應じ兼ねる……』

『如何あつても駄目ですか？』

『左樣。眞物の密約を持つて來たら御相談にも乘らうが、こんな紙片見たやうな、僞物を持つて來ても如何もならん。』

『僞物？』

『この密約に使つた用紙は特別製でちやんと特殊のマークが入つてゐるのだが、これにはそれがない、然もこれなぞは署名を寫眞で僞造してある。……フヽン、槌田もさるものです、そんなに暗々とあの重大な書類を手離す譯がないですからなあ。』

『では、眞物を持つて來たなら、先程御話の件は御承認を願へますか？』

持つて來た密約が僞物と聞いても達川辯護士は別段驚いた樣子もなく、逆に村瀬の言質を取らうとした。

『フン。』と村瀬は鼻で笑つた。『眞物だつたら、その位の事は出來よう。然し、如何に龍川でも、眞物は手に入るまい。』

『いや、ちやんと入ります。』と辯護士は微笑した。『正眞正銘の秘密契約書が手に入つてゐます。只今御覽に入れたのは僞物です。流石は村瀬官房主事、一目で僞物と觀破されたのには敬服致しました。』

村瀬主事は默つた。何かしら恐ろしい氣がし出した。直感、或は職業的な第六感が働いたのか、平然悠然と相對してゐる此の男の眼光の銳さ、決して名もない辯護士風情ではなさゝうだ。或は此奴が？……さうだ、目加田夫人にこんな大膽な交涉が出來るものではない。龍川の指圖だ。して見ると此奴も龍川一味に違ひない。油斷の出來ぬ相手だ。然も正面からの太刀打は難かしい。相手は名にし負ふ密約といふ絕對的な武器を持つてゐるんだ。

『槌田が、それを素直に渡したですか？』

『何の、渡すものですか。引奪つたのです。』

『引奪つた？　フーム。彼奴、命にかけても無殘々々、それを渡すやうな奴ではないが……』

村瀬は相手の話次第で警察力を振ふ腹をきめて誘ひにかゝつた。

『左樣。』と怪辯護士は平氣で誘ひに乘つて來た、『……實は、

槌田を抑へたのは大阪の寳塚ホテルでです。槌田が最近行衛不明になつた事はあなたも御存知の通りです。……が大阪では如何しやうも無い。で身柄を東京へ運搬しなければならないので、食物代りにクロロホルムをやつて、トランクの中へ楽々と寝かして、自動車で東海道を一直線に運びましたよ……あんな極悪非道な奴、生かして置いても仕様がないですから、都合によつては一思ひに殺して仕舞ふ積りでしたよ……で東京へ着くと兼ねて用意の通りに、長い針を槌田の胸、丁度心臓のあたりを狙つてプツリと突き込みました。いや、極めて徐々にやつたのです。……さ、槌田、密約の所在をいへ……いはない?……ではもう一ミリ……これでもか?……ではもう一ミリ……槌

田を取りまくものは極悪非道をにくむ俠盗龍川と積年の恨に燃えつゝ愛兒次郎の生死を想ふ母親です。我々は一心に寢臺に伸びて苦痛にあへぐ槌田の顏を覗き込んでゐました。針は次第に心臟間近に喰ひ入る。……呼吸は早くなる……唸る……が然し、傲岸不覊な槌田です、流石に一言も弱い音はあげない……あの部厚く毛深い胸……人間ぢやあない、ゴリラだ。……さうだゴリラの眼！　思はず三度久美子夫人が叫んだ。ゴリラの眼！　黑眼鏡の奥に隱された槌田の眼！　その眼を見てやり度い。その眼からその眼から彼奴の秘密を讀んでやり度い！　で眼鏡をはづした。二重の眼鏡をかけてゐた。又一つはづした。眼鏡を取つて槌田の眼を見た時！　ウアーツ！　と思はず聲を擧げましたよ。眼だ、この眼だ。正しくゴリラの眼だ。片眼を閉ぢて、片眼をクワツと見開いた眼、アツハヽヽヽ大笑ひだつたです。で、いきなりその開いた眼へ、グイツと指を突込んで……よろしいか、グイと二本の指を突込んで、ポン！　と眼球を刳り出してやつたんです。アツハヽヽヽ。』

辯護士達川氏は奔放に哄笑した。物凄いやうな豪放な哄笑だつた。

『出たぞ、大將、ポンと出た眼球だ、やいツ！　貴樣は眼球をいくつ持つてるんだ。一つで澤山だ、ポンと出た眼球、久美子さん、ホラ、床へコロ〳〵と轉つたぞ、眼球が。槌田の眼球だ。踏み潰しては大變だ。……眼球……眼球……眼球アツハツハヽヽヽ。』

彼はポケツトから小さい球を取り出して、ポンポン、ポンと曲に取つた。

『これが槌田の眼球です。』

流石の村瀨官房主事も、あきれた、驚いた。この怪物、何を始めたのだらう？

『眼球？』

『……解りませんか。硝子の飾玉も眼玉も同じものです。注文した飾玉の正體がこれです。この中へ密約を隱したのです。これぢやあ、いくら必死になつて外部から捜し廻つたつて金輪際解りつこはない。文字通り肌身につけてゐたのです。肉體の中、皮の中へ隱しておいたんです。』

『眼球の中か？』

『正にその通り。槌田の奴、飾玉の注文狀などを見せて巧みに捜査の方向を轉換させ、尙ほ萬一の場合を考へて葉卷の箱の中へ僞造物を隱しておくなざあ、天才ですよ……アツハヽヽ、硝子の義眼、見えぬ片眼を利用し、黑眼鏡の奥深く御神體を封じ込めておいたんだ、家宅搜査だらうが、身體檢査だらうが、平氣で活躍が出來た譯ですよ。ホラ、これが御神體です。』

『で、密約はこの中に？……』

卓子の上へコロ〳〵と音を立てゝころがした精巧な義眼、

『あるだらうと思ひます。』

『何ツ？』

『御神體開眼の光榮を村瀨官房主事の爲めに保留しておいたのです。』

村瀨は精巧な義眼を取り上げた。成る程、裏面に栓があつて、それを拔くと中は空洞。その中に疊み込まれた紙片！

果然、一大疑獄の謎を解くべき秘密の契約書だつた。

『ウーム。』書類を調べて村瀨主事は唸つた。正に確かに眞物の書類だ。密約だ。十年苦しみ拔いた密約が今、手に入つたのだ。

村瀨主事は考へた。今絕大の大秘密を自分の手に握つて仕舞つた。然もそれは大盜泉龍川が非常手段に訴へて槌田代議士から奪略したものだ。それを一介の名もない辯護士に屆けさせて來たんだ。然も此處は警視廳だ。彼の氣持はガラリ變つた。密約を手に入れ、龍川を捕へる……そして此の村瀨は……

『確かに、密約は貰つたよ。御話の件はいづれ考へておかう。目加田夫人によろしくいつてくれ給へ。』

『さうか。』と相手の心の動きをぢつと見詰めてゐた辯護士がいつた。『……では密約は話が當方の申出通りになつた時に差し上げる事にしますから、一應御返しを願ひ度い。』

『何を？』

『密約。』

『あれは、當方に於て取調べの必要があるから、押收しておく。おいツ！　達川、穩しくしろツ！』

『何ツ！』達川氏がいつた。

『辯護士達川逸巳なら眞面目に話もしようが、おいツ、村瀨正

高、それ程の盲目ぢやないぞ。』

『フフ、盲目でなければ、何だ。』と相手は平然としてゐる。

『達川逸巳、そんな甘い僞名にだまされるか。泉龍川、此處は警視廳だぞ。釦一つ押せば非常警官隊が瞬刻に飛び込んで來るんだ。……』

『アッハヽヽヽ。』と達川辯護士が哄笑した。そしてグイと椅子を進めて卓子の上に兩肘をついて官房主事の顏をつくづく見詰めた。『馬鹿野郎ッ！ 大馬鹿野郎……龍川だが如何した？ 泉龍川が警視廳へ乘込んだが如何した？ 死の密約一枚を得意さうに持つて、此の龍川がノコ〳〵警視廳へさあ逮捕して下さいとばかりに、現はれたと思ふのか？ 馬鹿野郎。葱を脊負つた鴨がフラ〳〵と舞ひ込んだと思ふか、土百姓ッ！ あの大秘密の鍵を手に入れるとやはり槌田のやうな精神になるんだな、阿呆！「これさへ手に入れば俺は萬能だ、不死身だ。次郎も久美子も何んだ、龍川の如き何んだ、大財産が出來る、位置も出來る、俺は萬能だ！」とでも考へるだらうが、おい村瀬、さうは問屋でおろさないぞ。龍川、それ程の馬鹿ぢやあない積りだ。』

『何ッ！』

『何も、かにもあるかい。若し貴様が、如何しても我輩を捕へたければ捕へるがいゝ。だが、その前に、その契約書に書いてある名前に目を通して見ろ、第三番目の人物を考へろ。』

『第三番目の名前？』

『貴様の友人の一人だ。』

『それがどうした？』

『前代議士馬場捨吉といふのがある。その馬場前代議士の背後を調べると、この男を名義人にして不正の利益を分配した相棒が現れて來る。』

『フーン、その相棒は？』

『村瀬正高。』

『何ッ！ 何をいつてるんだ。』

『何もいつてやしねえ。本當の事をいつてる迄よ。貴樣が我輩の假面を剝ぐなら、我輩も貴樣の假面を剝いでやる。若し今から三十分間に、貴樣が我輩の要求通りにし、且つ我輩が無事に此處を出ないならば、あの大疑獄の醜穢見るに堪へぬ内容は勿論、貴樣と馬場との間の往復文書まで一切合切、此の大東京の五大新聞の夕刊に公表される手筈になつてゐるんだ。さ、それでも貴樣は、その護符を横取りして、我輩を刑務所に送るだけの勇氣があるか。死ぬも生きるも、貴樣の胸一つ、さ、度胸を定めて返事をしろ。』

流石は怪盜王泉龍川、二段三段構への堅陣は、村瀬如きものの一指も染めさせない。靜かに物語る龍川の語調は却つて物凄い威力になつて村瀬官房主事を完全に壓服して仕舞つた。

『よし、解つた。』と唸るやうに村瀬がいつて立ち上つた。『で、次郎の特赦があればその文書は戻してくれるだらうな？』

『いやだよ。』

『何ツ！　何故？』

『とにかく次郎の片がついてから、戻してやるが、その外に二つ條件がある。』

『どんな條件だ。』

『第一に五萬圓の小切手を卽座に渡すこと。』

『五萬圓？』

『これは窮乏してゐる馬場から往復文書を買ひ取つた價格だ。俺ア、貴樣の爲めに損をしたくないからな……で第二の條件は二ケ月以內に貴樣は辭職しろ。』

『辭職？』

『左樣、神聖なる警察官の主位に貴樣如き醜類を頂く事は我帝國警察行政の一大汚辱であり、冒瀆だ。槌田事件の功で代議士にならうと實業界にもぐらうと勝手だが、警察官にはしておかれない。恥を知れ、恥を！』

怪俠龍川の聲色は激越を極めた。村瀬は默つて頭を下げるより他に途はなかつた。彼は悄然と室を出て行つた。

驛頭の銃聲

三十分餘りして村瀬主事が戻つて來た。見ると大膽不敵の龍川は卓子の上へ兩足を長々と伸して熟睡してゐた。

『うまく行つたか？』と搖り動かされた龍川がいつた。

『大體了解が出來た。死刑にならぬ事は絕對に保證する。』

『して五萬圓は？』

『小切手はこれだ。』

『よろしい。確かに貰つたよ。いや有難う。では馬場前代議士と君との往復文書は約束の條件が完了した時に戻してやる。が然し安心の爲めに、早速の承諾のお禮の爲め、例の新聞に發表するといつた原稿だけを渡して置かう。』

『アツ！　持つてゐたのか？』

『ハツハヽヽ。村瀬官房主事となら話がまとまると思つたからね。』

龍川は帽子の裏の二重底になつてゐる中から厚い封筒の嚢で嚴封してあるのを取り出して村瀬主事に渡した。村瀬は引奪くるやうにしてそれをポケツトへ藏めた。

『では、是れで失禮するよ。』と龍川が立ち上つた。『で萬一、我輩に用事があつたら××新聞の案内廣告欄に「達川氏へ」として一行出してくれ。……いや、御邪魔しました。』

龍川は悠々室を出て行つて仕舞つた。

茫然として椅子に身を埋めた村瀬官房主事は、まるで夢の中で動いてゐたやうな氣がした。ぐつたりとなつて目をつぶつた。

考へれば考へる程口惜しい。大盗泉龍川の爲めにこれ程までに叩きのめされたのが口惜しくてたまらなくなつた。よしツ！俺の身は如何ならうとも彼奴を捕へて……がもう遲い。神出鬼沒の怪盜龍川、その邊に迂路々々してゐる筈がない。……それよりも今五萬圓で買つたこの秘密文書、これをあらためて見よう。

村瀬が龍川から渡された封書を取り出した時、給仕が遽しく入つて來た。

『主事さん、代議士の槌田さんが至急御目にかゝり度いと申されます。』

『何ツ、槌田？……御通ししろ。』

返事を待つまでもなく、扉を蹴開いて飛び込んで來た槌田代議士、呼吸せき切つた蒼白の顏色、カラーもネクタイもなく、白い繃帯で左の眼をグル〱卷いて、まるで氣狂のやうだつた。そしていきなり巨大な腕で村瀬の肩を摑んだ。

『村瀬、あの密約を手に入れたか？』

『ウン。』

『次郎の罪の輕減の條件でか？』

『ウン。』

『承知したのか。』

『ウン。』

『馬鹿ツ！』と槌田は憤怒の形相すさまじく怒鳴つた。『大馬鹿野郎ツ！ 何んて下らぬ眞似をしやあがるんだ。あれは……あれは……』

『おいツ。』と村瀬が槌田の手をふりほどきながら冷たくいつた。『靜かにしろ、此處は警視廳だぞ。今更わめいたつて何になる。密約は俺の手に握つてゐるんだ。な、槌田、貴樣はその昔俺の戀人、あの歌姫を殺したのを忘れはすまい。な、槌田、怒鳴りたければ怒鳴れ、わめけ、そして自分から沒落して行け。積惡の報いだ。』

『と思つてるのか。』と槌田が喚いた。『俺を倒すなら倒して見ろ、俺も槌田だ。獨りで死んでは行かんぞ。道伴がある……貴樣だ。村瀬官房主事だ。……やい、村瀬、貴樣は馬場捨吉とどんな關係があるんだ。その馬場が俺ン所へ貴樣との關係書類を

賣り込みに來たんだ。買ふ約束が出來てるんだ。あの書類を握つてるんだぞ、俺は！　村瀬、まだ貴様如きに甞められる俺ぢやあねえぞ。……何ツ！　何を笑つてやあがるんだ？』

『フフフ。』と村瀬は嘲笑した。

『成る程馬場との關係文書はある。が、馬場はもう持つてゐないよ。』

『何ツ！　持つてゐない？　いつ手離した。』

『今日よ。馬場が五萬圓で手離したんだ。それを俺が買ひ戻したのさ。』

『ウアツハツハ、、、。』今度は槌田がのけぞつて哄笑した。『五萬圓！　貴様が五萬圓拂つたのか？　龍川にだらう？　大泥棒の龍川に五萬圓呉れてやつたのか。アツハツハ、、、、。』

『龍川だらうが、誰れだらうが構はない。』

『阿呆！　馬鹿！　頓馬！　愚物！　馬場は北海道にゐるんだぞ。然もその書類はまだ馬場の手にあるんだぞ。アツハツハ、、、、紙屑代五萬圓か！　大馬鹿野郎！　アツハ、、、、。』

哄笑を殘して槌田が疾風のやうに室を飛び出して行つて仕舞つた。

ハツ！　とした村瀬の顏からはサーツと血の氣が失せて仕舞つた。眞實か？　怪盜龍川が何の證據も握らずに、手ぶらで脅迫し命令し、

五萬圓さらつたのか？

村瀬は龍川から渡された封書を取り出すと一氣に封を切つた。

アツ！

中身は？ 中身は白紙だつた。

『畜生ツ！』と村瀬は切齒した。『畜生ツ！ 龍川、やりあがつたなツ！』

然し、龍川が斯んな大芝居を打つ以上、彼は馬場から祕密文書を手に入れる確信があつての仕事に相違ない。然も槌田がいつた。書類は馬場の手にあるんだ！ と。さうだツ！

村瀬主事は卽座に警察電話を北海道札幌警察署に飛ばした。馬場捨吉と交渉をする爲めだつた。

『馬場氏は東京へ出發、本夕六時上野着の筈。』

それが札幌警察の返事だつた。村瀬は時計を見た。五時半だつた。

彼は直ちに各驛へ手配すると共に、上野驛へ出張つた。驛へは正私服の警官を配置して出迎人一切プラットホームへ入る事を禁止した。

彼は龍川が來たら直に捕縛するし、龍川一味らしいものが立

廻つたら片端から引き立てるやうに嚴命した。
六時十五分前、槌田代議士が乘り込んで來た。此奴も片付け度いと思つたが、何としても口實がないので、それは出來なかつた。
槌田が來た以上如何してでも馬場捨吉を自分のものにしなければならなかつた。一切の鍵は馬場の手にある。最後の秘密文書を手に入れるものは、槌田か？　村瀬か？　はた龍川か？
勝敗はあと五分間で決する！
汽車が入つて來た。龍川の姿は見えない。
村瀬は人なきプラツトホームに悠々歩を運んだ。必勝は今一分！
列車が停ると二等室から馬場捨吉が同伴者らしい同年輩の老人と談笑しながら出て來た。
村瀬官房主事は直ぐその傍に馳け寄つて、
『馬場君、しばらく。君に急用がある。』
この時、非常線を突破して槌田が脱兎のやうに馳け込んで來た。
『馬場君、手紙の話は承知した。君の爲めに何んでもしてやるよ。』
馬場捨吉老人は二人の顏をヂツと見詰めてゐたが、
『あ、あの一件かい。』
『さうだ！』二人が叫んだ。
『が一歩、遲かつたよ、あれはもう手離して仕舞つた。』
『エツ！　誰れに？　いつ？』
『この老人に！』と馬場は同伴者を顧みた。
『この方は大宮まで出迎へられてね、段々の御話があつたものぢやし、それに非常にいゝ條件だつたのでね。ハツハ、、、』
龍川だ！　おのれツ！　村瀬が一歩進んだ時、
『いや。何、實は。』と同伴の老人がいつた。『あの文書を馬場さんから頂きましたが、急用があつたので、連れの者に持たせて途中で下車させましたわい。』
萬事休す！　勝敗は決つた。流石は用意周到の泉龍川、早くも部下に秘密文書を持たせて逃がして仕舞つたのだ。もう斯うなつては村瀬は龍川と交渉するより途はなくなつた。
『ひどい事をしてくれたなあ。』と村瀬がいつた。
『いや、さうでもないさ。』
村瀬と馬場とは並んで改札口へ歩き出した。
兇惡槌田代議士は、一言もなく茫然としてその場に立ちすくんだ。と例の老人が彼の耳元で囁いた。
『おい〳〵槌田、目が醒めたか、まだクロロホルムに醉つてる

のか？』

『ウーム。』と槌田が無念に唸つた。

『……ハツハツハ、、、解つたか、龍川だよ。どうだ、惡夢から醒めたか。これであの密約も無くなつたし、久美子は遠く去つたし、この邊が人間、引込み時だよ、惡の淸算をするがいい。……では、おさらばだ。又第二の飾玉……いやさ、硝子玉の義眼を作る時には、いつて來な。應分の寄附をするよ。槌田左様なら……』

いひ棄て丶足早に去つて行つた。

龍川が悠々改札を出ようとした時、

ダンツ！　にぶいピストルの音がホームに響いた。

槌田代議士がピストルで我れと我が頭を撃つて倒れたのだつた。

『南無阿彌陀……』龍川は靜かに帽子を取つて默禱した。…………………

其後一ケ月、裁判は確定した。房鐵は重ねた惡事を淸算して死刑に、次郎は共犯ではあつたが情狀酌量されて五年の刑に、然も執行猶豫の恩典にさへ浴した……

爾來、仄かに傳へ聞く所によれば、目加田久美子夫人は新國家滿洲國のある大農園に次郎と浩の二愛兒と共に平和な幸福な農園生活に入つてゐるといふ……

（完）

金を貯めたい人、殖したい人、儲けたい人の爲めに

金儲けの博士と云はれる谷孫六先生は何時も『金を作るに難しい算術は要らない。寧ろ算術と關係のない技術が必要だ。算術では2＋3は5となるが、金儲けではそれを、6、7、8にする處に面白味がある』と、こう云つてゐられる。先生のこの祕中の祕とした金儲け及び利殖の法を公開したものが、大評判の『孫六錢話』です。本書を讀むと讀まぬでは、一生の間には大きな違ひ、即刻御一讀あれ、定價一圓五十錢、送料十二錢、本社發行。

頭痛藥として評判の

ノーシン

御存じですか？

頭が痛んで不愉快な時

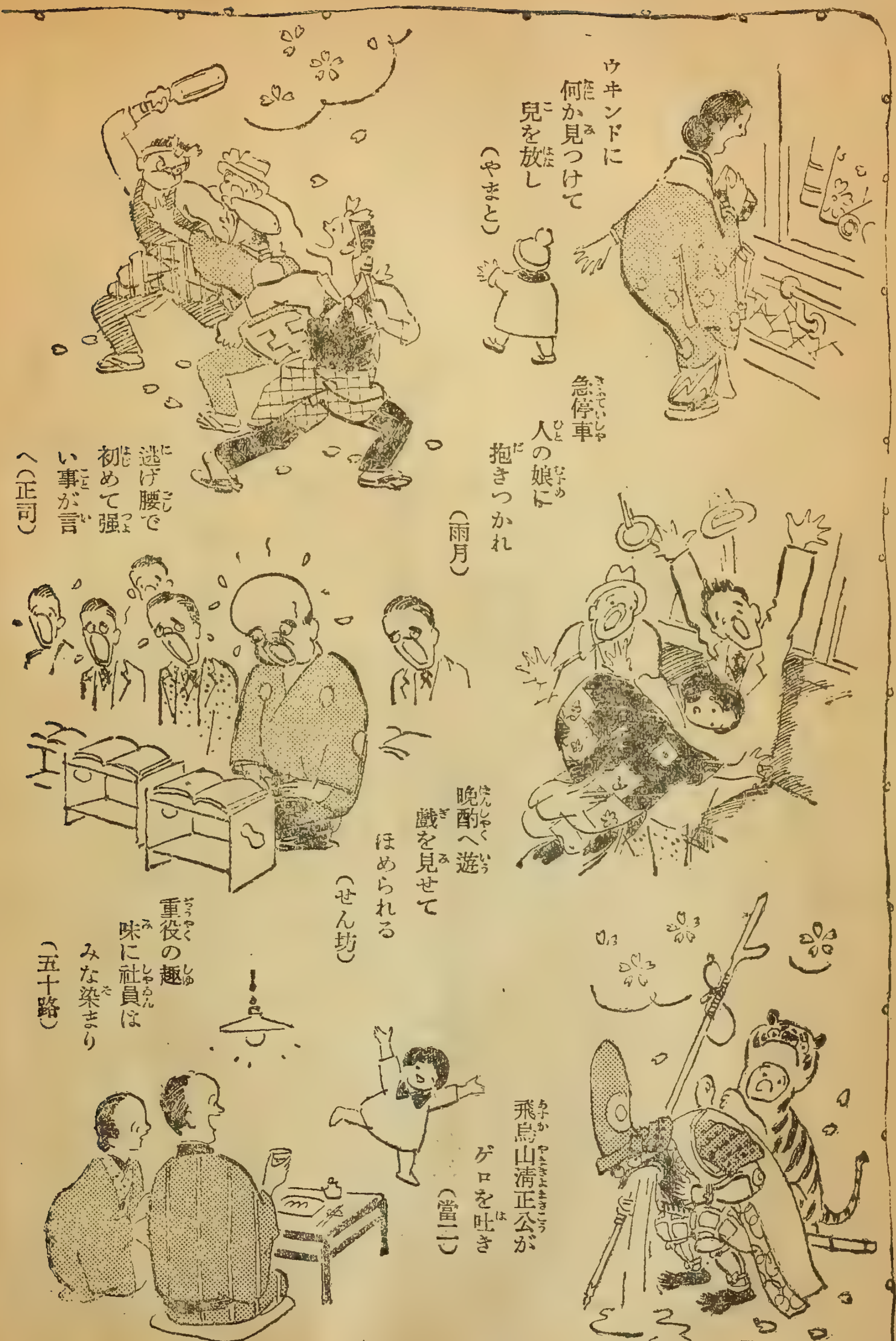
頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される樣にチクリチクリと痛む頭痛の苦しさを初め頭が重くてボンヤリしたり、何となくクシャクシャする時、或ひは過度の讀書、執務、徹夜、映畫見物等で頭腦が疲れた時等、何とも言へぬ不愉快なものです。こんな時にはスグ「ノーシン」をのんで下さい。論より證據、忘れた樣に今迄の苦痛や不愉快が消え去ります

頭をハッキリと朗らかに

其上、頭がハッキリと朗かな氣分になりますから、心氣一轉して、事務、勉强、讀書、裁縫、家事等が面白く愉快にでき、而も、グングン能率が上ります。學生、事務家等の如く絶えず頭を使ふ人にはぜひ必要な常備藥です。

藥價は三十錢、五十錢、一円、二円等。全國の信用ある藥店やデパート藥品部で販賣して居ります。

發賣元　名古屋市東區東町　荒川長太郎合名會社　振替名古屋七〇三番


ウキンドに何か見つけて兒を放し（やまと）
急停車人の娘に抱きつかれ（雨月）
逃げ腰で初めて強い事が言へ（正司）
晩酌へ遊戯を見せてほめられる（せん坊）
重役の趣味に社員はみな染まり（五十路）
飛鳥山清正公がゲロを吐き（當二）

いけるのが安兵衛で來る花の山
（山茅庵）
自轉車の娘みんなを振り向かせ
（紫情）
庭いぢり子供の菓子を口で受け
（千年）
終電車立小便の慌てよう
（三鈴坊）
高利貸殺されかけて夢が醉め
（瓢箪堂）
ランデヴー少し映畫の眞似になり
（花泪）
浮世川柳
素文
投句大歡迎

俄然！大人氣の現代四月特大號!!

別冊附録 熱烈火を吐く 時局大熱論集

―敢て九千萬の同胞に訴ふ―

四六判三百餘頁の堂々たる大書籍！　憂國の熱情に燃ゆる先覺者愛國の大熱論！　聯盟脱退後の準備は如何？　經濟封鎖怖るべきか？　等内外時局の重大問題を論じて國民の奮起を促す大熱論集。　老若男女を問はず何人も必讀すべき大快篇！

□第一特輯 卒業生諸君はこの道を往け

就職難の今日、學校を卒業した人々は、先づ何を準備せねばならぬか？　職を求めんとする人々はどうすればよいか？　前ジャパン・タイムス社長芝染太郎氏が多年の體驗を披瀝して懇切に指導せんとする稀有の大文字。

□第二特輯 面白くて爲になる話五十三篇

古今東西の逸話、美談、道話、珍談、奇談、頓智奇才の話、等々の粋をぬき、萬斛の興味のうちに汲めども盡きぬ深遠なる教訓を盛つたものである。現代人の一讀すべき一粒選りの珠玉篇。

此の他、特種記事、大呼物名小說等滿載!!

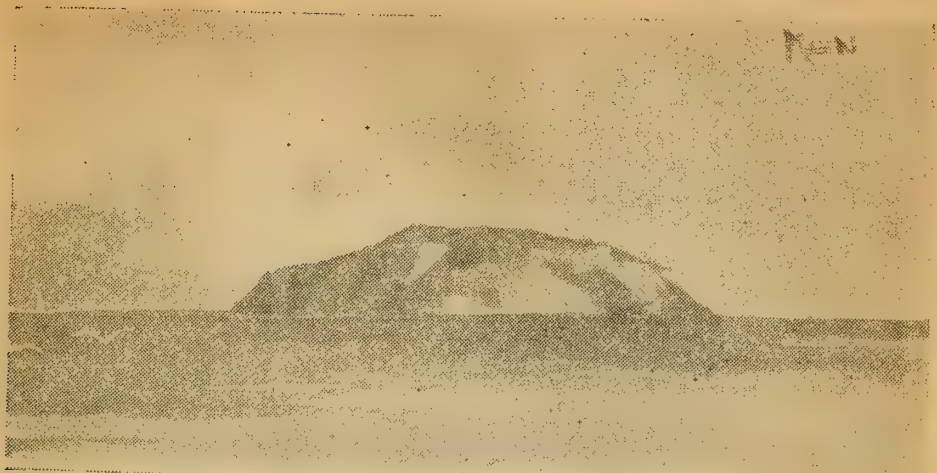
ニュース

三上於菟吉先生 日本の魂（五部作）執筆決意！

第一部『尊王攘夷』近日本社より出版!!

三上先生は『日本の魂』御執筆に當り『筆者の覺悟』として、左の熱烈なる御言葉を寄せられました。

僕の今度の作は僕の義務であり名譽であるとして、決死的のものだ。僕は思想的には殆んど浮浪的な青春期を送り、大正元年前後からは自然主義からアナキズムに移動し、その後自由主義的現實家と自分では考へ、後、ひどく浪漫的な享樂生活に溺れた。しかし僕の良心がいつとは無しに前後左右を顧みるに及んで、逐次ハッキリした形で、すべての上を蔽うて日本的となり、すべての的を貫ぬいて愛國的傾向を帶びて來た。やがて支那に遊び、更らに殊に昭和六年夏、滿洲を追はれて歸朝する貧しい小商人等と會談するに到つて、實行的な、爆發性を帶びた民族主義者としての自分を見出すに到つた。なぜなら、もはや大陸に一切の立場を失つた日本國民を考へることは、亡國を考へることだと思はざるを得なかつたからだ。そこで僕は日本人に過去の精神を顧みて貰ひたさに雜誌『キング』に『祖國の爲めに』なる戯曲を草し、（これが發表は十一月で、滿洲事變勃發後だつたが、脱稿は八月だ）新國劇をして上演せしめ、放送局に依つて天下に鳴りひゞかせる事が出來た。これが僕の意識的文學運動の最初で、つゞいて、事變の突發するや、東京日日新聞紙上に『日本人の歌』を掲げ、其頃の文壇的傾向であつた自由主義者からの冷嘲と、マルクシストからの敵意とを甘受した。つゞいて、菊池寛君の忠言に對して『菊池君に答ふ及び僕の立場』を讀賣新聞に載せ、『軍・民結合の必要』を東京日日、大阪毎日に發表して、日本文學者として、最初の、稍ゝまとまつた形の愛國主義を宣言した。この小文章は幾分天下に認められ多數の同感を惹起し、やがて僕等仲間と軍部との結合機關『五日會』の機緣となつたのである。こんなわけで、久しく鬱屈してゐた僕の情熱と理性とが、今度、ここに『日本の魂』なる制作を形成するに到つたが、第一部にて、幕末の鎖國精神に新しい意義を見出して、これを國民に告げ、第二部にて西南戰爭の意義を、第三部にて日清戰爭の意義を、第四部にて日露戰爭の意義を、第五部にて更生日本の意義を告げたいと思ふのが僕の熱願だ。僕はこの制作を必ず正しく書き上げる決心で、これを書き上げずば恐らく死に切れぬであらう。一國民の必死の文字として希はくば大方の一讀を乞ふ次第である。



現代小説

蒼眸黒眸

菊池寛

富永謙太郎畫

最初の男性櫻井に失望した壽美子は、青年作家三木と相識るや、其素朴な風格に忽ち好感を覺え、續いて叔父に誘はれて、熱海に三木と一しよに旅行する様になつてから、刻々思慕の情さへ感じた。所が其時、同じホテルに佐伯ちか子と呼ぶジャズ歌手がゐたが、その潑溂とした娼婦的な言動が、三木の心を牽きつけたらしく、ちか子も亦同じ心持でか、三木を自室に招じたりして、極力彼との接近を望む態だつた。これに氣附いた壽美子の叔父は『おい、これは大敵だぜ』と壽美子に囁いた。彼女の心はカツと熱くなつた。(前號までの梗概)

卒直なる告白

むきになつて腹を立てる勢もなく、壽美子は、ただすつかり氣を腐らせてしまつた。

弱々しい不安と、ちか子に對する輕蔑の薄笑ひが、しきりに頬にうかんだが――しかし、それと同時に、ちか子の部屋にゐる三木に對するたまらない不愉快さも、どうにもすることが出來なかつた。

叔父が、ゴロリと横になつたのを機會に、壽美子は、自分の部屋に歸つて來た。

輕い絹の蒲團を被ぶり、本の頁を繰つては見たが、勿論文字は目に入らなかつた。

それでも、しばらく本を見てから、バタリと本を閉ぢた時、

隣の部屋へは入る三木の足音を聞いた。
『どうも、いきなり呼びに來たのには、驚いたな。』
三木が叔父に話しかけた。
『君が、好きだと云ふのか。』
『どうですか。』
三木は、いつものやうに不得要領だつた。
『どんな女だ、さし向ひになると？』
『話好きな、頭のいゝ、人を喰つた女ですな。しかし感じはわるくない。』
叔父も三木も、それぎりだまつてしまつた。
（三木さんは、私の心を認めてくれないで）と思ふと、壽美子は性來の負けん氣が、ニヨツキリと鎌首を、もたげて、どうしても眠れなかつた。
翌朝の食事は、三人揃ひながらも、一向に話がはずまなかつた。
壽美子は、あまり三木と口を、きかなかつた。
食事が濟んで、壽美子は、自分の部屋に歸つたがじつとしてゐては始末の出來ない憂鬱に包まれて、海岸へでも降りて見ようと、一人ホテルのテレースから芝生に降り立つた。
恰度二階の窓から、三木は芝生を歩く、壽美子の姿を見つけると、後を追つて芝生から海岸への崖を降りた。
そこにあるプールの傍に立つてゐた壽美子は、氣がつくと、上から降りて來る三木を微笑しながら迎へた。
しかし、二人はそこで、海に向ひながら、しばらくだまつた。
沈默の時間は、非常に有効だつた。壽美子は、あまり氣嫌をわるくしてゐると、理由のない所に理由をつけて考へる下等な女のやうに、思はれてもたまらないと思つて、朗らかに、その沈默を破つた。
『今、私何か三木さんを困らせて上げたいと思つてゐるのですの。』
『それは、また何う云ふ理由で……』
『昨夜、貴君が佐伯さんのお部屋に、いらしつてなか〳〵歸つていらつしやらないんで、私拗ねてゐますのよ。』
壽美子は、少し顏を赤らめて、素直にさう云つて、わざと三木から四五歩離れた。
三木は、壽美子の子供らしい動作に、新しい魅力を感じながら、
『さうですか。』
と、これも素直にうなづいて、
『でも僕には、あの人は興味ありません。』

『なぜですの。』

『あの女性は、感覺と感情だけがあつて、心のない人ですよ。つまり、男女間の色戀以外には、何の興味のない人ですな。女の他の仕事、男の他の仕事、そんなものには、一切興味がない人ですな。僕と、三十分近くゐて、僕の作品の話なんか、一切しないんですからな。あんな人とは、心が結ばれることなんかありませんよ。』

『でも、あんなに美しくつて、しかも向ふから貴君を呼びにいらつしやるんですもの。貴君だつて、興味をお持ちになるでせう。』

『性質は、なか／＼サツパリしてゐて、陰性の少しもない面白い女ですよ。たゞ交際ふのには、面白い女ですな……』

『まあ可怖い！』

三木も素直で純情であるために、壽美子の氣持に對する遠慮などは、ごく不得手だつた。

『可怖い？　何がです。』

心ならずも口走つた自分の實感を捕へられて、さう訊き返されて、壽美子は見るまに、血が頰にのぼつて來た。

だが、彼の女は、今こそ頑ばるべき時だと思つたので、

『貴君が、私の心持を分つてゐて下さらないから、不安なのですわ。』

『貴女の心持が分らないつて？』

今度は、三木の方が、じつと相手の顔に目を据ゑて、一寸の間だまつてゐたが、

『それは、僕の方でも云ふことではないでせうか、僕は最初貴女と會つた時から、貴女が好きなのです、しかしそんな事はかるがるしく口に出して云ふべきではなく、その前に貴女の氣持も見定め、自分自身の氣持も見定めようと思つてゐたのです。でも、貴女がさう云つて[illegible]以上、貴女の氣持を見定める必要は、なくなりました[illegible]し上げてもいゝんです。僕は、貴女が好[illegible]』

『まあ……』

飾り[illegible]のない三木の愛の告白が、あたゝかく心にふれて、こらへようもない、うれしさの涙が、瞼の下にもれ上つて來て、眼の前の海も、はるかの初島も、もじや／＼と見えなくなつてしまつた。

『僕はあなたを愛してゐます。貴女も、僕を愛してゐて下さるのでせう。』

壽美子は、香水の甘やかに匂ふハンカチで、鼻の下を抑へながらだまつてゐた。

これほど考へ深い三木に、少しでも嫉妬の心を起したりなどして、すまなかつたと思つた。

やさしく、しつかりと肩先に、三木の手を感じたが、次の瞬間、壽美子は頰を、その胸にピツタリと寄せてゐた。

うら〳〵とのどかに晴れた春のやうな海邊、しづかな波の音、風がやゝ肌寒かつた。

二人とも、またしばらくだまつてプールの縁を歩いた。

壽美子は、今まで曾て覺えた事のない獨占慾と、まだちか子に對するこだはりとで胸が濁つてゐるのを感じた。

壽美子は、三木に自分以外には、誰も愛しないと云ふ誓ひを立てゝ欲しかつた。

はしたない、くどい女と思はれても、佐伯に對するかるい不安から、心を洗ひ淨めたかつた。

『約束して頂きたいことがあるんですけれども。』

滑り落ちるやうに、壽美子はつい、そんな事を云つてしまつた。

『どんな事です？』

三木は、やさしく柔かに訊き返した。

『もう、佐伯さんのお部屋なんかには、いらつしやらないで頂きたいの。』

三木は、一寸苦笑したが、しかし素直に、

『あゝさう。行きません、僕はあゝ云ふ娼婦型の女は嫌ひですし……』

三木は、壽美子が、女性としては容易に云へないやうな事を、ハッキリ云つた氣持のいぢらしさに、崖の上から來る足音さへなかつたら、抱きしめて壽美子の新鮮な唇に最初の接吻を與へたかも知れなかつた。

『指切りしませうか。僕は、貴女だけのものだと云ふ……』

三木は、子供のやうに、小指を差し出した。

二人は、指をからめて、二三度強く振つた。

お互の眼の中には、眞心が輝いて、心と心は、ぴつたり一つになつた感じだつた。

壽美子の氣持は、日本晴に晴れて、安心して三木を殘して、東京へ歸れるやうな氣がした。

ホテルに歸ると、その夕方東京に、かゝす事の出來ない用事

を持つてゐる叔父が、氣をもみながら壽美子を待つてゐた。

『おい！　壽美子、汽車の時間まで三十分しかないぞ！』

叔父に云はれたので、壽美子はあわてゝ二階の自分の部屋へかけ込んで、身支度を整へねばならなかつた。

三木も、後から上つて來て、しづかな愛情を湛へた眸で、壽美子の動作を見守つてゐた。

壽美子は、ベレエに黑いヴエールをつけて、そのために冴え冴えと白く輝く顔を半まで蔽ふと、三木に別れを告げるべく、歩みよつた。

『私の家の電話、高輪の六百四番よ、お忘れなく。』

と、云つた。

壽美子のさし出した手が、強く胸元に引き寄せられて、燃ゆるやうな眼で見詰められたとき、壽美子は自分の眼にも熱いものを感じて、ハタと眼を閉すと、その時早く三木の唇が、彼女の唇の上に、掩ひかゝつて來た。

『ありがたう。壽美子さん。』

壽美子は、自分の方からも感謝したかつた。

三木は、驛のホームまで送つて來た。

『さよなら。歸つたら、すぐ電話かけます。』

と、愛情をこめて、さゝやいてくれた。

『え、どうぞ。』

壽美子は、心の八分まで、後に殘して汽車に乘つた。

魅手

三木は、壽美子を送つてから、部屋へ歸つて來たが、壽美子との生々しい記憶を、心の中で樂しく嚙みしめながら、籐椅子に倚つて、海を眺めたり、雜誌を讀んだり、創作に對する氣持の湧くやう、しづかに自分の氣持を、育んでゐた。

その内に、三四時間經つて、四邊がうす暗くなつてしまつた。

『もう、壽美子さんは、東京へ着いたゞらう。』

と、呟きながら、嬉しげな幽かな微笑を浮べた時、扉がノックされた。

三木は、女中が夕刊でも持つて來たのだと思ひ、

『おは入り！』

と、云つたまゝ、その方はふり向かなかつた。

外側の扉が、つゝましやかに、內の襖もしのびやかに開かれたが、三木は相手が聲をかけるまで、その方に背を向けたままであつた。

香ぐはしい、やはらかな匂が、靄のやうに感じられて、ハツとなつた瞬間、もう三木の双眼は、やはらかい手で、掩ひかく

された。

彼は、いきなり背後から、眼かくしをされたのである。

だが、三木は少しも、慌てなかつた。

『佐伯さんでせう。それならば、は入つて來てはいけない。僕が、此方を向いてゐる間に歸つて下さい。』

『あたしとは、もう交際しないつて、あのお孃さんに約束をなすつて？』

三木が、ふりほどかねば、そのまゝ兩掌で、胸元へ抱きよせさうな氣配だつた。

三木は、少しの劬りも見せず、

『うるさいですよ。』

と、突き放した。

『まあ。邪慳ねえ。』

さうは云つても、咎め立ての調子は、少しも響かなかつた。花のやうに、疊の上にたわみ崩れると、そのまゝ一寸靜かになつたので、三木は思はず、その方を振り向いて見ずにはゐられなかつた。

三木は、そこに誘惑に充ちた脣と、慾情にふざけた双眸を、豫期してゐたのに、さはなくて、案外無邪氣に悄氣返つた眼と、もの問ひたげな、しほらしい脣が、彼の心を迎へてゐた。

『さあ。お引きとり下さい。でないと、僕が部屋を出て行かなければならない。』

しかし、三木の聲は、勢ひのぬけた上の空の聲に近かつた。

『そんなに御迷惑なら、歸りますけれども……手もつけられない不良少女のやうに、追ひ出されるの辛いわ。』

『さうは、思つてゐませんから、安心してお引きとり下さい。』

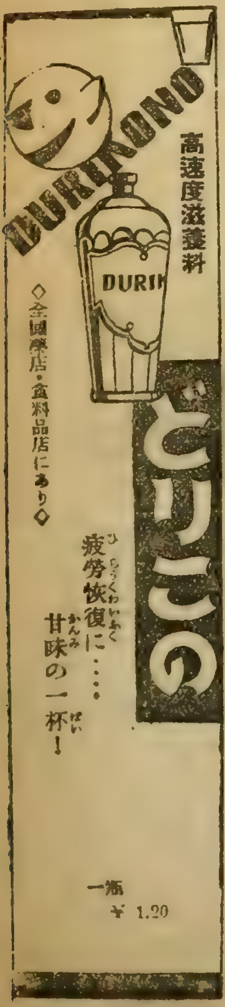
『ぢや、どう思つていらつしやるの？』

ちか子は、むきになつて訊き返した。

有徳の僧の悟しを待つやうに、神妙に眞面目くさつて見上げた顏は、正視するのが、危いほど美くしかつた。

『美人で、才人で、少々理窟つぽい媚婦だと思つてゐますよ……』

『さうを。ぢや、追ひ出さないでもいゝぢやないの。貴君だつて、私をお嫌ひぢやないんでせう。嫌ひだなんて、おつしやつ



たつて、私信じないわ。』

近々と、魅力にとんだ眸が挑戰した。

『好きであつたにしろ、生憎と僕は、二人の女性を一度に愛し得るやうな神通力は持つてゐませんよ。』

苦笑しながら、さう云つて、三木は立ち上つた。

『ぢや、やつぱりあのお孃さんを愛していらつしやるのね。』

と、三木が部屋を出ようとするのを、追ひかけて、

『どこへいらつしやるの？』

と、追ひすがらうとするちか子の手を三木は振り拂つて、そのまゝ素早く部屋を出ると、三木は階下へ馳け降りて、庭へ出た。

三木は、芝生から海岸へ降り立つと、晝間壽美子と一しよに歩いた海岸を、三十分近くも歩いて、壽美子の美しい蒼い眸を思ひうかべて、それ以外のものは、何にも考へまいと努力した。

帽子も外套も着てゐない三木に、夜寒の冷氣は痛いほどしみて來た。

だが、壽美子の面影は、佐伯ちか子の放膽な魅力の強い情慾の表情のために、ともすればうすれがちになるのを、搔き立て搔き立てする努力を我ながら不甲斐ないと思つた。

あゝ云ふ障害があつては、到底落着いて原稿など書けないから、今夜いつそ、東京へ歸らうかと思つた。その裡、二時間以上經つた。もう、ちか子も自分の部屋へ引取つてゐるだらう。

さう思つて、三木は、自分の部屋へ歸る氣になつた。

陸の妖女

上つて來る階段から、部屋の廊下など、凡てひつそりと物靜かで、たゞ自分の部屋から、灯がもれてゐるだけだつたので、三木は安心して襖を開けた。

が、部屋へは入ると同時に、三木は電燈の朝顏型の傘が、ちか子のものらしい、埃及模樣の赤いハンカチーフで、器用に、ふわりと包まれてあるのに、ギヨツと、した。

そこから、こぼれるやうに、やさしい匂が、部屋一杯に充ちてゐた。

賴みもしないのに、奧の六疊の間には、はや夜のものが敷かれてあるのが、垣間のぞけてゐる。

手焙りの鐵瓶の湯は、蕭々と音を立てゝ茶道具がお茶を淹れるばかりに食卓の上に置かれてゐる。

三木は、一瞬間、茫然として、そこに立ちつくした。

すると、三木の足音をきゝつけたのか、いま三木がは入つて來た入口から、微笑をその儘聲にうつしたやうに、

『何處へ行つていらしたの。寒いのに……』

と、云ふちか子の聲がした。

三木は、眼を瞠つたまゝ、ふり向いた。

『びつくりしていらつしやるの。私、今朝から女中に頼んで置いたの。あのお孃さまが、お歸りになつたら、私三木さんの隣のお部屋に移りますからつて。だから、私お隣りの部屋よ。ちやんと、貴君を監視出來るのよ。』

湯上りの憎らしいほど、冴えた頬。眞白いサテンの胸もとの寛やかなパジヤマに、淡いピンクのレースガウンを羽織つて、豐かな黑髪を編んで、白い首から胸へ垂らしてゐるちか子は、いかなる物語中の美姫よりも、美しくなまめいてゐた。

三木は、いよ/\益ゝ、考へを失つて、ちか子の感覺的魅力に壓倒されさうな自分を、どうともする事が出來なかつた。たゞ、うつとりと、なさけないほど、頭が働かなくなるばかりだつた。

『冷たさうなお手。』

三木の二つの手を、兩の掌の中で、あたゝめようとするのを、拗ねて引きこめると、

『どうも、貴女と云ふ人は……』

と、力なく云つた。

『貴女つて人は、何？ 滅茶だ、大膽だとおつしやるの？ もう、何にも云はないでよ。あたしを、熱海の海から出た妖女だとでも、お考へ遊ばせよ。』

ガウンの袖が、翼のやうに、ゆらめくと、三木は目も口も香ぐはしい匂の鎔鑛爐の中にずる/\と溶かされさうになると、ちか子の白い頬が、黑い瞳が、自分の顏に突進して來た。

× × ×

さすがに、ちか子もホテルの人の口や眼を、厭ふらしく、明方近く、隣りの自分の部屋へ歸つて行つた。

三木が、眼をさまして時計を見ると、九時を過ぎてゐた。

昨夜は、情景を效果的ならしめた赤いハンカチーフも、いつの間にか清々しい朝顏の傘で、枕元にも、床の周圍にも取り亂されたところは、少しもなかつた。

たゞ、夜着に馥郁たるちか子の移り香が、しみ込んでゐるだけだつた。

三木は昨日のことを、頭の中でくり返して、はげしい後悔に、責められずにはゐられなかつた。壽美子に對して、心が恐しくとがめられた。ちか子の肉體的魅力で、高い心や感情をしびらされてしまつた自分自身が、賤しい者のやうな氣がした。

純情の壽美子と堅い誓約をしながら、ちか子とかうなつてしまふなんて、なんと云ふダラシのない背信だらうと思つた。

白々と、映え亙つてゐる朝の光の中で、三木は魂の凍るやうな冷たさを感じて起き上つた。

バス・ルームへ行つて、顔を洗つてしまふと、三木は食堂へ行くのも、ロビイへ行くのも、人と顔は合はせるのが辛かつたので、そのまゝ芝生に降りると、青いつや／＼した葉の茂つてゐる蜜柑の木の蔭で、朝の海を眺めてゐた。

空氣の澄んだ靜寂の中に、ちか子のよく透る歌聲が低くきこえて來たので、三木は逢ひたくない氣持で、かくれようとすると、ちか子は早く追ひすがつて來て、

『お寢坊ね。』

と云つた。

三木は、ちか子のいたづら／＼した眸から、顔を背けた。

『怒つていらつしやるのね。あのお孃さんにすまないとでも思つていらつしやるんでせう。いゝぢやないの、あのお孃さまはお孃さま、私は私でいゝぢやないの。私、貴君をみんな頂戴！なんて云ひやしないわ。』

三木は、うるさいと云つたやうに、歩き始めようとした。

『まあ、足袋をはいていらつしやらないの、冷たさうね。』

さう云ふと、ちか子は白足袋の、ぴつちりした爪先で、三木の足の甲を、グツと踏んだ。

『うるさい！ 誰か見てゐる。』

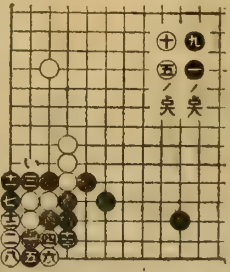
と、身を退きながら、三木の心の寒さは、ついほどけかゝつてゐた。

（つゞく）

大懸賞「讀物投票」募集 一九六頁

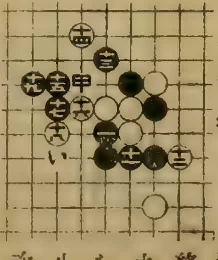
娯樂室解答

○詰碁 七段 瀬越憲作



黒三と打てば此白が取れます。黒五は常用の手段で以下十三まで必然の手順で黒攻合勝となります。されば白二とハネる手はないので、二で三の點に受けなければならぬ處です。黒三で四にツグと白は「い」に打つて形を整へることになります。實戰の場合に黒三の手を看過してはいけません。

○聯珠 珠聖 清水菁石



終局、黒一九の三追手を白何れに止めても黒次に「甲」で四三勝變化略す。但(十七)は次『い』の四三合追手

○詰將棋 七段 溝呂木光治

正解手順△八三銀成▲同玉△八四銀打▲九二玉△八三銀成▲同玉△七五桂▲九二玉△八四桂▲八一玉△七一歩成▲同玉△七二銀成迄の十三手詰

○判じ繪――古の奈良の都の八重櫻今日九重に香ひぬるかな

○繪さがし――德利と盃

本圖の解答は四五五頁にあります

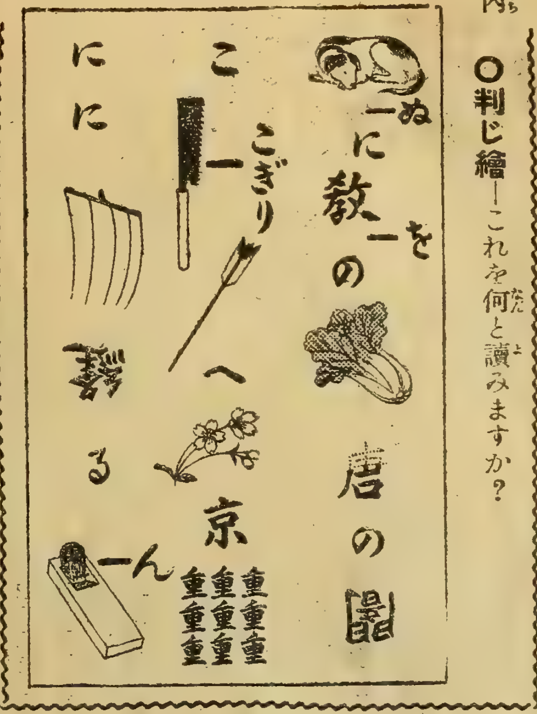
○大東京洒落言葉

△お腹數寄屋で目は丸の內
△恐れ入谷の鬼子母神
△さうで有馬の水天宮
△醉つて九段(仍而件)の坂の下

○謎の名人

盲目の謎の名人仙臺坊と客の甲乙との問答、
甲『仙臺坊の馬鹿とかけて何と解く?』
仙『金屏風に褌と解く。』
甲『心は……?』
仙『かける奴が馬鹿だ――』
甲『!!?……』
乙『それぢや、仙臺坊糞喰へとかけて何と解く?』
仙『されば、夕立と解く。』
乙『心は……?』
仙『西ア暗い――(汝ア喰へ)。』
乙『!!?……』

○判じ繪――これを何と讀みますか?



○珍レコード

△セントルイスのトーマス・マクナリー君は五百六十四時間も踊り續け長時間ダンス記錄を作つたはよいが卒倒して生命危篤。
△今年徴兵適齢の志摩五一君(三重縣飯南郡伊勢寺村)三、四歳の頃から衣服を嫌がり爾來十有餘年春夏秋冬素ッ裸一糸もまとはずに暮してゐる。
△今年二月三日の節分會に成田山でまいた豆が、ナント四斗俵で二十俵。

○面白い性格判斷

△百發百中の帽子判斷
あみだに冠る人……磊落で呑氣者
横ちよに冠る人……輕率屋
スッポリ冠る人……神經質
前のめりに冠る人……氣取り屋
水平に冠る人……溫厚篤實
挨のまゝ冠る人……不精者
切符をはさんで冠る人……ずぼら
△奇珍に當る履物判斷
平らに耗る人……福德圓滿の人
前の耗る人……性急者
後の耗る人……樂天家
內側の耗る人……小膽內氣の者
外側の耗る人……大膽豪放

○生きた落語

青森縣主催の産業組合各町村會議が今年一月三本木で開かれた時のこと『村長若くば助役出頭すべし』と通達しておいたところ、天

間林村から中野さんといふヨボヨボの老助役が遙々出て來たので、『村長は?』と聞いたら、『書面に村長ワカクバ、、、とありましたのでかくいふ老生が罷り出ました』はまるで落語。

○繪さがし

この繪の中に花見の時や宴會の時に必ず使はれるものが二つかくされてゐます。何と何でせう。

○買物心得川柳

一、足立てて行けば足代きつと出る。

二、贅澤な物はお金ができてから。

三、氣をながく待てば海路の出物あり。

四、現金で買へば値段安くする。

五、買物の上手働きの一つなり。

六、云つたなりで馬鹿正直が買つてくる。

七、緣日の植木根ッこの無いがあり。

八、米と酒小買ひするのに限るなり。

九、腐つてる鯛より干物買つて來い。

十、ふら〱とお世辭に乘つて買ふ勿れ。

○數字金言

八十二三四〇(鳩に三枝の禮)

一〇一〇〇〇〇〇(人は人我は我)

○一口ユーモア

新米の車掌曰く『次は終點でございます! お降りのお方はありませんか?』

○それ故に

主婦『うちで働く召使は、餘程經濟家でないといけませんよ……』

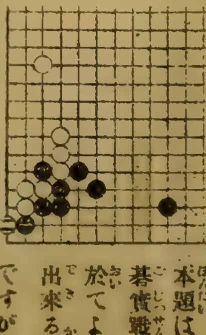
召使志願者『あたし、とても經濟家なんですの。その爲に前の家を出されたんですもの……』

主婦『そりやどうして?』

召使志願者『はい、自分の着物を經濟しまして、奥さんの許り着ようとしたもんですから。』

○詰碁新題

七段　瀬越憲作出題



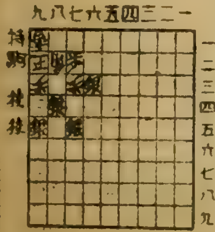
本題は置碁實戰に於てよく出來る形ですが、黒一白二の時黒三の手でどう應ずればよいか。

○聯珠新題

珠叟　清水吾石出題

黒十一から追手詰で、最も簡單な勝はどこ?

○詰將棋新題



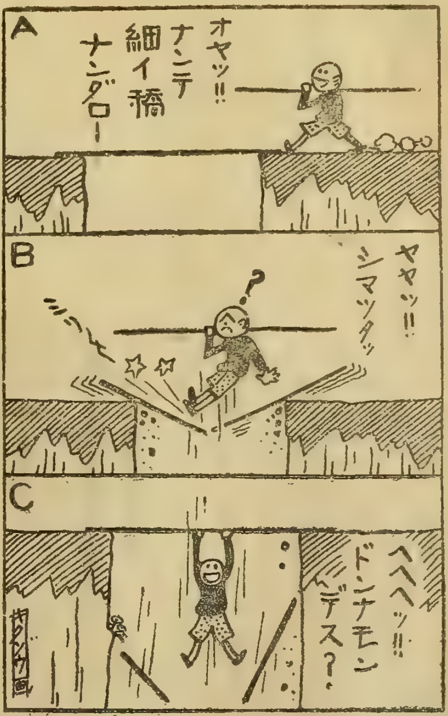
溝呂木光治出題

讀者倶

野球放送　煙草づくし

東京　石川　八郎

（白梅）の花既に散り（チエリー）の花咲き亂れる絶好の野球シーズンで（アルマ）す。愈〻天下を二分する煙大對草大の決勝戰です。陽春の（朝日）が（麗）と輝く空には應援の（エアーシップ）が飛んでゐます。グランドでは各（スター）が（アはく）色のユニホーム姿（リリー）しく緊張して（敷島）つた身體を（胡蝶）の如く輕快にフイルディングの最中です。いづれを（あやめ）かきつばた（大和）男の子ははち切れんばかりの元氣です。榮冠の（ほまれ）果して何れに？　試合開始まで後（龍田）一分、愈〻、プレイボール、サイレンの（響）、先攻煙大の一番打者煙太屋君が（バット）をかついでボックスに入りました。烈（はぎ）しい應援です。應援團中には（不二）んの方も居て頻りに煙大の爲に勝を祈（みのり）りつつあります。第一球投げました。早くて見えない位の速球、正にスい、モークボールです。



（横濱市　大高喜久　三）

◇丁ン髷が富士を讀んでる花の茶屋

◇春風も机の富士の頁繰り

◇若草に君と繙く富士であり

川柳　『富士』の春

三重縣　常安寺菊子

◇富士を讀む窓へ蝶々も覗きに來

◇摘草の籠へも富士を入れて行き

◇富士々々と呼でゐさうな揚雲雀

◇春の旅汽車の窓から富士を買ひ

◇富士讀めば一刻萬金春の宵

泣かされた『春を待つ唄』

岐阜縣　石川　政男

私は富士創刊號から丸五年愛讀して居ますが、二月號の『春を待つ唄』を讀んで感激の涙にくれました。私は二十一歳の青年ですが、此の物語には心から泣かされました。荻原校長、中村先生、宮太郎君、美代さんの健康を祈ると共に、一層の御努力を願ひます。『晴曇』と『愛の復讐』を面白く讀みました。

都々逸　『富士』の一日

樺太　葭崎　波貌

◇富士の着く日は耳そば立てゝ
　待つは『郵便』聲の主

◇繰れば繰る程興味はつきず
　『富士』の魅惑に日が暮れる

◇勤め歸りの夫にも見せて
　共に鑚仰の雜誌『富士』

◇富士の挿畫の憧れ人が

夜半の目覺めに
笑みかける

樂部

俗謠　リツトン節

紀伊　南　柯

認識不足の　聯盟
が　はるばる寄した
調査團　大名旅行の
甲斐もなく　やつぱり認識不足に
てでつち上げたる報告　は南京北
平の泣き言を　かきつらねたる
ばかりにて　我全權の一擊に
チンチンバラリ　チンバラリ
くだけ散るこそ　是非なけれ
リツトンリツトンリツトントン
それでもなほも　橫車
押して通そと　するならば
頑迷不靈の聯盟を
さつさとすてゝ　去るばかり
リツトン、リツトン
リツトンツトン

（漫畫）　山口市　羽野　幾久

鴨綠江節替歌　『冨士』の歌

兵庫縣　藤中　靜夫

冨士なれば故鄉の土產に澤山欲しや、買ひたい心は山々なれど、ヨイシヨ、發行ればたちまち賣り切れてよ、買ふに又買はれず、苦勞する

日の本で一番よいのは雜誌冨士老若男女の差別なく、ヨイシヨ、旅行するにもよ、家庭にもよ、冨士を讀まない人はないチヨイ、チヨイ、チヨイ（以下略）

笑話　あちら立てれば

伊豫　村山　秋彥

女房『二度目のお產から樂になるんですつてね』

亭主『その代りに俺がだん〳〵苦しくなる。』

三月號を讀んで

北海道　高久　新吉

待ちに待つた三月號が本屋から屆いた。皆素晴らしい大傑作揃ひ、其中でも『愛に幸あり』は讀むにつれ思はず眼頭が熱くなつて來た。實に良い感動美談でした。尚『晴曇』を待つてゐます。是非次號にはお出し下さい。

俳句　初春

宇都宮　加地茫々子

◇微笑みや『冨士』に集る置炬燵
◇春雨に窓の灯あかく灯りけり
◇『冨士』に物書く宵や初蛙

投稿大歡迎!!

特に面白い創作漫畫をとります。何でも結構、どし〳〵御投稿下さい。用紙は官製端書に限る。

「冨士」編輯局讀者俱樂部係宛にお送り下さい

痔疾でお悩みの方は早速お試し下さい！

止血・止痛・消炎の三大作用迅速の革命的痔疾治療薬カルチゴール

★恐るべき痔疾

痔疾は非常に多い病氣で、日本人の約八割迄は痔が悪いと云はれて居ります。それは痔疾が局部的には苦痛の甚だしいものですが、直接生命に關する事が少いと云ふところから、一般に輕く見る傾向があつて治療を怠つたり一時的の療法を行つたりする爲であります。然しながらこの痔疾は決して輕視すべきものではなく、夏は夏で暑さと濕氣が局部を爛らせて病原菌の蕃殖を助け、冬は冬で寒さと冷えが病勢をこじらせ、痔疾の中でも難治な周圍炎や痔瘻などに悪化してしまふと取返しのつかぬ事になります。

★カルチゴールとは

從來に於ては確信を以て行ふ事が出來る痔疾の治療方法がなく、痔疾藥も非常に多數にありますが何れも充分の効果を期待する事が出來ませんでした。ところがこゝにお知らせするカルチゴールは痔疾患者にとつて一大福音を齎した革命的の治療藥で、その配劑性狀から見て殺菌消毒力が極めて強く……

一、特別に威力のある殺菌作用であらゆる病原菌を殺して病勢を撃退する

一、獨特の淨化作用で毒素を分解し、疼痛や痒感を去る

一、強烈な收斂作用で分泌物を制止して新しい表皮を作る

と云ふ三大作用を有して居りますので在來に比類のない驚くべき効果を發揮します。

しかもチューブ入りのクリーム狀になつて居り、只患部に塗布する丈ですから携帶に便利、使用にも至極便利で家庭で素人にも出來る尤も安全なものであり、又痔疾に禁物な刺戟成分を含んでをりませんから治療を促進することになり速かに出血を止め、痛みや痒みを和げ、疣痔、裂痔、痔出血の様な難症、肛門周圍炎や痔瘻の様な悪性のものにでも、僅かの塗布で効果が顯れますから、家庭にあつて、或は仕事に從事しながら容易に難病を征服出來るのがこのカルチゴールの特長であります。

痔疾塗布藥**カルチゴール**は定價二圓、送料内地十五錢領土四十二錢米國二十四錢を添へ東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ御註文下さい

家庭醫學

◇春は持病の起り時期

春は諸病の萌す時期ですが分けて胃腸病は胃痙攣を起したり、腹痛、下痢などを起し易く、全身衰弱して氣力を失ひ鉛を負うた樣な重苦しい氣分に閉されます。

胃腸病は誰方も經驗される病氣であるだけに輕く見られ根本的な治療を怠る傾向があります。單に胃腸病と言つても其治療法は多種多樣ですが何れにせよ理想的な胃腸藥を選擇して服用することは、大切なことであります。

◇胃腸病患者にお奨めしたい理想藥

醫學博士　内田久吉

死亡統計上から見て我國は世界第一の胃腸病國とされてゐる。之は一般に胃腸病と言ふと輕く視すぎる傾向があつて、その手當も一時的の重曹や苦味丁幾位で間に合せておくと言つた樣な狀態の爲め、病を重らせてゐるのであると思ふ。

尤も今日迄、家庭藥として胃腸病を根本的に治す樣な藥は殆ど見當らず、多くは一時押へで、而も胃腸を刺戟して無理に消化機能を働かせるやうなもののみであつたが、最近田口博士が創製された『イノール』は、それ等と全く異り、衰弱疲憊した胃腸の機能を健全に還らしめる、即ち胃腸病を眞底から治す各種の優れた貴重藥の適配集合であるからこじれた慢性症にも著しい効果が認められる。實驗の結果、豫想以上の治效あることに驚嘆してゐる。胃腸藥は何がよいかと問はれたならば、私は『イノール』と答へるに躊躇しない。

◇イノールの適應症に就て

胃腸カタルは食物の不攝生即ち暴飲、暴食、腐敗せる飲食物、冷熱その度に過ぎたる飲食物等を用ひる等所謂食傷が原因をなして起るもので、急に食慾が無くなり、口が渇き、胸惡く、ゲップをし、嘔吐を催し、胃腹部に疼痛を起し、頭痛、眩暈を伴ひ發熱し、腹鳴、下痢をするのが特徴であります。

この樣な症狀の時には直に醫師の診斷を受けるのが安全ですが、自分で出來る手當としては鹽水を澤山飲んで指を以つて舌の附根を刺激し、胃中の有害物を全部吐き出し『イノール』を服用しつゝ一兩日絶食して靜養すれば必ず完全に治癒します。

胃酸過多症は、胃液中の酸性分泌の多いために起るもので刺激性飲食物を多食する等が重なる原因であります。この病氣は、胸が灼け、ゲップが出、酸い水を吐き、胃部が痛み、物を食べると痛みが止ると言ふ厄介なものです。この樣な症狀には必ず『イノール』を服用して下さい。『イノール』には重曹が含まれてゐませんから習慣とならず、病源を除去する特徴を持つて居ります。誰方も家庭常備藥として是非『イノール』を御用意下さい。

（本社代理部發賣、全國の信用ある藥店にあります。定價五日分五十錢　十二日分一圓です。）

剃らずに肌を害はずスッキリ 美しくなる最新脱毛料 これなら誰も安心して使へます

艶々と、いつも美しい若やいだ肌の魅力——それは見るからに新鮮な健康美を思はせます。

婦人方の洋装が非常に多く用ひられて居る今日、地肌の美こそあらゆる美の根本ですから、腕や腋の下、襟足或ひは頸すぢ、その他手足のムダ毛は誰方も十分に取り除いて、皮膚面は常にサッパリして置きたいものです。

殊に顔や手足にムダ毛がゾク／＼生えてゐるのは、色を黒く見せるばかりでなく、折角のお化粧も却つて見苦しい感じを與へるばかりで、決して潑剌たる健康美は望まれません。

近代的な清楚な化粧美も、申すまでもなくムダ毛のないスッキリした地肌からこそ生れるのです。

一般にムダ毛は剃るのが普通でありますが、しかし毛髪は剃れば剃るほど、これが刺戟となつて却つて生え方が早くなり、濃くなる傾があります。

殊に剃刀では具合の悪い腋の下や、恰好のつけにくい生え際などは、どうしても適當な脱毛料を用ひるより他はありません。

脱毛法としては一般にレントゲン照射法電氣分解或ひは薬物による方法等がありますが、最も簡便なのは薬物による方法です。しかし中には刺戟性のものがありますから選擇に注意しなければなりません。

刺戟性がなく、悪臭が少く、皮膚を荒さないばかりでなく、皮膚面を保護するものこそ最も理想的のもので、この條件に適つたものに『ハール』といふ脱毛料があります。

この『ハール』は塗つて數分たてば、つけた所のムダ毛は一毛も殘さず簡單にスッカリとれて、見るからに美しく、用ひた後は滑かで、剃刀の樣に少しも危險がなく、絶對に肌を荒さず全く無害で、用ひる度數を重ねるにつれて毛根が薄く弱くなり、遂に脱毛の目的が達せられるのです。

上流社交界の方々や女優方の間では盛んに愛用され、殊に水谷八重子さん、及川道子さんなどは大の愛用者です。

醫學博士興津磐先生も『その品質に於ては外國品に比べて遜色なく、到底外國もの〻及ばぬ特長があり、恐らく脱毛料として最もよいものと思ひます。』と賞讃されて居ります。

是非誰方も一度お試し下さい。皆樣の皮膚のため、整美のため、最も理想的の脱毛料としてお奨め申上げます。

高級脱毛料ハールは三越、松坂屋、白木屋その他信用ある大百貨店有名薬店などに販賣されてゐます。大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)にてもお頒ちしてゐますから品切の節は直接代理部宛御注文下さい。

(クリームチユトブ入八十錢・一圓五十錢粉末一圓七十錢送料は何れも内地十五錢領土四十二錢です)

喘息發作の苦痛から如何したら逃れられるか

苦しい發作を豫防し、永年の固疾も知らぬ間に全治させる家庭療法

喘息といふ病氣は、非常に苦しい病氣でありますので、今日迄この苦痛から如何したら逃れる事が出來るかと種々研究されて來ましたが、本當にその病源から研究して根本的に治療すると云ふ樣な方法は未だ發見されないで、一時的に發作を止める麻痺劑等を用ひて居る爲めに『ぜんそく』は不治の病である等と云はれて居る有樣であります。

一般に喘息は、痰咳の病であると思はれて居りますが、喘息の發作は肺溢血の爲に氣管支筋が痙攣を起すものでありまして、決して痰咳の病ではありません。從つて舊式の所謂たんせき喘息の藥の類では浴びる程服んでも喘息を治療し、猛烈な發作を鎭める樣な効き目はありません。やはりこの病源に對する手當を行ふ事が必要であります。

それでは、果して喘息は根治出來るものかと申しますと、小社に於て數年來その實驗成績を報道し、本誌の愛讀者各位に大確信を以て御推奬して來ました『喘息エキス』の効果に就きまして百三十一名の實驗者からの精密な御報告に依りますと、

◇喘息エキスにより著しき輕快者……二四
◇使用以來發作せずといふ者……一五
◇全治と報告ありし者……七
◇相當効果あり愛用すといふ者……七八
◇不變若しくは無効といふ者……七

と云ふ非常に良好な結果でありました。これを見ても喘息は治療の方法に依つて、全治も不可能ではありません。

然らば、喘息治療には如何したら一番合理的であるかと云ひますと、精神を緊張させ、一切の無理、過勞、暴飲暴食、睡眠不足等をせぬ樣に心掛け、一般の養生に注意を拂つて、努めて喘息の發作を起さぬ樣に豫防する事であります。

若し萬一少しでも發作が起りましたならば時を移さず『喘息エキス』の一匙か二匙をお湯にといてお服みになるのが一番です。

この『喘息エキス』は安全無害、習慣性とならず、喘息の本體である氣管支筋の痙攣を鎭靜消失させる作用が特に著しい製劑ですから、激しい發作も鎭める強力な効果があります。又發作の起りさうな時には直ぐ『喘息エキス』を服めば之を豫防する事が出來、何時か忘れる樣に根治させる事が出來ます。

『喘息エキス』は全國有名藥店にありますが、藥價は試用分一圓三十錢、三十回分二圓五十錢、六十回分四圓八十錢、百回分七圓ですから、品切れの節は送料內地十五錢領土四十二錢を添へ、東京市本鄉駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)へ御注文下さい。

戲曲 (三幕五場)

松岡全權（まつをかぜんけん）

竹田敏彦作

田中良畫

登場人物

松岡代表
長岡代表
佐藤代表
杉村聯盟事務次長
伊藤情報部長
顧支那代表
郭支那代表
丁滿洲國代表
リー同國顧問
サイモン英代表
マダリアガ西班牙代表
ベネシュ智惠古代表
ドラモンド聯盟事務總長
顧維鈞の夫人
ホテルの玄關番
青年野口
其他各國代表等。

第一　戰前の誓

時は一九三二年十一月十八日の未明――レマン湖畔ジュネーヴの街は、今日珍しく濃霧も晴れて、磨ぎすましたやうな瑠璃色の空には、殘星の影が幽かに微笑み、雪で化粧したモン・ブラン峰の頂には、金色の朝雲が、曙光に映え輝いてゐる。實に此の日こそ、我が九千萬同胞の、熱烈な支持と信頼と、運命を決する重責を擔つて、近く此地に開かれる滿洲問題討議の國際聯盟會議に向つた日本全權松岡洋右氏が晴れの乘込みの歴史的朝である。宿舍ホテル・メトロポールでは、朝まだきから、總動員で歡迎の準備に忙殺されてゐる。中でも、二階の大サロンは、大小の日章旗に飾られ、敷きつめた絨毯、數多い卓、椅子、ソファ、ストーヴと、幾人ものボーイ達が、拭き掃除や飾付に餘念がない。そこへ、廊下傳ひに、のそりのそりと巨大な體軀を現はしたのは、このホテル中の人氣者玄關番のエドアルトだ。藍色に赤線入りの二重金釦といふ道化た禮裝で、愛嬌たつぷりな赧ら顔は、今日一としほ朗らかな微笑に輝いてゐる。

エドアルト。（ボーイ達に）よう、お若い衆……御精が出るな。

ボーイA。おゝ、玄關番のをぢさんか。朝つぱらからにや／＼と、馬鹿に御機嫌だが、一體何うしたといふんだい。

エドアルト。どうも斯うもねえ、俺がお待ち兼ねの戀人樣がお見えになるんぢやねえか。

ボーイA。戀人？　この忙しいのに冗談ぢやねえぜ。をぢさん。

エドアルト。冗談どころか、今日は日本から松岡さんといふ、俺の大好きな全權がお見えになるんだ。

ボーイA。何だ。戀人つて、全權閣下のことか。

エドアルト。だつて、俺はあの方が大好きなんだよ。

（レマン湖畔よりジュネーヴ市街を望む）

ボーイB。（驚いたやうに）お前、松岡全權を知つてるのかい。

エドアルト。知らねえ……でも日本人なら、きつといゝ方だらうぢやねえか。

ボーイC。（ボーイABに）よしな〳〵、玄關番先生の日本贔負に係つてちや、きりがねえよ。

エドアルト。だつて、お前、考へてみろ。このホテル・メトロポールにある百十室の客室は、百五室まで日本のお客樣ぢやねえか。

ボーイB。何だ、算盤づくの話か。

エドアルト。馬鹿な。そんなケチなエドアルト樣ぢやねえぞ。多勢の日本客に近づいて、日本人のいゝ處が、解つたから言ふんだ。さうぢやねえか、第一に親切で、謙遜で、そして勇氣があつて……

ボーイC。もう澤山、エドアルト。

エドアルト。ぢやお前等、支那人がいゝのか。

ボーイA。だつてエドアルト、今度の會議は、日本に分はあるまいぜ。

ボーイC。さうとも、何しろ支那の領土を取つたんだから。

　かうしてボーイ達は、愛嬌者エドアルトの日本贔負を、次第と、面白さうに惡戲ひはじめる。

エドアルト。（むきになつて）さあ、それが大間違ひだ。認識不足といふやつだ。

ボーイD。ようエドアルト日本代表！

エドアルト。ぢや、わかるやうに俺が說明してきかすから、皆そこへ並んでかけろ。

ボーイA。いよ〳〵聯盟會議の前稽古か。

ボーイB。（そこらにゐるボーイ達に）さあ皆、玄關番エドアルト日本代表の演說だ。

（日本全權一行の本據メトロポール・ホテル）

ボーイC。集まつた／＼。聯盟理事會の始まり。

ボーイ達十數名、ずらりと椅子を並べて腰を下ろし、拍手する。エドアルト玄關番はテーブルの前に立つて、代表氣取りの身振り面白く語り出す。

エドアルト。さて各國の代表諸君！

ボーイ。ヒヤ／＼。

エドアルト。先づ第一に認識すべきことは、問題の滿洲ぢや。あれはもと／＼支那の領地ぢやない、別々の國だつたのぢや。

『ノー／＼』の聲が起る。

エドアルト。その證據に……待つてくれよ。（行詰つて、手帖を出して繰り／＼）さうだ、支那人は漢族、滿洲人は滿洲族、人種まで違つてゐるのぢや。ところが……（手帖を繰つて）今から三百年前に、滿洲の王さんが支那を征伐して兩國の王さんを兼ねるやうになつた。その時に初めて、滿洲と支那は一緒に治められるやうになつたのぢや。ところがぢや。今から二十何年か前に、支那に革命が起つて、支那人は、その王さんの子孫である宣統帝といふ王さんを支那の王位から追拂つた。さて、王さんは追拂つたが、持つてきた滿洲の土地は返してやらなかつた。ところがぢや――

ボーイC。ところがか。（皆笑ふ）

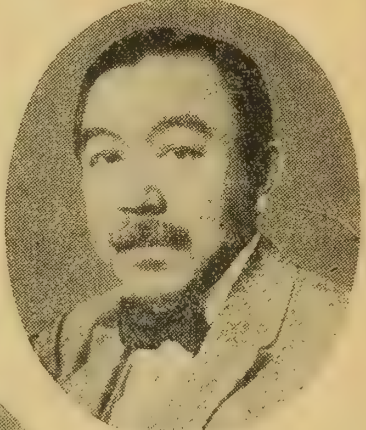
エドアルト。謹聽！ところが、因縁は恐しいもので、今度滿洲があんな風に獨立したが、その執政の位についたのが、その宣統帝、即ち今の滿洲執政溥儀ぢや。即ち、祖先のものが子孫の手に返つた譯ぢや。だから理窟の餘地はない譯ぢやねえか。何うぢや。

ボーイC。わからねえぞ。

エドアルト。頭の惡い奴ぢやな。

ボーイC。だつて、玄關番閣下。それな

ら、フランスはブルボン王家の子孫に、獨乙はカイゼルに返さねばならない。問題は滿洲獨立と日本の行動にあるのだ。エドアルト。待つた。それも誠に自然なのぢや。だが、何分、こゝにゐられる代表諸君は無學者のお揃ひだから難しい理窟を言つてもわかるまい。ごく卑近な例で說明するぢや……さういふ次第で、言はゞ滿洲といふものは、今の溥儀執政の先祖が、支那へ王さんとして婿入りする時に、連れて行つた連れ子も同じぢや。ところがぢや、支那民族は、婿さんだけを追ん出して、連れ子は手放さなかつた。といふのは、この連れ子は、非常に美人で、おまけに澤山の財產がついてゐるからぢや。然るに支那はぢや、この娘を可愛がるどころか、さんぐ\虐めぬいて、持つてゐる金ばかり絞るんぢや。これぢや娘もたまらん。これを見て、一番この娘を口說き落し、我物にしようと、頻りに色目をつかつてゐるのが、露西亞ぢや、亞米利加ぢや、英國ぢや。中でも



日本全權　長岡春一氏

日本全權　佐藤尙武氏

露西亞などは、今から二十九年前に、この娘を手込にしようとさへしたが、意氣地のない支那は手の出しやうもない、それを隣家に住む親戚の日本が見かねて、一族の大事とばかり、命をなげ出して露西亞を壓へつけ、娘を狼藉の手から助けてやつたのぢや。この仁俠に、娘がすつかり日本に惚れた。樂しい戀の萠生えぢやよ。（急にボーイAに）おい、涎をたらしちやいかん。（皆どつと笑ふ）そこで支那も、日本へのお禮の意味でこの二人の特別の交際をゆるすことになつた。以來日本はこの娘のために、隨分情を盡してきた。ところがぢや。（一同笑ふ）最近になつて、支那は、ますく\娘をいぢめる上へ、その戀人の日本にまで喧嘩を吹つかけて、二人の間まで割かうとした。そこで娘は、繼しい父の支那から逃げて戀人日本の懷に飛び込んできたのぢや。日本は人情として、これを振りすてることはできない。わかつたかな諸君、そのうちに、娘滿洲は、日本の情を宿して滿洲政府といふ可愛らしい男の子を生んだのぢや。諸君、これが間

違のない事件の經緯ぢや。いかに、國際聯盟ぢやとて、これほどの仲を、割く力があらうか。これほどの自然な成行を、しかも一族間の問題を、他人がとやかういひ得る理由があらうか。まして二人は子までなして、その子は健かに育つてゐるのぢや。（拍手が起る）

支配人。何をしてる！

　その時、ホテルの支配人が、慌しく驅けてきてこの樣を見、

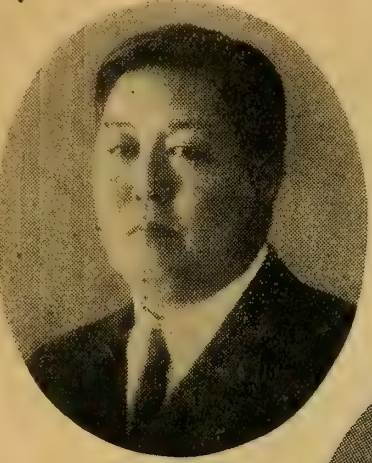
一同。はつ——（狼狽しだす）

支配人。間もなく全權のお着きの時間だ。エドアルト！お前、玄關を空けて何をしてゐる。

エドアルト。は、はい——

　慇懃な、しかし滑稽味たつぷりの一禮を殘して、逃げるやうに玄關の方へ消え去る。ボーイ達、くす〳〵笑つて見送りながら、椅子、卓などの位置を直して、急いで玄關の方へ去る。

間もなく、警笛の音勇ましく、多數の自動車の轍の音が、玄關の方で止る氣配がする。續いて、支配人の案内で、我全權松岡洋右氏、黒の背廣に縞ズボン、堅き決意の色を眉宇に示して、長岡、佐藤兩代表始め、澤田事務局長等日本代表部員多數、杉村聯盟事務次長、陸海軍代表、在住代表部員夫人達、新聞記者等に護られて、廊下傳ひにサロンに現はれ、そのまゝ奥の方へ通り過ぎる。その後から、玄關番エドアルトもボーイ等と共に、日章旗の貼紙した夥しいトランクや、スーツケースなどを、何回も往復して奥へ運ぶ。暫くして、荷物を運び終つたエドアルト、ボーイ達、サロンに出てくる。



聯盟事務次長
杉村陽太郎氏

情報部長　伊藤述史氏

ボーイA。（ほつとしたやうに）やれ〳〵これで一ぷくだ。

エドアルト。どうだい、あの凛とした顏付は、おまけに愛嬌もあつて、男でも惚れ〳〵するぢやねえか。

ボーイB。お前に惚れられたつて、ぱつとしねえよ。

ボーイC。でも、お前、さつきの理窟は、なか〳〵大したもんだ。全權閣下に敎へて上げたらどうだ。

エドアルト。駄目だ。あれは、二階にゐる日本の新聞記者先生から聞いた受賣りだ。はつはは。

日本新聞記者四五名、奥から出てくる。

エドアルト。おつと、さう云へば、恰度御本家がこちらへやつてくる。退却々々。（去る）

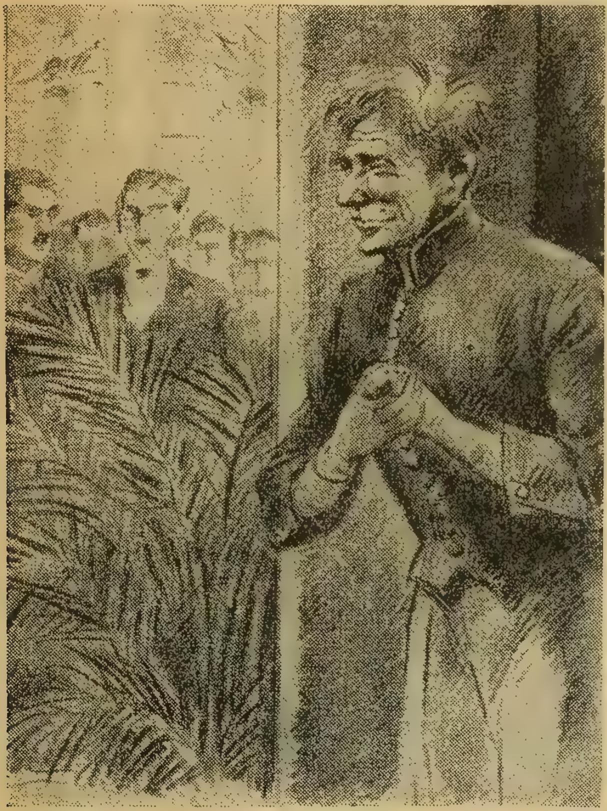
ボーイ達も一緒に笑ひながら去る。新聞記者達、そこらの卓を圍んで腰を下して松岡評を始める。

新聞記者甲。なるほど、どこか魅力があるね。

新聞記者乙。あれで英語も佛蘭西語も素敵だから、たまらない。おまけに押しの强さときちや、一旦言ひ出したらてこでも動かないさうだ。

新聞記者丙。殊に彼の雄辯ときたら大したものだよ、二日二晩、休みなしに、喋り續けたといふ、レコードホルダーだ。死んだ田中大將も『松岡の舌は、どう言ふからくりになつちよるのかのう』と言つて驚いたさうな。

新聞記者甲。いや、それについてこんな話がある。先生元來女の方は斷然固いので、新橋などへ遊びに行つても喋る一方、だから若い妓には大の鬼門さ。自然婆さん組ばかり集めてゐる。ところがある晩、その中の政界通の婆さん藝妓が『松岡さん。あんたもなか／＼豪い人だが、何さま口が過ぎるので、思ふやうに出世が……あつば、ばばば』（掌で口を叩く眞似をして）と、かうやられたのには流石の先生も參つたさうだぜ。



新聞記者丁。はつははは、しかし、事實口が輕すぎて、失敗する恐れもあるんぢやないか。

新聞記者丙。ところが何うして、言ふべきこと、言はないことはちやんと心得てゐるよ。でなきあ、君、山縣、西園寺、寺内、あの手合にあれだけ信用されるものか。

新聞記者丁。なるほど、それもさうだな。

新聞記者甲。それに第一肚がしつかりしてゐる。今までの外交とは違つた、何かを見せてくれるよ。

そこへ在住代表部員の夫人達も、數名出てくる。

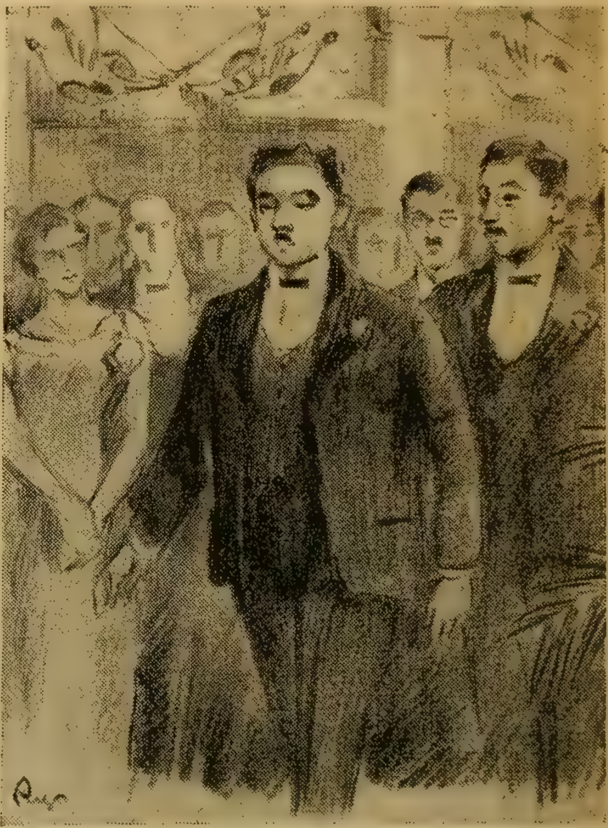
夫人の一。ぢや、この邊で、お待ちいたしませうよ。

夫人の二。歡迎會は、もうすぐ始まるのでございませう。

夫人の三。松岡さんも、十一時から、外にお約束もあつて大變お忙しいさうでございますね。

そのうちに、先刻の我代表部員、聯盟關係者、陸海軍關係者など、歡迎の人々、續々サロンに集り、松岡全權も、長岡、佐藤兩大使、建川中將等に圍まれて現はれ、中央の席につき、他の一同も、事務官達の斡旋で銘々席につく。やがて、長岡大使が起立して——

長岡大使。さて諸君、我國目下の重大案件たる日支問題の聯盟會議を控へまして、こゝに本國より練達の人松岡代表を迎へ

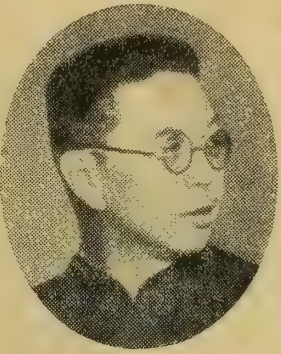


ましたことは、我々の共に此上ない欣快とする處であります。就きましては、今少し時間の餘裕を見まして、もつと盛大な歡迎の宴をあぐべき筈でございますが、何しろ聯盟理事會も明々後日に迫り、その準備の爲、同代表も、最早殆ど寸隙もない次第でございます。長途の旅程、癒す間もない同代表には、甚だ御迷惑と存じながら、この僅かの隙をいたゞきまして、ほんの、お顏つなぎだけの御歡迎の集まりを催しました。いづれ本格の御歡迎會は、そのうち、折を見まして、改めていたすことにいたします。

拍手裡に座につき、松岡全權に目配せする。松岡全權、拍手のうちに立つ。物靜かな、しかし力強い聲で挨拶をする。

松岡全權。私が松岡でござんす。今日は、お忙しい中をわざ／＼のお出迎へ、有難く御禮申し上げます。さて、今更申し上げ

るまでもなく、今回議せられるべき滿洲國の問題は、實に我が國民の生死を決すべき重大問題でありまして、政府並に國民の決意も、既に磐石の如くであります。その原則とする處は、一つ滿洲問題に關する限り、帝國は斷じて第三國の介在をゆるさず、且支那に統一せる政府の確立するまでは、交渉を開始しないこと。一つ既に滿洲國は獨立して、我國の承認を得てゐる。從つてこの既成事實を前提とするにあらざればいかなる交渉にも應じない。この二大鐵則であります。その理由は、リツトン報告に對する我意見書によつても明白でありますが、悲しいかな、このジュネーヴには、極東の事情に暗いため、徒らに支那の宣傳に迷はされて、帝國の眞意を誤解するものが少くない、この誤解を一掃して、全世界に我が日本帝國と、日本人精神を理解させることこそ、私のこの地に來た唯一の使命であります。もとより私のことだから、太刀打も、拙いことでありますが、たゞ一つ肚を決めてゐることは、噓を言はないことである。いくら太刀打は拙くても、日本代表は噓つきだつたといふ印象をのこさないことである。それ以外に、私の外交はないのであります……



支那代表の
顧維鈞氏（上）
郭泰祺氏（下）

と、その刹那、慌しく會場へ驅けこんだ一人の日本青年がある。

青年。松岡全權はゐられますか、松岡全權！

一同は、この不意の闖入者に驚いて、ある者は、眉をひそめ、或者は立つて、叱責の聲をもらす。

青年。（平氣で）松岡全權々々！

松岡全權。（その青年を見て）わたし松岡です。何か急用ですか。

青年。おゝ全權閣下ですか。お話中をお騷がせして、何とも濟みません、私は、野口勇と申しまして、この街の日本雜貨店に勤める店員でありますが、只今この町の新聞が、かやうな怪しからん號外を出しました。こんなことが、誠しやかに傳はりましては、今大事の際に、閣下を始め我代表部の御活動に大きな御支障を來しはしますまいか、それとも、また萬一これが事實とすれば、日本政府は何といふ意氣地なしか、また今日まで尊敬したあなたのお言葉が、何といふ出鱈目か、私は、一刻の猶豫もなりがたい氣がして、失禮も顧みず、御目にかけに驅けつけたのでございます。

と、一枚の新聞號外を松岡全權に示す。

松岡全權。拜見します……（受取つて讀むうちに、激しい昻奮の色險しく双頰を彩どつたが、次の瞬間、すぐ鋼のやうな冷徹に返つて）有難うございます。このお答は私の話で聞いてもらひませう。（やがて再び一同に向ひ）諸君、今も今、私が嘘だけをつかぬと誓つた口の下から、ジュネーヴの一新聞は、パリー其他で聲明した松岡の言葉は嘘である、日本政府は、著しく態度を緩和して可成り妥協の意向であるのに、松岡一人が強腰で吹歩いてゐるのだと、かういふ亂暴なデマを飛ばしてゐるのであります。果して何れが眞か僞か。今私は、松岡外交は嘘をつかぬといふことをあれほど斷言した矢先であります。あゝ外交から嘘をマイナスすれば、世界は何んなに朗かに住みよくなるでありませう。（次第と熱奮高潮して）然るに諸君！　平和の聖地ジュネーヴは、今や、この松岡を迎へて、早くも恐しい陰謀の濃霧に私を包まんとしてをります。これこそ故意に、聯盟の態度を硬化させ、日本を窮地に陥れんとする呪ふべき術策にあらずして何でせう。先づ私は、世界平和の爲、この大嘘を打ち破つて帝國の決意を知らさなければならん。私は故國を去るにのぞんで、敦賀の官幣大社氣比神宮に詣でました。その時宮司の紀念帳に書きつけたのは『吾たゞ神を懼る矣』といふこの一語でありました。私は日本の正しさを神明の前に確信して、何の術策も、何の粉飾もなく、只々世界の平和を一念とする裸の日本人と日本精神を、聯盟の四本柱の中へ押し出してみせる。この一事を念として、この困難に當る肚を堅めたのであります。だが、只今も御覽の通り嘘とぺてんの世間では、これにはよほどの忍耐と熱意と困苦を要するのである。一糸亂れざる皆さんの協力一致を要するのである。今や帝國興亡の前夜、例へ代表部員にしろ、新聞記者にしろ、この際協力の精神を無視するものあれば、私は國賊の名を以つて日本へ返すことを憚らないのである！　諸君、諸君はこの松岡を信じて、この提議に御異存ありませんか。きつと、御異存ありませんか！　（聲を勵まし、顏を染めて、鋭く滿場を見渡す）

青年。閣下、身を、身を以つて！（先刻の青年の叫びを眞先に）

滿洲國代表丁士源氏（上）

滿洲國顧問リー氏（下）

――。勿論です！

――。我々は一心同體です！

――。身命を賭して！

――。共に奮鬪します！

熱烈な叫びが、忽ち滿場に湧き、威壓するやうな全權の兩眼から急に感激の熱涙が溢れる。

松岡全權。有難うございます。松岡は帝國の爲に、熱涙をもつて感謝いたします。私さきに故國を去る時も、熱烈火の如き全國民の歡送におくられ、今日當地に着いてみれば、既に代表部へも激勵の電報や手紙が山積してゐました。ここにその中の一つである、中等學校の生徒等の血判を連ねた手紙を御覽に入れます。（ポケットから血痕生々しい連名書を取出して示す）諸君！　赤誠の血に燃ゆるこの一念！　内には擧國一致の同胞にまもられ、今また熱烈な出先諸君のこの協力に惠まれました。あゝ松岡、千萬人といへどもわれ往かん。諸君、共に手をとつて、全世界が日本を理解するまで、決死奮鬪、困難を突破しなくてはなりません。

滿場百雷の如き拍手にどよめく時、廊下の方から滿洲國代表丁士源氏が、同國顧問ブロンソン・リー氏と共に現れ、ボーイを以つて全權に刺を通ずる。

松岡全權。どうぞこちらへ！（兩人を手招いて）諸君！　今またここに、我等を援ける新しい力強き味方を得ました。只今到着しました滿洲國代表丁士源君、同顧問ブロンソン・リー君！

滿堂、再び破れるやうな拍手！　同時に、八方から飛び出した新聞社寫眞班のレンズの包圍！　打續くフラッシュの閃光！（幕）

第二　陰謀の濃霧

それから約十日餘――松岡全權始め、我代表部の決死的奮鬪も効なく聯盟理事會は、日支問題を十分審議もせず、聯盟總會に移すことにした。そして霧深いジュネーヴは、總會開會を前に控へて謂ゆる私的交渉と稱する秘密策動の時期に入つた。

こゝは、スペイン代表マダリアガ氏の宿舍である。マダリアガ氏は聯盟國中の多勢を占める小國側の指導者となつて、陰然勢力を有する論客だが、日支事件では事毎に日本に反對して我國を窮地に陥れんとしてゐる。

室は、右手に事務室、扉續きに左手が控室である。マダリアガ氏は今日も、若い秘書を相手に、自分達が小國をリードして、まんまと日支事件を總會に移し得たお手柄話に耽つてゐる。

マダリアガ。……だから日本にしてみれば、何處までも萬事を

理事會で解決したい、理事會なら、決議は全會一致を必要とするから、自分一人が反對すれば決議は成立しない。それが總會となると、過半數で議事は決するから、自然否應なしに聯盟決議の掣肘を受けなくてはならなくなる。まあ、かう言つた考へだらうが、大勢いかんせん、遂に我々の總會移牒主義は、美事に成功した譯だ。日本としてもいたい處さ。

秘書。いや、それも全く閣下の御手腕の然らしめる處で……しかし如何でせう閣下、日本もこゝまでは妥協しましたが、肝腎な滿洲國承認の取消までは、容易に讓歩しますまいね。

マダリアガ。讓歩しようとすまいと、總會の情勢が、そこへ押詰まれば、日本だつて案外どんな腰くだけをやらんにも限るまいて。

秘書。それが反對に、日本が飽迄强硬態度を押貫いて、その結果、十六條の制裁まで必要とするやうな場合になつたら、面倒でせう。

マダリアガ。その時の喧嘩は、英國、佛蘭西など大國に任せておいて、我々小國は面白く見物してゐりやいゝさ。はつははは……だが、大國達も、そこまでの勇氣はなし、と言つて、滿洲を、むざ／＼日本庇護の手に渡しておくことも、諦められないといふ、とんだヂレンマに陷つてゐる譯さ……まあ、どちらにしても、有難いことは、國際聯盟が一國一票主義にできてゐることだ。大國でも小國でも同じ一票だから、數の多い小國の方で頑張れば、いくら大國側だつて動きはとれない。だから我輩や、チエコのベネシユ君が一致して、小國連をリードさへすれば、聯盟は自由自在といふ譯さ。はつ、ははは。

秘書。その意味で、閣下こそ世界國際意見のリーダーと云へませう。はつはは。（ふと、時計を見て）時に、もう日本代表が見える時刻ですね。

マダリアガ。午後七時と言つたね。ぼつ／＼やつてくるだらう……しかし、あの松岡といふ男だけは、うつかり喰へないぞ。

秘書。あの憎々しいほど落付きはらつた、理事會の演說振り、殊に、最後にリツトン委員會の權限について、議長に喰つてかゝつた鋭さと慥さには、私達側で見てゐても、ひや／＼しましたよ。

マダリアガ。可哀さうに、支那の連中ぢや太刀打覺束なしぢや……

秘書。しかし、かうして閣下に私的面談を申込んできた處をみますと、奴さんも閣下の御勢力に泣きつかうといふ譯ですね。

マダリアガ。さあ、そいつはわからんぞ。

その時、控室の扉にノックの音がする。

秘書。來ましたよ……

秘書は、控室の扉から出て行つたが、すぐに、松岡全權を案內して控室に導き、直に事務室のマダリアガ氏に傳へる。

マダリアガ。よろしい。

秘書は、控室に歸つて松岡全權を事務室へ案內する。

松岡全權。御多忙中をお邪魔します。

マダリアガ。いゝえ。よくこそ。

互に胸に一物ある無氣味な握手である。
兩人卓に向合つて對坐する。

マダリアガ。いよ〱特別總會も、明後日に迫りましたね。御多忙でせう。

松岡全權。實は、それについて、あなたの日支事件に關する腹藏ない御意見を承り、又我國の意のある處も、豫め十分徹底させておきたいと希望して參りました。

マダリアガ。成程……（ぢろりと全權を見て）では申し上げてもよろしい。

松岡全權。承りませう。

マダリアガ。（ぐつと全權を見詰めて）滿洲を手離してもらふことです！

松岡全權。面白い。（意外にも、につこりと笑つて）その飾らない返事が氣に入りました。この松岡も、外交嫌ひで、廻りくどい言葉や、僞善の粉飾は禁物です。よろしい、私も素裸になつてお答へしませう。ぢや、先づその理由から伺ひませう。

（膝を進める）

マダリアガ。（やゝ驚いたが）その點、リットン報告書を支持します。

松岡全權。たつたそれだけですか。

マダリアガ。……………

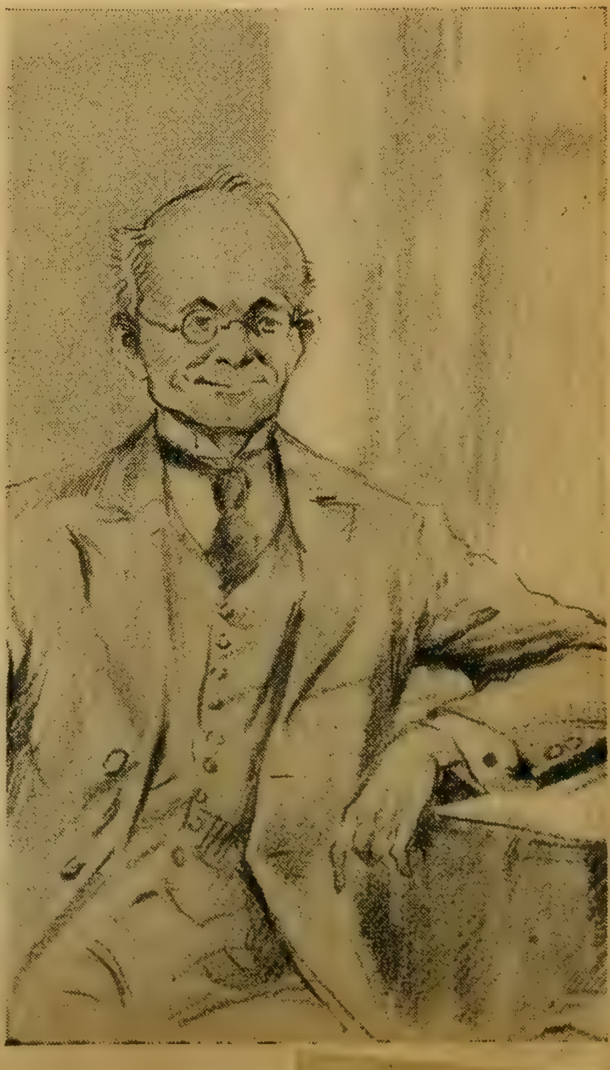
松岡全權。ぢや問題はありません。我々もあの一部には同意ですが、また一部には同意のできない誤謬と臆測が澤山あります。そして恐らくあなたが支持せられるのは、その誤謬の方面でせう。

マダリアガ。誤謬の方面!?

松岡全權。勿論！　さうでなければ賢明なあなたが、日本を排撃せられる理由がありません。先づ日本政府の意見書の御精讀を願ひます。過去四半世紀に亙つて混亂を極める支那の事情は、そこに生死の運命を置く日本以外にわかる譯がないのです。

マダリアガ。しかし、今度の日本軍の行動は、慥かに不戰條約の自衛權を超えた、侵略行爲とより見られません。

松岡全權。それはまた、どの點が？



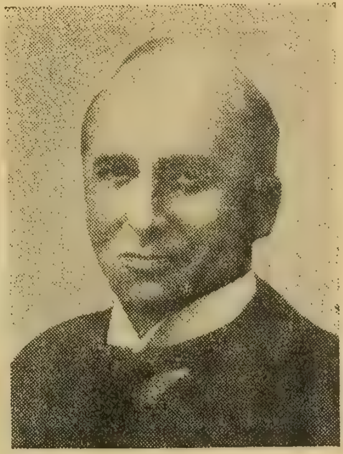
マダリアガ。九月十八日以後の日本軍の行動です。單なる正當防衛と認めません。あの迅速正確に行はれた軍事行動は、何う見ても、あゝした場合を豫想して、豫め計畫されてゐたものです。

松岡全權。勿論です。駐屯軍にして、この計畫がなければ、そ

れこそ重大な職務怠慢でせう。あの嶮しい風雲の中で、わが二十倍の大兵と莫大な軍需品を有する支那軍隊と對峙してゐたのです。平常これだけの準備がなかつたら、何うして一朝事ある時の備へに任ずることができますか。

マダリアガ。しかし、多寡があればかりの鐵道破壞に對して、日本は餘りやりすぎてゐませんか。物の理窟は何うにもつくが、理窟を拔いて、靜かに眺めた時、あなたの心は何と答へるでせう。

松岡全權。(笑つて)なるほどこれは面白い。理窟を拔いて靜かに見る、それこそ私の望む處です。では一切の理窟を拔いて、世間の例へ話で申しませう。今度の滿蒙問題といふものは、例へて見ればかうなのです。先づ日本人の亭主と、支那人の女房とが暮してゐると想像なさい。その女房は、ヒステリーで我儘で、あらゆる手段で亭主を侮辱し、亭主を苦しめたその擧句に、亭主を家から追ひ出さうとまでした。が、この亭主が、また恐しく忍耐強い男で、女房が何をしようと、たゞ默々と微笑んでゐる……マダリアガさん、凡そ世界で日本人ほど堪忍強い國民はありません。その強い忍耐力は、歐米人には想像もつきますまい。處が、ある朝、その亭主が口にしようとしたコーヒー茶碗を、女房が傍からひつくり返した。その刹那、亭主の日頃の鬱憤が破裂して、その場で女房を打ちのめした。まあ、かういふことがあるとなさい。これだけを見た第三者は『わづかコーヒー茶碗をひつくり返したくらゐで女房を打ちのめす亂暴者があるか』とわめき立てるでありませう。だが、直接の原因だけ見て、長年にわたる女房の暴行を考へなくては不公平ぢやありませんか。歐米人の亭主なら、もう何度も打ちのめし、離緣沙汰まで惹起することも、日本人の亭主は我慢してきたのである。その點を見逃してはいけないのです。思へば過去四半世紀、日本は事毎の支那の侮辱を、何んなに今日まで押しこらへてきたか。こらへてゐればいゝことにして、益ゝ募る支那の狼藉です。もしあの晩をこらへてゐれば、滿洲にゐる日本の駐屯兵は、二十倍に餘る支那軍の手で、滿洲の地から追ひ拂はれてゐたかも知れません。マダリアガさん。あなたは熱血直情の國スペインの人ではありませんか。この話はわかるはずです。



英國代表　サイモン氏

マダリアガ。…………。

松岡全權。日本も今はしびりをきらしました。排貨排日、掠奪、いつ果つべしと見定めつかぬ支那の混沌に身を焼いてはゐられませんよ。幸ひ滿洲國が獨立して、健全な發達を辿つてゐます。こゝに隣善の誼を交して、東洋の一大樂土を展き、爭亂を防ぎ、資源を開き、極東の平和と、世界人類の福祉の爲に資せんとする、日本の誠意を考へてください。それこそ理窟を抜きにして、この事實を批判して御覽なさい。これでも日本の精神がわかりませんか。

マダリアガ。(遂に答辯に窮して)しかし、聯盟規約を危ふうすることは……

松岡全權。(遮つて)いけません、規約とは卽ち理窟です。あなたは、自身今の先、理窟を捨てろと言つたぢやありませんか。

マダリアガ。でも、歐洲の强國が、聯盟規約に例外を持出すと、われ／＼小國が安心できません。滿洲が日本の生命線なら、聯盟はわれ／＼小國の生命線です。

松岡全權。しかし日本の正義を誤認して、聯盟が日本を壓迫する時、聯盟自身も危險の秋ですぞ。

國際聯盟事務總長　ドラモンド氏

マダリアガ。…………

松岡全權。これは日本一國の爲ではなく、全世界の平和のためです。マダリアガさん、では、日本の精神があなたの腑におちるまで、夜を徹しても語りませうか。(ぐつと强く椅子を進める)

マダリアガが、松岡全權の意氣に壓倒されて、たじろく時、秘書が入つてくる。

秘書。ベネシュさんと顧維鈞さんがお見えになりました。

マダリアガ。(ちよつと狼狽したが、すぐ)控室へ。

秘書、すぐに、チエコ代表ベネシュと、支那代表顧維鈞夫妻を控室へ案内する。

マダリアガ。では、また、お目にかゝりませう。

松岡全權。さうですか。ぢや、今日は失禮します。さやうなら。(立ち上つて、マダリアガと握手したまゝ)マダリアガさん、われわれ日本人は、たゞ神のみが審判し得ると信じてゐます。裸で神樣の前へ立つて云ふのです。われ／＼は因果の鐵則を信じます。罪を犯して天國へ行かうとは決して望まないのですよ。

手をはなして、控室へ去る。入れ違ひに、控室のベネシユ、と顧維鈞夫妻が、事務室の方へ入らうとする。互に一禮を交したが、

松岡全權。（後から）顧維鈞君。

顧維鈞、はつと驚いたが、

顧維鈞。御用ですか。

顧みて二三歩近づく。ベネシユと顧夫人は氣を殘しつゝ、先に、事務室へ入つたが、マダリアガも共に、扉の傍で立聞く。

松岡全權。（靜かに）お互兄弟分の東洋人が、毛色のかはつた西洋人に睨まれながら、いぎたなく爭はなければならないといふことを、君はほんとに情ないと思はないか。ましてお互は長い友人だ。

顧維鈞。勿論、それは同感です。

松岡全權。顏君もそれを言つてゐたさうだ。まことに大きな間違ひだ。それをお互で理解しながら、何故それをしなければならないのか。よく反省しなくてならんことだ。君も中華民國の爲、また東洋全局の爲にしづかに反省してもらひたい。友人として、僕は心から賴むのだ。ぢや、さやうなら。

顧維鈞。さやうなら。

握手して、松岡全權は出てゆく。

顧夫人。（良人を迎へて）何だつて、言ふの。

顧維鈞。何でもないさ。

マダリアガ。さあ、ずつとこちらへ。

四人、座につく。

顧夫人。（フラッパーに）ほんとに、いやな男ですわ。私、あの男を見ると、憎らしくて〳〵。

ベネシユ。それはまた、大變なお恨みでございますね。

顧夫人。だつて、さうぢやありませんか。いつも會議であの男と顏合せると、宅はまんまとしてやられるんですもの。ヴェルサイユの時でも、宅は首席全權で行つて、山東問題でさんざん日本側を手古摺らしてゐましたのに、僅か首席書記できてゐたあの男の新聞政策にかゝつて、美事にしてやられたんですもの。それから、先年の太平洋會議でも、上海でも、そして先達ての理事會でも――いつもさうなんですもの、私口惜しくつて仕方がありません。

顧維鈞。（甚しく照れて）何、何をつまらないことを。

顧夫人。だつて――

マダリアガ。まあ〳〵、奧さんいゝぢやありませんか。今度はあなたの方の勝になりますよ。

ベネシユ。ことに艷麗無比な奧樣の御外交は、きつと、裏面の功を奏せずにおきませんよ。はつははは。

マダリアガ。處で、例の決議案です。草稿を作つておきましたが、これでどうでせう。（ポケットから草稿を出してみせる）

ベネシユ。（讀んで）結構です。日本の軍事行動は正當防衛と認めず、滿洲の現狀を自發的獨立と認めず、リツトン調査員の此の認定を基本とし、米露を招請して解決するか——

顧維鈞。この決議案を總會に提出するんですか。

マダリアガ。突如に提出してみようと思ひます。スペイン、チエコ、アイルランド、それと瑞典、この四國の名で。

顧夫人。まあ、何て痛快でせう。

顧維鈞。皆さんのお力で、何分にも、どうぞよろしく。

マダリアガ。さうすれば、手續に暗い日本の代表がマゴ〳〵してる間に、この案が、總會の空氣を先導して、決議の基本になりますよ。

ベネシユ。さうなればしめたものですよ。

顧夫人。まあ、何とお禮申し上げてよろしいか。

マダリアガ。何、これも支那一國の爲ばかりぢやない。われわれ多數小國の爲にすることです。

顧夫人。でも、その時に、今の男が、まごつく顏が見たいものですわ。ほゝほほほ。

（暗轉）

第三　聯盟特別總會

かくして、十二月六日から、滿洲問題解決の國際聯盟特別總會が開かれた。正面議長席にはイーマンス議長、ドラモンド聯盟事務總長が控へ、フランス語アルハベツト順の議席には英國首相マクドナルド、佛國首相エリオ、同陸相ボンクール將軍、獨逸代表フオン・ノイラートを始め、スペイン代表マダリアガ、チエコ外相ベネシユ等、凡そ世界の大政治家は漏れなく顏を揃へてゐる。

わが松岡全權も、右に長岡、左に佐藤兩代表その他隨員に圍まれて日本席につき、少しはなれて前方左寄りに、顧維鈞、顏惠慶、郭泰祺等が控へてゐる。誠に歷史的光景である。

今しも、議長席前の演壇では、英國代表 外相サイモン氏が演說の最中である。

サイモン。……この問題は、一國の國境を、隣國の軍隊が侵したといふやうな單純な問題ではありません。けだし滿洲に於ける夥しい特色は、他に比較されるべきものがないのであります。幸ひリツトン報告は、何れの一方にも偏せず、日支兩國に對して愼重なる批判を與へてゐます。しかして、日支兩國とも、リツトン報告書を全體的には受諾しないが、しかし

双方とも幾らかは、譲歩すべき點を有してゐるのであります。從つてわれ〳〵はこの報告書の廣範な基礎に基いて進むより他の方法はないのであります。我々は聯盟の諸原則を擁護して、和協を促進せしめねばなりませぬ。もし直接交渉が、良き結果を得る見込みがあれば、これを促進せしめねばならないが、余は聯盟が和協の事業を助け得るものであることを信ずるのであります。しかして、もし十九ケ國委員會に、アメリカ並にソヴヰエツト聯邦の代表を加へ得る方法が見出されるならば、さらに一層有効ではありませんか。かくして、愼重に、賢明に行動するならば、聯盟は必ずや紛爭の處置に多大の貢獻をなし得るものであらうと信じます。

拍手のうちに降壇する。代つて、スペイン代表マダリアガが登壇する。

マダリアガ。諸君！　今や二老大國間の紛爭は、遂に聯盟と、聯盟中の最も有力な一加盟國、即ち日本政府との間に、重大な見解の相違を示してきたのであります。これは誠に悲しむべきことゝ言はねばなりませぬ。しかしながら、過去一年の紛爭を顧みますに、此上情勢を惡化せしめない嚴肅な公約がなされた朝に、一都市が占領され、撤兵を約したその夕に、一城が占據されて、全滿洲は侵害し盡されたのであります。かくして國家利益と國際利益の衝突は、日本人自身の胸中にも重大な衝動と悲劇をもたらしまし

た。我々の任務は、單に敵對行爲を停止せしめて、事件の解決を見出すに止まらず、更に聯盟の權威を再建し、その諸原則を闡明するにあるのであります。從つて過去の事件にも遡つて、打擊をうけた者を助けねばなりませぬ。支那の滿洲が日本の滿洲となることを、斷然、拒否しなければなりませぬ。今や、國際無政府狀態が、我等の玄關を襲つてきた。世界は今や、嚴然たる秩序を要求するのであります。

と、盛に日本に毒舌を弄して降壇する。代つて、デンマルク代表ヴイリアル・ボルベルグ登壇。

ボルベルグ。聯盟規約の價値は、それに對して下されたる解釋の如何によつて定るものだと思ひます。從つて、余は今回の日支紛爭が、聯盟規約の基本的諸原則を十分反映する方法によつて解決されんことを強調するものであります。

と、これも支那をけしかけるやうな口吻で引下る。この時、ベネシユが、決議案らしいものを、イーマンス議長の手許へ出す。

イーマンス議長。（立上つて）只今、スペイン、アイルランド、チエコ、スヱーデンの四ケ國代表連名の決議案が提出されました。

滿場、いかなる決議案かと、一段の緊張を加へる。

ドラモンド事務總長。（立つて決議案を讀上げる）決議案……總會は、日支間の今回の關係は假裝せる戰爭なりと思考す。千九百三十一

西班牙國代表　マダリアガ氏

年九月十八日以後引續く日本の軍事行動は正當なる自衛手段と思考するを得ず。現滿洲政權の承認は現在國際諸義務と相容れざるものなり。以上の認定を基礎として、紛爭の解決を確保する目的の爲に、十九ケ國委員會に、米國及びソヴヰエツト聯邦の協力を懇請すべき權限を賦與す。以上。

餘りにも極端な日本排撃に、場内どつと色めく。途端に、隙かさず松岡全權が、

松岡全權。（鋭く）議長！　緊急動議！

イーマンス議長。日本代表。

滿場の緊張裡に、松岡全權、決意の色を眉宇に輝かして自席に立つ。

松岡全權。余は、日本政府を代表し、スペイン、アイルランド、瑞典、並にチエコ・スロバキア四ケ國から提案された決議案の撤回を要求します。もしこの撤回がなり難ければ、速かに該決議案を總會の票決に附すべきことを要求します。（更に薄氣味惡いほど莊重な態度で）しかしながら、かゝる亂暴な決議案を總會の票決に問ふとすれば、その結果の如何は、草案者自身さへ思ひもかけない、重大事態を、聯盟の上に及ぼす覺悟がなくてはなりません。余はかゝる不祥事の招來されんことを聯盟の一員として、深く恐れるものであります。（ぐつとマダリアガを睨む）

脱退を仄めかした、この意味深重な松岡全權の意外な巨彈に、マダリアガ、ベネシュ等四國の代表は忽ち蒼ざめ、共に目配せして場外へ出る。ドラモンド事務總長も事態の重大を見て、杉村事務次長を手招いて、しきりに憂はし氣に囁き合ふ。これがため、討論は、暫時中止されて、場内は、喧々囂々の囁きに埋まる。暫くの後、やつとイーマンス議長が立つ。

イーマンス議長。只今の松岡日本代表の要求は、只今討論進行中ですから、後刻お返事いたします。では。（支那代表郭泰祺を差招く）

郭泰祺が登壇して、原稿朗讀的の演説を始める。

郭泰祺。支那は、サイモン英外相の提議された十九ケ國委員會に、米露兩國代表を參加せしむる會議の趣旨には贊成であります。而して、不法なる侵略の産物である滿洲政權が、賢明なる諸代表の決議によつて不承認に一蹴されんことを切望

して止まないものであります。次にボイコットでありますが、これは合法的自衞手段として、支那は今後も、これを繼續するでありませう。支那の不統一については、いろ〳〵非難の說もありますが、目下わが民國は、日に月に、健全な發達を加へて、國力を增進してゐるのであります。松岡氏の主張さるゝ如く、支那は組織ある國家にあらず、故に『聯盟規約に適用すべからず』などといふ暴論に對して、賢明なるリツトン委員會が深き輕蔑を以つて迎へられたことは、欣快に堪へない次第であります。尙ほ三月十一日の決議において要求された日本軍の撤退を、この際速かに完了されんことを固執いたします。正義と平和を愛して不正を憎む各國代表諸君の力で、一日も早く日本の壓迫より支那を救はれんことを懇願してやまないものであります。

チエッコ國代表　ベネシユ氏

哀願して壇を下ると、入れ違ひに、議長は、わが松岡全權をさしまねく。全權やをら壇上に上つて悠々說き始める。

松岡全權。諸君！余は、先づ各國代表諸君の演說に對して、後刻必要なる駁論を試る權利をこゝに留保しておきます。そして今日はその詳細を避けて、單に不公平なりと思はれる點のみを二三指摘するにとゞめませう。それはこれまでの各演說者が、リツトン報告書を引用するに當つて、文章の前後の關係を辨へず、同報告書の切れ〳〵の一部を、銘々自分の都合よいやうに拾ひ上げた不公正なる態度であります。例へば、同報告書には、『千九百三十一年九月十八日夜に於ける日本軍の軍事行動は正當なる自衞手段と認むるを得ず』とは述べてゐるが、その次には『日本將校は、自衞のため行動しつゝありと信じたるなるべし』といふ一節のあることを、不問に付してゐるのであります。ではその何れが眞なりや。予は、この點についても、リツトン調査委員中に隨分議論が闘はされたことを聞知してゐるものである。さればこそ、かやうに異つた二種の記述を見るに到つたのであります。もし總會がその證據の提出を要求すれば、余は該調査員を總會の席に招致する用意をすら有するものであります。かゝる片手落ちの論議の下に、自ら、日本に罪を被せながら、日本に自ら無罪を證せよといふのは、不公平も極まれりと言はねばなりませぬ。また支那代表は、日本が軍閥の支配下にありなどといはれたが、これは

大きな見當違ひで、日本には軍閥などといふものは存在しないのであります。余は列國代表が、日本に加へた攻擊の論點に就いては、これまでの演說で答へておいたつもりですから、こゝでは改めて繰返しません。靜かに我帝國政府の意見書を熟讀あれば自ら氷解することゝ信じます。要するに、日本軍は、條約上の權利に基いて、在住自國民の生命財產を保護する爲に、滿洲に駐屯してゐたのであります。甞ては英國も上海に出兵し、米國もニカラグヮに陸軍を派遣しました。何等これと異る處はないのであります。又イギリス代表者サイモン氏は、兩國ともにリツトン報告書を、全體的に受入れないといはれたが、日本は、該調查員間の、意見の不一致を知るが故に、いさゝか改訂を欲するものであります。全く同報告中には、隨所に、看過なりがたい幾多の矛盾を認めるものです。卽ち『不一致の一致』であります。イタリ代表アロイチ男は聯盟規約の伸縮性といふことを述べられましたが、正にその通り、もしこの點に留意せずんば、聯盟の行動は、却つて原則に反するものであります。この公正なる態度を沒却しては、事態は却つて救ふべからざる重大危機を加へるでありませう。況んや聯盟外の米露兩國を加へて解決の道を講じようなどとは言語道斷のことゝ言はねばなりません。又、或る人々は、聯盟規約は自分の生命線なりと言はれたが、これ、とりも直さず、自己の利益ばかりを考へてゐる證據である。日本が滿洲は生命線なりと言ふのは、たゞ經濟國防における生命線たるばかりでなく、滿洲國の健全な發達は、東洋紛亂の源を絕ち、住民の樂土を築き、資源の開發となつて、東洋平和の礎石となり、人類の福祉を來すからである。そこに日本と日本人の使命の生命線があるからである。これに反して支那は何うでせう。天津條約を侵犯して朝鮮內における自國の勢力を貪らんとした。日露戰爭の最大因は、日本を目標とした密約だつた。もし日本がなかつたら、果して支那は今日まで生存し得たでせうか。決するものは神である。（席を叩いて支那代表席の方を睥睨し）願くは各國の代表諸君、諸君にして、眞に世界の平和を希望されるならば、此際我が日本政府の主張を理解してこれを强調すべきであります。

堂々たる大雄辯、絕大の感銘をあたへて、滿場の拍手裡に降壇する。他國代表中には握手を求めにくるものさへある。

イーマンス議長。では討論はこれで終決し、今日の總會は、これで散會といたします。

號鈴の響と共に、各國代表退場しはじめる。その間をドラモンド總長が奔走して英國のサイモン代表、佛國のボンクール代表、伊

國のアロイチ男などを殘し、これにイーマンス議長も加へてガランとした議場中央の空席に集まり、問題の四小國決議案の處置について協議を始める。

イーマンス議長。實は、先刻のスペイン、アイルランド、瑞典、チエコ四ケ國提出の決議案ですが、何う扱つたものでせう。

サイモン。實に困つたものを出してくれた。

ボンクール。うまく總會をリードするつもりで出したのだらうが、日本代表は、流石に隙がなかつた。あの調子なら、うつかり取上げると日本代表は引上げますよ。

アロイヂ。一應撤回を勸告してみませうか。

ドラモンド。兎に角、マダリアガ君をよんできてみませう。

場外へ出て、マダリアガを連れてくる。

サイモン。あの決議案には、困りましたね。

マダリアガ。(窮して頭をかく)

ボンクール。撤回說が出てゐるんですがね。

マダリアガ。(弱つた聲で)そいつも、何うも困りますね。銘々一國の代表として提出したものですから、それでは本國の面目も潰れますし……

サイモン。ぢや、何うといふことにしませう。日本代表の今日の意氣込ぢや、全く意外な結果を捲起さんとも限りませんよ。

ドラモンド。さうなると、聯盟自體も甚だ迷惑で、日本を昂奮させた責任を、聯盟が負はねばなりませんからね。

マダリアガ。そいつも困りましたね……何とかそこを皆さんの御裁量で、日本代表も收まり、我々提出者の面目も立つ——

サイモン。(笑つて)そいつは、どうも難かしいですね……

ボンクール。ぢや、このまゝ票決もせず、撤回もせずにおきますか。

マダリアガ。それならいゝでせう宜しく願ひます。(頭をかきながら引下がる)

ドラモンド總長、再び議場を出て、松岡全權を伴つてくる。杉村事務次長も、從つて現はれる。

イーマンス議長。實は先刻の決議案ですよ。今も撤回を勸告したのですが、それも、代表の面目にかゝるからといつて、提案者も弱り拔いてゐるんです。何うしたものでせう。

ボンクール。今握り潰しといふ案が出てゐるんですがね。

松岡全權。さういふ方法があれば、勿論日本代表部も他國の面目まで傷けようとは思ひません。

イーマンス議長。さうですか。ぢやさうしてやつてください。
皆さん如何です。

一同。至極結構でせう。

イーマンス議長。何うも有難うございました。では、さういふことに――

一同去る。松岡全權と杉村次長が最後に殘る。

杉村次長。美事にやつつけましたね。

松岡全權。はははは。今朝も、僕は湖畔を散歩した時、かういふ句を書きとめておきましたよ。

（紙片を示す）

杉村次長。（嚴肅に）聖天子東方に在す、今曉吾東天を拜す……成程、あなたのお肚には、いつもこの大きな信念がすくつてゐるんですね。

松岡全權。われ〳〵日本人にとつては一切の正義、一切の力はすべてこれ、天子樣が源ですよ。有難いことです。

暫時瞑想の後、二人歩き出す。

（幕）

第四　湖畔の鷗

此の聯盟總會の結果は、日支問題を、十九ケ國委員會に付託することにした。十九ケ國委員會とは、昨春上海事件を調停すべく、聯盟總會で設けられた委員會である。

そのうちに慌しく年の瀬も過ぎて、十九ケ國委員會も、小田原評定のうちに新年を迎へ、正月も殆ど、協議々々で暮れた。が、その下旬頃から、熱河問題も加はつて、協議の內容は、次第と日本に不利なものに傾いてきた。

しかし、胸に決する處のある我が松岡全權は、悠々迫らず、今日も朝の一と時を、ホテル・メトロポールから近いレマン湖畔に逍遙して、鏡のやうな湖面に浮かぶ無心の鷗や白鳥に、朝食の殘りのパンを與へて、淸遊の境地を樂しんでゐる。鷗は、いつか全權になついて、パンを與へるその手の傍まで集まつてくる。少し離れて、滿洲國顧問リー氏が、頻りに深呼吸をしてゐる。今日は珍しく湖上の霧も淡く、モン・ブランの雪の頂も、晴れた靑空にくつきり浮かんでゐる。

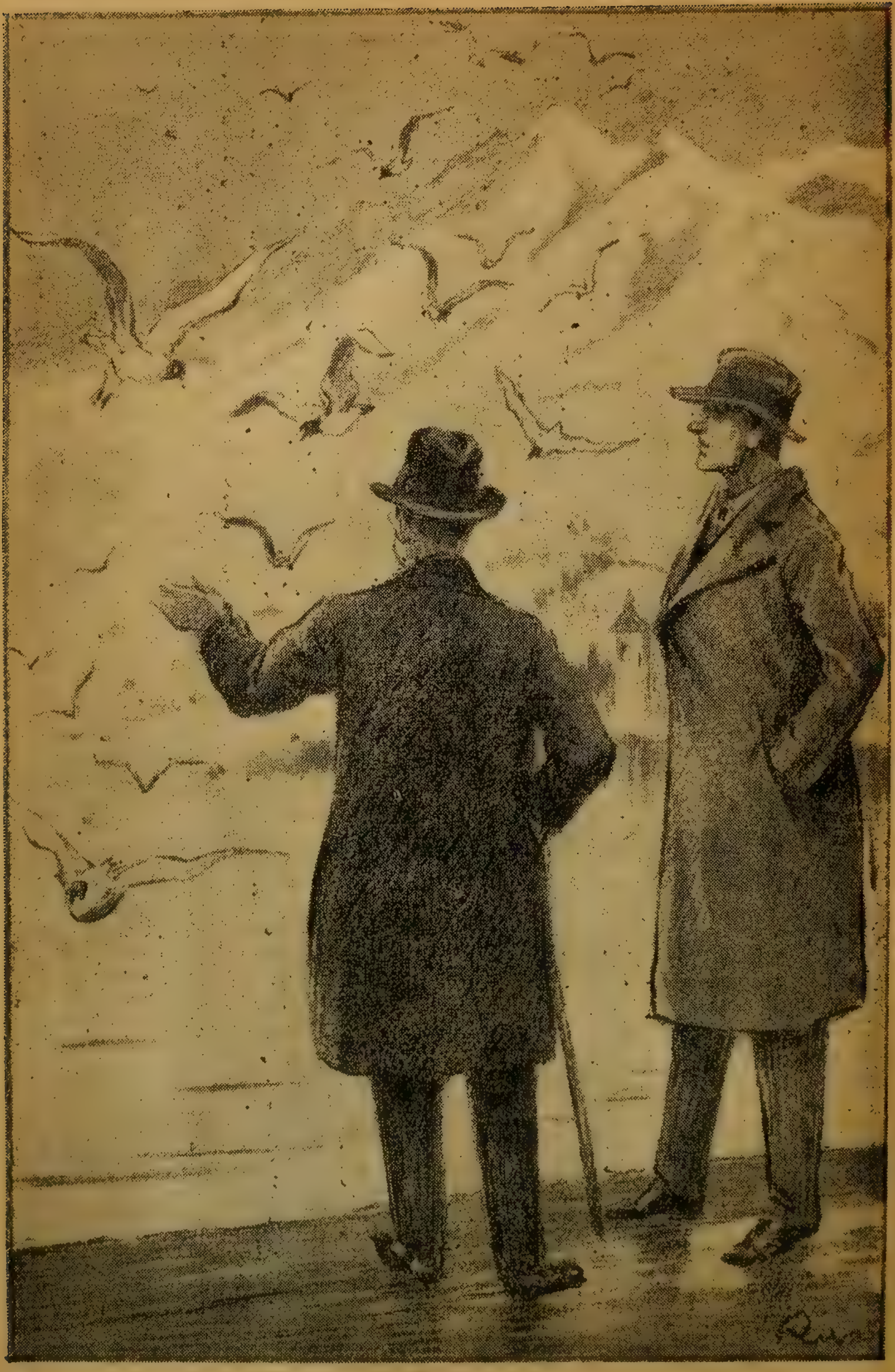
暫くして、リー氏が、松岡全權の傍に近づく。

リー。ほ、ほう。隨分馴れたものですね。鷗が、閣下のお手までパンを喰べに來ますね。

松岡全權。かうして、無心の鳥を相手にしてゐると、掛引づくめの人間界のことが、心から馬鹿々々しくなりますね。

リー。全くですよ。成程、可愛いものですね。

松岡全權。鳥は無心だから、こちらの眞情がすぐにわかるのです。人を恐れ、人を疑ふ、眞心のない連中には、他人の眞心



もわからない。人の爭ひ、世の悲劇、すべて人間界の悪いものは、互の無理解が原因なのですよ……（集まつてくる鷗の方へ）おゝ、來たな。それ、やるぞ。（パンの一片を投げてやる）

リー。さう言へば、聯盟の人々は、あれほど閣下が眞心でお說きになるのに、何うして日本の眞意が解らないのでせう。

松岡全權。日本の維新の大變革は、たつた一口の談判で解決したのです。それも規約とか、原則とかいふ七面倒な應對ぢやない。幕府の代表勝安房先生が、官軍の代表西鄕先生に『なあ西鄕さん、あなたと私と地位を代へたら、あなた主人の首が斬れますか』この一言で、さすが西鄕先生『いや、よくわかりました』と、ほろりと涙を流された。この一滴の涙で、あの大政變がわけもなく片付いた。リーさん、味はふべき話ぢやありませんか。羨ましいことだとは思ひませんか。

リー。歐羅巴にも、そんな人物がゐないものでせうか。

松岡全權。それですよ。こゝに集る代表諸君ばかり言ふのではないが『どうして歐羅巴にも、こんなに人物が拂底してゐるのだらう』と、私はしみ〴〵感じましたよ。

リー。全く、御同感ですよ。

松岡全權。何處の國にも、人物の輩出する時と、さうでない時とがあります。これでは、經濟的にも、社會的にも、また政治的にも、現在の世界苦は救はれさうもありません……（急に鷗の方へ）それ、これでおしまひだ。仲よく喰べろよ。（最後のパンの片を投げ與へて、立ち上り、遥かを見渡し）今日は晴れて、全くいゝ氣持ですね。朝日に輝くモン・ブランの雪、自然はいゝですな。

リー。いつも仰言る、霧の晴れるといふことは、何かにつけて快いものですよ。

松岡全權。ほんとうです。人と人との間の霧、國と國との間の霧――いやですね。どうです、いつそ浮世を外に、あの山麓に小さな別莊でも建てゝ、住んでみたら。（笑ふ）

　そこへ、代表部付の事務官が驅けてくる。

事務官。矢張り、こゝにおいででしたか。

松岡全權。何か用事ですか。

事務官。只今、かやうな情報が參りました。佐藤大使が、早くお見せしておけと仰言いましたので。（書類を示す）

松岡全權。（急に緊張の色で）到頭、かう來るか。よろしい、すぐ歸る。

　事務官急いで去る。

リー。何か形勢に變化でもありましたか。

松岡全權。十九ケ國會議は、英佛代表まで硬論を吐いていよいよ惡化です。滿洲國不承認、米露招請、第四項適用の準備ださうですよ。

リー。（急に憂鬱に）英佛の代表までが。

松岡全權。（笑つて）何、驚くことはありませんよ。日本はいかなる障壁にも、びくともするものぢやありません。この難局と鬪つて眞の日本を世界に知らせ、世界平和の柱とするには、ただの苦勞ぢや濟みません。日本國民はいかなる試煉も、敢て恐れぬ覺悟を持つてゐます。日本は今や日本主義といふ大きな自我に歸るために、眞劍な苦惱と、努力を辭しません。

その時、數名の新聞記者が、慌しく驅けてくる。

記者甲。お早うございます。

記者乙。お早うございます。

記者丙。委員會の形勢惡化について、日本代表部の御對策を承りたいと思ひます。

松岡全權。（笑つて）まあ、急がずに、ホテルへでも歸つてゆつくり話さうぢやないか。

松岡全權、リー氏、記者連、共に歩き去る。一群の鷗が下りてきて、全權の後を逐ふ。

（暗轉）

第五　決裂の朝

事態益〻樂觀を許さず、日本代表部は緊張裡に、二月十一日の建國祭當日を迎へた。

松岡代表は、ホテルの自室に籠つて、折しも訪問の滿洲國代表丁士源氏と、同顧問リー氏を相手に、雜談中である。

部室の正面には、出發に際して大谷光瑞氏から贈られた『養神』と認めた幅と、その前に、錦の袋に包まれた母堂が餞別の短刀が飾られてある。

丁士源。いろ〳〵と御心痛でせう。

松岡全權。わからないにも、困つたものです。日本はかまひませんが、聯盟自身が墓穴を掘つてゐるのです。

リー。しかし、今朝のヘラルド・トリビユーン紙や、ハーバース・マガヂンなど見ますと、米國の輿論は、聯盟の態度を非難してゐます。また英國の諸新聞も、もし日本が何と出ても、經濟封鎖などは夢だらうと書いてありましたよ。

松岡全權。滿洲問題は、まだ序の口ですよ。日本の奮鬪はこれからが本舞臺です。

秘書官が現れる。

上は國際聯盟特別總會(十二月八日)に於ける松岡全權の歷史的演說(中央の起立せるが松岡氏)下は會議場

秘書官。たゞ今、ドラモンド事務總長殿から、急にお訪ねしたいと、いふお電話でございますが。

松岡全權。お待ちしてゐますと云つてくれ。

リー。益ゝ事態は迫つてくるやうですね。

松岡全權。さあ、どんな話を持つてきますかな。

丁士源。(暫くして、わざと話題を變へるやうに)いつもお伺ひしようと思つて差控へてゐましたが、あの錦の袋に入つてゐるのは、何でございますか。

松岡全權。あれですか。あれは短刀です。(手にとつて)御覽なさい。母が心づくしの餞別ですよ。

鞘を拂つてみせる。

リー。美事なものですね。

松岡全權。燒刄の匂ひ、色、光り、日本刀の妙趣は格別です。日本精神の表象とも言へるでせう。この短刀は、母が私の家へ輿入する際に、當時毛利藩の儒者だつた母の父から授けられたものださうです。

丁士源。御母堂はまだお達者ですか。

松岡全權。九十一歳ですが、まだ、どうして元氣なものです。

リー。九十一歳！　それは御長命ですね。

松岡全權。洋よ、洋よと云ひましてね、私など、まだ十五六の腕白小僧のやうに可愛がつてくれますよ。今度も私の使命の重きを氣遣つて、九十一歳の母が、毎朝この寒さに、二町もある氏神様へ日參してゐてくれるさうです。勿體ないことですよ。（瞑目）

また、秘書官が入つてくる。

秘書官。只今、ニユーヨーク・ヘラルドの特派員が、お面會願ひたいといふお電話です。

松岡全權。今多忙だから後刻問合せてくれるやうに。

秘書官去る。

リー。お忙しいでせう。では私ども、これで失禮いたします。

丁士源。では、また上ります。御多用中お邪魔いたしました。

松岡全權。さうですか。ぢや失禮します。

二人を送り出す。入れ違ひに、伊藤情報部長が、昂奮した顔を見せる。

伊藤。松岡さん。

松岡全權。お入り伊藤君。

伊藤。いよ〱事態は迫りました。十九國會議は、日本の修正案を拒否することになりさうです。

松岡全權。拒否する！

伊藤。小國側の中には、日本を聯盟から追拂ふべしなどいふ、暴言を吐いた者もあるさうです。

ノックの音がして、杉村聯盟事務次長が、これも、氣色ばんで入つてくる。

伊藤。おゝ杉村君！

杉村。伊藤君か。駄目だ、駄目だ！　松岡さん、わが修正案は握り潰し、勸告案は、今日午前中に脱稿されるさうです。

松岡全權。ぢや、ドラモンド氏は、その了解にくるんだな。

伊藤。（しみ〲と）いよ〱聯盟ともおさらばか。日本は遂に孤立ですか。（暗涙を呑む）

杉村。寢食を忘れて、誠意をつくした我が代表部の苦心も仇でした。私は國民に申譯がありません。（瞼をふく）

一同、暗然として、悲痛な沈默。

松岡全權。（やつと暫くして）だが御兩君、歎くのは早い。この松岡は御覽の通り、母から短刀まで渡されてきてゐる。だが、お互のこの苦心は、日本の爲に無駄ではない筈だ。連日連夜衷心から世界を相手に說き、さとし、叫んで聞かせた日本の眞意は、必ずや彼等の胸中にも、力强い印象を殘すに違ひない。決議といつても紙上の遊戲、誠意で押せば、覆すに何かあらう。御兩君、もう一度全力を出し合つて、十九國委員の說得に努めよう。わからなければわかるまで、根よく敎へてやるのです。例へ聯盟とは不幸に別れても、新しい日本の外交は、まだ、これから始まるのです。共に堅く手をとりあつて、日本精神の宣明に戰ひませう。道の嶮岨はこれからです。今日は二月十一日、我が建國の佳節です。伊藤君！　杉村君！　壽府で一緒にすゝり合つたこの苦盃の味を忘れずに、今後一段の奮起を願ひますよ。

二人の手を握りしめ、三人共に感激の涙に咽ぶ——秘書官が入つてくる。

秘書官。電報でございます。(そこにおいて去る)

松岡全權。(開けて讀みすぐ兩人に示し)見たまへ、今日、日比谷で開かれた國民大會の決議の電報です。

杉村。(聲を立てゝ)スミヤカニレンメイヲダツタイスベシ。ダイヒヨウブショクンノクシンヲオモフ。

松岡全權。國民の腹は据わつてゐる。いかなる困苦も恐れるに足りません。

秘書官が入つてくる。

秘書官。たゞ今、ドラモンドさんがお見えになりました。

松岡全權。すぐお通しして。

秘書官。(杉村、伊藤兩氏に)それから只今ホールで同宿邦人の建國祝賀會が始まります。

兩氏。ありがたう。

杉村。ぢや、僕達は式の方へ行つてよう。

秘書官去る。

伊藤氏と共に去る。入れ違ひに聯盟事務總長ドラモンド氏、秘書官に導かれて現はれる。松岡全權迎へて、堅く握手をする。

ドラモンド。御多用中をお邪魔いたします。

松岡全權。あなたこそ、御多繁中を、よくこそおこし下さいました。

向ひ合つて椅子につく。

松岡全權。わざ〳〵御來車の御用件は。

ドラモンド。實は十九國會議の草案決定について、一應、日本政府の最後の意向を承りに參つたのです。

松岡全權。と、仰言いますと?

ドラモンド。そのお訊ねは、先づ第一に、『現在の滿國をその儘承認することは、事件解決の道でない』と言ふことを、日本政府は、認めませうか。

松岡全權。(強く)斷じて!　國を賭しても認めません。

ドラモンド。さうですか、では、今一つ日本は熱河省征伐の意圖ありや如何?

松岡全權。(儼然と)熱河は滿洲國内です。聯盟の容喙は御無用です。

ドラモンド。しかし松岡さん。これは十九國委員が、意見の決着に臨んでする、日本政府への最後のお訊ねですよ。本國へ御請訓の必要はありませんか。

松岡全權。斷然無用です……では、私からお訊ねします。十九國委員の諸君は、今日まで、いかなる耳で日本の主張を聞き、いかなる眼で日本の意見書を讀んでくれたのです。日本政府の滿洲國承認は、儼然たる既成の事實です。日本が今日まで

叫び續けてきた主張の基本原則ぢやありませんか。

ドラモンド。（考へて）いや、勿論、それはよく存じてゐます。しかし不幸にも委員會の協議は、かゝる最後の質問を貴國に發しなければならぬ、悲しむべき結果に陷つたのです。

松岡全權。例へ、いかなる決議をなさらうと日本の主張に變りはありません。幾度も申し上げる通り、日本代表は正直の一手で、その言葉には寸分の、かけひきもないことを御承知ください。

伊藤氏が緊張して驅込んでくる。

伊藤。（ドラモンドを見て）おゝドラモンドさん。今聞けば、委員會の勸告書は、滿洲國不承認のその上へ、日本軍の撤退を先決條件としてゐるさうですね。

松岡全權。事實ですか！　ドラモンドさん！

ドラモンド。（溜息をついて）實はその通りなのです！

松岡全權。遂に決裂ですか。聯盟は自殺しようとするのだ。

ドラモンド。なほ私も最後まで努力を盡して、空氣の緩和につとめますが……

松岡全權。幾重にもよろしくお願します。例へ聯盟とはお別れしても、今日まで長らくの間、この煩はしい紛爭に係つて、事毎に、多大の御盡力をくださつたあなたの御厚志と、御忍耐は、日本代表部員にとつて、忘れ得ない印象でございます。

ドラモンド。それでは御免蒙りませう。（立上る）

松岡全權。（立ちながら）尙ほ委員諸君によくお傳へくださいませ。日本は卑しい掛引や、嘘でごまかすくらゐなら、寧ろ劍をもつて立ちますと。

（握手する）

その時、二階のホールから、『君ケ代』の前奏が洩れてくる。

ドラモンド。何でせう。（不審しげな表情）

松岡全權。あれは同宿の日本人が、祖國の建國祭を祝ふ國歌『君が代』が始まるのですよ。

ドラモンド。（微笑して）さうでしたか。

『キミガヨ』が！

松岡全權。あの莊重なメロデーの中からこそ、幾千萬年永劫に滅びない日本精神が培はれるのです。あの妙なる調べこそ、あらゆる苦難を突破して眞の平和を招來せんとする世界平和行進曲なのです。

ホールから『君が代』の合唱がはじまる。松岡全權、直立して瞑目する。その手には、母の短刀の錦の袋を握りしめて。伊藤氏は勿論、ドラモンド氏も、立つたまゝ、自然と莊重なこの空氣の中に引入れられる。

（幕）

永井柳太郎先生著　大隈重信　（定價五十錢）

いよ／＼大評判です！　驚くべき賣行です！又々大增刷しました。『眞に救國の大文字』『現代の政治家は必ず之を讀め！』等々本書を廻つて世論沸然としてゐます。まだ讀まぬ方はすぐ書店へ！　書店賣切れの場合は直接本社へ、送料六錢です。

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、せひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハツキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはせひ、楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

（本號定價五十錢　送料三錢）

	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢	金七拾錢
三ケ月	金壹圓五拾錢	金貳圓壹錢
六ケ月	金貳圓九拾四錢	金參圓九拾六錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓八拾錢

特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂きます。

昭和八年三月三日印刷納本
昭和八年四月一日發行　第六卷第四號

毎月一回一日發行

編輯人　林　公平
發行人　木村喜市
印刷人　渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所　中外印刷株式會社

東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番

電話小石川
（代表）（宿直用）8080
8081
8082
8083
8084
（代表）8085
8086
8087
8088
8089
（代表）8090
8091
8092
8093
8094

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて掲載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫・撮影その他複製行爲を爲す事を禁ず

梅毒性ニキビ吹出物

梅毒の治療には
細心の注意が大切です

何病が恐ろしいと云つても梅毒程妻を泣かせ子孫を苦しめる恐ろしい病氣はありません。それはこの病氣の特徴として初期に徹底的に治療せぬと直ぐ潜伏性となり二期三期と進行して、絶えず、神經衰弱に侵された樣に氣分勝れず、記憶力や思考力が減退して、夜も安眠出來ず、時々顔や手足或は身體全體にニキビの樣な吹出物が出來、口や咽喉はたゞれる、聲が嗄れたり、毛髮が拔けたり、すると云ふ方々の多くは一度梅毒に侵され治療はしたが全治せぬ方か或は遺傳梅毒の方々で、恐ろしい梅毒菌スピロヘータが血液や淋巴液中に混入し全身を侵蝕して居るからであります。

從つて前述の樣な症狀をそのまゝに放つて置くと次第に病勢が惡化し胃腸を初め、心臟、腎臟、肝臟、眼、腦、脊髓等凡ゆる方面を侵され、遂に動脈硬化症の原因となつて腦溢血を起したり、呂律が廻らなくなつたり、歩行がよい／＼になつたりして、往々狂ひ死にする麻痺性痴呆症となつて何の罪もない子孫にまで害毒を及ぼし見るも悲慘な一生を終らねばなりません。

こゝに於て筆者はかうした不幸な方方の爲めに安價で然も家庭に居ながら恐ろしい梅毒が安々治療出來る内服藥ベルツ丸を心からおすゝめ致します。

内服藥ベルツ丸は梅毒の治療に大切な數種の高價な原藥の配劑に依つて創製された内服藥だけあつて服用實驗者は申す迄もなく專門家からも非常な好評を博して居ります。

故に永年惱んで居る梅毒、體毒、冷え毒、しつ毒、腦梅毒、遺傳梅毒、潜伏梅毒、リウマチス、ニキビ、吹出物等凡て梅毒性疾患に惱む方々は腦や脊髓を侵されぬ内一日も早くベルツ丸を御服用下さい。

服用日を追うて血液や淋巴液は淨化され、氣分は爽快になり、頭の重いのも痛んだのも、嫌な吹出物なども取り去られ、夜も安眠出來る樣になつて、副作用などに惱む心配もなく、恐ろしい梅毒素は大小便と共に體外へ排泄され、知らず識らずの内に梅毒を根から治療する事が出來ます。

藥價は二十日分三圓、三十五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分二十圓、二百六十日分三十圓、送料内地十五錢、領土四十七錢、代金引替の方は切手三十錢封入して 東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込み下さい。

東京市日本橋區濱町三ノ四〇番地
發賣元 鈴木日本製藥社
電話浪花百五・百六番
振替東京百五番

血液を淨化するベルツ丸のキヽメ

FUJI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.

ウテナポマード

漆黒な毛髪に明朗感映ゆ

惡く粘らず惡く光らず櫛の通り良くして整髪自在、芳香拔群、眞に理想的植物性ポマード

東京　久保政吉商店　　全國有名化粧品藥品店に有り

(MADE IN JAPAN)

大正五年九月十五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和八年三月三日印刷納本　昭和八年四月一日發行　冨士　第六巻　第四號　定價金五拾錢（送料）

Date Due 9-1669

JUL 10	OCT - 9		
JUL 17	OCT 14		
JUL 20	OCT 21		
JUL 24	OCT 28		
JUL 27	NOV - 2		
JUL 31	NOV 11		
AUG 5	NOV 16		
	NOV 23		
AUG 9			
AUG 14			
AUG 21			
AUG 26			
AUG 29			
SEP - 4			
SEP 11			
SEP 14			
SEP 19			
SEP 23			
SEP 30			
OCT - 5			

9-16
NOV - 2
NOV 1 1
NOV 1 6
NOV 2